

何故か、BLEACHの主人公になってしまった。

クロにくる

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

BLEACHの主人公、黒崎一護に憑依してしまったため全力で原作に抗う話です。

基本的にシリアスよりギャグによっています。

自分、BLEACHにわかなので矛盾などがあつたらコメントで教えてくれると有り難いです。

感想、高評価、誤字指摘は歓迎です、4以下の低評価、批判、誹謗中傷はNG。

ヒロインに関しては活動報告の方でコメントしてください。

ヒロイン

ギョク

ロア・ベリアル

シルス

レスト

MI

新橋のえる

井上織姫

ネリエル・トウ・オーデルシユヴァンク

毒ヶ峰リルカ

茜雫

涅ネム

紬屋雨

ティア・ハリベル

バンビエツタ・バスターバイン

ミニーニャ・マカロン

キャンデイス・キャットニツプ

リルトット・ランパード

九条希実

雛森桃

ロカ・パラミア

ヒロイン予定

ヒロインではないキャラ

ルキア

夜一

碎蜂

卯ノ花 烈

松本 乱菊

勇音

有沢たつき

ジゼル

## 目次

原作開始前

プロローグ

1

1話：「BLEACHの世界だと確定してしまった」

3

2話：「己を知り相手を知れば百戦危うからずとはいうが…」

5

3話：「俺は、DMではないが必要経費の痛みは許容するんだ。」

8

4話：「何が悲しくて化け物と戦わないと行けないんだ。」

10

5話：「さあ、最終ラウンドだ!!」

13

6話：「とりあえず藍染もバツハ同様ぶっ飛ばす」

21

7話：「中の連中が増えるとは思わなかった。」

28

8話：「相棒ができたようだ。」

40

9話：「なん…だと…」

48

10話：「お生憎様俺の中には俺のことが好きすぎる望みを叶える

女神さまがいるから。」

60

11話：「準備は終わったか？」

89

12話：「無理です」

97

13話：「全力で抗ってやる!!」

118

14話：「無駄にカツコイイな。」

143

15話：「みんなの力を借りたいんだけど良いか？」

161

現状の主人公たちのステータス

173

死神同行編

16話：「力を貸せ！死神!!」

189

17話：「使い慣れているから困ることはないな。」

199

- 18話：「そんで何をすればいいのだろうか」―― 229  
19話：「落ち着け気持ちちは分かるが落ち着け」―― 236  
20話：「面倒だが仕方がない」―― 251  
21話：「早く終わらせない理由にならないよな。」―― 262  
22話：「あの二人なら別にいいか」―― 273  
23話：「俺はこれ以上やりたくないがな」―― 279  
24話：「元凶に一発殴る理由が一つ増えたよね」―― 295  
死神同行編終了時の主人公たちのステータス 308

尸魂界編

- 25話：「帰っていいですか？」―― 316  
26話：「だから言っただろう？面倒な状況だつて」―― 336  
27話：「じゃ、すぐ行くから待ってるよ」―― 346  
28話：「茶でもすすつて朗報を待っている!!」―― 358  
29話：「少しはマシになったようだな。」―― 365  
30話：「俺には関係ない」―― 373  
31話：「そういうなよ、戦い方なんて人それぞれなんだから」―― 382

- 32話：「謝罪なんて言うなよ」―― 392  
33話：「：：： なにも今じゃなくてもいいじゃん。」―― 401  
34話：「見てて楽しいですね。」―― 419  
35話：「縁が繋がった結果だよ。」―― 434  
尸魂界編終了時の各自ステータス 442

破面篇までの修行篇

- 36話：「準備をしておくからな。」―― 450  
37話：「お前をぶつ飛ばせば文句はないよな？」―― 456

38話：「勝者が敗者に指図される謂れはない。」 | 466

39話：「初めからそう言え」 | 478

40話：「おかげさまでね。」 | 495

41話：「危なかった。」 | 514

修行編終了時の各自ステータス | 528

### MEMORIES OF NOBODY

42話：「何だったけ？」 | 532

43話：「ここまでくれば問題ないだろう。」 | 541

### 童話竜篇

44話：「関わることもないしな。」 | 548

45話：「はい何でしょうか？」 | 558

46話：「くたばれっ！世界!!」 | 567

童話竜篇終了時のステータス | 574

### 破面篇

47話：「意外に平和は簡単に崩れるもんだな。」 | 579

48話：「ただの俺の我儘だから気にするな。」 | 587

49話：「お前は何者だ？」 | 599

50話：「次はちゃんと決着をつけようか」 | 608

51話：「君らはなんでそんなに怒っているの？」 | 635

52話：「勝負ありだ」 | 643

53話：「一方的に来て勝手に帰っていったし…。」 | 651

54話：「何のために準備をしてたと思ってるの？準備万端だ！」 | 662

662

54話：「なんというか、オーソドックスだな。」 | 674

55話：「… そんじや、行くぞ！」 | 689

56話	「んなことできるかよ!!」	699
57話	「これでいいのか？」	708
58話	「ちよつとまずい？」	719
59話	「…いや違うか。」	729
60話	「逃がすか！」	736
61話	「今！戦闘中!!」	744
62話	「後でちゃんと話すから」	753
63話	「見つけた。」	764
64話	「最っ高だぜ！」	773
65話	「何言つてんだ？」	784
66話	「それだけは勘弁して下さい。」	796
67話	「別に問題ないんだがなあ。」	804
68話	「何でもいいから早く習得してこの騒動を終わらせませ か。」	810
69話	「気色の悪いことを言うな」	818

## 原作開始前 プロローグ

—— いったいどうなっているんだ？

気付けば体は全く動かせず、目もぼやけてよく見え、聞こえてくる音もどこかノイズが入ったように聞こえる。もしかしなくてもこれ、ヤバい状況なんじゃないのか。

落ち着け、落ち着いてよく考えるんだ。…………あれ？

—— 俺はこの誰で、こうなる前に何してたんだっけ？

…………いや、おかしいだろ!? 目が覚めたら体も五感も不自由で、おまけに記憶喪失ってどんな状況だよ!? 何か覚えてることないのかよ!?

必死で頭をフル回転させ、ある一つの単語に辿り着く。

—— BLEACH……………？

ジャンプで人気の作品。最近、アニメで千年血戦篇が放送されている…………いや、これでどうしろと？

何でこの状況で思い出せるのが漫画のことだけなんだよ!? しかもアニメや漫画に小説とBLEACHに関する内容は事細かに思い出せるし!!

馬鹿なのかよ俺は!? もっと違うこと覚えとけよ! 何でこんな何の役にも立ちそうにないことしか覚えてねーんだよ!!

「一護…………」

混乱した俺の耳がそんな言葉を拾う。誰だそれ? 何て疑問を抱きながら、急に襲って来た眠気に抗えず、俺の意識は闇に落ちた。

それから数日経った。俺はどうやら赤ん坊になっており、あの時間こえた一護という名前は俺のことらしい。何故こうなったかは分からないが、一つはつきりしていることがある。

—— 意識がある状態で赤ん坊の生活を送るの、地獄なんだが。

泣き声でしか意思表示が出来ず、一日中寝たきりで下の世話をされる。何て羞恥プレイなのこれ? 赤ん坊だから変な気は起きないけど、



授乳の時とか気まずくて仕方ないんだが。え、俺しばらくこの生活が続くの？嘘でしょ……………。

さらに2年が経ち、俺も自分の意思で動けるようになった。いや、自由って素晴らしいね、うん。ところで、最近知ったが俺のフルネームは「黒崎一護」というらしい…………… 思いつき原作キャラなんだが？

俺、将来は空飛んだり、刀から斬撃を出せるようになるのか。オリジナル技作ったり…………… うん、ロマンだな。

まあ、なつてしまったものは仕方ないんだが、名前を呼ばれるのはどうしても慣れない。名前を呼ばれる度に、俺はそんな名前じゃないという気持ちが湧いてくるのだ。他人の名前で呼ばれる気持ち悪さと、何より、本来あるべき人物を押し退け、そこに俺が居座っている現状に罪悪感を抱いている。息子の中身がこんなんだとは両親には申し訳なき過ぎてとても言えない。というか両親のことをきちんと親だと思えない。俺の親はこの人達ではないと思ってしまうのだ。だからといって前世？の両親のことは全く覚えていないのだが。それから1年が経つても、俺は自分が「黒崎一護」であることを受け入れられなかった。罪悪感はい前よりも強くなり、名前を呼ばれただけで吐き気がする。正直、気が狂いそうだった。

そんな俺を救ってくれたのが、母親である黒崎真咲だった。

「一護」

母の前でだけは、名前も思い出せない誰かでも、黒崎一護でもなく、ただの子でいられた。

この人と妹達を守ろう、そう思った。この人達の為に、俺は強くなる。原作で降り掛かる悪意から、この人や妹達を守れるように。

原作通りに母をグラウンドフィッシャーに殺させて妹達を悲しませるなど有り得ない。

とりあえず修行して強くなるにしてもいきなり死神やら滅却師と言っても信じて貰えずにはぐらかされるだろう。

ならばどうするか。

# 1話：「BLEACHの世界だと確定してしまった」

黒崎一護に憑依してからさらに1年経ち4歳になった年の両親の黒崎真咲と黒崎一心の結婚記念日で二人が酒に酔っ払っていたため二人がどう出合い、結婚したのか聞いたのだ。

一護「二人はどうして結婚したの？」

子供の何気ない質問に思えるかもしれないが誓いを立て覚悟は決めた上に虚らしき存在が見えるが俺はまだこの世界がBLEACHの世界だと確定していないため、情報を確固たる物にしないとこの先、自分がどう動けばいいか決めれないというのはあるが平時に聞いても仕事先で出会ったとかのありふれた返しをされるのが目に見えるため、酒で酔っている所を突けば話すだろうがそれでも結婚記念日以外で酔い潰れる一歩手前ほど酒を飲んでいるところをあまり見ないので結婚記念日で酔っているところ、この質問をしたのだ。

一心「おおく一護くパパ達の出会いを知りたいのかく」

普段より酔っているのか猫なで声のウザい口調で言ってくる。

ちなみに父である黒崎一心のことは嫌いではないがことあるごとに抱き着いてヒゲをこすりつけてくるためうざいという感情が勝っているのだ。

真咲「良いわよおくあれはねえく」

同じく黒崎真咲も酔って猫なで声になっているが一心とは違ってあまり飲み過ぎないか心配している。

二人は自分達の出自と出会いについて語り始めた。

これでこの先の自分のとるべき行動を定める。

1. BLEACHの世界じゃなかった場合

その時は身体を鍛えながら勉強に励めばいいだけの話だ。

2. BLEACHの世界だった場合

そんな時は何が何でも強くなつて母達を護るだけの話だ。

## —— 過去回想 ——

※ここは原作と変わらるので省略します

——回想終了——

二人の出自と出会いについて聞き終わり思ったことはこれだ。

——最悪だ——

何が最悪ってBLEACHの世界だと確定してしまったということだろう。

これがよくある原作主人公憑依転生系とかだと大喜びするんだろうけど俺は何も嬉しくない。

ただでさえ原作主人公に憑依、転生したことだとわかりそこから3年間ストレスで死にかけそうになる上何もしなければ9歳の時に恩人の母が自分のせいで死ぬのが決まっているのだ。

これを最悪と言わずになんと言えればいいのだろうか。

とはいえこれで母と父から死神と滅却師、虚について聞くことができた。

明日、酔が醒めた二人にこのことと虚が見えることを伝えれば修行をつけてくれるだろう。

とりあえず今やるべきは

一心「ぐがー」

真咲「すーすー」

酔い潰れて寝ている両親をベッドまで連れていき散乱している酒などを片付けることだ。

2話：「己を知り相手を知れば百戦危うからずとはい  
うが…」

さて、取り敢えずBLEACHの物語について振り返ろう。

簡単に言くと主人公の黒崎一護が月牙天衝と叫びながら、敵を倒す  
というものだ。

ざっくりしすぎという人もいるだろうが俺の評価はこんなもんな  
のだ。

そしてこの物語は大まかに5つの章に分けられる。

- ①死神代行編
- ②尸魂界篇
- ③破面篇
- ④死神代行消失篇
- ⑤千年血戦篇

あとアニオリの斬魄刀異聞篇やら映画の話もあるが基本的にはこ  
の5つに分けられるのだがこの中で危険度が特にやばいのは③⑤だ  
な。

いや、家族に危機が迫る意味では①④も変わらないな。

原作でも月島の完現術によって過去を改変されて敵の術中には  
まっていたからな。

危ないな、母と妹達を護ると誓いを立てたのに油断して護る存在に  
確実に迫る魔の手を見落としかけるとは、でもな①②の自分たちに悪  
影響を及ぼすフラグを折るのはいいのよ、でも？のフラグを折り過ぎ  
ると⑤でバツハに勝てないんだよな。

あとにもいうけど一護の力だけだとバツハを倒すのは無理なんだ  
よね、原作だと藍染、月島、織姫、石田の力があつたからバツハを倒  
せたんだよね。

二度も弱気な発言しているけどそれほどまでにバツハの能力の  
チートっぷりと一護の力の相性が悪すぎるんだよ。

ここで原作の黒崎一護の力について説明しておこう。

黒崎一護は死神と滅却師、虚、完現者の素養を持ち莫大な総霊圧量を持っているのだが原作だと力を使いこなせずに死にかけているが、これは基本的に修行期間が短すぎるのもあるが上記の素養を持っているものが過去に存在しない（霊王？あれは虚の力を持ってない）ためちゃんとした師匠がいないので基本的に独学で戦う以外になかったというのもある。

あと一護は自分の力の使い方というか戦い方が根本的に間違っているのもある。

卍解である天鎖斬月は月牙を莫大な霊圧に物を言わせ遠距離から撃ちまくり敵を制圧するのが強みなのだ。

なのに一護は天鎖斬月の形状が刀なためバチバチのインファイトして苦戦もしくは死にかけているんだが。

まあこれは斬月のおっさんが剣八戦で教えたやり方がなまじ、通用してしまったのとホワイトの教えた戦闘スタイルが一護に伝わらなかった弊害なんだが。

以上の通り秘めたる潜在能力は作中トップクラスなんだがバツハや和尚と言った概念系の能力者相手だと勝ち目が無いんだよね。

己を知り相手を知れば百戦危うからずとはいうが…

原作の一護はよく勝てたな。

まあ、俺は黒崎一護であつて（甚だ遺憾だが）原作の黒崎一護ではないんだよね。

それ故に原作準拠の戦い方にこだわる必要はないんだよね。

それに原作の破面篇の藍染戦で使った無月は論外なので最後の月牙天衝と無月は修得はしない。

デメリットのない無月に匹敵するなにかは修得するが。

あとバツハを倒す方法とか付け入る隙が合ったのでそこにかけるしかない。

できれば浦原喜助や握菱鉄裁に鬼道を夜一からは白打と歩法に瞬間を修得して万全を期しておきたい。

取り敢えず5歳になったら空手の道場に通うことになっているがそこで有沢竜貴と交流を深めようと思っっている、最終的に井上織姫と

も友人関係を築こうと思っている。先に言っておくが主人公の立場にあやかつてヒロインと付き合うようなことはしないからな。

あと原作の一護を純粹な人間と言われればそうは思えなくてな死神と純血統滅却師のハーフとか普通の人間と寿命が同じとは限らないしな。

3話:「俺は、DMではないが必要経費の痛みは許容するんだ。」

翌朝、両親に昨夜言っていたことを聞き、自身が幽霊のような物が視えると伝えた。

二人は眉にしわを寄せながら顔を見合わせると溜め息を吐いた。

一心「俺たちの子だから高い霊圧を持っていると思っていたがまさかもう虚が視えるとはな」

真咲「ええ、ホントにびっくりよ」

取り敢えず、二人に力の使い方を教えてほしいと伝えるとまた二人は眉にしわを寄せながら顔を見合わせるが俺に、自衛の手段があるといいと思ったのか修行をつけてくれると言ってくれた。

よし、まずは第1段階の最重要ポイントを突破!!ここで断られてたら何もかも終わってた。

修行が開始した。

まず、簡単にだが理論の時間だ、死神や滅却師に限らず、霊力を持つ全ての魂魄は「鎖結」と「魄睡」という器官を備えている。魄睡が霊力の発生源で要はタンクで鎖結がブースター、つまり霊力の出力を司る器官になっている。

死神と滅却師の戦い方の違いについて

死神と滅却師の違いは霊力の使い方なのだ。

死神は自身の魂魄の生き写しの斬魄刀を介したりして力を使うのに対し滅却師は周囲にある霊子を集めて自分の霊圧でコーティングして戦うのだ。

簡単にだが理解できたため、次は霊力の扱いについて教わった。

とは言っても今は死神の力が封印されている父は魂魄の力を引き出す感覚を伝え、俺がその感覚通りに霊圧を引き出し母が出来栄えを確認するといった感じになったのだ。

この修行を毎日欠かさずやりながら、筋トレなどもして頑丈な体を作ると言うプロセスを繰り返して半年が経ち母から動血装と静血装

を教わるようになったのだが、もう少しなんとかならなかったのだろうか？

腕にというか血管にいきなり霊圧流し込まれて滅茶苦茶な激痛にのたうち回る羽目になったんだけどそのことを伝えたら母が俺にこう言った。

真咲「痛みを知っているのといないのでは咄嗟のとき動けなくなるのよ。」

俺はなるほどと思い必要なら痛みも許容しよう。

おい！そこ！俺をDMだと思ふなよ、俺は、DMではないが必要経費の痛みは許容するんだ。

そんなこんなで筋トレに霊圧操作に血装の修行を更に続け、半年が経ち5歳になったため、前にも行った通り空手の道場に通い始め、有沢竜貴と知り合ったのだが、滅茶苦茶やばかった。

なんせ、空手の組手をしているのだが油断すると怪我しそうになるので全力で、回避や防御に回らざるを得ないんだよな。

そのせいか受けが滅茶苦茶上手くなってしまいそのせいで竜貴の攻めが強くなるという字面だけなら羨ましく感じるんだらうけど実態はただの殴りかかってくる暴力女の攻撃を避けたり防いでるだけなんだよな。

それに関して竜貴は

竜貴「一護にだったら全力をぶつけられる!!」

とのことちなみにこのことを竜貴に伝えたら殴られた。理不尽…



4話：「何が悲しくて化け物と戦わないと行けないんだ。」

有沢竜貴と知り合って更に4年が経ち9歳になったのだが、実は俺は現在進行系で気が立っているのだ。

何があったんだよと思う方もいるかと思うのでぶっちゃけるがもうすぐ6月17日なのだ、BLEACHを知ってる方々なら判るだろうが原作で母黒崎真咲がバツハの聖アウスベレン別の影響で力を失いグラウンドフィツシャーに殺される日なのだ。

気が立っているのが家族にはバレないようにしているが、落ち着かないのだ、お前こん時のために修行してたのに何言ってるのと思う奴もいるだろうが飽くまでも俺が使えるのは血装ブルートだけなのだ霊子兵装ハイリツヒ・ボルゲンも神聖滅矢も使えないため攻撃手段が皆無なのだ。

よってグラウンドフィツシャーを倒せないのだ、母に五角形クインシークロスの滅却十字を強請ったことは何度かあるがその度にはぐらさされたりしたため無理だった。

取り敢えず、日課である筋トレと霊圧操作と血装のトレーニングをして不安を誤魔化しているがどうにも拭いきれないでいた。

日が経ち運命の6月17日が来てしまった。

この日は雨で憂鬱な気分を更に強めているのだ、

母と一緒に散歩しているが全力の霊圧探知で周囲を警戒している、できる限り虚が出にくいところを歩こうと母を説得しながら散歩しているのだ。

しばらく歩いてみると、母が俺に言ってきたのだ。

真咲「ねえ、一護どうしてそんなに怒っているの？」

俺は、目を見開いた家族にバレないようにしていたはずなのにすると母がこう言ってきたのだ。

真咲「何年、あなたの母やってきたと思っていたのよ。さては妹達に構ってばっかで嫉妬しているのね。お兄ちゃんだから我慢なさい。」

苛ついていたのは確かだがそれは別に妹達に対する嫉妬とかではなく今日、母が死ぬというのを知っているのが自分だけだという誰にも相談できないストレスとグランドフィツシャーの襲撃に備えているために気が立っているだけなのだが、この人相手に嘘はつけないと改めて理解した。

すると視界に端に嫌なものを見つけたのだ奇妙な姿をした怪物が此方を向いているのだ。

俺は全力で意識をそいつに向けないようにしながら、この場をやり過ごそうとしたのだが、運命がそれを許さなかった。

???「小僧、お主儂が見えているな」

そう聞こえた瞬間、俺は母の手を引つ張り全力で駆けた。

瞬間先程まで居たところに虚が突つ込んでいた。

???「ほう、小僧のくせに中々素早いな。」

真咲「：まさかこの距離になるまで虚が近づいているのを気付けないなんてね。」

一護「母さん！霊圧が：」

どういうわけか母からどんどん霊圧がなくなっているのだ。

おそらくバツハの聖別が開始したのだろう、とりあえず何が何でも母を護らねばならない。

グランドフィツシャーに対して俺は叫んだ。

一護「こつちだ!!化け物!!」

グランドフィツシャー「化け物ではない！我が名はグランドフィツシャーだ小僧!!」

真咲「一護!!」

母は悲痛な叫びをあげたが気にしている場合ではない、今はグランドフィツシャーを母に向かわせるわけには行かないのでグランドフィツシャーに突つ込んでいった。

とりあえず静フルート・ザエーネ血装を全身に巡らせ、防御力を底上げした。

グランドフィツシャーと接触する直前で脚の血装を静血装から動フルート・アルテリエ血装に部分的に切り替えた。俺が原作通りの使い方かしないと思うなよ。修行して瞬間的にだが部分的な切り替えを可能にした

のだ。

説明すると静血装と動血装を発動可能状態にしておいて状況に合わせて切り替えて使えるようにして尚且つ部分的にだが他を静血装を展開しておきながら動血装を使えるようになったのだ。

とはいえ、弱点が無いわけじゃないのよ。

無理に使っているからなのか部分的な使い方をするともう片方の出力が安定しなくなるんだよね。

まあ血装以外、何も教えてくれなかったので血装をひたすら鍛えてたらできるようになったんだよな。

お前、説明する余裕あんの？って思う方たちもいるかも知だがそうでなきゃやってらんないのよ、母を救うためとはいえ何が悲しくて化け物と戦わないといけないんだよ。

とりあえず上がった脚力でグランドフィッシャーを跳び越える際に再び脚の動血装を静血装に切り替え右腕の静血装を動血装に切り替えつつ霊圧を纏って右腕を強化してグランドフィッシャーをぶん殴ったのだ。

グ「ぐう!!」

少しは効いたのか、やつは驚いたような声を上げた。

一護「どうした？まさか子供のパンチに痛がつてんのか？」

俺は、皮肉たつぷりにそう言いグランドフィッシャーを煽ったのだ。

するとグランドフィッシャーは面白いようにこちらの煽りに乗ってきたのだ。

グ「許さんぞ!!小僧!!死ぬがいい!!」

グランドフィッシャーは激怒し、俺目掛けて突っ込んできた。

いいぞ、母から離せばあとは時間稼ぎをすればいいだけだ町の何処にあるかは分からないが浦原商店に行けば浦原喜助達の助けを借りれるかもしれないからな。

作戦を決めたところで鬼ごっこが開始される。

5話：「さあ、最終ラウンドだ!!」

side???

雨の中二人の男が走っている。

??? 「…さて、どこにいるんすかね〜?」

片方の男はそう呟きながらも、足を動かしていた。

なぜ、走っているのかについてだがある一人の依頼人に息子を虚から助けてほしいと言われ了承したからだが一っだけ誤算が生じてしまった。

その子供と虚の霊圧が何故か探知できないのだ、それ故にこうして地道な探索になってしまったのだ。

??? 「全く感知できませんね、これはどういうことでしょうか?」  
もう片方の男も疑問に感じたのだ。

普通の虚や人間ならある程度の時間で見つかるはずだが今回はどうもそれとは違うのだ。

??? 「可能性が高いのはその虚が子供を殺して気配を消したか、逆に子供が虚を何らかの方法で倒したか、それ以外にも可能性はありますけどこの2つが有力つすかね〜」

??? 「1つ目は分かりますけど2つ目はそんなことあるのですか?」  
??? 「その可能性が0ではないからありえそうなんすよね〜、さて無駄口叩くのはこれくらいにしてそろそろ本腰入れないとまずいですね。」

なにせ、男達が依頼を受けてから2時間弱経過しているのだ、生きているにしろ死んでいるにしろ見つけられないじゃ済まされないのだ。

そう思った矢先、異様な霊圧を感知したのだ。

??? 「どうやら、向こうのようっすね!早く急ぎましよう!!」

??? 「ええ!!」

この時感じたのが虚に近い霊圧だったので二人は急いでいたのだ  
がこれが勘違いだと気づくのはすぐの話。

side一護

俺は、現在公園でチョウチンアンコウと格闘している。

何を言っているかわからないだろうけど俺も何言っているかわからない。

あの後、足の静血装を動血装に切り替えて街中をマラソンするはめになった。

雨で傘もレインコートを着てないためびしょ濡れなのだ。

普通なら虐待を疑われるができる限り人通りが少ない場所を選んだためその必要はないのだがそのせいでおよそ2時間くらい走る羽目になった。

飛廉脚があればだいぶ楽なのだが血装以外教えてくれなかったため、自分の足で走っているのだ。

そのせいか全身に動血装と静血装の同時使用が可能になったのがちつとも嬉しくない。

そんなことを思っているとグランドフィツシャーがなんか叫んでいた。

グ「ええい、小僧さつさと儂に殺される!!」

そういうグランドフィツシャーだが身体のあちこちに傷を負っているのだ、対してこちらは無傷である。

何があつたのかという逃げながら他の人間を襲わないようにチクク攻撃してヘイトを自分に向けさせ続けるというのを何度もしたのだが最初の辺りは攻撃が効くぐらいだったのが攻防一体の血装、

ブルート・サイネアルテリエ動 静 血 装になった辺りから普通にダメージとして与えられるよ

うになったのと防御力も最初は同時使用をすると不安定になるため、回避を優先していたが動静血装になったら油断して直撃を受けても問題ないレベルの硬さだった。

とはいえ変なところに打ち付けて意識を失うとジ・エンドなんで竜貴との組手で培った防御と受け身と受け流しの技術でダメージらしいダメージを受けずにいるがこの硬直状態をなんとかしないといけない、あと一手でなんとかするがその一手がでてこないのだ。

ダメージ与えられるんだからこのまま押し切ればいいのかと思うがまだ俺はまだ9歳なため身体が小さいので威力を出すには少々工夫が

いるのだ、体重も軽いため体重を乗せた攻撃はグランドフィッシャーには効きにくいため本当に困っている。

てかいくらなんでも浦原喜助達が遅すぎる、母のことだからもう連絡を入れていと思うしあのバツハが未知数の手段と評する浦原喜助が2時間も探知できないとかあり得るのか？

一番の可能性としては監視している藍染あたりがなんかしたのか？ やつもやつで面倒な研究してたから霊圧探知を封じる虚やら道具を作っているも不思議じゃないぞ。

もし藍染が関与しているとだいたいぶやばいぞ、救援無し武器無しでグランドフィッシャーをソロで討伐しなければならぬ。

そう思っているとグランドフィッシャーに妙なことが起こったのだ。

グ「ぐう!?! な、なんだこれは!?!... づ、づおおおおおおおああああああああ!!!」

どういうことかグラドフィッシャーの霊圧が増加したのだ。

先程までよりおよそ10倍くらいの霊圧に増加したのだが突如爆発的に増えた影響か自我が希薄になり暴走状態のような感じになっている。

おいまでこれは流石に不味い、あのレベルの霊圧の攻撃はいくら何でも今の俺の全力の動静血装でも防ぎきれるか分からないぞ。

攻撃の速度も先程までとは比べ物にならない速さだこの体の潜在能力の高さが無かったらとつくにお陀仏だよ。

突っ込んでくる巨体を躲しながら全力で蹴りを入れ距離を取るのだが蹴りの感触からダメージを受けていないのを感じるとウンザリした気持ちになった。

ただでさえ攻撃手段が徒手空拳しかないためこれが効かないとなるとまた最初からやり直すことになるからだ

そう思っているとグランドフィッシャーの攻撃速度が先程までより更に速くなった。

一護「なあ!?!」

なんとか全力で防御と受け身と受け流しでダメージを最小限に抑

え込んだが威力を殺しそこねたのかぶつ飛ばされたときに壁に打ち付けられた際の当たりどころが悪かったのか意識が朦朧としてきたのだ。

グランドフィッシャーが近づいてきて周囲の時間まで遅く感じ始めていよいよ死が迫る感覚が近づいてきた。

一護（… ああ、俺死ぬのかまあやるだけやったしもう後悔ないからいいか）

意識が朦朧とする中そう感じた後悔が無い様に生きてきたが意識が途切れかけたその時、悲痛な声と表情の母の姿がよぎった。

瞬間、俺は途切れかけた意識を叩き起こした。

一護（おい、何やってんだ？原作の家族が死んで絶望した黒崎家を知っているのに俺が死んだら意味ねえじゃないか）

絶望の淵にいた自分を救ってくれた母や大切な妹達、あとついでに父を悲しませると思うと死を認められるか？と自分に問うた、答えはこれだ。

一護「認められるかああああああああ!!!」

俺がそう天に向かって吼えると身体からパワーアップしたグランドフィッシャーなんて目じゃないレベルの尋常じゃない霊圧が溢れた。

グ「グウオオオアアア?!」

その霊圧にビビったのかグランドフィッシャーは動きを止めた、いや周りの時間が止まったのだ。

そして俺は周りの景色が先程いた公園から上下の感覚が不安定のビルが連なる不思議な世界にいた。

一護「いつか、来たいとは思っていたがいくらなんでも早すぎない？ユーハバツハのおっさん」

ユ「… そうか私の声がもう聞こえるのか… だがここにお前が来たのは偶然の産物だがな」

そこにいたのは原作で、斬月のおっさんと呼ばれた男1000年前のユーハバツハが居たのだ。

一護「あんたがああ漏れ出た霊圧の大元を抑えてくれているのか

？」

ユ「そうだ、お前には、死神と滅却師、虚、完現術の力に先程溢れた霊圧を遥かに超える莫大な霊圧を有するのだ…が今のお前には過ぎたる力なため私達が抑え込んでいる、黒崎一護であつて黒崎一護ではないものよ。」

流星にユ一ハバツハには自分が違うことは見抜れていた。

一護「ふくん、私達ねえ？流星と言つておけばいいのか？ありがとうおかげで今日まで生きられているよ。」

ユ「：世辞はいい私が知りたいのはお前がどうこの力を使うのかだ」

ユ一ハバツハのおっさんはじつと力強い目線でこちらを見てきた。

半端な答えは駄目だな、下手な嘘もアウトだ、そんなことをすればユ一ハバツハのおっさんが見限り俺はこのまま現実に戻りグラランドフィツシャーに殺されるだろう。

だから俺は真っ直ぐおっさんの目を見て堂々で行った。

一護「俺は家族を護りたい！そして自分自身も護るその為にこの力を使う!!」

ユ一ハバツハはほんの少し目を見開いた。

原作でユ一ハバツハ達の護りたいものと原作の黒崎一護の護りたいものが違つていた、原作の一護は皆を護りたいがユ一ハバツハ達は一護を護りたいだ。

この違いが原作でのすれ違いを発生させていたが俺は違う、大事なものを護りたいのは同じだがそれは自分が無事だからできるのであつて死にかけていたりしたら意味がないのだ。

だから俺はどんな戦い方もするし使えるものは全部使うつもりだ。

ユ「：…護るべきものの中に自分が入っているのか」

一護「これが満足する答えか？」

ユ「：…ああ、わかった力を貸そう」

ユ一ハバツハのおっさんがそう言った。

よし、これであとは

一護「というわけだどこかで観ているホワイトさんも手を貸してく



れよ。」

ホ「… チツ、あんまり俺たちを失望させるなよ一護オ」

「そう言う俺の色を白黒反転させた男ホワイトさんが出てきた。

一護「ありやもう出てくんの？」

俺が疑問に思ったことを言う。

ホ「いや、今お前現実で絶賛ピンチなの忘れてんのか？」

あ、ヤベなんか滅茶苦茶。パワーアップしたグランドフィッシャーのことスツカリ忘れてた。

一護「忘れてはいないけどあいつ倒す手段がない」

ユ「それに関しては問題ない」

ユーハバツハは断言した、おいそう言われても滅却師の力は血装の強化のみで打撃は通用しないしさつき放出した霊圧を使っても倒しきれないのだ。

ホ「どうもここら一带に妙な結界が張られていてな俺の虚の力の封印がほんの少しだが緩んでいて僅かだが虚化できるぜ」

ホワイトさんがそう言ってきた、マジでというか結界つてことはやっぱ藍染のやつがなんかしたな。

とりあえずそれは置いておいて俺はホワイトさんに聞いた。

一護「それはどのくらいの時間使えてどの範囲までの力を使える？」

俺がそう言うのとホワイトさんが極悪な笑みを浮かべた。

ホ「理解が早くて良いじゃねーか、虚化に時間制限は無ねえ、鋼皮イエロは使えるが響転ソニードは使えねえ、強化は封印の影響で全体の3%くらいで結界が壊れるとスグに封印が発生し虚化が解除される。

虚閃セロを撃つと結界が一発で壊れる、虚弾ブラを撃つ分には特に問題はないが威力が本来の3割位だ。

あと超速再生だがそれも本来の再生力、再生速度と比べれば微々たるものだ、傷の治りが多少速くなる程度の認識でいい。」

一護「十分だ」

先程までに比べれば火力のある状況となり十分と感じてしまう。

ユ「… 私をノケモノにしないでもらいたい。」

あ、ユーハバツハのおっさん、忘れてた。

そうだ今ここでアレについて聞いておこう。

一護「おっさん、俺に飛廉脚を教えてください」

ユ「…分かった、ここで飛廉脚を少しでも使えるようになってもらおう。」

とりあえず高速移動技を使えるようになったためガッツポーズした、だが一つ疑問に思ったことがあるので聞いてみた。

一護「虚化どうすんの？俺やり方わかんないぞ」

ホ「それは俺が勝手にやるから心配すんな、体も乗っ取ったりしねえからよお」

それを聞いて安心したため、ユーハバツハのおっさんに飛廉脚を教えてください。

ユ「…飛廉脚は足元に作った霊子の流れに乗って高速移動する滅却師の高等歩法。」

死神の瞬歩、虚の響転に値する技だ。」

そう言いながらおっさんは流れるように霊子の足場に乗って空中を移動してみせた。

今の俺には、真似できないレベルの霊子操作能力を見せられたがいずれは死神、滅却師、虚、完現術の全てを使いこなさないといけないため、ここで最上の霊子操作能力を見れることはむしろ俺にとっては+であった。

ユ「…とりあえずやってみろ」

おっさんはそう言ってきたため、俺は見様見真似でやってみた、動静血装の会得のおかげで少し上昇した霊子操作能力でおっさんの真似をしたがおっさん程上手くは無いが飛廉脚としては及第点に達するレベルだった。

ユ「ギリギリ及第点とはいえ1回で修得するとは…。」

一護「まあ、まだまだだね。」

ユ「当たり前だ、だが最初でこのレベルならあの虚も問題ないだろう…そろそろ時間だ」

おっさんがそう言うのと周りの景色が白くなり始めた。

とりあえず現実に戻るまでに二人に言った。

一護「おっさん、ホワイトこれから長い付き合いになるよろしくな」

ユ「・・・ ああ」

ホ「俺の力使って負けたら、ただじゃおかねえぜえ!!」

一護「分かっている」

そして俺は現実に戻ると戻る前まではしていなかったはずの仮面をしていった。

グ「グウおおおおおおああああああアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

虚の仮面を被りパワーアップしグランドフィッシュャーだ!!うったものに意識を向けた。

一護「さあ、最終ラウンドだ!!」

## 6話：「とりあえず藍染もバツハ同様ぶつ飛ばす」

side一護

俺は虚化してパワーアップしたのだがグラウンドフィッシュャーだったものが突如変態し始めた。

グ？「うおおおおおあああああつあx d d f jちえぎえおd」

先ほどまでは四足歩行のチョウチンアンコウみたいなた姿だったが今は仮面が剥がれ人にチョウチンアンコウの要素持った姿になったのだ。

まるで破<sup>アランカル</sup>面のようだが自我が気薄な上に言語も滅茶苦茶になっている、更に先ほどよりも霊圧が上がっているのだ、具体的に言うところ3倍くらいだそれでも虚化した俺を超えるほどじゃないがこの上昇値は異常だ。

え？俺？いやいや、俺のは眠っている力を引き出しているだけだから違うよ。

これあの破面もどきに崩玉の失敗作でも放り込んだか？それならあのパワーアップも納得だそもそも原作のグラウンドフィッシュャーにこんな異常な成長能力はなかった、だからこそ藍染の関与が決定的になった。

とりあえず藍染もバツハ同様ぶつ飛ばすが、ひとまず藍染はにおいておいてささつとあの破面もどきを倒すか。

相手の攻撃を捌きながら俺は今使える技や能力を整理する。

え？そんな悠長なこととしていいの？というが自分の現状を知らずに突っ込んで死にかけるのが原作の黒崎一護なのだ。知っているのに同じ轍を踏むわけにはいかない。

まず、防御に関して

鋼皮と動<sup>イエロ</sup>静<sup>フルート・ワイヤーアルテリエ</sup>血装である。

鋼皮に関しては虚化状態の動静血装に匹敵するので重ね掛けすれば十分な強度になるし微々たるほどだが再生能力もあるためよほどの攻撃でもない限り大丈夫だろう、よって防御力に関してはさほど

心配はしていない。

問題は攻撃面なのだ。

現状使える攻撃手段は虚化で更にながった動静血装で強化した徒手空拳に虚閃と虚弾なのだが虚閃は使うと結界が壊れて虚化が解除されるのでとどめまでは使えない、徒手空拳は上がった防御力がそのまま攻撃力に追加されるためこれをメインの攻撃にしつつ隙あらば虚弾を放ちまくると感じるなりそうだな。

何が問題かって言うくと虚閃の威力なのだ。

本来の3割の威力しかないと言われてもその本来の威力が不明なために虚閃を信用しきれしていないのだ、まあこれに関してはなんとかすればいいか。

次に速度だが飛廉脚があるため心配はしてない、先ほど吹き飛ばされた要因だった速度だがこれで並んだため問題ない。

あと破面もどきになったことで人型に近い体型のため受け流しが先ほどまでよりしやすいのだ。

「ghうghffんvh供奉イオdbvkdknvlfll議?に!!!」

「思はや何を言っているのかわからないのでさっさと倒して楽にしてやる。」

一護「行くぞ!!」

俺は、素晴らしいながら飛廉脚で空中を含めた3次元高速移動して虚を攪乱しながら虚化と虚化によって強化された動静血装で強化された剛拳のラッシュを叩き込んだ。

「グ?!!んtぐrp5fchbt8hgh;おhhふお;gつぶぐふいg!!!」

言語化できない叫び声をあげながら破面もどきはぶつ飛んだためすぐに連撃の無限装弾虚弾(無限装弾虚閃の下位互換)を叩き込んだ。

尋常じゃない数の紅い弾幕が破面もどきに直撃するかと思っただが直前で本能的に爆発的な霊圧を鎧のごとく纏って防いで見せたのだ。

まじかよ、いくら下位互換だからってこの技の元の使い手って破面の中で一番殺傷能力があるやつが使っていたやつなんですけど...

とは言え、今の攻撃でだいぶ霊圧を消耗させることができた油断せず一気に決める！

その時、また先ほどと同じことが起きたのだ。

グ？「h t : お j g f y c t f g j f v g y d y 4 h け s r t h g」

破面もどきの霊圧が倍近く増えダメージも全快してしまったのだ。

もういい加減にしてほしいんだがと思ったのだが無理にパワー

アップしている影響か身体が崩壊し始めている、このまま時間稼ぎす

れば勝てるだろうがそれでは俺の気が済まないのでもこのまま倒す。

また回復されても困るので威力がわからないが虚閃を頼ることにしたのだ。

これで倒せなかったらそんな時は飛廉脚で逃げればいい、方針を決めたところで決着をつけるために飛廉脚を発動し突っ込んだ。

グ？「! y k g n m d c g m r g m t t 6 f c r y j g j どお r p で w w s ! ! ! !」

破面もどきの攻撃を受け流しながら肉薄し懐に再び拳を叩き込んだがその時に拳から無限装弾虚弾を拳から連なるように放った、要は疑似鐵拳断風だ！

グ？「よ f g t え p w d g ちえ d d ふお 5 l w w f k ! ! ! ! ! ! ! !」

破面もどきを再びぶっ飛ばしたがこれでは先ほどと同じなため俺はとどめを刺しにかかる。

俺はすぐ右手の人差し指を破面もどきに向け放った。  
一護「虚閃」

人差し指から紅い極太のレーザーが発射され破面もどきを飲み込み境界を余波で吹っ飛ばしたのだ。

： ホワイトさん、あんた3割って言ってましたよね？3割でこれって本来の威力だとどれほどなんだよ…

と俺は黄昏ていると妙な霊圧を感知した。  
???「いや〜アタシの予想通りというかそれ以上のことが起きていますよ。」

???「そんなことを言っている場合ではないですよ。」

胡散臭い恰好をしたおっさん2人組が近づいてきた。

一護「誰？おじさん達？」

???「おつと失礼、初めましてつすね黒崎一護さん、自分は浦原喜助と申します。でこちらは助手の」

???「握菱鉄裁といいますが、すみませんねいきなり」

浦原喜助と握菱鉄裁がそう言ってきた、さてここはとぼけながら弟子入りまでもつていきますか。

一護「浦原喜助？…ああ父さんが言っていた死神？」

浦原「おや？一心さんからもう聞いていたんすか？」

一護「母さんと酒に酔ってたら言ってた」

簡潔に答えると浦原喜助は言ってきた。

浦原「…あんまりこちらの情報を話さないでくれると助かるんですけど」

浦原喜助がそう言ってきたんで俺は二人にお願いをした。

一護「しゃべらないからあんたら3人に弟子入りさせてくれ」

浦原喜助は瞬間眉をひそめた。

浦原喜助（2人ではなく3人つすかどうもあの人のことも知っているようつすね。）

浦原喜助は考えた、この子供が自分たちの弟子になったメリットとデメリットをだが。

浦原喜助（先ほど感じた莫大な霊圧に死神と純血統滅却師のハーフそれに真咲さんの虚も受け継いでいて、そして完現術フルブリングも使える可能性もあるかもしれないつすね。そんな行きつく果てがわからない存在を身近に置いとくメリットなんて…）

1つ先に浦原喜助について簡単に説明しておく。

一言で言うとお好奇心一つで倫理も常識も良心も投げ捨ててヤバいものを作るヤバい奴である。

そんな男が誰も見たこともない領域に至る可能性が自ら弟子入りにくるこの状況をわざわざどぶに捨てるだろうか？

答えは否である。

浦原「いいつすよ。」

鉄裁「ちよつと!?!そんな簡単に決めないでくださいよ!?!」

浦原「いや、面白そうじゃないですか。」

鉄裁「面白いかどうかじゃありませんよ!?あと私達は仕事でここに来たってこと忘れてるんですか!？」

浦原「・・・あ、そういえばそうでしたっすね」

鉄裁「忘れないでくださいよ!？」

鉄裁はそう言うが浦原はどこ吹く風だ。

浦原「そういうことで一護さん、今から真咲さんのところに連れて行くんで自分たちに着いてきてください。」

俺は頷くと歩き始めた二人に着いていった。

しばらく歩くと浦原商店と書かれた駄菓子屋が見えた。

浦原「ただいま戻りましたっすよ、いや、やっと思つかりましたよ。」

真咲「一護!!」

母は叫び勢いよく俺に突っ込んできて抱きついたので。

真咲「馬鹿!!何危険なことしているの!!」

母はそう言っているがああでもしなかったら二人又は片方のどちらか死んでいたのだ。仕方がなかったと母に言った。

真咲「結果的に無事だったから良かったけれど次から上手く生き残れるとは限らないのよ!!だからもつと慎重になって考えなさい!!」

母にそう言われたため心の中でさらなる高みに至らなければならぬと誓った。

それはそうと

一護「母さん、霊圧が・・・」

母から霊圧が僅かにも残っていないのだ。

真咲「ええ、どういうわけか力がなくなってしまったのよ。」

浦原「こちらで調べられるなら調べておきますよ。」

浦原がそう言うとお母もお願いしていた。

一護「とりあえず今度修行しに来ますね。」

俺がそう言うとお母が言ってきた。

真咲「一護!?!貴方また、危険な状況に首突っ込むの!?!」

一護「違う!今日みたいなことが無いように強くなりたいだけ!」



俺がそう言うと、母が何か考え始めた。暫く考えていると覚悟を決めたのか母が言ってきた。

真咲「頑固なところは私やあの人譲りかあ、良いわよ、元々はいつか貴方に受け継いでほしいと思っただけだ」

すると母は首にかけていたネックレスを外し俺に渡した。

それは五芒星の形の首飾りだった。

五角形の滅却十字架俺がずっと欲しがってねだり続けた物だ。

真咲「貴方にこれを渡したら貴方がどこか遠い場所に行ってしまうんじゃないんかって不安になって今まで渡せなかったのよ。」

母はそういったが俺は生憎霊王になったりとかしないしなる気も無い。

俺は五角形の滅却十字架を受け取り首にかけた。

とりあえずこのしみったれた空気を何とかするため俺は母に言った。

一護「とりあえず今日は帰ろう?」

真咲「ええ、そうね、あと力を失った件に関しては彼の助けを借りるかしら?」

一護「誰?」

真咲「ママの元許嫁よ。」

どうやら修行の前にまた一悶着があるようだ。

side???

ある世界にある部屋の一室で彼は高らかに笑っていた。

「ふははははははは!!素晴らしいぞ!黒崎一護!まさかあの浦原喜助が創った義骸の封印を破って虚の力を引き出すとは!!」

本来、黒崎一護の死神の力は外部の死神の霊圧を直接注がれなければ解除されないのだ、そして虚の力は死神の力を得てから鍛え上げ実践経験を積みうちに眠る虚を引き釣り出さなければいけないのだ、それを家族のために死ねない(実は一護は自分が死んで家族を悲しませたいのか?)という問いを口に出していました)という思い一つで打ち破って虚化してみせたのだ。

とこの黒幕（イツタイ何染なんだあ）はそう解釈しているが実態は自分が張った霊圧と魂魄関連の情報を遮断する結界が原因で虚化してきたことなどこの黒幕は知らないのだが。

??? 「それにしても黒崎一護、君の潜在能力には敬意を表すよ、まさかまだ少年でしかない君がああのレベルの虚を倒して見せるとは…。」

本来、狂化虚は霊圧だけなら並みの隊長格五人分もの霊圧を有するのだ、それを軽々超えるレベルの霊圧を引き出して見せた、これからのさらなる成長に期待をしているが、一つ誤算を上げるなら今回、虚の力を引き出してしまったことだろう。

今の黒崎一護は虚の因子への耐性があまりない状態と言えるため、虚に浸食される可能性があるのだが黒幕はたいして気にしていないようだ。

??? 「…まさか、あの時ホワイトに気まぐれで崩玉の試作品で一番出来のいいものを埋め込んだがそれが功をそうしたようだ。」

少し前に黒幕は志波一心を黒崎真咲と引き合わせるための戦いの前に自分が使うのとは別で今までに作った試作品で一番出来の良かった崩玉をホワイトに埋め込んだのだ。

詳しくは省くが自分の作った崩玉は蒲原喜助のやつとは違って対象に埋め込まなければ作用しないと埋め込んだ対象にしか効果を及ぼさないが効果自体はちゃんと発揮するのだ。

おそらくそれが死神と滅却師の境界が曖昧になり虚の耐性がついていたのだろう。

何はともあれ、黒崎一護の経過観察は順調と行っていいだろう、とりあえず次に彼にぶつける虚を決めなければならぬ。

??? 「…そうだ、昔作った失敗作をぶつけてみるか。あれなら成長した彼にはちょうどいい敵になりそうだ」

黒幕はそういうその虚の名を言った。

??? 「出番だよ、メタスタシア」

それは本来ある死神に絶望を与えるはずの虚だった。

7話：「中の連中が増えるとは思わなかった。」

その後、帰宅し父に今日起きたことを伝えると眉をひそめ思い詰めた顔をするが、すぐに何処かへ電話を繋いだ。おそらく、母の知り合いだろうが今の父は母が自分の知らないところで死にかけたということに自分の無力感があるのだろうからそつとしておいたほうがいいな、俺が父の立場ならそうしてくれただろうが良いだろう。

電話を終えた父がこつちに来た。

一心「一週間後だったら問題ないらしい。」

ということなんで今日はゆっくり休むことになった。

その夜、自分の精神世界に入った、最初は偶然だったけどどうやら上手く行ったようだ。

再び周りの景色が上下の感覚が不安定のビルが連なる不思議な世界にいた。

でホワイトとおっさんの二人がいたのだが… ついでになんか見たこともない美女がいた、髪が紫銀の腰まで届く長髪で紫の瞳、身長が165cmくらいでスタイルがネリエルくらいの女がいる、あとなんか生えていないのに犬の尻尾をブンブン振り回している幻覚が見える。

一護「…誰?そいつ?」

???「酷くないですか!?!ご主人!?!」

いやそう言われても原作のメゾンドチャン一はおっさんとホワイトト以外に居ないのだ。

あと俺の力の素養で人の形に具現化してないのは死神と完現術の力か?いや死神の力はホワイトだし完現術もホワイトの中にある霊王の爪のおかげだから違うか、じゃあこの女はなんの力が具現化した存在だ?

???「…うう、酷いですよおいつもご主人の望みを叶えているのに存在を認識すらされていないなんてえ。」

女はなんか聞き捨てならない事を言った。

一護「…望みを叶える?そいつはなんの力が具現化した存在だ?

おっさんからは死神、滅却師、虚、完現術の力が備わっていると聞いたが、お前はそれらのいずれにも該当しないんだが。」

???「ちよつと！おじさん！私のことも紹介しといてくださいよ!!」

ユ「… お前の力が（不完全に）発現すると（他人が）完現術を使えるようになるからな一緒にしても然程問題はなかった。」

そうおっさんは言うが、具現化するほどの力を伝えられてないと流石に困る。

一護「そういうのはちゃんとやってくれよおっさん。」

ユ「… 次からは善処する。」

それ言わないやつじゃん。

一護「… で、結局の所そいつナニ？」

ホ「ソいつはお前の中に眠る崩玉の力が具現化した存在だ。」

と今まで黙っていたホワイトがとんでもないことを言った。

???「ちよつとホワイト、それ私が言いたかった!!」

などと女はホワイトに抗議しているが俺はそれどころじゃ無かった。

一護（崩玉だど?!原作の一護にはないはずだ?!藍染がホワイトに仕込んでいたのか!?)

俺は内心で大慌てしていた、それ程までに崩玉とは凄まじい力を有しているのだ。

ここで崩玉について説明しておこう。

簡単に言うと願いを叶える龍球である。

ざっくりしているがこれ以上の確な表現がないのである。

だが何故そんなものが俺の中にあるのかさっぱりわからないが、気にはするがひとまず置いておこう。

とりあえずこいつが俺の願いを叶えているのは事実だろう、なんせ原作では同時使用ができないとされている二つの血装の融合、破面もどきに通用した動静血装の出力、技の疑似再現と思えば当たる節があり過ぎる。

だが何故この女は俺に力を素直に貸しているのだろうか？普通、願いを叶える能力のような強大な力が意思を持つと宿主を乗っ取るのが

鉄板なのだがこの女はそのような素振りが一切ないのだ。

故に俺は、今だぎやあぎやあホワイトに抗議しているこの女に聞いてみた。

一護「おい、お前はなんで俺に無条件で力を貸してくれるんだ?」  
???「… え!? そんなの決まっているじゃないですか! 私がご主人のことが大好きだからですよ!!」

ドン! という擬音語がつくほど胸を張る女だが俺は内心でええ… となった。

一護(こいつもメゾンドチャン一の仲間か)  
心配して損したというか肩に力を入れ過ぎていたというか心配し過ぎていたのか… 全部だな。

何はともあれ、こいつは味方の認識でとりあえずいいかな。

あとはこいつが俺に願いを叶える以外で何をもたらすのか聞いておくか。

一護「お前って願いを叶える以外で何か俺に教えることってあるのか?」

すると女は元気よく答えた。

???「はい! 私はご主人に完現術フルブリングを教えるために出てきました。」

まじか、完現術は結構便利なものが多いため早めに習得したかったが死神代行消失編まで修業ができそうにないと思っていたがこれは嬉しいな。

一護「それはありがたい、完現術は基本便利なものばかりだから早期に習得したかったんだ。」

俺はそう言ったら女は喜んで抱き着いてきた。

???「わくわく! ご主人大好きです!!」

抱きつくのはいいが今は俺のほうが背が低いいため胸に頭が埋め込んでいる状態のため窒息しかけているのだ。

見かねたおっさんが助け舟を出した。

ユ「… いい加減その辺にしたらどうだ。」

???「いや、ご主人に頼られてるって思うとつい、気持ちが悪いです。が、ご主人に頼られてるって思うとつい、気持ちが悪いです。が、ご主人に頼られてるって思うとつい、気持ちが悪いです。が、ご主人に頼られてるって思うとつい、気持ちが悪いです。」

俺は息を整えて3人に向いた。

一護「とりあえず滅却師と虚の技に完現術について教えてくんね？」

「「分かった(ぜ)(りました)」」

あともう一つのこととも聞いとかないと

一護「女、お前の名前何？」

???「今更ですか!?ご主人!？」

だって色々あつて聞きそびれたんだもん。

女は元氣よく名乗った。

???「私の名前はギョクと言います!末永く一緒にいます、よろしく  
お願いいたします!!」

一護「ああ、こちらこそよろしくな。」

まさかの中の連中が増えるとは思わなかった。

ギョクがメゾンドチャン一に増えたところで俺はギョクにある質問をした。

一護「お前の願いを叶える力つて現実だとどれくらいの範囲でどれくらいの影響を及ぼせるんだ？」

ギョク「今はご主人の素養がすべて解除されてないんで及ぼせるのはそう広くはないんですよ。」

一護「あれまあ、じゃあお前の力で解除できないのか？」

ギョク「・・・誠にそれはできなくてですね。すみません。」

ギョクはシユンとしているがまあ、今はそれでいいため特にこまっ  
てはいない。

とりあえず置いておいて、最初にギョクから完現術について学ぶ。

ギョク「いいですかご主人、完現術フルプリンターというのですね。

物質に宿った魂を引き出し、使役する能力の総称のことで完現術を  
持つ人間は完現術者フルプリンターと呼ばれます。」

ギョクは簡単にだが完現術と完現術者について説明した。

次にこの世界の魂魄と完現術について説明した。

ギョク「この世界はどのような物にも魂が宿るとされます。そして、使い慣れた道具を使用するときいつもの自分より高い能力を發揮

することができると感じるのは、その道具に宿る魂を理解したということなのです。

物質に宿る魂には元来「使い手を補助する性質」というのがあり、それを自らの魂で大きな力と化し、それをを用いることで物質を操ったり、身の回りの物を補助として使うことで自らの身体機能以上の能力を発揮することができます。

例えば、「アスファルトの魂」の助けを受けて高速移動をしたり、「酒の魂」の助けを受けてグラスから口に飛び込ませたり、足元を支えさせて水面に立つこともできます。

使い慣れたもの、愛着のあるものであれば物質の形や性質そのものを変化させ、武器にすることができたり、それを媒体に固有能力を発揮することがあります。どちらかといえば固有能力を指して完現術と呼ぶことの方が多いかも知れませんね。」

ギョクがわかりやすい説明をしてくれたが、判りにくい方もいるのでぎっくり噛み砕いて言うと同様な付喪神を操って色々できるよねってこと。

ギョクが理屈を説明し終わったために、実際に完現術を体得するために物質に宿った魂魄を感じ取る訓練に入った。

とはいっても悪霊である虚と正面から対峙した経験があるため、そんなに時間が経たずに精神世界のコンクリートの魂を感じることができたのだ

それを自らの魂魄の力で強化して走ったのだ。完現術特有の完現光プリンガーライトが発生し俺は9歳の体では決して出ないような速度で走ったのだ。ちなみに霊力による身体強化や動静血装などは一切使っていないのだ。

これは凄い…。内心で俺が思ったのはこれだ、原作だとしよぼい能力のような描写をされていたが霊圧を消費することなく高速移動技や空中移動が可能になるなど破格もいいところなんじゃないか?…: まあ原作の完現術者が戦ったのが全員隊長格としか相手していなかったのもあるだろうが人間が死神に勝てるのはそれこそ原作の一護のような存在でもない限り無理なのだが。

ちなみに俺は完現術でどれくらい速さで走ったかとギョクに聞いたら100mを9秒で走ったとのこと。

そして同じ要領で空中をかけたリ空中で静止したりした。

俺、完現術と相性がいいのだろうか？まあいろんな種族の力が使えるがベースはあくまで人間だからだろう。

そんなことを思っているとギョクが話しかけてきた。

ギョク「今は基本的なことしか教えられませんが、1年くらい経てば愛着のあるものを変形したり媒体にして固有能力を使えるようになりますので今は現実で完現術を馴染ませておいてほしいです。」

と言われたので俺は元々そのつもりだったので了承した。

次におっさんと滅却師の修行を開始した。

ユウ： お前は母から五角形クインシックスの滅却十字を継承した。そして滅却師はこれを媒体にして武器を形成、矢を放ち戦うのだが矢と言ったが飛び道具を飛ばせるものであれば極論剣でも良い。」

そう言いおっさんは千年血戦篇で使ってた霊子兵装の羽根のような形状の鍰がついた片刃の大剣を生成した。

相変わらずの霊子操作能力に尊敬すら湧くよ。…まあ、本体はいずれ殺すが。

俺も五角形の滅却十字を媒体にして武器の生成に入るがおっさんのように実体化した剣ではなくどちらかと言えば霊子を刀の形に押し固めた感じになったのだ。

まあ、初めだしこんなもんかと思いつつ俺とおっさんは飛廉脚で空中で対峙した。

あと先に言っておくべきだったから言うが、修行中は修行している力以外の力を使ってはダメと3人から言われた。

まあ、全部使ったら修行にならないから俺も分かっているため素直に了承したが。

そして俺はおっさんと切り合いを始めた。

俺は飛廉脚で空中を加速しながら動静血装で上がった腕力で真っ直ぐ刀を振るったがおっさんは大剣で受け止めたり受け流しをしてなかなか当たらない。



くそ、まだまだ剣の扱いが慣れていないからおっさんのような戦闘の達人と比べると100歩以上遅れを取っている。

俺がそう感じているとおっさんが俺に言ってきた。

ユ「…そろそろこちらから行くぞ。」

この言葉を皮切りにおっさんが大剣をものすごい速度で振るってきた。

なんとかギリギリで刀で受け止めたが動静血装で上がった膂力と防御力が無かったら今ので戦闘不能になっていた。

てか、大剣を片手で振るってたのに出せる速度と威力じゃないでしょ、あれ。

俺はのんきにそんなことを思いながら必死になって大剣を受け止めたり受け流したりしているがこのままだとジリ貧なんぞでなんとかしたい。

ちなみに大剣をよくある力押ししの武器と勘違いしている人が多いので訂正するが大剣は破壊力、重量、範囲、取り回しの良さと結構バランスの整った武器なんで技量に優れているものが使うとこうして受けに回るので精一杯なんだよ。

ともかくこの状況を打開するため俺は冷静におっさんを観察し、突破口を見出しながらおっさんの剣術を自身にトレースしつつ自分の動きに合わせておっさんの剣と撃ち合い始める。

始めこそ、おっさんに押されていたが10分も打ち合っていたりだいぶおっさんの剣についていくことができるようになった。

するとおっさんが、急に待ったをかけた。

ユ「…今日はここまでだ」

一護「どうしたんだ？急に」

ユ「これ以上時間を使うとあいつが乱入してくる。」

おっさんがそう言い指を指した。指の先には今にも飛び出してきたようなホワイトさんがいた。

一護「…あくなるほどそういうことならわかりましたよ。」

ユ「…理解が早くて助かる。」

とりあえず二人のところへ降りていった。

ホ「オイ！さっさと俺にも修行つけさせる!!」

降りてきてそうそうホワイトがそう叫んだが俺はホワイトに少し待つてほしいと頼んだ。

一護「ごめんちよつと休憩させて」

ホ「ああ!?!お前の体力ならまだまだ余裕あんだろ!!」

一護「いや、体力じゃなくて精神的に疲れたから少しでいいから休ませて」

俺は初めて完現術を使ったり精神世界で長時間活動をしたことがなかったため精神的に疲れが生じていた。

ホワイトも言葉の意味が伝わったのか、それ以上は追求してこなかった。

ホ「…チツ30分だけだぞ」

一護「ありがとう」

とりあえず30分で効率よく回復するため瞑想をした、精神世界で瞑想とはおかしな話だがまあ精神を回復させる方法は昔から瞑想と相場が決まっているのだ。

く30分後く

一護「よし、問題ないな!」

俺は体を動かし状態を確認しているとホワイトが笑いながら近づいてきた。

ホ「ようやくか！待ちくたびれたぜ!!」

ホワイトと虚の力の修行を開始した。

ホ「お前にはまず、響転ソニードを使えるようになってもらうぜ!」

ホワイトはそう言うてきたがその前に前々から気になっていたことがあったので聞いてみた。

一護「響転と他の高速移動技の違いってなにかあるの?」

ホ「…ん?ああ、それはな」

するとホワイトは判りやすく説明を始めた。

ホ「瞬歩は死神が使う高速移動技で足に溜めた霊圧を使うことで超加速するのが技の理屈だ。瞬発力こそ4つの力で一番だが燃費が悪く足に負担がかかりやすい。上位の死神なら特に気にせずポンポ

ン使えるがそれは一握りだけだから頭の片隅に留めておけばいい。  
飛廉脚は長距離を移動したり足に負担がかかっているときに使う  
のがおすすめで燃費も4つの力で二番目に良いんだ。

響転は逆に短距離で最も効果を発揮する歩法と言えるものだ。霊  
圧探知などを掻い潜れるため白兵戦で使ったり追跡から逃れるため  
に使うのが効果的だ。

完現術の高速移動は最高速度こそ他の3つに劣るが霊圧を使わな  
いので燃費が4つの力で一番いい。」

俺には燃費なんて特に問題ないがそれでもそれぞれの特徴がよく  
わかった。

一護「なるほどよく分かったよ。」

俺がそう言うのとホワイトが怒鳴りながら言ってきた。

ホ「んなコト別にインだよ！手本見せてやつから一発で真似してみ  
ろ！」

そう言いながらホワイトが響転で一瞬で移動した。

響転で移動する際に一瞬で霊圧が消えたため、探知がしにくいのが、  
理屈は理解できた。

足に力と霊圧を込めて加速する際に霊圧に揺らぎを加えることで  
霊圧探知を誤認させているのだ。

理屈が分かったため、あとは真似をするだけだ。

俺がホワイトがやっていたとおりに響転を使ったがやはり自分の  
力を理解しているホワイト達程上手くはいかないようだ。

まあ初めて使う技を一発で使える分まだマシなのか？

そんなことを思っているとホワイトが俺の響転について言ってい  
きた。

ホ「まあまあだが、初めてにしてはやるじゃねえか！響転が使える  
ようになったら実戦形式で殺るぞ!!」

物騒だが一つ疑問が出てきた。

一護「虚化して殴り合うの？」

ホ「違うわ！バカが!!死神の力も使って修行すんだよ!!」

どうもホワイト曰く精神世界ここなら死神と虚化の力が使えるようなので

自分に死覇装と斬魄刀を持つてるイメージをした。すると俺の衣服が死覇装に変わり腰に斬魄刀が帯刀されている。

ちなみに斬魄刀の形状だが原作の一護が死神の力に覚醒した際に携帯していた大太刀を通常の浅打と同サイズで柄についてた紐がないものと思つてほしい。

一護「なるほどこれが…俺の斬魄刀かあ」

俺はどうしようもない気持ちになった。

転生した当初からある罪悪感が今だあり申し訳ない気持ちが強くなりながらも斬魄刀を手に持つという嬉しい気持ちもあり言い表しようなない気持ちで内心を支配していたがホワイトが怒鳴ってきたためすぐに気持ちを切り替えた。

ホ「おい！何ボケつとしてる！早く準備しろ！」

一護「分かったからいちいち怒鳴るな。」

俺はそう言いながらアニメとかで、一護が仮面を出している時の動作をして仮面を被った。

…あれ？初めて仮面を出したときはホワイトが勝手にやってたけど今回はそうではない、ここだと簡単に出せるのだろうか？まあ死覇装と斬魄刀を出しているし今更か。

自分の霊圧を足場にする死神方式で空中に立つてホワイトと対峙する。

俺達は斬魄刀を抜刀し構える。

俺は刀を正眼の構えでホワイトは無造作に構えている。

俺は鋼皮イェロで防御力を極限まで上げつつ集中し、ホワイトの動きにいつでも動ける準備を済ませた。

戦いの火蓋は突然切られた。

ホワイトは予備動作なく響転で接近し刀を振り上げていた。

響転から振り上げるまでの動作に無駄がないため、一瞬反応が遅れたがなんとか初撃を受け止めれたためそのまま鏢迫り合いに持つていった。

ホ「はっ！ボケつと準備してる割にはいい反応すんじゃないか!!」

一護「そりやどうも!!」

俺は軽口を叩いたがホワイトは腹に蹴りを放ってきたためすぐに距離を取った。

距離ができた瞬間に俺は虚弾<sup>バラ</sup>を2、3発放ったがホワイトも虚弾で相殺した。

ただ待っているときつきと同じだけなんで俺も響転を使つて接近するが向こうもそれが分かっているのか、虚閃<sup>セロ</sup>を連射してきた。

俺はできる限り回避を優先して避けきれないものは虚閃を刀に纏わせて受け止めたがやはり、向こうは自分の力の使い方を理解しているようでこちらが押されているけど、ここで闇雲に突っ込んで意味がない。

なにか突破口を見つけないとやられるだけだ。

そういえばさつき虚閃を刀に纏わせて受け止めたな、もしかしたら今の状態で月牙天衝撃てんじゃね？

俺は試しにさつきと同じように虚閃を刀に纏わせてそのまま振るったその際に虚弾を放つ感覚で纏わせた虚閃を放った。

紅い斬撃がホワイトに迫るがホワイトは落ち着いて同じように白い斬撃を放ち相殺した。

ホ「…へエ、もう虚閃の応用をしてきたか。」

ホワイトは今の一撃で何を感じ取ったのか、刀を納刀した。

ホ「今日はもう終わりにするぜ。」

一護「マジでか早すぎじゃね？」

俺はホワイトにそういうとホワイトがこう答えた。

ホ「いやそもそもお前つて雑魚とはいえガチの殺し合いで精神的な疲れがあるからこれ以上はやめたほうがいいんだ。」

ホワイトの答えに確かに疲れが溜まっているからな、休むことも大事だろう。

俺は素直に現実に戻ることにする。

とりあえず俺は戻る前に3人に言った。

一護「また明日来るな。」

3人「無理はするな(すんじねえ!!)(しないでください!!)」  
俺は現実に戻ると時間を確認した。

時間は11時を回っていた。精神世界に行ったのはおよそ8時頃だったのでおっさんの能力で時間をずらして修行時間を確保したよ  
うだな。

とりあえず今日はもう寝よう。

俺はベッドに入ったらすぐに意識が落ちた、まああれだけの体験を  
して体に負担がないなんて嘘だからな。

8話：「相棒ができたようだ。」

おっさんたちと修行して一週間後、俺は母と父に連れられて空座総合病院に来ていた。

受付を済ませ時間が来るまで待っていると一人の男が近づいてきた。

男は父を見ると心底嫌だと言うような顔をしながらこちらに来た。

一心「よお、ヤブ医者元気そうだなによりだ。」

???「黙れ、ここには本物の医者しかいない、ヤブ医者はお前のほうだ。」

父は男と嫌みを言いあってはいるが嫌悪感は互いにないたため二人の仲は劣悪というよりは悪友との再開に近いのだろう。

石田竜弦、純血統滅却師で母の元許嫁と聞いてはいたがこの人強くない？

とりあえず母の診察を任せて俺は病院内を他の人に迷惑にならない範囲で探索する。

すると滅却師特有の霊圧を感じた。

近くにある結構いい病室にある入院患者の名前を見て数回のノックをして入った。

その名前は片桐叶絵、石田竜弦の妻で原作では故人だった人だ。

一護「初めまして、こんにちは」

叶絵「こんにちは。あら？あなたもしかして真咲さんのところの子かしら？」

一護「よくわかったね？」

叶絵「あの人の髪色によく似ているし顔も真咲さんと一心さんの顔の面影があるからね。」

母と似ていると言われるのはいいがあの髭面親父に似ていると言われてもあまり嬉しくない。

叶絵「それにしても私あまり知り合いが真咲さん以外でないから話し相手も息子以外で話すのは久しぶりなのよ。」

一護「息子？」

叶絵「ええ、あなたと同じくらいの多分もうそろそろ来る頃よ。」  
ちようどその時、部屋扉がノックされた。

???「失礼します、母様」

扉が開くと俺と同じくらいのメガネをかけた男子がいた。

叶絵「雨竜、今日は師範と稽古はいいの?」

雨竜「はい、今日の稽古を終えてから来ましたけど、母様この人は...」

叶絵「この子は親戚の子であなたのはどこよ。」

雨竜「はどこ?」

はとこと知ると怪訝そうな顔をしているが俺はとりあえず挨拶と自己紹介をした

一護「初めまして、俺の名前は黒崎一護だ。お前と同じで滅却師の血を引いている。」

俺がそう自己紹介をすると雨竜は驚いた。

まさか自分以外でしかも同い年の滅却師と会うとは思わなかったようだ。

一護「...で?お前の名前何?」

俺はそう問うと雨竜は自分のことを言ってきた。

雨竜「僕の名前は石田雨竜だといふかなんでそんな偉そうなんだよ!!」

一護「だって滅却師としての実力は俺のほうが上だもん。」

実際に感じ取れる霊圧で大体の実力は測れるためその評価は間違っていないだろう。

あとどちらかといえば雨竜をからかってツツコミ役としての実力を上げる意味合いのほうが強いためこうして煽っているのだ。

雨竜「よし、表に出て僕と戦え。」

キレた雨竜は滅却師十字を掴み臨戦態勢に入っていた。

イヤ、いくらなんでもキレやすすくない?

一護「どうどう、そんなにカッカすんなってハゲるぞ。」

雨竜「僕は馬か!それにお前のせいで怒っているんだよ!あとハゲるつもりもない!!」



一護「よく息継ぎせずに突っ込みきつたな。」

雨竜「まだ言うか！」

叶絵「あらあら、もう仲良くなったのはいいけどうるさくしすぎるのは他の部屋の人に迷惑をかけるわ。」

雨竜「・・・はい、すみません母様。」

まあ確かにこれ以上うるさくすると他の部屋に迷惑をかけるため雨竜をからかうのはこれくらいにしておくか。

一護「すみませんでした、雨竜をからかうのが楽しくて」

雨竜「お前反省していないのか、あと呼び捨てにされるいわれはない。」

叶絵「でも雨竜って学校とかでも仲のいい友達とかの話ってあまり聞かないから心配してたけど大丈夫そうね。」

雨竜「母様！こいつは違いますよ！」

と母子の仲の良い一幕を見ていたらなんか妙な気配と結界が張られるのを感じた。

すると外から悲鳴が聞こえてきた。

一護「・・・ん？なんだ。」

俺は窓の外を見るとこの前の破面もどきとは違うが人型の虚が暴れていた。

一護「・・・はあ!？」

俺は驚いていた。なんせ原作でもあんな人型の虚が暴れるなんて知らないからだ。

・・・イヤ待てよ、この前の破面もどきの戦いのときもそうだったが今回も藍染が仕組んだ可能性が高いな。

しかもどういうわけか普通の人間にも見えているっぽいのだ。

このままだと死者が出そうなため俺は戦闘準備に入ったのだが何故か雨竜も戦闘準備に入った。

一護「・・・お前も戦う気なの？」

雨竜「当たり前前だ!!あれを倒せるのは僕たちしかないからな！」

雨竜はそう言っているが叶絵さんが雨竜を止めていた。

叶絵「雨竜！やめなさい！今のあなただと危険よ！」

雨竜「しかし、母様！このままだと母様が危険です！」

叶絵さんは必死に雨竜を説得しているが雨竜の言っていることも間違っではないいたため平行線になっている。

俺は二人を置いて窓から飛廉脚を使い飛んだ。

飛びながら俺は五角形の滅却十字を媒体にして銀色のデザートイーグル型の銃を生成した。

ちなみに普通の弓型の霊子兵装も作れるが片手が空いてたほうが何かと都合が良かったため、銃型にしたのだ。

銃から刀の形をした神聖滅矢を生成し右手に刀を左手に霊子兵装の銃を構えた。

俺は動静血装で肉体を強化し完現術の高速移動（長いしなんか名前があつたほうがいいと思うのでこれからは完現術：加速と呼称しよう）と飛廉脚を合わせた移動技を使い破面もどきと距離を詰めながら通常のエネルギー弾型の神聖滅矢を連射しながら斬り掛かった。

おっさんやホワイトとの戦いで単純な剣術の腕が上がり剣術と射撃術を融合した変速戦法もだいぶ慣れてきた。

ちなみにこの人型の虚はこの前のと比べると霊圧が半分以下しかないためそう苦戦することはないと思っていたがそれはすぐに覆させられた。

莫大な霊圧と霊子でできた弾丸を軽く腕で打ち払ったのだ、瞬間的に俺は真上に跳躍し空中で静止した。

俺は人型の虚を観察し敵の能力の分析に入った。

一護（あの連射した神聖滅矢一発の威力はあの虚を一撃で倒せるように霊圧を込めたのだそれを軽々打ち払うとなると鋼皮が硬すぎるのか、そういう能力を持っているのかはたまたその両方なのか。

だが突破口がないわけではなさそうだ。

神聖滅矢を弾いだ際に大きく霊圧を消耗したのだ、おそらくそう何回も使えるものではないようだ。できてもう2、3回くらいだろう。）そこが勝負の分かれ目だ、俺は再び神聖滅矢を連射したが向こうもそれを分かっているようで回避を優先している。

一発でも直撃したら勝ちなため油断せずに神聖滅矢を放ちまくっ

ている。

痺れを切らしたのか人型の虚は回避しながら空中を突っ切ってきた。

虚は腕を某ゴム人間のように腕を伸ばしてきたが俺はそれを危なげなく躲しながら神聖滅矢を放とうとしたが虚は伸ばした腕を鞭のように撓らせ薙ぎ払ってきた。

俺はすぐに、跳躍することで回避し距離を離れた。

今の一連の攻防であの虚の能力は肉体の強化と操作の類と判明した。

特異な能力があるならもうとつくに使っているはずだからな。

でもあの藍染がこんな雑魚を超越すのだろうか？念のために霊圧探知をこの病院の敷地内に限定した。

するとこの虚以外の虚の反応があった。

一護「マジかよ、他にもいんのか!」

これは早いとこ決着をつけないとまずいな。ただでさえ被害が出ていないのが奇跡なのだから。

… と思ったらその虚が向かってきているのだ。

すると虚は地上に降り立ったのだ、どういうことかと思ったら現れた虚が原因だった。

一護「… 刀?」

虚の反応的にあれであっている。刀の形をしているのが気にはなってはいるが刀の正体というか宿っている力を感じてそんなことはどうでもいいくらい冷や汗が出てきたのだ。

なんせあの刀型の虚から崩玉の気配に近いものを感じ取れるのだ。まさかの外付け崩玉虚刀とかいうやばい代物が出てきたのだ。

てか崩玉の能力のこと考えるとまるで斬魄刀みたいだな。

虚は崩玉虚刀を手に取ろうとするが俺はすかさず神聖滅矢を放ち虚の強化を阻止にかかると。

物語とかだと禁じ手中の禁じ手だがこっちはそんなこと言っていないのだ。

神聖滅矢が崩玉虚刀に吸い込まれるように迫るが虚は瞬間移動と

見紛う速度で崩玉虚刀をかばったのだがその代償に霊圧がほんの僅かにしか残っていないのだが虚が崩玉虚刀を手に取ると消耗なんてなかったと言わんばかりの霊圧が溢れた上にダメージが全快したのだ。

霊圧の上昇幅は元のおよそ10倍くらいだ、比較対象が俺くらいしかいないせいで高いのか低いのがわからない。

ちなみに俺と比べた場合は10分の1しかないのだがこれは俺の霊圧量がおかしいだけだからマジセ!比較ができない。

虚「うがああああああ!!!」

先ほどまでうめき声一つ上げなかつた虚は咆哮を上げ崩玉虚刀を乱雑に振って霊圧を飛ばしてきた。

俺は余裕で躲しながら神聖滅矢を放ち攻撃したが上がった霊圧にものを言わせた肉体強化で防いだ。

一護「・・・これはちよつと面倒だな。」

この前より霊圧こそ低いが暴走していない分こっちの方が強い。

虚「グルああああ!!!」

叫びながら刀で袈裟切りを力任せに放ってきたが今の俺がどこまで力が通用するか真つ向勝負した。

互いに片手で刀を振るったが衝突の際に発生する余波で周りを破壊しないようにしながら戦ってはいるがそのおかげで決定打がない、霊圧にもものを言わせた神聖滅矢なら何とかなるがそれをやると病院を巻き込んで消し飛ばしてしまうためできずにいる。

せめてあの崩玉虚刀を何とかできればいいがそれをやろうにも向こうも刀を弾かれない様にしながら戦うためどうしようかと考えていると病院から雨竜が出てきた。

俺はすぐさま虚に蹴りを入れぶつ飛ばすと雨竜の所まで移動した。

一護「雨竜! いいところに来た。よく叶絵さんを説得できたな!」

雨竜「母様は何とか説得できたが別にお前を助けに来たわけじゃないからな! 僕はあの虚を倒しに来ただけだ!」

とか言っているけどホントは俺を心配しているのは分かっているからな。

一護「素直じゃねえな、お前」

雨竜「虚の前にお前を倒すぞ?」

一護「ごめんごめん、雨竜あの刀がああ虚の弱点だから俺が困になるからお前がああ刀を何とかしてくれ」

雨竜「君に命令されるいわれはないがわかった、死なれると夢見が悪くなるから死ぬなよ。」

一護「俺も死ぬ気はないから安心しろ。」

俺たちは軽口をたたきながらも吹っ飛ばした虚から意識を外してはいない。

虚は霊圧をさらに上昇させている。

下手に突っ込んで怪我をするのもバカらしいので放置していたがこれは短期決戦で片を付けた方がよさそうだ。

一護「雨竜、短期決戦でけりを付けるぞ!」

雨竜「君に取り仕切られる覚えはないがその方がよさそうだ。」

一護「そんじゃ、行くぞ!!」

俺はその言葉を皮切りに虚に突っ込んだ、速度に関しては俺の方が虚より速いため速度で翻弄したり神聖滅矢や月牙天衝もどきで攻撃し雨竜のために隙を作る、雨竜も合わせるためか神聖滅矢を放ちタイミングの調整をしていた。

2、3分ほどこのやり取りを繰り返すとタイミングが大体だが分かったため雨竜に目で合図した。

雨竜も今の合図でこちらの意図を察したのか、矢をつがえたまま虚に狙いを定めている。

俺は先ほどと同じように速度で翻弄し神聖滅矢や月牙天衝もどきで攻撃することで注意をこちらに向けさせ雨竜の攻撃に対応することができないようにし攻撃を続けた。

攻撃を捌き続けていた虚だがさすがにあれだけの霊圧を受け続け動きが鈍っていたようだ、動きが一瞬だけ止まった瞬間雨竜の神聖滅矢が崩玉虚刀を弾き飛ばした。

今の雨竜の神聖滅矢で弾けるか不安だったが何とかなったようだ。そしてこの時を待っていた、崩玉虚刀を手放したせいで今まで上昇

した力が根こそぎ抜け落ちたこれなら加減して倒せるので俺は、神聖滅矢を放ちとどめを刺した。

虚を屠ったのはいいがああ崩玉虚刀は回収または破壊しといたほうがいいだろうと崩玉虚刀を探したが何故か見つからないのだ霊圧探知を半径10 km圏内に拡大したのに見つからないということは藍染が回収したな。

とりあえず俺はそのことを置いて雨竜の所に向かった。

一護「ナイスショット」

雨竜「…ふん、君に褒められても嬉しくない。」

と雨竜は言っただけはいるが気恥ずかしさを隠しているのがバレバレである、俺はそれ以上は何も言わないが雨竜を見てニヤニヤした。

雨竜「おい、なんだそのニヤケ面は。」

一護「え？お前をどうやっておちよくってやるか考えているだけだよ。」

雨竜「やっぱりか!!お前ここで倒す!!」

雨竜は滅却十字を媒体に弓を生成し俺に神聖滅矢を放ってきた。

一護「ちよ!!暴力反対!!」

雨竜「問答無用!!」

やれやれ困った相棒ができたようだ。

side???

???'「ふむ、実験は成功か…」

男は先の戦闘でのデータを見ながらそう呟いた。

???'「元々、メタスタシアをぶつけるつもりだったが前回の破面くずれを見て思いついたがなかなかいいものが出てきた、メタスタシアは彼が死神の力を得る時まで残しておこう。」

9話：「なん…だと…」

あの後、雨竜とは悪友のような関係となったため俺は浦原商店に雨竜と来ていた。

雨竜「おい、ホントにここでいいのか？」

一護「大丈夫、大丈夫ここにいるのは実際に来て会っているし雨竜も会ったら分かるから。」

実は俺が死神と滅却師のハーフだと知り雨竜から敵視されたが叶絵さんから諭されて敵意もなくなったが俺が普段どんな修行しているのか興味があつたようでそのこと（おっさん関連はぼやかしつつ）を伝え死神の修業を付けてもらいに行くと言つたらついてきたのだ。

一護「浦原さん、来ましたよ。」

俺は挨拶をし浦原喜助を呼んだのだが

???「おく、来たようじゃの〜」

なぜか初めて聞くのによく聞き知った女性の声が聞こえた。

すると奥から女性が出てきた。

???「お主か喜助が言っておった小童か。」

奥から出てきたのは褐色の美女だった、名は四楓院夜一なのだが何故か黒猫姿ではなかった。

俺は疑問に思つたため質問した。

一護「…誰？」

夜一「なんじゃ、喜助から聞いておらんのか？なら自己紹介というか。」

夜一は素晴らしい自己紹介したのだが俺は転生して以来の衝撃を受けた。

夜一「儂の名は浦原夜一、浦原喜助の妻じゃ。」

誰もが驚いていると思うので皆の気持ちを代弁しよう。

なん…だと…

俺は虚との戦いでも失わなかった冷静さが失うレベルの衝撃を今受けている。

俺がフリーズしていると雨竜が夜一に質問していた。

雨竜「あなたが一護に死神の修業をつけると約束していた死神ですか。」

夜一「そうじゃ、なんじゃおぬしも同じか?」

雨竜「僕は滅却師ですが一護の使う滅却師の技について聞きたかつたんですけど死神の修業があるからそこで見せると言われたんでついてきたんです。…おい!君はいつまで固まっているんだ!!」

雨竜が俺に怒鳴ったおかげでようやく現実を受け入れたが驚天動地過ぎてまだマジで!?!とっている。

落ち着け、冷静になれと自分の感情を制御し落ち着いて夜一に質問した。

一護「浦原さんたちはまだ帰ってこないんですか?」

夜一「うむ、もう少ししたら帰ってくると思うが先に儂らだけで修業を始めるかのう。」

夜一がそう提案したため、俺も頷いたため夜一は俺たちを店の地下にある勉強部屋に連れて行った。

地下とは思えない広さの部屋に俺は啞然としたがすぐに気持ちを切り替え夜一に言った。

一護「あなたは俺になんの修行をつけてくれるんですか?」  
分かつてはいるが念のために聞いておく。

夜一「儂はおぬしに死神の戦闘方法の斬拳走鬼の内拳と走を教える。まあ鬼道も得意ではあるがそれは儂以上の鬼道の使い手がいるのでな、其奴に任せるつもりだ。其奴から鬼道を教えてもらったなら儂が白打の極地を伝授する。」

一護「分かりました。」

雨竜「君の授業内容は分かった。その場合僕に滅却師の技を見せるという約束はどうなっている?」

一護「安心しろ、合間合間で見せるから。」

俺達は準備運動をしながら内容を聞き準備を終えた。

夜一「さて、おぬしは滅却師の歩法を使えるらしいが儂等の修行ではそれは禁止とする。」

一護「そういうことは死神の歩法を先ずは覚えろと?」



夜一「理解が早くて助かる。そうじゃ死神の歩法は瞬歩という、霊圧を使った高速移動じゃ。」

瞬歩はホワイトトから理屈は教えてもらってはいるが直接見せてもらったのは響転ソニックだけだったからようやく全ての歩法を習得できる、そうすればBLEACH小説の産絹彦禰が使った歩法全部乗せができるようになる(ただし斬魄刀と虚の力は封印中なんで修練は精神世界でな)ので早急に習得せねば。

夜一「まあ、理屈としては脚部に霊圧を溜めて踏み込み駆ける瞬間一気に開放することで超加速するのが瞬歩じゃ。瞬発力はあるが慣れとらんと疲れやすいからの、まずは手本として儂が見せる。」

そう言い、夜一は軽くステップを数回刻んでその場から消えた。だが俺の霊圧感知にはしつかりと捉えており原理は理解した、正直言つて響転を捉える方が難しかったため身構えていたがどちらかと言えば原理が難しい方を先に習得していたから簡単に思えてしまうのだろう。

夜一「どうやら、一発で理屈と原理は覚えたようじゃの。」

夜一は俺の様子を見てそう判断した、そういう俺も理解しているため後は再現するだけだ。

俺は脚部に霊圧を溜め踏み込み駆ける瞬間一気に開放した、すると景色を一気に置き去りにして夜一と雨竜が遙か後ろにいるのだが俺は瞬歩の反動で足に負担がかかってその痛みに耐えている、他の歩法は足に負担がかかることが無かったので油断していた、なるほどこれは確かに慣れがいるな。

俺はそう判断し飛廉脚で二人の元まで戻った、二人は俺の飛廉脚を見て質問をしてきた。

雨竜「それが滅却師の歩法か？」

一護「ああ、そうだ飛廉脚って言って滅却師が使う歩法だ。」

夜一「見た感じでは瞬歩の方が速そうじゃがそれはどちらかと言えば長距離高速移動に優れているようじゃの。」

夜一が少ししか見せていないのに飛廉脚の利点を見破って見せた。瞬神の異名は伊達ではないな、歩法に関して右に出る者はいないので

は？

雨竜「それはどんな原理で移動しているんだ？」

雨竜が飛廉脚の原理について聞いてきたんでおっさんから習ったやり方を雨竜に伝えた。

一護「飛廉脚は足元に作った霊子の流れに乗って高速移動する滅却師の歩法だ、要は霊子の足場に乗ってその足場を動かして移動するんだ。」

雨竜は俺の説明を聞いてすぐに飛廉脚の修練に入った、俺も足の痛みが消えるまで飛廉脚の熟練度でも上げようかと思ったが夜一が待ったをかける。

夜一「待て、おぬしは儂と白打の修練じゃ」

だがまだ瞬歩の痛みが残っているので修業にならないといったが夜一は俺の足に手をかざすと特殊な霊圧を放った、すると足の痛みが引いたのだ。

おそらく回道だと思うが念のため聞いておく。

一護「なにそれ？」

夜一「これは回道と言ってな、早い話が回復用の鬼道じゃ。まあ儂のは簡単なことしかできんじやがの。」

やはりか、俺の場合はこれを使えるようになると崩玉と超速再生と合わせた聖文字<sup>シュリフト</sup>The Z o m b i e 顔負けの不死身戦法が可能になるのだ。

そんなことを思っているのだが夜一に質問をした。

一護「それ、俺も使えるのか？」

夜一「回道は鬼道の派生じやおぬしが鬼道をマスターすれば体得できるのやもしれん。」

要は俺次第って事か、そう俺は結論を出しその日は夜一に白打の修練をつけてもらった。

次の日

喜助「いや〜昨日はいなくてすみませんね。」

浦原喜助は笑いながら謝罪する気あんの？の態度で言ってきたが変なこと言ってこっちに火種が飛んでくるのは目に見えているため

黙って謝罪になっていない謝罪を受け取る。

喜助「さてあたしは一護さんに教えるのは剣術っすね、鬼道は鉄裁さんに教えてもらうので。」

剣術はおっさんとホワイトのおかげでそれなりにできるが浦原喜助の剣術は二人のとは違ってテクニカルな方面なため二人とは違った戦術が求められるのだろう。

俺は浦原喜助と剣術の修練、雨竜は飛廉脚の完成度を上げつつ逃げる夜一に神聖滅矢を命中させるといった感じだ。

俺は浦原喜助と対峙して準備を始める、五角形の滅却十字を媒体に精神世界で使った斬魄刀の形状の霊子兵装を生成した。

浦原喜助も仕込み杖を抜き構えたのだが。

喜助「起きろ『紅姫』」

まさかの斬魄刀を解放した。

これにはさすがの俺でも

一護「マジ？」

呆けたようなことをつぶやいてしまった。

喜助「一護さん相手に生半可な修業は意味をなさないからっす。」

さいですか。まあ手を抜かれたら抜かれたで釈然としないからいいか。

喜助「そんじや、行くっすよ。」

素晴らしい浦原喜助は瞬歩で距離を詰め斬撃を放ってきた、俺は落ちて着きながら刀で防ぎながら浦原喜助の剣術を観察、自身にトレースを始める。

5分くらい打ち合いはじめそろそろ修業は次の段階に移行する。

喜助「いやくなかなかやるっすね。」

一護「そりやどうも。」

浦原喜助の世事に軽く返す。

喜助「そろそろ準備運動も終わったところですよ少し力の度合いを上げますよ。」

浦原喜助は瞬歩で距離を開ける。

喜助「啼け紅姫」

浦原喜助はそう言い斬魄刀を振るうと刀から紅い斬撃がこちらに迫ってきた。

俺はすぐさま刀に霊圧を纏わせ刀を強化し受け止めたが思いつきり吹っ飛ばされた。

一護「っ!?!」

斬撃が内包している霊圧的に問題なく防げるはずが空中に投げ出されたため、飛廉脚で空中で体勢を立て直した。

ちなみにまだ瞬歩は負担の問題で死神式の空中に立つ方法は封印中で使えないため飛廉脚は例外的に使用が許可された。

一護（さて、情報を整理するかあの一撃を防ぎきれなかった理由はフルト・ヴァーネアルテリエ動 静 血 装の身体強化が無いのと体重が軽いことだな。）

前者は修業中の禁止事項と後者はこれから補えばいい。

一護（よし原因がわかったところであそこ精神世界で練習してた技をやってみますか。）

俺は刀を構え技を出した。

一護「降り月・連面くだりづき れんめん」

刀を振りかぶり前方に振るい、浦原喜助の頭上から降り注ぐような軌道の複雑かつ無数の三日月の形の刃の神聖滅矢を放つ。

喜助「っ!?!血霞の盾」

浦原喜助は自身の頭上に赤い盾を展開して降り月・連面を防いだ。

まあ、防がれるのは予測はしていたが威力はなかなかあるようで血霞の盾の表面がボロボロになっていた。

喜助「・・・いや〜今のは焦りましたよ。」

一護「割と余裕で防いで何言ってるんだか。」

俺はそう返し再び刀を構えた。

喜助（・・・今のは滅却師の神聖滅矢を応用したものっすね。とかあの技一護さんには特に大技という認識ではないらしいっすね。血霞の盾で感じた霊圧の密度は並の隊長格クラスにも関わらずあの様子ってことは一護さんの霊圧量はあたたしたちでは理解できる範疇を超えていますね。まあだからこそ見てみたいんすけど。）

紅姫を構え、目の前にいる、自身が望んだ誰も見たことのない物を

作るといふ望みを叶えてくれる存在に向けた。

〜1時間後〜

喜助「今日はここまでつすね。」

互いに肩で息をしているがあの後俺は闇月・宵の宮、珠華ノ弄月、厭忌月・銷り、月魄災渦、常世孤月・無間、厄鏡・月映え、月龍輪尾、穿面斬・蘿月、兇変・天満織月、月虹・片割れ月を使い浦原喜助を追い詰めたが流石に未知数の手段と評される圧倒的な手数でこちらの技をあの手この手で防ぎまくり1時間も粘られて時間切れとなつてしまった。

一護「めつちや頑張つて技を覚えたのにまだまだな、流石長い年月生きている死神だな。」

喜助「いや〜それ程でもないつすよ。」

浦原喜助は謙遜してたが俺としてはいつも霊圧のゴリ押しで虚と戦っていたからこういう技巧派な戦いは初めてで新鮮だった。

喜助「さて、あと今日は鉄裁さんから鬼道を教えてもらっただけつすね。」

一護「いやだけつて鬼道つて覚えんのめつちや大変じゃないの?」

喜助「いや〜それは人それぞれつすけど一護さんは問題ないつすよ。」

浦原喜助はそう断言したが内心疑いをかけている。まあ今更か。

そう思っていると神聖滅矢と何かが高速で飛んできた。

一護「うお!?」喜助「なんすか!」

夜一「こらー!!おぬしら!貴様らは加減というものを知らんのか!!」

雨竜「まったくだ!おかげでこつちにも来たから修業を中断する羽目になつたじゃないか!!」

一護「いややるからには全力でやらないと意味ないじゃん!!」

喜助「そうつすよ、ちよくと熱中しただけじゃないつすか。」

夜一「あれのどこがちよつとじやたわけー!!」

雨竜「全力でやるにしろ周りに気を遣えー!!」

その後俺たちは1時間ほど鬼ごっこをする羽目になつた。

鉄裁「ではこれから鬼道について教えます。」

その後、俺は基本的に鬼道を重点的に修業してから他を鍛えるという形になりその間は雨竜を二人が鍛えるという形に落ち着いた。

そして俺は今鉄裁さんから鬼道を教わっている。

鉄裁「死神が自身の霊力や霊圧を用いて使う霊術（呪術）の1つ。

決められた言霊を詠唱した後、術名を言う事によって発動します。

大きく分けて、相手を直接攻撃する「破道<sup>はとう</sup>」と、防御・束縛・伝達等を行う「縛道<sup>ばくどう</sup>」の2種類があります。

それぞれ一番から九十九番にまで及ぶ様々な効果を持った術が多数存在し、数字が大きいもの程に高位かつ強力なものになる。また、高位の縛道の中には束縛だけではなく、その状態からそのまま攻撃に移る事のできる「封殺型」という物も存在します。

死神の戦闘技術では斬魄刀を用いた剣術・戦法に次ぐ重要なものです。」

俺は講師陣が恵まれており基本的に説明がわかりやすいのだ。

鉄裁「今ので分からない所はありましたか？」

一護「いいえ、特にはありません。」

俺がそう言うと鉄裁さんは軽く頷き続きを言った。

鉄裁「次は詠唱技術についてです。」

鬼道の詠唱に関する技術がいくつか存在します。

詠唱破棄

詠唱を唱えずに術名だけで鬼道を放つことができます。

即時攻撃が可能となりますが、威力を維持する事が難しくまた高位の鬼道になる程に難易度は上がります。

後述詠唱

詠唱破棄で鬼道を放った後に、詠唱を追加して術の強化することができます。

二重詠唱

二種類の鬼道の詠唱を並行して行うことで、鬼道の連発を可能とします。

ただし高等技術である為に容易に扱えるものではありません。

ついてきていますか？」

一護「はい、大丈夫です」

俺からすると強くなるのに必要な要素を習得できないなんてあつてはならないので日々の勉強で鍛えた集中力を存分に発揮している。

鉄裁「わかりました、では実際に鬼道を見せます、そのあとに使う方法を教えましょう。」

いよいよ、鬼道を習得できる。

とりあえず、俺たちは地下に行き的那种のようなものがあつたのでそれに向けてやるようだ。

ちなみに雨竜は夜一におちよくられながら飛廉脚で追いながら神聖滅矢を放って追っていた。

鉄裁「ではまず破道の基礎から、『破道の一 衝』」

鉄裁の指から小さな衝撃波が真つすぐ飛んだ。

的に当たった衝撃波が的を粉々にした。

簡素だが極めるとこれくらいはできるといふことなのだろう。

鉄裁「というわけで今日から君には全ての鬼道を詠唱破棄で覚えてもらいます。」

… うん？今この人なんつった？

一護「え？今なんて言つたんですか？」

鉄裁「全ての鬼道を詠唱破棄で覚えてもらうと言つたんです。」

なるほど、どうやら聞き間違いではなかったようだ。

一護「できるわけ無いだろおおおおおおお！！！！」

俺は思いつきりそう叫んだ。

！！！！

鉄裁「いや、喜助さんにそうしてほしいと言われたんです。」

一護「じゃあ浦原喜助と戦争してきます… 野郎ぶつ殺してやらああああああ！！！！」

今の俺の心情はやつへの殺意しかない。

鉄裁「… やはりこうなりましたか、『縛道の一 塞』」

俺の腕は何らかの力で拘束された。

一護「HA☆NA☆SE!!」

俺はそう抗議したら鉄裁さんが魅力的な提案をしてきた。

鉄裁「そういうと思いましたならなおのこと鬼道をマスターして喜助さんを実験体にしたらよいでしょう。」

一護「さて鉄裁さんどうすればいいんですか?」

俺はすぐさま手のひらを返し鉄裁さんに教えを受けた。

鬼道の修業を開始して1時間が経ち破道と縛道を20番台までなら使えるようになった。

鉄裁さんも俺の習得速度は異常らしく滅茶苦茶驚いていた。

そんなこんなで修行を続けて2年が経ち俺と雨竜は11歳になった。

俺は今精神世界に來ている。まあ2年間欠かさずに夜の修行で來ているが今回はギョクの方から來てほしいと呼び出された。理由はあれだろう。

ギョク「ご主人、今のあなたなら五角形クインシークロスの滅却十字を媒体にして完現術フルブリンクの固有能力を発現できます!」

俺は待ちに望んだ完現術の本格的な修行を始める。

ギョク「いつも通りに完現術を五角形の滅却十字に対して使うんです。」

俺はギョクの言う通りに五角形の滅却十字に完現術を行使した。すると五角形の滅却十字から青白い十字の靈子の塊が出現した。

おそらく原作の死神代行消失編の一護が完現術の修行で代行証を媒体とした完現術第一段階の黒い卍のやつに当たるやつだろう。

とりあえず俺はこれを利用して飛び道具として色々使ってみる。

結論、このままでは鬼道や滅却師の能力以下でしかないため、さらなる鍛錬を続ける。

1週間が経過し完現術の修行をしていると能力に変化が見られた。

原作の完現術第二段階の靈子でできた死覇装と右手が黒い刀と融合している状態に当たるものに変化したのだが俺のは色が白でそれに加え靈子でできた白い弓が左手とも融合している。

一護「...これはなんか、ホワイトトッポいな。」

それがそんなことを口にしたら

ギョク「なんで完現術でもあんたの要素が出てくんの!?!」



ホ「知るかよ、なんだ俺の要素が出てきて嫉妬でもしてんのか？」  
ギョク「そうよ！」

ホ「よく堂々といえんな。」

ユ「… 覚悟はいいな。ホワイト」

ホ「なんで、おめーがそつち側なんだよ!? 一護が基本的に使っている力は滅却師のなんだから嫉妬される謂れはないんだからな!」

という風にメゾンドチャン一内で戦争が勃発しました。

なんとか戦争を納めて修行を再開した。

その後更に2週間が経過して能力にさらなる変化が発生した。

死覇装と腕の刀と弓が変化しブレソルの滅却師装備になったのだがなぜだか霊子の弓ではなく死神代行消失編の一護が完現術の修行で代行証を媒体とした完現術の完成形で使った片刃の剣なのだが違いとしては剣の鍔が代行証から五角形の滅却十字に変化しているくらいだ。あと右腰に鞘がついてる。

これで何ができるか、ギョクに聞くととんでもないことが発覚した。

ギョク「その完現術の名は五芒星ソード・オブ・ペンタグラムの外套剣です。まず、剣には今の小剣から長剣に自在に変化できます。」

そう言われ俺は、剣を長剣にするイメージを持ち剣を変化させる。すると刃が30cmくらいだったのが60cmに伸び柄も両手で握れるくらいに伸びたのだ。

ギョク「更にその完現術は自身クインシー・フォルシユテンディッヒが望んだ聖文字を自在に行使できるのと滅却師完聖体を自身クインシー・フォルシユテンディッヒと自身以外の滅却師は習得が可能になる能力です。」

一護「… は？」

俺はギョクが何言ってるのか理解ができなかった。

とりあえず落ち着いてギョクが言ったことを飲み込んだ。

要はアレだろ俺の完現術は身体強化の黒装備一式に小剣と長剣に変化可能な片刃の剣に聖文字全部使えるのと滅却師完聖体を自分と他の滅却師が使えるよねってことか。

はあくやバいな。

いや、人間つていざ最強の力を得ると意外と飲み込めないな。  
冗談抜きで俺はどこを目指してんだろう？

とりあえずは目先の目標は原作のボスたちをなんとかすることだ  
ろう。

そしてさらに完成した完現術を鍛え上げ使い熟せるように鍛錬を  
重ねた。

そしてさらに2年の月日が流れ俺達は13歳になった。

一護「雨竜！そつち行つたぞ！」

俺は逃走した虚<sup>ホロウ</sup>を追いながら相棒に言った。

雨竜「いちいちうるさいよ！一護!!」



俺は浦原喜助に飛竜撃賊震天雷砲、黒棺、千手皎天汰炮、五龍転滅を叩き込んだ。

喜助「いや〜死ぬかと思いましたよ。」

一護「なんか日に日に手数増えてない?」

喜助「気のせいっすよ〜」

嘘だな、真面目に浦原喜助こいつをぶっ飛ばすために能力を鍛えたり原作で出てきた聖文字以外で新しいのを作ったり複数の聖文字を融合したりしているのにあっさり防いだりしているので俺の知らない所でいろいろしているのだろう。

そんなこんなで修業をしているある日の出来事

俺はいつものように浦原商店に行こうと完現術アックセル：加速セルで走っていると

一護「… うん?」

俺の耳に妙な騒々しさを捉えた。

???「おうおう、俺たちのシマで暴れておいて生きて帰れると思ってんのか!」

そこに行くと絵にかいたような不良と学ランを着た朝黒い肌の2mくらいの大男がいた。

不良の方は知らないが大男の方は知っている。

茶渡泰虎、原作でもいた黒崎一護の友人で「チャドの霊圧が…消えた…?」でおなじみのチャドだ、あの程度ならチャドは問題ないけどチャドは自分のために拳は振るわないという誓いがあるため助太刀するか。

一護「よつと」

俺は名も知らない不良を一人瞬時に気絶させると続けざまにもう一人気絶させる。

不良「て、てめえ!何しやがる!」

一護「無抵抗の一人を複数人でボコろうとしているみつともない奴らをボコって何が悪い?」

俺がそう挑発すると不良どもがいつせいに襲ってくるが日々の虚退治や修業の相手と比べれば雑魚もいいところだ。

俺はなるべく大怪我を負わせないように手早く一撃で意識を刈り取り、一人残らず倒した。

制圧し終わるととりあえず他の人の邪魔にならないところにおいて放置した。

そして俺はチャドに話しかけた。

一護「大丈夫か？」

チャド「・・・あ、ああ大丈夫だ。」

とりあえず俺たちは落ち着いた場所で話そうと公園に来た。

一護「俺は黒崎一護だよろしく頼むよ。それでお前は？」

チャド「俺は茶渡泰虎だよろしくな。」

俺たちは互いに自己紹介を済ませ本題に入る。

チャド「なあ、なんで黒崎は俺を助けた？」

一護「特に理由はないけど強いて言うなら俺がお前を助けたかったから？」

原作のキャラだから助けるといふのは虫が良すぎているが俺は実際にチャドを見て助けたいという気持ちが強かったので助けた。

チャド「なんで助けたいと思ったんだ？」

一護「勘かな？」

俺はとぼけた感じでそう言った。

チャド「そうか。」

一護「あとなんとなくシンパシーを感じてな、俺さ生まれつきこの髪色でな、そのせいで学校の連中の大半から不良扱いされていてな結構苦労してんのよ。まあ人付き合いを頑張ったりしてそういつたデマは少なくなっただけども。」

チャド「・・・俺もだな、俺もこの見た目と背のデカさが相まって周りから孤立する羽目になってな。いつもああいう連中に絡まれて大変なんだよ。」

一護「なら返り討ちにすればいいじゃん。茶渡なら余裕だろ？」

チャド「いや、それはしない。俺は自分のために拳を振るわないうて決めているんだ。」

一護「なるほどなそういうことなら無理強いはしない。」

チャド「意外だな、普通なら正当防衛なら大丈夫とかいうのに。」

一護「本人が決めている信念を無理やり曲げさせることは俺はしないんだ。」

チャド「そうか黒崎は優しいんだな。」

一護「よせやい、俺はああいう奴らに暴力をふるうことに躊躇が無い屑の類だよ。」

チャド「だがそれは俺のせいであんなに？普段はしていないんだろ。」

一護「・・・まあ、結果的にそうなたただけで普段もそう大差ないぜ。」

チャド「そうか、それは悪いことをしたな。」

一護「・・・はあ、それじゃあ今度から互いが互いを助けるために拳を振るうつてのはどうだ？」

チャド「なるほどな、それなら助けてくれた恩を返せるな。」

チャドはそう言った。

するとここ3、4年感じなかった気配と結界が張られた。

一護「ツ！チャド！」

俺はチャドが怪我しない程度の力で突き飛ばしながら後ろに跳躍した。

チャド「黒崎!?!」

チャドは驚いたような声を上げたがそれに気をつかう余裕はない。なんせ次の瞬間先ほどまで俺達がいた場所が切り裂かれた。

一護「ここ数年、歯ごたえのある虚ホロウと会えないと嘆いていたが今の時ではないと思うんだよ。」

俺の目の前には崩玉虚刀を携えた人型の虚だった。

かつて、雨竜と共闘したのとは違う個体のようだが最初から全力できているようだ。

そしてなによりだ、纏っている雰囲気か幾戦もの修羅場を潜り抜けた剣豪のものだ。生半可な覚悟で戦うと殺られるな、それにチャドがいるため大規模な術や能力が使えないが、まあなんとかするか。

チャド「く、黒崎・・・な、なんだ・・・あ、あれは」

チャドは震えた声でそう言った。

… まあ無理もない普通虚と会ったらこうなるのが普通だ、むしろ初めてグランドフィッシャーに会った時に躊躇なく突っ込んで尚且つ殺し合いをできた俺がおかしいのだ。

あとなんかチャドにもこの虚が見えているようだ。

一護「あれは虚、簡単に言うが悪霊だ。」

俺はチャドに簡潔にだが虚について教えた。

チャド「あ、悪霊!?なんで悪霊が黒崎を襲うんだ!？」

一護「まあ、ガキの頃から靈感というものが強すぎてね。いつもああいうものを引き寄せてしまうんだよな。」

俺はそう言いながらも虚から視線と意識を外さなかつたいや外せないと言ったほうがいいか。

あの虚はかつて戦った破面もどきと虚刀装備の虚より何十倍も強いのだ、今の制限がある俺では倒しきれそうにないんだよね。そういう訳で雨竜に連絡を入れる。

一護「『縛道の七十七 天挺空羅』」

ちなみに俺の天挺空羅の連絡はこの謎結界の妨害をすり抜けれるんだよね。

すぐに雨竜に繋がり

雨竜『一護か、なんだ虚でも出たのか?』

一護「ああ、しかもあの厄介な刀持ちだ。」

俺の一言で雨竜の雰囲気が変わった。

雨竜『場所はどこだ?すぐに行く。』

一護「いつも雨とジン太と遊んでいる公園だ。」

雨竜『わかった。死ぬなよ、一護。』

一護「わかつている。」

雨竜との連絡を終えると俺は虚に突っ込んだ。まずはチャドをこいつから離す。

まず俺は修業以外で40番台以上の破道の使用を禁じられている、理由はまだ細かな制御ができないので制御ができる30番台の破道しか使用できない。なので俺の使う破道は自然と決定される。

一護 『破道の四 白雷、破道の三十一 赤火砲、破道の三十二 黄火閃、破道の三十三蒼火墜』

俺は右手を向け、人差し指から貫通力のある光線を放ち、親指からは火の玉を、中指から黄色の閃光の霊圧を放ち薬指から蒼い炎を浴びせる。

どれも一撃必殺の威力があるのだが虚は霊圧を込めた崩玉虚刀でひとつ残らず切り裂いた。

マジかよと思いつつも攻撃を物理に切り替えた。

さて、新しく作った聖文字 肉 体の肉體操作による身体強化とその応用力を見せてやる。

俺は両腕から鋭い刀を展開した、お気づきの方もいるのでぶっちゃけるが輝採骨刀である。

俺は瞬歩、完現術：加速、飛廉脚を融合した未完成の歩法で一足で距離を詰め動 静 血 装で全身を強化しこの虚を輝採骨刀で切り裂く、だがこの虚はタダでやられようとせず霊圧を込めた崩玉虚刀で受け止めてみせさらに何度も切りつけたがすべて凌いで見せた。まさか俺の霊圧を込めた輝採骨刀を真っ向から受け止められるとは思わなかった。

一護（どうやら、筋力がこの 状態の俺より上らしいそれに剣術も今なので大体のレベルを把握した、俺と並ぶかちよい上くらいかな？ 霊圧は浦原喜助たちと並ぶかちよい下くらいだ… いやあの刀の特性を考えると実質上か？）

判明した情報だけでもうんざりする、これ雨竜が来ても倒しきれないかわからないぞ、少なくとも俺に並ぶ防御力の盾持ちのタンクがいないと話にならないな。

まあ、普通に考えたらそんな都合主義みたいなこと起こるわけないけれどお生憎様俺の中には俺のことが好きすぎる望みを叶える女神さまがいるから。

とりあえず雨竜がくるまで時間を稼ぐか。

一護 『縛道の六十一 六杖光牢』

俺が普段の虚退治で好んで使う拘束技だ、六つの光の帯状の霊圧で



動きを封じるといふシンプルな技なんだが使いやすいのだ。ただこれだとあの虚は簡単に筋力で破壊してくるだろう、故にさらなる縛道で拘束力を底上げする。

一護『縛道の六十二 百歩欄干、縛道の六十三 鎖条鎖縛、縛道の七十九 九曜縛、縛道の七十三 倒山晶』

真上から棒状の霊圧が降り注ぎ虚を捕らえ、太い鎖を巻きつかせ体の自由を奪い、9つの黒い球で相手を縛りそのうえで逆四角錐状の境界を出現させ虚を閉じ込める。

拘束力を最大限効果を發揮する縛道の組み合わせで虚を閉じ込めたが虚は霊圧で強引に破壊しようとする。

そうはさせまいと俺も全力で抗う、体感時間だと数時間くらいたつたと錯覚したが実際は4〜6分くらいのようなのだがだいたい拘束がポロポロになってしまった。

だがその甲斐があつて待ちに望んだ頼れる相棒が来た。

雨竜『リヒト・レーゲン  
ハイリツヒ・プファイル  
光の雨！』

神聖滅矢の雨がポロポロの拘束もろとも虚を飲み込んだ。

一護「遅かったな、なんかあつたのか？」

雨竜「ここに貼られている结界をこじ開けるのに時間がかかっただけだ。」

どうやら、结界の強度は俺の想定よりかなりのレベルのようだ。

一護「まあ、なにせよ雨竜が来てくれたおかげで少しは何とかなりそうかな？」

雨竜「なんで疑問形なんだ。そもそもあの程度の霊圧の虚なら君ならなんとでもなるだろ。」

一護「いやね、倒せないことはないんだけど強引に倒すところ一休ぶつ飛ばしかねないのよ。」

そもそも倒すだけならさつきと飛竜撃震天雷砲、黒棺、千手咬天汰炮、五龍斬滅などの強力な破道なり全知全能などの概念系の即死能力で潰すなりといういろいろやりようがあるんだが前者は出力の調整がまだ細かくできないから被害を拡大してしまうため、後者はこの状況を見ている藍染に概念系能力をあまり見せたくないか

ら。

一護「…さて泣き言を言ってる暇があるなら最後まで足掻いて無理そうなら強引に倒しますか、そして向こうも準備が終わったらいいし」

俺のその言葉を皮切りに先ほど攻撃を受けたとは思えないほど全快している虚はさつきより霊圧を3倍近くにまで跳ね上げて刀を構えた。

さて俺もそろそろ真面目にやりますか、俺も五角形の滅却十字を媒体に刀を生成し構える。

雨竜も左に霊子兵装銀嶺弧雀、右に魂を切り裂くものに薬指と小指に1本銀筒を挟み準備を完了した。

一護「さて、まずはあいさつ代わりといこうか、『牙突・不知火一閃』！」

長年の研鑽で編み出した技の1つで霹靂一閃と不知火の踏み込みを瞬歩、完現術：加速、飛廉脚を融合した未完成の歩法で行い聖文字

雷 霆 と 暴 風 による風と雷で自身と突きの速度を極限まで上げ刀に聖文字 灼 熱で生成した炎を纏わせ 雷 霆 と

暴 風 の風と雷で火力を底上げしその刀も聖文字 牙と 闘 士で強度を最大限まで強化し肉体も聖文字 闘 士、

暴 力、切り札で強化してこの際に使った聖文字を極 限 を使い最大まで高め刺突を放つ大技である。

風と雷と炎を纏った刀が神速に迫る速さで虚に刺突が迫るのだが虚は霊圧で強化した崩玉虚刀を構え無機質な声で技を放った。

虚「『跋弧跳梁』」

異常な数の血の斬撃で迎撃してきた、技の発動する時間が俺の技に即応するほど速く技の威力と速度を減衰した瞬間真横に跳躍して回避しようとする、俺が使った技が突進系なため横に跳躍して回避というのは当然の対応の仕方だが俺は一人で戦っているわけではない。

雨竜「逃がすか!」

虚が回避しようとした瞬間察知した雨竜が神聖滅矢を10発ほど放った。

俺の攻撃に対応、回避に全力を注いでいた虚はこの攻撃を食らい技が解除されたため俺の『牙突・不知火一閃』が直撃した。

だが技の威力が落ちていたのと回避しようとして変な体勢になったことで決った場所が致命傷にならなかったのだ。

すぐに虚は肉体を再生して切りかかってきた。

俺は刀で受け止めたと同時に足に三日月の形の刃の神聖滅矢を纏わせた足刀を放ち虚を切り裂き決ったのだがやはり即座に再生して罅が明かないな。

即座に俺は作戦会議の時間確保のために俺は拘束力が最高の縛道を使う。

一護「『縛道の九十九禁』！」

虚をベルトと鋏で拘束するがすぐに破壊しようと思えば俺の使う『禁』はそう簡単には壊すことはできない、あの感じだと3分もあれば抜け出すのが3分もあれば十分なため問題ない。

一護「いや強いな」

雨竜「敵を称賛している場合か？この状況を何とかする策はあるんだろうな、ないなら滅却師完聖クインシーフォールシュユテンディッチ体で強引に倒すよ。」

一護「有るんだけどこの状況を打開するには俺に並ぶ防御力の盾持ちのタンクが必要なんだよね。」

雨竜「おい、それどう足掻いても無理な奴だろ、一護と並ぶ防御力とかいくらあの人でもそんな都合のいい奴ここに呼び出せるわけないだろ。」

そんなことを言っているとナイスタイミングとでもいえばいいのか、俺たち以外で俺たちの領域に足を踏み入れる程の霊圧を感知した。

俺と雨竜そして虚までもがそちらに意識を向けた。

そこには右半身が黒い鎧で左半身を白い鎧に変化し鎧と同じ右と左で色が分けた悪魔の要素を加えたヘルムと仮面を装着したチャドの姿があった。

アルマドラ・ネガラ・ヒガンテ  
アルマドラ・ブランカ・デル・ディアブロ  
チャド「… 巨人の黒鎧、悪魔の白鎧」

一護、この力でお前たちを護る。」

sideチャド

その日は俺の一生忘れられない日となった。

いつもみたいに不良に絡まれたがこの日は違った、オレンジ色の髪をした男が不良どもを一網打尽にしてしまった。

そいつはそのあと不良たちを他の人が迷惑にならないように移動させたあと俺に話しかけてきた。

一護「大丈夫か？」

チャド「・・・あ、ああ大丈夫だ。」

そう言ってきた男は俺と落ち着いた場所で話そうと言ってきたため近くの公園に来た。

一護「俺は黒崎一護だよろしく頼むよ。それでお前は？」

チャド「俺は茶渡泰虎だよろしくな。」

俺たちは互いに自己紹介を済ませ本題に入る。

チャド「なあ、なんで黒崎は俺を助けた？」

俺は率直な質問をした。

一護「特に理由はないけど強いて言うなら俺がお前を助けたかったから？」

その答えに疑問を持ったので素直に聞いた。

チャド「なんで助けたいと思ったんだ？」

一護「勘かな？」

黒崎はとぼけた感じでそう言った。

チャド「そうか。」

一護「あとなんとなくシンパシーを感じてな、俺さ生まれつきこの髪色でな、そのせいで学校の連中の大半から不良扱いされていてな結構苦労してんのよ。まあ人付き合いを頑張ったりしてそういったデマは少なくなっただけだよ。」

俺も覚えがあるので共感した。

チャド「・・・俺もだな、俺もこの見た目と背のデカさが相まって周りから孤立する羽目になってな。いつもああいう連中に絡まれて大変なんだよ。」

一護「なら返り討ちにすればいいじゃん。茶渡なら余裕だろ？」

そう言ってきたが俺はそれをしない理由があるから断った。

チャド「いや、それはしない。俺は自分のために拳を振るわないって決めているんだ。」

一護「なるほどなそういうことなら無理強いはしない。」

意外な返しに俺は驚いた。

チャド「意外だな、普通なら正当防衛なら大丈夫とかいうのに。」

一護「本人が決めている信念を無理やり曲げさせることは俺はしないんだ。」

その返しに俺は少しだけだが黒崎の性格を理解できた気がした。

チャド「そうか黒崎は優しいんだな。」

一護「よせやい、俺はああいう奴らに暴力をふるうことに躊躇が無い屑の類だよ。」

屑の類と自虐したが俺はそうは思わない。

チャド「だがそれは俺のせいでそうなったんだろ？普段はしていないんだろ。」

一護「・・・まあ、結果的にそうなたただけで普段もそう大差ないぜ。」

チャド「そうか、それは悪いことをしたな。」

一護「・・・はあ、それじゃあ今度から互いが互いを助けるために拳を振るうつてのはどうだ？」

一護がそう俺と約束してきた。

俺は黒崎とその約束を交わした。

チャド「なるほどな、それなら助けてくれた恩を返せるな。」

一護「ツ！チャド！」

黒崎は俺を怪我しない程度の力で突き飛ばしながら後ろに跳躍した。

チャド「黒崎!?!」

俺は驚いたような声を上げたが黒崎は気をつかう余裕はない。

なんせ次の瞬間先ほどまで俺達がいた場所が切り裂かれた。

一護「ここ数年、<sup>ホロウ</sup>菌ごたえのある虚と会えないと嘆いていたが今この時ではないと思うんだよ。」

黒崎は目の前にいる刀を携えた化け物に対してそう呟いた。

チャド「く、黒崎… な、なんだ… あ、あれは」

俺は震えた声でそう言った。

なんせ死を感じさせる存在に恐怖を感じない方がおかしいが黒崎はそんな風には見えないため何か知っていると恐れ押し殺して何とか黒崎に聞いた。

一護「あれは虚、簡単に言うと思霊だ。」

黒崎は簡潔にだが化け物について教えてくれた。

チャド「あ、悪霊!?なんで悪霊が黒崎を襲うんだ!？」

俺は驚いたがそれ以上に悪霊が黒崎に襲い掛かる理由がわからなかった。

一護「まあ、ガキの頃から靈感というものが強すぎてね。いつもああいうものを引き寄せてしまうんだよな。」

黒崎は飄々と言っているが俺はそんなこと言っている暇はないはずと思っていると一護が妙なことをし始めた。

一護「『縛道の七十七 天挺空羅』」

一護が何やら呟いた。

一護「ああ、しかもあの厄介な刀持ちだ。」

一護「いつも雨うるとジン太と遊んでいる公園だ。」

一護「わかってる。」

まるで知り合いに連絡をしているかのようだが携帯電話を持っていないのだ。

電話?が終わったと思うと黒崎が化け物に向かって右手を向けた。

一護「『破道の四 白雷びやくらい、破道の三十一 赤火砲しやつかほう、破道の三十二

黄火閃おうかせん、破道の三十三 蒼火墜そうかつい』」

黒崎は右手を向けなにかを呟くと、人差し指から貫通力のある光線を放ち、親指からは火の玉を、中指から黄色の閃光の霊圧を放ち薬指から蒼い炎を化け物に浴びせる。

だが化け物は刀でひとつ残らず切り裂いてみせた。

それを見た黒崎は両腕から刀を展開して異常な速度で接近した。

俺には理解できない速度で振るわれた両腕の刀の連撃を化け物は

簡単にさばいて見せた。

一護 「『縛道の六十一 六杖光牢』」

黒崎はまた何やら呟くと、六つの帯状の光が化け物の動きを封じたが黒崎はこれでは駄目だと思っただのか更なる追撃をかける。

一護 「『縛道の六十二 百歩欄干、縛道の六十三 鎖条鎖縛、縛道の

七十九 九曜縛、縛道の七十三 倒山晶』」

拘束された化け物の真上から大量の棒が降り注ぎ化け物を捕らえ、太い光の鎖を巻きつかせ体の自由を奪い、9つの黒い球で相手を縛りそのうえで逆四角錐状の結界を出現させ化け物を閉じ込めた。

化け物はその拘束を力で破壊しようとしたが黒崎は全力で抗った、ほんの僅かな時間で拘束がボロボロにされてしまったが黒崎に悲壮感はなかった。理由は明白だった。

雨竜 「『光の雨！』」

いきなり現れた眼鏡をかけた男が光の矢の雨を放ち拘束もろとも化け物を消し飛ばした。

一護 「遅かったな、なんかあったのか？」

雨竜 「ここに貼られている結界をこじ開けるのに時間がかかっただけだ。」

どうやら、黒崎の知り合いのようだ。

一護 「まあ、なににせよ雨竜が来てくれたおかげで少しは何とかなりそうかな？」

雨竜 「なんで疑問形なんだ。そもそもあの程度の霊圧の虚なら君ならなんとでもなるだろ。」

一護 「いやね、倒せないことはないんだけど強引に倒すところ一帯ぶっ飛ばしかねないのよ。」

一護 「… さて泣き言を言ってる暇があるなら最後まで足掻いて無理そうなら強引に倒しますか、そして向こうも準備が終わったらいいし」

そしてあの光の矢の雨を受けてなお無傷にいる化け物に俺は無力感を感じた。

チャド（俺はなんでこんなに弱いんだ… さっき約束したのにその

約束すらはたせないのか?)

俺は自分の無力さを呪った。

すると俺の耳に奇妙な声が聞こえ周りの時間が止まった。

??? 『力が欲しいですか?』

チャド「な、なんだ!？」

俺は空耳かと思つて聞き返した。

??? 『力が欲しいですかと聞いているんです。』

聞き間違えではないとばかりに女性の声が聞こえてきた。

チャド「ああ、欲しい黒崎を助ける力を約束をはたすための力が欲しい!!」

俺は今望んでいるものを声に出した。

??? 「ですがあなたは力を得ると途方もない試練が立ちふさがり続けるでしょう。それでもなお力を望みますか?」

謎の声が俺を心配しているが俺はもう決めている。

チャド「それがどうした!俺は一護を助ける、そう約束したんだ!!」

??? 「わかりました、では覚醒に必要な修行をしてもらいます。心配はいりません修行しているときは現実では数分しか経ちませんから」

謎の声がそういうと俺は上下の感覚が不安定のビルが連なる不思議な世界にいた。

??? 「さてでは修行を開始しましょう。」

先ほどの女性の声が聞こえた。

そこには天上の美とはこういうことかと言えるほどの美しい女性  
がいた。

??? 「聞いていますか!」

チャド「: ツ!すみません奇妙なことが起こり過ぎて呆けていま  
した。」

??? 「まあ、無理もないと思いますよ。 ご主人 みたいな人そうそうい  
ませんからね。」

チャド「■■■■?。」

女性の言ったことは発音自体は理解できるがなんて言っているの  
かわからなかった。



??? 「すみません、私にとって不都合なことは聞こえなくさせていただきます。」

チャド「そ、そうですか。」

??? 「さて、私は力が欲しいかと問いましたがあなたがあなたはすでに力を既に持っています。私はそれを引き出すお手伝いをするだけです。」

突然、女性は俺にすでに力が宿っているとやってきた。

チャド「お、俺にすでに力が!?でも今までそんなことなかったぞ。」

??? 「まあ、その力に関してあなたは何も知らないから無理もないですよ。」

??? 「とりあえずここでは師匠と呼んでください。茶渡。」

チャド「分かりました、師匠。」

こうして俺は強くなるための修行を開始した。

師匠はまず俺の力について説明を始めた。

??? 「あなたに眠る力は<sup>フルブリング</sup>完現術と言わせるものでその力を持つ人間は<sup>フルブリング</sup>完現術者と呼ばれます。」

チャド「…完現術、完現術者」

俺は師匠に言われた自分に眠る力と自分のような存在がどのような呼称で呼ばれているか知った。

??? 「あなたが助けたいと願ったく、黒崎一護も完現術者で、ですよ…。」

何故か黒崎のことを呼ぶのに歯を食いしばって言った。

チャド「黒崎が俺と同じ存在だとわかりましたが何故そんなに歯を食いしばっているんです?」

??? 「…いえお気になさらず(だって必要とは言えご主人のこと呼び捨てにしないととか嫌ですよ!!)」

チャド「そ、そうですか。」

??? 「脱線したんで説明の続きといきます。完現術は物質に宿った魂を引き出し、使役する能力です。」

師匠は簡単にかつ分かりやすい説明を始めた。

??? 「この世界はどのような物にも魂が宿るとされます。そして、使い慣れた道具を使用するときいつもの自分より高い能力を発揮する

ことができると感じるのは、その道具に宿る魂を理解したということです。

物質に宿る魂には元来「使い手を補助する性質」というのがあり、それを自らの魂で大きな力と化し、それをを用いることで物質を操ったり、身の回りの物を補助として使うことで自らの身体機能以上の能力を発揮することができます。

例えば、「アスファルトの魂」の助けを受けて高速移動をしたり、「酒の魂」の助けを受けてグラスから口に飛び込ませたり、足を支えさせて水面に立つこともできます。

使い慣れたもの、愛着のあるものであれば物質の形や性質そのものを変化させ、武器にすることができたり、それを媒体に固有能力を発揮することがあります。どちらかといえば固有能力を指して完現術と呼ぶことの方が多いかも知れませんが。

師匠がわかりやすく説明をしてくれたが俺はあまり理解できなかった。

チャド「すみません、説明はわかりやすかったですけどどううまく理解できないんです。」

???「…まあ、普通魂がどうか言われてすぐに完現術を使えるのなんて<sup>ご主人</sup>くらいですから。」

師匠も理解してくれたがまたも謎の単語を言った。

???「まあ、習うより慣れよって言いますからね。実践で覚えてもらうとしますね、まず魂を感じ取るのですがあなたは先ほど<sup>ホロ</sup>虚と会ったのでその時の感覚を基に魂を感じてもらいます。」

女性は何もない虚空から水の入ったグラスを出した。

チャド「これも完現術ですか？」

???「いえこれは私の固有能力ですよ。」

チャド「何かを生み出す能力か？」

???「いえそれとは別の能力です。」

チャド「そうですか。」

???「四の五の言っていないでさっさと始めてください!!」

チャド「は、はい！」

俺はグラスに意識を向けさっきの化け物から感じた気配をグラスから感じ取ろうと精神を研ぎ澄ませた。

修業を開始して1か月が経過した。

この不思議な世界にきて1か月が経過した、外の世界はまだ1〜2分しか経過していないらしい。

修行の経過だがようやく周りの魂を感じ取れるようになり干渉することができるようになった。

「???」  
「???」  
「ようやく及第点に到達しましたか。これで次に進めますね…:」  
「主」  
「は聞いてすぐに覚えたため油断していましたよ。」

チャド「わかりましたよ師匠。」

師匠は何か呟いたがようやく次に進める。

「???」  
「次は完現術の高速移動技の完現術：加速と飛行を行うための完現術：飛行を覚えてもらいます。」

チャド「わかりました。」

「???」  
「完現術：加速と完現術：飛行の二つは完現術の説明の時に言った「アスファルトの魂」の助けを受けて高速移動をしたり、足元を支えさせて水面に立つことを発展させてありとあらゆるものを足場にしたりその足場を利用して高速移動するのが第2段階の修行です。」

チャド「わかりました。」

俺はこの1か月で体得した完現術の基礎で足元の魂に干渉して自らの力としてより大きな力として走ったが上手くいかなかった。

走った瞬間に爆発的な力を感じたがすぐに霧散してしまった。

チャド「ツ!!」

「???」  
「どうやら今日はここまでですね。」

師匠はいきなりそう言ってきた。

チャド「ま、待ってくれ師匠！俺はまだやれる!!」

俺は師匠にそう言ったが

「???」  
「いいえ、今のあなたは覚醒させた完現術の使用で魂を大きく疲弊しています。これ以上疲弊させると魂が崩壊して廃人になりますよ?。」

師匠がそう言ってきたため俺は素直に聞かざるを得なかった。

チャド「・・・はい、分かりました。」

???「素直でよろしい、ここなら時間はたっぷりあるんで焦らないでください。」

師匠は優しくそう言ったため俺は冷静に休むことにした。

修行を開始してさらに2か月が経過した。

俺は完現術の基礎を徹底的に鍛えなおすことで完現術を使う際の感覚を魂に馴染ませることで魂にかかる負担を軽減する修行を行えと師匠に言われたことで完現術：加速と完現術：飛行の二つを体得することができた。

???「ようやく、最低限のスタートラインに立つ資格を得られるようになりましたね。」

チャド「ありがとうございます！師匠!!」

???「油断しないでください、あなたはまだあの虚から最低限逃げられるようになっただけです。今回からあなたの固有能力を発現するための修行に入ります！」

俺は待ちに望んだ修行に入る。

チャド「はい！師匠!!」

???「まず固有能力が使えるようになるためには完現術の基礎を徹底的に鍛えないといけません。何故だかわかりますか？」

チャド「はい！力を完全に引き出すには魂の力を最大限引き出さないといけないためそして強大な魂の力に耐えるためです！」

???「その通りです。何事も基礎がしっかりしていないと積み上げたものが簡単に崩れ去ってしまいますからね。これからもこの魂の錬成はしっかりと続けるのですよ。」

チャド「はい！」

???「おっと、話がそれましたね、通常の完現術と固有能力を行使する完現術の違いは完現術を使う対象が自身の思い入れがあるものかそうでないかの違いです。自身が思い入れのあるものや愛着があるものであれがあるほど自身と永くあった物ほど自身の力に馴染むのでその人固有の能力が発現するのです。」

チャド「なるほど、なら俺はこの肌に思い入れがあるので自分の肌に完現術を使うと?」

???「Yes、その通りです。理解できたなら修業を開始してください。」

師匠がそう言ったため俺は早速修行を開始した。

自身の誇りでもある浅黒い肌に対して完現術を使うと肌が変化したのだがすぐに元の状態に戻ってしまった。

チャド(うまくいかないが何事も最初は失敗してしまうのが世の常だ※、なら根気よく行くしかない。)

※どこぞのバグは理屈と原理がわかると秒で習得しますがあれは基本的に例外です。

俺は更に鍛錬を重ねることで2か月後に右腕の完全な変化を維持できた。

チャド「やりました!師匠!」

???「よく右腕の変化を維持できるようになりましたね。あとはその変化を呼吸をするように無意識で変化させ、意識せずに維持できれば合格ですがそれではまだ足りません。」

チャド「それはどういうことですか、師匠。」

???「それは簡単です。肌は全身にあるのですから」

師匠の言葉に俺は納得しそして己を恥じた、師匠は今の俺をあの化け物から逃げる力しかないと言っていたのに最低限の力を使えるようになっただけで調子に乗っていたのだ。

チャド(まったくこれでよく約束をはたすと言えたもんだな。)

俺は内心で自虐したがそれを見抜いた師匠が言ってきた。

???「そう自分を卑下にしないでください。逆転の発想です、まだまだ成長を残していると思えば鍛錬のし甲斐があるってものです。」

師匠にそう諭され俺は更に鍛錬を重ねた。

更に鍛錬を重ねて俺は右腕の黒腕の力を引き出した。

???「その状態が巨人ブロン・ネクロ・ヒガンテの黒腕黒腕といい守護の力が使えます。」

師匠に言われたそ発現できるように右腕に対して発現できるように鍛錬を重ねた。次は左腕に対して発現できるように鍛錬を重ねた。

右腕の覚醒が完了したことで左腕の発現もそう時間は経たなかったのだが

チャド「あの師匠これ…」

???「あくこれですかこれはあなたの完現術の力ですよ。これは逆に攻撃の力が宿っているのですよ。」

そう左腕の変化は完了したのだが右腕とは違って白い上に悪魔のような禍々しさがあるのだ。

???「この白い腕の名は悪魔ブラッ・ブランコ・デル・ディアブロの白腕と言います。」

チャド（白の色合いで悪魔の腕とは皮肉が効いているな。）

俺は鍛錬を重ね右半身が黒い鎧で左半身を白い鎧に変化し鎧と同じ右と左で色が分けた悪魔の要素を加えた騎士のヘルムと仮面発現できるようになった。

???「ようやく全身に発現できるようになりましたね。では次が最後の修行です。その力を右左自由に入れ替えられるようになりましょう。そうすれば最後の試練に挑めます。」

師匠の言葉に俺は気を引き締める、最後の修行と試練を乗り越えれば一護と一護の知り合いの助けになれるのだ。

チャド（待っていてくれ一護！）

俺は鍛錬を重ねる傍らでこの力を最大限生かす戦い方を模索していた。

チャド（師匠と体術の訓練もしているがその中でボクシングと空手が俺と相性が良かった）

基本的にはボクシングの戦い方をメインに空手の戦い方を融合して霊圧をそこに取り入れることが俺の目指す戦闘方法になりそうだ。）

俺は集中して気づいていなかったが師匠がその時俺を見て微笑んでいた。

???（何というかご主人や彼はすぐに何でもできるようになってしましますから弟子を鍛えるってこんな感じになるのでしょうか。）

この世界にきて3年が経ちようやく力を細かく入れ替えることができるようになった。

チャド「ようやく、師匠が出した修行内容を完遂しました！本当にありがとうございました！」

???「ええ、よく辛く厳しい修行に耐えきり乗り越えました。少なくともここに来た時の情けないあなたとは見違えるような面構えですよ。」

チャド「ありがとうございます。」

???「ただしここでの最後の試練は生半可な覚悟では突破できません。あなたには最後の試練を乗り越える覚悟がありますか？」

チャド「あります！そのためここに来たんです!!」

???「…いいでしょう。なら最後の試練を始めます、試練の内容は彼と戦って彼を認めさせることです。」

チャド「…認めさせる？」

師匠が妙な言い方をしたが試練の相手を見てそんなことはぶっ飛んだ。

???「出番ですよ、ホワイト」

???『ようやくか待ちくたびれたぜ。』

チャド「なっ!?!」

ホワイトと呼ばれたものが現れたがその姿を見て驚愕した。なんせその姿は白と黒を入れ替えた一護なのだった。

ホワイト「よお、てめえか俺と戦うってのは？」

チャド「…なんで一護の姿をしているんだ虚」

ホワイト「へえ一発でワかんのか、少しはできるっぽいな。」

チャド「…俺の質問に答えろ。」

俺の声に怒気が混じっているがそれはいたしかないだろう。

ホワイト「それに関してはギョクに聞けよ。」

チャド「ギョク？」

聞きなれない名に俺は虚に返した。

ホワイト「そこにいる女の名だよ。」

チャド「師匠の？」

俺は師匠のほうを向いた。

???↓ギョク「…なんでいうのよホワイト。」

すると師匠は俺と接していた時とは打って変わったしやべり方を  
する。

ギョク「簡単よ……く、黒崎一護と同じ姿なのは彼が暴走したと  
きにその拳で止められるかどうか知るために彼の姿の虚にしたの  
よ。」

チャド「なっ!?俺が一護に拳を振るう!?師匠は何を言ってるんだ!」  
ギョク「……彼があなたに交わした約束にはそれも含まれているか  
らよ。」

チャド「ツ!」

ホワイト「ようやく理解したようだな、よくそんな覚悟で約束をは  
たすなんて言えたな。」

虚が呆れ果てた様な声で俺にそう言った。

チャド（一護は俺に自分を止めてくれると信じてあの約束をしたの  
か。なのに俺は…… ツ!!）

俺は何度も不甲斐ないと思ったことは1度や2度ではないがそれ  
でも友との約束を吐き違えていたなんて情けない。

だがここで一つ疑問に思ったことが出てきた。

チャド「なあ、師匠に虚なんで俺たちが交わした約束や一護の約束  
に含まれていることを理解しているんだ?」

ホワイト「簡単なことだ俺たちがあいつ一護の中に秘める力の一部だか  
らだよ。」

ギョク「ホワイト!!」

チャド「秘める力の一部?一護は完現術者だと聞いているが。」

俺は師匠からそう聞かされたが。

ホワイト「……ギョク必要なことはちゃんと言っとけて」

虚が疲れ果てた様な声で師匠にそう言った。

ギョク「……いやだつてご主人のこと知って嫌悪や悪意を抱かれる  
のは嫌なんですよ。」

師匠が一護のことを妙な言い方をした。

チャド「……ご主人?一護のことか?」

俺は師匠にそう聞いた。



ギョク「… ええ、そうですよ。黒崎一護は私達のご主人なんですよ。」

師匠はため息を吐いて観念して言った。

ギョク「先に言っておきますけどご主人は私たちの力を全て使えます。」

チャド「師匠たちの力？」

ギョク「ええ、そもそも私たちはご主人に宿った力が具現化した存在なんです。どちらかと言えばご主人の力の一部を私たちが使えるといった方が正しいのでしょうか。」

まずご主人の力については他言は無用ですよ。」

チャド「分かりました。師匠。」

俺は頷くと師匠は一護の力について説明した。

ギョク「まず、ご主人には死神、滅却師、虚、完現術の力が宿っています。これらの力を全て使えるのは過去から今に至るまでご主人以外に存在しません。」

チャド「死神に滅却師？」

俺は聞きなれない単語に疑問符を浮かべた。

ギョク「死神については後で説明しますので先に滅却師について説明します。」

師匠はそう言い滅却師についてわかりやすく簡単に説明した。

ギョク「滅却師とは虚と闘うために集まった霊力を持つ人間の集団のことをいいます。ある事情で200年前にその数を大きく減らして滅却師の血を引いているのはご主人とご主人の母と妹方にご主人のはとこの石田家しかいないのですよ。」

すると先ほどの一護の知り合いと思わしき眼鏡をかけた男を映した。

なるほど一護と同じような存在なのか。

ギョク「どうやら理解したようですね。次に死神と私の力について説明します。」

死神とはこの世界の天国に当たる「尸魂界」に存在している生命体です。

死神の役割は「整」<sup>プラス</sup>（所謂普通の幽霊）の回収やその後始末が仕事で虚とはそんな頻度で戦っているわけではないんです。

もちろん戦闘に秀でた死神もいますがそんなに数は多くありません。

さて死神について簡単に説明しました。

次に私の力について説明します。よろしいですか？」

師匠は死神の説明を終えると纏っている気配を変えた。

その気配はこれから説明したことで俺の感情次第でここでの出来事を無かつたことにするぞとでもいうべき気配に変えた。

ギョク「どうやら理解できたようなので説明します。」

俺は気を引き締めた。

ギョク「私が秘める力それは望んだことが現実具現化する能力です。」

チャド「ツ!？」

俺はそれを聞いた瞬間電流が走った。

チャド（そんな強大な力がもし周りに知られたら碌なことにならないのは日の目を見るより明らかだ。）

俺はその力がもたらす不幸がすぐに分かった。

そしてそれは師匠に丸わかりだった。

ギョク「分かりましたか？私とご主人の力を理解しましたか？これでああなたがご主人に不幸をもたらそうとするのなら私はあなたからここでの体験とご主人に関する記録を消去しなければなりません。」

師匠は冷たく無機質に俺に宣告した。

チャド「… 師匠あなたの懸念は理解できますけどあなたは少し俺のことを見くびり過ぎますよ。」

ギョク「なんですか？」

今だ冷たい感情を解かない師匠に俺は堂々と言う

チャド「俺は何が何でも友の心を傷つけることは決してしない!!」  
俺ははつきりとそう言い切った。

心を読んだであろう師匠もようやく先ほどまでの師匠に戻った。  
ギョク「… はあ、よかつた〜これでご主人に悪意が向いたらどう

しようかと思いましたがよ。」

「どうやらなれないことをしていたようだ。」

ギョク「さてこれで試練は終了ですよ。」

師匠はいきなりそう言った。

チャド「え!?!でも俺はあの虚と戦っていませんよ。」

ギョク「いえ、ホワイトとこうなるようにと事前に打ち合わせして

いたんですよ。」

チャド「そ、そうだったんですか。」

ギョク「さて、無駄話はこれくらいにして茶渡これからあなたを現実に戻らせますのでその力でご主人の盾となり助けになってください。」

師匠にそう言われ俺は言った。

チャド「師匠、俺は約束をはたすためにあなたの期待に必ず応えて見せます。」

ギョク「ええ、では行つてきなさい。」

チャド「はい!」

俺は奇妙な感覚になり意識が曖昧になったと思うと先ほどまでいた公園にいた。

一護『縛道の九十九 禁』!」

一護が虚を拘束している。先ほど使った拘束のコンボ技ではなく単体で上回っているようだ。

一護「いや強いな」

雨竜「敵を称賛している場合か?この状況を何とかする策はあるんだろうな、ないなら滅却師完聖体クインシーフォールシユテンディツヒで強引に倒すよ。」

一護「有るんだけどこの状況を打開するには俺に並ぶ防御力の盾持ちのタンクが必要なんだよね。」

雨竜「おい、それどう足掻いても無理な奴だろ、一護と並ぶ防御力とかいくらあの人でもそんな都合のいい奴ここに呼び出せるわけないだろ。」

「どうやらこの状況を打開するには俺の力がいるようだ。」

俺はすぐに全身に完現術を発動する。爆発的な霊圧が俺から放た

れ一護たちが俺に意識を向けた。

チヤド「…アルマドラ・ネクラ・ヒガンテ 巨人の黒鎧、アルマドラ・ブランカ・デル・デアアプロ 悪魔の白鎧

一護、この力でお前たちを護る。」

sideギョク

ギョク「行きましたか、頑張ってください茶渡、あなたは雨竜のようにご主人を孤独にしない可能性があるのでですよ。」

ホワイト「えらく気に入っているんだな。」

するとホワイトがこちらに来た。

ギョク「それはそうよ、ご主人に同性の自分を理解してくれる友達ができる機会を捨てるわけにはいかないわよ。」

ホワイトはなに言っているのかと思っていたが次言ったセリフにキレた。

ホワイト「そうかよ、てつきりあの茶渡つてやつに惚れたのかと思っただけ、修行中も熱い視線を送っていたし」

ギョク「…はあ？ ホワイトあんた何言っているの？いくら何でも言っつていいことと悪いことがあるでしょ？ 私が愛しているのはご主人だけよ。」

殺気を隠すことなくホワイトにそう言った。だがホワイトはどこ吹く風だ。

ホワイト「オお、怖い怖い。という訳で俺は撤収させてもらうぜ」  
ホワイトはそう言いどこかへ消えていった。

ギョク「…はあ、今度ご主人が来た時に思いつきりあまえしよう  
!!」

私はそう心に決める。

side一護

チヤド「…アルマドラ・ネクラ・ヒガンテ 巨人の黒鎧、アルマドラ・ブランカ・デル・デアアプロ 悪魔の白鎧

一護、この力でお前たちを護る。」

右半身が黒い鎧で左半身を白い鎧に変化し鎧と同じ右と左で色が分けた悪魔の要素を加えたヘルムと仮面を装着したチヤドはそう言った。

チヤドの完現術を見て俺が思ったのはこれだ

なんか仮面ライダーWみたいだな。

というわけだ、いや何言ってるの？と思うが実際見てカッコいいんだもん!!

俺がそんな阿呆なこと考えていると雨竜が警戒しながら聞いてきた。

雨竜「・・・なんだあれは？」

一護「あいつは茶渡泰虎さつきでできた俺の友達だ。」

雨竜「大丈夫か？」

雨竜が疑惑の眼差しをチャドに向けるがそれに関しては心配はない。

一護「大丈夫、大丈夫さつきまでギョクが相手していたから。」

雨竜「なるほどなギョクさんの試練に乗り越えるのなら心配はいらないな。」

チャド「一護と石田、俺にも手伝わせてくれ。」

チャドは覚悟を決めた声で俺たちに言ってきた。

一護「分かった。お前の完成した完現術の力を存分に奮ってくれ。」

雨竜「一応言っておくが一護は人使いが荒いから少しでも死の危険を感じ取ったら逃げるんだよ。」

チャド「分かった、任せてくれ。石田、俺は死ぬ気はないから安心してしろ。」

一護「さてまだ拘束が残っている間に作戦を決めておくか、チャドお前がああ虚を抑え込んでいる間に俺と雨竜が火力のある技で仕留めるのはどうかな。」

チャド「まだ俺は虚との戦闘のセオリーは理解していないからそれでいい。」

雨竜「言って早々人使いが荒いが茶渡が良いなら僕は何も言わないよ。」

一護「さて向こうも終わったところだし始めますか。」

俺のその言葉を皮切りに虚は拘束を破った。

一護「チャド！雨竜！手筈通りにいくぞ！」

チャド「おう！」 雨竜「分かってる！」

チャドは完現術：加速で虚に接近し右の巨人の黒腕の盾を構え、  
左の悪魔の白腕で超高速のジャブを何十発と叩き込んだ。

虚は刀で最小限の動作でその超高速のジャブを捌き切った。

だが俺はチャドの胴体をブラインドにして瞬時に虚の背後を取った。

すぐに刀を構え俺は瞬時に技を繰り出す。

一護「『牙突零式・絶空』!」

上半身のバネのみで放つ牙突に刀に万物貫通で強化した牙突で虚を貫くが危機を察知されギリギリで回避した、だがそのおかげで刀を持った腕を吹っ飛ばしたのだが何故か虚の霊圧が減少しないのだ。

一護(おそらくこの崩玉虚刀は完成またはそれに近いのだろう。だから弱体化しないのだろう。だがこれで技は出せないし再生もしないだろう。)「雨竜! チャド! 今ならやつは再生しない! 畳みかけるぞ!」

雨竜「分かった!」チャド「おう!」

すぐさま俺は刀を振るい三日月の形の刃の神聖滅矢を飛ばし雨竜は

雨竜「絶対貫通の矢・光の雨!」

万物貫通を付与した神聖滅矢の雨を虚に叩き込んだ。

虚に直撃し息も絶え絶えの虚にとどめを刺させる。

一護「行け! チャド!」

チャド「任せろ!!」

チャドは完現術：加速で距離を詰め右腕を悪魔の白腕に切り替え霊圧を溜めた。

そしてその拳を虚に叩き込んだ。

チャド「『魔人の一撃』」

シンプルな一撃だが確実に虚を倒したようだ。

そして例の如く刀は消失している。

だが今日はこれ以上は何もいらないうらう。

一護「ラストアタックを決めた感想はどうだ?」

チャド「それは一護が譲ってくれたんだろう? ホントは一護がとど

めを刺せたんだろ？」

一護「ばれた？」

雨竜「それはそうだろ、君の力を知っているのならわざとだと分かるからな。」

チャド「一護は俺に自信をつけさせてくれたんだろ。ありがとう」

一護「そいつはよかったよ。今日はもう疲れたから浦原商店で雨とジン太の相手をしよう。」

雨竜「まあ、チャドも加わればジン太の相手は問題ないだろう。雨は一護が相手すればいいからね。」

一護「雨竜、お前わかってて言ってるよな。」

チャド「誰だそれ？」

雨竜「雨は一護の許嫁なんだ。」

チャド「許嫁!?!」

一護「俺は認めてないんだよな。」

俺たちはそう言いあいながら浦原商店に行った。

side???

???「…うむ今回も実験は成功だ、虚刀も完成し安定的に量産可能までに到達した。」

???「嬉しそうやなく隊長。」

???「ようやく虚刀の量産まで入ったんだ、嬉しくもなるさ。」

そう虚刀完成までに多くの失敗と挫折があったがそれを乗り越えようやく完成品ができそれを量産可能にまでこぎつけたのだ。

???「これほどの結果を出せるようになった、彼らにはいずれ礼をしなければならぬね。」

黒幕たちは笑みを浮かべその時を待つ。

11話：「準備は終わったか？」

俺たちは浦原商店に行く途中で互いについて話し合いながら向かっていった。

雨竜「なるほど、君の力はまだ完全には目覚め切ってないんだね。」  
チャド「ああ、師匠曰く『実戦経験を積んでいけばいずれ目覚める力なのでこれからも鍛錬は欠かさずに』とのことだ。」

一護「まっ！今は心強い盾が出来たんだ。現状はそれでいいだろう、あともうじき着くぞ。」

そうこう言っているうちに浦原商店が見えてきた、俺らのような特殊な事情が無い限りは子供くらいしかいないが今日は俺らと同じくらいの年の女が客としてきているようだ。

チャド「あそこか？」

一護「そうそう、あの店。」

雨竜「そうだよ、あの店で僕たちは修行とかしているんだ。」

チャドと一緒に俺たちは浦原商店に来ている。

チャド「なるほどな、あの店番をしている俺たちと同じくらいの年の女の子が一護の許嫁なのか。」

一護・雨竜「：：。うん？同じくらいの年の店番？：」

俺と雨竜は顔を見合わせると女の子はこちらに向いた。

???:「：：。あ！一護さん！」

女は俺の存在に気が付くところちらに走ってきた。

一護「：：。誰？」

俺は素直にそう言った。

???:「：：。え」

女はショックを受けたように固まった。

とりあえず俺は女の容姿を観察し記憶にある知り合いの女に照らし合わせる。

一護（肩より長めの黒髪でこの女の顔立ちでこの声は：：。雨か？）  
だが雨はもつと幼いはずなのだがとりあえず恐る恐るといった感じで聞いてみるか。



一護「・・・雨か？」

俺がそう言うのと雨？がパアツとした表情で俺に抱き着いてきた。

雨？「一護さん、やっぱり覚えていたんじゃないですか。」

一護（ああ、こんな感じで抱き着いてくるのは雨だな。）

俺は抱き着いてきた感覚と感触で雨と断定すると雨を引きはがして

一護「雨落ち着け、とりあえず店で話をしよう。新しい仲間とかの話もしたいし。」

雨「・・・はい、分かりました。」

雨はシュンとしているがこんな往来のある場所で女に抱き着かれるとか羞恥以外の何物でもないのだ。

俺たちは店に入つて最初にしたことそれは

喜助「・・・あのくなんでアタシは正座させられているのでしょうか。」

一護「・・・あ？なんか言ったか？」

喜助「ヴェツ、マリモ！」

俺は浦原喜助のみに殺気をぶつけて正座させていた。いやいきなりだなと思うが雨が異常成長する要因なんてこの馬鹿が何かした以外に存在しないのだ。

一護「・・・何か言い残すことはあるか？」

喜助「ちよつと！弁解の余地すらないすんか!？」

一護「じゃあ、聞くが何の理由で雨を成長させた？」

喜助「え！そんなの一護さんの学校に同じ年で雨を編入させていちやらぶ学校生活させるつもりで・・・あ。」

一護「判決を言い渡す・・・死だ。」

喜助「ウワアアアアアアアアアア!!」

とりあえずこの馬鹿をシバキ終わると俺は雨の相手をしチャドと雨竜は互いの能力を共有している。

雨竜「ということは茶渡の能力は近距離パワー型になるということか。」

チャド「そういう石田は遠距離で最も力を発揮するのか。」

雨竜「ああ、近距離で戦えなくはないが茶渡や一護と比べると劣っていると感じているよ。」

チャド「まあ、基本この三人でのチーム戦で戦うから咄嗟の時に近接戦ができるだけで十分だと思うが。」

雨竜「まあ、それもそうだがもう少し剣術や剣技も鍛えるか。」

二人がそう分析していたので俺も混ざる。

一護「あと、ここに防御や回復技持ちのサポーターと法術を得意とする奴がいるとバランスがさらに良くなるんだよな。」

雨竜「ああ、確かに一護は縛道に回道、僕も滅却師の回復術や霊術があるがやはり専門的に回復や補助ができる人がいると心強いし鬼道や霊術使いがいるとなおいいね。」

チャド「俺の防御結界は強力だが広範囲かつ自分を中心に発動するタイプだから細かく防御できる奴がいるのはいいな。」

とりあえず方針を決めたところで仲間集めは後々やればいいのでこのあとどうするか話し合う。

一護「このあとどうする?」

雨竜「君は雨とデートすればいいと思うが?」

一護「ぶっ飛ばすぞ?」

雨「一護さんは私とデートは嫌なんですか? (涙目ウルウル)」

一護「いや... そういう訳ではないよ。」

チャド「俺としては現実で完現術を使うのはさっきの戦いが最初だから現実で馴染ませておきたいんだが...」

喜助「それだったら此処の地下室でやればいいっすよ。」

いつの間にか復活していた阿呆がそう言った。

一護「その阿呆喜助の言う通り此処の地下室でなら被害を気にする必要ないから案内するよ。」

雨がぷくくと頬を膨らませるが俺は逃げるようにチャドを地下室に案内した。

俺たちは地下室に来てそれを見たチャドは

チャド「... すごいな。」

一護「まあ、ここなら広いし広範囲の技を使っても特に問題ないし

修行時間も時玉ときだまで時間延ばせばいいし。」

チャド「時玉？」

チャドは俺が言った時玉のことを聞いてきた。話を聞いていた喜助が

喜助「時玉というのはですね、私と一護さんの合作の品でしてね、この地下空間と外界の時間をずらして修行時間を確保できる優れたもので、それでいて外に出るときにここに入る前までの状態に戻りますけど修行で得た力や研鑽や記憶などは失われない安心設計なんですよ。」

と嬉々として時玉の説明をした。

まあ、この男は好奇心でとんでもないことをやらかすが基本的に科  
学者としては優秀なんで物作りを教わったりしたりこうした合作を  
作ったりするのだ。

他にも夜一さんの専用装備を作ったり俺と雨竜の戦闘用の服や装  
備を調整したりするのに知恵も借りたりもあるのでシバくにしても  
ある程度は手加減している。

チャド「それはすごいな、ちなみにどれくらいのズレなんだ？」

喜助「外で1時間経過すると時玉の空間だと1日過ぎるんすよ。」

チャド「なるほどな。」

チャドが説明を聞き終えたのを確認すると

一護「よしチャドの慣らしがてらに俺と模擬戦といこう！」

俺はそう言った。

雨竜・喜助「「ッ!？」」

チャド「わかてて『待てっ!!』一護「どうした二人とも？」

雨竜「一護それは僕たちも参加確定なのか？」

喜助「あたしたちは参加する理由はないですよ？」

二人は何言ってるんだ？

一護「何言ってるんだ二人とも？チャドはまだ戦闘に慣れてないんだから二人が補助すんのは当たり前前だろ？」

雨竜・喜助「「……………」」

二人は何かを悟ったような顔をして互いに顔を見合わせた。

チャド「ど、どうしたんだ二人とも？」

雨竜・喜助「「いやちよつと覚悟を決めたただだ（です）。」」

チャド「そ、そうか」

一護「何やってんだ？早く準備しろ。」

俺は準備運動を始めながら3人に言った。

雨竜「・・・やるしかないか。」喜助「・・・ですね。」チャド「そ、そんなに覚悟を決めるほどのことか？」

チャドは困惑しながら二人に聞いた。

雨竜「・・・そうか君は知らないんだな、一護は模擬戦だと制限がないから容赦なく僕たちを潰しに来るから。」

喜助「・・・ええ、ちよつとでも気を抜いたり油断しますと一瞬で地獄が見えますよ？」

チャド「制限？地獄？二人は何言っているんだ？」

雨竜「ああ、一護は普段の虚退治で一定以上の火力の技や能力の使用を禁止されているんだ。」

喜助「そうしないと彼の強大な力で周りの被害が甚大なことになりますからね。」

チャド「一護の力が強大なのは知っているが何故地獄を見るんだ？」

喜助「簡単なことです、模擬戦はここで行われるんです。被害が出ることなんて滅多に無いんで彼も制限なく暴れられてしまうんです。」

チャド「そ、そうなのか。」

雨竜「さてこうなった以上何が何でも生き残らないといけないな。君も一護との模擬戦の最中は自分の命を守ることのみに集中しろ。一護との戦いに他人を庇う余裕も暇も無いからね。」

チャド「一護って魔王か何かなのか？」

喜助「魔王ですか、言িয়েて妙っすね。」

一護「準備は終わったか？」

俺は完現術のブレソル滅却師の黒装備一式を身に纏った。片手には五角形の滅却十字の鍰の片刃の長剣が握られている。

雨竜「さて、死に行く準備はできたか？」

雨竜は左に銀嶺ぎんれいこじやく弧雀、右に魂を切り裂くものを持ち構えた。

喜助「さつきと言ってること逆ですけど気持ちにはわかりませう。」

浦原喜助も紅姫を開放し構える。

チャド「…二人は何度も一護と戦っているからそのヤバさを知っているが俺はまだわからない。だが逃げるつもりはない！」

チャドも全身の浅黒い皮膚に完現術を行使し全身を鎧に変化させた。

巨人アルマドラ・ネクラ・ヒガンテの黒鎧、悪魔アルマドラ・ブランカ・デル・ディアブロの白鎧。

チャドが精神世界で死に物狂いで手に入れた力だ。

一護「準備はいいようだな、じゃあ開戦といこうか？『破道の九十

九 五龍ごりゆうてんめつ転滅』！」

大地の霊脈から霊圧を引き出し巨大な龍を複数出現させて攻撃するのが本来の五龍転滅だが俺の場合は自身の霊圧で代用可能なのだ。

巨大な龍が3人を飲み込むが雨竜は聖域ザンクトツツヴィンガー礼賛で範囲を絞ることで他2人を巻き込まないようにして防ぎ、喜助は血霞の盾を全方位に貼ることで防いだ、かつてよりも強度が桁外れになっており、俺の単体で放つ五龍転滅クラスでも突破は困難なのだ。チャドも巨人の黒鎧の範囲結界を展開し防ごうとするが結界が数秒間持ち堪えたが破壊され飲み込まれたが鎧の防御力と持ち前の耐久力で耐えて見せた。

一護「さすがだな。」

雨竜「普通は嫌味になるけど君の場合は素直な賞賛だから余計腹が立つんだけど。」

一護「賞賛は素直に受け取るべきだぞ？」

喜助「あたしたちには受け取る余裕はないんですよね。」

チャド「…はあ、はあ、ふ、二人が言っただことをようやく理解したよ。」

俺は素直に賞賛したが何故か2人はそんなことを言う、あとチャドは何を言っている？

一護「さて、次は接近戦といこうか？」

俺はそう言った瞬間、動ブルート・ヴィーネアルテリエ静血装で強化し瞬歩、完現術アーク：加速セル、

飛廉脚を融合した未完成の歩法で雨竜に接近し、長剣で切りかかる。  
雨竜も聖文字シュリフト the Thunderbolt 雷 霆 で神経の電気信号を雷で出力することで動体視力と反応速度を極限まで上昇させて魂を切り裂くもので防ぎ、銀嶺弧雀から神聖滅矢ハイリツヒ・ブファイナルを放ってきたが俺も聖文字雷霆で上げた動体視力と反応速度で瞬時に神聖滅矢への対応をした。俺は動静血装に聖文字the metal the violence the joker 闘 士、 暴 力、 切り札を融合して肉体を強化し暴 風の風の鎧で防いだが浦原喜助が瞬歩で俺の背後を取り血の刃を纏った紅姫で袈裟切りを放ってきたが俺は完全反立でチャドと入れ替えて回避した。

チャド「ツ!？」

チャドは一瞬驚愕したが即座に巨人の黒腕の盾に靈圧を込めて紅姫を受け止めた。浦原喜助とチャドの動きが止まった瞬間に俺は技を放った。

一護「『常世孤月・無間・絶』』」

一振りで縦方向に無数の斬撃を乱れ撃ちして敵を細切れにする絶技。それに聖文字the absolute end 絶 対 切 断 による絶対切断を付与した防御不能の広範囲技だ。

この攻撃は防げないと理解している浦原喜助と雨竜は即座に瞬歩と飛廉脚で回避しているがチャドは咄嗟に防御してしまっている。

無数の斬撃がチャドを飲み込む瞬間に雨竜が

雨竜「『完全反立』!!』」

俺が先ほどやったチャドと自分を入れ替えて相手同士討ちさせる使い方を応用して俺とチャドを入れ替えたのだ。

だが俺は入れ替わった瞬間に空間転移で自分を転移させて回避した。

距離ができたため互いに言葉を発した。

開幕一番に雨竜が

雨竜「おい！一護いくら何でもまだ君の技や能力を知らない茶渡に『常世孤月・無間・絶』はやり過ぎだ!!』」

一護「『…え？そうか?』」

喜助「そうですよ！この模擬戦はあくまでもチャドさんが戦闘に慣

れてもらうという趣旨でやってるんですから!!」

一護「・・・あ、忘れてた。」

雨竜・喜助「おい!!」

一護「ごめんチャドもう少しレベル落とすわ。」

チャド「・・・いや、今のレベルで頼む。」

二人「!!?」

一護「うん? いいの?」

チャド「少なくともこの状態の一護相手に戦えるレベルにならないければ話にならないからな。」

一護「いや、俺は別にいいんだけど二人はそれでいいの?」

雨竜「・・・はあ、なんだかんだ言って君も一護の仲間ってことか。」

おい雨竜、それどういう意味だ?

喜助「こうなったらあたしたちも満足いくまでやらないといけないじゃないですか。」

浦原喜助もそっくり構えた。

なら決まりだな。

そういう訳で今日は気が済むまで模擬戦を続けた後に解散となった。

ちなみに何故か雨が俺の家に泊まりに来た。

## 12話：「無理です」

side 織姫

お兄ちゃんが死んだ。

いじめっ子1「アハハ！何その髪色キモっ！その髪短くすれば少しはマシになるんじゃない？」

いじめっ子2「それいいじゃん！サツサと切ってやるからおとなしくしな！」

髪の色が理由で私はいじめられ髪をぎっくり切られてしまった。お兄ちゃんがきれいって言ってくれた髪なのに…

昊「織姫、どうしたんだ？その髪？」

織姫「ええつと…イメチェン？」

昊「本当に大丈夫か？」

織姫「大丈夫だから!!」

お兄ちゃんに心配されないように髪を切りそろえたのだがお兄ちゃんはおかしいと分かって心配しているのは分かっていたけど私は反発してしまった。

その日、私はお兄ちゃんとケンカしてしまいすれ違いを起こしてしまい仲直りをすることもできないまま帰らない人になってしまった。

私はまだお兄ちゃんが死んだということを飲み込めないまま生活をしていた。

意気消沈しながら生活しているある日

織姫「きやあ!!」

私は川に突き飛ばされてしまった。

いじめっ子1「アハハ！あんたどんくさかったから突き飛ばしちゃったけどごめんね？」

いじめっ子2「うわ！何その胸デカすぎっ！」

不良1「おいおいお前らが言ってた女ってこいつか？ずいぶんいい女じゃねえか！」

不良2「あの野郎にボコられて以来鬱憤が溜まって仕方なかったんだよな！」



私をいじめめる人達以外にも不良らしき人達もいる。醜い欲望を隠そうともせず私の体を舐め回すように見てくる。

どうしようもない状況だけど私はせめてもの抵抗で最後までにらみつける。

不良1「…おい！なんだその目は！このじよ　??？」何見つともねえことしているんだ？」ぶべら!!」

私に手を出そうとした不良の人はオレンジ色の髪の人に殴り飛ばされました。

side 一護

今日は腐れ縁と阿呆の陰謀で雨とデートする羽目になったので待ち合わせの場所まで行こうとしていたが俺の耳にムカつく笑い声が聞こえてきた。

とりあえず、そこへ目で見える範囲まで行くと複数の女と男が派手な髪の女（…いや俺も人のことは言えないけど）を囲んで苛めていた。苛められている女はどこかで見たことあるような感じだったが俺はとりあえず不良どもをぶちのめすことにした。

不良1「…おい！なんだその目は！このじよ」一護「何見つともねえことしているんだ？」不良1「ぶべら!!」

「「「しげちー!!」「「「「

しげちーと呼ばれた男を見たがこいつこの前チャドと会った時にぶちのめした不良の一人じゃね？

不良2「て、てめえはあの時の!？」女の不良「っ!?!こいつが!？」

一護「なんだ？俺にボコられたから女を襲うとかみつともなさの極致だな？お前ら？」

俺が盛大に煽ると不良どもは面白いように煽りにのった。

不良2「だ、だまれえええええ!!お前らやつちまえ!!」

不良ども「「「「死ねえええええええ!!」「「「「

不良どもが一斉に襲い掛かってくるが結局は!この前の焼き直しにしかならず不良どもの意識を一撃で刈り取り気絶させた。

さてあとはこの女達だな。

俺は拳をポキポキ鳴らしながら歩いていくと女達はみつともなく

命乞いを始めた。

女不良1「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!!わ、私たちは関係ないじゃない!」

女不良2「そ、そうよ。それにあんたにその女助ける理由ないじゃない!!!」

と言ってきたので理由を作る。…俺の見た目的にこの理由が一番違和感がないのでは?この女には申し訳ないが後で弁解するか。

一護「理由?俺の女に手を出しといて何言っているんだ?」

苛められている女「え!」

苛められている女は驚いた声を上げる、すまないこの状況だとこの理由が一番違和感がないんだ。

女不良達は女の驚いている声に気づいていない、なんせ恐怖に縛られてそれどころの話じゃない。

女不良1「ヒィィ!」

女不良2「お、お願い許してっ!」

俺は少しお灸をすえる意味で殺気を手加減して不良女達にぶつけた。

一護「もう二度とこんなことをしないと誓え、そうすれば許してやる。」

俺は少し冷たく低音の声で淡々とそう言った。すると女不良達は泣いて許しを乞うた。

女不良1「ごめんなさい!!もう二度としません!!!」

女不良2「許してください!!お願いします!!」

一護「俺ではなく女に謝れよ?」

俺がそう言うのと女不良達は先ほどまで苛めてた女に命乞いするレベルで謝っていた。

女は自分をいじめてた女達の謝罪を受け取って許していた。

俺はその間男の不良達を他人の迷惑にならないように端っこに移動させていた。

移動し終わり女不良達はもうどこかに行ったので苛められてた女に先ほどの弁解をする。

一護「先ほどは俺の女に手を出してとか言ってますま…な…いい!？」

俺は今更ながら女の格好がとんでもないことに気づいた。

女「気にしないでください…え!？」

俺は上着を女に被せた。

一護「女がそんな恰好のままにいるな、はしたない。」

なんせ、女の服が水で透けて胸に張り付いてブラが見えているのだ。

俺は阿呆浦原喜助のやらかして雨うるのこういう恰好を見慣れているのですぐに対応できたがこれは劇物が過ぎる。

女「え?あ、あ、あ、あ(ぶしゅー)」

女は処理落ちして頭から煙を出した。

俺は問題が発生したため今日は行けないことを雨てんていくうらに天挺空羅で連絡した。

1〜2分後、女はようやく落ち着いたので互いに自己紹介した。

一護「ようやく自己紹介できるな、俺は黒崎一護だよろしくな。」

女「は、はい私は井上織姫って言いますよろしくお願いします。」

女の名前を聞いて俺は目を見開いた。

一護(…え?井上織姫?それってヒロインの?もしそうならなにヒロインの好感度上げイベントこなしてんの俺?)

元々異物である俺がハーレムを作るとかあってはならないので俺としては雨とも付き合う機など毛頭ないため何が何でもこれ以上のフラグを立てる気はないが女をびしょ濡れのまま放置するのもどうかと思うので家に電話して連れていく。

一護「とりあえず、そのままだと風邪をひくから家でシャワー浴びていけ。」

織姫「え?!いや良いですよ、これくらいなら大丈夫ですよ…ハックシユン」

一護「ほら見ろ、早く体温めないと風邪ひくから俺んちに行くぞ。」

俺は井上の手を強引に引っ張って家に連れていく。

俺は家に井上を連れて行ってシャワーを浴びてもらっている間、母

と妹たちに正座させられている。

いやなんでも思ったが、母達に聞くと

真咲「だつて雨あめちゃんつて許嫁がいるのに他の女の子を家に連れ込むバカ息子を叱つて何が悪いのかしら？」

一護「許嫁の件に関しては俺は認めてませんからね。」

花梨「一にい、そろそろ往生際が悪いよ？早く雨ねえのこと認めた方がいいよ？」

遊子「そうだよ！早く雨お姉ちゃんのこと認めてよ!!」

一護「無理です。」

俺達はいつもの平行線のやり取りをした。

真咲「でもあの子を連れてきたつてことは彼女つて事？」

一護「違います、ずぶ濡れだったんで連れてきただけです。」

俺は聖文字 the emotions 感情の感情操作で感情を荒立てないようにしながら淡々と答える。

花梨「じゃあ体が目的つて事?... 一にいサイテー」

遊子「お兄ちゃん！不純だよ!!」

一護「どうしてそう話が飛躍する？」

何故か花梨は俺が井上の体目的で連れてきたと思ひ込んで冷ややかな視線を向けてきて遊子は何を思ったのか顔を真っ赤にしながら俺に抗議した。

織姫「お風呂呂ありがとうございます... え!? 黒崎君が正座させられている!？」

真咲「それはよかつたわ。正座に関してはちよくとお説教していただけだから。」

織姫「そ、そうですか。」

俺としては理不尽なのだがと思つたが  
ぐうううううううくくくくく

と誰かの腹の虫が盛大に鳴った。

織姫「す、すみません。まだご飯食べていなくて。」

真咲「いいのよ、それよりご家族に連絡を入れないと」

一護（あつ！母さん、井上にその話題は禁句だ！）

俺は内心でそう思ったが時既に遅かった。

井上は涙を流してしまった。

真咲「ど、どうしたの!? 一護にここに来るまでに何かされていたの!?」

一護「いや、どう見ても母さんの言ったことが原因でしょ。」

俺は冷静に突っ込んだ。

織姫「す、すみません。家族が… 兄しかいな… くてそ… の兄が死んでしま… って一人… 暮らしを… してい… て… それ… で…」

井上は泣きながらとぎれとぎれで言葉を紡いだ。

真咲「ごめんね！織姫ちゃん!! 知らなかったとはいえ織姫ちゃんの触れちゃいけないことに触れてしまっ!!」

母さんはそう言い井上に謝罪しながら井上を抱きしめた。

織姫が泣き止むまで母は織姫を抱きしめていた。

（30分後）

織姫「す、すみません！みつともないところをお見せして。」

真咲「良いのよ、私が織姫ちゃんのことよく知らずに地雷を踏んじやったのがいけなかったんだから。」

母は織姫にそう言いながら織姫の頭を撫でていた。

一護「そろそろ腹減ってきたから飯にしようぜ。」

しんみりとした空気をぶち壊すべく俺は食事することを提案する。

花梨「一にい空気読んで… って空気読んだから言ったのか。」

遊子「お兄ちゃんって空気読むの得意だよね。」

一護（おい、妹たちよそれどういう意味だ。）

俺は妹たちの言葉にそう思ったが口には出さない。

真咲「そうねそろそろご飯にしましょう。織姫ちゃんも食べていきなさい。」

織姫「え！いいんですか？」

一護「井上、お前まだ服乾いてないんだから食ってけよ。」

そもそも井上は衣類の問題で家に戻るに戻れないのだ。

織姫「… あっ、じゃあお言葉に甘えさせていただきます。」

そうして俺たちは昼飯を食うことにした。

ちなみに昼飯は豚の生姜焼きと味噌汁とサラダと白飯だった。

午後6時頃

織姫「きよ、今日はどうもありがとうございます！」

真咲「いいのよ、またいつでも家に来なさい。」

花梨「姫ねえ、また遊びに来て!!」

遊子「姫お姉ちゃん、いつでもきて!!」

妹たちは井上に数時間しかいなかったが雨と同じくらい懐いていた。

真咲「一護、織姫ちゃんを家まで送っていきなさい。」

一護「分かったよ。井上、家まで送ってくから場所を教えてください。」

織姫「う、うんわかったよ。」

俺は井上の案内に沿って送っていく。

送っていく道中俺と井上は黙って歩いているが正直言つて気まずいのだ。

一護(なんか話した方がいいと思うが何しやべればいいのかわからない。)

雨とは真逆と言つていい井上相手だと何の話題が良いのかわからないのだ。

とりあえず、いきなり家に連れて行ったことは詫びよう。

一護「ごめんな、いきなり家に連れてって。」

織姫「・・・え!?大丈夫だよ、おかげで風邪を引かずに済んだし」

一護「そうか、母さんたちの言つてた通り偶にいいから家に来て妹たちの相手をしてやってくれ。」

織姫「う、うんわかったよ。」

井上は顔を赤らめて言つた。

織姫「ね、ねえ黒崎君は普段何しているの?」

一護「普段?」

井上は奇妙なことを聞いてきた。

織姫「え、えくと黒崎君のことは噂でよく聞いているんだけどよく分からないことが多くてどれが真実かわからないんだよね。」

噂ね、気になったので詳しく聞いてみた。

一護「噂って何なん？」

織姫「えくとね、なんかね黒崎君が刀と銃で化け物を倒したりとかクノイチとんでもない速度で追いかけてっこしたりとか」

一護「……………」

俺は内心で思ったことはこれだ。

一護（それ全部真実じゃん。どこで情報が流出したのかは知らんがどうしよう。）

俺はどう誤魔化そうか考えているとよく知った結界を感知した。

一護（ツ!?今この瞬間ではないだろ!!）

俺は悪態をつきながらも普段は抑え込んでいる戦闘用の感覚に切り替える。

五感の内味覚以外が異常に上昇し感覚が鋭くなる。

一護（くそっ!この感じがイヤだから抑え込んでいるってゆうのに）

俺はそんなことを思いながらも雨竜たちに連絡を入れる。

一護「『縛道の七十七 天挺空羅』（ボソツ）」

天挺空羅を井上に聞かれると面倒になるので小声で使った。

すぐに雨竜・チャド・雨に繋がった。ちなみに俺の使う天挺空羅の連絡はチャドの時の反省を生かし思念通話方式で連絡できるようにした。

雨竜（一護かこんな時間についてことは虚退治か?）

一護（ああ、しかもあの結界が張られた。）

チャド（わかったすぐに行く。）

雨（場所はどこですか?）

一護（ああ、場所はな。）

俺は3人に場所を伝えようと天挺空羅を解除した。

敵の奇襲に対応するために極限まで感覚を研ぎ澄ます。

敵は現れたのだが今回のはどうもいつものとは違って4足歩行だったのだがいつもの崩玉虚刀の気配を体内から観測できる。

一護（クソツ!!これじゃいつもの手が使えない!）

いつも俺たちがやっている虚刀を離してから瞬殺する手段が使えない。

織姫「く、黒…崎…君」

井上は恐怖でとぎれとぎれで俺の名を呼ぶ。

さて、このまま放置するわけにはいかないというよりも結界で3人がくるまで時間は少なく見積もっても15分くらいなので俺、一人で仕留めないといけないのだ。

さて覚悟を決めるか、ここで女一人守れないようでは底が知れているな。

俺は井上を左腕のみでお姫様抱っこして右手に五角形の滅却十字を媒体にして銀色のデザートイーグル型の銃を生成し完現術でブレスル滅却師の黒装備を身に纏った。

織姫「え!?!」

井上は驚いた声を上げるがそんなことに気を遣う余裕はない。

俺は完現術：飛行と完現術：加速で一気に上空へ跳躍した。

織姫「え!?!く、黒崎…君!」

一護「舌噛むから黙ってる!!」

乱暴な口調になってしまったが緊急時なため許してほしい。

織姫もわかったのか黙って頷いた。

俺は結界内で開けた場所へ瞬間移動と見まがうスピードでそこへ移動したのだが何故かまたあの公園だった。

一護（またかよ!もう運命的な何かを感じるぞ!!）

内心で愚痴を入れるが結界を張ってそこに織姫を降ろす。

織姫「く、黒崎君あ、あれ何!?!どうして黒崎君の姿が変わって銃までもって空を飛んだり瞬間移動までできるの!?!」

織姫は切羽詰まった声で俺に聞いてくる。

一護「あれは虚、簡単に言うとお悪霊であいつらは俺を狙っている。」俺は簡潔に虚のこととあいつらの狙いを言った。

織姫「あ、悪霊!?!なんで黒崎君を狙うの!?!」

チャドと同じことを言っているが普通はそれが当たり前の反応だからな。



一護「俺はガキの頃から靈感というものが強すぎてね、いつもああいう連中や事件に巻き込まれていてな。」

そう言った瞬間に狼虚が来た。

一護「・・・はあ、戦るか。」

俺はため息をつきながら戦闘態勢に入るが井上がコートの裾を掴んでいる。

一護「ごめん、すぐに戻るから離してくれ。」

織姫「く、黒崎君・・・」

俺は井上にそつと優しく言いながら離させる。

狼虚と対峙した俺は右に刀の神聖滅矢を左手に銃を構えた。

その瞬間俺の背後から虚や石田たちと比べると7割ほどの霊圧を感知した。

とりあえず刀から三日月型の神聖滅矢を銃から普通のエネルギー弾型の神聖滅矢を各10発ずつ放って狼虚を牽制しながら背後を確認した。

すると、背後には6人の精霊が井上の周りに出現していた。

織姫「一護君、私も戦うよ。」

井上は自信に満ちた表情と声でそう言った。

side 織姫

その日のことを私は一生忘れないだろう。

苛められた私を助けてくれた黒崎君を最初怖い人と思っていたけど話してみるとそんなに悪い人だはないと分かったんだけど

織姫（ブラ見られちゃったよ、は、恥ずかしいよ〜（顔真っ赤））

私は恥ずかしさのあまり少し間固まってしまった、落ち着いた私を黒崎君は風邪引くから家に来てシャワーを浴びて行けと言われたんだけどど流石にそこまですてもらおう訳にはいかないと断ったんだけど体が冷えていたためくしゃみが出てしまい黒崎君は私の手をつかんで強引に家まで連れて行った。

黒崎君の家で黒崎君のご家族の方に事情を説明してお風呂をお借りしてシャワーを浴びてお風呂から出てリビングで私が見た光景は黒崎君が正座させられている光景だった。

黒崎君のお母さんは説教しているだけだからと言っていたけども…

そんなこと吹っ飛ぶくらいに私のお腹が鳴ったため恥ずかしいと思ったのだが黒崎君のお母さんが私の家族に連絡するといったのを聞いた瞬間に私はどうしようもなく泣いてしまい黒崎君のお母さんが聞いてきた私は何とか答えると黒崎君のお母さんが謝りながら抱きしめて慰めてくれた。

30分くらい泣いたあとようやく涙が止まり私はみつともないところを見せてしまったけど黒崎くんのお母さんは私の頭を撫でながら許してくれた。

しみりとした空気になってしまったけど黒崎君がお昼ごはんにしようと言ってくれたおかげでしみりとした空気を壊してくれただけで私まで一緒と言ってきたから断ろうかと思っていたんだけど黒崎君と一緒に食べようと言って私もお昼ごはんを食べた。

久しぶりと思える誰かと一緒にご飯を食べたためまた泣いてしまい黒崎君達が慰めてくれた。

その日は夕方まで黒崎君家にて花梨ちゃんや遊子ちゃん達と遊んだりしてようやく服も乾き、帰宅しようとしたんだけど黒崎君のお母さんが黒崎君を家まで送って言ってほしいと言っていた。そして私は黒崎君と一緒に私の家まで一緒に来ることになった。

途中まで黙って歩いているのだがすごい気まずいのだ、だって生まれて今まで交流のある異性の中で兄以外ここまで関わったことはないのだから話したらいいのかわからないのだ。

どうしようかと思っていたのだが黒崎君がいきなり自分を家に連れてったことを謝罪してきた。

今更ながらホントに強引だったけどそのおかげで家族のぬくもりを味わわせてくれたから全然気にしていいのでそんなことはなあって黒崎君に言った。

そして黒崎君が

一護「そうか、母さんたちの言ってた通り偶にいいから家に来て妹たちの相手をしてやってくれ。」

黒崎君は意識せずに微笑みながらそう言った。

その言葉を聞いて私は黒崎君に抱いている感情を理解した。

織姫（ああ、私黒崎君に恋しているんだ。助けてもらって、家の人たちに少し優しくしてもらったくらいで恋するなんて私ってちよろいな〜。）

そう思っても恋をしてしまったんだから仕方ない、むしろ心地いいくらいなのだ。

とりあえず私は黒崎君の言ったことに関して不自然にならないように答えたあと、黒崎君のことを聞いた。

織姫「え、え〜と黒崎君のことは噂でよく聞いているんだけどよく分からないことが多くてどれが真実かわからないんだよね。」

私は噂でいろいろ聞いているんだけどどれも信憑性に欠けるんだよね。

曰く鎧の巨人と格闘したとか曰く狂気のマッドサイエンティストの陰謀と戦っているとか曰く親戚の子が墮落ちしてマッドサイエンティストと結託してその陰謀に巻き込まれているとか。

一護「噂って何なん？」

黒崎君が聞いてきたので先ほど以外ので自分が聞いたのを言った。

織姫「え〜とね、なんか黒崎君が刀と銃で化け物を倒したりとかクノイチとんでもない速度で追いかけてっこしたりとか」

私がそう言うとなぜか黒崎君は思案顔になった。

え、ホントについて思ったけどいきなり仮面を付けた狼のような存在が現れたら死を錯覚するような気配が体を包んで異常に震え始めたと思ったら黒崎君は平然としていたのでなんとか声を出し黒崎君の名を呼んだ。

そうしたら震えが止まった、理由は黒崎君が私を抱きかかえたのでしがみつく様に抱き着いた。

そしたら黒崎君がいきなり拳銃を構え着ていた服が黒いコートに変化した。

私は驚いたけど黒崎君はそんなことを気にすることなく空中に飛んで静止した、また私は驚いたて声を上げたんだけど声を荒げて黙

れって言ってきたんで素直に黙ったけどすぐに公園に瞬間移動してさらに魔法の結界の出現までして私はどう表現したらいいかどうかどうしたらいいのかわからなくなっちゃった。

黒崎君に色々聞いたんだけど

一護「あれは虚、簡単に言うんですけど悪霊であいつらは俺を狙っている。」  
彼が言ったことが理解できなかった。

織姫「あ、悪霊!?なんで黒崎君を狙うの!？」

私は理解できずに叫んでしまった。

一護「俺はガキの頃から靈感というものが強すぎてね、いつもああいう連中や事件に巻き込まれていてな。」

黒崎君がそう言った瞬間にあのお化けが来た。

一護「・・・はあ、戦るか。」

黒崎君はため息をつきながら行こうとしたので私はコートの裾を掴んだ。

一護「ごめん、すぐに戻るから離してくれ。」

織姫「く、黒崎君・・・」

黒崎君は優しくそう言い手を離させて青白い光でできた刀を右手に先ほどから持つてる銃を左に構えた。

その光景を私はただ結界の中で黙って観ているだけだった。

織姫（なん・・・で私はまた・・・何もできな・・・いの？）

心の中で悲鳴を上げてても己の無力を何も変えられないと思ったの  
だけ何故か黒崎君とお化けが止まった。

織姫（・・・え!?な、何これ？）

???（力が、欲しいですか？）

織姫（え!?今度は何!?)

いきなりここにはいない声が聞こえて聞き返してしまった。

???（力が欲しいかと聞いているんです!!）

何故か怒鳴られた。

織姫（は、はい黒崎君の助けになる力が欲しいです。）

???（私としてはあなたの力を覚醒させるのは業腹ですか他ならぬ  
■<sup>ご</sup>■<sup>主</sup>■<sup>人</sup>のためですので勘違いしないでください。）

織姫（あ、はい）

???（とはいえただそのまま力を覚醒させても意味はないので特典をいくつかあげますね。）

織姫（わ、わかりました。）

すると私の中に温かいものが流れ込んできた。

そしたらお兄ちゃんから貰った大切な髪飾りが光り始めた。

織姫（え、え、お兄ちゃんから貰った髪飾りが!!）

光が収まると髪飾りが6人の精霊みたい姿になってしまった。

???（初めまして、僕は舜桜！君の力盾舜六花の一部しゅんしゅんりつか）

オレンジ色の服に長い金髪を後ろでまとめた恰好をした男の子がそう言った。

???（女！俺の名は椿鬼！下手に使ったらただじゃ置かねえぞ!!）

黒髪にオールバックで布を口元に巻いた男の子が偉そうな口調で言った。

???（僕は梅蔵と申します。よろしく頼みます。）

口には花模様のマスクをつけているカーキ色の服を着ていて髪を三つ編みにしてひとくくりにしていて姿はおじさんのようで一番大きい身体をしていました。

???（私は火無菊と言います！織姫さんよろしくお願いします!!）

スキンヘッドに全身紫色のタイトのようで左目はスコープがついた姿で性格はテンションが高く明るい方です。

???（あたしはリリイよ！よろしく!!）

ピンクの髪色で頭にお団子3つついた髪型で黄色いサングラスに青いノースリーブのような派手な格好の女の子が元気いっぱいに言った。

???（私はあやめと申します。よろしくお願いします。）

黒髪に前髪ぱつっんの髪型でピンク色の服と頭に大きな赤い頭巾を被っているような外見が特徴的な女の子がおしとやかな口調で挨拶してきた。

舜桜（さて盾舜六花の力について説明するよ。盾舜六花の力は事象の拒絶と言って攻撃も防御も回復もこなせる万能の力なんだよ。）

私は目覚めた盾舜六花の力と使い方を聞き理解できたんだけど最初の謎の声对战に対する覚悟を聞いてきた。

??? (さて最後にあなたに聞きます、あなたはこれから戦いという無限に続く地獄を生き抜いて大事なものを護り抜く覚悟がありますか?)

謎の声はそう問うてきたけど私はもう覚悟を決めている。

織姫 (もう失う絶望はしたくないもうごめんさいも行つてらっしゃいも言えないようなことが無いように私は大事なものを護るために戦う!!)

私は謎の声にそう答える。

??? (ならいいでしょう、さつきと行つてきてください。)

織姫 (さつきから私に対して淡白過ぎないですか?)

??? (気のせいです。)

織姫 (そ、そうですか。)

私は釈然としないと思いつつも戦闘に介入する。

盾舜六花を展開してエネルギーのようなものを纏うと一護君と狼のお化けが動き出した。

一護君は私が纏っているエネルギーを感知して三日月と青白いエネルギーをお化けに放つてお化けを離して後ろに視線を向けた。

私は自信に満ちた表情と声で黒崎君に言う。

織姫 「一護君、私も戦うよ。」

side 一護

いきなり霊圧を感知して後ろを向くと織姫が力を覚醒させていたがギョクが精神世界で修業をつけた様子もないのに石田たちと比べたら7割程しかしないが十分にあの虚の霊圧に耐えるくらいにはある。

とりあえず聖文字 加速シユリフツトthe Accelで思考を1000倍に加速させた。

一護 (ちよつとギョクさん? 力覚醒させる修行するなら俺に連絡くらいよこして?)

ギョク (ご主人、私は彼女に修行はつけてませんよ?)

一護 (ちよつと!? なにしてんの!?! 修行しないとまともに戦えないぞ)

!?)

ギョク（いえ、それに関しては大丈夫なんで今度私を甘やかしてください。）

一護（……分かったよ。（今度雨竜とチャドに井上も連れて精神世界に行こう。））

俺はギョクに悟られないようにしてそう思った。

ギョク（ちよつとご主人！今よからぬことを考えてたでしょう!?)

一護（いえ、何にも）

そんなやり取りをしたがさつさと虚を倒すかと意識を切り替え思考加速を切った。

一護「井上、お前はとりあえず自分の身だけを守ることをだけ考えろ。」

井上は虚との戦闘はこれが初めてなんでできるだけ安全策を練る。

織姫「分かったよ、でも私も手伝えそうなら手伝うよ?」

井上はそう言っているが一般人とそう大差ない状態と言えるため戦闘に巻き込むわけには行かないので早期決着で片を付けますか。


一護「そうか、じゃあ手伝えたら手伝ってくれ。」

織姫「うん。」

井上は満面の笑みを浮かべたがそんなことに気にしてる場合ではない。

なんせ吹っ飛ばした狼虚がもう戻ってきた、先ほど与えたダメージは超速再生で完治しているため制限を外してもさつさと倒す。

一護「さてさつさと終わらせるか『金剛爆』『氷牙征嵐』『牙気烈光』!!」

俺は銃から蒼火墜と赤火砲を足した着弾すると大爆発する火の球を、嵐を上回る嵐を巻き起こし、大量の氷を相手にぶつけ、緑の波紋の円から複数の緑の閃光を叩き込む、どれも九十番台の破道に匹敵する大技だ。

全て直撃したがギリギリで倒しきれずに再生が始まっているがこれ以上時間をかけるわけには行かないのでとどめを刺す。

一護『破道の九十・改 黒棺・奈落』

通常の黒棺で相手を取り囲んだらその重力の力場を圧縮することで圧縮した対象を破壊するのだが詠唱破棄でも完全詠唱したレベルの威力の黒棺と同等になり被害が拡大することなく敵を倒せるので数少ない俺が普段使いで使用が許可されている九十番台の破道なのだ。

狼虚はすぐにパワーアップして脱出しようとしたが其れよりも速く奈落で圧殺された。

織姫「え、えくとわ、私の出番は？」

一護「す、すまん、まともに戦闘の修行や訓練を受けていない井上に戦わせるわけにはいかなかったからさすがに終わらせないと思つて…」

織姫「う、うんそれはわかったけどこれどうしようか…」

井上がそう言うて先ほどの戦闘の破壊痕をどうするか言ってきたがこういう時のために何とかする聖文字を開発してあるから早速使ってみようとするが

織姫「あつ！でもこういうことなら私に任せて！『双天帰盾』《私は拒絶する》」

すると井上は盾舜六花で破壊した個所を修復したためせっかくの聖文字の出番がなくなってしまった… まあ俺も人のことは言えないか。

一護「すごいな井上（本当は知っているけどここは褒めておきますか）」

織姫「… 織姫」

一護「え？」

織姫「織姫って呼んで私も一護君て呼ぶから。」

そういえばずっと名字で呼んでたけどまあ名前で呼んでいいならいいか。

一護「分かったよ、織姫」

名前で読んだところでそういえば結界が消えてから雨竜たちの到着が遅い気がするけど帰ったかと思つたがああ腐れ縁雨竜がタダで帰ると思えないので搦趾追雀で探索した。



するともう近くに3つの反応が迫っていた、霊圧探知で観測できなかった所を見ると俺をおちよくるために気配と霊圧を消していたと見える。

俺がそんなことを考えていると織姫が

織姫「一護君、ちよつといい?」

一護「... うん?なんだ?」

織姫「うんとね」

そう言うのと織姫は俺に抱き着いて唇を顔に近づけてきた。

一護(ちよおい!?さすがにこれ以上フラグ立てたつもりもないしいきなりキスするほど織姫って積極的だったか!?)

俺は内心大慌てだったが織姫の唇が俺の唇に当たる瞬間殺気を感じて織姫が怪我しないレベルの力で突き飛ばして後ろに跳躍した。

織姫「... えっ!?!」

織姫は悲しそうな顔をしながら驚愕したが相手してらんない。なんせ攻撃してきたのが雨だったからだ。

あと何故か雨の瞳に光が灯ってない。

一護「雨、いったい何のつもりだ?」

雨「何って敵を攻撃しただけですけど?」

一護「敵って虚はもういないだろう?」

雨「いるじゃないですか敵」

雨はそう言い織姫に銃を向ける。

織姫「あなた何?なんで邪魔するの?」

織姫も盾舜六花を展開して臨戦態勢に入っている。あと織姫も瞳に光が灯ってない。

雨「邪魔?何言っているんですか?あなたが私の一護さんを取ろうとする敵だからですよ。」

織姫「ナニイッテイルノカナ?一護君は私のだよ?」

一護「おい、二人ともここで喧嘩すんな。」

織姫・雨「一護君(さん)はこの女のことをどう思っているんですか!!」

俺は止めようとしたがいきなり二人がすごい剣幕で言ってきた。

一護「… どう思うも雨は喜助の所で相手している幼馴染で織姫は今日知り合った女って感じだが？」

雨「… 今日？もしかして私とのデートに来られなかったのってこのオンナノセイナンデスカ？」

俺の発言で雨が更に殺気を強めた。

織姫「へえ〜てことはあなたなんかとデートするより私を助けることを選んでくれたってことは一護君は私の方が好きってことだね？」

雨「… はあ？あなた何言っているんですか？一護さんは可哀そうだからあなたを助けただけで好意なんてないんですよ？勘違いするのもいい加減にしてくださいよ？」

雨がそう言っているがそろそろいい加減にしてほしいので強硬手段に出る。

一護「いい加減にしろ!!」

おれは周囲に防音の結界を張り聖文字 the Terror 咆 Roar 哮で声量上げて恐怖の恐怖の覇気で二人を威圧した。

織姫・雨「ヒイイ!!」

二人は咄嗟に互いを抱きしめたため両者の胸がぶつかってむにゆうつと変形したが俺は気にせず二人に言った。

一護「はあ、お前らさ喧嘩すんのはいいんだけど殺し合いに発展するのはやめてくれ。」

すると威圧し過ぎたのか二人は涙目になりながらすごい勢いで頷いている。

一護「本当にわかってんの？」

織姫・雨「分かってるよ（います）!!?」

一護「それならいいがあとそろそろお前らも出て来いよ。」

俺は恐怖の覇気を解除して隠れている二人に言った。

雨竜「やれやれ、雨がいきなり殺気全快で突っ込んでいったと思ったら君はどうしてこうも面倒な状況に巻き込まれるんだ？」

チャド「一護、お前は本当に面白い奴だな。」

一護「二人とも見てたんなら止めてくれよ、あとチャドそれどうい

う意味だ。」

さてこれでは織姫を家に送り届けられそうにないな、どうしよう？

一護「さて無事に虚を倒せたから帰ります？」

雨竜「そうだな、彼女のごことはまた後日聞くから今日は帰るとしよう。」

チャド「ああ、俺も異存はない。」

雨「分かりました、一護さん先ほどはすみません。」

一護「ああ、それはいいそれと織姫お前は今日俺んちに泊まりな。俺は何気なく織姫にそう言った。」

織姫・雨「「えっ!？」」

雨竜「一護どうしてそうなる？」

一護「だって織姫力に覚醒させたばっかだし制御もできてない状況で一人にするよりは俺が近くにいた方が対処しやすいだろう？」

チャド「確かに万が一その子の力が暴走しても一護なら対処できるしな。」

雨「ちよ、ちよつと待つてください。別に一護さんの家に泊まらなくても私の家に泊まらせればいいじゃないですか!!」

雨は必死に言っているが

一護「いやだって織姫は浦原商店の場所知らないしこんな暗いと道覚えられないしそれなら俺んちのほうが都合がいい。それよりも織姫もそれでいいか？」

織姫「うん、いいよ。」

織姫が即答したため今日はこのまま解散になるかと思えば

雨「・・・なら私も泊まります!!」

織姫「!？」

一護「うん？別にいいがどうした？」

雨「一護さんの家にこんな淫乱を上げたまま放置できませんから。」

織姫「わ、私は淫乱なんかじゃないもん!!」

一護「はいはい、分かったからこれ以上うるさくするな。さっさと俺んちに行くぞ。」

織姫・雨「「待つてよ〜（ください）!!」」

家に事情を説明してその日は織姫と雨が止まることになって妹たちは大喜びした。

side???

??? 「ふむ、まさか虚刀を取り込んだ虚をあかも容易く倒すとは」

謎の男達のリーダー各は一護が虚を軽く倒した鬼道を見て思案顔になっている。

??? 「おお、怖い怖い末恐ろしい子やなく」

京都弁で話す男は一護の力を見てそう評した。

??? 「まさか実験中とはいえこども容易く倒されるとはまだまだ改良の余地があるということか。」

最後のバイザーのようなものを付けた男は実験の結果から改良できるところを考察している。

??? 「さて彼はいつも我々の想像の上をいく結果を出し続けている、これからも彼の動向や成長を見続けその情報を我々の力の糧にさせてもらおう。」

男たちは領き自分たちの目的を成し遂げるために暗躍する。

### 13話：「全力で抗ってやる!!」

次の休日、俺たちは浦原商店に来ていた。メンバーは俺、雨竜、チャド、織姫の4人だ。

一護「さてここが基本的に俺達が拠点としている場所だ。」

雨竜「またの名を地獄への入り口だ。」

織姫「えっ!?!じ、地獄!?!」

織姫は驚いて俺の腕にしがみつく、腕に胸が当たっているのを気にしないように意識を向けないようにする。

一護「いや雨竜何言ってるの?」

チャド「いやまああなたがち間違いではないだろう。」

一護「チャドまで...」

雨竜「... いや君の相手をするんだから地獄以外の何物でもないと思うけど」

チャド「ああ、あれと比べたら普通の地獄と呼ばれる状況が生温く感じるからな。」

織姫「そ、そうなんだ...」

一護「何が地獄なのか置いておくとしてさっさと入ろうか...」

俺達は無駄口叩きながら浦原商店に入った。

雨「一護さん、チャドさん、雨竜さんいらつしやいませ!... どうして淫乱は一護さんの腕にしがみついているんですか?」

織姫「え〜?別に私は一護君の彼女なんだからいいでしょ〜?」

雨「はあ〜?何言っているんですか?貴方ごときが一護さんの彼女なわけないでしょ?戯言もいい加減にしてくださいよ?」

一護(またこれかよ、この嫌悪感のぶつけ合いはやめてもらいたいんだが...)

俺は二人にのみ殺気をぶつけた。

織姫・雨「ヒィィ!!」

一護「いい加減にしろ」

俺は感情を乗せずに冷淡に言った。

織姫・雨「ご、ごめんなさい(涙目ウルウル)」

一護「一々言わせないでくれ」

俺はそう言いながら織姫を離した。

雨竜「一護、彼女たちのは喧嘩するほど仲がいいというやつなんだから放っておけばいいんだよ。」

一護「雨竜、親しき中にも礼儀ありという言葉を知らんのか?」

チャド「一護、それお前にも言えることなんだからそう言うもんじゃないぞ。」

一護「まあそうだけでも... とりあえず二人ともあまり喧嘩すんなよ。」

織姫・雨「は、はい(シヨボン)」

俺たちは軽口を言いながら店の奥に行った。

一護「さて、これから織姫は力についてさらに理解を深めるために俺たち全員、あの世界に行くぞ。」

雨竜「なるほど、そこで彼女のことをいろいろ聞くことができるな。」

雨竜は即座に俺の意図を理解した。

それもあるがギョクのこの前の修行をつけなかったことに対する罰もあるがな。

チャド「俺と同系統の能力ということはあの人も関係しているのか。」

織姫・雨「あの世界?あの人?(頭に大量の?)」

一護「うん?ああ二人は知らないのか。あの世界っていうのは俺の精神世界のことだ。」

織姫・雨「一護君(さん)の精神世界!!?(両者グイツ)」

一護「二人とも落ち着け」

俺は二人を落ち着かせた。

雨竜「そしてあの人というのは僕や茶渡の力を覚醒してくれたたり新たな力をくれた師匠のような存在だ。」

チャド「ああ、井上もなんか謎の声が聞こえて力に目覚めなかったか?」

織姫「うん、なんかノイズの入った声で冷たいことを言ってきた

よ。」

雨竜・チャド「うん？ノイズ？」

今度は雨竜とチャドが頭に大量の？を浮かべた。

織姫「…え？違うの」

雨竜「…まあ、あの人の能力を考えれば声にノイズを入れるなんて造作もないな。」

チャド「…ノイズを入れて冷たい言葉を言った理由はなんとなく察しはつくがな。」

チャドはすぐにノイズを入れた理由を察した。

織姫「二人は何言っているのかわからないけどそこに行けば私は本当の意味で一護君の隣に立てれるんだね。」

雨「その淫乱に後れを取るわけにはいかないので私も行きます。」

雨竜・チャド（あの人の性別と容姿を知ったら戦争になるんだろうな。）

二人が内心想っていることを察して頭が痛くなってきた。

一護「さてそろそろ行くぞ。準備はいいな？」

4人「「「もちろん！」」」

そういうことでシユリフツトthe Mind聖文字 精神の精神操作で俺たちの精神を繋ぎ俺の深層世界に移動させる。

俺たち5人は上下の感覚が不安定のビルが連なる不思議な世界にいた。

一護「到着!!」

雨竜「相変わらずの不思議な世界だな。」

チャド「さてあの人はどこにいるんだ？」

織姫「こ、ここが一護君の精神世界…」

雨「さて、雨竜さんとチャドさんの師匠はどこでしょう？」

???「…奴は今引きこもっているぞ。」

一護と織姫以外「「「っ!!」」」

するとおっさんが来た。

雨竜「何者だ？」

雨竜は銀嶺弧雀を構えた。

チャド「あの人が引きこもっているとはどういうことだ？」

チャドも巨人の黒鎧、悪魔の白鎧を展開して構え警戒している。

雨「何者ですか？一護さんの世界になに土足で踏み込んでいるんですか？」

うるる  
雨も武装の腕輪で二本の忍者刀を生成し逆手で構える。

一護「お前ら落ち着けそのおっさんは俺の滅却師クインシーの力が具現化した存在だから敵じゃないぞ？」

雨竜「・・・そうなのか？」

一護「ああ、おっさんちよつと滅却師の技を見せてやってくれ。」

ユ「・・・わかった。」

おっさんはそう言い飛廉脚、フルート・ヴァーネアルテリエ動 静 血 装、ザンクト・ツヴァインガー範囲を絞った聖域礼賛を使った。

それらの技を見て3人は警戒を解いた。

雨竜「すみませんホワイトとギョクさん以外で見たことなかったのてつい武器を向けてしまいました。すいません。」

チャド「すみません、俺もいきなり現れたため気が立ってしまいました。でもあの人が引きこもっているってどういうことですか？」

雨「あなたが敵ではないことは分かりましたけど雨竜さんが言ったギョクってダレデスカ？」

ユ「・・・奴は今ホワイトが引きずり出しているからそろそろ来ると思うぞ？」

おっさんがそう言うときやあぎやあと騒ぎが聞こえてきた。

???「お前、今回は10割お前が原因だからナ!!」

???「だって女としてライバルに塩を送るとか嫌ですよ!!?」

織姫・雨「はあああああ!!?」

雨と織姫は二重の意味で驚愕した。

なんせ片方の男は白黒反転させた俺でもう片方の女は同性の織姫たちですら見惚れる程の美貌とスタイルを持っているのだから。

ホワイト「・・・よお、なんとか引きずり出してきたぜ。」

ホワイトは若干疲れた声でそう言った。

ギョク「……………(ムスー)」



ギョクはムスツと顔をした顔をしている。

一護「さて全員出揃ったところで早速初めm織姫・雨」「ちよつと待ってよ(ください)！一護君(さん)!!」「なんだよ二人とも」

織姫・雨「コノフタリナンデスカ?」

二人はホワイトとギョクを指した。

ホワイト「俺か?俺は一護に眠る虚の力だが?」

織姫・雨「...えっ?」

一護「さらつと言っているがこいつは俺に秘める死神の力と虚の力が混ざってできた存在だから仲良くしてやってくれ。」

織姫・雨「わ、分かったよ(りました)。でもこの女は何(ですか)!!?」

一護「そいつはギョクって言ってそいつも俺の力が具現化した存在だ。」

ギョク「...ギョクと言います。(プイツ)」

一護「...ギョク、この前のことと言い今回事ことと言いふざけてんの?」

俺はギョクの態度を見て恐怖の覇気ファイアーオーラでギョクを威圧した。

ギョク「...ご主人ごめんなさい。(シユン)」

織姫・雨(ご主人!!?)

一護「反省しているなら織姫と雨の二人を現段階で鍛えられる最大限まで鍛えろ、そうすれば許してやる。」

ギョク「(ペアつと満面の笑み)分かりました!全力で頑張ります!!」

一護「本当にな。」

俺は内心で心配している。

雨竜「さて話が纏まった所で修行を始めますか。」

チャド「ああ、ここなら時間を気にする必要はないからな。」

一護「俺たち3人はホワイトとおっさんが修行相手になってもらうとしてギョク、雨、織姫!お前たち3人で修行してもらうけど喧嘩すんなよ!!」

ギョク・織姫・雨「分かってます(いるよ)(います)!!」

一護「そんじや修行開始っ!!」

side 織姫

私はあの日一護君の家に泊まった後の次の休日に浦原商店と言われる駄菓子屋に来た。

いきなり石田君と茶渡君が地獄の入り口と言ったので一護君に抱き着いちゃった。

抱き着いて幸せだった気分は泥棒猫の雨ちゃんが来るまでだったけど。

それにしてもいつも思うけど淫乱って何よ、私淫乱なんかじゃないもん。

また口喧嘩していたんだけど一護君にまた怒られてしまった。

正直一護君って怒るとすごい怖い。

なんとか一護君の怒りが静まると全員でお店の奥に行って話を始める。

開幕一番に一護君があの世界に行こうとか言っているけどあの世界って何だろう？

一護君が詳しく言うとな護君の精神世界って聞いて雨ちゃんと一緒に声を上げる。

一護君が落ち着かせてきて私たちはなんとか落ち着いた。

そして茶渡君は私力が得るときに聞こえた声のことを知っているみたいと思っただけど茶渡君も同じだったみたいだけど私の時とは違ってノイズのような声ではないらしい。

それよりなんかノイズの入った理由を知っているっぽいけどそれよりも私は一護君の隣に立てるようになる場所に行くことだけはわかった。

あと雨ちゃんも行くつもりらしい。

一護「さてそろそろ行くぞ。準備はいいな？」

4人「「「もちろん!」」」

一護君の合図に全員が即応する。

するといつの間にか私たちは上下の感覚が不安定のビルが連なる不思議な世界にいた。

ここが一護君の精神世界…

周りを見渡しているときいきなり声が聞こえたと思ったらサンダラスをかけた黒づくめのおじさんがいつの間にか現れました。

すると私と一護君以外が武器を構えて警戒している。でも一護君が警戒していないから敵ではないのかな？

一護君がおじさんに滅却師？の技を見せてあげてくれって言うとおじさんがいきなり青白い光が足の裏に集まるとすごい速度で空中を移動したり全身の血管が光ったりおじさんを中心に光の柱の領域が展開された。

それで3人はなんか納得したらしくて武器と構えを解いた。

雨竜「すみませんホワイトとギョクさん以外で見たことなかったの  
でつい武器を向けてしまいました。すいません。」

ギョク？ギョクってダアレ？なんか新しい泥棒猫が現れたんだけどドコノドイツ？

ユー：： 奴は今ホワイトが引きずり出しているからそろそろ来ると  
思うぞ？」

おじさんがそう言うときやあぎやあと騒ぎが聞こえてきた。

「お前、今回は10割お前が原因だからナ!!」

「だって女としてライバルに塩を送るとか嫌ですよ!!」

織姫・雨「はあああああ!!」

私と雨ちゃんは二重の意味で驚愕した。

だって片方の男は白黒反転させた一護君でもう片方の女は同性の私達ですら見惚れる程の美貌とスタイルを持っているんだから。

ホワイト「：： よお、なんとか引きずり出してきたぜ。」

白一護君は若干疲れた声でそう言った。

ギョク「：：：： (ムスー)」

ギョクと呼ばれる女はムスツと顔をした顔をしている。

一護「さて全員出揃ったところで早速初めm織姫・雨「ちよつと  
待ってよ(ください)！一護君(さん)!!」なんだよ二人とも」

織姫・雨「コノフタリナンデスカ？」

私達は白一護君と女を指した。

ホワイト「俺か？俺は一護に眠る虚の力だが？」

織姫・雨「…えっ？」

ホロウ？虚が一護君の中にいるの？ダトシタラ…ホロボサナイト…

一護「さらつと言っているがこいつは俺に秘める死神の力と虚の力が混ざってできた存在だから仲良くしてやってくれ。」

一護君が仲良くしてやってってくれって言ってきたから敵ではないの…かな？

織姫・雨「わ、分かったよ（りました）。でもこの女は何（ですか）!!？」

とりあえず白一護君のことは何とか飲み込んだけどこの女のことにはつきりさせないと!!

一護「そいつはギョクって言ってそいつも俺の力が具現化した存在だ。」

ギョク「…ギョクと言います。（プイツ）」

ギョクと呼ばれた女は不貞腐れた態度で私たちに挨拶した。

一護「…ギョク、この前のことと言い今回のことと言いふざけてんのか？」

一護君は私たちを怒るときみたいに怖い気配になって叱っている。

ギョク「…ご主人ごめんなさい。（シユン）」

織姫・雨（ご主人!!）

私と雨ちゃんはギョクさんの一護君に対する呼び方に内心で悲鳴を上げた。

ご主人!?!ご主人ってなに!?!もしかして一護君ってそういう趣味があるの!?!

一護「反省しているなら織姫と雨の二人を現段階で鍛えられる最大限まで鍛えろ、そうすれば許してやる。」

ギョク「（ペアつと満面の笑み）分かりました！全力で頑張ります!!」

一護「本当にな。」

え!?!私この人の弟子になるの!?!嫌だよ!?!普通に一護君に手取り足

取り教えてもらいたいよ!?

雨ちゃんも凄い嫌そうな顔してるよ。

あと一護君に許してあげるって言われたら何女の顔をしてるのこの女!?

雨竜「さて話が纏まった所で修行を始めますか。」

チャド「ああ、ここなら時間を気にする必要はないからな。」

一護「俺たち3人はホワイトとおっさんが修行相手になってもらうとしてギョク、雨、織姫!お前たち3人で修行してもらうけど喧嘩すんなよ!!」

ギョク・織姫・雨「二分かってます(いるよ)(います)!!」

私たちは一護君に嫌われたくないから全員で声を合わせる。

一護「そんじや修行開始っ!!」

一護君の合図で男女で別れ修行が開始された。

ギョク「さてイヤイヤですが他ならぬご主人の好感度を取り戻すためです。修行を始めましょう。」

コノオンナはいきなり偉そうな態度で言ってきた。

雨「あなた何様のつもりですか?一護さんとはどういう関係ですか?」

雨ちゃんは私が聞きたいこと言ってくれた。

ギョク「私とご主人の関係ですか?嫁と旦那様ですが?」

織姫・雨「∴はああ?ナニフザケタコトイッテイルノ(デスカ)?」

私たちは殺気を隠すことなくこの女にぶつける。

ギョク「負け犬の遠吠えとはこういうことを言うのですか、ある意味心地いいですね。」

織姫・雨「コロス」

私は盾舜六花を展開しようとしてなぜか展開できなかつた。

織姫「えっ!」

雨「なっ!」

そして雨ちゃんも武器を出せないでいた。

ギョク「何を驚いているんですか?ここはご主人の世界そしてご主

人の力の具現化である私たちが住まう領域で余所者のあなた達が好き放題力が使えるとお思いで?」

織姫・雨「:… ツ!! (プルプル)」

私たちは何も言い返せず体を震わせてキツと睨みつけることしかできなかった。

ギョク「あと井上織姫あなたのその力は元々はあなた自身のも物ですが覚醒させたのは私です。自力で使えるようになれなくては話になりませんよ?」

織姫「ツ!!」

私はもうすでにこの女の手を借りていた事実を改めて突き付けられた。

ギョク「ああ、そして紬屋雨あなたの武装も私の力込みで作られたものなんであなたも私に借りがあるのでですよ?」

雨「ツ!!?」

雨ちゃんのあの恥ずかしい恰好も含めてこの女が関与している事実を知って驚愕して歯を食いしばっている。

ギョク「さてあまりこういうことをしているとご主人に本気で嫌われてしまうので修行を開始しましょう。」

女はやれやれと頭を横に振って修業を始めると言ってきたので私たちは内心嫌だがこの女を超えないと一護君の隣に立てないと理解したため渋々言うことを聞いた。

ギョク「先ずはここに加速結界を張ってこの結界内と外の時間をずらしておきます。そうしないとご主人達とあなた達の距離は一向に縮まりませんからね。」

女はいきなり極彩色の結界を張るとそう私たちに宣言してきた。

織姫「:… 先ず私達は何をすればいいんですか。」

私はこの性格の悪い女のことだから無理難題言つてまともな修行をつける気はないと思っていたが

ギョク「井上織姫、あなた私のことを見くびり過ぎでしょ。」

織姫「ツ!! (心を読まれた!!?)」

ギョク「心を読むなんて私の力をもってすれば朝飯前ですよ:…っ

てまた話が脱線しましたよ。今から私があなたに教えるのは完現術フルプリンクです。」

織姫「ふ、完現術？」フルプリンク

ギョク「ご主人や茶渡そしてあなたに宿っている力の事です。ご主人は黒コート、茶渡は黒と白の鎧、あなたは盾舜六花と私が与えた特典ですね。」

「そういえば一護君があの際に纏った黒コート、そして先ほど茶渡君が鎧を纏っていたが完現術なのだと理解した。」

ギョク「完現術と言ってもご主人達のように身に纏ったり、茶渡のように肉体を変化させるタイプばかりではないですけどね。あなたの盾舜六花のようなものが大半を占めますよ。」

織姫「そ、そうなんですか。」

私は女の説明が予想以上にわかりやすかったためとても驚いた。

雨「… 織姫の修行は理解しましたけど私は何をすればいいんですか。」

織姫「… えっ!？」

雨ちゃんが私を淫乱じゃなくて名前前で呼んでくれた。

雨「勘違いしないでください、あくまであの女を倒すためです。(プイツ)」

雨ちゃんはそう言いそっぽを向いた。

織姫「雨ちゃん…」

ギョク「… 紬屋雨、あなたはご主人の使う月閃瞬間げっせんしゆんこうを体得してもらいます。」

雨「えっ!?!一護さんの!？」

ギョク「正直、嫌ですがあなたの適正属性がご主人と同じなので教えざるを得ないのでですよ。」

女は嫌そうな顔をしているが一護君との約束を守るためにちゃんと修行をつけてくれている。

ギョク「さて月閃瞬間の理屈は瞬間の発展であり真逆の理論でもあります。通常の瞬間とその発展型は高濃度に圧縮した鬼道を両肩と背に纏い、それを炸裂させる事で鬼道を己の手足に叩き込んで戦闘を

行いますが月閃瞬間は練った鬼道を体内で循環することで常に瞬間の最大戦闘能力を維持したまま戦うことができ打撃が当たった瞬間炸裂させて攻撃するのです。」

雨「…なぜか一護さんが頑なに教えてくれなかった理由が分かりました。」

どうも一護君は教えてあげていなかったようだけど雨ちゃんの反応的に習得が大変らしい。

ギョク「さてこのままだと二人の質問で修行が進まないので二人に増えますか。」

織姫・雨「えっ（なあっ）!!」

私たちが声を上げるのも無理はないと思うよだってあの女が二人に文字通り増えたんだもん。

ギョク「これで問題ないですね。」

二人に増えたり心を読んだりこの女の能力って何なの？

ギョク「私の能力は今関係ありません。さて完現術に関しての修行を始めましょう。」

織姫「わ、分かりました。」

すると女は私と雨ちゃんを虹色の壁で分断した。

一人になっちゃったけど私はこの女から貰った力も含めて全部使えるようになって一護君の隣に立つんだ!!

ギョク「さてご主人と茶渡の時と同じ説明をしますが完現術は物質に宿った魂を引き出し、使役する能力です。」

今回で3回目だからか説明に淀みがない。

ギョク「この世界はどのような物にも魂が宿るとされます。そして、使い慣れた道具を使用するときいつもの自分より高い能力を発揮することができると感じるのは、その道具に宿る魂を理解したということです。」

物質に宿る魂には元来「使い手を補助する性質」というのがあり、それを自らの魂で大きな力と化し、それを用的ことで物質を操ったり、身の回りの物を補助として使うことで自らの身体機能以上の能力を発揮することができますのです。」



例えば、「アスファルトの魂」の助けを受けて高速移動をしたり、「酒の魂」の助けを受けてグラスから口に飛び込ませたり、足元を支えさせて水面に立つこともできます。

使い慣れたもの、愛着のあるものであれば物質の形や性質そのものを変化させ、武器にすることができたり、それを媒体に固有能力を発揮することがあります。どちらかといえば固有能力を指して完現術と呼ぶことの方が多いかも知れませんが。

説明はとも分かりやすいんですけどよくわからない。

ギョク「茶渡の時もそうですが普通はそう言う反応をするので大丈夫です。」

織姫「ち、ちなみに一護君は完現術をどのくらいの速度で覚えたんですか？」

ギョク「・・・聞いてすぐです。」

織姫「・・・え？」

ギョク「聞いてすぐに高速移動したり空中に立ったりしてました。」

織姫「え、えくと」

それを聞いた私は一護君に追いつけるか不安になった。

ギョク「大丈夫です。」

織姫「え？何がですか？」

ギョク「あなたは元々持ってた力だけでご主人の助けができるんですから不安がる必要はないのですよ。というよりあなたにそんな自信なさげでは勝った気がしないんですよ。」

織姫「・・・ハッ！そ、そんな風に優しくしたって簡単に堕ちるほど私はチヨロくないですよ!!」

ギョク「そういう風に優しくされてご主人に恋したチヨロインが何言っているんですか？」

織姫「ツ~~~~~(顔真っ赤)」

私は恥ずかしさのあまり顔を覆った。

ギョク「さてこれからバシッ！バシッ！行きますよ！織姫。」

織姫「うん！わかったよ、ギョク!!」

この結界で1ヶ月経過して私は魂というものを感じ取れるようになった。

私は虚と盾舜六花の精霊達の存在で感じ取りやすかったんだけどギョクが

ギョク「茶渡は感じ取った魂が虚の存在だけで同じ月日で感じ取れるようになっていましたよ。」

って言っていたからもつと頑張らないとって思った。

魂を感じ取れるようになったら完現術<sup>ア</sup>：加速<sup>セル</sup>と完現術<sup>ラ</sup>：飛行<sup>イ</sup>っていう完現術者の基本的な技能を覚えてもらおうって言ってきたため完現術を使おうとしたんだけど何故か力が入らない。

ギョク「ここでは精神だけで存在しているのでダイレクトで魂がつかれているので休むことはとても重要なよ。」

ギョクはそう言ってきたから休もうとするけどギョクがいきなり

ギョク「魂をより効率的な回復できるように作った魂魄温泉に浸かりましょう！」

織姫「魂魄温泉？」

私はよくわからず首をかしげる。名前からして温泉だと思うけど・・・

ギョク「はい！茶渡の時の反省を生かして短期間で全快させられるように作成しました。」

すると、私と雨ちゃんを分断してた壁が消えて雨ちゃんの姿が見えるようになったんだけど滅茶苦茶ボロボロになっていた。

ただでさえ恥ずかしい恰好だったのに顔を手で覆い隠すくらいの布切れ程度しかない。

雨「はあ・・・はあ・・・お、織姫あなた大丈夫ですか？」

織姫「雨<sup>うら</sup>ちゃんにだけは言われたくないよ!!」

ギョク「とりあえず、同性の私達でも恥ずかしいと思える恰好はやめてくれませんか？」

雨「あなたがこんな格好にしたんでしよう!!」

ギョクちゃんは文句言っているけど嫌悪感がこもっていないから悪友？っていう関係っていいのかな？

ギョク「さて、ほぼ全裸の痴女の戯言は放置して温泉に入りましよう！」

雨「誰が痴女ですか!!」

するといつの間にか温泉が出現している。

ギョク「さてと織姫、雨温泉で女同士うららの裸の付き合いでもしましよう。」

織姫「うん！」

雨「私としては一護さんと入りたかったですがあなた達で我慢してあげましょう。」

ギョクが私たちの服をいきなり消してビックリしたけどここには私達しかいないから特に恥ずかしくは無かったけどいきなりはやめてほしいんだよね。

雨「ちやんやギョクの裸見てどっちもきれいだなくと思ったけど雨ちやんがいきなり私とギョクをジツと見てきた。」

織姫「ど、どうしたの？」

雨「ズルいです。」

ギョク「何がですか？痴女さん？」

雨「この場にいる全員全裸なんですからあなたも同類ですよ。」

織姫「お、落ち着いてよ雨ちやん何がズルいの？」

雨「…胸」

ギョク・織姫「…うん？」

雨「胸です!!」

ギョク・織姫「…はい？」

雨「あなた達の胸なんでそんなに大きいんですか!!」

織姫「え…っと雨ちやんも結構大きいと思うよ？」

ギョク「そうですね、そんな僻むほど小さいですか？」

雨「だって私は喜助さんに体の成長とかを弄つてもらってこの体型になったのあなた達そんなことしていないでしょ!!」

織姫「えくとそんなこと言われても私は普通の生活していたけどそんな特別なことしていないよ？」

ギョク「私は生まれた時からこの体型だったので参考になりません



（1日後）

ギョク「落ち着きましたか？」

織姫「・・・はい（まだ顔真っ赤）」

雨「・・・ええ（同じく顔真っ赤）」

ギョク「まったく落ち着いたら思い出してフリーズの繰り返しで1日も繰り返すなんて情けない。」

織姫「だ、だって!!」

雨「あなた一護さんに裸見られて平気なんですか!？」

ギョク「別に普通にご主人に欲情したりしますけどご主人に裸見られるなんてご主人が子供のころから見せているんで恥ずかしくなっていないですよ？多分あなた達の裸見たけどご主人たいして反応もせずに修行していると思いますよ？」

織姫・雨「・・・・・・・・」

私と雨ちゃんは顔を見合わせた。

ギョク「・・・？どうしたのですか？」

織姫・雨「「やつぱりあなた敵だよ（です）!!」」

私達は戦意を漲らせた。

再び壁で私たちは分断されて修業が再開された。

今度は完現術者の基本的な技能完現術：加速<sup>セル</sup>と完現術：飛行<sup>イ</sup>を習得するんだけどそのために完現術の基礎を徹底的に鍛える必要があるから3週間みっちり訓練して完現術：加速<sup>セル</sup>と完現術：飛行<sup>イ</sup>を修得することができた。

織姫「できたよ!!」

ギョク「よくできましたねちなみに茶渡は2か月で体得しましたけど茶渡でも早いほうなんですけどあなたもご主人ほどでは無いにしろ中々呑み込みが早いですね。」

織姫「そうなんだ？」

ギョク「ええ、基本的に完現術者は自分の固有能力の完現術を先に発現させてそれを鍛える方が先なので私達がやっているのは順序が逆なんですよ。」

織姫「へえ」

ギョク「さてそろそろあなたの元々の固有能力の盾舜六花と私があなたにあげた追加特典の2つの完現術の発現ですね。」

織姫「うんわかった。」

ギョク「では先になにに完現術を使うか言っておきます。あなたの過去の記憶の中で最も印象に残っている事と心です。」

織姫「ツ!!」

あなたの過去の記憶の中で最も印象に残っている事って言われたら一つしかない。

でも、

ギョク「別にそれではなくてもご主人の記憶を媒介にすればいいじゃないですか。」

織姫「…え!?!」

ギョク「ご主人の記憶を媒介にとは言いましたが別にそれで記憶が消えたりするわけではないですからね。」

織姫「そういうことは先に行つて!!」

私はつい声を荒げてしまったが仕方ないことだろう。

ひと先ず片方はわかったがもう一つの心つて何だろう?

ギョク「それはあなたが思う心と定義できるものであれば何でもいんですよ。」

ギョクはそう言ったが私が思う心か、ぱっと思いつくのは心臓だけどこれでいいのかな?

ギョク「大丈夫ですよ、その完現術は別に形状が変わったりすることは無いんで内臓を媒介にしても問題ないですよ。」

織姫「そ、そう分かったよ。」

私は早速心臓に完現術を使ったんだけど心臓から全身にかけて力が充実した。

ギョク「その完現術は常時発動型の完現術でしてね、一度発動するともう止められません。」

織姫「え!?!と、止められないの!?!だ、大丈夫なの!?!」

ギョク「大丈夫です、その完現術は状態異常を無効化するものであって力が爆発的に上がるとかそういうことはないので問題ない

ですよ。」

織姫「そ、そうなんだ…。」

毒とか効かなくなるだけかくびっくりした。

それじゃあもう一つの完現術を使えるようになるう。

一護君の記憶に完現術を使うと緑色の完現光ブリンガーライトが発生しその中からオレンジ色のエネルギーの刀のようなものが出現した。

織姫「これがそれ？」

ギョク「これはどちらかと言えばまだ不完全ですね。盾舜六花を先に使えるようになってからにしましょう。」

織姫「うんわかったよ。」

更に訓練して盾舜六花が再び使えるようになったところでギョクがまた3人で温泉に入ろうと言ってきたんですけどまた一護君に裸見られたくないって言ったんだけど

ギョク「結局未来で見せるんだから問題ないですよ。四の五の言っていないでさっさと温泉浸かって休んでください!!」

織姫・雨「「いやだよー（ですよー）!!」」

またギョクの横暴に勝てず一護君に裸を見せることになりました。

結界内で修行を始めて1年が経過した。

ようやく、私は完現術を完成させて一人前の完現術者としてギョクに認められた。

織姫「やった!!ようやく一人前になれた!!」

ギョク「よく頑張りましたがここで織姫に課した修行を超える修行を3年かけて乗り越えた茶渡はあなたより遥かに強いですよ」

織姫「そ、そうなんだ。」

私は茶渡君に内心ギョクのきつい修行を乗り越えるなんて凄いと  
思った。

ギョク「さて、この結界内での最後の試験ですね。これを合格できないようでご主人の隣に立つとかいう戯言は達成できませんよ?」

ギョクはそう挑発してきたけどその顔には微塵も綿地と雨ちゃんをバカにしている表情ではなかった。

私たちは覚悟を決めギョクに宣言した。

織姫「望むところだよ!!」

雨「覚悟はできていますか?」

ギョク「よろしいです。では最後の試練である私と戦ってもらいます。」

ギョクはそう言い霊圧を高めて臨戦態勢に入った。

ギョクの右手に緑色の完現光が発生した

ギョク「来なさい、ブック・オブ・ジ・エンド」

ギョクが名を呼ぶとその手に一振りの刀が握られる。

それは私が手に入れた最後の完現術とよく似た刀だった。

ギョク「何を驚いているのですか?あなたのその力はこの力の見た目と名を変えただけで中身は同じ物ですよ?」

織姫「... え? そうなの?」

ギョク「そうですねよ元々この力はご主人が使うはずだったんですけどある理由から私が使うことになったんですよ。」

織姫「ある理由?」

ギョク「それは今は関係ないんでさつきと構えてください。」

織姫「う、うんわかった。」

雨「早くしてくださいよ。」

雨ちゃんはそう言っている間に正六角形の赤い網状のラインの入っている黒い刃のついた赤いラインの入った黒い銃と白い刃のついた白いラインの入った黒い銃を生成し構えている。

それを見て私も完現術を使う。

髪飾りと手に緑色の完現光が発生したので完現術の名を呼ぶ。

織姫「来て盾舜六花、メモリーオブ・ジ・エンド」

髪飾りが6人の精霊となり私の手に刀が出現した。

ギョク「準備はできたようですね?では行きますよ。」

ギョクがそう宣告すると完現術<sup>ア</sup>・加速<sup>ク</sup>で猛スピードで突っ込んできた。

私は三天結盾を展開しながら孤天斬盾を3つ飛ばし雨ちゃんは二丁拳銃からエネルギー弾を放って迎撃した。



ギョク「… フツ!!」

ギョクは刀ですべて弾き飛ばして少しも減速せずに真つすぐ最短距離で接近してくる。

私は刀を雨ちゃんは二本の銃剣を構えギョクを迎え撃った。

雨「はあつ!!」

雨ちゃんは銃剣からエネルギー弾を放ちながら切りかかった。

ギョクも足を止めて弾丸を切り払いながら二本の銃剣と打ち合っている。

織姫「はああ!!」

私は後ろから刀を振るいギョクの間をついたんだけど

ギョク「狙いは悪くないですけどまだまだです!」

ギョクは雨ちゃんの攻撃を弾くための斬撃の際の回転で蹴りを放ち刀を側面から叩いて攻撃を弾いた。

すぐに私と雨ちゃんはギョクと距離をとった。

ギョク「今の流れはいいですよ。」

織姫「まだまだだよ!」

雨「… あなたに褒められても嬉しくありませんよ。」

雨ちゃんは嬉しくなさそうなこと言っているけど内心では嬉しそうにしている。

ギョク「… フツ私が心読めるのを知っているのに素直じゃないこと言うなんてツンデレですか?」

雨「誰がツンデレですか!!?」

雨ちゃんは怒りながら青白い弾丸を放ちまくった。

ギョクはやれやれと首を振りながらガラスの様な障壁で防いだ。

ギョク「まあ、今はこれくらい戦えるようになったから十分でしょう、試験は終了です。」

ギョクはそう言い自分も含めた私たちの武装を強制解除した。

織姫「いいの?」

ギョク「そもそもあなた達と私とでは天と地ほどの力の差があるのですから、全力を出したりしたら試験にならないじゃないですか。」

雨「喧嘩売っているんですか?」

ギョク「事実ですから」

ギョクはそう言って挑発してきたけど怒ってもギョクが喜ぶだけだから何も反応を返さないのが正解なんだと私は学んだ。

ギョク「さて1年ぶりにご主人に甘えましよう。」（指パッチン）  
すると今まで私達を覆っていた極彩色の結界が解除された。

side 一護

なんか最初ギスギスした感じだったけど修行は始まってからはちゃんと修行つけてたから問題なさそうだな。

途中3人で温泉はいるために3人全裸になったときは驚いたけどギョクの裸を昔から見ているから反応の使用が無いから淡々と修行をしている。あとなんか3人とも仲が良くなってくれたから良いかな。

ギョク達が修行している間俺達も修行して基礎能力を大幅に上げている。

けれど俺は霊圧以外は軒並み成長しているが魄睡を鍛えようとしても霊圧がそもそも莫大過ぎて空っぽにできないせいで総量を鍛えることができないのだ。

ちなみに今だ元々持っている霊圧でおっさんが抑え込んでいる霊圧ははまだ制御できない状態なので霊子操作と霊圧の制御をメインに鍛錬している。

織姫・雨（いやだよー（ですよー）！！）

二人の叫び声が聞こえると思ったたらまくた温泉に入っているよ。

しばらく鍛錬したり雨竜と技や滅却師クイーン・フォルンユテンディツヒ完聖体の名称をおっさんと一緒にあって考えたりしたりチャドとホワイトと模擬戦したりして時間を潰していると女子3人の修行が終わったようので結界が解除された。

ギョク「ご主人く〜!!」

ギョクが完現術アークセル：加速ルで猛スピードで突っ込んできたが普通に俺は受け止める。

一護「お〜よく頑張ったな。」（ギョクの頭なでなで）

ギョク「えへへ〜」

俺はギョクを撫ででしたら

織姫「ちよつと！ギョクズルいよく一護君私も頑張ったから撫でてよ〜」

雨「そうよ!!なんであなただけなのよ！一護さん私もお願いします!!」

一護「メンドイから無理」（ギョクの頭なでなでしながら言う）

織姫「なんで！」

雨「そうですよ!!その牛女だけとか不公平ですよ!!」

一護「だつてそろそろ現実世界に戻ろうとしていたから…」

織姫・雨「どうして!!?」

一護「そもそもここに来た理由つて織姫が最低限の戦闘能力を得るために来たんだから目的は達成したんだから帰るだろう。」

織姫・雨「「そ、そんな〜」

雨竜「いや、撫でるくらいいいだろ減るものでもないし。」

外野にいた雨竜が女性陣に援護射撃を出した。

チャド「そもそも戻ってから撫でるのでは駄目なのか？」

一護「…」（スーと視線を逸らす）

織姫・雨「「一護君（さん）!!」」

一護「戻るぞ!!」

俺は聖文字 精 ソフトウェアのMind 神の精神操作で強制的に現実に戻した。

そしてその日は女性陣からの強襲をひたすら回避し続けた。

〜1年後〜

一護「いや〜多いな。」

俺は数が120くらい虚の大群を見て暢気に呟いた。

雨竜「暢気に言っている場合ではないと思うけど。」

雨竜は俺に注意してくる。

チャド「さてどう殲滅するか」

チャドは俺たちの漫才をスルーしながら虚の大群を殲滅する方法を考えている。

織姫「まあまあみんな方が一怪我しても私が拒絶して治してあげるから」

織姫は1年たつて言っていることが物騒だ。

雨「さてささつと倒して一護さんデートしましょう!!」

雨と織姫は1年たつてますます女性としての魅力が増しているが俺は抵抗し続けるぞ!!

一護「さあつて!行くぞ!!」

4人「二「ああ(おう)(うん)(ええ)!!」三」

俺の合図で一斉に虚の大群に突っ込んだ。

チャド「『魔人の一撃』」

チャドは悪魔の白腕で放てる技の中でシンプルだが一番の

得意技を放つて30の虚を粉碎した。

雨竜「滅却師完聖体!天使の王!!『絶対貫通の矢・光の雨・

極大』!!」

雨竜が滅却師完聖体を発動して聖隸で小型の虚を分解吸収(ちなみにギョクに頼んで虚を吸収しても異形化しないようにしてもらってあります)して大型の虚を30体を極大の矢の雨を放つて殲滅した。

織姫「やあ!はあ!とおう!!そこ!孤天斬盾・六連!!」

織姫は完現術:加速で高速移動しながらメモリーオブ・ジ・エンドの刀で小型の虚を切り裂いて数で押してきた集団に防御不可の孤天斬盾を6発放つて10体倒していた。

雨「月閃瞬間!!天光天照!!」

月閃瞬間で強化した拳を虚に叩き込んだ瞬間炸裂させる鬼道を極太のレーザーとして放つて虚を10体倒した。

残る虚は俺が担当する40体だけだ。

完現術の黒装備を身に纏い霊子兵装の刀を右手で持ち1匹ずつ切りながら片手で『破道の四白雷』を放つて確実に敵を減らしたが残り15体になったことで敵さん達が融合したため『破道の五十八嵐』を使い竜巻を放つて竜巻のミキサードで融合虚を叩き潰した。

一護「いっちょ上がり!!」

雨竜「まあ、僕たちならこんなものだよ」

チャド「全員無事で何よりだな。」

織姫「一応双天帰盾で回復するよ。」

雨「さあ終わったんで一護さんデートしましょ!!」

一護「さて!帰るか!!」

俺は一目散で逃げた。

織姫・雨「待ってよ〜(ください〜)!!」

俺たちは14歳になった。原作まで残り2年全力で抗ってやる!!

## 14話：「無駄にカツコイイな。」

14歳になり日々の修行をしながら中学に通いながらも休日は虚退治などとして休んでいないと思われそうなのでオフの日の話をしよう。

俺は日課の運動で外を走りながら本屋や食い物屋巡りをしながら虚を破道でぶっ飛ばすや整プラスを破道を応用して作成した苦痛なく成仏させる破道「魂葬」で成仏させる。

そうしていたら

??? 「うわあああああああ!!!」

一護「何だ？」

急に叫び声が聞こえてきたら前から切羽詰まった叫び声をあげながら走ってくる男がいる。

一護「あんたどうしたんだ？」

男「お、お前……い、いやそんなことはいいんだ!!早く逃げないとお前もあの化け物に閉じ込められるぞ!!」

一護「化け物に閉じ込められる?そいつはどこにいる?」

男「あ、あつちだ……お、お前まさかあの化け物に会いに行く気か!!?や、やめとけ死ぬぞ!!」

一護「大丈夫だよ、それより情報感謝するよ。」

男にそう言う俺は教えてもらったところに走っていった。

俺は化け物について走りながら化け物について推察する。

一護(閉じ込める虚か何か?でも虚の場合例外はあるが基本閉じ込める必要はないからな。じゃあなんだ?)

俺は考えが纏まらない間に霊圧を感じたが極めて僅かにしか感じない。

一護(あいつか?)

後ろ姿が見えたがピンク髪のツインテールで、ゴスロリ風の服を着ているということしかわからない。

その後ろ姿を見て俺は納得した。

一護(なるほどなく、一般人からしたらこの女の能力程度でも十分

化け物だよな〜)

一護「おいお前か？化け物って言われた女ってのは？」

???「… ツ!!なによ!あんた!!」

一護「そう怒んなよ、俺もお前と同じようなもんだから」

???「… え？」

女は驚いた顔をしたが目を細めて俺の顔を見る。

一護「お前もしかして近眼か？」

???「ええ、そうよなんか文句ある!!」

一護「いいや別れないが。」

???「そう」

女はそう言いながら近づいて俺を見る。

???「… 好き」

一護「… え？」

???「好き!!あたしあなたのことが大好き!!」

女は俺に好きと言いながらハートマークを飛ばしてきた。

特に危険を感じなかったせいでハートマークが当たってしまったが特に何かが起こるわけでもなかったのだが周りの景色がぬいぐるみなどの可愛いものがたくさんあるファンシーな部屋になった。

一護(これが毒ヶ峰リルカの完現術『ドールハウス』か中々の強制力だな。)

俺にこの手の特殊能力は効かないがおそらく能力の性質が織姫の盾舜六花の『拒絶』と対をなす『許可』だからだろうから俺に影響を及ぼしたのだろう。若しくは俺に危害を加えるようなことが無いから受け付けたのだろう。

しばらく時間が経過したら女が来た。

???「ここならゆつくりと話ができるわね」

そう言って女が入ってきた。

???「自己紹介といきましょうかあたしは毒ヶ峰リルカよ。よろしく。」

一護「俺は黒崎一護だよろしくな女」

リルカ「リルカでいいわ。それよりあなたのこともっと教えて」

リルカはぐいぐい体を押し付けながら顔を近づけてくる。あとなんか目にハートマークが浮かんでいるように見える。

一護「はいはい、落ち着け」（リルカの肩を掴んでグイッと離す。）  
リルカ「…え？」

一護「うん？どうした？」

俺が不思議に思うと

リルカ「お願い！なんでもするから!!あなたの言うことなんだって聞くから!!一人にしないで!!」

そう叫びながら瞳から光がなくなつたリルカは錯乱して服を脱ぎ始めた。

一護「おおい！落ち着け!?一人にはしないから!!服を脱ごうとするな!!?」

俺は必死になつて止めようとする。

リルカ「…ホント?ホントに一人にしない?」

一護「ああ一人にしな」雨「一護さん今助けますから!!」（入れ物ガシャン!）一護「ああ面倒なことになりそうだな…」

俺はファンシーな部屋からどこかの部屋に移動した。

そこには織姫と雨がいた。

一護「織姫に雨かお前らなんでここに?」

雨「一護さんをデートに誘おうと思つて一護さん家に行つたら一護さんがどこかへ出かけていると言われたので探していたんです。そしたら織姫も同じ理由で一護さんを探していたんで一緒に探していたら一護さんがあの女によって箱に閉じ込められたところを目撃して一護さんを解放するために後を追跡したんです。」

織姫「一護君、大丈夫?」

一護「俺は大丈夫だけどあいつは大丈夫ではなさそうなんだよね。」

織姫・雨「あいつ?」

俺が指で指すと二人がそちらに向いた。

リルカ「…ひぐつ、うぐつ、一人にしないでよ。」

織姫・雨「……………」

二人は顔を見合わせてリルカに近づいた。



二人はリルカと何か話し始めた。

女3人の会話を盗み聞くのはマナーが悪いので耳を塞いで背を向けた。

しばらくすると肩が叩かれて俺は女性陣に向いた。

一護「話は終わったか？」

織姫・雨・リルカ「「うん（ええ）（そうよ）!!」」

喧嘩が起きずにホツとしていたら

織姫「そういうことだからギョクにリルカちゃんを会わせたいんだけど良い？」

一護「うん？なんで？」

意味が分からずに聞き返す。

織姫「だつてリルカちゃんも私達と同じなんだものギョクに合わせるの当たり前でしょ？」

：：え??でしょ?リルカもソツチ側なの?：：いや原作でも好意を持っていたから当たり前かあ、どうしよう?死ぬまで逃げ切れるかなあ?まあ、頑張りますか。

一護「分かったよ。できる限り早くしてくれよ。」

織姫・雨・リルカ「「うん（わかってます）（わかっているわ）!!」」

3人はその場に座ると目を閉じた。

2〜3秒経つと3人は目を開ける、3人とも霊圧が増えている。

リルカも織姫と雨に並ぶ霊圧を獲得したようだ。あとなんかギョクが力を与えていたしそれに関してはいいけどことあるごとにギョクが水着やらなんやらのファッションショーを開催してきて俺に女性陣の色んな恰好を見せてくるがそれも別にいいよ?でも相当な頻度で温泉に入つて全裸見せてくるのはやめてほしいんだけど?

ギョク（嬉しいですよね?）

一護（嬉しくないんだけど?）

ギョクがそんなことを言ってくるので否定した。

いやまあ俺も男だから美少女達の裸を見られることに関して嬉しくないと言えば?になるけど。

前世で死んだのか死んでないとかそうでないにしろズルして2度

目のそれも主人公に憑依転生した以上俺はどこまでいつても異物でしかないのだからハーレムを作るとかあつてはならない。

故に最終的に一人で死ぬことになるだろうけど別にそれはいい。

彼女たちには悪いとは思うが俺は彼女たちの気持ちには答ええない。

織姫「リルカちゃんつて普段どこに住んでいるの？」

リルカ「…一人暮らしよ最近バイトをやめることになって親からの仕送りも少なくなってきたから今住んでいるところから引越さないといけないけど。」

織姫「じゃあ私の家に引っ越さない？」

リルカ「…いいの？」

織姫「うん！」

雨「じゃあ家でアルバイトでもしますか？喜助さんも完現術者の人がバイトするって聞けば喜んでOK出しますよ？」

リルカ「…わかったわよ」

俺が再度覚悟を決めている間になんか女性陣は話をまとめていた。それから数日が経って学校での出来事…おいそこ俺が能力使って学校サボっているとか勘違いしてただろ!!さすがにそんなことはしていないわ、ただ授業中にギョクに色々勉強見てもらっていただけだわ。

担任「はあくいみんな席に付けよくホームルームを始めるぞ」

担任教師の一言で朝の喧騒のうるささがゆっくりとだが小さくなった。

担任「さて今日はおまえらに嬉しいニュースがあるぞく聞きたい奴いるか」

男子1「はいはく聞きたいです」

男子2「俺も俺も!!」

女子1「何ですか？先生？」

担任「フフフ、それはなくなんこのクラスに2人も転校生がくるぞ、男子どもは喜ばよなんと両方美少女だぞ!!」

一護を除く男子共『うおおおおおおおおおおお!!!』

女子達『うるさいわよ!!野郎共!!』

女子1「てか黒崎は騒いでないわね？」

女子2「まあ、あの井上織姫に目をつけられているからね。」

女子1がそんなことを言うと言と野郎どもが

男子1「その話はやめろ！女子達よ!!」

男子2「そうだ！昼休みに巨乳美少女とのイチヤイチャを見せつけられる俺たちの身にもなってくれ!!」

モテない野郎どもの怨嗟の声と嫉妬の視線が俺に向いたが無視する。

男子3「だが俺たちは毎週5日間は地獄の日々を過ごしていたが!!」

男子4「そうだ！それも今日で終わりを告げる俺たちは転校生と仲良くなり念願のいちやらぶ学校生活を謳歌するのだ!!」

女子達『なんてみつももない…』

一護を除く男子共『やかましい!!今まで乾いた学校生活を送り続けた俺達の苦痛を知らないのに憐れんだ目で見るとんじやない』

女子1「それはそうと黒崎って井上さんと付き合わないの？結構いい感じなの？」

一護「いやまあそれはちよつと面倒な状況に巻き込まれていてね付き合えないんだよ。」

女子2「面倒な状況？もしかして他に好きな人がいてその子と井上さんが喧嘩しているとか？」

一護「いやそういうんじやないんだよ。」

男子1「そうだけ、いくら黒崎でもそんな漫画や小説のような出来事起こるわけないだろ？」

一護「…ッ」

俺は男子生徒の何気ない言葉で内心を渦巻いた複雑な感情を悟らせないようにした。

担任「おいおいお前ら嬉しいからって騒ぎ過ぎだぞ、それに早く美少女転校生たちと会いたいだろう？さあ入ってくれ。」

ガラガラ

担任の合図で俺がよく知る二人の女子生徒が入ってきた。



雨・リルカ「彼氏はいません（いないけど）許嫁ならいますよ（いるわよ）。」

野郎共『…燃え尽きたぜ…真っ白にな…』

一瞬で真っ白な灰のような粉になる幻が見えるくらいの絶望が男子生徒全員に襲い掛かった。

女子1「まあ、あれだけ綺麗だといいとこのお嬢様たちだし家の繋がりを作るために許嫁がいるのが普通よね。」

女子2「そもそも黒崎や石田君クラスの顔とスペックがあるくらいじゃないとあの二人と釣り合う訳ないのに何夢見てんのよ。」

野郎共『やめて!!俺達の心のライフポイントはもうマイナスだ!!』  
野郎共は意気消沈したので女子達が質問をした。

女子1「はいはい!その許嫁ってどんな人ですか?」

一護（どうしてそう男子達にとどめを刺しにかかるんだ?）

野郎共（いつそとことんやってくれそうすれば俺たちは踏ん張りがついて現実を見ることができ…）

男たちは悟った、俺たちは現実を見て前を向いて歩きだすんだといつまでも夢幻を掴もうとしようとする幼い自分たちを卒業するんだと彼女達のこの質問の答えで未練を断ち切るんだと理解した。

だが現実是非常だった、質問の答えはより残酷な現実に直面するだけだった。

雨・リルカ「許嫁はそこにいる黒崎一護さんです（よ）」

野郎共『くううううううううううううううろろろろおおおおおおおおおささささささああああああきききいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!!!!!』

男子達はまるで虚のような怨嗟の塊のような存在になり下がった。

一護「うるさいぞお前ら…」

野郎共『黙れええええええ!!お前は井上さんという人類の至宝たる巨乳美少女とのいちやらぶ学校生活という神より与えられし宝がありながら二人の美少女許嫁までいるとかふざけてんのか!!?』

一護「…いやそんなこと言われても許嫁の件は俺認めていないか

らね？」

ブチッ!!

何かが切れた音がした。

野郎共『そうかそうかどうやら貴様は全男子を敵にまわしたいようだなあ…』

女子1「みつともないわよ男子共。というかそれで井上さんと付き合えない面倒ごとって親が決めた許嫁がいるからか。」

女子2「というか井上さんはそのこと知っているの？」

一護「知ってる、てか知って二人と手を組んでいる。」

女子達『なんで!?!』

一護「昼休みの時に聞けばいいんじゃない？」

〜昼休み〜

女子1「やつとまとまった時間が来たわね。さて今朝の質問の続きだけどなんで毒ヶ峰さんと紬屋さんは井上さんと手を組んでいるの？」

雨「それは一護さんが私達どちらかと結婚したからなので織姫とも停戦協定を結んで一護さんにふり向いてから決着をつけようと思っただけです。」

リルカ「ええ、頑張って3人でアプローチしているけど成果があまり出ないのよ。」

女子2「黒崎って女に興味ないのかな？」

雨「そういう訳ではないのは理解していますけど何故か教えてくれないんですね。」

リルカ「まあ、それで諦めるつもりは毛頭ないけどね。」

女子3「そ、そうなんだ。」

雨「それはいいんですけど一護さんはどこにいるんですか？」

女子「黒崎なら阿保男子共と戦争しているんじゃない？」

雨・リルカ「戦争?」

〜体育館〜

野郎共『くたばりやがれええええええええええええええええ黒崎一護お  
おとおおおお  
!!!!!!』

一護「しつこいぞ!!」

怒りと嫉妬と憎しみを身に纏っているような感じになっている男子共の攻撃を捌きながら一撃で意識を刈り取るのだがすぐに立ち上がり殴り掛かってくるのでウンザリしているところだ。

心臓、首、股間部分と言った急所を狙って攻撃してくるため  
ブルート・ヴェーネ  
静血装で防御している。

おい大人げないとか言うなよ。向こうは数のごり押しできているからできる限り怪我したくないんだからこれくらい許してくれや。

一護「てか後輩と同学のやつらなら分かるがなんで先輩方まで参加しているんですか!!?」

野郎1「話は同胞達から聞いたぞ!黒崎一護!貴様は巨乳美少女とイチャイチャ学校生活という大罪を犯しておきながらさらに二人の美少女許嫁の嫁もいるとか言う大罪を重ねる愚かさを罰する!!」

一護「そんなことを言われても知らないですよ...」

野郎2「くっそ...なぜ神は黒崎という顔も身長も筋肉も才能も美人な嫁も全部揃った完璧なものを作ってしまったんだ!!」

野郎3「神は錯乱している!!今日黒崎というすべてを手に入れて思上がった傲慢な悪魔の王を打ち滅ぼすことで神の目を覚ますのだ!!人間の真の力を見せてやるのだ!!」

一護「思いついた覚えもないですし悪魔でも何でもないですよ俺は...」

割と好き放題言われているが客観的に見て俺の状況を見るとそうなるなと思うが迷惑極まりないな。

というか空座町が重霊地だから霊的な力が働いて理性の制御ができていないのか?

もしそうならここで一回完全に心圧し折っておく必要があるのか?

俺は覚悟を決め拳を固める。

そう思ってたら

???『待て(待ちなさい)!!』

一護含む全員『誰だ!!』

全員で入口を見る。

雨竜、チャド、織姫、雨、リルカが居た。

助けに来てくれたのはいいのだが一つ言っていていいか。

一護「お前らなんでそんな変な格好とポーズ取ってんの？」

そう、何故か5人は滅却師の白の装束をベースとした衣類と各個人のパーソナルカラーの仮面を身に纏って戦隊もののポーズをとっているのだ。

カツコイイっちゃカツコイイんだけど男2人に対し女3人という異色の戦隊だな。

野郎1「き、貴様らは…!!」

一護「…え？知ってんの？」

俺は思わず阿呆共に聞いてしまった。

雨竜「僕たちは滅却戦隊クインブリンガーだ!!」

一護「無駄にカツコイいな。」

俺は思わず突っ込んでしまった。

野郎1「やつらは半年前から現れた4人組の集団だった、俺達が前を闇討ちしようと計画し襲撃一歩手前で表れては妨害してくる恐るべき連中だ…!!」

一護「お前ら全員何しているの？」

阿保共の闇討ち計画もそうだが雨竜たちも雨竜達で何しているの？

雨竜「罪なき人を集団でよってかかって暴力を振るおうとする悪逆の徒よ我々が今ここに滅却しよう!!」

一護「雨竜お前は何しているの？」

雨竜「黒崎君、僕の名は雨竜ではないクインホワイトだ。」

一護「そうっすか…」

俺は雨竜の反応にげんなりして返す。

チャド「さてそろそろ覚悟はいいな？」

一護「チャドお前も何をやっているんだ？」

チャド「俺の名はクインブラウンだチャドではない。」

一護「お前着ている服の色白なのに名前茶色とかそれどうなの？」



俺は皮肉としか言いようしかないのに突っ込まざるを得なかったので突っ込んだ。

織姫「モテないからってみつともないことをしている男子達を浄化してお仕置きだよ!!」

一護「織姫お前もこんなことをするタイプではないだろ?」

織姫「黒崎君、私の名前はクインオランジエだよ決して井上織姫ではないよ!!」

一護「なんでお前は追加戦士っぽい名前なんだよ。」

織姫の追加戦士っぽい名前に突っ込んでしまった。

雨「さてモテない悲しい男達、私が浄化してあなたたちを救いましょう。」

一護「雨なんで君もこの馬鹿騒動に参加しているの?」

雨「黒崎一護、私の名前はクインブラオです。雨うるではありません。」

一護「... そうですか。」

ツッコむ気力がだんだんなくなってきたがあと一人だ。

リルカ「みつともない豚ども、浄化して僕に加えてやるわ光栄に思いなさい!!」

一護「リルカも君はなんで参加しているの?」

リルカ「あたしの名はクインローザよ二度と間違わないで!!」

一護「さつきから女性陣の名前のカラー部分がドイツ語なのなんで?」

俺は思ったことで突っ込んだ。

滅却戦隊『5人揃って滅却戦隊クインブリンガー!!』ドドン!!

ヤロー將軍「クインブリンガー! 我らの悲願を邪魔はさせない!!」

雨竜「お目たちの目的! なにがなんでも食い止めて見せる!!」

一護「なんでスポコン物の殴り合いしていたのに戦隊ものになっているのだろう?」

あと気づいたのはさつきだけど俺の中に居る人たちがなんかしているんだけど

加速結界は張っているわ、場所が校庭に移動しているわ、野郎共に強化のバフをかけているわ、復活のバフと巨大化の能力を付与してい

るわ、やりたい放題が過ぎるぞ。あと連中や空座町全体に洗脳をかけているせいで最終的に暴れた跡がなくなるので騒ぎの心配もないのだ。あと藍染の監視ができないようにもなっているので至れり尽くせりだがこれだけは言わせてくれ、お前らふざけ過ぎだ……。

雨竜「行くよ!!」

雨竜の宣言で5人は阿呆共と戦い始めた。

俺は邪魔にならない屋上に飛廉脚で避難した。

先陣を切った雨竜は動フルート・ウイ・ネアル・テリエ静血装で強化して飛廉脚で高速移動して戦闘員と化している阿呆に肉薄して魂を切り裂くもので切り裂くが瞬時に再生した。

雨竜「何!?!」

雨竜は驚愕し何度も切りつけるがそのたびに再生した。

他の4人も似たような感じになっているそして戦闘員が鉄の鎖のようなもので5人の手足に巻き付け四肢を拘束した。

ヤロー將軍「フハハハハハハハハハハ！残念だったなクインブリンガーよ！貴様等との戦闘データを基に我々は木っ端の戦闘員ですら肉体改造を施し超速再生などを獲得したのだ!!貴様らの最大火力である滅却極大滅光矢でも死ぬことはない!!そして動きさえ止めてしまえばこちらの物よ!!」

雨竜「くっ、だがそれで僕たちが諦めると思ったか!!」

チャド「そうだ!!俺たちは絶対あきらめない!!」

織姫「そんなことで私達が諦めるなんて思わないことね!!」

雨「ホントですよ、今まであなた達は私達の何を見ていたのですか？」

リルカ「そうよ!あんた達ってホントに馬鹿ね!!」

リルカって最近知り合ったのに何でだいぶ戦った反応なのって加速結界内での出来事だからこのやり取りはだいぶやっているのだから。

というかこの感じ戦隊ものでよくある追加戦士のエピソードに近いが……

ギョク（その通りですご主人!!）

一護（…）

そう思ってたら今回の元凶が思念を飛ばしてきた。

一護（… おい、ギョクお前何こんな阿呆なことしているの？）

ギョク（いえ雨竜と茶渡はご主人との模擬戦で強くなれるんですけど雨と織姫とリルカはそうはいかないんで代用処置でこうなりました。）

一護（それはわかった、だが雨竜たちならあの程度の敵なら問題なく倒せるはずだ。あとチャド達が滅却師の力を使っているのは何故だ？）

ギョク（雨竜と茶渡たちの能力を制限してあります、この手の物にありがちな徐々に力が覚醒するパターンのやつです。）

一護（そうか、だが追加戦士は誰がやるんだ？… まさかと思うが俺か？）

ギョク（そうですよ。）

一護（断る。）ギョク（ダメです♡）

一護（しばらく口きかないぞ？）

ギョク（それだけはやめてください!!）

一護（なんで俺までこの馬鹿騒動に巻き込まれなきゃならないんだよ!）

ギョク（そろそろ、追加戦士を出さないと思っていたのとそろそろ雨竜達の覚醒イベントやりたかったんですけどご主人が追加戦士になるといろいろ都合がいいんですよ。）

一護（… 俺の力を制限しないと変な口調で話さないのであればいいが。）

ギョク（分かっています。まずは変身して敵を無言で殲滅してください。）

するとホワイトの黒い完全虚化の仮面が現れたが見た目だけの物のようだ。

一護（やるべきことはわかったけどその感じだと俺しばらくの間他メンバーに誤解されるやつじゃん。）

ギョク（大丈夫ですよ!）

一護（不安だ…）

俺は内心で不安しかないがやらないと話が進みそうにない。

俺は仮面を被り完現術を発動してブレソルの滅却師の黒装備を身に纏った。

五角形の滅却十字の鏢の剣を媒介に黒い霊子の弓を形成して光の雨で5人を拘束しているやつも含めた戦闘員を一掃した。

ヤロー將軍「ッ!!何者だ!!」

一護「……………」

俺はとりあえず黙って5人のほうに視線を向ける。

雨竜「あれは誰だ？」

チャド「何故俺達を……………」

織姫「どうして？」

雨「あなたは一体？」

リルカ「何あいつ？」

一護「……………」（なんかあいつら俺に気づいていないけど黒コートを知っているはずだけど？）

ギョク（今の雨竜たちは今のご主人のことはご主人と認識できないので注意してください。）

一護（そういうことは先に行ってくれ）

俺は内心でギョクのやりたい放題ぶりにげんなりした。

ヤロー將軍「何者だが知らんがその力はクインブリンガーと同じもの!!なら負ける道理はどこにもない!!」

中ボスとかした阿呆が剣を構えて切りかかってきたが  
動 静 血 装で肉体を強化し黒い霊子の弓を五角形の滅却十字の鏢  
の剣に戻し受け止めた。

受け止めた衝撃で周りが吹き飛んだが特に微動だすることが無かった。

將軍「なん…だと……………」

何故か阿呆は驚愕している。

一護（何故驚愕している？ただ受け止めただけなの？）

ギョク（ちなみにご主人が今戦っている將軍は今の状態の雨竜達で

は最大威力の技を直撃させる以外でダメージが通らないんですので真つ向勝負でご主人が微動だにしないので驚いているんですよ。)

一護 (設定ミスり過ぎでしょ? 何やってんの?)

受け止められた阿呆はすぐに距離をとり叫んだ。

將軍「くっ!? どんなトリックを使ったのかは知らんがこれで終わりだ!!」

すると阿呆將軍が何やら眩き始めた、…。うん? これは…。あれだな。

將軍「千手の涯 届かざる闇の御手 映らざる天の射手

光を落とす道 火種を煽る風

集いて惑うな 我が指を見よ

光弾・八身・九条・天経・疾宝・大輪・灰色の砲塔

弓引く彼方 皎皎として消ゆ 『破道の九十一 千手皎天汰炮』!!」

詠唱が完了し、無数の光線が対象へ降り注ぐ鬼道、破道の中で九十一番に序列される大技だ。

ギョクさんいくら何でもやり過ぎだよ。

とりあえず、飛んでくる光線と切り落とそうと思いい剣を構えるとギョクが指令を出してきた。

ギョク (ご主人、ここで滅却師完聖体クインシー・フォルシュテンディツヒを使い聖隷スクラヴエライで千手皎天

汰炮を吸収してください!!)

滅却師完聖体でぶっ飛ばせと言ってきてそーいや完聖体を使って戦うのなんて雨竜たち以外で無かったな。

そう思うと使いたい欲求が出てきたので要望通り滅却師完聖体を発動すると同時に聖隷を使い千手皎天汰炮を吸収した。

將軍「な、なんだその姿は…」

一護「…」(久しぶりに使ったけど相変わらずカラスのような靈子の翼だな。)

俺がそんなことを思っていたらギョクが

ギョク (さあ! ご主人、一撃で決めてください!!)

一護 (分かったけど今度からこういうバカ騒ぎの時は俺に許可を取ってからにしてくれよ?)

ギョク(わっかりました!!)

一護(頼むよホント…)

一護「…月牙天衝」

俺は両翼を展開し空へ飛び聖隸を使い翼に周りの霊子を収束させ腕の包帯みたいに巻き付いている布が十字に展開され卍型に変形しそこに黒い霊圧が収束し一直線の光線が阿呆に向かって放たれ断末魔を言わせる事なく消し飛ばした。

…消し飛ばしちゃったけど大丈夫だよね？

ギョク(大丈夫ですよ！だってここ夢の世界ですので。)

一護(いつの間に？)てつきり現実の世界に大規模な幻術でもかけたと思っただけだ。)

ギョク(いえいえいくら私の力でも今はそこまでのことはできませんのでこの程度が精一杯ですよ。)

俺達がそんなやり取りをしていると

將軍「うおおおおおおおおお!!!!!!許さんぞ！ゴミムシがあああああ!!!!」

いや確かに戦隊だと倒されると巨大化復活は定石だけどどうすんのこれ？

ギョク(ご主人ここは夢の世界なんでご主人の望む様々なことができるのですよ。)

一護(色々ねえ、じゃああれでも使ってみるか)「…こい『黒縄天譴明王』」

俺がそう望むと巨大な鎧武者、明王を召喚した。

俺は空を飛んで明王の胸部分で制止すると明王に吸い込まれた。

そこは何もない銀の台座のようなものがある以外何もなかった。

俺は銀の台座に乗って剣を構えた。

その動作に合わせて明王も剣を構えた。

將軍「ゴミムシがあああああああ!!!!死ねええええええええ!!!!」  
阿呆が剣を振るってくるがこれなら剣で受け止める必要はないな

俺は構えを解いて剣を素手で受け止めた。

將軍「そ、そんな馬鹿な。」

一護（この阿呆なバカ騒ぎを終わらせませますか。）

一護「… 残火の太刀・東：旭日刃」きょくじつじん

俺の一言で明王の刀に膨大な熱を刃先の一筋だけに極限まで集約させて阿呆を切り裂いた。

將軍「ぐあああああああああああああああ！！！！」

今でも死なないとは夢の世界は何でもありだ！でももう終わらせる。

一護「… 残火の太刀・北：天地灰尽」てんちかいじん

明王の刀を横薙ぎに一閃させ、旭日刃を飛ばしその延長上にあるものを消し飛ばした。

一護（終わり？）

ギョク（終わりですよ）

一護（そうかそうかじゃあ今すぐに俺の精神世界へ行こうか）

ギョク（ご、ご主人… も、もしかしてお、怒っています？）

一護（おうとも）

ギョク（ご、ご主人話し合いましたよ！！）

一護（こんなになるまで黙っていたやつと何を話し合えど？）

ギョク（いいいいいいややややあああああああああ！！！！）

俺は精神世界に行ってギョクを思いっきり叱ってその日ばそれ以上のは何も起こらなかったので安心した。

15話：「みんなの力を借りたいんだけど良いか？」

あの馬鹿騒動から1年経った7月頃、俺たちは中学3年生になり今は高校受験の真っ最中だ。

今日は俺・雨竜・チャド・織姫・雨・リルカ・たつきの7人で雨竜の家で勉強会をしている。

一護「さていったん休憩にしようぜ。」

雨竜「全くどうして僕んちで勉強会をしようとか言い出すんだ。」

一護「だって俺んちでやろうにも織姫たちが花梨と遊子の相手勉強会にならないし他で7人以上入る部屋がある家なんて雨竜の家しかないんだから。」

チャド「すまないな雨竜。でもおかげで集中して勉強ができる。」

雨竜「そうかい？なら良かったよ、この無駄に広い家でも役に立っただな。」

一護「お前、相変わらず父親の事嫌いだよな母親のことは好きなのに。」

雨竜「あんな不愛想な分からず屋の父親を好きになれるわけないだろあと母さんのことはいいだろ!!」

雨竜はそんなことを言っているが雨竜も負けず劣らずの不愛想な分からず屋だが。

織姫「でも好きではないけど嫌ってはいないんだよね？本当に嫌いだったらとつくに家を出ているんだし。」

雨竜「……」

織姫「あ、あれ？雨竜君どうしたの？」

チャド「織姫、真正面から正論言われると恥ずかしいと思う人もいるんだ。」

織姫「そ、そうなんだごめんね雨竜君……」

雨竜「謝られると僕の方が困るからやめてくれ織姫さん。」

雨「雨竜、ここはどうすればいいですか？」

雨竜「ああ、ここはこのページの公式を使うと解けるよ雨。」

リルカ「それにしても一護と雨竜とたつきは特に心配はないけど私



「私たちは全員受かるかしら？」

一護「リルカ、最初から諦めるような奴に奇跡は起こらないぞ。最後まであきらめずに足掻いたものに奇跡は起こるんだよ。」

リルカ「分かっているわよ。愚痴くらい言っただって良いじゃない。」  
たつき「それにしてもなんで私までこんなに勉強しているんだ？」

一護「お前、オリンピックの候補生に推薦されて内定しているんだから外国語の習熟は必須なんだよ。だから真面目にやれ。」

たつき「・・・分かったよ。」

俺たちは勉強しながら思念通話をしてたつきにバレない様にしながらたつきを除いた時の俺達の会話をする。

一護（あー、あー、こちら一護オーバー？）

雨竜（一護。ふざけているのか？ちゃんと繋がっているから安心しろ。）

チャド（俺も問題ない。）

織姫（私も問題ないよ。）

雨（私も問題ないですよ。）

リルカ（あたしもよ。）

繋がっていることを確認すると俺は話を切り出した。

一護（分かった。じゃあ始めるが俺の未来視で自分に降りかかる運命が見えたんだけど俺一人だけだとどうにもなりそうにないからみんなの力を借りたいんだけど良いか？）

見えた運命に俺はうんざりしたがみんなの協力があれば乗り越えられるのは事実なのであとはみんなの意見だけだ。

雨竜（：：君がそんな風に言うっことはそれだけの厄介ことだけど、僕は手伝わせてもらおうよ。）

チャド（俺もだ。）

織姫（一護君私達を見くびり過ぎだよ、もちろん手伝うよ！）

雨（ええ、一護さんの役に立てるならどこまでも。）

リルカ（そうよ！一人で抱え込むようなことしないでね！ちゃんとあたし達を頼りなさいよ!!）

みんなの言葉を聞いて俺はしっかりと言葉を伝えた。

一護(みんなありがとう。じゃあ何が何でも強くなってそれを持ち越えてみんなで笑おうぜ。)

雨竜・チャド・織姫・雨・リルカ(「ああ」「おう」「うん」「ええ」「そうね!!」)(「」)(「」)

ちなみにこの念話をしながらも手は動かし続けてしつかりと勉強をしている。

side 戸魂界  
ソウルンサエティ

浮竹「ルキア、第3席に昇進おめでとう…ゴホツゴホツ」

ルキア「浮竹殿!!大丈夫ですか!!隊長職をやめて裏方に回ったのに無理をなさるから。」

浮竹「大丈夫だよ、これでも今日はまだましな方だから。」

ルキア「ならなおのこと休んでください!!」

???「…おっ!聞いたいたルキア!それに浮竹さんも!」

ルキア「海燕殿!!聞いてください!!浮竹殿がまた無理を!!」

海燕「その人が無理をするのは昔からだから何言っても無理だぞ。それより上からの指示で半年後に長期の現世での仕事がお前に入ったから伝えに来たぞ。13番隊第3席朽木ルキア!現13番隊長志波海燕より現令、現世の重霊地の空座町に配属することになった重霊地での職務内容は虚及び整<sup>プラス</sup>の処理などを行ってもらおう。」

ルキア「分かりました。13番隊第3席朽木ルキアその指令お受けします!!」

海燕「それと現世に行くとしばらく帰ってこられないから今のうちに知り合いに会っておくといいぞ。」

ルキア「分かりましたでは失礼します…。ところで先ほどから浮竹殿が静かですが」

海燕「うん?そういうえばそうだな、勝手にいなくなる人でもないしどうしたんだ?」

二人が浮竹がいたところを見てみると

浮竹「…」(吐血して仰向けで倒れている)

ルキア・海燕「浮竹殿(さん)——

30分後

!!!!!!  
「」

卯ノ花「何とか一命は取り留めたので大丈夫ですよ。」

ルキア「良かった…」

海燕「あの人…そろそろ自分の体のこと分かって行動してほしいですよ。」

ルキア「そうですね…」

???「…あら？ルキア」

ルキア「姉さま!!」

声が聞こえるとルキアと瓜二つな容姿の女性がこちらに向かって歩いてきた。

女の名は朽木緋真くちきひさな、朽木家の現当主朽木白夜の妻だ。

緋真「白夜様から出張の話を聞いて会いに行こうとしたらルキアが来ていたのでちょうど良かったです。」

ルキア「姉さま、会いに来てくれたのは嬉しいのですがお体は大丈夫なのですか？」

緋真「はい、先ほど診察を終えたんですけど体に異常はないと言われたんで大丈夫ですよ。」

ルキア「そ、そうですか良かったです…。兄さまは何と言っていたんですか。」

緋真『…そうか』としか言っていないでしただけけどあの人内心では心配していると思いますので安心して出張頑張ってください。」

ルキア「はい!!」

~~~~~

恋次「失礼します!!」

白夜「…恋次か入れ」

恋次「はい!」

白夜「…して何用で来た。」

恋次「報告書の作成が終わったんで渡しに来ました。」

白夜「…分かった。そこにおいておけ。」

恋次「わかりました、では失礼します。」

白夜「待て恋次、兄けいに伝えておくことがある。ルキアが重霊地に出張することになった、兄けいは今のうちに会っておけ。」

恋次「…今の俺に会う資格はないっすよ。」

白夜「…そうか、兄けいがそれでいいなら良いが後悔はするな。」

~~~~~

side 現世

7か月後、2月前半、俺たちは高校の合否を貰い全員で確認するところだ。

一護「さて全員で行くぞわかってるな？」

雨竜「わかってるよ。」

チャド「…さていくぞ。」

織姫「全員と一緒に高校生活を送ろうね。」

雨「そうですね。」

リルカ「あたしも合格しているといいけど…。」

たつき「四の五の言っていないでいくぞ!!」

一護「じゃあいくぞ?せくの!!」

バツ!!

全員で一斉に封筒から書類を引き抜いて合否の部分を見た。

全員の書類に合格のに文字が書いてあった。

一護・雨竜・チャド「二よしっ!!」

織姫・雨・リルカ・たつき「二やった(りました)(わ)(よっしや

ああ)!!!」

全員合格だと分かり喜びの声を上げた。

一護「さて、全員が同じ高校に入学することが分かったため何処かで打ち上げとかする?」

6人「二二異議なし!!!」

~~~~~

2か月後

4月それは新たな始まりの月、進学したり社会人となって会社に出勤することに緊張を覚えたりと色々な始まりを告げる月の1つの話をしよう。

水色「…はあ、それで君はどうしてそんなにビビっているんだい?」

僕の名前は小島水色、どこにでもいる普通の16歳の学生だ。  
女性の好みは年上の女性だ。

今日から空座第一高等学校に通う高校一年だ。

啓吾「それは俺達の通う空座第一高等学校には伝説の7人組も入学するからなんだよ!!」

彼の名は浅野啓吾、中学の時から付き合いの友人で見ての通り性格も正反対なのだが何故か気が合って今に至るまでの付き合いになった。

水色「伝説の7人組なんだいそれは？」

啓吾の戯言はいつものことだから好きに話させながらクラス分けを見ようとする。

啓吾「それはな、空座第一中学校に居た男女計7人の集団でな一人がヤバイ噂のあるやつらしいなくてだな。」

水色「ヤバイ噂があるけど僕たちのほうから関わらなければ済む話だろ？」

啓吾「それはそうだけど話は聞いておいて損はないだろ!?まず噂筆頭の黒崎一護この男はな生まれつき髪の色がオレンジ色の生粋の不良で気に入らないと思っただやっはたとえ女でもボコるっていう男でしかも何人もの女を侍らしている全男子の怨敵なんだ。」

水色「女にも暴力つてさすがにそんな人を入学させるか普通？」

啓吾「次に石田雨竜、こいつは黒崎一護の舎弟って言われていても裁縫道具を持ち歩いていて逆らったやつらをその裁縫の針で突いて拷問して楽しむとかいう奴なんだ。」

水色「それもどこまでが真実かわからないやつだけど大丈夫？」

啓吾「そして茶渡泰虎!こいつは外国人の血が入っている男でなんでもトラックの激突を受け止めたとか何十本の鉄骨を受け止めたとかいう化け物なんだ!!」

水色「なんか胡散臭い話過ぎない？」

僕は友人がその情報をどこで仕入れてきたのか心配になってきた。

水色「その噂つてどこまでを信じたらいいかわからないから反応に困るんだけど。あとその3人だけどうやら僕たちと同じクラスの

ようだけど……」

啓吾「……え？」

僕が指をさすと啓吾が言った3人の名前が確認できた。

啓吾「……終わった。」

啓吾は燃え尽きたような感じになった。

水色「落ち着いたかい？」

啓吾「な、何とか復活したぜ。」

僕たちはクラスに来てクラスの席を確認して啓吾が復活するのを待った。

水色「そういえばまだ残りの4人のこと聞けていなかったな。」

啓吾「分かったよ、残りの4人の噂について説明するぜ、最初は有沢竜貴でこいつもイカレテいてな女子空手界の破壊神とか言われていてオリンピックの選手の候補生として目をつけられているらしい。」

水色「それさっきの3人と比べてどこがヤバいんだい？破壊神とかは物騒だけど」

啓吾「それはあの黒崎一護と良くつるんでいるらしいんだよ。なんか暇なときに黒崎一護と一緒に不良をボコボコにしているらしいんだよ。」

水色「そんな噂になっていたら候補生として目をつけられないと思うけど。」

啓吾「毒ヶ峰リルカさんって言ってツインテールが特徴の性格ツンデレ美少女で可愛いものが好きらしい。」

水色「どうしてその子のことはそんなに詳細何だい？」

啓吾「残り3人は割と詳細に情報が精査されているらしくてな空座第一中学校を調べればすぐに出てくる。」

水色「そ、そうかい……」

啓吾「なんで噂になっているのかは黒崎一護が侍らしている女の一人なんだよ。」

水色「てことはその女性も暴力的な噂があるのかい？」

啓吾「いや、そういうわけじゃなくてななんでも黒崎一護がその子

を監禁したとか調教したとかの噂があつてそれで噂が立ったてのが理由だな。」

水色「何度も言うけどそんな噂が立っているのに入学できてる時点で嘘なんじゃないの?」

啓吾「それで次に紬屋雨さんつむぎやうるるで黒髪の知的な巨乳美少女で性格はクーデレで優しい二大女神の片方なんだよ。」

水色「…もしかしてその人も黒崎一護に脅されているとか言わないよね?」

啓吾「その通りなんだよ!!なんでも雨さんの実家を脅しているとかで逆らえないらしいんだよ。」

水色「なんかどんどんと噂に尾ひれついてるけど大丈夫?」

啓吾「最後に井上織姫さんでこの人も雨さんと同じで二大女神と言われている人で、巨乳で才色兼備で性格も女神のように優しくて完璧な女性なんだよ。」

水色「その人は別に黒崎一護と関係なさそうだけど…」

啓吾「いや、なんでも黒崎一護に目をつけられているらしくてな、織姫さんに近づいた男どもを片っ端からボコられているらしいんだよ。」

一護「あんたらか?俺らの話をしているのは?」

するといつの間にか僕らの近くにオレンジ色の髪の男を筆頭とした7人組の男女が来ていた。

啓吾「ぎ、ぎいいいいややややあああああああ!!!!!!」

side 一護

俺達は登校して自分たちのクラスを確認して全員同じクラスだったので大喜びしクラスまで行ったんだがその途中で結構大きな声で途切れ途切れだが会話が聞こえてきた

??? 「…で…黒崎一護…らしく…茶渡泰虎…らしいんだよ。」

その内容に俺たちは足を止めた。

一護「うん?なんか俺達の話をしているやつでもいるのか?」

雨竜「そうみたいだね。意外と物好きな奴がいるようだね。」

チャド「まあ俺と一護は中学でも目立っていたから噂でも聞いたんじゃないか？」

織姫「そういえば私も一護君の噂を聞いたことあったけど真実を知らないと突拍子もない感じになっているんだよね。」

雨「まあ噂なんて私達には関係ないですし早くいきましよう。」

リルカ「それにしても噂になるなんて何かしたの？」

一護・チャド「いや何も？」

俺とチャドが同時に言った。噂もなにも俺たち不良をボコったくらいだ。

たつき「一護と泰虎は犯罪行為をするような奴でもないし単に噂だろ。」

竜樹はそう言つて歩き出そうとして

???「有…竜貴…イカレ…破壊神…毒…峰り…カ…ツ  
インテール…ツンデレ美…女で…らしい…紬…雨…巨  
乳…で性格は…デレで…女神…井上…姫…雨…同じ  
で…女神…巨乳…なんだよ。」

織姫・雨・リルカ「「ちよっと息の根止めちゃおうか（ましよう）  
（てくるわ）（るわ）？」」

一護・雨竜・チャド『やめんか!!』

俺たちは女性陣の怒りを急いで鎮火しにかかる。

一護「落ち着けお前ら」

織姫「これが落ち着いていられないよ!!」

雨「自分の身体情報を他人がべらべら話されるのがどれだけ気持ち悪いかわからないんですか!!？」

リルカ「とうかかなんで性格の情報まで出回っているの!!？」

たつき「3人はまだいいでしょ!!私なんてイカレ破壊神とか言われているんだよ!!？」

雨竜「とりあえず事実確認を取りに行こう。」

チャド「そうだまだ慌てるときじゃない。」

俺達は女性陣の怒りを鎮めるために情報の出どころの所に急いで向かった。



どうも情報の出所は俺達のクラスらしく俺達の事を言ってたやつ  
らも確認できたため話しかける。

一護「あんたらか？俺らの話をしているのは？」

すると話しかけた男の片割れが俺達を認識すると

啓吾「ぎ、ぎいいいややややあああああああああ  
!!!!!!!」

何故か叫び声を上げて気絶した。

一同「・・・え？」

俺たちは全員で呆けた反応をしてしまった。

水色「え、えくとあなた達は？」

一護「俺は黒崎一護だが？お前は？」

水色「僕は小島水色でそこで気絶しているのは友人の浅野啓吾で  
す。」

一護「そ、そうかでちよつといいか？さつき俺達の話をしていたと  
思うけど何を話していたんだ？俺たちは接点がなかったと思うが？」

水色「えくと啓吾がどこからかわからないんですけどあなた達の噂  
を聞いていて僕がそれを聞いていたんですけど基本ぶつ飛んでいて  
信憑性に欠ける物ばかりだったんですけどそこへあなた達が来て噂  
を信じていた啓吾が気絶してしまっただって感じですよ。」

一護「そ、そうかそれで噂ってどんな感じなんだ？」

水色「えつとそれはですね。」

俺は小島水色から聞いた噂について聞いた。

一同「・・・」

全員は呆れたというかなんとも言えない顔をした。

水色「えつと・・・その反応的に真実だったりします？」

一護「女性陣はそれで合ってるけど俺達のは思いつきりデマだから  
な？」

織姫・雨・リルカ・たつき『一護君（さん）（呼び捨て×2）』

水色「そ、そうですね。いくら何でも犯罪している人を入学させ  
るなんてありえないですよね。」

まだ半信半疑っぽいのでちゃんと説明して誤解をすっかり解いた。

水色「そうだったんですか、噂って怖いですね。」

一護「誤解が解けてなりよりだ。」  
なんとか誤解は解けたって思ったのに  
たつき「誤解は解け切つてないわ!!私が破壊神とかの下りは解けて  
ないだろ!!」

一護「・・・え?お前破壊神だろ?」

たつき「・・・よし、一護久々に手合わせしようじゃないか?」

一護「遠慮しておきます。」

俺達がコントしていると気絶していた浅野啓吾が目を覚ました。

啓吾「・・・(。ㇿ)ハッ! 夢か!」

水色「夢じゃなくて現実だよ。」

啓吾「み、水色く・・・:(;´。´。ω´) :ハッ!」

目を覚ました浅野啓吾は俺達に気が付いた。

啓吾「ヒツ、ヒイイイイイ」

一護「殴らないから落ち着いて俺達の話聞いてくれない?」

啓吾「わ、分かりました」

俺達は小島水色に話した内容を再び話して浅野啓吾の誤解も解いた。

くくくくくくくく

sideルキア

ルキア(ここが重霊地の空座町か確かにありえないくらいの霊力や  
虚の気配を感じ取れるな。)

現世の出張に来た私は感じ取れる気配に僅かばかり緊張している  
が己に課せられた命令を思い出し己に気合を入れた。

そして自身の中にある霊圧を使い水を空中を己の足場にし虚の気  
配がある場所に急行した。

だがこの時朽木ルキアは知らなかった、この街には並の隊長格どこ  
ろか総隊長を凌ぐ霊圧を有する化け物を超えたバグが存在している  
ことをそしてそのバグに匹敵する化け物集団がいることを自身はそ  
の者たちが中心となる物語に巻き込まれることなどこの時は思いも  
しない。

斯くて刃は振り下ろされる。

## 現状の主人公たちのステータス

現時点でのバグーの能力一覧

15歳

黒崎一護（憑依）

死神（斬魄刀封印中）、ホロウ虚（封印中）、クインシー滅却師、フルブリンガー完現術者

身体能力

軽く現世最強クラスで完現術をマスターしているため人間でこいつと身体能力で互角なのはこの作品のチャドくらい。

現時点で使える能力

死神の力

斬拳走鬼の内封印中の斬魄刀以外の能力は並の隊長格より遥かに上です。

禁術も含めた鬼道を鉄裁から教わっており、よほどのことがない限りは使用を禁じられております。

基本は詠唱破棄で鬼道を使うがそうしないと威力が高すぎて被害がとんでもないことになるため。

回道も夜一から基礎を教わり独学で、相当なレベルになっ  
ています。

独学で、オリジナルの鬼道を作ったりしています。

白打は夜一から免許皆伝を言い渡されております。瞬閃も体得しており更に自分の得意とする属性の瞬閃を覚醒させており属性は光、名は月閃瞬閃げっせんしゅんこうといいパワー、スピード、破壊力を極限まで高めることができる。

歩法も精神世界で全ての歩法の全部乗せを作るため全ての歩法を徹底的に鍛え上げたためとんでもないレベルに達している。

剣術もおっさんやホワイト、浦原喜助と撃ち合い続けているのと日々の鍛錬でこれも上記3つに劣らないレベル。

滅却師の力

基本能力は幼少期から鍛え上げているため割愛。

聖文字は完現術完成に伴い完現術を使わなくともシュリフト聖文字をすべて

行使可能、複数同時使用も可能。

滅却師完聖体も完現術を使わずに使用可能で黒い霊子でできたカラスのような黒翼が出現するだけ。光輪は出現しないが聖隷スクラヴェエライは使用可能。

名称は悪魔ルシファーの傲慢

完現術フルプリンクの力

完現術の基本能力はカンスト済みです。

五芒星ソード・オブ・ペンタグラムの外套剣

これは聖文字と滅却師完聖体の性能を極限まで引き出すことが可能。あと付随して滅茶苦茶よく切れる剣もついてくる。

あとおまけで銀城の完現術略奪やバツハの能力略奪が効かない。

石田雨竜の現在のステータス

滅却師

15歳

身体能力

チャドと憑一と比べれば劣ってしまうがそれでもプロの格闘家より身体能力がある。

滅却師の能力

霊子兵装

銀嶺弧雀ぎんれいこじやく

五角形クインシークロスの滅却十字ではなく滅却師十字ではあるが鍛錬によって原作で使っていたものと遜色ないレベル。

形状は原作と同じ。

銀筒ぎんとう

原作と変わらないが基本的に神聖滅矢の補助として使う。

聖噬ハイゼン、緑杯ヴォルコール、五架縛グリッツを主に使う。

飛廉脚ひれんきゃく

憑一と一緒に夜一と鬼ごっこしていたため二人に速度負けしない

レベル。

神聖滅矢ハイリツヒ・ブファイ

威力はそこそこある（手加減した防御の憑一にダメージを与える程

度しかない。ゲルトシユランク  
破芒陣、庫滅陣を使用可能。

本来魂を切り裂くもので行うが鍛錬の末神聖滅矢で発動を可能にした。らんそうてんがい  
乱装天傀

原作と変わらないが鍛錬の果て他人にも使用可能になったが霊圧に差があると無効化される。

ザンクト・ツヴィンガー  
聖域礼賛

滅却師の攻防一体の極大防御呪法。

光の柱に囲まれた結界を張り巡らせ、入った者を神の光によって斬り裂く。

憑一と一緒に習得したがあまり使わない。ブルート・ウィーネアルテリエ

動静血装

憑一が使っているのを見て教わり厳しい修行の末体得した。  
かなりの出力がある。

聖文字

Antithesis  
完全反立

原作と同じで力を願ったため雨竜も精神世界でギョクが師匠しました。

ギョク曰く憑一同様すぐに？み込むため師匠した感じがしないらしい。

the Xlaxis  
万物貫通

the Heat  
灼熱

the Thunderbolt  
雷霆

この3つは憑一の防御をぶち抜きたいと願った雨竜の願いにギョクさんが大盤振る舞いしたため。

(灼熱と雷霆を選んだ理由は中の人ネタ)  
ゼーレシユナイダー  
魂を切り裂くもの

原作だと矢としての使い方が多いがこの作品だと憑一に魂を切り裂くものを矢として放つても効果が全くないためそれなら近接武器として使った方が良く行きつき剣術も憑一の相手をして

きたため剣士名乗れるくらいには劍の腕がある。

主に刺突技が得意で聖文字万物貫通the Xlaxisで貫通力を上げ  
雷Thunderbolt 霆Thunderで自身の動きを雷速にまで上げてフェンシングのよう

に刺突を連続で放つのが基本スタイル。(ただしいつも憑一と虚退治  
しているためあまり使わない。)

滅却師クインシー・フォルシユテンディツヒ完聖体クインシー・レットシユテイル

滅却師最終形態が両翼になったもの。

光輪はないが聖スクラヴエライ 隸は使用可能、聖文字シユリフトを強化する。

名称は天使ミカエルの王

あとオマケでバツハアウスベールンの聖 別が憑一同様効かない。

チャドの現在のステータス

完現術者

身体能力

完現術をマスターしたため原作以上のそれこそバグ(憑一)と互角  
の身体能力を持つ。

完現術

完現術アークセ：加速ル

バグ達と追いかけてっこしているので速度は結構速い。

巨人アルマドラ・ネグラ・ヒガソテの黒鎧

守護の力

腕についてる盾に靈圧または完現術を使うと範囲結界を展開し生  
半可な攻撃を防ぐ。

巨人の黒鎧の本来の力は接触した力の無効化で特殊能力の類は一  
切チャドには効きません。(全知全能the Almightyをも無効にできる。)

ただし純粋なエネルギー攻撃は完全には無効化できない。

また完現術を使用していなくても『ブック・オブ・ジ・エンド』や  
『銀城の完現術略奪』クラスアルマドラ・ブランカ・デル・ディアブロの力を無効化可能。

悪魔の白鎧

攻撃の力

拳に霊圧または完現術を使うと破壊力が上昇する。（具体的に憑一の手加減した攻撃を相殺するくらいの破壊力しかない。）

悪魔の白鎧の本来の力は接触した物の真実の上書きです（要はジヨのオーバーヘブン）。

ただし霊圧に大きな差があると無効化される。

つむぎやうるる  
紬屋雨のステータス

被造魂魄

15歳

身長

154cm

体重

46kg

スリーサイズ

B89

W64

H86

髪型

原作の中学生の時の髪型になっている。

性格

クール系微ヤンデレ

基本憑一の言うことなんでも聞くが憑一に嫌われることはしない。

身体能力

雨竜と互角または少し劣る。

白打

夜一から免許皆伝を言い渡されるほどの実力があり瞬閃を体得している。

精神世界でバグーが習得した月閃瞬閃を色んな意味で地獄だった修行を乗り越えて体得した

鬼道

流石にどこかのバグと違って八十八〜九十番台の鬼道は詠唱ありでなければ使えない。



瞬歩

バグたちと追いかけてっこしているので滅茶苦茶速い。

武器術

後述の装備品との兼ね合いでどの武器を使っても高い技量を誇る。

武装

防具

夜一の刑戦装束とそんなに変わらないが流石に憑一が待ったをかけミニスカ等を追加している。

下着は現世の物で刑戦装束に合わせられているためとんでもないことになっている。

霊圧を込めると動静血装ブルート・ヴィーネアルテリアが発動することができて全身を強化するようになっている。

アームズスリング  
武装の腕輪

腕輪型の特殊霊具

周囲の霊子または自身の霊圧を基に様々な霊子兵装を生成できる。

実はこれ憑一が聖文字 the Enchant the Creation 付 the Arms 与と創造 the Arms を使っておしゃれで頑丈な腕輪に聖文字 the Arms 装を付与して作成したもの。

護符

状態異常用に憑一が作成したもので通常の状態異常を無効にできるだけでなく過去改変クラスの洗脳をも無効化可能。

井上織姫

完現術者

15歳

身長

155cm

体重

46kg

スリーサイズ

B92

W63

H90

## 髪型

原作と同じ長さに髪になっている。

## 性格

原作の性格に積極性と微ヤンデレが加わったが雨同様憑一に嫌われることはしない。

## 身体能力

完現術をマスターしきっていないので一般人と大差ない。(ギョクが織姫のことをライバル認定しているので覚醒こそさせましたけど師匠はしていない。)

完現術：加速ル

バグ達と追いかけてっこしているので速度は結構速い。

## 完現術

盾舜しゆんしゆんりつか六花

6人の精霊のような姿で現れ、彼らを使役し、言霊に乗せて技名を唱えることで技を発動させる事ができる。

## メンバー

椿鬼、舜桜、あやめ、火無菊、梅巖、リリイ

## 技

孤天斬盾（椿鬼）

命中した対象の内側に盾を発生させ、その結合を拒絶し、切断する能力。

双天帰盾（舜桜・あやめ）

覆った対象を、破壊前の状態に戻す能力。その本質は単なる回復・復元能力ではなく、対象に起こった事象を元からなかった（起こらなかった）ことにする能力

三天結盾（火無菊・梅巖・リリイ）

敵との間に盾を張り、攻撃を拒絶する能力。防御だけでなく、高所から落下した際の軟着地にも利用できる。

## 四天抗盾

三角錐状に張った盾に攻撃を受けると盾を爆発させて相手からの攻撃の威力を拡散し、カウンターで相手を攻撃する能力。

メモリーオブ・ジ・エンド

見た目はブックオブジ・エンドの柄と鏢についている紐と柄にあるラインがオレンジになったもの

自身の過去の記憶を媒介に具現化できる。

刀としてのスペックは軽く振るだけで鋼鉄の扉をぶった切れる。霊圧込めると切れ味が上がる。

能力は過去改変で基本制約なしで切りつけたものの過去を改変できる。

また完現術を使わなくとも自身に悪影響を及ぼす時間干渉系の力の無効化。

早い話、ブックオブジ・エンドの上位互換

マインドオブバリア

自身の心を媒介に使う常時発動型の完現術

能力は時間系能力以外のデバフ系能力の無効化

毒ヶ峰リルカ

完現術者

15歳

身長

154cm

体重

44kg

スリーサイズ

B86

W62

H83

髪型

ピンク髪のツインテール。

性格

原作のメンヘラな性格に微ヤンデレが加わったが基本バグーに嫌われることはしないし自分と同じでバグーのことが心から好きな人とは協力してバグーをおとすために共闘する。

身体能力

完現術をマスターしたので織姫と互角。

格闘術

織姫と雨と互角

状態異常耐性

ギョクの手で強化されている

普通の状態異常から改変系の能力が効かない。

完現術：加速<sup>ァクセル</sup>

バグ達と追いかけてっこしているので速度は結構速い。

完現術

ドールハウス

「許可」を司る能力。

ギョクの手によって強化されている。

基本的な使い方は対象の能力の使用を不許可にして封印したりすることができる。

原作同様の使い方でもできる。

その場合は対象者の体にハートマークが付けられ、これが物へ出入りする時の通行証となるが対象が自ら自由に入出力はできない。

出る時はリルカが許可するか、容れ物を破壊することで外に出ることがができる。

他人を封印するだけでなく、自分自身を封印することもできる。

ちなみに能力封印はバグーには効かない。

ドール・フェスティバル。

ギョクが作った完現術で人形を生成、操作したりしたりまた操作に關しては生成しなくてもすでにある人形でも問題ない。

人形の大きさもある程度まで変えられる。

また操作する人形によってその人形の能力が変化する。(例：ドラゴンの人形だと火を吹いたり空を飛んだりでき簡単には壊れないし首の部分を切られないと再生する。他だと飛行系の動物だと風を発

生したりとその人形の特徴の能力が使える。  
また人形を身に纏ってその力を使うことができる。

メゾンドチャン一のスレータス

滅却師クインシーのおっさん（1000年前の姿のユーハバッハ）

担当能力（滅却師）

身体能力

メゾンドチャン一内だと2位

滅却師の能力

基本技能はバグーと互角

聖文字

<sup>the</sup> <sup>Am</sup> <sup>ighty</sup>  
全知全能

基本的には原作と同じだがバグーと同じように望んだ聖文字を生み出し複数同時に使用可能。

滅却師完聖体

バグーと同じで光輪のない黒い蝙蝠のような霊子の両翼が展開する。聖隷は使用可能、聖文字を強化する。

名称は悪魔の王

戦闘能力

あらゆる聖文字と滅却師の能力に大剣を使った戦闘スタイル。

他二人と違って特筆すべきところはないが能力のバランスが3人の中で一番良い。

ホワイト

担当能力（死神＋虚）

身体能力

メゾンドチャン一内だと1位

死神としての固有能力

無限の霊力

霊圧をどれだけ使ってもなくならない。

死神の能力

斬術

斬魄刀

始解

斬月

見た目

原作と同じ

能力

原作の能力に三日月型の月輪を生成し自在に操作する。

卍解

天鎖斬月

見た目

原作と同じ

能力

原作の能力に三日月型の月輪を生成し自在に操作する。（始解より生成量と月輪の切れ味が大幅に上昇。）

白打

メゾンドチャン一内だとぶつちぎり

バグーと同じ月閃瞬間の使い手

歩法

瞬歩

響転ソニート

めつちや速い。

二つの歩法を融合して使用できる。

速度はメゾンドチャン一内だと1位

鬼道

バグーと同レベル

回道も使える。

虚の能力

鋼皮イエロ

くつそ硬い最低でも卍解や滅却師完聖体クラスの霊圧でないと突破できない。

虚閃<sup>セロ</sup>

体からならどこからでも放てる。

虚閃<sup>セロ・オスキュラス</sup>の威力は原作でウルキオラの黒虚閃を消し飛ばしたその倍以上。  
虚弾<sup>バラ</sup>

虚閃の2割程度だが発射速度が異常。

超速再生

腕が切られようが首チョンパされようが大穴空けられようがすぐに生え変わったり再生し完治する。

帰刃<sup>レスレクシオン</sup>

天鎖斬月

卍解の刀はそのまま虚の時の仮面が装着されて戦闘能力が数十倍になる。

また虚としての固有能力が強化される。

この状態だと特殊な能力が効かず物理攻撃か純粋なエネルギー攻撃で無ければ通用しない。

生半可な力では戦いにならない。

虚としての固有能力

破壊

読んで字の如く物理、エネルギー攻撃に破壊能力を付与することができる。破壊力は霊圧の籠っていない鋼鉄の塊なら軽く小突くだけで木っ端微塵にできる。

斬撃、刺突、打撃と言ったものから鬼道や縛道にも付与することができる。

帰刃すると絶対破壊に強化される。この状態だと概念系の力も問答無用で破壊可能。

戦闘スタイル

無限の霊力での無尽蔵とも言える長時間の戦闘を可能にする持久力と斬魄刀、白打、鬼道に虚弾と虚閃そして固有能力を駆使してどんな距離どんな状況でも対応可能なオールラウンダー

真つ向勝負で戦うとメゾンドチャン一内最強、尚他二人はチート能力で対抗してくるのである手この手で対策している。

ギョク（見た目SAOのユウキを大人にしたような姿）  
担当能力（完現術）

崩玉が具現化した存在

15歳

身長

165cm

体重

53kg

スリーサイズ（成長させようとすれば成長できます）

B98

W60

H92

髪型

腰まで届くロングのストレートの黒に近い紫の髪

性格

忠犬みたいな性格

基本バグーの言うことなんでも聞くまたバグーの望みを何でもか  
んでも叶える駄目女

身体能力

メゾンドチャン一内だと3位

白打

ホワイトたちに遅れは取らないレベル。

技

完現術：加速<sup>ア</sup><sub>グ</sub><sup>セ</sup><sub>ル</sub>

速度はメゾンドチャン一内だと3位

能力

崩玉

なんでも願いを叶える能力<sup>カ</sup>

原作で藍染が使っていた物より遥かに高性能。

基本何でもできる。

生み出した能力



ブック・オブ・ジ・エンド

織姫に与えたメモリーオブ・ジ・エンドと同じもの

見た目はブックオブジ・エンドの柄と鏢についている紐と柄にあるラインが紫になったもの

元々はバグーが心から意識していたから欲しい能力と思い改造して覚醒させるつもりだったがバグーが敵が使う力で一番嫌っている能力だと分かったため封印して自分が使うようになった。

刀のスペックとしてはそこの業物以上の切れ味を誇る。

七美德

七美德の名を関する7つの力それぞれだいたいビットル性能

正義

あらゆるものを支配する力

基本的に自身を支配して力の制御を行う。副産物として洗脳の類が効かない。

知識

全てを知る力

望んだ知識を即座に知ることができる。

希望

不屈の力

あきらめない限り死ぬことや状態異常にならない。

純潔

全てを消し去る光と混ざり合ったものを分解し分離する。

救恤

分け合う力。

自身の力を他者に貸すことができる。

また他者の力を増幅できる。

忍耐

停止の力

あらゆるものを停止・固定する力

誓約

管理の力

空間を支配してその空間内の事象を事細かく把握・操作する。

七大罪

七大罪の名を関する7つの力こちらもだいたいブイッテル性能

傲慢

認識した完現術やそれに類する力の完全模倣コピー。複数同時に使用可能。欠点として能力の結果が視認できなければコピーできない。(例：炎などを出すといったものはコピーできるが思考を加速や解析系の能力はコピーできない。)

憤怒

怒りで魂魄と肉体のリミッターを外し限界を超えて力を発揮することはできる。力の上昇倍率は10〜100倍ほど。

ただし最大稼働時間が3分程で一度使うと再使用には3日程のインターバルが必要。

暴食

あらゆるものを喰らい分解し力に変える能力

空間系の能力と組み合わせると4次元ポケットに吸収し力に変換できる。

ただしギョクの技量を超えるものは吸収できない。

怠惰

精神を堕落させ無力化する能力

ただし効果が表れるのに時間がかかる。

時間はかかるが効果は絶大。

色欲

生命力を操る力

回復から蘇生に魂魄修復そして生命力と霊力略奪と言った、およそ命に関することなら何でもできる。

欠点として篡奪の力はそれほど多くは奪えない(せいぜい月牙1発分くらい・・・それでも十分か)

強欲

あらゆるものを奪う力

奪う対象が自身の技量を超えるものだとな奪えない。

嫉妬

あらゆるものを弱体化させ弱体化した分を吸収して自身を強化する。

欠点はあまりに弱すぎるものには通用しない。

戦闘スタイル

崩玉とそれで生み出した七美德と七大罪そして白打とブック・オ

ブ・ジ・エンドの刀を使った接近戦と万能型。

能力スペックはメゾンドチャン一内最強だが他二人はその力の対策をするので勝率はあまり高くない。

## 死神同行編

### 16話：「力を貸せ！死神!!」

入学式の日にも多大な誤解をされていた浅野啓吾と小島水色の誤解を解いた俺達は気が合ったのか普通に仲のいい友人となり1カ月が経つ頃には割と互いに踏み込み過ぎない程度には軽口を叩きあう関係になった。

ちなみに俺は入学式以来毎晩夕食を食べ終わったら街に出て虚を退治したり整プラスの処理をしているが一番の目的は朽木ルキアの搜索をしている。

なんで探しているのかについては言うまでもないだろう。

原作の時間軸だと尸魂界ソウルソサエティに行ったのが夏休みを利用して思いうのでおそらくは死神代行編は早くても4月後半から5月前半に始まるものと予測がつくのでこうして毎晩、聖文字シュリフト The Invisible 透 明 を使い姿を消し空を飛んでいるのだ。

そして俺が今向かっているのはここ数年では探知したことのないタイプの霊圧だった。…いや近しい霊圧なら身近で感じたことがあるな、阿呆喜助と夜一さんと鉄裁さんとよく似た死神の霊圧を感知した。周りには結構な数の虚ホロウの気配がするがそこまでの苦戦している気配ではなかったが近くに虚刀の気配を感じ取ったため急いで急行した。

sideルキア

私はその日いつものように業務に取り掛かっていたが今日の虚の数は普段の数倍はいたため少し手間取ってしまった。

ルキア「縛道の四 這繩はいなわ！ 破道の四 白雷びやくらい！」

私は虚の一体を縄状の霊子で拘束し指先から貫通力のある光線を放って倒し後ろから奇襲してきた虚を素早く斬魄刀で切り裂き倒しできる限り囲まれて退路を断たれない様にしながら立ち回り着実に虚の数を減らしていった。

この調子ならもうじき終わるなど私が思ったその時奇妙な気配を

感じたと同時にこちら一帯に結界が張られた。

なんぞ?と思うのも無理はないがその思いはそれが現れるまでの事だった。

ルキア「な、なんだ?この虚は一体?」

その虚は異質だった。

人間や死神同様の二足歩行で顔には虚特有の仮面を身に付けているが徐々に微々が入り剥がれ始めている。

背からは赤い触手が大量に生えている、何よりその手には斬魄刀のような気配を放っている刀が握られている。

明らかに普通の虚ではないがどうもここに貼られた結界のせいで外部への救援要請を送ることができないでいた。

私がやらなければなるまいと覚悟を決めた瞬間、上空から異質で異様な霊圧を感じたと思つたら緑色の霊圧の光線の雨が降り注いだ。

ルキア「な、なんだ!」

???「よお?無事か?死神?」

いつの間にか私の目の前にはオレンジ色の髪の毛が立っていた。

その男は黒のコートを身に纏い右腰に小剣を差している、髪は橙色で背は4尺8寸くらいで歳は16ほどだ、だが一番の特徴はその顔だ、なにせ海燕殿と瓜二つなのだ。

ルキア「何者だ?」

???「俺?俺は黒崎一護だ?死神」

ルキア「死神を知っている?...いや私が見えているのと先ほどの霊圧なら不思議ではないな。」

一護「手を貸せあいつはどうも今の俺だと倒せねえんだよな。」

ルキア「何を言っている?あれほどの霊圧の攻撃なら倒せているはずだ。」

そう思っていた私だが男、黒崎一護は指を指すと先ほどの虚は攻撃を受けていなかったとばかりに無傷だった。

ルキア「なっ!?!あの攻撃を受けて無傷だと!」

あの攻撃は九十番台の破道と変わらないレベルなのだそれで無傷とはあの虚は何なのだ!?

一護「どうも今の一撃であの虚がお前の持っている刀じゃないとダメージが通らないってことがわかったんだよ。」

「そう言い男は私の持つ斬魄刀を指さした。」

ルキア「…なるほど、あの虚は斬魄刀以外の攻撃を受けない特性があるのか、厄介だな。」

一護「あと、あの刀の特性で超速再生と成長促進能力で急成長するから気をつけろよ。」

ルキア「なぜお前はそんなに落ち着いていられる？それだけの虚を目の前にしているのに？」

一護「俺、あの刀持ちの虚と何度も戦っているから今更なんだよ…。」

ルキア「そ、そうなのか。」

目の前の男、黒崎一護は私よりあの虚と戦っている事実にしり引いた感じに言った。

一護「さて、敵さんも俺達の無駄話に付き合ってくれたがそろそろ来るぞ？」

ルキア「ツ!!」

私が構えると同時に虚は超スピードで私に突っ込んできた。

一護「まあ、自分を殺せる方を優先して攻撃するのは当然の選択だけど俺が無視する道理はないよな？ 縛道の九 崩輪ほうりん！」

一護は黄色い縄状の霊子を放って敵を捉える初級縛道で虚の動きを止めたのだが。

ルキア「お主！どこで鬼道を習った!？」

一護「知り合いの死神」

一護はさらつと言ったが死神が人間に鬼道を教えようにも人間が習得できる類のものではないのだ。

一護「それは後でいいから今はこいつを倒すことを優先してくれ」ルキア「分かった、だがあとで話を聞かせてもらおうぞ!!」

私はそう言いながら拘束された虚を斬魄刀で切り裂いたのだがすぐに再生した。

ルキア「…くつ、やはりこの程度の斬撃では再生するか。」

一護「なあ？お前って卍解って使えんの？」

ルキア「・・・お主卍解も知っているのか。だが私は使えんぞ。」

一護「そうかなら始解はできるか？」

ルキア「そちらならできる。」

一護「ならさつさとしろ、手を抜いて倒せるほどあいつは弱くないぞ？」

ルキア「わかっておるわ！たわけえ!!」

一護「そうかいなら縛道の九 崩輪」

一護はそう言い再び黄色い縄状の霊子を放って敵を捉える初級縛道で虚を拘束した。

一護「今だ!!」

ルキア「舞え『袖白雪』」そでのしらゆき

私が解号と名を呼ぶことで斬魄刀は刃も柄も鏢も純白で柄から伸びる帯も白の刀に変化した。

一護「こんな時に言うのもなんだけど綺麗な刀だな」

ルキア「お主見る目があるな、この袖白雪は現在尸魂界で最も美しいと言われている斬魄刀だ。」

一護「現在尸魂界で最も美しいか納得の美しさだな。」

一護は私の袖白雪を見て綺麗な刀と評したが自分の愛刀である斬魄刀を褒められて私は大変気分がいい。

一護「嬉しいのは分かるが集中してくれ」

おっと嬉しくて有頂天になったがこの虚を倒さねばと私は意識を切り替えて袖白雪の刀身に冷気を纏わせて拘束もろとも切り裂いた。

虚は再生しようとしたが切り裂かれた箇所は凍り付いているので再生が始まらないのだ。

一護「冷気操作の類の刀か？」

ルキア「一回見ただけで袖白雪の能力を見切ったのか。さすがだな。」

この男の洞察力には呆れてきたが今はその洞察力は頼りになる。

一護「あとあの虚は簡単には倒されないから油断するなよ。今も凍った傷を自ら抉って再生しているぞ。」

一護の言う通り虚は凍った傷を抉って乱暴なやり方で傷を回復していた。

虚「グルルルルあああああああああああ!!!!!!」  
そして虚は咆哮を上げると肉体を変質を始めた。

より虚から人間の姿に近くになり背の触手がどんどん小さくなり腰の部分に何か刀?のようなものが出て来ているのと仮面が半分近く剥がれ落ちている。

ルキア「なんだ?」

一護「あの刀には成長促進能力があるって言ったよなその能力で進化しているんだ。」

ルキア「再生して進化とは厄介な...」

一護「分かるよ、これのせいで戦いが長引くんだよ...」

ルキア「そんな気概でよく勝っているな。」

私はそうツツコんだがそれでもあの虚の同類に勝ち続けていると言うのは本当だろう。

でなければとづくに私たちは死んでいるのだから。

虚「グルルルルあああああああああ!!!」

虚は叫びながら先ほどより速度を増して突っ込んできた。

一護「ッ!?まずい!!避ける!!」

一護の声で避けようとしたが何とか致命傷を避けることしかできなかった。

ルキア「ぐあああああ!!!」

私は脇腹を抉られて近くの壁に叩きつけられた。

一護『縛道の一 塞、縛道の九十九 禁、縛道の四 這縄、縛道の

九 崩輪、縛道の六十一 六杖光牢、縛道の六十二 百歩欄干、縛道

の六十三 鎖条鎖縛、縛道の七十九 九曜縛、縛道の七十三

倒山晶』!!」

一護は拘束系の縛道の重ね掛けで虚の動きを止めた。

一護「大丈夫か!!?」

ルキア「大丈夫に決まっておろうたわけが...」

一護「今傷を治す!!」



すると一護は回道を使い抉れた傷を再生させた。

一護「これで大丈夫だ。」

ルキア「・・・そ、そうかなら早くあの虚を倒さねば」

一護「いやお前は休んでいろ。」

ルキア「だがあの虚は斬魄刀で無ければ攻撃が効かない以上私がやらねばなるまい。」

一護「いやどうしようがおまえじゃあいつは倒せないんだ、なら俺がやる。」

ルキア「攻撃が効かないのにどうする?」

一護「いやあるだろこの状況を切り抜ける方法が」

すると一護は私の斬魄刀を指を指した。

一護「力を貸せ死神」

力を貸す・・・もしや死神の力の譲渡か?だがそれは尸魂界では禁止されていることだ・・・だがこの状況を切り抜けるにはそれしかない。

ルキア「分かった、だがあくまで譲渡するのは半分だ。」

一護「十分だ」

ルキア「では始めるとしよう、私の斬魄刀をお前の胸に突き刺すことで譲渡が完了する。」

一護「わかった、じゃあ力を貸せ!死神!!」

ルキア「死神ではない!私の名は朽木ルキアだ!!」

そして半分の力が譲渡され一護に死覇装と斬魄刀が出現したが

ルキア(な、なんだと?ぎ、斬魄刀が二本!?)

そう一護の腰に帯刀されている斬魄刀が二本あるのだ。どういふことかと考えていると一護が

一護「あとは任せろ。」

ルキア「ああ、任せた。」

私は一護の戦いを見届ける。

side 一護

ルキアと虚刀虚と戦闘したんだけど初撃で斬魄刀以外の攻撃無効化の能力があることがわかってこの虚がメタスタシアを改造したも

のだとわかりウンザリした。

ルキアのサポートに徹していたがルキアが不意打ちで戦闘不能にされてしまったため原作通りのやり取りをして死神の力を譲渡されルキアが言った通り半分の方が渡されると魂の奥底の封印が外されて死神の力が解放されて死覇装と斬魄刀が出現したのだが

一護（…なんで斬魄刀が二本もあるの？）

俺は場違いなことを考えていると

ホワイト（お前!!ことあるごとに俺に突っかかってきてんのにこんな時でもしゃしゃり出てくんな!!）

ギョク（いいでしょ!!あんたと私の作りって似たようなものでしょ!!）

中の人たちがギャアギャアうるさいのだが理由は分かった。

一護（要はあれだな。ギョクの元となった崩玉がホワイトと同じ作りだったから斬魄刀がもう一本出現したんだな。）

ギョク（それにご主人が死神の力に目覚めると私達出番なくなるじゃない!!最近の戦闘で使っているのって鬼道での戦闘ばっかで完現術はよっぽどのが無い限り使わないのに死神の力まで使えるようになったら私の存在価値無いじゃない!!）

ホワイト（…ギョク、お前いつもことある毎に一護の願い叶えているのに何言ってるんだ？）

ギョク（それはそれこれはこれ）

ホワイト（我儘過ぎるだろ）

一護（中の人達がうるさいのでさっさと終わらせますか。）

俺はルキアに一言言ってから戦闘を始める。

一護「あとは任せろ。」

ルキア「ああ、任せた。」

ルキアはそう言ってきたので俺は虚へ意識を切り替える。

一護「さて、あまり時間は描けていられないんで速攻で終わらせてもらうぜ?」

俺は腰に帯刀されている斬魄刀を二本抜刀した。

ちなみに右には精神世界で使ってた打刀型の斬魄刀で左にはもう

一本の斬魄刀で右と同じ形状の鍔で黒紫色の柄糸の脇差しだ。

一護「いくぜ? 『不知火』!!」

肉体を強化して爆炎を思わせる踏み込みから瞬歩、完現術<sup>ア</sup>：加速<sup>ク</sup>、飛廉脚を融合した未完成の歩法で突っ込んで右の刀で袈裟切りを放った。

虚「グルルルルあああああああああ!!!」

虚は虚刀で刺突を連続で放って不知火を防いだが一気に距離を詰めて虚刀を振るえない距離にまで踏み込んで左の脇差を振るい虚の首を浅く切り裂いたが切り裂かれながら拳を振るってきたのでぐさま距離をとった。

一護(今ので斬魄刀の攻撃以外の無効化以外は純粹な基礎能力が高  
いぐらいか?)

そう分析しているとまた進化が始まって完全な破面<sup>アランカル</sup>みたいな存在  
になったが言語能力はやはり改造故にないと思われたが。

虚「グルる… わ… 我が… 名は… メ、メタス… タシア…」

一護(っ!?!こいつ知能も獲得したのか?)

メタスタシア「あ、合わされ『同化<sup>テンタクロ・デ・アシミラシオン</sup>の触手』」

するとメタスタシアは腰の破面の斬魄刀を抜刀し解号と名を呼び  
帰刃<sup>レスレクシオン</sup>した。

斬魄刀が体に突き立て斬魄刀を吸収すると背中や腕から触手がウ  
ジャウジャ生えてきた。

一護(見た感じの能力は触手の自在操作と元々変化する前まで持つ  
ていた斬魄刀破壊の能力と融合同化能力か?)

俺は改造メタスの能力を予想して触手に触れないようにしながら  
ルキアを護ってこいつを倒す方にシフトしたのだが。

改造メタス「『超越せよ』」

すると改造メタスは虚刀を構えると解号を唱えその力を解放した。  
虚刀をも取り込んでさらなる力を得て進化した。

改造メタス「超越<sup>テンタクロ・デ・アシミラシオン</sup>の同化<sup>テラセネンチア</sup>の触手」

全身の触手はタコやイカのようなぶつといものから刃物と口がつ  
いた細い管のような形状に変化した。

虚刀を取り込んで帰刃を超えた何か別の領域の力を得た改造メタスはその触手を高速で振るってきた。

俺は結界を張って攻撃を防いで敵の能力の解析に入った。

一護(管についている口と刃と管の振り回しによる物理攻撃と管についている口の吸息により、強烈な吸い込みを伴う風の渦の発生と息を高圧で吐き出して攻撃する空気弾の主に3つあるのか特殊能力はまだわからんがとりあえず厄介な能力は使わずに倒すのが吉か。)

俺はこの状態で斬魄刀以外の能力が通用するか確認した。

一護「破道の六十三 雷吼炮」

俺は雷を帯びたエネルギー弾を放って結果の確認した。

すると虚は回避しようとして避け損ねて軽く体を焼く結果になった。

一護(攻撃が効いた!?!てことは最初の特徴が消えて元の能力に戻っているのか?なら斬魄刀を使った接近戦は危険だな。)

俺は即座にルキアの結界を数百の断層にして二振りの斬魄刀を納刀した。

そしてすぐさま五角形の滅却十字を媒体にして銀色のデザートイーグル型の銃を生成し右手に構えた。

俺は青白い弾丸型の神聖滅矢ハイリツヒ・プファイルを放ちながら左で鬼道を打ちまくってダメージを蓄積させた。

改造メタスも超速再生で回復するが徐々に回復が追い付かなくなっている。

これ以上時間をかけるとルキアがヤバいので早く片をつける。

一護「破道の九十・改 黒棺・奈落!」

通常の黒棺で相手を取り囲んだらその重力の力場を圧縮することで圧縮した対象を破壊する大技で改造メタスを取り込み圧殺した。

俺は霊圧探知を最大限発揮しながら警戒を解かずし周りを探索したがそれらしい反応はなくなったので警戒を緩めた。

結界を解いてルキアの怪我をちゃんと治療しようと思ったがいつの間にかいなくなっているが

一護(…なるほどあの人が連れて行ったのかなら問題はなさそう

だな。)

俺は誰が連れて行ったのか理解して俺は家に帰宅した。

side???

「フハハハハハハハ、ようやく彼の死神の力を覚醒に成功した!!」

「えらくご機嫌がいいですね、隊長」

「だが帰刃して虚刀を取り込んだ結果我々が最初に改造した能力に戻ってしまったことは改良しなければだな」

眼鏡をかけた男はハイテンションになって笑い糸目の男は眼鏡の男の反応を見て暢気な反応をしバイザーのようなものをつけた男は虚の改良案を考えていた。

17話：「使い慣れているから困ることはないな。」

次の日学校に登校した俺はいつメン（雨竜、チャド、雨、織姫、リルカ）に死神の力を得たことを伝える。

一護（オーバーオーバーこちらエージェント一護）

雨竜（毎度ふぎけないと気が済まないのか？君は）

一護（ギョクのおふぎけに付き合っているお前らに言われる筋合いはないぞ。）

チャド（まあ、あの人には恩があるから付き合うのは構わないだろ？）

一護（まあそれはそうなんだけど俺に一言もなくやるのはやめてくれ。）

織姫（ごめんね一護君。）

一護（謝られると困るのは俺なんだよね。）

雨（でもなれると楽しいですよ？）

一護（慣れたくないですよ俺は）

リルカ（楽しいわよ？）

一護（楽しくないよ、俺は？）

雨竜（：で君が有沢さんを抜いた僕たち5人を呼んだってことはこつち絡みか？）

一護（ああ、それに関してはちよつといいか。）

俺はそう言った瞬間に加速世界を展開した。

この技は一言で言うくとアクセル・ワールドのバースト・リンクだ。

俺ら6人の周囲の空間が青い空間に変わり思考を10000倍の超加速による疑似時間加速と精神世界の一部を現実につ張り出すことで特殊空間を生成する。こういう時には便利な術だ。ちなみにこの状態だと普通にしゃべっても問題ない。

一護「よしこれでいいな？」

雨竜「君が加速世界を使うとはよほどの事らしいようだね。」

一護「ああ、とりあえずここだと時間が無限にあるがさつさと言うけど俺の中にある死神の力が覚醒した。」

雨竜「・・・ホントに重要な話のようだね。」

チャド「これで一護の中に眠る力を全て使えるようになったのか？」

一護「ああ、だが虚の力は出し方がわからんから今は死神、滅却師、完現術者の力しか使えないんだよ」

雨竜「しか使えないの使い方が間違っているぞ一護今までも2つの力が使えているし十分だろ？」

一護「それに関しては否定させてもらう。死神の力が無かったらあの虚は倒せなかったからな。」

5人『倒せなかった!?!』

雨竜「どういうことだ一護!?!」

一護「その虚は死神が使う斬魄刀と言われる刀以外の攻撃を無効化する厄介な性質を持っていた、今後あの結界内での虚刀装備の虚はなんかしらの無効化能力を備えている可能性が高いんだ。」

雨竜「そう言うことか。」

雨竜は俺の言いたいことを理解してくれた。

チャド「厄介な特性だな、俺の力でも無理なのか？」

一護「いや、チャドの力なら無効化はできるけど敵もただでは無効化されないから注意する必要がある。」

織姫「厄介だね。」

一護「一応織姫の刀でも切ることはできるみたいだ。」

織姫「そうなんだ分かったよ。」

雨「ということは私やリルカが相手ではどうしようもないですね。」  
一護「いや、リルカは封印することはできるからどうしようもなくはないぞ?。」

リルカ「そうなの?。」

一護「ああ、でも雨竜と雨は敵が何を無効化するによるけど二人だと相性次第でやられかねないから放課後、精神世界で修行するぞ。」

雨竜「分かった、久しぶりに現れたと思ったたら面倒な特性を引っ提げてくるとは思わなかったよ。」

一護「全くだ、もしこの虚を造っているやつらがいたら顔面が変形

するまで殴ろうぜ。」

雨竜「それは名案だな。」

俺は確信に近いレベルの予想はできているが雨竜たちに言っても理解されないと思われるので言わないでいる。

チャド「二人とも落ち着け物騒だぞ。」

一護「いやでもねえく？」

雨竜「僕たちはその虚たちのせいで親を襲われかけたから恨みの度合いが違うんだ。」

織姫「二人が戦う理由は昔からなんだね。」

一護「まあそのおかげで相棒ができたから悪いことばかりではないけど。」

雨竜「恥ずかしいからやめろ!!一護!!」

雨「いいなく私も生涯の相棒パートナーになりたいです。」

一護「それに関してはノーコメントで・・・」

リルカ「心配ないわよ!どうせあたしたちの誰かを選ぶことになるんだから!!」

一護「・・・何が何でも逃げ切らないとな(ボソツ)」

チャド「一護何か言ったか？」

一護「いや何も?」

雨竜「報告はそれだけか?」

一護「それともう一つこの街に死神が来ている。」

雨竜「・・・なに?」

チャド「それって浦原さん達みたいな感じなのか?」

一護「それについてはまだわからない一応虚刀虚との戦いでは共闘できたがそれだけ温厚なのかはわからないんだ。」

織姫「分かったよ警戒はしとけてことだね。」

一護「ああ、でも近いうちに何らかの形で俺に接触してくるはずだ。」

雨「それはどうしてですか?」

一護「それはこれを見ればわかる。」

俺は死神化して死覇装と二本の斬魄刀を出現させた。



雨「え？二本ですか!？」

リルカ「二本あることがそんなに驚くことなの？」

雨「…はい、本来死神が持つ斬魄刀は一本しかないんです。二刀一対の斬魄刀は死神の世界にも2本しかないんです。」

リルカ「そうなんだからでもなんでそんなこと知ってんの？」

一護・雨「喜助(さん)に聞いた(きました)。」  
リルカ「そ、そう。」

雨竜「だがその死神がいつ来るかわからない以上僕たちは僕たちで準備をする必要があるようだね。」

俺達は情報の共有が終了したので加速世界に入る前の共有した情報などはそのままの状態に戻して解除した。

担任「お前ら席につけ、朝のホームルームを始めるぞ。」

担任の教師が教室に入ってきて朝のホームルームが始まる。

担任「まず最初にみんなに新しい仲間ができるぞ。転校生を紹介する。」

クラス中(たつき除く一護たちは別)『おお!!』

一護(お前ら良いか?)

雨竜(ああ、入学から1カ月で転入生はおかしい上にしかも昨日一護が死神に会った次の日なんて疑ってくれて言っているもんだ。)

チャド(どうする?)

一護(とりあえず様子見で)

織姫(分かったよ)

雨(敵なら結界頼みますよ一護さん。)

一護(わかつてるって)

リルカ(別にアタシの能力で許可すればいいじゃない)

一護(わかったもし敵対したら俺が結界張ってリルカが封印という作戦でいこうか。)

一同(((異議なし!!)))

俺は思念通話を切った。

でも俺は内心で敵対することはないだろうと思っている。

担任「では入ってきてくれ。」

ガラガラ

??? 「失礼します。」

クラス中（たつき除く一護たちは別）『おおく!!』

担任「では自己紹介してくれ。」

??? 「はい、私は朽木ルキアと言います、よろしくお願いします。」

担任「じゃあ、席は黒崎の隣が空いているからそこに座ってくれ。」

ルキア「はい、分かりました。」

朽木ルキアはそう言い自分の席に座った。

一護「・・・ よお、1日ぶりだな。」

ルキア「・・・ おぬしには聞きたいことが山ほどあるからな。」

一護「・・・ じゃあ、放課後に浦原商店つてところで話をしようじゃないか。」

ルキア「・・・ いいだろう。」

↓放課後↓

一護「では今朝の約束通り行こうか？」

ルキア「ああ、だが一ついいか？」

一護「なんだ？」

ルキア「そいつらは何だ？」

一護「俺の仲間だが？」

ルキア「そいつらは大丈夫なのか？」

一護「・・・ あの刀持ちと戦ったことのあるって言えばいいか？」

ルキア「・・・ なるほど、分かった。」

俺達は浦原商店に行った。

一護「さてここならゆつくりと話せるな。」

ルキア「そうだな、では最初にお主は何者だ？」

一護「その質問はどこまでの範囲だ？」

ルキア「・・・ なるほどそう言われると答えるのは大変だったなでは

言い方を変えよう何故お主は死神の力を使える？」

一護「分かった、その質問の答えは俺の親が死神だから使えるんだ。」

ルキア「・・・ そうかでは次の質問だ昨日の戦いで最後のほうは銃を

使っていたがあれは何だ？あんな力は死神にはない。」

俺は雨竜に目配せして確認をとった。

雨竜（こくり）

一護「分かったがこの質問の答えは他人に言わないって言うなら言う。」

ルキア「わかった、他言はしない。」

一護「OK、あれは滅却師クインシーの力だ。」

ルキア「滅却師？」

一護「霊力を持つ人間の一族だ。」

ルキア「そういうことかではなぜお前は二つの種族の力が使える？」

一護「それは俺の父が死神、母が滅却師だからで俺は二人の間に一番最初に生まれたから。」

ルキア「そうだったのか。では質問は以上だ。」

一護「そうかじゃあ今度はこつちが質問をしていいか？」

ルキア「こちらしか話さないというのは不公平だから良いぞ。」

俺はそう聞いてルキアが返答を聞いて雨竜が質問をした。

雨竜「まず君は何故この街に来た？」

ルキア「上からの指令でこの重霊地プラスでの虚退治と整の処理でこの街に配属された。」

雨竜はその返答で納得したためチャドに視線を向けた。

チャド「では次は俺が質問をする、あんたは一護のことをどうするつもりだ？」

ルキア「…正直に言うとその男を監視もなしに放置するには危険というのが私の個人的な意見だ、だが危害を加えるというのは助けてもらった身として絶対ないと誓おう。」

チャド「わかった。」

織姫「じゃあ次は私だねあなたは一護君のことはどう思っているの？」

ルキア「…それはどういう意味だ？」

織姫「その反応で分かったよ。」

ルキア「ホントにどういう意味だ!？」

リルカ「それは今はいいでしよちなみにあたしは質問はないから。」

ルキア「そ、そうか。」

雨「では次は私ですね。あなたはこのあとどうするんですか?」

ルキア「あの謎の刀を持った虚について情報を集めながら業務を務めるだけだ。」

雨「なるほど、そういうことなら私達と共同戦線を張りませんか?」

ルキア「…なに?」

雨「あなたは日々の業務をこなしながら虚刀虚ホロウの情報を集めるとなると時間がかかり過ぎます。そして私達も虚刀虚ホロウのことは放置しておくわけにはいきませんが私達だけでは情報を集めても精査に時間がかかりますそこであなたに手伝ってもらいたいのです。」

一護「そして俺達がこの街で一番あの虚刀虚ホロウと戦っているからな、お前が情報を集めるのにこれ以上の情報源はないぞ?」

ルキア「…確かにあの厄介な虚は私一人では手に余る手を貸してくれないか。」

一護「いいぜ?てか元からそのつもりだったし。」

ルキア「…元から?お主は最初から私に協力するつもりだったと?」

一護「まあ、ただでとはいかない、俺に始解のやり方を教えてくれないか?」

ルキア「ちやつかりしておるなお主は。だがあの虚の相手となるとできることを増やすのは当たり前か。」

一護「お前に教われないとなると不本意ながらあの阿呆喜助に教わる羽目になりそうだから。」

ルキア「お主はどうしてあの男を嫌っておる?あの男の死神としての実力は十分あるだろう?」

一護「…いきなり鬼道の修行で全部詠唱破棄で覚えろとかの無茶振りしてくるのに何言ってるの?」

ルキア「…おぬし苦労しておるの。」

雨竜「騙されなくてくれ、一護は普段から喜助さんを振り回してい

るからどつちも一緒だよ。」

一護「それはいうなよ。」

ルキア「そうか？そしておぬしらはこれから何をするつもりだ？」

6人『修行』

俺たちは全員で言った。

ルキア「・・・一応聞くがどこで修行をする気だ。」

一護「この地下室が結構な広さでさ修行にはお誂え向きなんだよ。」

ルキア「そうか、なら私も参加して良いか？」

一護「良いけどまたどうして？」

ルキア「先の戦いで不覚を取ってしまった自身の不甲斐なさを払拭したくてな、それとおぬしの強さを観ておぬしの修行に興味が出てきてな。」

一護「いいぜ、始解の具体的なやり方も教えてもらいたいし。」

雨竜「君が参加したいならいいが後悔はするなよ。」

チャド「ああ、俺達は慣れているから良いが危険を感じたらすぐにやめるんだぞ。」

ルキア「・・・普段おぬしらは一体どんな修行をしているのだ？」

織姫「アハハ・・・それは修行しているうちに嫌でもわかるよ。」

リルカ「特に一護との模擬戦がキツイってレベルじゃないのよ。」

雨「正直言って虚刀虚との戦いのほうがマシってレベルですからね。」

3人がどこか悟りを開いているような感じだった。

ルキア「・・・想像以上のキツさなのだな。」

俺達はそうして地下の修行部屋に来了。

一護「真時玉まときだまも起動したしこれで時間を気にせずに修行できる。」

ルキア「真時玉？」

一護「・・・うん？ああそれは俺達で作った道具でね、修行時間を大幅に獲得できるようにするためのものだよ。」

俺は真時玉の機能を説明した。

ルキア「それは便利なものだな。戸魂界ソウルソサエティに持って帰りたくらい

だ。」

一護「やめてくれ、これ作んのにも修理するのにも結構手間と材料と時間がかかんだよ。」

ルキア「そうか、残念だ。」

説明を終えたため修行に入るための準備運動を開始した。

side ルキア

あの日謎の虚との戦いで負傷した私だが浦原喜助に助けられ治療を終えた私だがあの謎の男の事と虚の事の情報を探るためあの男が通っている学院へ転入した。

一護「・・・よお、1日ぶりだな。」

一護は昨日の事を小声で言ってきた。

ルキア「・・・おぬしには聞きたいことが山ほどあるからな。」

私もこの男にしか聞こえない声量で言った。

一護「・・・じゃあ、放課後に浦原商店ってところで話をしようじゃないか。」

ルキア「・・・いいだろう。」

どうやらこやつもあの店に行っているようだ。

とりあえず私たちは学院での生活を問題なく送った。

放課後私は校門前で一護と待った。

一護「では今朝の約束通り行こうか？」

一護は約束通りに来たのだが

ルキア「ああ、だが一ついいか？」

一護「なんだ？」

ルキア「そいつらは何だ？」

そう一護以外にも5人ほど2人が男で3人女を連れてきた。私たちはこれから普通の人間が立ち入る話をしに行くというのに何を考えておる。

一護「俺の仲間だが？」

ルキア「そいつらは大丈夫なのか？」

仲間と言われても大丈夫かと私は問うたが

一護「・・・あの刀持ちと戦ったことのあるって言えばいいか？」

ルキア「…なるほど、分かった。」

なるほどあの刀持ちの虚と交戦経験があるのならば大丈夫であろう。

私達は浦原商店と呼ばれる表向きは駄菓子屋で裏では現世にいる死神に対して霊的商品などを売っているのが実態の店だ。

私達は向かい合い先に私が聞きたかったことを言い向こうそれを答えると今度は向こうの質問に答える。途中理解できない質問もあったが何故か向こうは勝手に納得していた。

すると雨と呼ばれた女は今後私が何をするのか聞いてきた

雨「では次は私ですね。あなたはこのあとどうするんですか？」

ルキア「あの謎の刀を持った虚について情報を集めながら業務を務めるだけだ。」

と私は答えたのだが

雨「なるほど、そういうことなら私達と共同戦線を張りませんか？」

ルキア「…なに？」

いきなり手を組めと言ってきた。

雨「あなたは日々の業務をこなしながら虚刀虚ホロウの情報を集めるとなると時間がかかり過ぎます。そして私達も虚刀虚ホロウのことは放置しておくわけにはいきませんが私達だけでは情報を集めても精査に時間がかかりますそこであなたに手伝ってもらいたいのです。」

一護「そして俺達がこの街で一番あの虚刀虚ホロウと戦っているからな、お前が情報を集めるのにこれ以上の情報源はないぞ？」

それを聞き確かにあの虚に関しては私一人の手に余るしかし上に報告しようにも情報が足りなさすぎるのでこの提案に乗る。

ルキア「…確かにあの厄介な虚は私一人では手に余る手を貸してくれないか。」

一護「いいぜ？てか元からそのつもりだったし。」

ルキア「…元から？お主は最初から私に協力するつもりだったと？」

一護「まあ、ただでとはいかない、俺に始解のやり方を教えてくれないか？」

この男はあれほどの霊圧をもってあれだけの鬼道を使えておきながらまだ強くなるのかと思っただけだ。

ルキア「ちやつかりしておるなお主は。だがあの虚の相手となることができることを増やすのは当たり前か。」

私は一護の意図を理解した。あの虚刀虚と呼ばれる虚は生半可な強さは意味をなさない、自分の持ちうる力全てを鍛えるのは当然といえよう。

一護「お前に教われないとなると不本意ながらあの阿呆喜助に教わる羽目になりそうだから。」

ルキア「お主はどうしてあの男を嫌っておる？あの男の死神としての実力は十分あるだろう？」

あの男は尸魂界では大罪人として追放されたがそれでも元隊長になっっている実力者だ、私よりも適任であろうよ。

一護「…いきなり鬼道の修行で全部詠唱破棄で覚えろとかの無茶振りしてくるのに何言ってるの？」

ルキア「…おぬし苦勞しておるの。」

高位の鬼道を全て詠唱破棄で覚えろとは無茶振りにも限度があると思うが。

雨竜「騙されないでくれ、一護は普段から喜助さんを振り回しているからどつちも一緒だよ。」

一護「それはいうなよ。」

ルキア「そうか？そしておぬしらはこれから何をするつもりだ？」

6人『修行』

一護たちは全員で言った。

ルキア「…一応聞くがどこで修行をする気だ。」

一護「この地下室が結構な広さでさ修行にはお誂え向きなんだよ。」

ルキア「そうか、なら私も参加して良いか？」

一護「良いけどまたどうして？」

ルキア「先の戦いで不覚を取ってしまった自身の不甲斐なさを払拭したくてな、それとおぬしの強さを観ておぬしの修行に興味が出てき



てな。」

これは事実だ、私は自分の弱さと不甲斐なさを嫌でも見せつけられたのでここで一度初心に戻り己を業務に支障がない限り鍛えなおそうと思う。

一護「いいぜ、始解の具体的なやり方も教えてもらいたいし。」

雨竜「君が参加したいならいいが後悔はするなよ。」

チャド「ああ、俺達は慣れてるから良いが危険を感じたらすぐにやめるんだぞ。」

ルキア「・・・普段おぬしらは一体どんな修行をしているのだ？」

二人の物騒な言葉に思わず返してしまった。

織姫「アハハ・・・それは修行しているうちに嫌でもわかるよ。」

リルカ「特に一護との模擬戦がキツイってレベルじゃないのよ。」

雨「正直言って虚刀虚との戦いのほうがマシってレベルですからね。」

3人がどこか悟りを開いているような感じだった。

ルキア「・・・想像以上のキツさなのだな。」

私達はそうして地下の修行部屋に来た。

一護「真時玉まときだまも起動したしこれで時間を気にせずに修行できる。」

ルキア「真時玉？」

一護が言った謎の言葉について聞いてしまった。

一護「・・・うん？ああそれは俺達で作った道具でね、修行時間を大幅に獲得できるようにするためのものだよ。」

一護は真時玉の機能を説明した。

ルキア「それは便利なものだな。戸魂界ソウルソサエティに持って帰りたいくらいだ。」

私は素直にそう賞賛してしまった、それほどまでに素晴らしい物なのだから。

一護「やめてくれ、これ作んのにも修理するのにも結構手間と材料と時間がかかんだよ。」

ルキア「そうか、残念だ。」

そういう理由なら引くしかないようだ。

説明を終えたため修行に入るための準備運動を開始した。

〈準備運動後〉

ルキア「してまずは何をするのか？」

一護「それはほかのやつから聞いてくれ。俺は始解をまず獲得したいから」

ルキア「分かったがそう簡単には修得はできぬぞ？」

「卍解もそうだが始解も会得には結構な歳月がかかる、それを斬魄刀を得て1日で始解を獲得できるとは思えない。

一護「大丈夫だって、やるだけやっておきたいのよ。」

ルキア「では説明させてもらおうとしよう

始解はそれぞれの解号と「仮の名前」を呼ぶ事で斬魄刀解放の第1段階のことを指す。

その会得条件は自身の精神世界に存在する斬魄刀の本体との対話と同調によって斬魄刀の「仮の名」を知ることだ。」

私は一護に始解の概要と会得条件、刀の対話のやり方を教えると

一護「わかったよじゃあ、俺は邪魔にならない所で対話をしてくよ。」

そう言い瞬歩で何処かへ行ってしまった。

雨竜「よし一護が個人的な修行が終わるまで僕たちは僕たちの修行をしよう。」

ルキア「してどのような修行をするのだ？」

チャド「まず俺達は霊圧の総量と制御能力を鍛える訓練をしているんだ。先ずそれからやるんだ。」

ルキア「なるほどでは具体的な修行内容を説明してくれぬか。」

今茶渡殿が言った霊圧の総量と制御能力向上の修行は死神の基礎能力を大幅に底上げすることができる。

まずは基礎的な部分を鍛えることで他の訓練に耐えられる基礎能力を底上げするのが最初の修行の目的のようだ。

雨「分かりました。ではあそこへ行きましょう。」

ルキア「あそこ？」

織姫「うん、一護君と喜助さんが一緒になって作ってたやつだよ。」

ルキア「何を造つとつたのだあの二人は？」

リルカ「行けば分かるわよ。」

ルキア「そうか」

「私達は少し歩くとやたらデカイ構造物が目に入った。

ルキア「これは何だ？」

中にはツルツルに磨き上げられている油のような霊圧が流れ続けている巨大な石の柱があった。

雨竜「これは地獄昇柱と呼ばれるもので肉体と魂魄を鍛え上げるためのものだ。」

ルキア「してこれでどんな修行をするのだ？」

雨竜「そゝ」喜助「そこからはあつしが機能とともに説明しますよ。」

ルキア「おぬしいつの間に」

私はいつの間にか来ていた浦原喜助の登場に驚いた。

喜助「まあそれはいいでしょう、それより地獄昇柱の説明をしますね。」

そう言い浦原喜助が説明をした。

喜助「さてこの地獄昇柱は一護さんが古事記に記された「竜門」と呼ばれる急流を登りきった鯉は、竜に変身するというものから発想を得た代物です。これ、これで修行を行うための物を作成しようという話になりました。あつしと一護さんは滅茶苦茶苦勞してこれを完成させましたんですよ。」

それでこれの機能なんですけども高さ24m、最大円周7m20cmの巨大な石柱と、特殊な油のような霊圧によって、「循環する特殊な霊的な力場」を作り出しているんですよ、そしてこの流れに逆らって柱を登る修行者の肉体と魂魄は、特殊な霊圧で不純物を強力で洗い流され、しかる後に不足物を霊圧で補われた結果、修行者は基礎能力を大幅に底上げされるんですよ。」

そしてこの柱に挑んでいる者は一時的に食事・排泄・睡眠を必要としなくなるんですよ。」

これは永久機関のように循環する力場の中で、修行者の肉体が霊的に洗浄・補完されるためなんですよ。ぶっちゃけこの機能の作成が一

番大変でしたよ、おかげであつしと一護さんが数日間徹夜しましたからね。」

ルキア「なるほど、だがこれはどうやって登るんだ見たところ道具のようなものが見当たらないが?」

喜助「それは手に霊圧を溜めてくつついて登るんですよ。」

ルキア「くつつく?」

喜助「ええ、普段あたし達が霊圧を使って空中を浮いたり水の上に立ったりすることの応用です。」

ルキア「ああそういうことか、しかしこの修行内容はわかったがこれは1回きりの物なのか?」

喜助「いいえ、これは何度も使って魂魄の限界を安全に超えるために使うための物ですので」

ルキア「毎度思うが真時玉といいすぎいな。」

喜助「それもあたしと一護さんの合作の品ですよ。」

ルキア「そうかでは早速やってみるか。」

喜助「ああそれとこの地獄昇柱には色んな仕掛けがあるのと攻略すればするほど難易度が自動的にその人に合わせられます。」

ルキア「分かった。」

私は浦原の忠告を受け取り早速始める。

雨竜達も準備を完了させている。

先ず右手に霊圧を溜めて壁に触れると油に滑らずにピタツとくつつくが徐々に滑り始める。

ルキア（なるほど適量の霊圧で無ければ滑ってしまうのか。）

多すぎても少な過ぎてもダメでその場所にあつた量で無ければあつという間に霊圧が底をついてしまうようだ。

私は試行錯誤をしつつゆっくりと壁を登り始める。

1時間後

私はあれから壁を3mほど登っているが霊圧が7割近くまで減ってしまった、このままでは登りきる前に霊圧が底をついてしまう。

そういえば他の者たちはどのようにして登り切っているのだろうか?

私は集中を切らない様にしつつ他の者たちを見たがどうやら霊圧を指先にのみに集中させているようだ。

私はそれを見て真似してみたが思ったよりも難しく場所によっては指先にためた霊圧が暴走しそうにもなったがそれでも更に5時間経ったころには18mに到達した。

霊圧も4割まで減ってしまっているがこの調子なら登り切れるだろう。

ルキア「…うん？この溝は」

私は小さな溝を見つけたおそらく、小休憩をするためのものと思い手をかけたが

ガコツ!!

嫌な音が辺りに響いた。

一同『え?』

すると上からの油の量が大幅に増えて流れ落ちてきた。

雨竜「ちよお!?朽木さん!!なにしてくれてんの!!?」

ルキア「す、すまぬ!!てつきり休憩するための溝と思ったのでつい…。」

チャド「初めてだからしかたないかもしれないが次からは溝とか見つけたら俺達に一言言ってくれ。」

ルキア「わ、分かった。」

織姫「次からでいいから気を付けてね、一護君と喜助さんってこういうことになるって意地悪だから」

雨「そうですね、こういうことだとあの二人は結構はっちゃけますから」

リルカ「そうねそれで色んな目にあっているから。」

ルキア「おぬしたち結構余裕じゃな!!?」

私は叫びながらも量の増えた油のような霊圧に流されない様に残りの霊圧で耐え登れるように細かく制御して微々たる速度で登り進める。

更に2時間が経ち残り2mの所まで登ったが霊圧が残り僅かで少しでも霊圧の配分を間違うと落ちてしまうためさらに細かく制御す

る。

そしてようやく

ルキア「やったぞおおおお!!!」

私は登り切ったのだがここまでの達成感は今方ばかりで年甲斐もなくはしゃいでしまった。

雨竜「その気持ちはよくわかるよ、この地獄昇柱を始めてクリアした時僕たちも似たような感じだったから。」

ルキア「そうだったのか…っ!？」

その時にだが私は自分に起こっている異変に今気づいた。

ルキア「な、なんだこの霊圧は!？」

自分の内包している霊圧量が異常に増えているのだ、具体的に言うと元の数倍に増えているのだ。

チャド「分かったか? まあ最初だから異常に増えたようだけど最初以降の地獄昇柱での修業で霊圧の増え方はゆっくりになるから注意してくれ。」

ルキア「なるほどそれは注意しておく。」

霊圧は増えはするけど最初の異常な増え方はしないから気を付けておけると言われた私だがさらに気づいたことがあった。

ルキア「それにしてもここを登る前よりも霊圧制御能力が各段に上がっている。」

今までも霊圧制御能力で不満に思ったことが無かったが今の制御能力と比べると物足りないと感じてしまった。

織姫「ホントここでの修行効果ってすごいよね、その分大変だけど」

織姫はそうゆったりと言うが確かにきついがここまでの高い効果を感じる修行は初めてだ。

雨「まあ一護さんからするときついのには効果が薄い修行は意味がないってことでしよう。」

雨はそう評したがまあそれは私も思う。

リルカ「いいじゃない? これで最低限の準備が出来たんだし。」

ルキア「うん? 最低限の準備?」

私はリルカが言ったことも意味がよくわからなかった。

雨竜「なぜこの柱が地獄昇柱と名付けられているのか言っていないのかね。」

雨竜はそう言い理由を言った。

雨竜「それはこの柱を登り切ったものはこれよりきつい修行をそれこそ地獄と言えるくらいのキツさの修行をすることになるからそう名付けられたんだよ。」

ルキア「… 要はこの柱は前座のようなものか？」

一同『そうだけど。』

ルキア「…」

私は思いつきり絶句してしまった。

一護「地獄昇柱はクリアしたようだな。」

私が絶句していると一護が戻ってきていた。

ルキア「… 一護か始解は獲得できたか？」

まあ、無理だと分かっているが一応聞いておく。

一護「フツ、よく聞いた今見せてやる。」

ルキア「… え？」

一護がそう言い少し離れると

一護「切り裂け『斬月』！写せ『万華鏡』！」

解号と名を言うと打刀が巨大な出刃包丁のような形状に脇差が刀身から色が抜け落ち透明な刃に変化した。

ルキア「… はあああああ!!?」

今日私は何度目かわからない驚愕の声を上げた。

side 一護

俺はルキアに始解の概要と斬魄刀との対話のやり方を教わり瞬歩で一人で集中できるところに移動した。

一護「よっし!!じゃあやりますか。」

俺は胡坐をかいて座り組んだ足に二本の斬魄刀を乗せ刀に意識を集中した。

そこで何時もの精神世界に来たが

ユ「… これでどうだ？」

ホワイト「いやこつちもいいだろ!!」

ギョク「いやこれ以外ないでしょ!!」

なんか中の人達がなんかやってる。

一護「・・・なにやってんの?」

ギョク「あつ!ご主人聞いてくださいよ! ホワイトとおじさんが分からず屋なんですよ!!」

ユ「・・・なにを言っている、分ならず屋はおまえだろ。」

ホワイト「そうだけこんなの認めるわけないだろ!!」

一護「いやホントどゆこと?」

本当によくわからなかったがホワイトが

ホワイト「いやな、ホントは斬魄刀のデザインと能力はもうとつくの前に決まっていたのにギョクがしゃしゃり出てきたせいで増えたもう一本のデザインと能力を考えていたんだけどよくギョクが駄々こねるせいで決まらねえんだよ。」

ギョク「良いじゃない!!私だつてご主人に自分が考えた能力と武器を使つてほしいのよ!!」

ホ・ユ「それはいつもの事だろ!!」

ギョク「うわくん!、ご主人助けてください!!」

一護「・・・ちなみにどんな感じなんだ?」

ホ・ユ・ギ「これだ(こんなのだ)(これです!!ドヤア)!!」

一護「どれどれ・・・ギョク」

ギョク「なんですか!ご主人(オメメキラキラ)」

一護「これはない」

ギョク「(ドサツ) 膝から崩れ落ちる音

ホワイト「ほら見ろ」

ユ「・・・このような見た目一護が気に入るわけ無いだろ?」

いやまあ、カッコいいんだけどこれあれだよな? S A Oの女神アスナの細剣をギョクの色合いにしたただけだよな? 俺には似合わないだろ?」

一護「あと能力はどんな感じ?」

ホ「そr」ギョク「それは私が言う!!ガバツ(復活)」ホ「復活はええ



なおい！」

一護「ギョク、能力はどんな感じにしたんだ？」

ギョク「はい！知った斬魄刀の力を自在に模倣する能力です!!」

一護「・・・」

それを聞いて思ったことはこれだ

一護（それ艶羅鏡典えんらきょうてんじゃんか。）

こう思ったがこれに関しては誰でも思うことだと思う。

ギョク「ちよつと待つてくださいよ！いくらなんでもあんな妖刀ごときと一緒にしないでくださいよ!!」

一護（斬魄刀の中でも屈指の性能の艶羅鏡典を妖刀ごときって言いやがった。）

ギョク「あんな妖刀と違って再現する火力や効果範囲や模倣する際にどこまで模倣するか自由に決められる上に主の命を吸うこともないのでですよ、完全に私の方が上です!!」

一護「分かったよ、それと名前はどうすんの？」

ギョク「それは決まっています!!『万華鏡』です!!」

一護「なるほどあとを見た目だけか。」

ホントにどうすんの？これこれ以上長引くようなら世界を加速させる羽目になりそうなんだけど

ホワイト「もういつそのことその妖刀と一緒に刀身なくしやあいじゃん。」

ギョク「ホワイトあんたふざけてんの？」

ギョクはそう言いながらブック・オブ・ジ・エンドを呼び出し構えた。

ホワイト「ヘッ！力づくってか？いいぜ！もうこうなったら勝った方の意見を採用ってこー」一護「あ、それじゃん」ホワイト「一護どうした？」一護「万華鏡の見た目だよ。」ギョク「ご主人まで何言ってるんですか!?イヤですよ!!あんな妖刀とおんなじ見た目なんて!!」

一護「いや別に同じ見た目にするってわけじゃないから。」

ギョク「・・・じゃあどうするんですか？」

一護「刀身をガラスみたいに透明にするんだよ。」

ギョク「それいいですね!!」

ホワイト「こいつさつきまであれだけ駄々こねてたのに一護が一言言やあこれだよ。」

ギョク「うるさいわよ!! ホワイト!」

一護「じゃあこれでいいな?」

ギョク「はい!!」

一護「あと今更になっただけだけどホワイトのはどんな感じなんだ?」

ギョク「一言で言うとなんかセンスが無いです!!」

ホ・ユ「お前が言うな!!」

一護「一応見せてくんね?」

ホワイト「名前は『斬月』、能力がよく斬れる月輪の発生と操作で見た目はこれだ」

そうやってホワイトは見慣れた包帯のついた出刃包丁のような大刀を出した。

一護「カツコイイなそれ」

ホ・ユ「よしっ!!」

ギョク「そ、そんな〜」

ホワイト「お前ホントに一護のこと分かってんのか?」

ユ「…フツ、無駄にごちゃごちゃしたものよりこういうシンプルな見た目のほうが一護は好むことを知っていたはずだが。」

カチンッ

ギョク「ホワイト、おじさん? 覚悟はいい?」

ホ・ユ「僻むな、みつともない?」

ギョク「死になさい、今ここで」(目のハイライトオフ)

一護「はいっ! そこまで〜」

俺は怒りが臨界点まで達したギョクを抱きしめて頭をなででギョクの怒りを鎮める。

ギョク「ご、ご主人くちよつと待ってくださいいよ〜。」

とりあえずできる限り撫でてギョクを落ち着かせる。

ギョク「えへへ〜ご主人の手のひら暖かいです〜」

落ち着いたことがわかると俺はギョクを離す。  
ギョク「… もう少ししてほしかったです。」

一護「とりあえず戻るけどこれで始解を使えるようになったのか？」

ホ・ユ・ギ「ああ（そうだ）（できますよ）」

一護「解号どうすんの？」

ホ・ユ・ギ「……………」

一護「考えてなったのかよ…俺が考えたやつでいいか？」

ホ・ユ・ギ「いいぜ（よかろう）（バッチコイです!!）」

一護「『斬月』は切り裂け、『万華鏡』は写せでどうだ？」

ホ・ユ・ギ「問題ねえ（ない）（ないです!!）」

一護「了解、じゃあ戻るわ。」

俺はそうして現実世界に戻った。

く現実く

一護「さて実際にできるか確認といきますか。切り裂け『斬月』」

俺は刀を抜刀して解号と名を呼んだ。

すると刀が出刃包丁のような大刀になった。

一護「おおく俺があゝの斬月を振るっているのか。」

俺はそう言いながら斬月を振るって手ごたえを確認した。

大刀に変化しているがおっさんが片手で大剣を振るっていたから

その剣術を斬月に合わせればいいのか。

5分ほど振るって感触を確認し終わると次は万華鏡のほうだ。

一護「写せ『万華鏡』」

斬月を浅打… いや俺のは刀神作の浅打ではないから斬魄刀無銘  
とでもいうべき代物だから無銘に戻した。

そしてもう一本の脇差の無銘を抜いて解号と名を呼んだ。

そして今度は脇差の刀身から色が抜け落ちガラスのような刀身に  
変化した。

一護「よっ！とっ！はっ！」

俺は万華鏡を振るって斬月との感覚の違いを馴染ませる。

一護「次は模倣能力だな、まずは斬月」

すると先ほども見た出刃包丁に変化した。

この感じだと斬月がタイムマン、万華鏡が乱戦用に用途を分けるか？でもどっちも使って戦いたいから二刀流でやってみるか？

一護「切り裂け『斬月』」

俺は模倣した斬月を左に持ち長刀の無銘を抜き解号と名を呼んで解放した。

二本の大刀を構えるが慣れるまではやらない方がよさそうだ。

… あ、待てよこれ柄の包帯を結んで出刃ヌンチャクみたいにできるんじゃない？

俺は包帯を操作して二本を結んで出刃ヌンチャクにして振り回したりしたが扱いづらいので使いこなせるようになるまで封印だな、味方を巻き込みかねないしあぶねえ。

一護「さてそう言やなんか斬月の能力が違っているっぽいから確認しておくか。」

おれは万華鏡を元に戻し納刀して、斬月を構える。

一護「ようやく本当の意味で放てるな、いくぜ『月牙天衝』!!」

俺は斬月を振るってその斬撃は青白い三日月のような形状となつて真つすぐ飛んだ。

一護「これ俺がよく使ってる三日月型の神聖滅<sup>ハイリツヒ・ブファイル</sup>矢じゃん？それを能力化したのか？」

まあ使い勝手がいいというか使い慣れているから困ることはないな。

その能力を使つて今まで使つてた月の剣技を使えるのか確認したが普通に使えるようだ。

一護（あと原作のように刀に霊圧を溜めて斬撃の威力を上げられなにかやってみるか。）

俺は斬月の刃先に霊圧を溜めてみるのだがこれは簡単にできた。

一護「なるほどなるほど、できるっぽいな。」

向こうはどうやら地獄昇柱をやっているようなので終わるまで俺は万華鏡も含めて色々やって待っているか。

9 時間後

どうやらルキアも含めて終わったようだな。  
完現術：加速でみんながいるところに移動した。

一護「地獄昇柱はクリアしたようだな。」

ルキア「…一護か始解は獲得できたか？」

ルキア「やつれた声で聞いてきたが俺は自信満々に言った。」

一護「フツ、よく聞いた今見せてやる。」

ルキア「…え？」

俺はそう言い少し離れると

一護「切り裂け『斬月』！写せ『万華鏡』！」

解号と名を言うと打刀が巨大な出刃包丁のような形状に脇差が刀身から色が抜け落ち透明な刃に変化させた。

ルキア「…はああああああ!!？」

ルキアが驚愕の声を上げた。

一護「うるさいぞ、叫ぶことはないだろ。」

ルキア「これを見て叫ばぬ死神はいないわ!!たわけ!!」

雨竜「雨以外の僕たちは死神の常識は知らないから反応に困るんだけど二本の形状が違うことがそんな叫ぶことなのか？」

ルキア「そうかでは説明させてもらうが死神の斬魄刀の能力は直接攻撃系と鬼道系の二つに分けられ原則どちらか1つしか発現しないのだ。」

雨竜「でも二刀一对の斬魄刀が2本あるって雨から聞いたけどその斬魄刀は別々の能力が発現するのでは？」

ルキア「いやその二本は能力も形状も一緒だ、だから一護の斬魄刀を見て叫んだのだ。」

雨竜「一護、君はまたやらかしたのか…」

一護「違うぞ、これはあいつが原因だ。」

ルキア除く5人『ああ、納得した。』

ルキア「それでなぜ納得できる!!？」

一護「気にするな、こっちの話だ。」

ルキア「気になるわ!!」

一護「さてそんなことより次の修行に入ってきてくれ、俺も地獄昇

柱やってくるから。」

ルキア「… 気にはするがおぬしもこれをするのか結構な時間かかるぞ?」

一護「だいじよぶだいじよぶ、俺これ1時間もあればクリアできるから。」

ルキア「1時間!？」

一護「だってこれ作ったの俺と阿呆喜助だぜ? ギミックとかいろいろ分かっているんだぞ?」

ルキア「ああ、そういえばそうだったな。」

ルキアは納得と悟りの間に立っているような反応をした。

一護「んじゃ、終わったら俺も参加するな。」

雨竜「分かった、じゃあ朽木さんはこっちに来てくれ。」

ルキア「了解した。」

俺はそう言い地獄昇柱を登るために一旦下に降りた。

〜1時間後〜

一護「よしっ! 終わり!!」

俺はさつきと地獄昇柱をクリアしたのだがあの阿呆喜助がいくつか俺の知らないギミックを追加してたからビックリしたが速攻対処して攻略した。

こういう突発的なことにも対応する修行にもなるからあいつとの合作は面白いんだよな。

一護「さてあいつらは何の修行をしているんだ?」

俺は霊圧を感知したがどうやら虚像と戦っているようだ。

一護「あくあれの所か、じゃあ行きますか。」

俺は飛廉脚で移動した。

一護「よお、戦やっているようだな」

雨竜「一護、そういうなら君も参加してあげたらどうだ?」

雨竜はそう言うが俺まで参加したら意味が無いじゃないか。

そう思い俺は目の前で起こっている状況に目を向けた。

ルキア、チャド、織姫、リルカが破面のグランドフィッシュャーと戦っている。

sideルキア

一護が地獄昇柱を登るために降りていった後私達は移動してまた別の構造物に入った。

ルキア「ここでは何をやるのだ？」

喜助「ここでは虚像と戦っていたいただきます。」

ルキア「虚像？」

私はこの男が突如現れることにも慣れたため気になることを聞いた。

喜助「ええ、一護さん達が戦った虚刀虚のデータなどがインプットされていてましてね、それを実態ある幻影として召喚して戦うことができるんですよ、もちろん能力などは強化などがされているので注意してください。」

ルキア「なるほど」

私はこいつらの技術力にもう驚くことはなくむしろこれほどの修行環境を作り上げて見せたことに感心すら覚えてきた。

雨竜「今回朽木さんは初めてだから一護が最初に戦ったやつでいいか？」

ルキア「分かったがすまぬな」

雨竜「いいさ、適切な修行をしないと意味がないからね。」

ルキア「かたじけない。」

チャド「メンツはどうする？」

雨竜「朽木さん、茶渡、織姫さん、リルカの4人ならちようどいいと思う。」

チャド「了解だ。」

織姫「回復等は任せて!!」

リルカ「足は引つ張らないわよ。」

ルキア「よろしく頼む。」

茶渡たちの力はまだよくわかっていないが地獄昇柱の際に少しばかりその実力の片鱗が見えた。

雨竜「さて今回の虚像は一護曰く虚刀の試作品らしい。」  
ルキア「試作品？」

雨竜「ああ、一護が最初に戦った虚で途中で異常に強化されたらしくてそれが虚刀虚と似た現象だったらしいから試作品と言う見方を一護はしている。」

ルキア「つまりそやつの幻影に勝てなければ今後の虚刀虚には勝てぬということか。」

雨竜「そういうことになるね、ちなみに僕と茶渡はその幻影虚を単独撃破している。」

織姫「私と雨ちゃんトリルカちゃんは相性的に無理なんだ。」

ルキア「・・・それはどういうことだ？」

織姫「私たち3人は再生を上回る攻撃力が無くて倒しきれないんだ。ルキアさんなら鍛えれば倒せるようになるよ。」

ルキア「そうか！」

私は織姫のあの虚刀虚と呼ばれる虚を鍛え方次第で倒せるという言葉でやる気が漲った。

雨竜「一護に聞いていたんだけど朽木さんの斬魄刀は冷氣系と聞いていたから鍛え方次第であの虚を瞬間冷凍することで瞬殺できるよ。」

ルキア「そうか！なら早速始めよう！」

雨竜「わかった、キツそうなら僕と雨を呼んでくれ。」

雨竜と雨は2階部分のガラスで1階を見れる管制室のような場所に移動して椅子に座り私達の状況を見て修行状況を確認する準備をしている。

そうしている間に私達も準備を終える。

雨竜『じゃあ始めるよ。』

雨竜はそう言い何らかの機械を操作した。

すると私達の目の前に仮面を付けている人型の虚が現れた。

私は斬魄刀を抜刀し構えて、茶渡は右が黒く、左が白い鎧に変化して、織姫は6匹の精霊？のようなものと刀を召喚し構え、リルカは頭にウサギの耳のようなものと腕や足にウサギのぬいぐるみのような装甲を纏っている。

虚「……………」



虚の様子を見ているがいきなり予備動作なく目の前に高速移動して拳で殴り掛かってきた。

チャド「…フツ!!」

茶渡はそれに反応して足に緑の光を纏って高速移動して右の黒い腕に盾を展開して虚の攻撃を防いだ。

リルカ「やああ!!」

動きを止めた虚の背後にリルカが高速移動して無数の蹴りを叩き込んだ。

虚「……」

だが虚は振り向くこともなく高速移動でその場から消え回避した。

虚「……」

虚はいきなり野太刀のような刀身が幅広い大刀を手に握っている。

虚は両手で構え茶渡に切りかかって来た。

茶渡はその攻撃を受け止めたので私は鬼道で補助する。

ルキア「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者

よ 心理と節制 罪知らぬ夢の壁に僅かに爪を立てよ 破道の三十

三 蒼火墜」

私は得意の破道で攻撃したがいつも使っているはずの蒼火墜の威力と範囲が桁外れに増加している。

青い炎が幻影虚に直撃して効果は発揮したがすぐに再生されてしまったので斬魄刀を解放した。

ルキア「舞え『袖白雪』」

解放した袖白雪に冷気を纏わせて構え瞬歩で加速して虚を切り裂いた、傷口が凍って再生できないようにしてすぐに距離をとった、この前の戦いで常に回避できるようにしておくことの重要性を骨身に叩き込まれたので不必要に接近戦はしかけないようにする。

織姫「孤天斬盾」

織姫は飛ぶ斬撃のようなものを飛ばして片腕を飛ばしたが再生されてしまう。

ルキア（なるほど、織姫は攻撃技はあるがあのような再生力が高すぎる相手だときつすぎるのだな。）

話は聞いていたがここまでの差があるとは。

リルカも攻め急いでいるが再生力の高さに攻め切れていない。

幻影虚は大刀を振るって茶渡を懐に入れさせない様にしながら足技も加えて攻撃してくる。

私は回避しながら如何に最大威力の攻撃をするか考える。

ルキア（私の今できる最大威力の次の舞つぎのまい 白漣はくれんは準備で半歩の遅れが生じてしまう、これを何とかしなければあやつは倒せない。）

私は幻影虚を観察して隙を伺いながら切り裂き傷を増やすがこれでは意味がないのでどこかで一気に勝負をつけなければじり貧になる。

ルキア「茶渡、リルカ、私の最大威力の技で仕留めにかかるから何とか隙を作ってくれ。」

チャド「分かった」

リルカ「了解よ」

二人は突っ込んで幻影虚の注意を私に向けさせないようにした。

私はその間に刀で地面を四ヶ所を突き、虚に狙いを定める。

ルキア「二人とも離れるのだ!! 次の舞つぎのまい 白漣はくれん!!」

そして巨大な凍気を一斉に雪崩のように放出して敵を凍らせる技を放って幻影虚を飲み込んだ。

技が終わったころには虚はもうすでに消えている。

ルキア「た、倒したのか?」

私はまだ実感が湧かなかったが。

チャド「最後の攻撃は見事だったぞ。」

茶渡のの言葉で私はようやく呑み込めて

ルキア「やったぞおおおおお!!!」

一護「おめでとさん」

どうやらいつの間にか一護が来ていたがそれはどうでもいい。

ルキア「一護、ありがとうお前のおかげで私は強くなれた。」

一護「油断すんなよ、さつき倒したのはあくまでも前座に過ぎないけどまあ今回はこれで勘弁してやる。」

ルキア「わかっておるよ、またここを貸してくれぬか。」

一護「いいぞ、むしろ相手が増えるのは大歓迎だからな。」

ルキア「そうか」

5人『…』

ルキア「…ん? どうしたおぬしら」

5人『…いや別に?』

ルキア「?」

俺達はその後は家に帰ったのだが公園で整を襲う虚を『白雷』で仕留め、整を『魂葬』で浄化して帰ってその日はそれ以上のことは起こらなかった。

18話：「それで何をすればいいのだろうか」

ルキアが俺達と一緒に修行するようになって通常の時間軸で10日経過したが俺はルキアに自分の知っている斬魄刀の始解や卍解を教えてくれないかと聞いたがルキアは普通に教えてくれたので万華鏡で始解を模倣した。(おそらく万華鏡の卍解で卍解も模倣可能と思われる。)

そして俺とルキアは卍解について喜助阿呆から俺は嫌々ながら聞いていた。

喜助「斬魄刀」の能力は、通常であれば精神世界で斬魄刀の本体と信頼関係を築き、名前を知る「対話と同調」を済ませて習得できる「始解」だけで引き出すことができます。しかし斬魄刀の解放にはさらなる形態があります。それが卍解です。

会得条件は精神世界にいる本体をこちらの世界に呼び出す「具象化」、そして戦って勝ち自分の力を認めてもらう「屈服」が必要となります。

このうち難しいのは具象化のほうであり、これが会得難易度を大幅に引き上げているんです。

ここからは始解との違いについてです。

能力は「単純に始解の上位互換」「始解とは真逆」「関連性はあるが全く違う」のどれかに大別されますが、一般的には戦闘能力が5〜10倍になるとも言われるため、始解しか習得していない死神や並みの虚であれば瞬殺できるレベルの力が手に入ります。

また、始解が「刀の形状が個性的になる」もしくは「刀から全く別の武器に変化する」程度の変化だったのに対し、卍解の方は「ミサイルや戦車レベルの兵器に変化」したり、「周囲の気候変動を起こす」など、もはや刀の概念を超えているものであることが多いんですよ。

発動時には「卍解」というワードと「真の名前」を呼ぶことです。

会得することで始解時に解号などを唱えなくてもよくなるため、卍解時に唱える場合もあります。また、始解と違う解号を唱えることで更に違う能力が発動する場合もあります。

また卍解を維持するのは膨大な霊力が必要とされ、熟練者でももつて数十分が限界と言われています。また、所有者の意思に反した卍解の解除は所有者が死の危機に瀕していることを意味します。」

相変わらずうちの講師陣は教え方はうまいのに実戦形式になると無茶をさせるのは何故だろう。

喜助「さてここからはお二人さんに卍解を習得してもらいます。

卍解の「具象化と屈服」を、この転神体を用いて行いますのでご心配なく。」

すると喜助はどこからともなく取り出した白い板状の人形を取り出した。

ルキア「それを使って卍解の修行をするのか？」

喜助「ええ、本来ならあなたが卍解を修得するにはまだまだ先の話なんですけどここでの修行で卍解を修得可能にするほどの成長したんでこの際に一護さんと一緒にしてしまえばと思ひましてね。」

ルキア「そうかでは始めるとしよう。」

俺達は地下の修行部屋に来た。

他のメンツは各自の予定や修業をしている。

喜助「では始めますよ。準備はいいですね？」

一護「問題ない。」

ルキア「こちらもだ。」

喜助「では行きますよ。」

喜助は転神体を起動した、ルキアのほうは斬魄刀異聞編の時の雪女が現れたそして俺のなんだが

一護「何で若返ったおっさんまでいんの？」

ユ「私も参加したいからホワイトに相談した結果こうなった。」

ホ「いきなり来て自分だけ除け者にされたくないから何とか卍解に組み込んだ。」

ギョク「女々しいですね〜おじさん」

ホ・ユ「お前だけには言われたくないわ!!」

どうもおっさんの我儘で3人も出現する羽目になったようだ。

喜助「… なんか非常に興味のそそられる事態になっているんすけ

どきつきとしてくださいね。」

一護「わかったよ、じゃあ向こうに行こうか。」

3人『わかった』

俺達は岩場に移動した、ちなみにルキアはとつくに別の場所に移動して屈服作業に入っている。

一護「そんで何をすればいいのだろうか俺らは？」

ホ「つつても俺達はもうとつくにお前のごこと認めているしな。」

ユ「そうだな、屈服も何もあつたもんじゃないぞ」

ギョク「そうですね、私は最初からご主人に屈服してますから!!」

一護「ギョク、それ誤解を招くからやめて?とりあえず適当に時間潰すか。」

ホ「だな」ユ「そうだな」ギョク「ですね。」

一護「: あ!適当に時間潰すとか言ったが卍解について1個提案があるんだけどさ。」

ホ・ユ・ギョク「「なんだ(どうした)(なんですか)?」「」

一護「実はなくゴニョゴニョ」

俺は卍解の追加アイデアを伝えたと

ホ・ユ・ギョク「「それいいな(いいぞ)(素晴らしいです)!!」「」  
3名に好評だったようだ。

sideルキア

修行が開始して1時間近く経過した。

私と袖白雪は幾度となく刃を交えている。

ルキア「はああああ!!」

私は袖白雪で袖白雪に切りかかる。

袖白雪「まだまだです。」

だが袖白雪はひらりとその身を翻し躲して見せる。

袖白雪「初そめのまいの舞つきしろ 月白」

刀で地面に円を描き、その場所の天地全てを凍らせる技で私の周りに円を描き離れた距離から技を放った。

ルキア「くっ!破道の三十三 蒼火墜!!」

私は地面に暴発覚悟の蒼火墜を放って月白を相殺した。

袖白雪「やりますね、ですがこれはどうですか？」

袖白雪は刀で地面を四ヶ所を突き始めた、それを見た私はルキア「血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ蒼火の壁に双蓮を刻む

大火の淵を遠天にて待つ」

私は高位の鬼道の詠唱をした。

袖白雪「次の舞 つぎのまい 白漣 はくれん」

巨大な凍気を一齐に雪崩のように放出して敵を凍らせる技を袖白雪は放った、そして私は

ルキア「破道の七十三 そうれんそうかつい 双蓮蒼火墜!!」

蒼火墜の強化版で両手の平を上下に突き出し、眩い閃光と青い炎と共に爆発を繰り出した。

白漣と双蓮蒼火墜が激突して大爆発を起こした、私と袖白雪は爆発に巻き込まれて互いに大ダメージを受けた。

煙で何も見えない中私は必死に立ち上がるために全身に力を籠める。

ルキア「くううう… ツ!!」

四肢に力を入れるが生まれたばかりの小鹿のように震えている。

袖白雪『見事でしたよ』

ルキア「袖白雪…」

袖白雪『あなたの力を認めました、私の名は「白霞罰」はつかのとがめこれから先も精進しなさい。』

ルキア「袖白雪… いや白霞罰よ私はさらに強くなる。」

side 一護

一護「… うん? どうやらルキアのほうは終わったっぽいで。」

ホ「そうらしいな、じゃあこっちも名前言って戻るか。」

ユ「そうだなあまり長居をして我々の存在を知られ過ぎるのは避けたい。」

ギョク「そうですね、では私から言いますね、卍解名は

『万華鏡 まんげきよう 千変万華』せんべんばんかです!!」

一護「分かった、で二人のは？」

ホ「俺の力のほうは『天鎖斬月』だ。」  
ユ「私の力のほうは『天鎖穿月』だ。」

一護「了解。」

そう言つて3人は俺の中に戻つていった。

一護「さてじゃあいつたんルキアと合流しますか。」

く合流中く

一護「よお、終わったか。」

ルキア「一護、ああ何とか卍解を修得できた。そっちはどうだ？」

一護「修得できたな。」

ルキア「相も変わらずだな貴様は。」

一護「別にいいだろ？とりあえず卍解の修練をしようぜ。」

ルキア「ああ、そうだな。」

一護「とりあえず、ルキアのやつからやろう。」

ルキア「いいのか？」

一護「いや、俺のは2つあるからそれより一個のルキアからやった方が早く終わるから。」

ルキア「そうかでは行くぞ！卍解『白霞罰』」

俺はルキアの霊圧の上昇する際に瞬歩で避難した。

卍解の発動と同時にルキアは髪まで純白になり、斬魄刀を手にして白い装束を纏い、頭に氷の結晶を思わせる髪飾りが付いている…。さつき見た雪女みたいだな。

一護「それにしてもすごいな」

俺はルキアが卍解の発動した際の霊圧の影響を見た。

なんせルキアの周り半径500m以内の物が瞬間冷凍されているのだから、もしこの卍解を使いこなすとなると背筋がゾクツとする。

ルキア「い、一護少しいいか？」

一護「うん？どした？」

ルキア「じ、実はなこの卍解解除に少し加減を間違えると私は粉微塵になってしまうんだ。」

一護「…」

俺は即座に織姫に連絡を取つて来てもらいルキアの卍解解除する



際に砕けたら回復のループをして解除した。

一護「ルキア、お前慣れるまで卍解禁止だな。」

ルキア「無論だ。」

織姫にはすまないと言って戻ってもらった。

一護「さて次は俺だな、まずはこっちだな卍！解！『万華鏡 千変万華』！」

俺は脇差しを抜刀して万華鏡に変化させた後卍解のワードと真の名を呼んだが見た目などに変化はなかった。

ルキア「失敗か？」

一護「いや成功だ、とりあえず見た目だけ再現してみるか。」

ルキア「見た目だけ？」

一護「こういうことだ。」

すると髪は純白になり、白い死覇装に変化し、頭に氷の結晶を思わせる髪留めが付いている。

一護「うん、卍解は修得しているな。」

ルキア「私のあの卍解で確認するな！たわけえ!!」

一護「悪い悪い、じゃあ今度はこっちだな卍解『天鎖斬月』！」

俺は脇差しを納刀すると今度は打刀を抜刀して斬月を解放し卍解のワードと真の名を呼んだ。

死覇装は黒のロングコートに斬魄刀は出刃包丁のような見た目の大刀から通常の日本刀型で卍型の鏢に柄頭に黒い鎖の付いた黒刀に変化した。

一護「ルキアのと色が違うが似た感じだな。」

ルキア「その状態で動けるのか？」

一護「やってみる」

俺はそう言いながら瞬歩で爆速で移動してみた。

一護「どうやらだいじょぶそうだ。」

ルキア「私のとは真逆だな。」

一護「俺のは汎用性抜群でルキアのは切り札って感じになるな。」

ルキア「全くだな、おぬしの場合始解を卍解に間違われそうになるな。」

一護「アハハ、ありそうだな」

俺は笑っているがここで一つ思い出したことがあった。

一護「そう言えばおっさんのやつが言ってたっけ。」

ルキア「おっさん？」

一護「それはこつちの話だから気にするな。そんでもってやってみるか『天鎖穿月』」

俺がその名を呼ぶと天鎖斬月の形状が変化して黒い霊子の弓になった。

弦は黒い鎖のような形状をしている。

一護「滅却師の力が斬魄刀に混じったのか？」

俺はルキアの手前そう予測した風に言った。

ルキア「ホントおぬしは常識を壊すのが得意だな。」

一護「それほど」

ルキア「褒めとらんわ!! たわけえ!!」

俺達は何気ない会話で大笑いしていた。

## 19話：「落ち着け気持ちは分かるが落ち着け」

俺とルキアが正解を修得して通常の時間軸で3日経ったのだが

一護「そういや俺って死神化する際に肉体が出現しないな。」

ルキア「そういえばそうだな、どういうことだ?」

一護「じゃあ検証してみるか、よつと!」

俺は死神の力を増幅して死覇装を斬魄刀を出現させて霊体化したが

一護「やつぱり出現しないな肉体。」

ルキア「おぬしは器子を霊子に変換しているのではないのか?」

ルキアが予想を言ってきた。

一護「あくそういうこと?それはありそうだな、まあそれで今はいいか。」

俺達は検証を終えたが

ピリリリ、ピリリリ、ピリリリ

一護「... うん?俺か、わるい連絡が入った。」

確認すると織姫からだ

ルキア「そうか」

俺はルキアに一言いって電話に出たが織姫から特に何か急ぎの用事はなかったが

一護「よお、織姫どうs」織姫「一護君!お兄ちゃんを助けて!!」一

護「... わかった」

どうやら一波乱起きそうだ。

side 織姫

今日はたつきちゃんと雨ちゃんとリルカちゃんと一緒に買い物に出かけています。

織姫「あつ!これ可愛いね!たつきちゃんに似合いそう」

竜貴「... いやこれはないと思うんだけどな織姫」

織姫「え?そうかな?」

雨「そうですよ、織姫これはたつきには似合いませんよ。」

リルカ「なんで戦車のキーホルダーをかわいいって言えるのよあん

た。」

織姫「えく可愛いと思うよ私は」

そう言いながらお店を出た私達は何気ない会話をして別のお店に行くために道を歩いていると、虚の気配を感じたんだ。

織姫「っ！二人ともたつきちゃんは!!」

雨「安心して下さい、既に気絶させてあります。」

リルカ「ついでに周りに人払いの結界を張ったから他の人にバレることもないわ。」

織姫「さすがだね、二人とも」

そうしている間に虚が現れたんだけどその虚は私達より数倍の大きさで下半身が蛇みたいま姿の虚だったんだけど

なぜか私はその虚を見て懐かしいと感じたんだ、虚に知り合いはいなかったと思うんだけど。

虚「う… ああ… お… お、織… ひ…」

織姫「… え？私？」

虚は私の名を読んで手を伸ばしてきた。

リルカ「私の友達に手出さないでくれない!!この変態虚!!」

リルカちゃんは完現術でラビットアーマー（一護君命名）を身に纏って顔に蹴りを何発も叩き込んで仮面を左顔が見えるまで破壊したんだけど

虚「ぐあああああああああ!!!」

織姫「… え」

私はその顔を見て言葉を失った。

リルカ「大した事ないわね、でもこれで終わりよ!!」

リルカちゃんはとどめを刺そうと足に完現光を纏わせたので待ったをかける。

織姫「待つてリルカちゃん!!」

リルカ「織姫!どうして止めるの!!こいつ虚なのよ!!」

織姫「その虚!私のお兄ちゃんなの!!」

リルカ「え!?!でもならなおのこと倒さないと!!」

織姫「分かっているけどお兄ちゃんを苦しませて倒したくないの

！」

リルカ「じゃあどうしろっていうのよ!!？」

リルカちゃんはその言っているけど私はお兄ちゃんが苦しませることほしたくないの。

雨「一護さんなら苦しませずに成仏させれますよ。」

織姫・リルカ「えっ!!？」

雨「一護さんの使う鬼道で『魂葬』と言うものがあります。これは対象が虚でも問題ないです。一護さんはよほどのことが無い限り虚に使ったことはないらしいですが。」

雨ちゃんがそう言った瞬間一護君に連絡を取った。

一護『よお、織姫どうs』

織姫「一護君！お兄ちゃんを助けて!!」

一護『・・・わかった』

私は一護君に少し乱暴気味で言ってしまったけど一護君は私の気持ちを理解してくれてすぐに切った。

昊そら「ぐわああああああ!!!」

織姫「お兄ちゃん!!」

私達が話している間にお兄ちゃんは黒い渦のようなものの中に消えてしまった。

一護「一足遅かったか。」

その直後に一護君が来たけどもうお兄ちゃんはいなくなっちゃった。

織姫「一護君・・・」

一護「さて、どうやって『魂葬』打ち込めばいいかな、あれ本人の了承が無いと最大限効果発揮しないんだが。」

すぐに一護君はお兄ちゃんを助ける策を考え始めたので私も覚悟を決めた。

織姫「一護君、お兄ちゃんを少しでも正気にできて成仏させるために未練を無くせばいいんだね。」

一護「織姫・・・ああそうだがどうやら覚悟は決めているんだな。」

織姫「うん！」

一護「しょうがない、説得頼むぜ。」

織姫「分かったよ。」

雨「ちよつと何良い雰囲気作っているんですか!!」

リルカ「そうよ! 抜け駆け無しっていつているでしょ!!」

一護「今は緊急事態だから落ち着け、あと竜貴を送ってから作戦決行だ。」

3人『了解』

〜夜〜

side 一護

竜貴を家に送って織姫の家に来ているが、いつ来るかわからないので泊りがけでチャンスを待たないといけないためとはいえ女の家に泊まるってすげえソワソワすんのだが。あとルキアは別件の仕事が入っていない。

織姫「えへへ、こんな状況じゃなきや一護君がうちに泊まってるって興奮するねえ〜」

リルカ「そうね、襲ってもいいのよ?」

雨「バツチコイですよ。」

一護「勘弁してくれ。」

俺は能力を使えば衣服とか肉体の洗浄などはどうとでもなるので問題ないがことある毎に俺を風呂に入れようとすんのはやめてほしい。

一護「というかもし織姫の兄貴が妹とその女友達が知らない男に襲われているところを見ることになったらどう思うよ?」

織姫「多分問題ないと思うよ?」

リルカ「そうね?」

雨「どこに問題が?」

一護「ダメだこいつら... 早く、なんとかしないと」

俺は頭痛が痛い状態になっているが女性達は何ともないらしい。

一護「まあ無駄話している暇があったら警戒してくれよな。」

3人『は〜い』

俺達がそんなこんな話しながら作戦を固めていると虚の気配が感

じ、空間に歪みが生じた。

一護「来たか!!」(パチンツ!!)

俺は指を鳴らすことで詠唱と技の名称発声を見殺しして結界を張った。

昊虚「ぐああ… うああ… お、織… ひ、姫…」

織姫「お兄ちゃん!すぐに助けるよ!!」

織姫兄の意識がまだ少し残っているので間に合うのでまずは意識を叩き起こす!!

一護「精神強化!!」  
マインドアップ

俺は織姫兄の意識が回復しやすい様にシュリフト the Mind聖文字 精神操作を応用して織姫兄の精神に干渉して意識を増幅して織姫兄の意識を引っ張り出す。

昊虚「うああ… お、織ひ… 織姫」

織姫「お兄ちゃん!!私のことかわかるの!!」

昊「ああ、今まで暗い深海のようなところにいた気がしたのにいきなり引っ張りあげられてびっくりしたよ。」

織姫「それは一護君のおかげだよ。」

昊「一護?」

一護「それは俺のことだ織姫のお兄さん。」

昊「君が… ありがとうのおかげで妹と話すことができるよ。」

一護「それはいいんだけどまず織姫と話すことを話してからにしてくれ。」

昊「そうだね、織姫元気そうでよかった。」

織姫「うん!お兄ちゃんごめんね、あの時キツイ言い方しちゃって」

昊「いいよ、もう過ぎた話なんだしそれよりも今も織姫が僕のあげた髪飾りを大事にしてくれてそれだけでうれしいよ。」

織姫「お兄ちゃんがくれた思い出の物だからね、いつまでも持っているよ。」

昊「そうかいありがとう、それともう時間らしいんだ、一護君、早く僕の意識が残っているうちに僕を楽にしてくれ」

織姫兄は話したいことを話し終わると俺に浄化してくれと言って

きたので『魂葬』を使おうとしたが

昊「最後に君に言いたいことがあるんだけど良いかな。」

一護「うん？何ですか？」

昊「織姫のことを頼むよ。」

どうしようもない質問が来たのでなんとか答える。

一護「…ハイモウトサンヲマカセテクダサイオニイサン。」

めっちゃ片言になってしまったが許してくれ。

昊「そうか良かったよ。」

俺は『魂葬』を使って織姫兄を成仏させた。

昊「じゃあね織姫元気で幸せに過ごすんだよ。」

織姫「うん！お兄ちゃん私幸せになるよ!!」

兄妹の感動の再開と別れにリルカと雨は泣いているのだがなんか別の意味で感情を押し殺して見えるのは俺の気のせいかな？

それはそうとして

一護（どうすつかねえ）

俺は織姫兄に言われた言葉をどうするか深く考える。

一護（織姫を幸せにつて俺にできるわけないだろ…原作の黒崎一護なら可能でも俺は自分勝手なのは自覚しているんだからそんな男よりほかにいい奴なんていっぱいいるだろ。）

俺なんかの卑怯者より他のいい男を見つげるくらいは手伝って上げれるのに俺に任せないでくれよな織姫兄。

一護（気が重くなってきた。）

俺はまだ見ぬ先の未来について考えていると体に柔らかいものが当たった。

一護「…うん？」

なにかと思つて見てみると

織姫「えへへ、一護君今日は私と寝よう」

一護「織姫、頼むから離れてくれないか？」

織姫「どうして離れないといけないの？お兄ちゃんと約束してくれただしよ私を幸せにするって。」

一護「いやでもな…」



俺はどうするか考えているとその状況を見ていた残りの二人が乱入してきた。

雨・リルカ「ちよつと待ってください（待ちなさい）!!」

二人は俺達の間に入り込んできた。

織姫「ちよつと!!二人とも邪魔しないでよ!!」

雨「邪魔しますよ!!こんなやり方で抜け駆けしようとか卑怯ですよ!!」

リルカ「そうよ!!ギョクと一緒にになって決めた約束にこういう第三者との約束を盾に迫るやり方は禁止って言ったでしょ!!」

織姫「ワタシソクシラナイ」

雨「白々しいこと言わないでください!!」

リルカ「そうよ!!というかこの家のベッドで一緒に寝るスペースがどこにあるのよ!!」

織姫「え?そこは一護君の能力でチョチョイって広くできないかな?」

一護「頼むから俺を巻き込まないでくれ。」

織姫「一護君、どうして私達の気持ちに答えてくれないの?」

一護「...」

雨「そうですよ、私達になにか不満があるなら言ってくださいよ直しますから」

リルカ「そうよ、もしかして一人選ぶと他が悲しむとかって理由?ならギョクに頼んで法律を変えるところかできるでしょ。」

一護「...いやそんな理由じゃなくてだな。」

3人「じゃあなんで?」

一護「...俺が俺を好きになれないからだ。」

織姫「...どういうこと?」

一護「...俺は周りから完璧な男とかチート野郎とかかって石田やチャドといった知り合い以外の男たちから陰口言われてさどうも自分のことが好きになれなくてさそれであまり女に群がられたくないし彼女とかも作りたくないんだよ。」

俺はそれっぽい理由を言っただけで彼女達を誤魔化した。

織姫「それがどうしたの？」

一護「・・・」

雨「そうですね、陰口が何だっというんです。そんなのただの嫉妬でしょ？」

リルカ「そうよ！第一私達は一護以外の男と付き合うなんてまっぴらごめんよ!!」

織姫「そうだよ、もし一護君が自分を好きになれないなら私達が一護君が周りになんて言われようが関係ないくらい幸せにするよ、私達で足りないならもつと増やすから。」

一護「・・・ え？増やす？増やすって何やるの？」

3人『え？新しく一護君を好きになった女の子を調k y・・・ 説得して一護君（さん）（呼び捨て）のお嫁さんになってもらうけど。』

一護「待つて!!?今なんて言った!?!」

3人は不穏なことを言っているが俺は何か今日を乗り越えるために説得して何とか妥協案でリビングで全員で寝ることになった。

まあしばらくは大きなことも起きないし一安心だな。

と思っていたが

一護「てめえ！待ちやがれえ!!」

ルキア？「誰が待つつか!!」

ルキア「くっ！一護、挟み撃ちで捕まえるぞ!!」

俺とルキアはルキアの義骸と鬼ごっこをしているがなんでこんなことになっているのかそれは2時間ほど遡る。

〜2時間前〜

俺は休日いつも通り浦原商店に来ている。

今は修行の合間に浦原商店の手伝いをしているのだが

一護「何だこれ？」

俺は倉庫にある新品を描かれた箱を見て首をかしげる。

とりあえずこういうのは喜助に聞くのが手っ取り早いので持って行った。

喜助「それっすか、それは義魂丸っす」

義魂丸とは死神が現世で義骸から霊体になった際に用いられるも

ので霊体になって魂の抜けた義骸に仮初の魂を入れるためのものだ。

一護「あくなるほどね、俺には必要のない物だから忘れてたわ。」

喜助「まあ一護さんのようなケースは例外なんで基本は需要はあるんっす。」

一護「だろうな。」

俺達は世間話をしていると

ルキア「一護かお前も修行しに来たのか？」

一護「そういうルキアもか？」

ルキア「ああ、あそこの修行はやるだけ効果があるからな。いつまたあの虚が来てもいいように備えておいて損はない。」

一護「違いねえ。」

ルキア「ところで一護その箱は何だ？」

一護「最近入荷した義魂丸らしいぜ。」

ルキア「そうかそれはちようど良い。」

一護「何がだ？」

ルキア「実はな、元々持つてきていた義魂丸がなくなってしまったのだ。」

一護「それ大丈夫なのか？」

ルキア「実は現世に派遣される死神の義魂丸は所有者から離れると一定時間経過すると消滅するように作られているのでな、多分もう消えてしまっている。」

一護「そうなのか、まあ安全装置とか付けとかなきゃ尸魂界の技術が現世に流出するわな。」

ルキア「まあ欠点を上げると再支給されるまで時間がかかることくらいか。」

一護「贅沢過ぎるだろそれ」

ルキア「という訳で店主この義魂丸をかうぞ。」

喜助「毎度ありっす。」

ルキアは喜助に頼んで購入の手続きをしていたので俺は箱を開けておいた。

喜助「ほいつす。」

ルキア「これでいいな。」

そうこうしているうちにルキアが喜助に代金を支払っていた。

一護「そういや俺、義骸から霊体が抜けるところ見たことがねえや。」

ルキア「そうかでは試しにこれでやってみるのですね見ているといい。」

そういい、ルキアが丸薬を飲んで義骸から霊体が出てきた。

一護「おうこんな感じなのか、そういやその義魂丸ってどんな性格のやつなんだ。」

喜助「えくと、たしか」

俺達は性格の確認のために箱を確認しようとしたらルキアの義骸が動き出した。

義骸「フッフ、ようやく自由に動けるぞ。」

一護「・・・誰だお前は」

義骸「名前はない。ではさらばだ!!」

そう言い義骸は店を出て異常な跳躍して建物を跳んで行ってしまった。

喜助「ツ!?どうやらあの義魂丸はまずいっすよ。」

確認した喜助は少し焦った声で言った。

一護「どうやらそうっばいなルキア回収するぞ!!」

ルキア「承知した!!」

俺は即座に死神化して霊体になりルキアとともに義骸の追跡に入った。

俺は、瞬歩、完現術<sup>ア</sup>：加速<sup>ク</sup>、飛廉脚<sup>セ</sup>の合わせ技でルキアは瞬歩で速度は十分なので手分けして探したんだが

一護「いねえ!!何処だああああ!!」

ルキア「1時間近く探したのに見つからぬとはいったいどこに隠れておるのだ?」

俺は見つからないことに苛立ち思いっきり叫びルキアは思案しているがあの義骸がなんかやらかさないか不安だ。

雨竜「あれ?一護に朽木さんどうしてこんなところに?」

一護「雨竜か今実は面倒な探し物をしててだな… 待てなんでルキアを見てこんなところって言った。」

雨竜「… いや実はさつき朽木さんが織姫や雨とリルカにセクハラしててさ。」

一護・ルキア「「それを先に言え!!何処だ!!」」

雨竜「多分今も公園で3人にセクハラしているんじゃないか?」

ルキア「何故おぬしは止めぬ!?!」

雨竜「いや女の子同士絡みかなって学校でも織姫さんと雨とリルカが女子生徒の一人にセクハラされているし」

ルキア「私にそんな趣味ないわ!!たわけえ!!」

一護「いいから義骸の暴挙を止めるぞ!!」

ルキア「ああ!!」

俺達は怒りを胸に抱いて現場に急行した。

現場に到着した俺達が目撃した光景は

織姫「ん… あんっ… ルキアさんやめてよお」

雨「あん… そうですよお…」

リルカ「そ、そう… よ… や、やめなさい…」

ル義「そういうなつて全員柔らかいなく」

ルキアの義骸で3人にセクハラしている義魂丸の光景だった。

ルキア「… 卍k」一護「落ち着け気持ちは分かるが落ち着け」ル

キア「ふふふ、人の義骸でこんな暴挙をしているのに落ち着けるわけ無かるう?たわけが」

一護「とりあえず義骸もろとも破壊するのは構わないから3人を離してからね。」

ルキア「承知した。」

俺はとりあえず義魂丸の意識をこちらに向けさせる。

一護「おいっ!!ようやく見つけたぞ!!」

ル義「… うん?げえ!!見つけた!!」

義魂丸は即座に逃亡した。

一護「逃がすかあ!!」

ルキア「イキテカエレルトオモウナヨタワケガア。」

ヤバい、ルキアの言葉が片言になっている。早く捕まえないとルキアの卍解で辺り一帯が凍り付いて事後処理が大変なことになる。

そして俺達は鬼ごっこを1時間くらいする羽目になり

一護「てめえ！待ちやがれえ!!」

ル義「誰が待つか!!」

ルキア「くっ！一護、挟み撃ちで捕まえるぞ!!」

先ほど言ったこの状況になっている。

一護「縛道の一塞!」

俺は最初級の縛道の手足の動きを封じる縛道で止めようとするがル義「無駄だあ!!」

義魂丸は俺の霊圧の流れを読んで縛道を回避した。

一護（面倒だな、ただでさえルキアの義骸で基礎スペックが高いのに入っている義魂丸が改造魂魄だから戦闘特化の義魂丸えこういつた複雑な動きもできるのか。）

俺は状況と改造魂魄の動きを観察した結果捕まえるのは困難と言うのが現状の答えだ。

ルキア「くう、あんな下種な義魂のせいで織姫たちに私が同性愛者の類と誤解されてしまうではないか！覚悟せい!!」

ル義「いいじゃんか!!別に減るもんじゃやないんだし!!」

一護「お前セクハラ発言や行動に関してはいいい加減にしろよ?」

俺は義魂の言い分に呆れ果てた返しをしたがいい加減にこの状況を何とかするべくある能力を解禁する。

俺は聖文字 シユリフトthe Thunderbolt 雷 霆 の雷速移動で義魂を追い詰める。

〜10分後〜

ル義「わあく！離せええええ!!」

義魂を『禁』と凍結で拘束して何とか捕獲に成功した。

一護（こいつヤバいだろ俺が雷霆を使う羽目になるなんて俺は内心で改造魂魄のスペックに戦慄していると

ルキア「覚悟はいいな？卍解『白霞』一護「あ、ちょっと待って」

ルキア「なんだ一護？邪魔をするな。」

ルキアは肉体の温度を下げているのか言葉が冷ややかだ。

一護「どうせならこの義魂を別の物に移して織姫たちと一緒にボコつたら？」

ルキア「それもそうか」

ル義「この外道!!」

一護「原因はお前だからな、文句を言われる筋合いはないぞ。あとなんでお前は逃げたんだよ。」

ル義「・・・」

一護「よし、言えば少しは減刑してやる。」

ル義「・・・俺はな改造魂魄モッド・ソウルなんだよ」

義魂はそう言い自分のことを話した。

「ここは原作と変わらないのでカットします。」

ル義「と言うことなんだよ」

ルキア「・・・そうだったのか。」

一護「そういうことなら俺達が文句は言えないな、でも織姫たちにルキアの義骸でセクハラした件については許さんからやっぱボコられる。」

俺はそう言いながら精the神の精神操作で拳でルキアの義骸を貫い

て義魂を取り出した。

貫いた際に奇妙な手ごたえがあつたがまあ問題ないだろ。

ルキア「おぬし義骸を貫くな。」

一護「今回はこつちに非があるからな、修理が終わるまでこつちで予備の義骸を貸すよ。」

ルキア「そうか、しかし新しい義魂はどうすればいいか・・・」

一護「こいつにセクハラ防止用のストッパー付けるからそれでいい？」

ルキア「う、うくんまあそれならいいか。」

ルキアの了承を得て浦原商店に戻り喜助と一緒に義骸の修理をしながらライオンのぬいぐるみに入ったコンは女性陣のサンドバックになっていた。

side 尸魂界ソウルソサエティ

指令書

第6、第13部隊隊長、副隊長に現令、70日後現世で行方が消失した裏切りの容疑が浮上した第13番隊第3席朽木ルキアの搜索、発見次第拘束及び連行せよ。

海燕「ふざけんよ!!」

白哉「落ち着け、感情に身を任せるのは兄けいの悪い癖だ。怒った所で指令が変わるわけもなし。」

海燕「お前!こんなふざけたこと言われて怒らないのか!!?」

白哉「思うところが無いわけではないルキアを信じているのは事実だ、だが私達はルキアの現状を知らない。真実を知るためにもこの指令は受けるべきだ。」

海燕「・・・そうだな。」

~~~~~

## 6番隊隊舎

恋次「隊長!!」

白哉「・・・恋次、指令で現世で行方が消えたルキアを搜索、拘束及び連行することが決定した。」

恋次「ツ!?冗談じゃないんですか!?!」

白哉「冗談でこんなことは言わぬ、理由はわからぬがルキアの義骸の反応が消えたことは12番隊の報告で明らかだ。」

恋次「・・・」

白哉「だがまだ問題ない、有罪だと決まったわけではない早急にルキアを発見し無罪の証拠を発見すれば済むことだ。」

恋次「・・・そうっすね分かりました。」

~~~~~

## 13番隊隊舎

海燕「くそっ!!どうしてこんなことになっちゃったんだ!!」

都「落ち着いて、海燕まだルキアが有罪と決まったわけではないわよ。」

海燕「そうだけどよ・・・」

都「あなたは隊長よ、部下であるルキアを信じてあげなくてどうするのよ。」



海燕「… そうだな、よしっ！なにがなんでも部下の無実を証明してやる!!」

二人の隊長はこの事件の発端が極めて阿呆な興味から始まったことを知らない。

そしてその原因はと言うと

side 現世

一護「ここをこうで… そこがそうで」

喜助「一護さん、そのパーツ取ってくれませんか。」

一護「ほいつ、それにしてもこの変なよくわからない受信機と発信機みたいな何なんだろうなく正直邪魔なんだよな。」

喜助「おそらく、尸魂界からルキアさんの位置を把握するための物だと思えますよ。」

一護「マジかならさっさとこれも修理しないと。でもこの壊れ方だと1カ月はかかるぞ。まあ急ぎじゃないしこれは後でもいいか。」

喜助「そうっすね。」

一護「とりあえずこれを除く義骸を元の状態に戻すか」

喜助「ですね。」

原因は暢気に義骸修理をしていた。

## 20話：「面倒だが仕方がない」

コンがルキア預かりとなって更に10日経ち6月になったが特に変わりなく真時玉で時間加速で義骸を高速修理したが受信機と発信機に使われる素材が不足してとりあえずそれ以外は修理し終わったのでルキアに渡した。

一護「すまん、組み込まれている機能の基本的な部分は修理できたんだけどそれ以外の追加機能の一部の修理が材料不足で終わって無くてな材料が届いたらまたちゃんと修理させてくれ。」

ルキア「分かった、そういうことなら仕方がないだが基本的な運用に問題ないのだろうか？」

一護「それは問題ない。」

ルキア「ならば問題ない。」

ルキアに義骸を返却し終え今日は家で日課の筋トレをやった後ダラダラしている。

偶には休まないと体を壊すからなと誰に言っているかわからない言い訳をしていたら喉が渴いたのでリビングに行って飲み物を取りに行く

???'『ボハハハハハー!!!』

一護「うん?なんだ?」

奇妙な笑い声が聞こえたのでリビングのほうを見てみるとテレビでやたら派手な奇抜な格好をしたサングラスをかけたおっさんが映っていた。

一護「何だその番組?」

俺は疑問に思ったので見ている遊子に聞いた。

遊子「これ?これはねえ〜「ぶらり霊場 突撃の旅」って番組だよ。でこの人はドン・観音寺って人だよ。」

一護「そうかじゃあ俺は部屋に戻るわ。」

遊子「お兄ちゃんってこういうものに興味ないよね。」

一護「幽霊とかは信じるけどこういう番組は信じねえんだよ。」

遊子「変わっているよねえ〜」

一護「ほっとけ」

そうしている間にテレビから

ドン『スピリッツ・アー・オールウェイズ・ウィズ・ユー!!!』

と派手なおっさんはそう高らかに叫んでいた。

一護「そういえば観音寺のおっさんと会うイベントがそろそろあつたけか。」

俺はあのおっさんが意外なキーパーソンになるのは知っているの  
のでできるのなら会って親交を深めておきたい。

俺はそのイベントについてギョクに聞いておいた。

く2週間後く

休日、遊子が親父に強請って観音寺のイベントに家族全員で参加した。

一護「なんで俺まで参加しなきゃならないんだよ。」

一心「だっはっはっは!!いいじゃないか一護!家族全員でなんかできる時間は限られているんだからな。」

真咲「そうよ、遊子と花梨と一緒にこういうことに参加できるなんていつかできなくなるんだから。」

花梨「あたしもこういうのは好きじゃないのに…。」

遊子「お兄ちゃんも花梨ちゃんもなんでそんなこと言うの!!」

そんな家族との一幕がありながらもイベントが開始したが俺は親父達に一言言つてその場を離れた。

ドン『ボハハハハハハー!!!』

観音寺の笑い声が聞こえたのでイベントが始まったのだろう。

そんなことより俺は観音寺が除霊する廃病院の入り口で死神化して霊体となり待った。

そしたら予想した通りルキアが来た。

ルキア「一護か、おぬしも来たのか。」

一護「ルキアか俺は少し違うがお前は仕事か?」

ルキア「まあ、そうだな少し最近おかしな現れ方をする虚の調査と浄化をしている。」

一護「うん?おかしな虚?」

ルキア「うむ、本来は虚になることのない成仏寸前の整が強引な方法で虚にされている形跡があつたのだ。」

一護「：多分だけど俺がここに理由がそれと関係しているかも。」

ルキア「どういうことだ？」

一護「実はな：。」

俺は観音寺のことを話した。

ルキア「：善意でやっているのは分かったが中途半端にしかない知識で他人に迷惑をかけないでもらいたい。」

一護「悪い奴ではないんだけどな。」

俺達はそう言い廃病院に入った。

一護「ここに虚が出るデータでも入つたのか？」

ルキア「まあ、そうだな。通信機にそのデータが来た。」

一護「それで尸魂界に連絡とかできないのか？」

ルキア「流石にまだ別世界との連絡は出来ぬよ。そうしたい場合、大きめの連絡装置を使わぬといけないのでな。」

一護「そうか、分かつたよ。」

俺達は雑談しながら周囲を警戒していると霊圧を感じ取った。

一護・ルキア「来たか！」

俺達は斬魄刀に手をかけたが

ドン「へえくい！ユク達がここに彷徨う霊だな!!」

一護・ルキア「：。」

ドン「さあ、私が君たちを安らかに成仏させてあげよう!!」

そう言いながら観音寺は手に持つステッキを突き出してきた。とりあえず俺達はそれを避けた。

ドン「何故！避ける!!」

一護・ルキア「むしろなぜ避けないと思つた？」

俺達は同時に突つ込んだ。

ドン「君たちのような彷徨える霊を成仏させるのが私の仕事だよ、ボーイ&ガール。」

一護「そもそも俺達、死んでないし」

ルキア「そうだな」

ドン「ワツツ!!?君たちは何を言っているんだい!?君たちから感じる気配は霊特有のものだぞ!!」

一護「俺はそう言う霊的能力があつてその影響だ。」

ルキア「私は最初からそういう存在だからな。死んでから霊になつた存在ではないのな。」

ドン「そ、そうかではなぜ君たちはここへ」

一護「虚の気配がしたのとあんたの除霊が一部間違つていたからそれを言いに来た。」

ルキア「私は仕事で虚を退治しに来た。」

ドン「ガールのほうはいいとしてボーイ君のいう私の除霊のどこが間違つているというのだ。」

一護「えつとそれはだな...」

俺は観音寺の整の除霊の仕方のミスと正しいやり方を教えた。

ドン「つ、つまり私は必要が無かつたのに霊を苦しめていたのか...」

観音寺は自分のやり方が間違つていたことにショックを受けていたが

ドン「ならば次からは正しいやり方で霊を成仏させ今までの間違つたやり方で苦しめてしまった霊の分も頑張らなければなるまい!!」

一護「立ち直るのはええしポジティブだなあんた。」

さすがあの藍染に一目置かれる精神を持つ男だ。

それと同時に境界と二つの虚の気配がした。

一護「タイミングがいいのか悪いのかどつちなんだよ...」

俺はため息を吐きながら斬魄刀を抜いた。

ルキア「この気配...あの虚か!!」

一護「とりあえず、石田たちに連絡入れといたぞ。」

ルキア「かたじけない。」

ドン「ボーイ&ガール!私も手を貸そう。」

一護「何言つてんだおっさん?」

ルキア「ここから先は私達の仕事だ、いくら霊的力があるとはいえ

ただの人間を巻き込むわけにはいかない。」

ドン「普通はそうだろう、だが私は今見ている子供たちの前で逃げるわけにはいかぬのだよ。」

ルキア「そう言ってもd」一護「分かったよおっさん」ルキア「一護!!」

一護「とはいっても片方は俺達でなきや倒せないからもう片方を倒すのはあんたでいいな?」

ドン「分かった。」

ルキア「いいのか一護?」

一護「元々、俺達が倒す虚がこのおっさんが倒すってだけだからな、それにあの虚を相手をする以上邪魔が無いほうがいい。」

ルキア「それはそうだが」

一護「四の五の言ってたら敵さんのお出ましたな。」

一体は原作で出てきたやつで片方は俺達がよく知る虚刀虚だ。

一護「おっさん、人型刀持ちは俺達でやるからあっちのデカ物はあんたに任せる。」

ドン「分かったぞ、それと君たちに一つ言っておく」

一護・ルキア「「なんだ。」」

ドン「死ぬな」

一護・ルキア「「分かってる（おる）」」

俺達はその言葉を皮切りに戦闘を開始した。

虚「グルうああああ!!」

大型の虚は俺達のほうに来たため動ブルート・サイナーアルテリエ静血装で強化した蹴りを放ってぶっ飛ばした。その際に肉體能力の弱体化と特殊攻撃耐性の大幅な弱体化の呪いをかけておく。これくらいすれば観音寺でも倒せるだろう。

ドン「ではあのデカ物は私に任しておきたまえ!!」

そう言い観音寺はデカ物虚を追っかけて行った。

ルキア「これで心置きなく戦えるな。」

一護「そうだな。」

虚刀虚「...」

こいつはいつものやつと違って黙ってうめき声さえ発さないので不気味だ。

まあそんなこと言っている場合ではないので両手に持った二本の斬魄刀を構えていつでも行けるようにする。

ルキア「舞え『袖白雪』」

ルキアも斬魄刀を解放した。

一護「じゃあ行きますか『不知火』！」

俺はお気に入りの剣技で先陣を切った。

右の刀で袈裟切りを放ったが虚は虚刀で防いで返す刀で切り返してきたが俺は脇差しで防いだ。

ルキア「はああ!!」

ルキアは背後に回り込み冷気を纏った袖白雪で切りかかった。

虚刀虚「…」

虚は響転ソニードでルキアの攻撃を回避した。

一護「破道の三十三 蒼火墜」

俺は青い炎を放つ鬼道で攻撃したが虚刀虚は回避したが左腕を焼かれ吹っ飛んだが再生した。

この一連の攻防が終わった俺は言葉を出す。

一護「これは俺も解放した方がいいな。」

ルキア「いややめておけ敵の固有能力が不明な状況でこちらが先に手札を切るのはまずい。」

一護「敵の基本能力はわかったけど一連の攻防で加減している余裕はないと思うが」

一連の攻防の流れで物理特殊の能力無効化は無いが身体能力が現在の俺と同等クラスあり霊圧もルキアの数倍もあってなかなか厄介と言える。

え？<sup>the</sup>全知全能Almightyとか使えばいいってそんなことしたら藍染にバレて対策されるに決まってるだろう。

一護「しょうがない固有能力を使うくらいには粘りますか。」

ルキア「それ以外にはなさそうだな。」

虚刀虚「…」

そう思った俺達だが虚は刀を構えてその刀身から雷撃を部屋全体に放ってきた。

一護「チツ！」

俺は舌打ちをしながらその雷撃を切り払いつつ回避した。

ルキアも氷の壁で防御した。

ルキア「あの虚は雷撃能力があるのか？」

一護「…いやまだ隠している力があると思うからそれを引き出してからだ。出し切らせてから不意打ち喰らって大けがするわけにはいかないからな。」

ルキア「それはそうだが」

一護「それにしても俺の知る限り虚刀虚はこんな単純な相手ではないんだがな…。」

ルキア「確かにこの前のと比べたら能力が単純だな。」

俺達は虚から意識を外さずに互いの意見を言い合う、今までは鍛錬不足や能力の相性上不利な相手ばかりだったから警戒度が自然と上がってしまう。

一護「そういえばさっきの蒼火墜が直撃して再生したのに霊圧が上がらなかったな。」

ルキア「そういえばそうだったなどういうことだ。」

何時もだったら必ずと言っていい現象が起こらなかったことから逆に不自然に感じる俺達。

これではまるで

一護「まるで俺達にワザと倒させようとしているみたいだ。」

ルキア「それが一番の有力のようだな。」

俺達は一番の可能性が面倒以外の何物でもないのうんざりしたが倒さねば被害が拡大してしまうので倒さざるを得ないのだ。

一護「しようがないやるぞ。」

ルキア「ああ」

俺達は刀を構えて虚に切りかかろうとしたときに

ドゴーン!!

病室の壁をぶっ壊してさっきのデカ物虚が飛んできた。



一護・ルキア「「.:. え?」」

ドン「スピリッツ・アー・オールウェイズ・ウェイズ・ユー!!!」

なんか観音寺がやたらハイテンションでぶち抜いた壁から来た。

一護「どうした観音寺?」

ドン「うん? おうボーイではないか! と言うことはここに戻ってきてしまったんだね。その悪霊が変な黒い穴に入って消えての繰り返しで何とかここまで追い詰めたのだよ。」

一護「そ、そうかじゃあさつきとそいつ倒して外にいる連中に報告して帰ってくんね?」

ドン「しかしその悪霊はまだ除霊しきってないのだ、私も参加する。」

一護「イヤいいからてかこいつを下手に倒すと碌なことにならないから。」

ドン「うゝむ、では仕方がないではこの悪霊を我が奥義で倒そうではないか、ボーイ&ガール我が奥義しかとその目に焼き付けるがいい!!」

観音寺流最終奥義!! キャンボンボール 観音寺弾!!」

観音寺はそう叫びステツキから霊力によるピンポン玉並の大きさの弾を放った。

威力は弱体化している虚を消し飛ばすくらいはできたようで頭部をぶつ飛ばして成仏させた。

:. . それにしてもこの能力ってなんだ? 俺の持つ4つの素養にいづれも該当しないんだが?

ギョク（では解析と作成しておきますね。）

今なんかギョクの声が聞こえた気がするが気のせいだろう。

ドン「ではボーイ&ガールさらばだ!!」

そう観音寺はハイテンションで去っていった。

一護・ルキア「「.:.」」

虚「.:.」ダッ!!

一護・ルキア「「.:. ハッ!」」

俺達が一瞬呆けた瞬間に虚刀虚は切りかかってきたので気持ちを

瞬時に切り替えて戦闘を再開した。

一護「もうこうなったら仕方がない！倒すぞ!!」

ルキア「そうだな！では行くぞ!!」

俺は聖文字シュリフの暴風the cycloneによる風操作で生成した風の鎧と風を刀に纏わせて高速戦闘を開始した。

一護「『空刃十字衝』」

俺は脇差しを右から左に一閃、その後刀を上から下に振り下ろし真空の刃を十字に飛ばす技で破壊力は月牙十字衝より劣るが真空の刃であるために視認できず切れ味はエゲツナイレベルなのでこういう室内では重宝する技だ。

虚刀虚は一太刀目の真空刃を雷を放って防ぎ、二太刀目は虚刀で防いだがルキアはすでに虚刀虚の背後をとった。

ルキア「『初の舞』そのまゝ 月白』」

刀で地面に円を描き、その場所の天地全てを凍らせる技。

範囲を狭めて放ったがその分威力が上がっていたのだが虚刀虚は雷を鎧として身に纏い氷を電磁分離させて氷を水素と酸素に分離させて雷の熱に反応した。

一護「…ツ！まずい!」

雷の熱に反応して一気に熱が膨張して大爆発が起こりかけたため俺は即座に防音と爆風と耐衝撃・閃光結界を張った。

ドガガガガン!!!

激しい閃光と爆発が発生したが俺の張った結界で防いだので事なきを得たが虚は死んでおらず、受けたダメージを再生した。

一護「『縛道の九十九禁』 しばらくはこれでいいとして面倒だな、やっぱ俺も解放した方がいいか?」

ルキア「もうその方がいい気がしてきたな」

俺は『禁』で虚刀虚を拘束するとそう言った。

ルキアも賛成したが正直言ってここが室内じゃないなら鬼道のごり押しで倒せるのだがあまり建物を破壊しまくって敵を倒すのは俺の趣味ではないからな。

一護「… あ！待てよ、別に斬魄刀を解放する必要ないじゃんか。」

ルキア「・・・うん？どういうことだ。」

一護「こういうことだ」

俺は完現術を使って死覇装を黒コートに変化させた。

ルキア「確か、茶渡や織姫それにリルカが使う完現術ふるぶりんぐだったか？」

一護「そうだけど」

ルキア「おぬしいったいどれだけの力を持っておるのだ？」

一護「ここだけの話だけど俺、虚の力も持っているから。」

ルキア「・・・それ言ってもよい奴なのかそれは」

一護「お前が悪いように吹聴する奴ではないと分かっているからな。」

ルキア「何と言うか照れ臭いな。」

一護「惚れちやつた？」

ルキア「人を揶揄うな!!たわけえ!!」

怒られたがこの状態だと聖文字に斬魄刀と同じく虚の浄化能力がつくので虚を滅却する必要が無いので問題ないということ。聖文字

The Ground大地大地に含まれる重力操作で虚を取り込み圧殺した。

一護「いっちょ上がりかな？」

ルキア「何故疑問形なのだと言いたいのがホントにこれで終わりなのか。あまりにもあっさり過ぎる。」

ルキアの言う通り今までで一番手ごたえのない虚刀虚だった。

するとドタドタという足音が聞こえてきた。

ドン「へいッ！ボーイ&ガール!!」

一護「いきなりなんだ観音寺」

ルキア「また何か用か？」

ドン「その通り、実は空座町に悪霊の大群が迫っているんだ！」

ルキア「はああ!!」

一護「どういうことだ？」

観音寺の言葉で俺はちょっと霊圧探知の範囲を50kmに上げて調べると確かに空座町に尋常じゃない数の虚が迫っている。

しかも虚刀虚の気配も結構感知できる。

ルキア「まずいぞ!!この数は急いで戻らねば犠牲者が出る!!」

一護「ありがとう観音寺！俺達はすぐに迎撃に行くから！いつかまたどこかで会おう。」

ドン「そうかい、でも私も少ししたら援軍に行くので、待っていたまえ我が戦友<sup>とも</sup>達よ!!」

一護・ルキア「そうですねー」

俺達は軽く返して空座町に急行した。

一護「『縛道の七十七 天挺空羅』<sup>てんていくうら</sup>」

俺はルキア含む全員に繋いだ、ルキアにも繋いだのはあいつらの報告をルキアにいちいち伝えなくて済むからだ。

一護「こちら一護、そっちはどんな状況だ。」

雨竜「一護か、こっちは少し厄介な状況だ、虚の数が尋常じゃない。』  
チャド「それに虚刀虚の気配の相当あるぞ。」

ルキア「やはりか、どうもこちらで倒した虚刀虚がその大量発生の原因になっておったようだ』

雨竜「どうも虚刀虚を生み出した原因はこっちの性格を熟知してこの状況を作ったようだね』

織姫「でも全部倒すにしてもみんなにバレたらそのあと少し面倒だよ。』

雨「喜助さんにその手の物を作ってもらうにしても時間が足りませんよ。』

リルカ「もうこうなったらばれるの覚悟でやるしかないわ!!」

織姫は竜貴たちにバレることを懸念していて雨は喜助に打開用の道具を作れるが時間がないことを理解していてリルカは過去のトラウマを振り切っても事態の收拾に入ろうとする。

一護「こうなったら面倒だが仕方がない、俺と喜助が合同で作った特殊義骸を併用して日常の連中にはバレない様にして虚を一掃するぞ』

一同「了解!!」

全員の返事を聞いて俺はこの世界に転生？して以来初めての全力を出す時が来たようだ。

21話：「早く終わらせない理由にならないよな。」

とりあえず、俺とルキアは空間転移で空座町それも浦原商店に直行して全員を集合させた。

全員揃ったところで加速世界を発動した。

一護「とりあえず、今日から虚を一掃するために特殊義骸と義魂丸であいつらを誤魔化しながら徹夜をしてでもやるぞー！」

雨竜「そうなりそうだね、この数は昼夜問わず戦いになりそうだ。」

雨竜の言う通り通常の大きき問わずの虚は5000近くいるし虚刀虚に至っては2000体は超えているしどんだけの数を用意したんだよ。気分が萎える。

織姫「徹夜かあく長丁場になるから携帯食料とかを私と雨ちゃんとリルカちゃんたちで作ってくるよ。」

一護「出来る限り早めにしてくれ。」

織姫「分かったよ。」

雨「では作っている間に作戦を固めておいてください。」

一護「了解」

リルカ「最っ高に美味しいものしておくわね!!」

一護「楽しみにしているよ。」

織姫、雨、リルカはそう言って料理をしに行った。

ちなみに加速世界では思考だけでなく肉体も動かせるのでこの状態でも動いて移動したり物に触れて動かすこともできるのでこういう状況だと重宝する。

チャド「さてできる限りバランスよくメンバーを割り振らないとキツイな。」

一護「そうなんだよね、俺と雨竜とチャドは単独でも特に問題ないけどルキアも大丈夫だけど耐久力がなく。」

ルキア「私も大丈夫だと言ってくれるのは嬉しいがやはり耐久力が問題か……」

そう、ルキアの虚刀虚相手なら単独でも問題なのだが連戦前提だと俺や雨竜は動フルート・ウイアーネアルテリエ静血装、チャドは鎧とカンストした完現術による

圧倒的な身体能力とタフネスがあるので問題ないがルキアはそう言った防御力上昇系の能力がないのでルキアは3人娘たちとで構成することになりそうだ。

3人娘は能力は通用するが攻撃力が足りないといった問題があるのでそこにルキアを組み込めば攻撃力不足問題は解決するのでそのことを、雨竜、チャド、ルキアに伝える。

雨竜「それがよさそうだね。」

チャド「確かにそれが一番リスクが少なそうだな。」

ルキア「仕方あるまい。それで行こう。」

3人は納得したようだ。

一護「とりあえず、特殊霊具を全員に配布するからちよつと待っててくれ」

そう言い即座に家にある、4次元箱を取ってきた。

雨竜「それに入っているのか?」

一護「そつ、リルカの完現術を見て思いついたから自作した。ただし、物はいれられても生き物はいれられない。」

ルキア「またおぬしはまだそんなものを隠し持っていたのか?」

一護「隠していたわけじゃない、これにはこういう時用の道具を入れてあるだけだ。」

俺はそう言いながら、腰に付けるポーチやルキア以外の装備などを出した。

一護「とりあえず、雨竜達の装備は完成したから渡しておくぞ。」

雨竜「流石だな、いい出来栄えだ。」

ちなみに、各個人の装備には霊圧等を流し込むと動静血装が展開できる代物でこれで攻防の能力の強化と衣類が壊れにくくなる。ちなみに俺と雨竜は同時に使用可能だ。

どういふことかと言うと肉体と衣類にそれぞれ発動するからだ。

一護「これらのポーチは4次元箱ほどじゃないがそれなりにものを入れられるから回復用の霊薬類を入れておいてくれ。あと出した時はいれてある物の中から望んだものを取り出せるからな。」

俺は4次元箱から薬品を取り出していく。ちなみに霊薬の種類は

肉体再生薬、状態異常回復薬、血止薬、e t c . . .

ルキア「どれだけ作つとつたのだおぬしは」

一護「喜助と一緒にになって色んな薬品を作ってたからまだ相当な数の名種類の薬品類があるぞ？」

雨竜「これは二人の戦闘に対する考え方が戦いに備えてあらゆる事態に対応するためにできることをできるだけするっていうのが関係してこれだけの手段が出来たんだよ。」

チャド「そのおかげで一護はこういう状況になっても慌てることもないんだよな。」

一護「常日頃から準備をしていると余裕ができるからな。」

俺はそう言いながら自分と3人娘のポーチに薬品類を入れていく。

雨竜達も自分たちのポーチに薬品類を入れていく。

一護「あとは霊圧を込めると数秒後に爆発するリングや戦闘用万能ナイフe t c . . . 必要があるものも持って行けよな。」

ルキア「ホントにどれだけのことを想定しておるのだ!？」

一護「だって、ルキアと会った時の無効化能力持ちがうざかったから準備しておいたのよ。」

俺は喜助にそのことを伝えたら喜助から浮ついた感じが消えて互いが持てる知識と技術を総動員して色んなものを作成しまくってその過程で発見したことを発展させた代物を作成したりと色々作ってたらこれだけの数の道具を作っていた。

一護「チャド、要望通りの武器とそれを保管・召喚する腕輪を造つていたぞ、少し慣らしておけ。」

チャド「悪いな一護、ありがとうな。少し試してくる。」

チャドは受け取って装着して試しがてらに地下室で確認しに行った。

一護「えくとあとは霊剣、霊槍、霊槌、e t c . . . 一応斬魄刀以外の武器も用意しておいたけどこれは基本俺持ちかな。でも多分使わないと思うけど一応持っていくか。」

俺は完現術、滅却師、死神の各能力で武器には困らないけど何らかの方法で武器を封じられた時のために用意しておいた代物たちだ。

俺はそれらを武装用のポーチにしまった。

ルキア「はあく全く用意周到と褒めておけばよいのか」

一護「それほどでも」

雨竜「それはそうとして誰がどこを担当にするか決めておこうか。」  
一護「あつ！ちよつと待ってこれも忘れてた、ほいっ！」

俺はさらに4次元箱から黒のチョーカーとネックレスを取り出した。

ルキア「今度のは何だ？」

一護「これは同じものを持っている人以外が効いた声が自分が知らないやつ声になるチョーカーと同じく自分の姿を同じ装備をつけているやつ以外に別の姿に認識させるネックレスだ。これで少しでもバレる可能性を排除しておきたい。」

ルキア「了解した。」

雨竜「では改めて誰がどこを担当する？」

一護「俺は虚刀虚が一番多い場所を担当するよ。雨竜は数が密集しているところを頼むよ、お前の矢なら一番の適所だろ」

雨竜「わかったよ、まったく相変わらず人の能力をよく観ているな。」

一護「観察力が俺の武器だからな。」

ルキア「私達はどうすればいい？」

一護「それはチャド達が来たらししよう。」

→加速世界内で2時間後→

一護「チャド、確認は済んだか」

チャド「ああ、おかげさまでな、いい出来栄えだ。」

一護「それはどうも、織姫たちも携帯食料の作成ありがとな。」

織姫「えへへっいっぱい作ったからたくさん食べてね。」

雨「そうですね、これで万が一にでも長丁場になつての問題ないですよ。」

リルカ「残したら承知しないわよ。」

一護「……今回の虚殲滅が終わったら携帯用食料の殲滅になりそうだな。」



雨竜・チャド・ルキア「「そうだね（な）（だろうな）」

織姫「それにしても私達の戦闘服って可愛いね。」

雨「私とリルカは同じですが戦闘する分には特に問題なさそうですね。」

リルカ「良いじゃない別に可愛いんだから。」

織姫達は俺が作った服を見てそう言った、なんせ見た目は完全に私服と間違うデザインだから。

一護「気に入って何よりだ。それで織姫達はルキアと一緒に小型の虚とかの殲滅を頼む。」

織姫「私達だと虚刀虚が来てもきついしルキアさんがいても連戦はきついもんね。」

一護「俺達みたいにバカみたいなスタミナや殲滅力があるわけじゃないからそこは仕方がない。」

俺達は配置を決め終えたためポーチに携帯食料を詰めていく。

一護「全員、装備や道具の最終確認は済んだか？」

雨竜「ああ」

チャド「問題ない」

織姫「大丈夫だよ」

雨「問題なしですよ」

リルカ「大丈夫よ！」

ルキア「私もだ。」

俺は全員の言葉を聞いて最後に一言

一護「よし、何が何でもこの騒動を鎮火して虚刀虚の出どころには何が何でも礼をしにいくぞ！」

雨竜・チャド「「ああ（おう）!!」」

織姫・雨・リルカ「「うん（ええ）（そうね）!!」」

ルキア「私はおぬしたちとは理由が異なるがこのようなことをしでかす輩がいる以上、尸魂界にもいずれ手を伸ばす可能性があるのも戦うぞ！」

一護「じゃあ行くぞ！」

一同『おう!!』

俺は加速世界を解除して外套を全員が身に纏い出撃した。

ちなみに特殊義骸に特殊義魂丸を起動して学校連中や俺の妹たちに面倒な疑問や心配かけないようにしておいた。

side 雨竜

僕らは装備と担当箇所を割り振った後、僕は一番虚の数が多い場所に飛廉脚で急行した。

雨竜「さて、ここには通常の虚が1500、虚刀虚は30体か：」

僕は数が多いがやるしかないと思いついて滅却師十字を媒体に銀嶺弧雀を生成して左手に持ち右手に魂を切り裂くものを持ち、全身と衣服の機能を起動して動静血装を発動して攻防の能力を底上げして聖文字

the Thunderbolt 雷 霆 で全身の神経に雷を通し動体視力、反射神経を底上げした。

雨竜「光の雨」

銀嶺弧雀から神聖滅矢を1200発放って虚を10体ほど倒したが妙な手ごたえを感じた。

雨竜（なんだ？今の普通の虚だったら今ので100近くは倒せるはずだ。）

どういうことかと思ったが奥にいる虚刀虚達の虚刀から奇妙な霊圧から放たれている。

それが通常の虚達に纏わりついている。

雨竜（なるほどね、どうやら奥にいる連中の特性かその固有能力、虚刀の能力のどれかかもしくはそのすべてか。）

予想をつけたが奥の虚刀虚を倒そうとすると、通常の強化された虚に邪魔されて通常の強化された虚を倒そうとすると虚刀虚に邪魔されて面倒な状況だが

雨竜（だが敵の能力による強化と妨害は絶対という訳ではなさそうだ。）

先ほどの攻撃ですべての能力を無効化できていれば1体も倒せてなかったのどこかに付け入るスキはあるということだ。

まだまだ先になりそうだがやるしかない。

飛廉脚を発動して高速移動しながら敵の能力を分析に入った。

sideチャド

俺は浦原商店に集合して装備の確認と作戦を決めて解散した後俺は持ち場の位置に完現術<sup>アークセル</sup>：加速で空中を高速移動して持ち場に到着した。

チャド「到着したが結構な数がいるな、探知できる数だと、通常の虚が1000、虚刀虚が20くらいか？多いが倒しきらないと被害が出るからな、恨みはないが殲滅させてもらおう。」

俺は完現術を発動してその身をアルマドラ・ネクラ・ヒガンテ巨人の黒鎧、アルマドラ・ブランカ・デル・ディアブロ悪魔の白鎧に変化させた。

チャド「行くぞ！『巨人の一撃』!!」

俺の黒鎧には自身に干渉する悪意や害意のある特殊能力や触れた相手の特性と特殊能力を無効化する能力があるので敵がどのような能力を持つと関係ない。

霊圧を広範囲に拡散させて虚を直撃したが敵が5体ほどしか倒せなかった。

チャド(どういうことだ？敵の無効化系能力はもれなく俺の巨人の黒鎧の力でかき消せるはずだが？)

俺は今起こった不可解な現象に考える。

その間に虚は突進してきたりしたので空中に避難しながら敵の攻撃を防いだりして分析する。

チャド(なるほど、奥の虚刀虚達のやつらが自身の固有能力と刀の特殊能力どちらかまたは両方の力で他の虚を強化しているんだな。おそらく能力の系統は防御力強化系と再生系だな。)

俺はそう考えをまとめると虚空から無骨な大剣が出現した。

チャド(一護に作って作っておいてもらった武器が早速役に立ちそうだ。俺は一護に作ってもらった武器の1つ『バスターソード』に完現術を行使すると自らの鎧と同じ感じの半分が白、もう半分が黒の両刃の大剣に変化した。

チャド(黒百の大剣<sup>シエンネクロス・グランデ・プチゲリーヤ</sup>とでも名付けておくか。)

俺は剣を構え虚の一体を切り裂くと再生できずにすぐに消失した。

チャド(時間はかかるが一体一体確実に仕留めるか。)

俺は完現術<sup>クセル</sup>：加速で高速移動しながら虚に突っ込んだ。

side 織姫

いきなり町に虚がたくさん来たから一護君に浦原商店に強制集合の指示が来て急いで集まったんだけどそこで装備と配置場所が決まって私は雨ちゃんとリルカちゃんとルキアさんと一緒に指定した場所に来たんだけど

織姫「多いねえ〜」

雨「一護さんとかと比べたら少ないほうですよ？織姫。」

リルカ「てか織姫あんた暢気にもほどがあるわよ。」

ルキア「ぎつと分かる範囲だと通常の虚が500、虚刀虚が15くらいか？」

織姫「多い時でも100体以上だったよね？」

雨「そうですね、昔戦った中で一番多かったのは確かそれくらいでしたね。」

リルカ「あたしその時はいなかったけどそんな時の奴らってそんなに強いのか？」

織姫「うくんそうでもなかったよ。」

雨「確かその時は通常の虚の大群だったのでそこまで苦戦しませんでしたよ。」

ルキア「∴ 通常でもそれだけの大群を5人で殲滅するのは普通ですごいことなのだが。」

ルキアさんはそう言っているけど一護君の相手しているからそう苦戦することもないんだよね。

織姫「さくで早く虚達を片付けよう。」

私は完現術を使いメモリー・オブ・ジ・エンドと盾舜六花を展開した。

雨「ですね、無駄口は終わってからいくくらでも叩けるのですから『ジャツカル』、『カスールカスタム』」

雨ちゃんは武器の名を呼ぶと右手に黒、左手に白銀のリボルバーが1丁ずつ握られた。

リルカ「とりあえず、こんな騒動引き起こしてくれたやつにはいつ

かお仕置きしないかね。」

リルカちゃんもそう言つて『ラビットアーマー』を身に纏つた。

ルキア「全くだ余計な仕事を増やしおつて、舞え『袖白雪』」そでのしらゆき

ルキアさんも斬魄刀を解放して準備を完了した。

虚の大群『ぐおおおおおおおおおおおおお』

虚達は叫び声をあげて突撃してきた。

!!!!!!!

織姫『四天抗盾』

私は長方形の壁を展開して虚達にぶつけて吹っ飛ばした。

バンツ！バンツ！

雨ちゃんの放った銃声が聞こえたら虚達は撃ち抜かれたんだけどすぐに再生した。

織姫「なんか私の能力みたい？」

再生の仕方が私の能力に近いと感じた。

雨「どうも、後ろにいる虚刀虚の能力で回復系がいるようですね。」

リルカ「うっざいわね。」

リルカちゃんの言う通り攻撃してもすぐ回復されると私達だと有効打が少なくどうしようもないんだよね。

ルキア「それを補うために私がいるのであろう。『初の舞』そめのまい つきしろ 月白』

ルキアさんが冷気を飛ばしてそれで円を描きその天地を凍結する技で虚を5体以上を凍結して粉碎した。

ルキア「数が多いな、仕方がないここはこれを使ってみるか

『参の舞』さんのまい どうがしらふね 凍牙白刀』

ルキアさんは純白の刀を一閃すると冷気の斬撃を飛ばして虚を切り裂くと切り裂いたところから凍り付いて砕け散った。

ルキア「ふむ、中々良い仕上がりになったな。」

織姫「…え、えくとその技一護君の使う『月牙天衝』って技に似ているんだけど。」

私はすごくその技に見覚えがあったのでルキアさんに聞いてみると

ルキア「そうだな、この技は一護の技を見て一護にその技について聞いて袖白雪で似たような技を作ったのだ。」

雨「羨ましいです。」

リルカ「そうね」

ルキア「今は非常事態だぞ!?何を言っておるのだ!!」

ルキアさんはそう言っているけど私達はどう足掻いても一護君とそういうやり取りができないから羨ましいと感じてしまっただよね。

ルキア「それにしても敵の数が多い上に能力が厄介だな。」

雨「ですね、被害が出ることで覚悟ならランチャー系の武器を生成したりできますけどやる意味がないですし..」

リルカ「そんなことしたら一護に嫌われるわよ。」

雨「分かっているからしないですよ。」

織姫「もう長期戦覚悟でやるしかないね、分かってたけど。」

ルキア「だな、では行くぞ!!」

織姫・雨・リルカ「「うん(ええ)(そうね)!!」」

私達は陣形を組んで虚達を迎え撃った。

side 一護

準備を終えて解散した後虚刀虚の数が多い場所に来たが

一護「なんで！俺が一番数が多いんだよ!!」

俺は叫んでしまったが仕方がないことだろう。

本来なら通常の虚が一番多いところに雨竜をぶつける予定だったのに虚刀虚の気配が一番多いところに俺が来たら通常虚も一番多いとかふざけんなよ!!

一護「もう愚痴るのはやめにして敵戦力の能力分析に入りますか

『解析の霊眼』

俺は聖文字 The Eyes 眼 の能力で視認した対象のあらゆることを把握・

理解することができるとか。まあこれだけではないのだが今はこれだけで十分なのだな。

一護「えくと、通常の虚は数だけが多いからそこだけを注意して虚刀虚の能力が回復系と補助系で固まっているな。あと虚刀虚は改造されているから特性で物理と霊圧単体を除くエネルギー攻撃以外の攻撃無効化能力が備わっているな。」

虚刀虚は霊圧単体のみの攻撃では通用しないから月牙天衝は使え

ないな、逆に霊圧を使ったものでも炎や雷撃の類は通用すると。

一護「とりあえず、まずは通常の虚を殲滅しますか。切り裂け『斬月』！」

俺は斬魄刀を一本抜いて解放した。

一護「先ずは『穿面斬・蘿月』!!」

回転鋸のような形状の巨大な二連の月輪の刃を横に地面を削りながら複数並べて放ち、敵をすり潰す大技を放った。

今ので通常の虚を200近く倒したがまだ通常の虚は1800程残っているのでまだまだ終わるまでまだ先になりそうだな。けど

一護「でも、早く終わらせない理由にならないよな。」

俺は斬月を構えて虚に切りかかっていく。

side???

「彼はすでに始解を会得しているようだね。」

「ホンマ、彼には驚かさねばなすわ〜」

「だがもう片方の斬魄刀は変化していない…。もしや彼の二本の斬魄刀には別々の能力が宿っているのか？」

この事件の元凶達は霊圧遮断の外套を身に纏い現世に来て彼らの戦闘を直接見ていた。

リーダー格の男は一護の力に高い興味を示し京都弁の男は一護の潜在能力に驚き、バイザーをつけた男は一護の斬魄刀の能力を極めて高いレベルで予測した。

## 22話：「あの二人なら別にいいか」

side 雨竜

あれから4日経ったがようやく通常の虚を1000体くらい倒すことができた。

そしてどうやらこの虚達は普通の人間にも見えているようで町中大騒ぎで大変なことになっているうえに虚も人に襲い掛かるのでそのたびにそちらに行かなければならないので思うように戦うことができないので疲労が知らずにたまってしまふ。一護の作った疲労回復薬のおかげで何とかなっているが少しスタミナの配分をミスると一気に物量で押しつぶされてしまふ。しかしその甲斐あって敵の能力の分析が完了した。

僕は合間の時間を作っては水分補給と携帯食料を食べて栄養補給をやりながら戦いを続けているが

雨竜（虚刀虚の能力は大体だが分析できた、30体中20体が補助に特化している。それも強化系、防御系、搦手系の3種類、そして残りの10体が回復能力に特化している、自分も他者も等しく超回復可能これのせいで思うようにダメージを与えられない。）

僕は4日戦い続けた結果判明した情報を整理する。

虚刀虚を何とかしないと通常の虚は倒すのが困難だが通常の虚を放置していると虚刀虚を倒すのが困難と言う面倒な状況だ・・・またこんなまとめ方しているがそういう表現しかできそうにないなこれは。

雨竜「しようがない、一護の技を使うのは癪だがそうも言ってもらえないな。『天照・滅』」

僕は聖文字灼シユリフトthe Heat 熱で生成した黒炎に万物貫通the X-axisの万物貫通を付与した広範囲に放つ技で敵の特殊効果を無視して通常の虚を200体ほど消失させた。

雨竜（まだあと通常の虚だけで300体程残っている。とりあえず、一護から貰った道具のおかげで犠牲者が出ていないと分かっているが早く片付けないと犠牲者が出てしまふ。）



なりふり構ってられないのでできる限り周りに気を使いつつその上で可及的に速やかに敵を殲滅する。

僕はそう覚悟を決め聖文字も同時起動しようとした瞬間に視界に茶髪のショートヘアでヘアピンをつけた女の子が目に入った。

息を切らせながら走って虚から逃げている。

雨竜「今回もそうだけど、元凶にはキツチリとお礼をしないといけないね。」

僕は銀嶺弧雀からシユリフトthe X-axis聖文字万物貫通を付与したハイリツヒ、プファイル神聖滅矢を放つて女の子を襲った虚を消し飛ばした。

??「え!？」

雨竜『え……つと君は（あれこの子って一護の妹の）』（変声チャョーカー装備中）

遊子「う、うん…（ぼけー）」

雨竜『どうしたんだいどこか怪我でもしているのかな？』

僕は怯えさせないようにしないように言った。

遊子「え、えくとわ、わたしは大丈夫ですから!」

雨竜『そうかあ安全な所に送つていこう、親はどこにいるのかわかるのかい?』

遊子「えっと、急いで逃げてきたから妹とはぐれてしまつて…。」

雨竜『そうか、少し待つてくれ』

俺は一護が用意してくれた特殊アイテムの霊府に霊圧を込めて起動ワードを言った。

雨竜『発動「鏡門」』きやうもん

俺は女の子の周囲に結界を張って安全を確保した。

遊子「え!？」

雨竜『その中でジツとしていてくれ。』

俺はできる限り優しく言った。

遊子「は、はい分かりました。」

僕は一護の妹の安全を確保したので即座に通常の虚を殲滅を再開した。

sideチャド

あれから4日経ったがようやく通常の虚を900体くらい倒すことができた。

あとどうやらこの虚達は普通の人間にも見えているようで町中大騒ぎで大変なことになっているうえに虚も人に襲い掛かるのでそのたびにそちらに行かなければならないので思うように戦うことができないので疲労が知らずにたまってしまう。

チャド(俺の能力がこの手の敵に対して効果を最大限発揮するおかげで比較的疲れを溜めることなく戦えているがそれでも4日も徹夜することになるとは...)。

一護の作った疲労回復薬とかのおかげで疲れがたまることなく戦えるが少しスタミナの配分をミスると一気に物量で押しつぶされてしまう。そして腹が減ったりするので隙を見て食事する時間を作らないと腹が減って集中力が減ってしまうから大変だ。

それに食事ができても、すぐに食って飲み込まねば戦いの最中に喉を詰ませてしまうから食事するだけでも大変だ。

チャド(…うん?)

俺は視界に黒髪のシヨートヘアの女の子が目に入った。

どうも道に迷ったのか急いで走っている。

??? 「はっ!はっ!」

虚 「うがああああああああ!!!」

女の子に虚が襲い掛かっていた!

チャド(今回の元凶には何が何でも1発殴らないとな。)

俺は完現術:加速で高速移動して虚を黒百の大剣で叩き切った。

??? 「えっ!?!」

チャド『大丈夫か?(この子確か一護の妹だよな)』(変声チョーカー)

装備中)

夏梨 「う、うん…(ぼけー)」

チャド 『どうしたんだどこか怪我でもしているのか?』

夏梨 「え、えくとあ、あたしは大丈夫だから!」

チャド 『そうかじゃあ安全な所に送っていくな、親はどこにいるの』

かわからないんかい?』

夏梨「えつと、急いで逃げてきたからはぐれちゃって…」

チャド『そうか、少し待ってくれ』

俺は一護が用意してくれた特殊アイテムの霊府に霊圧を込めて起動ワードを言った。

チャド『発動「鏡門」』

俺は女の子の周囲に結界を張って安全を確保した。

夏梨「え!?!」

チャド『その中でジツとしていてくれ。』

俺はできる限り優しく言った。

夏梨「う、うんわかった。」

チャド(よしこれで一護の妹の安全は確保できたからしばらくは大丈夫そうだ。)

俺は残っている通常の虚に突っ込んだ。

side 織姫

あれから4日経ったがようやく通常の虚を400体くらい倒すことができた。

あとこの虚達は普通の人間にも見えているようで町中大騒ぎで大変なことになっているうえに虚も人に襲い掛かるのでそのたびにそちらに行かなければならないので思うように戦うことができないので疲労が知らずにたまっちゃんだよね。

織姫「こうも数が多い上に4日も徹夜すると疲れるね。」

私はそう言いながら孤天斬盾を飛ばして鳥型の虚を切断してメモリー・オブ・ジ・エンドで迫ってくる虚を切り裂いている。

定期的に食事や水分補給はしているけどそれでも睡眠無しはきついんだよね。

雨「無駄口をたたくのは終わった後にしてって言いましたよね」ドパンツ!ドパンツ!

そういう雨ちゃんは2丁拳銃を打ちながら射撃術に組み込んだ白打で虚を倒している。

リルカ「いやまあ、織姫の言うことも理解出来るからあまりそうい

うこと言わないで上げなさいよ。」

リルカちゃんも話しながら蹴り技を多用して虚の数を減らしている。

ルキア「『氷牙征嵐』、これほどの数の虚を相手に数日間戦える体力のおぬしらが疲れるとは何を言っておるのだ?」

ルキアさんも一護君から教わった氷結系の鬼道で虚を凍らせていた。

織姫「そんなこと言っても私達からするとこれくらい普通だし。」

雨「昔から長期の休みがあると合宿していましたし」

リルカ「あたしは途中からだから2人程じゃないけど体力はそれなりにあるわよ。」

ルキア「リルカよ、おぬしらの体力のそれはそれなりではない。」

ルキアさんはそう言つて・・・ハッ!!!

織姫・雨・リルカ「『今将来の義妹たちに将来の夫ができた気がする!!!』」

ルキア「この非常事態にいきなりどうしたのだ!!!」

いやだつて、遊子ちゃんと夏梨ちゃんが恋したんだよ! 未来の姉としてその男の子がどんな子か見極めないともし最低な人ならカコカイヘンシナイト・・・

ルキア「ぬううう!! さ、3人から虚刀虚を凌駕するほどの圧倒的負のオーラがしかもそのオーラにもろに当たっている虚達が足を竦ませているではないか!」

ルキアさんがなんか言ってるけど大事な義妹達いもつとに危害が加わるって可能性があるのならゼンリヨクデハイジヨシナイト・・・

雨竜・チャド（なんだ!? この悪寒は!!? 体の震えが止まらない!!?）

別の場所で戦っている二人は正体不明の悪寒に襲われていた。

side 一護

一護「待てええええええ!! 逃げるなあああああ!!」

俺は戦いが始まって4日経って通常の虚の殲滅が終わったのだが虚刀虚がある程度のグループに分かれて逃げようとしたのでバラバラに逃げられないようにしながら新月片手に町中を爆走している。

一護「うおおおおお!!!… うん？」

今、雨竜とチャドが異常な身体の震えをしているが敵の能力か？でもあの二人にその手の能力は通用しないし… うん？夏梨と遊子をそれぞれ守っているがなんか夏梨と遊子の二人を見る目がおかしくない？これ雨竜とチャドに恋してる目のようだがってマジらしいですね。まああの二人なら別にいいか。

それよりもなんか織姫達のほうから凄まじい気配を感じるんだが具体的に言うくと虚刀虚なんて目じやないレベルの気配なんだが… って織姫達かよ！紛らわしいな!!

俺は意識を切り替えて戦闘を再開する。

一護『『金剛爆』！』

俺は着弾すると大爆発する炎弾で広範囲に爆炎を放ち虚刀虚を3体焼き殺して前に出て斬月で1体斬首して首をその後完全に破壊した、そうすると残った体も消滅した。

一護「次！『破道の九十・改 第二番 黒棺・奈落・滅』!!」

俺は黒棺の改良版の奈落に万物貫通the x-axesの万物貫通を付与した特殊能力を無視する大技を複数同時に放つ。1つの対象しか破壊できなかった奈落を複数破壊可能にした対虚刀虚軍団破道だ!!ちなみに今ので虚刀虚50体は倒せた。

それでもまだ100体近くいるし下手に大技ぶっぱは被害がでてしまう。

今大技を使ったのは人がいなかったのと周りに建物がありませんというのもある。

でもさつさと残りを倒して雨竜たちのサポートをしに行きますかね。

## 23話：「俺はこれ以上やりたくないがな」

side 雨竜

あれから2日経ち通常の虚を殲滅できたが虚刀虚の軍勢を相手しているが通常の虚達と違って陣形を組んで能力を的確に使ってくるのでやり難いつたらないよ。!!!!!!

雨竜「はあああああああああああ!!!」

僕は聖文字万物貫通を付与した神聖滅矢を打ちまくり頭部を貫通しまくるが即座に回復能力の虚刀虚が回復させてくる。

雨竜「くっ！やっぱりこの程度じゃ無理か！」

単体攻撃では即座に修復してしまう、やつらの再生力を上回る火力でぶっ飛ばすしかないのだが

雨竜（それだと一護の妹を巻き込んでしまう…）

流石にそんなことをしてまで勝つわけにはいかないが今の僕の能力だとうしようもないな。

仕方がないので一護から借りた武具を使うかと考えていたら周りの景色が停止した。

雨竜（ツ!?これは!!）

ギョク（大変そうですね、雨竜。）

雨竜（ギョクさん、どうして出てきたんです？）

ギョク（言っただでしょう、大変そうですねから手を貸しに来たんですよ。）

雨竜（しかし手を貸すと言っても一護はあなたを表に出す気が無いんですが…）

ギョク（大丈夫です、今回出てきたのはあなたに新たな聖文字を与えて出てきたんです。）

雨竜（新たな聖文字？いったいどんな能力の聖文字を？）

ギョク（聖文字 閃 The Lightning 光 という光を操作・生成の能力を与えますね。これなら加減すれば被害を気にせず破壊力のある技を打てますよね。）

雨竜（すみません、手間を取らせてしまいました）

ギョク（大丈夫です、と言うよりも大事なご主人の妹たちであり将来の義妹たちをこんな状況に巻き込まれて私怒っているので手伝わせてもらいますよ。）

雨竜（そうですねか、あと少しだけ新しい聖文字を試させてください。）

ギョク（いいですよ）

僕は時間が加速している精神世界で新たな聖文字を鍛錬をして現実世界に戻った。

雨竜（さて散々気が済むまでやったんだ実戦で早速溜めさせてもらうよ。）

現実に戻った僕は早速新技を放った。

雨竜「『オーロラ・レーゲン極光の雨』」

the X-axis 万物貫通を付与した神聖滅矢の雨に周囲に展開した光球から光線の雨を虚刀虚に浴びせて半数近く消し飛ばした。

雨竜（うん、中々良い威力だな）

僕は技の結果を見てそう評した。

雨竜（さて残りもさっさと仕留めるよ。）

弓を構えると虚刀虚達はそそくさと逃げ出した。

雨竜（ツ！この状態で逃げられると一護の妹を放置する羽目になる。）

僕はそう思っていると

??「遊子！」

雨竜（うん？）

僕は声のする方に顔を向けると一人の女性が走ってきていた。

遊子「お母さん!!」 たッ

遊子ちゃんは母との再会で涙を流しながら走っていった。

真咲「大丈夫だった!？」

遊子「うん！お兄さんが助けてくれたあから平気だよ!!」

真咲「お兄さん？」

遊子「あの人だよ!!」

雨竜（ちよおい!!僕にふらないでよお!）

遊子ちゃんは僕のほうに指を向けたので真咲さんはこちらに気が付いてしまった。

真咲「あなたが… あら？あなたでももしかして…」

雨竜『では私は残りの敵を倒しに行くので失礼する!!』(変声チョーカー装備中)

僕はバレル前に飛廉脚を発動して高速移動して虚刀虚の追跡に入った。

side 真咲

真咲「あらあらせつかちなヒーローさんだこと」

遊子「お母さん！あの人にもう一度会えないかな!!」

真咲「そうね案外近くにいるかもよ？」

遊子「うん！私、大人になったらお母さんみたいにあのヒーローさんの素敵なお嫁さんになるね!!」

真咲「あらあら、それは素敵な夢ね〜(ふふっ雨竜君、私の可愛い娘を泣かせたら許さないわよ。)」

雨竜(なんかすっごい嫌なことが起こった気がするけど気のせいであつてくれ。)

side チヤド

チヤド「うおおおおおおお!!!」

俺は通常の虚を倒し終わったので虚刀虚と戦っているが搦手系能力の虚刀虚の能力の性質が俺の能力でも無効化できないタイプの能力なため戦いが長引いてしまった。

チヤド(仕方がないな一護から借りている武装の1つを使うか。)

俺は両腕に銀の手甲を装着して完現術を行使した。

すると右が黒にエメラルドのラインが左に白にエメラルドのラインが入ったガントレットに変化した。

チヤド(この手甲には風を操る能力を付与したと一護は言っていたがとりあえず暴風の手甲と呼称するか。)

俺は両腕と拳に風を纏わせて虚刀虚に殴り掛かる、俺は風邪で加速させたジャブを数十発叩き込んだ。

虚刀虚「…………『壁衝』」



虚刀虚は壁のように展開した衝撃波を俺にぶつけてきた。

チャド「はああッ!!」

俺は拳に纏わせた風を衝撃波のように飛ばして攻撃を相殺した。だがそろそろ数の差を覆すべく俺はとある技を放つ。

チャド「闘技『神砂嵐』!!」

俺の両腕から二つの竜巻が発生し右腕の竜巻が左回転して左の竜巻が右回転した。

一つの竜巻でさえ尋常じゃない破壊力のある竜巻だがこの技は二つの竜巻で複数の敵を破壊するがその本質はその間に生成される真空の破壊空間によるその間に入った物質を磨り潰す大技だ。

この技は一護が使っていた物でその原理を聞いていたためこの装備で再現したのだ。

竜巻とその間の真空空間による破壊で虚刀虚を15体倒すことに成功したが残り5体が逃走したので追いかけたかったが一護の妹を放置しておくわけにはいかないが

???「夏梨〜!遊子〜!母さ〜ん!何処だあー!!」

チャド『… うん?』(変声チョーカー装備中)

そう思ってたら男の声が聞こえてきた。

夏梨「あ、父さん。」

一心「ん?夏梨〜!!」ドドドドドド

一護の父親がものすごい勢いで走ってきたのだが

夏梨「キモイ!!」

一心「ぐはあ!!」

一護の妹に思いつきり蹴られてぶっ飛んだ。

チャド(… 大丈夫か?)

一心「ひどいよ夏梨!ただでさえ遊子がどっか行っちゃって母さんともはぐれたのにお父さんを一人にしないで!!」

夏梨「うっさいわ!それでも抱き着いてくることはないでしょ!!人前なんだよ!!」

一心「人前?」

そしてようやく俺の存在に気が付いた一護の父親は

一心「君は何者だ！夏梨を誘拐した不審者か!？」  
チャド（まあこんな恰好した俺を不審者と間違うのは仕方がないな）

なんせ今の俺の恰好は黒い外套を羽織っている上にその下は顔を隠したごついヘルムと鎧を装着しているのだから勘違いするのも無理はないがそういうえば一護の父親は完現術者のことを知らないんだっけか？

夏梨「違うわあ！失礼にもほどがあるでしょ!!この髭親父!!」  
また一護の妹が父親に蹴っ飛ばした。

一心「ごふう!!」

今度は少し良いところに当たったのか腹を抱えて蹲っている。

夏梨「私達の事はいいからあの化け物を追って」

チャド『分かった、早く安全な所に行けよな。』

夏梨「分かっている」（ふいつー）

一護の妹は顔を赤らめながらそっぽを向いた。

チャド『ああ、そうさせてもらう』

俺は完現術：加速で逃げた虚刀虚の追跡に入った。

side 一心

一心「もく夏梨つてば何も二回も蹴ることはないでしょう。」

夏梨「父さんがキモイ言動で叫びながら走ってきた上に助けてくれた人を不審者扱いしたらそうなるわ。」

一心「でも、父さんが心配するのは当然だからな、あの人が善人だったから良かったけどこんな状況で夏梨みたいな可愛い娘を攫う悪い奴がいるんだから父さん心配しちゃうからね」

俺はそう言いながら夏梨に抱き着いて頬を擦ろうとすると

夏梨「キモイっていうのはそういうところだからね、あの人みたいに落ち着くってこと覚えなさいよ！この髭親父!!」

また夏梨に蹴られたが内心では彼について考えていた。

一心（全く、あの人が…。うちの可愛い娘を泣かせたら一発殴らな  
いとなく、覚悟しろよ茶渡君。）

チャド(… うん？何か俺の知らない所で厄介なことが起きた気がするが気のせいかな？)

side 織姫

通常の虚を倒し終わった私達は早急に虚刀虚を倒して一護君に夏梨ちゃんと遊子ちゃんを誑かした男を聞かないと

織姫「これでどう！徒の芍薬!!」あだのしやくやく

私は一護君が教えてくれた剣技で前方の敵に対して最大で九連続の上下左右から敵を取り囲む様に放つ剣技。技の特性上回避するのは困難である大技だ。

虚刀虚に九つの斬撃の内3つまでは防いだんだけど残り6つは防ぎきれずに直撃した。

虚刀虚「ぐあああああああああああ!!!」

虚刀虚は叫んで周囲から虚刀虚が3体切りかかってきたので

織姫「甘いよ！渦桃!!」うずもも

空中で体を大きく捻り、反転しながら斬り付ける剣技を応用して防御した。

虚刀虚達は即座に距離をとった。その間に私は周りの様子を確認した。

雨「月閃瞬間!」げっせんしゅんこう

雨ちゃんは切り札を切って3体の虚刀虚の頭部を二丁のリボルバーで撃ち抜いたり肘うちや蹴りで破壊して倒している。

リルカ「ラビットドラゴン!!」

リルカちゃんもウサギと龍を足したぬいぐるみのような装甲と衣類を身に纏った。

リルカ「新しく完成した新技あんた達で試させてもらおうわ!!」ディアブルジャンプ

『悪魔風脚』!!」  
リルカちゃんは龍の力で足に炎を纏わせて完現術：加速で加速した。

リルカ「終わりなさい!『フレアシユート』!!」

リルカちゃんは虚刀虚の頭部に高熱を纏った蹴りを叩き込んで虚

刀虚の頭部を炎で焼き尽くして倒した。

うう… 二人はいいな、私だけ虚刀虚を倒せずに互角の戦いしかできないなんて。

… そういえばルキアさんはどうだろうか？

私はそちらに意識を向けると

ルキア「正解『白霞罰』はつかのとがめ」

ルキアさんは正解して範囲を調整して私達を巻き込まないようにして自身の周囲にいた7体を凍結粉碎した。

やっぱり私ってこういう属性攻撃ができないせいで攻撃力が足りないから倒しきれないのかな。

ルキア「さて残りはその4体だけか」

雨「では織姫後ろで回復と防御を頼みますよ。」

織姫「う、うん」

私は頷くことしかできなかったがリルカちゃんが

リルカ「織姫、あんた自分のこと卑下にしないでよね。」

織姫「えっ！そんなことないよりルカちゃん。」

リルカ「嘘よ、あんた自分だけあいつら一人も倒せないことを気にしているでしょ。」

織姫「ッ！」

リルカ「先に言っておくけどあたしからすると織姫の能力のほうが羨ましいわよ!!」

織姫「え？」

リルカ「あたしが元々持ってた力じゃあいつらを倒すどころか戦うことさえできなかつたでも織姫は元々持ってた能力<sup>カ</sup>だけでも一護の力になれるんだから自分を卑下にされたらムカつくのよ！だから胸を張りなさい!!」

リルカちゃんの言葉で私は目を覚ました。

織姫（そうだよね、昔ギョクが言ってたよね、『あなたにそんな自信なさげでは勝った気がしないんですよ』ってなんでこんなことで悩んでいたんだろ？自分にできることを精いっぱいやって一護君の隣に立てばいいのに。）

そう考えた私は自分の能力をよく考えた、盾舜六花の事象の拒絶とメモリー・オブ・ジ・エンドの切りつけた対象の過去改変そしてマインドオブバリアによる状態異常無効化の力だけどそういえば一護君は自分の力を複合して使ったりしてたけど私でもできないかな？

織姫「一体だけでいいから私に倒させてくれないかな？」

雨「何か策があるのですね？」

織姫「うん!!」

リルカ「目が覚めたようね。行ってきなさい！」

ルキア「良い顔になったようだな。」

織姫「じゃあ行ってくるね。」

私はさつき切り裂いた虚刀虚と対峙した。向こうも一対一で相手してくるようで残りの虚刀虚も手を出そうとしない。

私は完現術<sup>ア</sup>：加速<sup>クセ</sup>で加速すると向こうも響転<sup>ソニード</sup>で加速して斬りあいを開始した。

速度はこっちのほうが速いんだけど向こうの響転<sup>ソニード</sup>の特性で探知しにくいので先読みしにくいんだよね。

虚刀虚「…徒<sup>あだのしやくやく</sup>の芍薬」

織姫「え!?!」

虚刀虚は私がさつき見せた前方の敵に対して最大で九連続の上下左右から敵を取り囲む様に斬撃を放つ剣技を使った。一護君から教わる際に何度も喰らっているので回避するのは困難であるのは理解しているんだけど一護君とは異なる体型の虚の斬撃を回避しきれずに数発掠ってしまった。

私はすぐに距離をとって双天帰盾で回復したんだけど下手に技を見せるとすぐに真似をされてしまうので試そうとした技を使うため完現術<sup>ア</sup>：加速<sup>クセ</sup>で一気に距離を詰める、向こうも速度負けしないために響転<sup>ソニード</sup>を使って加速した。

刀と虚刀が何度も打ち合って火花が散っているけどお互いに決定的な隙を作れないので、若干ではあるが膠着状態になってしまった。

織姫（焦らないで、落ち着け私…焦ったら負ける）

私は焦る心を落ち着かせながら剣技で虚等を弾いて隙を作ろうと

するが向こうもこちらの刀を弾いてくる。

数分間打ち合つて、私は漸く隙を作れたので今自分ができる最大の技を放つ。

織姫 「メモリー！ エンド記憶の終絶」

私の刀には盾舜六花の髪飾りと組み合わせることで刀を媒介として事象の拒絶を過去改変と組み合わせ使用ができるようになったので切りつけた対象の過去全てを拒絶することで存在を抹消する技。今できる私の最強技なんだけど、近距離でなきや効果を全くと言っていいほど効果が無いんだよね、孤天斬盾みたいに飛ばせたらいいに。

そう思つてたら残つた虚刀虚は急いで逃げだしたのでみんなと追おうとしたら

織姫 「みんな！早く追うよ！」

と言つているんだけどみんなは何故かヒソヒソ話をしていた。

織姫 「え……つとみんなどうしたの？」

雨・リルカ・ルキア 「「いや、ただ織姫を怒らせないようにしようつて話してただけです（よ）（だな）!!」」

織姫 「そ、そう？じゃあ虚刀虚を追跡しようか。」

雨・リルカ・ルキア 「「そうですね（ね）（だな）」」

私達は急いで虚刀虚を追つた。

あ、ちなみにルキアさんは卍解を解除してあるからね。

side 一護

あれから2日も鬼ごっこする羽目になつたが

一護 「よつしや、残り10体！」

なんか無双ゲームの主人公になつた感じで斬月と鬼道と滅却師の力と完現術でフルボッコしてたらいつの間にか10体まで数を減らしていた。

そういえばみんなは大丈夫かな？と思ひ感知能力で確認するとどうもみんなも残りわずかになつた所で敵が逃亡するため追跡する羽目になつたつぽいので町中を爆走しているようだ。

そして残っている虚刀虚は俺のを合わせると33くらいか？に

なったのでいよいよ大詰めになりそうだな。

俺は残っている虚刀虚を追いかけているとまたも全員が同じ場所にしかもまたあの公園に虚刀虚もろとも集まった。

一護「またかよ！これで何回目だ!!」

雨竜「もう運命としか言いようがないね…」

チャド「ホントだな。」

織姫「そんなことはいいから一護君!!後で聞きたいことがあるから急いであいつら倒そうよ!!」

一護「聞きたいこと?」

雨「それは終わってからでいいので」

リルカ「そうよ話すと長くなるのはわかっているんだから!」

ルキア「私は3人の態度の変化に疲れたぞ…」

一護「ルキア、お疲れ」

ルキア「ああ」

俺達は軽口をたたきながらも意識を虚刀虚から離すことなく全員武器を構える。

すると空間に歪みを感じた。

一護除く一同『ツ!!?』

一護「なんだ?」

俺は疑問に思ったがそういや原作だとこの辺りで出てきたな。

俺がそう思っていると空間を引き裂いて巨大な虚が現れた。

カオナシを巨大にして顔の白い仮面がキノツピオのように鼻の長い仮面が付いた巨大な虚が現れた。

ルキア「馬鹿な…大虚…だと!?!あれは王族特務の案件だ…」

大虚メノスクランデその中の最下級大虚ギリアンと呼ばれる破面の進化のツリーの一番下だが感じる霊圧は虚刀虚と大差ないな。

まあ俺からすると雑魚もいいが…それにしてもこんな雑魚が零番隊案件とは…ってどちらかと言えば最下級大虚は自我が薄いからいいつを使って斬魄刀を作成しているのか?それなら納得だな。

そんなことを思っていたら大虚が残っていた改造虚と虚刀を一本残して喰らってしまった。

最下級大虚は喰らった虚刀と改造虚の内包している魂魄と霊圧で爆発的に進化した。

進化した際に発生した濁流のごとき霊圧に俺達は踏ん張って耐えた。

数分間続いた霊圧の濁流が収まるとそこには一人の破面アラシカルの女がいた。

破面の女「…」

女は自分の進化を確認しているようで軽く動いて人型に慣れる動作をしているが一つ言っついていいか？

一護「おいっ！女、お前服着ろ。」

なんせ女は全裸なので他のメンツもフリーズしてしまっている。ちなみに雨竜もチャドも目をそらしているが固まっている。女性陣は女の美貌に目を奪われている。なんせ俺でもこんな美人は転生してから見た限りだとギョク位なものだ。

破面の女「…？」

破面の女は俺の言葉で俺の存在に気付いたようでこちらを向いた。

破面の女「… なにあなた？いきなり人に命令するなんて失礼だよ？」

一護「人前で全裸のやつに失礼とか言われたくない。」

破面の女「…」

俺の言葉で下を向くと自分の状態にようやく気付いたのか顔を真っ赤にした。

破面の女「… 変態」

そう言い女は胸と股を手で隠した。

一護「全裸になったのはお前だろ、いいから服を着ろ。」

破面の女「…」

そう言っ俺は自分の羽織っている外套を貸そうとしたら破面の女が辺りをキョロキョロして3人娘を見て霊圧が纏うと織姫の着ている衣服が出現して破面の女も着た。

一護（物質創造能力か？厄介だな…）

俺がそう考察していると破面の女が近くにある自分の斬魄刀と一



本だけ残った虚刀を回収して腰に虚刀分の鞘を生み出して斬魄刀を帯刀して虚刀の鞘は腰に差したが虚刀は抜刀したままだ。

そしてそのまま虚刀で俺に斬りかかってきた。

一護「ツッ！」ガキンツ!!

俺は咄嗟に斬月で防いで鏝迫り合いになったが色んな能力で強化した俺が筋力で押し負ける事態になっている。

破面の女「私の攻撃を凌ぐなんて変態にしてはなかなかやるわね。」

一護「全裸はお前が原因だろ!!俺のせいにする... なッ！」

俺は強引に押しこんで距離をとったが状況を分析すると真つ向勝負すると押し負けるな。

ここは斬月の能力で中・遠距離戦闘で戦った方がいいな。

一護「月牙天衝！」

俺は斬月を一閃して青白い三日月の斬撃を飛ばした。

破面の女「無意味なこと...」

女はそう言って腕を無造作に振るうと月牙天衝を砕いた。

一護（マジかく俺の攻撃を児戯扱いするなんてこいつ多分進化する際に最上級大虚に進化してから破面になっただけじゃなくて虚刀も30本くらい喰っていたっけか。これは大真面目にやった方がよさそうだ。）

俺は斬月に霊圧をありつけたけ込めて強化して自身も可能な限り強化した。

溢れる霊圧にさすがの破面の女も顔から驕りが消えた。

破面の女「... さっきの変態発言は撤回するわ、あなた名前なに?」

一護「黒崎一護、女お前の名前は何だ?」

破面の女↓ロア「ロア... ロア・ベリアルよ、一護一ツいい?」

一護「なんだ?」

ロア「私が勝ったらあなたの番つがいにして」

一護「... え?なんて?」

ロア「雌に何度も言わせないでよ、番つがいになってって言ったのよ、それともあなたが勝ったらの話?それでもいいわよ。」

一護「そういう話じゃねえよ!!どうしてそうなる!!」

ロア「気に入った上で強い雄の番になりたいなんて当たり前でしよう？何言っているのかしら。」

一護「お前のそのなに当たり前の常識みたいな態度がすげえ腹立つんだがいいわけないだろ!!」

俺は起こってそう返したがロアはどこ吹く風だ。

ロア「ふふつ、なら力づくであなたに認めさせてあげる…っわ!!」

その言葉を皮切りにロアが響ソニード転で加速した。

俺も瞬歩、完現術：加速、飛廉脚の合わせ技で対抗した。

一護「うおおおおおおお!!」

ロア「はああああああああ!!」

俺達は一呼吸する間に百、二百の斬撃や蹴りと打撃を放った。

俺達は双方の攻撃を切り払い打ち払いを繰り返したが徐々に互いに傷が出来たがロアは虚刀の基本機能とどうやら再生能力を失わずに進化したようで超速再生も併用して回復したそれで俺は回道を使って回復した。

一護「喰らえっ!!『月龍輪尾・絶』」

俺は聖文字 絶 the absolute end 対 切 断 による絶対切断を付与した強烈な力で

素早く繰り出す抉り斬るような横薙ぎの一閃の大技を放った。

ロア「アハハッ!!そう来なくちゃ!そうじゃなきゃ番にするなんて言わないわよ!!『閃光の愚者一突』!!!」

ロアは虚刀と自身に虚閃セロを纏ったまま刀と体全体で響ソニード転で加速してツッコんで月輪の中を突っ切ってきた。

一護（嘘だろっ!?!絶対切断を付与した月輪の渦を力任せに突っ切ってきやがったこの女!?!）

俺は即座に斬月を強化してそのデカい刀身を盾にして全身から力を極限まで抜いて脱力した。!!!

ドガガガガガアアアアアアアアアアア!!!

衝突してすさまじい衝撃が体を襲ったが脱力して当たった直後に体を後ろに跳んだおかげでダメージは最小限となった。

ロア「アッハハ!!あれを喰らってその程度に済んでいるなんてますます番になりたいじゃない!!さあ続きといきましょう!!」

一護「チツ！俺はこれ以上やりたくないがな。」

ロア「つれないこと言わないでよ、一護……」『ガキンツ！』ロア「……なにあなた達いきなり何するの？」

ロアの背後から無言の不意打ちをした3人娘だったがあつさりロアに防がれた。

織姫「私達の一護君を勝手に番にするとか言わないでこの淫乱女！！」

雨「そうですよ、それに強ければいいなんて虚圏ウエコムンドで探せばいいでしょ！！」

リルカ「そうよ！それで見つからなかったらまた一護に当たればいいでしょ！！」

ロア「……分かったわ、そこまで言うなら探してくるけど一護より強い雄が見つからなかったら今度こそ一護を番にするからね！！その時は覚悟しなさい！！」

ロアは少し考えると虚刀を納刀して戦意が消えたそして3人娘を挑発して3人の戦意を漲らせた。

3人娘『望むところだよ！！』

そして、ロアは黒腔ガルガンタを開いて虚圏ウエコムンドに帰っていったが絶対にまたロアと一悶着あるんだろうな〜と思いつつこの後の展開に頭を抱えることになった。

とりあえず今はこの騒動を犠牲者を0で止められたことを安心してればいいかな。

そして俺達が次にすることは

織姫「次あの女が来たら倒せるように修行だね！！」

雨「ええ！そうですね、あんなぼつと出のそれも借り物の力で一護さんを自分の物にしようとかいう女を完膚なきまでに叩き潰しましょう！！」

リルカ「でもあの女、一護と互角の戦いをして見せた上にどっちも全力で戦っていないから実力は本物よね。」

ルキア「私は理由は違うがあんな虚を放置しておくわけにはいかぬのでな、修行を手伝わせてくれ。」

3人娘『うんっ！いいよ!!』

雨竜「さてとりあえず一件落着つてことで言いのかな？」

チャド「まだなんか忘れていることがある気がするが… まあ、一  
先ずそれでいいんじゃないか？」

一護「とりあえず、明日からは全食携帯食料になるけどね」

雨竜・チャド「ああ… そういえばそうだったな。」

俺達はワイワイしながら浦原商店に移動した。

sideロア

ロア「♪♪♪♪♪♪」

私は鼻歌を歌いながら黒腔を通って虚圏に戻るとすぐにいろんな場所に行つて一護より強い雄を探そうとするけど多分無駄になるでしょうね、だってそもそも私が自分を獲得する前の自我が気薄だった頃に現世に行つたのはすごい霊圧に惹かれて行つたら質のいい同族すら比にならないほどの力をしかもそれも一護は惹かれた力そのものだったから多分そんな力を持った雄がこつちに居たらすぐにわかると思うわ、今だってこつちに來ている3つの力も私や一護に劣るもの。

ロア「こんにちは、私に何の用かしら。」

私は現世に行つた際に同族が持ってた斬魄刀に酷似した虚刀を抜刀して姿を消している雄達に斬りかかった。

ガキンツ!!

???「これは驚いた… まさかこの状態で見つかるとはね。」

ロア「そうかしら? それ一護も着ていたけどそれで姿や霊圧を隠せ  
ると思つているのかしら?」

私はそう言ったけどこの雄に対する警戒度は上げた方がよさそう  
ね。

???「一護も着ていた… か。いい情報を貰ったよ、だから彼の霊圧  
を感じなかったのか。そして君はこの外套の機能を意味をなさない  
ほどの力を持つているのか。」

ロア「あんた達何が目的なの？」

???「そうだね、あまり時間をかけるわけにはいかないから単刀直入に言おう。僕の部下になってもらいたい。」

ロア「… 全く何を言うかと思えば私、自分より弱い雄の言うこと聞くのが一番嫌なn」???「無論、君にもメリットがある。」ロア「… なによ」

???「私についてくれば選定に選定を重ねた強者つわものの破面に出会えるだろう、それで君のお眼鏡に叶う男がない場合、黒崎一護と一対一で戦う舞台を用意しよう。… どうか君に悪い条件ではないと思うが」

雄は意地の悪い笑みを浮かべるが私からするとよい条件なため素直に頷くが

ロア「いいわよ、交渉成立ね。でもあんたの指図は不必要に受けないわよ。」

???「構わないさ、必要な時に手を貸してくればそれでいい。」

ロア「そお?ならいいわ。」

早く一護の番になりたいけど多分次に一護と戦うときは一護ももつと強くやっていると思うからそれまで修行して強くなっておかないとね。… 待っててね、私の愛しき番♡

一護「… ツ!!」(ゾクウウウウウ)

俺は正体不明の悪寒が襲った。

## 24話：「元凶に一発殴る理由が一つ増えたよね」

あの日から2日後、俺達は特殊義骸を停止して特殊義魂丸の追加機能でコピー元の者がその義魂丸を食うとその義魂が特殊義骸の中で活動していた間の記憶などが元となった存在に還元される機能を使って俺達が虚退治していた6日間のことかわかったが、まあ案の定とんでもないことになっていた。

なんか町中に突如現れた怪物の集団にその怪物の集団と戦う黒の外套を身に纏う謎の集団が現れたなど面倒な噂が流れている。幸い、俺達の正体は特殊義骸などでバレることはないから良かったが。

放課後、いつも通りに浦原商店に集合したが何故か、雨竜とチャドは頭を抱えている。

一護「どした二人とも？」

チャド「一護・・・すまん」

一護「いや何が？」

雨竜「どうも母さんが真咲さんと相談して遊子ちゃんと僕と婚約させようとしているんだ。ちなみに遊子ちゃんにはまだ言っていないらしい。」

チャド「ちなみに俺は一護の父親が夏梨ちゃんの方を許嫁にしようとして連絡してくるんだが・・・ちなみに夏梨ちゃんには言っていないらしいんだ。」

一護「母さんは仕方が無いにしても髭親父はまたかよ!!」

以前俺と雨を許嫁にした時と一緒にやねえか！後で一発殴る！

雨竜「ちなみに父さんは既に知ってこのことに関しては苦い顔をしているんだよね。」

一護「だろうな。」

あの髭親父が結婚した経緯を知ってる身としては大事な息子を許嫁をNTRした男の実子の娘と結婚なんてさせたくないわな。

雨竜・チャド「どうしたらいい？」

一護「チャドに関してはずまんなどしか言えないが雨竜、お前が感じていいるそれは俺がかつてから感じているものだからざまあとしか

言いようがないぞ。」

雨竜「同じ立場になつて分かったよ、ホントごめん。」

一護「分かればいいよ…。ホントこの件に関してはどうしようか？」

互いにこの件に関して和解できたが解決策が見つからない案件ほど面倒な物はない。

雨竜「くっどうしてこんなことになつてしまったんだ!？」

一護「そりゃあ、この前の虚軍団襲撃が原因なんだから…。あつ」

チャド「…。どうした一護、何か解決策を思いついたのか？」

一護「いや、解決策ではないがこの前の騒ぎを起こした元凶に一発殴る理由が一つ増えたよねってことを思いついたただけだから。」

二人『…。いいなそれ。』

二人の目が獲物に狙いを定めた。

一護「ちゃんとした解決策はまだ先になりそうだけど、とりあえず目先の目標が定まった所でこの前のロアに対抗するために修行をしますかね。」

チャド「だな」雨竜「ああ」

俺達3人は地下室に移動した。

↓地下室↓

ドカーン!! ドツゴン!!

地下室では女性陣が真時玉の効果で10日間修行していた。この前のロア・ベリアルに不意打ちしたのに軽く止められたことを結構気にしていたからルキアも巻き込んで夜一さんと修行している。

一護「いや〜やつてんね〜」

雨竜「君はなんでそんな暢気なんだい?」

チャド「まあいいじゃないか、とりあえず俺はいつものやつからやつてくる。」

一護「了解じゃあ俺は筋力向上の修行してくるわ。」

雨竜「そうかい、なら僕は接近戦の鍛錬をしてくるよ。」

一護「そうかじゃあまた後でな。」

雨竜「ああ」

俺達はそう言うのと各自高速移動技で修練場に移動した。

（移動中）

一護「到着つと！」

俺が来たのは他の修練場と同じ外見の白い壁のビル型の建物だ。

一護「さて、今回は2000倍でやるか。『過重空間』起動！」  
起動すると俺の体に通常の2000倍の重力が発生した。

この施設は一言で言うとな某龍玉集めの戦闘漫画に出てくる重力トレーニングルームの改良版だ。個々人の指定した重力に変化してさらに個人で別々の重力に自動で調整されるので渋滞などが発生しないようにしてある。

体が滅茶苦茶重くなった俺は斬魄刀を解放して斬月で素振りを一振り一振りミリ単位で修正を繰り返す素振りをまず30分行った。

一護「はっ！ふっ！」

俺は素振りをしながら切るべき敵の顔を思い出しながら斬月を振るう。

仮想敵を想像しながら振ることで素振りがいい加減になることなく集中して素振りができる。

そして素振りがいい加減にならないようにしながらあの破面……ロア・ベリアルについて考える。

一護（あの女の強さは生半可じゃないな、今の俺が正解したり全ての力を引き出して戦った場合勝てるかわからない敵とか崩玉藍染や霊王吸収ユーハバツハくらいかと思っただけで慢心していたな……まあ普通俺くらいの力があると無意識の油断や慢心が出来てしまうのは必然なのかな？……まあそれが致命的な隙になる前に気づけて良かったとみるべきかな。）

俺は素振りしながら色々考えていたら当初の30分が過ぎ去って1時間以上素振りをしていた。

そして次に型稽古を行う、これも高重力下の中行い技の精度を底上げするために言う。

先ず、いつも斬月で使っている月の剣技の精度を上げながら、自身の能力を整理する。



一護（まず、俺の能力の死神、滅却師、完現術は基礎の力が最高クラスで急激な上昇はできないがまだ虚の力の鍛錬は終わっていないのでまずは虚の力の引き出し方を修練しないといけないがやり方がマジでわからんな。仮面ヴァイザードの軍勢の場所も知らないし、下手に喜助に言ってもはぐらかされるだろうし…）

そして、俺は3時間近く型稽古を終えるとウォームアップ最後のシャドースパーリングを行う。

俺はイメージでロアの仮想敵を作り出し斬月で打ち合いを行う。

それを1時間行って10分の小休憩をした。

俺は瞑想して効率よく回復しようとしたが

ギョク（ちよつと、ご主人!!）

瞑想しようとしたらギョクがなんか叫んできた。

一護（なんだギョク俺今から休憩するところだったんだけど…なんか用か?）

ギョク（用も何もいつになったら『万華鏡』を使ってくれるんですか!!）

ギョクの叫びを聞き俺は… ああつてなった。

一護（使うも何も使うタイミングが無かった。）

ギョク（この前の虚殲滅で使えましたよね!?)

一護（いやだって、黒幕が監視しているのに模倣能力の斬魄刀を使うわけないだろ?）

ギョク（で、ですけど私の力使ってればあの破面の女倒せたじゃないですか!）

一護（いや、それに関してなんだけどさあの時点の俺でも全開で戦ったら町に被害を出しかねないから全力で戦えないんだよね。）

ギョク（ぶうく、あんなぽつと出のそれも私と同じ能力持ちの女とかキャラ被りもいいところですよ）

… さらつとギョクが聞き捨てならないことを言った。

一護（… は?ちよつと待てギョクあの女が何だった?）

ギョク（え?キャラ被りもいいところって言ったんです。）

一護（その前だ!）

ギョク（うーんと私と同じ能力持ちですかね〜）

一護（最悪だあああああ!!!）

まさかの藍染も含めて崩玉持ちと2回も戦わないといけないことが判明しやがった！

ギョク（ですが大丈夫ですよ、あの女が能力に慣れる前に倒してしまえばいいんですから。）

一護（簡単に言ってくれるなよ!?ただでさえ手加減していたのに自力負けしてたのにそんなこと言うなよな!!?）

俺はギョクの暢気な言い分に叫んで返す。

ギョク（…はい、すみませんご主人）

ギョクはシュンツとしたので俺も落ち着く。

一護（まあ、起こってしまったことは仕方がないとしてあの女に対する切り札的な何かを考えるか…）

ギョク（じゃあ、喜助が作ったあれでも作りますか?）

一護（あああれかあ〜じゃあどんな感じにするかはそっちでとりあえずいくつか考えといてくれないか?）

俺はギョクの発言でとりあえず、見た目とかのことを中の人達に任せることにした。

ギョク（分かりました〜またホワイト達と考えてきますね。）

ギョクはそう言って精神世界に戻っていった。

一護（さて休憩を再開するか。）

俺はギョクのせいで中断した休憩をして修行を再開した。

side 尸魂界  
ソウルソサエティ

海燕「…はあく気が重い任務が近づいてきてしまった。」

白哉「言うな、私も同じ気持ちなのだから」

恋次「今回は合同任務よろしくお願いします。」

都「ええ、よろしく願いますね、阿散井副隊長。」

隊長同士が自分たちの愚痴を言い合い副隊長同士が合同任務に対する挨拶をしている。

恋次「まあ、あいつが裏切るとかしないのは俺達がよく知っている

んですから変に気を張る方が疲れますよ、隊長。」

都「そうよ海燕、ルキアのことを誰よりも接してきたのはあなたなのだから気に病まずにルキアの無実を証明すればいいのだから。」

白哉「・・・それはそうだがそれとこれとは別の問題だ。」

海燕「そうだけ、大事な部下が言われもない裏切りの容疑を掛けられてそれを自分の手で連行するとか気が重くもなるよ。」

隊長二人は片方は自分の手で大事な義妹であり妻の妹を捕らえなければならぬという事実にもストレスが溜まっておりもう片方は自分が気にかけていた大事な部下を疑われて自分の手で捕まえなければならぬのでこちらもストレスが溜まっていた。

ちなみに件のルキアはと言うと

sideルキア

あの事件を終えた後あの破面と呼ばれる虚に対抗するために私は皆と更なる鍛錬に励んでいた。

今は夜一殿と追いかけてこしている。

何故かと言うと瞬歩の鍛錬に最適なので優先的にやっておるのだ。あのロアの速度は今の私の速度ではどうしようもないので瞬歩の練度を上げるために優先的にやっている。

夜一「フツその程度では儂は捉えれんぞ、白哉坊の妹よ。」

ルキア「まだまだです!」

織姫「そうですよ!!」

ちなみに私と織姫以外は組み手をやっております結構派手にやっておりますのか先ほどから爆発音がこつちまで聞こえてくる。

夜一「それにしても白哉坊の妹はともかく織姫おぬしは何故その破面のおなごを敵視しておる。別に数が一人増えたところで今までと変わらぬであろう?」

夜一殿が走りながら織姫に疑問をぶつける。

織姫「・・・一護君を笑わせていたからです。」

ルキア「笑う?何を言っておる、一護は普段から笑っておったではないか?」

普段から些細なことで笑いあっておるので織姫の言葉の意味が分

からない。

織姫「ルキアさんは会ってから日が浅いから分からないからだけど一護君って理由はわからないんだけど何か隠していてもしかも凄く辛そうで笑っていても心から笑ったことが無いんだよね。」

織姫の言葉は愛した者が心から笑顔を見せてもらえぬことに対する悲しみだった。

そして織姫は「だけど…」と続ける。

織姫「だけど、あの女は進化した直後でしかも会って間もないのに一護君が心から笑っていたのが許せなかったの!!」

織姫の悲痛な叫びにそう言えばあの時一護は大技を力任せに突破された時驚愕の表情ではなく笑みを浮かべていたなと私は思った。

夜一「なるほどのお、要は好いた男が違うおなごに心からの笑みを浮かべているこの状況を変えたいということか。」

織姫「はいっ!その通りです。」

俺姫は元気に返事をしながらさらに加速した。私も負けじと速度を上げた。

side 一護

とりあえず、外で1時間ここだと10日間が経過したので自身の力を把握したがまだ足りないということが分かったので新能力や技を作っているがまだ足りない、まだ決定的に何かが足りないのだがその足りない物が分からないので困っている。

とりあえず、高重力下で天鎖斬月の上昇したスピードと瞬歩、完現術<sup>アケル</sup>：加速<sup>ル</sup>、飛廉脚の合わせ技で動いてスピードをさらに上げられるようにしているが内心では転生してからグランドフィツシャーとの戦いまでに近いレベルの焦りを感じている。

一護「月牙天衝!!」

俺は黒い斬撃を飛ばした。

喜助「おわああああああ!!!」

一護「ん?何か喜助の断末魔が聞こえた気がするが…」

喜助「危ないじゃないですか!!?いきなりなんですか!!」

一護「すまんすまん、…で?何のようっ?」

喜助「いや、一護さんがこの前の破面について対策したいと言っていたのでいくつか対策用のアイテムを作れたので一護さんに見てもらいたいのので来てくれませんか？」

一護「いいぜ、俺も休憩しようと思っていたからちようど良かったよ。」

俺は喜助と作ってもらったアイテムを見て改良点とかを茶をすすりながら話し合った。

sideロア

運命の番に出会ってから2日経ったが今だ一護のことを思うとすぐに現世に突撃して一護と子供を作りたいと本能が昂っているが何とかかななしの理性で抑え込んで修行をしている。

一護みたいな特殊な能力を作れないか私は自身の能力を理解するところから始めて自身の力を知ると一護と同じことができるのかって一護に対する感情が増している。

ロア（落ち着きなさい私い、何れは一護と番になるんだから今は力を磨き上げて力と一護の番になる雌を蓄えておくのよ！）

私は逸り昂っている感情を何とか抑え込むと最近知り合った、雌の最上級大虚とその仲間たちと二体の中級大虚アジュウカスに会いに行くために響転ソニードを使って移動した。

ロア「ヤツホ、元気にしてるっ！ハリベルちゃん！スンスンちゃん！アパッチちゃん！ミラ・ローズちゃん！シルスちゃん！レストちゃん！」

響転で移動し終わると洞窟らしきものが見つかったので入っていった先に6体の雌の同族が居たので名前を呼んで挨拶する。

ハリベル「ロア、2日前に来たと思えばまた来たのか。」

この子の名前はティア・ハリベルって言うってなんて言うか、破面になる前の最上級大虚ヴァストローデと言った感じで人に鯨を模したスーツのような装甲の皮を身に纏って腕に大剣が融合している見た目でマスクで顔が半分以上隠れているけど顔が見える部分からかなりの美人だから一護の番候補つがいなんだよ。

ロア「いいでしょ、雌の同族って数が少ないんだから定期的に会い

に来て問題ないでしょう。」

ハリベル「それはそうだが」

ロア「ところでハリベルちゃんは一護の番にならないの？」

ハリベル「またそれか!? 初めて会った時から言っているが私は関係ないだろ!!?」

ロア「え〜ハリベルちゃん美人なんだからきつと一護も番として気に入るよ〜」

ハリベル「私の意志は介在しないのか!!?」

ロア「大丈夫大丈夫、きつとハリベルちゃんも一護のこと好きになるから」

ハリベル「会ったこともない雄のことなど気にいるか!!」

ロア「それなら大丈夫だよ、私の能力で見せるから。」

ハリベル「そのどろどろが大丈夫なのか… それにお前の口ぶりからそいつは雄の同族ではないのだろうか?」

ロア「う〜ん? それがそうとも言えないんだよね、一護って人間なのに私達と同じで虚の気配と力も持っていたから。」

ハリベル「… それは人間なのか?」

ロア「大部分は人間をベースにしていると思うよ、それに人の姿がベースなら私やハリベルちゃんも似たようなものだと思うよ?」

ハリベル「… それを言われると反論できないのだが」

ロア「でしよう? という訳で一護の姿と声を見せて聞こえさせてあげるからそのあと実際に会って決めればいいから。」

ハリベル「う、う〜ん…」

ハリベルちゃん私の説得に考えているが一護の力と姿や声を見て聞こえて感じ取ればきつとハリベルちゃんも理解して一護の番になる決心がつくよとそう思ってたら。

アパッチ「おいつ! ロア!! お前、黙って聞いていればハリベル様を勝手にどこの馬の骨の雄の番つがいにしようとすんな!!」

ミラ・ローズ「そうだぜ! その雄がハリベル様にふさわしいか先ず私達が見てやる!!」

スンスン「そうですね、その乱暴者の二人と同意見なのは癪で

すがその雄がハリベル様にふさわしいか見極めさせていただきますわ。」

スンスンちゃん、ミラ・ローズちゃん、アパッチちゃんが私がせつかく説得したのに横からしゃしゃり出てきた。

ちなみにスンスンちゃんがでつかい蛇のような姿をしていて、ミラ・ローズちゃんがライオンのような姿でアパッチちゃんがへ、ヘラジカ？だったかなの姿の雌の虚だよ。この3人も破<sup>アランカル</sup>面になったらきつと美人になりそうだから一緒に勧誘しよう！

ロア「えゝそんなに言うなら3人も一護の番になろうゝ」

アパッチ「あたしたちまで巻き込むんじゃねええええ!!!」

ミラ・ローズ「そうだぜ！アパッチとスンスンだけならいいがハリベル様と私を巻き込むな!!」

スンスン「聞き捨てなりませんわね、そのケダモノ二匹を差し出すなら兎も角私やハリベル様を巻き込まないでくださる？」

アパッチ「スンスン！てめえあたしたちを売るなよな!!」

ミラ・ローズ「ホントだ!!その雄の前にてめえをぶつ飛ばすぞ!!」

スンスン「あらあら野蛮なケダモノは嫌ですわねゝ」

ア・ミ「誰が野蛮なケダモノだああああ!!!」

3人はワチャワチャ漫才をしていると残りの二人の雌の中級大虚<sup>アージュールカス</sup>が話しかけてきた。

シルス「あの、ロア様はどうしてそこまでハリベル様や私達をその雄の番にしようとなさるんですか。」

この子はシルスちゃんって言って青い毛並みの猫型の姿の雌の虚で中級大虚の中でも珍しい白い装甲のような皮じゃなくて青い毛皮なんで他の雑魚の雄どもから集団で襲われていたから助けてあげたら懐いたのでこの子も一護の番候補なんだ。

ロア「え？そんなの優れた雄が優れた雌をたくさん番にするのは当然だよね？」

シルス「そ、そうですか・・・」

レスト「でも私たちその雄のことよく知らないのに番になれって言われても困りますよ。」

この子はレストちゃんで闘牛のような姿の雌の中級大虚でこつちも雑魚の雄の集団に襲われていたところを助けたら懐いて部下になった子だ。

ロア「大丈夫だから、一護ってちよつと釣れないところがあるけど私と同じかそれ以上に強いし雌が嫌がることは絶対しないって確信しているから。」

レスト「えっ!? ロア様の誘惑が効かない雄なんですかそいつは!!」

ロア「そういう訳じゃないよ? どちらかと言えばあの時他の雄が居たから私に恥をかかせないようにした感じだったから。」

レスト「そ、そうだったんですかでもなおの事私達を番にする必要ないじゃないですか?」

レスト「それはそう言っているけど、あの時不意打ちしてきた人間の雌たちも結構な美人たちだったからこつちも同族の雌をたくさん用意してあの3人に負けないようにしないと。」

ロア「まあ二人も会えば絶対番になりたいって思えるから一護からはそういう私たちを引き寄せる何かを持っているから。」

レスト「は、はあ」

ロア「さくて、何れ来る一護との決戦に備えて修行の続きしてくるね。」

ハリベル「…来ていきなり色々言っては帰るってそれはどうなんだ?」

ロア「いいじゃん、同格の話し相手がいるってだけで気が楽になるのよ?」

ハリベル「…それはそうだがいきなり見知らぬ雄の番になれとかすぐに受け入れられないことを言われても困るといのが私の意見なんだが…」

ロア「ハリベルちゃん、その話もう終わったのまた蒸し返すのは無しだよ、それに一護に会ってから決めればいいわ。それにハリベルちゃんって自分を犠牲にするとか平気でやりそうだから自分を守ってくれる雄が番になってくれればハリベルちゃんは幸せになれるんだから文句は言わない。」



ハリベル「…はあ、わかった。その雄に会ってから決めるがそれはいつになるんだ？」

ロア「早くても数か月後だからそれまでに一護の事否定したかったら強くなつたらいいんじゃないの？私は番として一護に認めさせるために強くなるのが理由だけど。」

トレスベストイデア  
3 獣神『そうか（だな）（ですわ）！』

私がそう言ったらア・ミ・ス（アパッチ、ミラローズ・スンスンの略）ちゃん達は私の意見に思いつきり賛同した。

アパッチ「強くなつてあたしたちがそいつぶつ倒したらハリベル様がそいつの番にならずに済むな!!」

ミラ・ローズ「ああ！今回ばかりは喧嘩している暇はねえな!!」

スンスン「あなた達と同意見は甚だ遺憾ですがその通りですね。」

ロア（アパッチ・ミラローズ・スンスンちゃん達はそう言っているけど多分一護には勝てないと思うなく私相手に何もできなかったのに一護は私と手加減しながら互角以上に戦っていたのに次会うときはもつと強くやっているのに無駄とは言わないけど多分手加減されて軽くあしらわれるんだらうなく）

私は内心でそう思っただって初めて会った時にハリベルちゃんに番云々言ったら3人が攻撃してきたから軽くあしらったから一護もそういう感じになるだろうと思っただけ。

シルス「あの…私達も一緒に修行させてもらえませんか？」

ロア「うん？別にいいけどシルスちゃん達はなんで？」

シルス「…私達もロア様の役に立ちたいのです。ロア様が口を開いたら一護と番になるとかしか言わないので私達もロア様の役に立ちたいのです。」

ロア「あはは…だつて一護がそれだけ魅力がある雄なんだもん。」  
レスト「だから私達も強くなつてロア様に助けていたただいた恩をお返ししたいのです!!」

ロア「そうなの？でも私はハリベルちゃんみたいな人型の戦いしか知らないから参考にはできるかわからないわよ？」

シルス・レスト「自力で何とかします!!」



## 死神同行編終了時の主人公たちのステータス

黒崎一護

追加能力

解放された斬魄刀

二本の斬魄刀

無銘

一護のは刀神作の浅打ではないので通常の刀としての名称。

虚と死神の力が混じって滅却師の力で作られた打刀と死神と完現術の力が混ざって崩玉の力で作られた脇差しの二振りある。

この状態の戦闘スタイル。

基本的な戦いは刀で切りかかって脇差しは刀の間合いより近い時に脇差を振るって攻撃する。

また二刀だけでなく刀または脇差し一本でも戦うことが可能。

また勿論刀がなくとも白打だけでも滅茶強い。

始解

刀のほう

名称『斬月』

解号『切り裂け』

見た目

解放すると原作同様出刃包丁のような見た目の大刀

デカイ刀身を使って高い攻撃力を誇り盾のように使って防御もできるので使いやすい。

能力

自身の霊圧を喰らって斬撃を巨大化する

原作でもあった能力

滅茶苦茶よく斬れる月輪を発生、操作する能力。

滅却師の力で使ってたものを能力した物。

卍解

天鎖斬月

見た目

原作同様に卍の柄の黒刀

能力原作同様に身体強化に始解の能力を大幅に強化した物。

月輪も切れ味と生成量が大幅に向上している。

天鎖穿月

見たい目

ブレソルの滅却師の黒弓

能力

身体強化と霊圧を喰らって矢の貫通力と速度を喰らわせた分だけ上げる。

こちらでも月輪の生成、操作する能力も使用可能。

脇差しのほう

始解

名称『万華鏡』

解号『写せ』

見たい目

解放すると刀身から色が抜け落ちたガラスのような刀身になる。

能力

知っている斬魄刀の始解を自由自在に模倣が可能。

複数同時に模倣して組み合わせも可能。

早い話艶羅鏡典の上位互換。

たぶん、尸魂界ソウルソサエティ編で使うであろう(ボンバカ能力使うと怪しまれるのでバグーが自制している)のでルキアから聞いた)能力

振花(ルキアがバグーに話した。)

土鯨(同じ隊所属なので知っていたのでバグーに話した。)

氷輪丸(海燕が見たものをルキアが聞いてそれをバグーに話した。)

紅姫(呆れるほど見た。)

斬月(自前)

花天狂骨(浮竹から聞いたルキアがバグーに話した。)

双鱼理(ルキアが浮竹から聞いたのをバグーに話した。)

千本桜(白哉が使っているのをルキアから聞いた)

袖白雪(実際に見た)

袖白雪(実際に見た)

流刃若火（ルキアが浮竹から聞いたものをバグーが聞いた。）

雀蜂（夜一から聞いた）

万華鏡の卍解

名称『万華鏡 千変万華』

見た目

始解と全く変わらない。

能力始解の拡張

始解では始解までしか模倣できないが卍解すると卍解も模倣可能  
模倣した能力

残火の太刀（浮竹に聞いたルキアがバグーに話した）

白霞罰（実際に見た）

振花の卍解

■

■

（ネタバレ防止のため名を一字で塗り潰されている。）（海

燕に聞いたルキアがバグーに話した）

双魚理の卍解

■

■

（ネタバレ防止のため名を一字で塗り潰されている。）（浮

竹に聞いたルキアがバグーに話した）

天鎖斬月

天鎖穿月（どっちも自前）

花天狂骨枯松心中（浮竹から聞いたルキアがバグーに話した。）

千本桜景厳（白哉が緋真に言ったのをルキアが聞いてそれをバグーに話した。）

観音開紅姫改メ（模擬戦で引き出させたため実際に見て体験している。）

石田雨竜

追加聖文字

The Lightning

名称『閃 光』

能力

光を操作・生成

早い話ピカピカの実の流動能力がない能力

新技

オロラ・レーザ

『極光の雨』

the X-axis

万物貫通を付与した神聖滅矢の雨に周囲に展開した光球から光

線の雨を浴びせて広範囲の敵を殲滅する技。

茶渡泰虎

追加した能力は特にないがバグーが作成して使った武装

バスターソード

チャドの完現術に特化した大剣

見た目は

クラウドのでっかい剣

素の能力で霊圧を飛ばす能力がある。

完現術を使つて

シエン・ネグロス・グランテ・ンチゲリーヤ  
黒百の大剣にすると黒鎧と白鎧の能力を剣に上乗せ融合し

て使用可能。

ストーム・ハンドリクン  
暴風の手甲

通常時でさえ竜巻をも発生可能の手甲、完現術を使用すると黒百の大剣同様の鎧の能力を風に上乗せできる。

この状態だと神砂嵐かみずなあらしを使用可能。

織姫

特に追加項目は無いが新技が一つできたため記載する。

『メモリー・エンド記憶の終絶』

刀には盾舜六花の髪飾りと組み合わせる（銀城の完現術の大剣に代行証をつける感じのやつ）ことで刀を媒介として事象の拒絶を過去改変と組み合わせ使用ができるようになったので切りつけた対象の過去全てを拒絶することで存在を抹消する技。

雨

既に能力が完成しているので追加項目なし。

リルカ

新しい力

『ラビットドラゴン』

ドール・フェスティバルで生成したウサギと竜のぬいぐるみを融合して身に纏った力

うさ耳に竜の翼が背中についていて腕が原作の能力を身に纏った時の手足の装甲に竜の爪がついている感じですが。

この状態だとウサギの反射神経と脚力、竜の膂力と飛行能力、再生力、特殊能力が使用可能。

『ディアブルキャンプ悪魔風脚』

竜の能力で生成した炎を操作して足に纏わせて脚撃の威力を底上げする。ちなみに他の属性も使用可能。

『フレアシュート』

悪魔風脚で纏わせた状態で対象を蹴り抜き纏った属性を炸裂させて破壊する。

朽木ルキア

霊圧

義兄と互角か少し下くらい

身体能力

バグーブートキャンプの結果隊長格に匹敵するレベル（流石にパワーファイタータイプは無理だがバランスタイプの隊長なら互角以上）

斬拳走鬼の能力

斬術

純粹な剣術はバグーの相手や虚刀虚との打ち合いで相当なレベルに達した。

白打

夜一に鍛えられたため白打も相当な領域へと至った。（たぶん隠密部隊からヘッドハンティングがくるレベル）

歩法

瞬歩も夜一に鍛えられているのと隠密歩法も体得している上に一護が独自に作った歩法を応用した技もいくつか習いました。

鬼道

九十九番までの鬼道すべてを修得しました。（勿論バグーに倣ってすべて詠唱破棄で使用可能。）

一護が使っていた『氷牙征嵐』等も習得しています。

斬魄刀

始解

解号 『舞え』

名称 『袖白雪』  
そでのしらゆき

冰雪系に分類される斬魄刀。刃も柄も鏢も純白。現在尸魂界で最も美しいと言われている。

真の能力は刀に触れた者の体温を零度以下まで低下させる。

斬魄刀ではなく斬魄刀に触れたものに能力が作用されるために、所有者であるルキアにその力が及ぶ。このため周囲の気温だけでなく、地面を通して氷震（地中の水分が凍結し、収縮・破壊によって発生する地震）を起こすこともできる。

弱点等もバグ一との鍛錬である程度まで克服した。

袖白雪の技

初の舞、次の舞は原作とそんなに変わらないしいて言うなら効果範囲と威力が上がっている。

『参の舞』  
さんのまい どうがしらふね  
凍牙白刀』

バグ一の月牙天衝を元に作られた冷氣版月牙天衝、冷氣を刀にためて冷氣刀のようにもできる。

卍解

名称 『白霞罰』  
はつかのどがめ

卍解すると斬魄刀には変化はないが使用者に変化がある発動と同時にルキアは髪まで純白になり、斬魄刀を手にして白い装束を纏い、頭に氷の結晶を思わせる髪飾りが付く。

技は今のところはない冷氣を爆発的に指向性を持たせて放つといった単純なことしかしていない。

N E W ヒロイン

ロア・ベリアル

本来原作で一護に斬られた最下級大虚ギリアンが虚刀と改造虚を大量に喰らったことでは破面アラソカルへと進化した存在。

見た目はSAOのリーファで髪の色は黒で髪はまとめていません。

身長

170cm

体重



55 kg

スリーサイズ

B100

W64

H94

身体能力

バグーと互角

霊圧

バグーと互角

固有能力

崩玉

願いを叶える能力バグーの持つてるものと遜色ないレベル。

剣術

天賦の才能を持っている。進化した直後でありながらあのバグーと互角の打ち合いができる。

格闘術

こちらもバグーと互角

鋼皮イエロ

硬度が異常、バグーの月牙天衝を見戯扱いができるレベル。

響転ソニート

バグーが響転を除く3つの歩法を融合してやっと拮抗するレベルの速度。

虚閃セロ

威力がバグーの概念攻撃を力任せに突破可能の威力

虚弾バラ

速度がバグーレベルの反射神経と動体視力が無いと回避防御不能レベル。

虚としての固有能力

■ (ネタバレ防止のため名を一字で塗り潰されている。)

帰刃レスレクシオン

■ (ネタバレ防止のため名を一字で塗り潰されている。)

■ ???  
■  
■  
■  
(ネタバレ防止のため名を一文字で塗り潰されている。)

## 尸魂界編

25話：「帰っていいですか？」

sideルキア

あの虚刀虚軍団の襲撃から2週間が経過した。

私は何時もの修行が終わり業務である、虚退治をしている。

ルキア「はっ！ふっ！」

小型の虚が数体居たが危なげなく倒した。

今までは中級の鬼道なり斬魄刀の解放をしなければならなかったが一護たちと出会い修行したことで斬魄刀の解放をするまで追い詰められることなく単純な斬術、白打、初級鬼道で虚を浄化できるようになった。

戦いが開始して数分で虚を倒し終わりいつも通りに帰路に就こうとすると

一護「おっ！いたいた、ルキア〜！」

一護が死神化して空から降りてきた。

ルキア「一護か、どうした？何か用か」

私は一護に問うと一護は

一護「そうそう、義骸の完全修理ができたから渡しに来た。」

どうやら義骸に取り付けられていた追加機能の修理が終わったので態々渡しに来てくれたようだ。

ルキア「そうか、わざわざ済まぬな。」

私は一護に渡された義骸を受け取った。

一護「さて、渡し終わったので帰ります」???「見つけだせ」一護「…

今度はなんだ？」

一護が帰ろうとした直後に男の声が辺りに響いた。今の声は…

私と一護は声の聞こえた方に顔を向けるとそこには3人の男と1人の女性がいた。

一護「…ルキアと同じ死神か？」

???「そうだぜ、俺達はルキアと同じ死神…え？」

「グーグルをかけた男、阿散井恋次は一護の疑問に答えようとしたらなぜか固まった。… まあ理由は一護の顔だろうな。」

一護「… おい、どうした？」

「… 海燕隊長って分身能力でもあるんすか？」

「… 貴様、いつの間にそんな力を身に付けた」

「… 海燕帰ったらその力について話をしましょう。」

「俺にそんな力ないわっ!! どういうこと!? なんで俺と同じ顔!」  
「うんまあ案の定と言った感じのやり取りをしている」

一護「あのさあ、漫才するのはいいがあんたら何しに来たんだ？」

??? 『漫才などしてない!!』

一斉に一護にツッコんだ。

一護「あつそ、で? なにしに来たんだ？」

??? 「そうそう、実はそこにいる、朽木ルキアに用があつてきたんだよ。」

ルキア「私に? 私は別に隊立違反とかを犯した覚えはないが?」

強いて言うなら一護に霊圧を譲渡したことだが一護は死神の血を引いているので違反ではなかったが。

恋次「いやなあ、なんかお前の義骸の反応が消えたから裏切ったとかの疑惑がかけられたから連行して来いって上からの指令でな。」

なっ! そんなことになっていたのか!?

一護「あくそういえばルキアの壊れた義骸修理する際に一番壊れていたところが受信機と発信機だったからそのせいかな?」

一護が思い当たる節があることを口にする

??? 「… つまり義骸が壊れたところが運悪く義骸の受信部分だったから反応が消えたそう兄は言いたいのだな。… 志波海燕の分身」

一護「そうそう… って俺は分身じゃないから後志波? それって親父の旧姓だよな?」

??? 「… はあ!?! ちょっと待てお前叔父の行方知っているのか!?! てか親父!?! あの結婚したのか!?! てことはお前は俺のいところになるのか!?!」

??? 「海燕落ち着いて!! 任務と関係ないところで感情を暴走させたら行

けないわ!!」

海燕「でもよ!都!行方不明の叔父が見つかった上にいここが出来たんだぞ!!嬉しくないわけがないだろ!!」

都「それはそうだけど、今は落ち着いて!」

???「... まったく兄は隊長としての自覚はないのか?」

海燕「おっ?いとことかと遊んだりすることができないからって僻むなよ白哉?」

白哉「... そうか、どうやら兄はここにくたばりたいと見える。」

兄さまは海燕殿の煽りに刀に手をかけた、ちよ、ちよつと待つて下さいいこんなところで二人が戦ったら被害がとんでもないことになってしまわれますから。

そう思っていたら結界が周囲に貼られた。こ、この結界は...!?

恋次「何だこの結界は?」

白哉「... どうやら私達を出す気はないらしいな。そしてルキアとそこの男が張ったわけではなさそうだな。」

都「どうやらここで私達を始末したいかそんな感じでしょうか?」

海燕「さて、任務で来たらなんか嬉しい朗報がいくつも重ね掛けで

有頂天になっていたのに水を差すなよ。」

白哉「水の能力の兄が言うのか?」

海燕「うるせえ!!」

一護「... うわく面倒なことが起こったと思ったらさらにメンドイことが重ね掛けされたな。」

ルキア「... そうだな... 来るぞ。」

私と一護はすでに斬魄刀を抜刀して軽口を叩きながら周囲を警戒した。

???「うふふ、この前ぶりね、一護♡」

一護「帰っていいですか?」

ルキア「あやつはどう足掻いてもおぬしを返す気はないようだが」

私と一護は聞こえてきた声にうんざりした。

声が聞こえた方に体と顔を向けると破面アラソカルの女、ロア・ベリアルと3体の虚刀虚がいた。

一護「… お前、何の用？」

ロア「あら、あなたに会いに来たいって理由じゃダメなの？」

一護「お前が現世に来ると面倒なんだよ!!それに後ろにいるやつらを連れてきているのにそんな理由じゃないだろ？」

ロア「あははつ流石一護ちよつと今あるやつ下部になっただけどそいつからの指令でこいつらの実験のために現世に行けって言われたから仕方がなく来たのよ。」

どうも、虚刀虚を作った存在はあの破面を従えたというより協力関係を築いたようだな。

一護「そうかよ、で？俺と戦うのか？」

ロア「そうね、それもいいk」白哉「破道の三十三 蒼火墜」そうかついロア

「…いきなり何よあんた」

兄さまは蒼火墜でロア・ベリアルを不意打ちしたがロア・ベリアルにとっては何ともない感じだった。そして一護と気分よく話していたところを邪魔されて不機嫌になって兄さまに文句を言った。

白哉「…なに、と言われても虚を死神である我らが放置すると思っていたのか？」

ロア「…はあ、このままだと一護と満足に話もできないわね、仕方がないわ、あんたたちその一護の近くにいる雌と上の連中の相手をしてきて。」

虚刀虚『はい、ロア様』

虚刀虚の一体は私に残りの二体は兄さまと海燕殿たちに襲い掛かった。

ルキア「一護こ奴らは任せておけツ!!」

一護「了解、死ぬなよ。」

ルキア「分かっている。」

私と兄さまたちは一旦結界内で一番開けた場所に移動した。

ルキア「ここなら被害を少なく戦えそうだ。」

海燕「ルキア!こいつら何なんだ!?普通の虚じゃねえ!!」

海燕殿は虚刀虚を知らないため私に聞いてきた。

ルキア「私も詳しくは知り切れていませんがどうも何者かによって

改造されているらしく特にあの刀の力で大幅に強化されています!!」  
海燕「どこのバカが作ったんだよこいつら!!」

海燕殿は虚を改造している存在に悪態をついた、まあ私もそう思います。

都「それにしてもルキア、あなたどうしてそんなに冷静なんです？あれほどの虚を前にして？」

都殿は虚刀虚を前にして冷静な私に視線等を外さずに聞いてきた。

ルキア「… 私が現世の任務をこなし始めて1カ月が経ったときにあの虚と相對して一護… 先ほどいた橙色の髪の子と出会ったんですけどその時にあの虚の同類と戦って死にかけまして…」

白哉「… 待て死にかけた？あの虚に殺されたのか？」

ルキア「いえ、その虚は一護が倒したのであれは似て非なる同類の虚です。ちなみに私やあれと戦いなれている者たちはあの虚を虚刀虚と呼んでおります。」

白哉「… そうか」

海燕「… てことは後であのいそこには部下を助けてくれた恩を隊長としてなんかしてやらないとな。」

海燕殿たちは斬魄刀を抜いて構えている。

恋次「… 今、言うことではないと思うんだがルキアお前一体いつの間にそんだけの霊圧を手に入れた？」

恋次が私の上がった霊圧について聞いてきた。

ルキア「ああ、これか？その虚刀虚に殺されかけた後、一護に色々聞いた後あやつの修行に混ざったらここまでの強さを獲得しての、おかげで虚刀虚と相對しても一方的にやられることもなくなったのだ。」

恋次「… そうか」

虚刀虚Ⅰ「無駄話は終わったか？」

ルキア「っ！(こやつら知性があるのか!!)」

今までは知性などがなくただ本能のままに戦ってきた虚刀虚達だがどうも連中も進化しておるようだ。

虚刀虚Ⅰ「ではその少女の相手をさせてもらおうぞ」

そういう虚刀虚の1体は一足に私と距離を詰めて上段から虚刀を振るってきたが私は驚くことなく刀で受け止めた。

だが体が小さいのと体重が軽いせいで兄さまたちと距離を離されてしまった。

虚刀虚1「やるな、流石にロア様に警戒されている女だな。」

ルキア「…？、私は別にあの女に警戒されるようなことをした覚えはないが？」

いきなりそんなことを言われて思わず返してしまった。

虚刀虚1「気にするな、こちらの話だ。」

ルキア「そうかつ！」

私は肘に霊圧を溜めて小さい体を生かして距離を詰めて肘うちを見舞った。

虚刀虚1「させるか！」ガキンッ！

虚刀虚は虚刀をすぐに巧みに操ってほぼゼロ距離から放たれた肘うちを防いだ。

向こうも唯々力に任せた戦いをしてくるといふ訳ではなさそうだな。

虚刀虚1「…この状態では些か私に分が悪いな。では少し力の桁を上げるとするか。」

虚刀虚は虚等に霊圧を込めると爆発的に霊圧を上昇した。

霊圧が収まるとそこには白い死覇装を身に纏い腰に斬魄刀を帯刀した破面の男がいる。

虚刀虚1↓レン「さて女、名を名乗るのを忘れていたので名乗るとしよう。私の名は『レン』だ。」

破面の男は礼儀正しく私に名を名乗った。

ルキア「レンよ、おぬしは何故私と戦うのだ？改造されてもそれほどの精神力を保っておるといふのに？」

私は疑問に思ったことを聞いたが

レン「簡単なことだ、私がロア様の従者だからだよ。」

ルキア「だがあの女は一護にご執心だが？」

あの女が一護に向ける愛情は並々ならぬものだがレンは何言っ



いるんだ的な態度で私に言った。

レン「主の力を理解しているからこそ、その主が愛している者に嫉妬や敵意を向けるなど従者の風上にも置けぬ行為だよ、レディ」

ルキア「そうか、それは済まぬことを聞いた。」

レン「そして、私の他にあなたのお方の身の回りの世話をする従者がいるのでな私は雑用担当ではあるがそのことに誇りを持っている。」

ルキア「雑用であることが誇りとは…。」

私はレンの言っていることが理解できないでいた。

レン「何簡単なことだ、あの御方の役に一番立てれる雑用の立場は我々の中でも一番の人気ポジションでね、それを勝ち取った我ら3人は他の連中に闇討ちまでされる始末なのだよ。」

ルキア「そ、そうか」

どうもあの女の雑用係は思いのほか人気の立場だったようだ。

レン「さて他の二人はどうも苦戦しているらしいようだ、あまり時間をかけすぎるとロア様に失望されてしまいますんでねえ。」

レンの言葉に私は周囲の様子を確認すると確かに海燕殿と兄さまが都殿と恋次の補助で二体の虚刀破面を虚刀と斬魄刀を解放させている。

レン「ではそろそろ真面目にやりましょうか」

レンはそう言い虚刀の鞘を生成して虚刀を納刀した。

そして己の斬魄刀を抜刀した。

レン「吹き荒れる『疾風騎士』！」

斬魄刀の解号を唱えると斬魄刀が消失しレンの霊圧が異常に上昇した。

レンの全身が漆黒のスーツに変化しその身に銀の甲冑とヘルムを身に纏い黒いマントを羽織り斬魄刀が黒い騎槍ランスと細剣レイピアに変化した。

レン「これが我々、破面ブランクの刀剣解放です。いかがでしょう？」

ルキア「…凄まじいな。」

およその戦力差は卍解してもきついな、むしろ卍解したらやられるのは私のほうだな。

そう思っていたら騎槍ランスを消して細剣レイピアを右手に持ち構えた。

ルキア「…何の真似だ？」

レン「単純な話です、小柄のあなたでは騎槍の力を最大限発揮できないのでね、小回りの利く細剣を使った方が勝率が高いのですよ。」

ルキア「なるほど、理のある判断だな。舞え『袖白雪』」そでのしらゆき

私は斬魄刀を解放した。

レン「では行きますよ。」

その言葉を皮切りに私は瞬歩、レンは響転ソニードで加速して激突した。

side 海燕

俺は斬魄刀を構えて目の前の虚刀虚と呼ばれる、改造虚から視線等を外さず集中力を極限まで高めている。

ルキアの連行の任務だが早々に誤解だと判明して気が楽になったら近くにいた俺にそっくりの男が叔父の子だと分かり自分にいここが出来て気分が最高潮になったのにそれに冷水ぶっかけられた気分になったがそんなの気にする余裕のないほどの虚にルキアは落ち着いていたので話を聞くともどうも改造虚とか言うふざけた代物らしい。

それはそうと、ルキアのやつの霊圧が俺と白哉とそんなに差がないんだが？マジで何があった？…え？いとこと修行したら強くなつた？マジであいつどんな修行したんだ!!?

虚刀虚2「ではそろそろ、行くゾ。」

そう内心で思っていたら虚刀虚の一体が斬りかかってきた。

海燕「悪いが真面目にやってられないぜ、『縛道の六十一杖光牢』！」りくじようこうろう

俺は六つの光の帯で拘束する縛道で虚を縛ろうとするが

虚刀虚2「効かぬうツ!!」

虚はまるで効いていないとばかりに帯が消失して突っ込んできた。

都「私を忘れないでもらえないかしら？」

都が虚の背後から不意打ちしたが

虚刀虚2「忘れてはいないぞ女」

虚は手に持つ刀で都の不意打ちを防いだ。

白哉「破道の三十一 赤火砲」しゃつかほう

白哉は一瞬の隙をついて火の玉を放って虚に直撃したが

虚刀虚2「効かぬと言っただろう!!」

虚はそんなもの効かぬとばかりに声を上げたがそう言えばさつき  
の六杖光牢が消失してたよな。てことはこいつに鬼道系は一切効か  
ないのか!?

海燕「おい、白哉こいつ鬼道系が一切効かないぞ」

白哉「兄も理解していたか。ならこいつの相手は私と恋次です。」  
俺と都の斬魄刀が鬼道系なためここは白哉たちに任せて俺と都は  
残った一体に突っ込んだ。

俺は斬魄刀で切りかかって斬撃を命中させたが虚は何かしたと言  
わんばかりに無反応だった。

虚刀虚3「無駄だよ」

虚はそう言い黄緑色の霊圧の玉を高速で放ってきた。

至近距離で放ってきたため回避が遅れたが何とか致命傷を免れた  
が相当なダメージを受けてしまった。

海燕「くそっ! さつきのやつは鬼道系の攻撃無効でお前は物理攻撃  
が効かないとかふざけてんのか!!」

虚刀虚3「ふざけてはいないさ僕らはこういう存在なんだから。」

虚でありながら人間や死神のような口調で話しかけてくる虚

海燕「…なあ、お前って改造されているが普通の虚じゃねえだろ  
?」

虚刀虚3「まあ、僕らは元々は退化して進化できなくなった  
最下級大虚だったからね。」

海燕「…へえ、元々は最下級大虚ねえ」

なら元々の強さは折り紙付きか、それにこいつが物理攻撃無効でも  
やりようがある。

海燕「そうかい、そしてお前のその面倒な耐性もこの技なら関係な  
いだろ?」

俺は瞬歩で突っ込んで距離を詰めると

虚刀虚3「無駄だっていつてい」海燕「それはこいつを喰らって  
からにしな!! 『月牙天衝』!!」

斬魄刀に霊圧を纏わせて渾身の力で対象を叩き切る志波家に代々

伝わる技だ。

やっていることは物理攻撃に見えるかもしれないが霊圧を纏わせているので鬼道系の性質も持った技だ。

虚刀虚3 「くっ！」

予想通りに虚を切り裂いてダメージを与えることに成功した。

虚刀虚3 「その技は危険だけど要は近距離でしか発揮しないでしょ？」

虚はそう言うのと傷が再生した。

海燕 「くそっ！虚特有の超速再生にしては速すぎるぞ!!」

俺は虚の再生力の速度がおかしいことに文句を言う

虚刀虚3 「それは僕らの持つ刀の機能でね、再生力が大幅に上がっているんだよ。」

海燕 「面倒な刀だな!!」

俺は刀の機能に文句を言ったが

虚刀虚3 「そういうなつて。」

虚はそう言っているが十分虚が油断したところで都が大技の破道を放った。

都 「破道の八十八

ひりゅうげきぞくしんてんらいほう  
飛竜撃賊震天雷砲!!」

都は虚の死角から気づかれないうように詠唱して八十八番の高位破道を放った。

雷撃を圧縮した極大の光線が虚を飲み込んだ。

虚刀虚3 「あつぶないなくもお〜」

虚は暢気な声が聞こえてきた。

煙が張れるとそこには白い死覇装を身に纏って腰に斬魄刀を帯刀した160cmくらいの男?がいた。

海燕 「…誰だ?」

虚刀虚3 ↓トリス 「誰つて君が今戦っていたやつじゃないか?そういえば名乗っていないかったね。僕は『トリス』よろしくね。」

トリスと名乗った虚は刀を構えて切りかかってきた。

都 「破道の三十一 赤火砲!」

都も鬼道で補助しているが霊圧差があつて攻撃が通らないでいた。

海燕「ちっ！しょうがない。水天逆巻け『振花』！」

俺は斬撃を受け止めた瞬間にトリスの腹を蹴って距離を作り斬魄刀を解放した。

解放された振花は三又の槍に変化して水が噴出した。

トリス「鬼道系の斬魄刀だね!!じゃあ僕もはばたけ『翼撃王』!!」グリフォン

トリスが斬魄刀を解放すると全身が金色の大鷲と獅子を足した鎧を身に纏った。

トリス「はっはー!」

トリスは鉤爪のついた手甲による徒手空拳で攻撃してくる、腰にあるもう一本を使つてこない。

海燕（舐めているのか?なら嫌でも全力を引き出させてやる!!）

俺は手首の回転を軸にした槍術で獣のごとき連撃を捌きながら水流で攻撃していく。

トリス「やるね!じゃあこれはどうかな!『超越せよ』!」

トリスはもう一本の刀を抜いて解き放った。

トリス「『超越の翼撃王』!!」グリフォン・テラセネンチア

爆発的に上昇した霊圧だが見た目に変化は特に見られない。

トリス「あははっ!これくらいやれば卍解つてやつも使うよね?」

海燕「へっ!ぬかしやがれ!!何も戦いは一人でやるもんじゃねえぞ!都!」

都「沈め『影縫い』」

都は斬魄刀を解放した。

解放した影縫いの見た目は黒い刀身の小太刀だ。

都「はあ!」

都は影縫いの能力の影を操る能力でトリスの影を縛るとトリスの動きが止まる。

トリス「え!?!」

海燕「これでどうだ!!」

俺は動きが止まった瞬間に水を纏った振花で刺突を見舞った。

side 白哉

気の乗らぬ任務だったが早々にルキアの誤解が分かり安堵したが

海燕の煽りで刀を抜きかけた時奇妙な結界が張られ謎の虚達が出現し襲い掛かってきたがどうもルキアはこの奇妙な虚達と戦ったことがあるらしく海燕のいここに助けられなければ死んでいたという。そしてルキアを鍛え上げて今の自分と海燕に並ぶ猛者に成長させたという。

白哉（…いつか礼はしなければなるまいな。）

しかし、あの男の趣味嗜好が分からぬので何を礼に出せばいいのかわからぬので正直気が乗らぬが海燕に相談するしかないな。

そして目の前のガタイの良い虚はどうも鬼道系の攻撃が効かない特性を持っているようだが私と恋次には問題ない。

白哉「恋次、最初から飛ばしていくぞ。」

恋次「分かっています。」

こやつの特性は厄介だがそれ以上に素の力が我らでも油断すると一撃で戦闘不能になりかねないので斬魄刀を解放して注意深く構える。

白哉「散れ『千本桜』」

私は斬魄刀を解放すると刀身がバラバラに分割されて光の花びらのような状態になった。見た目的に鬼道系に見えるが細かくした刀身で攻撃するので直接攻撃系の斬魄刀に分類されるのがこの千本桜だ。

恋次「吠えろ！『蛇尾丸』!!」

恋次も斬魄刀を解放した蛇尾丸は幅広の片刃剣で分割された刃節を鋼線で繋いだ蛇腹剣だ。

これで敵の特性は意味をなさないので千本桜で切りかかる。

虚刀虚2「ぬううう!!こ、これは鬼道系の斬魄刀に見えて直接攻撃系か！」

白哉「一目で我が千本桜の性質を見切ったか。」

どうやら敵は頭が悪いように見えて随分と頭が切れると見える。

恋次「うおおおおお!!」

恋次が刀身を伸ばして攻撃して傷をつけるが即座に再生した。

白哉「…ただの超速再生ではないな。」

超速再生なら若干の時間差があるが再生速度が異常に速すぎる。

虚刀虚2「フツ！我らが持つ刀は常に超速再生と自前の再生力を強化する力があるのだ!!」

虚は自分の力に自信があるのかスラスラと自身の力を喋った。

白哉（これは卍解を使わねばならぬか？）

今の千本桜の刃の数では再生速度を上回ることが出来ぬがそう言えば先ほど刀の機能といったな。

白哉「恋次、やつの動きを止めよ。」

恋次「ツ！分かりました！吠えろ！蛇尾丸!!」

恋次は私の言葉にすかさず蛇尾丸でやつの動きを止めた。そこに千本桜で腕を切り飛ばしにかかる。

虚刀虚2「ぬうう！そういうことか！させるかあ!!」

虚は霊圧を爆発的に上昇させた、やつの姿が見えると白の死覇装を身に纏い腰に斬魄刀を差している大男がいた。

虚刀虚2↓凍夜「そういうえば、まだ名乗っていないかったな俺の名は凍夜、今より貴様らに全力をもって相手させてもらう!!凍てつけ!!

『凍結の蟲王』!!」

雪の結晶のような刃の握り懐剣型の二本の斬魄刀を解放した。

冷気のような冷たい霊圧が解放され虚の肉体に青白い甲虫のような鎧を身に纏った。

凍夜「では行くぞ！『術式展開』！」

そういうとやつは武の構えをとり、足元に自らを中心とした雪の結晶を模した陣を出現させる。

恋次「そんな見掛け倒しで俺達を倒せると思うなよ！」

恋次は瞬歩で背後に周り蛇尾丸で切りかかったがまるで後ろに目があるかと思まがう精度で恋次の攻撃を捌き切った。

白哉（なるほど、やつの足元の雪の結晶のようなものは闘気か何か気配のようなものを察知しているのか。そして奴の技量の高さが恋次の連撃を捌いているのか。）

白哉「貴様、全力を出すと言いなから腰に差している刀は何だ？」

凍夜「…ん？おお！そういえばこれもあつたな!!『超越せよ』!!」

私はやつの言ったことの矛盾を指摘するとやつは忘れていたばかりに刀を抜いて解放した。

凍夜「『破壊殺・猗窩座』」

奴は解放前のものに戻ったが霊圧等が異常に上昇しており姿も死人の様な肌の色に紅梅色の短髪、どこか幼さも残る顔立ち、細身ながらも筋肉質な体格の若者といった外見であり、顔を含めた全身に藍色の線状の文様が入っており、足と手の指は同じ色で染まっていて、爪に至っては全て髪と同じ色である。

目はアーモンドのような釣り目で、白目部分は水色でひび割れのような模様が浮かんでいる。

服装は、上は素肌に直接袖のない羽織、下は砂色のズボン状の道着と両足首に数珠のようなものを着けているだけの軽装となった。

凍夜「さあ！これでもう俺は全力だぞ!!お前も卍解を使うがいい!!」

… 奴の言う通り、奴に鬼道が通用しない特性がある以上奴の挑発に乗らざるを得ない。

白哉「… いいだろう、しかとその目に焼き付けるがいい我が卍解を。」

私は刀を逆手持ちにし手を離れた。

白哉「『卍解』」

すると周囲が暗くなり、私の左右から1000本の巨大な日本刀の刀身が桜並木のように立ち並び、それが一斉に桜の花びらのように姿を変える。

白哉「『千本桜景嚴』」

始解時を遥かに上回る数の刃と化すそれが我が卍解、千本桜景嚴だ。

凍夜「凄い！凄いぞ!!さあ俺と最高の戦いをしよう!!」

奴は瞬歩のようなもので高速移動してきたので私も千本桜景嚴でやつの移動先に飛ばして動きを制限しながら残りの千本桜の刃で切り刻む。

凍夜「『破壊殺・空式』！」



奴は拳で空を殴り衝撃波を飛ばしまくることが千本桜の刃を叩き落とした。

白哉「・・・これならどうだ『吭景・千本桜景巖』」

相手の周りに千本桜の花びらで囲み、全方位から一斉攻撃する。

凍夜「甘い！『破壊殺・終式・青銀乱残光』！」

全方向に通常より速度と威力をさらに高めた百発の乱れ打ちをほぼ同時に放ち千本桜の刃を吹き飛ばした。その余波で私と恋次は大きくダメージを受けてしまった。

白哉「ぐうう！」恋次「がああああ!!」

凍夜「はあ、はあ・・・やるな今ので結構霊圧と体力を使ってしまったな・・・まだまだ鍛錬不足か。」

奴は何か言っているが今はそんなことを気にしている余裕はない。

白哉「恋次・・・立てるか？」

恋次「当たり前つすよ！隊長こそへばってんすか？」

白哉「兄も言うようになったではないか。」

私達は傷の深い体に鞭を打って立ち上がり千本桜を操作する。

白哉「恋次良いな、兄が何が何でも奴の隙を作れ私とその隙に全力の一撃で奴を倒す、」

恋次「分かりました。」

恋次はそう言っただけに突撃した。

恋次「うおおおおおおおおおおおお!!!」

恋次が蛇尾丸で切りかかり続けるが奴は凄まじい技量で捌き続ける。

凍夜「ふはは！お前はまだまだ強くなるな！今ここで殺すのは惜しいな!!」

恋次「そりゃ、どうも!!」

凍夜「だがロア様の命令だここで死ね。『鈴割』」

奴は蛇尾丸を振り下ろされる刃を側面から拳で打ち叩き、粉々に砕いた。

恋次「ッ!?!」

凍夜「済まぬな、死ね」

白哉「恋次避ける!!」

恋次は私の合図で瞬歩で回避した。

白哉「終景・白帝剣」

千本桜の全てを自身の体に集約させ、桜の翼と剣を作り出す、千本桜全てを纏って相手を攻撃する私の持つ最大威力技だ。

凍夜「ほう！それが貴様の切り札か相手になろう!!」

『破壊殺・滅式』

やつは両の拳に霊圧を極限まで集中させた。おそらく両手で同時に正拳突きを放つ技だと推察する。

白哉「…行くぞ！」

凍夜「ああ、終わらせよう!!」

私達はほぼ同時に突進した。

凍夜「うおおおおおおお!!!」

白哉「今だ！恋次」

凍夜「ツ!!」

恋次「『獠牙絶咬』!!」

恋次はやつに破壊された刀身を遠隔で操って奴に突撃させた。

凍夜「ぐああああ!!」

不意打ちを喰らったやつは技が解除された。

白哉「…終わりだ！」

奴の頭部に白帝剣が突き刺さろうとした。

side ルキア

ルキア「はあああああああ!!!!」

私は袖白雪の刀身に冷気を纏わせて瞬歩で高速移動しながら斬撃を繰り返す続ける。

レン「おおおおお!!!!」

レンは響転で高速移動しながら細剣を高速で振るまたは刺突を繰り返す続ける。

レン「『超音波』」

レンは至近距離から超音波を放ってきた。

私はそれを至近距離故回避し損ね喰らってしまった。

ルキア「ぐああああ!!」

ダメージ自体はそこまでではないが頭を揺さぶられて三半規管もやられてしまい気持ちが悪い。

ルキア「う…っあああ…」

レン「隙だらけですよ、『カドラプル・ペイン』」

レンは細剣に虚閃セロを纏わせて高速の4連撃の刺突を放った。

ルキア「ツ!!はああああああ!!!」

私は自傷覚悟で袖白雪から冷気を放った。

レン「なっ!!?」

レンは私が放った冷気でダメージを受けたが即座に飛んで範囲から脱して再生した。

レン「遊び過ぎましたね『超越せよ』」

レンは虚刀を抜き解放した。

レン「生存騎士ナイトサバイブ」

胸の鎧部分が青地に金縁の寄りに変化しバイザー部分も金の装飾が追加している。

武装も蝙蝠を模した金の装飾の剣と盾に変化している。

レンは剣を抜いて構える。

レン「終わらせましょう『暴風旋風』!!」ブラスト

レンは周囲に風が渦巻いて竜巻を放った。

私も準備をすぐに整える。

ルキア「『次の舞 白漣へつぎのまい はくれん』! 『破道の八十

八 飛竜撃賊震天雷砲』! 『破道の九十一 千手せんじゆ咬天汰炮』!せんじゆこうてんたいほう

『氷牙征嵐』!」ひょうがせいらん

私は袖白雪から冷気の雪流れを放ち、雷撃を圧縮した光線を放ち、無数の光の矢を浴びせ、吹雪と暴風を放った。

両者が放った技は激突して私の放った技のほうを押していきレンを飲み込んだ。

その瞬間

ロア「はあくい、そこまでだよ」

今この場で起こっていた全ての戦闘行動が無かったことにされた。

sideロア

邪魔な奴らも雑用連中をぶつけて一護と二人つきりに成れたから話をする。

ロア「一護、ようやく二人で話をできるね。」

一護「そうだな、俺も正直言ってお前と話するのは嫌いではないな。」

一護の言葉を聞いて私は本能が昂って今すぐに一護と子作りしたいって思ったけどなけなしの理性で抑え込んで話をした。

ロア「一護、あなたのために美人な番をいっぱい用意したよ。」

一護「前言撤回、やっぱお前と関わりたくねえな。」

むく、やっぱり一護は手強いなくでもだからこそ、一護の番になりたいんだよ！

一護と色々話をして10分くらいしていたけど探査回路ベスキスで雑用たちの様子を確認してたけどどうも全員押されているから手助けしに行こうかな。

ロア「ごめんね、一護どうも雑用たちが死にそうだから助けてくるね。」

一護「そうかい、じゃあ俺も行こうかね。」

一緒に行きたいけど一護と一緒にいて他の連中にいらぬ心配させたくないから私は瞬間移動で移動してまずは一護と会った時にいた雌が持ってた能力を組み合わせてこの場で起こった今と過去の戦闘行為のみ拒絶した。

ロア「はあ〜い、そこまでだよ〜」

一同『ツ!!?』

レン「ロ、ロア様ご命令を果たせずに申し訳ございません!!」

凍夜「ど、どのような罰でもお与えください!!」

トリス「僕たちはどんな罰でも問題ありません!!」

3人は私の前に来て跪いてそう言ってきた。

うくん、雑用たちって色々やってくれるのはいいけどこういう態度とかが面倒くさいんだよね。それに別に私は命令とか特に言っていないけど... あっ！もしかして

ロア「ごめんね、あれ一護との話を邪魔されなくなかったから他の

やつらを適当にあしらっておいてって意味だったから。勘違いさせてごめんね。」

3人『いえ、滅相もございません!!』

ロア「そうじゃあ帰ろうか。」

私は黒腔ガルガンタを開こうとする

白哉「逃がさん、『破道の七十三 双蓮そうれん蒼火墜そうかつい』」

さつき一護との会話を邪魔してきた雄がなんか青い炎を放ってきたけどそういえばさつきその雌二人が使ってた術でも使ってみようかな？

ロア「え… つと確か『飛竜撃賊震天雷砲』だったかな？」

私は掌を前に出して掌から雷を圧縮した極大のビームを出した。

白哉「なっ!!?」

私の放った術が雄の貧弱な術を破って雄を消し飛ばそうとするが

一護『『飛竜撃賊震天雷砲』』

一護が瞬間移動して私と雑魚共の間に割って入って同じ術で加減して相殺した。

ロア「流石一護!この程度は簡単だもんね♪」

一護「ロア、このまま帰ってくんね?」

一護にそう言われたらおとなしく帰った方がいいね。

ロア「分かったよ、じゃあ、また今度会ったら今度こそ雌雄を決しようね、あとそこにいる雑魚共も少しは強くなった方がいいからね、私の仲間たちの相手にはならないから。」

一護除く一同『…ッ!』

雑魚共は歯を食いしばっているから多分強くなるね。

ロア「じゃあね〜」

私は黒腔ガルガンタを開いて雑用たちと一緒に虚ウエコムンド圏に帰っていった。

side 一護

ロアのやつが白哉たちに『飛竜撃賊震天雷砲』を躊躇なくぶっ放したから俺もそれと同等な上に反転させたものをぶつけて相殺して説得して帰ってくれたが

一護「全員大丈夫… ってわけじゃなさそうだな。」

どうも白哉たちのダメージとかは拒絶していなかったらしくダメージは残っているようだ。

白哉「す、済まぬな兄を巻き込んでしまつて・・・」

一護「それに関してはどうちらかといえれば俺達の問題にあんたらを巻き込んだつて方が正しいからとりあえずルキアともども俺達が使っている拠点に行くぞ、とりあえず怪我の治療とかもしないとな。」

俺は怪我人全員連れて浦原商店の地下に直行した。

ちなみに喜助たちにはもう連絡した。

## 26話：「だから言ったただろう？面倒な状況だつて」

side 一護

ロアの雑用達の戦闘でダメージを受けた白哉たちを浦原商店の地下に瞬間移動で直行した。

一護「とりあえず、まずは回復だな。」

俺は結界で怪我人を囲んで回道を結界に上乘せした。

全員の怪我の治療が終わって全員に調子を聞いた。

一護「とりあえず、けがは治癒したけど体力は回復しきっていないから休んでおいてくれ。」

白哉「・・・済まぬな、何から何まで」

一護「いや、怪我人放置しておく方が罪悪感があるから良いよ。とりあえず、体力が戻ったらルキアの件を穩便に終わらせたいから俺らも無罪を立証する立会人になれないかな？」

白哉「・・・分かった、それにあの虚の情報を兄達けいは一番理解しているからな。通行証を渡しておく。」

一護「ありがとうな。あと俺の従兄妹たちは髭親父に会っておくか？」

海燕「おつ、そうだなあの人にはちよつと話をしておかないといけないからな。」

都「すみませんね、色々してもらって」

一護「良いつて、友人の知り合いが死にかけているのに見捨てる真似したら明日の俺はすつごい後悔するしな。」

海燕「・・・やっぱお前、叔父の子だな。」

一護「よしてくれ、あんな俺や妹たちにウザ絡みしてくる奴と同じなんて。」

海燕「・・・なにっ?!妹もいるのか!!?」

一護「ん?そうだけど。」

海燕「よし!今すぐ行こう!!」

一護「分かったけどあんたらまだ体力が戻っていないからもう少ししたらな。」

海燕「おう！いや、俺にもとうとう可愛い従兄妹が出来たのか？  
んな子たちなんだろ。」

都「あらあら、私にも妹のようなものができましたね。」

白哉「…まったく、兄たちははしやぎ過ぎだ。」

海燕「はっはは、僻みにしか聞こえないな白哉。」

白哉「…よし今すぐ刀を抜け相手をしてやる。」

一護「あんたら、一応怪我人ってこと忘れてない？」

俺は全員を落ち着かせて白哉と恋次はルキアと一緒にルキアの拠  
点で休み、海燕と都さんは俺の家に移動した。

く黒崎家く

一護「ここだぞ」

海燕「病院やっているのかあの人？」

一護「なんか学院で役に立てるのが医療関係だったから病院開いた  
らしいぜ。」

都「そうだったんですか。」

とりあえず、入り口を開けたが即座に真横へ回避する。

海燕「おい、なんで避けr」一心「おつかえつりいいいいいいつち

護おおおおお!!」海燕「ぐほあああああ!!」都「海燕！」一護「：

はあ、やっぱりこうなつたか」

疑問に思った海燕だが髭親父が飛び蹴りしてきてぶつ飛ばされ都  
さんがそれに驚いてそれを見た俺はため息をつきながら目の前の状  
況に呆れ果てている。

一護「おい、親父。客人になにやってんの？」

一心「あれ？一護に当たったと思っただのに違った？それに客人？」

海燕「叔く父く貴く」

一心「…はっ！」

都「叔父様？何をやっておられるのですか？」

一心「…さらば!!」ガシッ!

一護「はいはい、母さんと海燕達に怒られてきなさい。」

俺は逃げようとする髭親父の首根っこを掴んで逃げられないよう  
にする。



一心「お願い一護！離して!!」

一護「とりあえず、積もる話は中で話してくれ。」

海燕「そんじゃじゃまさせてもらうぜ。」

都「おじやましますね」

二人と一緒に俺は親父を引つ張りながら家に入った。

夏梨「一兄いちにいおかえり……。ってなんか一兄が髪を黒く染めてる!!」

遊子「ほんとだお兄ちゃん黒髪も似合っているよ!!」

妹たちは顔がそっくりな海燕を俺と勘違いしているが

真咲「あら、お客さんかしら？」

海燕「あなたが叔父のお袋さんですね、初めまして志波海燕と申します。」

海燕は母さんに挨拶した。

都「初めまして海燕の妻の都みやこです。」

都さんも丁寧に挨拶した。

真咲「あらあの人の親戚の方でしたか、あの人はどこに？」

一護「髭親父はこっちだぞ」

一心「むく！むく！」

俺は親父が逃げられないように簀巻き状態にしておいた。

海燕「よしっ！よくやった!!」

都「では少し、向こうで話をしましょう。」

真咲「じゃあ私も参加してもいいかしら？」

海燕・都「いいっすよ（ですよ）」

海燕と都さんは母さんと一緒に簀巻きにされた親父を引きずってリビングへ説教しにいった。

夏梨「ねえ、あの人って誰？一兄の知り合い？」

一護「あの俺と似た人は俺達の従兄いとこ妹だ、あの女の人は従兄妹の海燕の妻だ。」

遊子「そうなの！お父さんのお説教が終わったらお話してもいいかな？」

一護「いいんじやねえの？海燕達もお前らと会いたがっていたし。」

夏梨「そう？じゃあ私も」

とりあえず、説教が終わるまで俺達は夕食の支度を終わらせた。

「説教が終わるまでキングクリムゾン！」

海燕「いや、君たちが俺の従兄妹達か、可愛いな」

都「そうですね、私たちも子供が出来たらこんな感じなのかしら。」  
髭親父の説教が終わると妹たちを海燕と都さんは盛大に構い倒していた。

夏梨「え、えっと都さん一っいいですか？」

都「何かしら夏梨ちゃん？」

夏梨「えっと……素敵な女性になるにはどうすればいいですか？」

都「え……っとどうしてそんなことを聞くのかしら？」

夏梨「……別に」

夏梨はそっぽを向いて言おうとしなかったが

一心「夏梨！お父さん認めないからね!!あの男のお嫁さんになりたくないなんて!!」

夏梨「言うな！クソ親父!!」

一心「ぐはあ！」

海燕「叔父さんそいつはどこのだいつだ！俺の可愛い従妹いとこを誑かした奴はどこのだいつだ!!」

夏梨は親父がばらしたことで顔を赤くしながら親父を蹴つ飛ばし海燕が倒れた親父を抱きかかえてチャドのことを聞こうと親父を揺さぶっている。

都「そういうことね、そうねまずは運動したり色々勉強して知識を蓄えて他者との協調性を高めたりすることかしら。」

遊子「都さん、王子様みたいな人と結婚するにはどうすればいいですか？」

海燕「叔父さん、もう一人の従妹を誑かしたそいつはどこのだいつなんだ!!」

遊子の言葉に再び海燕は暴走した。

一心「か、夏梨のほうは黒と白の鎧を身に纏って黒の外套を羽織っていたからな。か、顔はわからなかった。遊子のほうは白い服で光の弓を装備していた、マスクと同じ黒の外套を羽織っていて顔とかが分

からなかった。」

海燕「くそおお!!」

一護「カオス過ぎるだろこの状況。」

真面目に收拾がつかなくなってきたこの状況をどうしたらいいか考えていると

ピンポーン

一護「うん? 誰だこんな時間に?」

別に知り合いを呼んだ覚えはなかったが…まさかロアのやつが来たとかだったら面倒なことにならないがそんな気配はしていないが慎重にしよう。

俺は慎重に入り口を開けると

織姫「こんばんわ〜一護君!」

雨「<sup>うるる</sup>こんばんわです、一護さん」

リルカ「こんばんわ一護」

チャド「こんな時間に済まないな。」

雨竜「お邪魔するよ。」

一護「お前らか、ちよつと今面倒なことになっているけど俺の部屋に行ってくれ。」

一同『?』

雨竜達は何言ってるんだ状態になっているが、まあそうなるよな。

全員が家に入って俺の部屋に移動したんだけど、リビングを通過して海燕「叔父さーん!!頼む言ってくれ! ホントは知っているんだろ!! どのどいつなんだ!! そいつは」

親父を揺さぶって叫んでいる海燕、それを見ながらのほほんとして話をしている都さんと母さんと妹たち。

一同『何この状況?』

一護「だから言っただろう? 面倒な状況だつて」  
とりあえず、俺の部屋に移動した。

一護「とりあえず、まず話すべきことはあの二人は死神で従兄妹だ」  
雨竜「従兄妹?」

一護「そうそう、俺に似た男は親父の親戚で女のほうは従兄妹の妻

なんだ。」

織姫「そうなんだ。てことは私達もいずれあの二人の親戚になる日がくるのか？」

雨「いいですね。」

リルカ「そうね」

一護「・・・ノーコメントで」

雨竜「全く何を言っているのか」

チャド「とりあえずあの二人がいるってことはただの親戚に会いに来たとかじゃないんだろ？」

一護「その通りだけどお前らも花梨と遊子と結婚するんだから未来の親戚だぞ？」

雨竜・チャド「ノーコメントで」

一護「実はこの前のルキアの義骸破損が原因でルキアが尸魂界で裏切りの容疑がかけられているからその無罪を証明するために尸魂界に夏休みを利用して行こうかなって思っているんだけどどう思う？」

一同『わかった。同行すればいいんだな（ね）。』

一護「いいのか？」

雨竜「朽木さんは一緒に虚刀虚を倒すために死に物狂いの修行を一緒に乗り越えた戦友だからね。」

チャド「同じ苦しみを知っている者が疑われているならそれを晴らすのが仲間だからな。」

織姫「そうだね、私も手伝うよ。」

雨「そうですね、ルキアさんを助けましょう。」

リルカ「そうね、私も同意見よ！」

全員の合意が取れた所でその日は休んだ。

sideルキア

ルキア「すみません、兄さま、恋次ご迷惑をお掛けして」

白哉「ルキア、お前が謝る必要はない。」

恋次「そうだけ、誤解だつてわかった上に厄介な脅威の情報を集めてくれたんだから問題ねえって。」

ルキア「そ、そうかそれともうじき私が使っている寝床につきます。」

白哉「そうか」

私は使ってる宿についたのだがそう言えばあいつがいたような…

???「ねくえくさくん!!」

ルキア「…せいっ!!」

???「ぐはあ!!」

私は義魂丸が入ったぬいぐるみのコンが突っ込んできたので上段蹴りを叩き込んでぶっ飛ばした。

白哉「…何だ今のは？」

コン「ひどいっすよ！姉さん!!」

ルキア「やかましいぞ、そして今回の原因はおぬしだからな」

コン「何の話っすか!？」

白哉「…今の話を統合するとその義魂丸が何かしらやらかして義骸に攻撃したらこちらでの反応が消えたと…そういうことか？」

ルキア「…その通りです、兄さま」

白哉「…そうか、散れ『千本桜』」

ルキア「落ち着いてください!!兄さま!!コンをシバくのはあとでいいので落ち着いてください。」

白哉「…わかったが貴様、覚悟をしておけ」

コン「ヒイイイイイイ!!」

ルキア「取り合えず休みましょう、恋次、兄さま」

白哉「…迷惑をかける。」

恋次「すまねえ」

私達はとりあえずその日は休んで夜を明ける。

side 一護

とりあえず朝になってルキア達と合流した。

一護「ごめんな、ルキア必ず無罪は証明するからよ。」

ルキア「気にするな、それに無罪の証拠はたくさんあるのでな、おそらく大丈夫だろう。」

白哉「…これが向こうで使う通行証だ、向こうの門番などに見せ

れば通してくれるだろう。」

一護「ありがとうな、とりあえず俺達はそつちに行く準備を整えるから少し遅れるけど間に合うようにするな。」

白哉「・・・そうかできるだけ早くすませておけ」

一護「分かっている。」

海燕「一護！また今度、夏梨ちゃんと遊子ちゃんと遊ばせてくれよ！！」

一護「しつこいぞ！！別にいいけど！」

都「すみませんね、でも私も構いたいですね。」

一護「まあ、都さんは特にやかましくないですけど。」

そう言えばさつきから阿散井恋次が黙って俺を見ているけどどうしたんだろ？

まあそれは後でいいか。

白哉「・・・では尸魂界で待っているぞ黒崎一護。」

一護「ああ、分かっている。」

白哉「私たちは障子のような門、穿界門せんかいもんが出現して通って行った。

最後に恋次が通れば閉まるんだけど

恋次「・・・なあ！あんた！ちよつといいか。」

一護「うん？なに？」

恋次「あんたはルキアをあれだけ強くした修行場所や道具を作ったって言っていたけどホントか！」

一護「そうだけど？なにまた現世に来たら使いたいとかそんなの？」

恋次「・・・ああ、俺は強くなりてえこの前の虚にルキアは一人でも戦えてた。俺はただ朽木隊長の補助しかできなかつた。そんな不甲斐ない自分を変えてえんだ！！」

恋次のその言葉を聞いて思ったことは

一護「なんかルキアと似たようなこと言ってるな。」

恋次「ルキアと？」

一護「そうそう、ルキアも虚刀虚にやられかけたことを気にしていたから死に物狂いで修行してたからな」

恋次「そうだったのか…」

一護「ああ、それにお前は強くなれるよ。」

恋次「… そうだな、お前はあの人間型の虚の女の攻撃を簡単に相殺してたからなそいつが強くなれるっていうんだ、自信にさせてもらうよ。一護」

一護「ああ、そうだな。てか早くいけよ、恋次」

恋次「そうだな、じゃあまたな。」

恋次は急いで穿界門せんかいもんを通って白哉たちについていった。

さて俺達も準備を済ませますか。

side ロア

一護にまた会えて雑用達の実験が終わったから虚圏ウエコムンドに帰ってきて虚夜宮の自室に入った。

元々ここは仲間のおじーちゃんが使ってた住処だったんだけどあの雄に負けて部下になってからはこんな建物になったんだよね。

シルス・レスト「おかえりなさいませ!! ロア様!!」

ロア「うん、ただいまシルスちゃん、レストちゃん。」

出迎えてくれた二人の雌アランカルの破面で付き合いが長い部下で一護の番達だよ!

シルス「ところで雑用達はちゃんと役に立ったんですか?」

レスト「ロア様についていけるなんて羨ましかったですからちゃんと役に立ったんですよね?」

二人は雑用3人に殺気をぶつけている。

レン・凍夜・トリス『…』

3人は跪いて体を小さく震わせている。

ロア「あはは、大丈夫だよ二人とも。その3人はちゃんと雑用としての役割を果たしているから大丈夫だよ。」

シルス・レスト『チツ!!』

ロア「… 二人って雑用達嫌いな何で?」

シルス・レスト『お気になさらず』

ロア「あ、うんわかったよ。」

とりあえず、私達はハリベルちゃん達を巻き込んで修行をして来る

日に一護との決戦に備えて力を蓄えることにした。



27話：「じゃ、すぐ行くから待ってろよ」

side 一護

ソウルソサエテ

俺達は尸魂界に行くためにこの前の徹夜セットを用意して携帯食料なども大量に準備して万が一に備えて準備した。

一護「よし、取り合えず荷物の最終チェックするぞ」

一同『了解』

全員は荷物のチェックをした。

大量の武器、霊具、水と食料、キャンプ用特殊霊具、薬品類、医療器具、着替え、2番隊長買取用の夜一さんの写真集、etc…

よし、問題ないな。

夜一「…なんか嫌な予感がしたのじゃが気のせいかな？」

夜一さんは何か言っているけど気のせいだな。

一護「とりあえず、夜一さんも姿を猫になってついてきてくんね？」

夜一「まあ、白哉坊の妹が無罪なのはわかっておるが上の連中は頭が固い連中が多いからのう。いいじやろう儂も手を貸してやろう。」

一護「ありがとうございます。じゃあ夜一さんの荷物は女性陣が持つて行ってくれ。」

織姫「わかったよ。」

夜一さんの荷物をポーチに入れて、ポーチと同じタイプの4次元リュックサックに入れている。

一護「よし、準備ができたし、喜助も準備はいいか？」

喜助「あつしは尸魂界にはいけないんで皆さんよろしくお願いしますよ。」

一同『了解!!』

俺達は喜助の開いた穿界門せんかいもんを開いて俺達はそれを通って尸魂界に到着した。

一護「さて、まずは門を通って朽木邸に行けばいいのかな？」

俺は通行証があるのでまずは瀟靈廷まで各自高速移動技で移動した。

10分程度でデカイ門番がいるところに到着した。

??? 「おめえら何者だべ？」

一護 「えくと、俺達は許可証があるから門を開いてくれないか？」  
俺は白哉から貰った許可証を門番に見せた。

??? 「なるほどく許可証があるならオデから文句はねえ、今門を開けるからちよつと離れて待っててくれ。」

門番がそう言うってきたので俺達は少し離れたところに移動した。

デカイ門番はその腕力で門を力任せに上げて開いた。

俺達が入ろうとしたら

??? 「おんや、なんで門が開くんや？」

一護 「あ？なにいつてんだちゃんど許可証を見せて正式な方法で入ろうとしているのに文句は言われる筋合いはないぞ？」

??? 「ああ、そうなんかくでも今は瀟靈廷には誰も入れるなつて言われてるさかいねく悪いけど力づくで出てもらうで。」

京都弁で狐の印象を受ける白い羽織を着ている男、市丸ギンは脇差しのような斬魄刀を構えた。

一護 「お前ら！今すぐ門より後ろに下がれ!!俺が戦<sup>や</sup>るっ!!」

一同 『わかった!』

全員が即座に門の外に出た。

ギン 「ええのか全員で戦わんで？」

一護 「全員で戦ったら賊と勘違いされるだろ？お前はそれが目的だろ？」

ギン 「あれま、ばれてもうたか。じゃ戦おか」

一護 「そうかよ、切り裂け『斬月』！」

俺は斬魄刀を解放して出刃包丁のような大刀を構えた。

俺は地を蹴って斬月を振りかぶり上段から振り下ろして斬りかかった。

一護 「はあっ！」ガキンッ!

ギンは脇差しで難なく受け止めた。

ギン 「この威力…一発でも当たったら終わりやな」

一護 「そうかい、でもその短い脇差しじゃ俺に当てるより前にお前

を切り裂けるぜ？」

俺はやつの能力を知っているがどちらかというと実際に見ておきたいというのが本音だ。

ギン「そう思ってるんならそら君の勘違いやで」

ギンはそう言っただけ距離をとった。俺は斬月を盾にしながらかつ込んだ。

ギン「そんじゃ、出たってもらうで。射殺せ『神槍』」

ギンは構えた脇差しのような斬魄刀を解放して刀身が滅茶苦茶高速で伸びて斬月を持った俺を門番もろともぶっ飛ばした。

俺は門番がクツションになってくれてノーダメージで済んだが門番が気絶してしまった。

ギン「バイバイ」

そのままギンは手を振りながら煽ってきたのでいつか一回殴る。

とりあえず、騒ぎを広めるわけにはいかないから手加減しながら戦ったけどこれは原作同様強硬手段で侵入するか？

一護「加減して戦ったけどこれは強硬手段でいくか？」

雨竜「その方がよさそうだね。まさか用意したものが役に立つとは思わなかったけど。」

チャド「仕方がないな、俺の力で壁を破壊して織姫の力で直すでいいか？」

一護「それが一番よさそうだな。」

夜一「いやそれよりもっといい方法があるぞ。」

猫状態の夜一さんがそう言ってきたのでおそらくは花火に乗って突撃するのだと思うので俺達はそれに乗る。

という訳で俺達は流魂街で奇妙なオブジェを探し始めた。

一護「おっ！あれかな？」

夜一「そうじゃ、あれがお前の従兄妹。志波海燕の生家、志波家の花火屋だ。」

一護「一応、貴族なんだよね？」

夜一「まあ、自由は志波家の家風なんじゃよ。」

一護「それは家風で済ませていいのか？」

とりあえず、俺達は家の前まで行った。

金彦<sup>こがねひこ</sup>「おや？海燕様、今日は確か瀟靈廷で仕事があるはずでしたが？」

一護「いや、俺は海燕じゃないから」

夜一「久いのう、金彦そ奴は海燕の甥従兄妹じゃ通してくれんかのう」

金彦「これはこれは夜一様お久しゅうございます。この者が海燕様の従兄妹とはどういうことでしょうか？」

夜一「それは中で話さんか？色々と永いんでの」

金彦「分かりました、では空鶴様は今大事な客人たちとお話ししておりまして少し別室で待ってもらうことになりますますがよろしいでしょうか？」

一護「まだ時間には余裕はありそうだし少しばかりはいいか。みんなもいいか？」

一同『問題ない（よ）（です）』

俺達は屋敷に入つて別室に案内されたが

「どうやら来たようじゃの〜」

「そうじゃーん！ようやくご対面Da・Yo!」

一護「…うん？」

なんかとんでもない大物の声が聞こえてきた気がするが気のせいだよな。

空鶴「そうだな、おいつ！金彦！今来た連中をこっちによこせっ！」

金彦「は、はいつ！という訳で皆様を空鶴様たちがいる部屋に案内しますね。」

一同『わかりました。』

俺達は一際大きめの部屋に案内された。

空鶴「よお、お前が俺達の従兄妹だな。」

一同『…』

俺達は志波空鶴を見て思ったことはこれだ

一同『竜貴（ちゃん）（さん）？』

空鶴「誰だよっそいつ!!」

空鶴はそう言っているがそう言うほど竜貴にそっくりなんだもん。  
あともう一つ言っているか？

一護「そっちの二人は…」

??? ↓和尚「儂か？儂の名は兵主部一兵衛じゃ気軽に和尚と呼んでくれ、よろしくのう」

ダルマのような外見をした巨漢で、坊主頭に顎ヒゲと大きく丸い赤目の瞳など愛嬌のある顔立ち。特徴として巨大な赤色の数珠を首にかけている。「まなこ和尚」の二つ名を持ち特記戦力の一人であり零番隊の頭目が何故？後もう一人、ここにいるのがおかしいのは

??? ↓王悦「ちゃんボクはアイアムアザンパクトークリエイラー。

十・九・八・七・六・五枚、終い（四枚）に三枚、二枚屋Oh—Et su！シクヨロでエ——ス」

ハイテンションでラップ口調でいきなりそんな自己紹介をしてきたド派手な男。全ての斬魄刀の生みの親であり刀神の二つ名を持つ二枚屋王悦なんでこんな大物二人がここにという疑問があるんだけど…

和尚「友人に会いに来ることがそんなに不思議な事か？黒崎一護」

一護「ナチュラルに心読まないで？」

王悦「チャンボクはチャン一の斬魄刀とある刀に興味があつて来たNo Sa」

一護「なんで？」

俺はこの二人がそんな理由でいるわけないと分かっているので自然と警戒度が上がってしまう。

和尚「安心せい、そもそもおぬしが今ここに居るのは儂が原因じゃしの」

一護「… あ？」

俺はその言葉を聞いて俺は自然と自分に閉まってある霊圧が漏れ出た。

和尚と王悦を除く一同『ツ!!?』

和尚「これはこれはもうすでにここまで道を開いているとはのお

」  
王悦「ちゃんボクも彼の斬魄刀が彼に愛されていることをこの霊圧で分かったY O」

二人は暢気なことを言っているがそんなことはどうでもいい。

一護「とりあえず、俺達3人で話をしようか。」パチンツ！

俺は指を鳴らして和尚と王悦の3人以外は入ることも出ることもしかない結界を張った。ちなみに外部から視認不可、防音を完備した結界だ。

一護「これでゆつくりと話ができるな。…で？俺をこの世界のそれもこの体と元々あった魂魄に融合した理由を言ってもらおうか？」  
和尚「そう、カツカするな。じゃがおぬしの気持ちを考えたら話をしなくてもよさそうじゃの。おぬしをその体とその魂魄を融合した理由はの霊王の意志じゃよ。」

一護「理由になっっているようで理由になっっていないな。」

和尚「まあとりあえず今はこれでいいじやろう。残りは霊王宮におぬしが来た時にでも話そうかのう」

和尚は笑ってそう言ってきたのでこれ以上は言っても意味はないだろう。

一護「はあ、それはわかったけどそっちの鍛冶師さんは何の用で来たの？」

王悦「言ったJ a N、ちゃんボクはチャン一の斬魄刀とある刀に用があつて来たつて。」

一護「ある刀… ああ虚刀かあ。」

俺は思い当たる刀を言うと

王悦「S o U、虚・刀！ちゃんボクの作った斬魄刀のパチモンでありながら斬魄刀の上位互換みたいな扱いしてるから訂正しに来たN o S a」

一護「まああれは虚専用装備みたいなものだしそれに斬魄刀の力も底上げできる機能があるんだけど…。」

王悦「そういうことじゃないY O、素の刀でちゃんボクの斬魄刀を上回っていることが気に食わないんだY Oこのままだと斬魄刀が悲

しむんDaYo」

一護「でも喜助のやつが斬魄刀を使った卍解とは異なる強化システム作っていたけど…」

王悦「ヒアウィーゴーレッツパーリータイム!!」

一護「…は?どうした?」

王悦「それなら全然問題ないYoでことでちゃんボクの話はこれで終了DaYo」

王悦は話を終えたので結界を解除しようとする

和尚「そういえばおぬしにこれを授けておこう。」

すると和尚は1冊の本を渡してきた。

一護「何これ?」

和尚「それはおぬしが望んだ斬魄刀や術の情報が記される本じゃおぬしはすでに知っておろうけどそれがあれば怪しむ者もいなくなるじやろう。」

一護「ふくん、まあありがたく貰っておくよ。」

俺は素直に受け取った。

とりあえず、鑑定の霊眼で変な呪いがかかっていないか確認してかかっていてもいなくても解呪しておこう。

そして俺は結界を解除した。

空鶴「…話は終わったか。」

一護「望んだ情報は得られなかったけど必要最低限の情報を得られたから今はこれでいいよ。」

和尚「そりゃよかつたわい、戦いになったら尸魂界は滅んでいるところだったわい。」

一護「流石にそんなレベルで暴れたりしないって」

俺はため息を吐きながら和尚の冗談に突っ込んだ。

一同『…』

一護「…うん?ああお前らごめんな。」

一同『大丈夫だ(だよ)(ですよ)(よ)』

全員は落ち着いてくれたところで本題に入った。

一護「(事情説明中)…」というこで瀨霊廷に突撃したいからあん

たらの花火を使わせてくれね?」

空鶴「そういうことかいぜド派手に打ち上げてやるよ!!」

一護「いつ打ち上げられる?」

空鶴「ちよつと岩鷲が今出ているから少ししたら帰ってくるから待っててくれ」

和尚「では儂らは戻るから打ち上げてくれるかの」

空鶴「あいよ、じゃあ裏庭に行ってくれ。」

和尚「わかった」

和尚たちは空鶴は外に移動した。

一護「とりあえず、ここで待っているか」

雨竜「そうだね、なんかどつと疲れたよ。」

チャド「... そうだな」

織姫「... ねえ、さっきのおじさんが言ってた一護君がここにいるのは自分のせいってどういうこと?」

雨「... お願いします一護さん話してください。」

リルカ「そうよ!話しなさい!!」

俺は和尚のせいで墓場まで持っていくつもりだった隠し事がバレてしまいでこの状況を誤魔化し乗り切れるかを考えていると

雨竜「一護、君は今この状況をどう誤魔化して乗り切ろうかと考えているね。」

一護「...」

雨竜「沈黙は肯定と取らせてもらおうよ。」

雨竜相手に隠し事は無理そうだなでも、多少は誤魔化しますか。

一護「... 加速世界」

俺は観念して加速世界を使った。

一護「今から言うのは俺の根幹とでもいうべきことだから他言は無用だぞ。」

一同『わかった(よ)(りました)(わ)』

それを聞いて原作とか漫画の世界とかは未来を見たとかそんな感じに誤魔化して自分が転生者の類のことを話した。

一護「ということだから俺は織姫達の気持ちに答えようとしなかつ



たんだ。」

雨竜「そういうことだったのか。君が偶につらそうな顔をしていたのはそういうことだったのか。」

チャド「まあ、普通に自分は転生者とか言っても信用されないもんな。そういうことなら仕方がないな。」

一護「… お前らは俺を卑怯者とか言わないのか？」

俺は若干卑屈になりながらそう言った。

雨竜「別にむしろどうしてそんなことを言わないといけないんだ？」

チャド「そうだな、俺達は死後の世界を知っている上に魂は転生するって知っているんだから他にも似たようなことはあるだろ？」

二人は特にそういつた悪感情はなく俺を認めてくれた。…けど女性陣はそうはいかないだろう、なんせそういう目的で近づいたと思われるんだろうな。

織姫「… ねえ一護君、私達がそんなことで裏切るって思っているの？」

一護「… え？」

雨「そうですね、本来の一護さんが何ですか!!私達が好きになったのはあなたなんですよ!!」

リルカ「そうよ! 私達の愛を舐めるんじゃないわよ!! あたしはあなたに救われたから好きになったんでしよう!!!」

一護「…」

織姫達はそう言うってくれるが元の自分がどんな存在だったか知らない上に借り物の力で好き放題しているやつをこれ以上好きになってもいいことなんて何一つとして存在しないだろう。

織姫「一護君、あなたが自分を信じることができなければならいつか自分を信じられるように私達があなたを一人にしないから絶対にあなただを孤独にはさせないからそして一護君には感謝しているんだよ?」

一護「… え?なんで?」

織姫「だつて記憶を無くさずに同じ人を好きな気持ちを失わずに済むってことが分かったんだよ?こんなうれしいことを好きになつた

人が実践しているんだよ？感謝しないなんてありえないでしょ？  
だって私は5回生まれ変わったら5回同じ人を好きになるって決めていたからこれでその誓いを果たせるよ。」

雨「私も同じですよ。」

リルカ「あたしもよ。」

一護「…いい…のか…？…な？…こん…？…な元の自…？…分も知らな…？…い卑怯者の俺…？…がみん…？…など…？…緒にいて…？…もいい…？…のか…？…な？」

一同『いいよ!!』

一護「う…？…ぐあ…？…うわああああああん!!!」

俺はこの世界に転生してから泣くことを頑張って耐えていたがみんなの言葉で感情の防壁が壊れて年甲斐もなく大泣きしてしまった。

織姫「いいよ、泣いて今は泣いて我慢し続けた涙を流して。」

雨「あなたは頑張り過ぎていたんですから少しは自分の本心を私たちに言ってもいいのですよ。」

リルカ「あんたはどうしてこう一人で我慢し続けるのよ。少しはあたしたちにも背負わせなさいよ。」

俺は織姫、雨、リルカの3人に抱きしめられて涙が止まるまで3人に頭を撫でられていた。

〜5分後〜

一護「…すまん情けない所を見せて」

俺は落ち着いたら見つともないとところを見せて恥ずかしくて不貞腐れている。

雨竜「いいさ、むしろ君が抱えていた問題を知れてようやく長年の疑問がはれたよ。」

チャド「正直、俺達にもっと早く言ってくれればいいと思っていたけどこんな話すぐには信じれないからな。仕方がないさ。」

織姫「私達はこれでようやく本当の意味で一護君を私達に意識を向けさせるスタートラインに立ててうれしいよ。」

雨「これであの女と大きく差をつけました！もう偉そうな態度で言われることはありません。」

リルカ「そうよ！今度盛大に煽ってやるわ!!」

リルカ達に言葉で俺はロアのことについてしっかり考えた。

一護（… ああ、だから俺あいつのこと変に意識していたのか。好きじゃなかったらあんなに意識してないわな。）

俺はロアに感じていた感情を理解してロアが好きということが分かったがこれを3人娘に言っても面倒なことにはしかならないので言わないでおこう。

一護（… はあ、もうこの際開き直ってハーレムでもなんでもやってやるか薬も毒も等しく喰らえって某世界最強の生物が言っていたからな。）

俺は覚悟を決めた。もうとことんこの世界を楽しみますか。

一護「みんな！こんな俺でも今後とも仲間であいてくれるか？」

俺はみんなの目を見ながらしつかり言った。

一同『ああ（うん）（ええ）!!』

みんなの言葉を聞いて次に行ったことは

一護「とりあえず、ルキアの無罪を証明しに行こうか？」

一同『あつ』

仲間たちはまさかの目的を忘れていたらしい。

sideルキア

被告人：朽木ルキア

極刑に処す

私は中央四十六室の判断で処刑が決定された。

兄さまもこの判断に納得がいかず、朽木家の権力を使って無罪を主張しているがそれでも状況があまり変わらないらしい。

ルキア（済まぬな一護このままでは私は処刑されるだろう。）

私は友の顔を思い出していると

一護（オーバーオーバーこちら黒崎一護ルキア隊員応答願います。）

… この状況で何をふざけておるのだおぬしは？

一護（おーい反応してくれない？さすがに無反応は困るよ？）

ルキア（聞こえとるわ！このたわけがあ!!）

私は一護の暢気な言葉に苛立ちながら返した。

一護（ごめんごめん。で、そっちの状況はどう？）

ルキア（四十六室の決定で私は極刑になった。）

一護（なるほど、わかった俺達で処刑を止める。）

ルキア（… はああ!?おぬし何を言っておる!!そんなことをすればおぬしたちは旅禍として尸魂界を敵に回すのだぞ!!）

一護（元々、無罪を証明しに来たんだからどっちも一緒だろ？）

ルキア（そういうことd）一護（じゃ、すぐ行くから待ってるよ）

一護は私が言い切る前に思念通話を切ってしまった。

ルキア「… バカ… 者が… たわけが」

私は擦れた声で言った。

28話：「茶でもすすって朗報を待っている!!」

side 一護

俺は天挺空羅てんていくらでルキアに連絡してどうも極刑になったようなので強硬手段に出ることにした。

一護「という訳でルキアの処刑をど派手に阻止しよう。」

雨竜「何がという訳でなのか分からないけど処刑を阻止するのは賛成だ。」

チャド「なら早くしないとな。」

織姫「じゃあ着替えようか。」

雨うる「ですね、謎の黒外套ヒーロー再びです!」

一護「... それ気に入ったのか? 雨」

リルカ「そうらしいわよ、雨って案外そういう趣味あるのよね。」

一護「そ、そうかじゃあ俺の知ってるヒーロー系作品今回の騒動が終わったら見るか?」

雨「是非!」

雨に俺の前世?の特撮作品を能力で見せる約束をして俺達は装備を整えた。

各自外套の下に着る戦闘用の衣類を着てその上に黒外套を羽織った。

俺はガスマスクを思わせる特殊霊具の黒のマスクにゴーグルと変声チョーカーを装着し、

雨竜はマスクとチョーカーと首飾りを装備し、

チャドも無骨なデザインの首飾りとチョーカーを装備した。

3人娘も女怪盗を彷彿とされるマスクとチョーカーと首飾りを装着して

そしてリュックサックを背負って腰にポーチを二つ装備して準備を終えた。

一護「よし、準備が終わったから後は空鶴の準備が終わるまで待ってようぜ」

一同『了解』

俺達は空鶴の準備を待っている

??? 「姉ちゃん！帰ったぜ」

入り口から野太い声が聞こえてきた。

??? 「お？誰だ！お前ら!!」

ガタイのいい筋肉質の大男は俺達を見ると拳を構えた。

一護（… まあこんな格好の連中を見たらそうやるわな）「勘違いさせてしまいません、俺達は客人だ。」

俺はそう言っただけで、俺達は外した。

??? 「？なんだよ！兄ちゃんじゃねえか!!びっくりさせんなよ！」

一護「お生憎俺はあんたの兄ちゃんではないよ、従兄妹の岩鷲。」

岩鷲「従兄妹？何言っただ？姉ちゃんも兄ちゃんも子供いねえぜ？」

空鶴「… へえ岩鷲お前、俺の前でよくそんなこと言えんな？」

岩鷲「… はっ！」

岩鷲は空鶴の女性としての部分を刺激してしまいシバかれた。

岩鷲「と、ところでお前俺のことを従兄妹って言っただけなんだ？」

一護「ああ、それはな」

岩鷲の腫れた顔を回道を使って治療していると岩鷲がさっきの疑問を聞いてきたので答えようとする空鶴が割って入った。

空鶴「岩鷲、そいつは叔父貴の子だ。」

岩鷲「叔父貴の!?なるほどそりや兄ちゃんと顔がそっくりだわな。」

一護「すっげえ、いやな納得のされ方された。」

俺達は親睦を深め終わると脱線していた本題へと戻す。

一護「それで準備は終わった？」

空鶴「俺を誰だと思っただ？キツチリ準備は終わらせたに決まっただろ？あとは岩鷲も乗せて行けば完了だ！」

岩鷲「何だ姉ちゃん？また花火を打ち上げるのか？さっき和尚さんが帰ったのに？」

一護「… え？和尚のおっさんって定期的にここに遊びに来ているのか？」

岩鷲「おう、そうだぜ！つっても来る日はいつも適当なんだよな。」  
マジかよ：：フリーダム過ぎない？あのおっさん。と俺が思うのも無理はない。

一護「まあ、今はそれはどうでもいいからさっさと瀧霊廷にカチコミに行きますか！」

岩鷲「おう！そうだな！：：え？」

空鶴「んじゃさっさと行くぞ！裏庭にこい！！」

岩鷲「ちよ、ちよつと待ってくれよ。姉ちゃん〜！」

岩鷲が叫び声をあげたが俺達はガン無視して裏庭に移動した。

〜裏庭〜

空鶴「そんじゃ、飛ばすから準備はいいな。」

一同『大丈夫だ、問題ない。』

俺達は空鶴の言葉にそう返した。

岩鷲「ちよつと待てよ！なんで瀧霊廷に突撃するとかなくなってんだよ！！」

一護「そりゃ、友達が無罪なのに処刑されようとしているからな。」

雨竜「止めるに決まっているだろう？」

チャド「こればかりはあんたを巻き込んでしまったてすまない。」

織姫「瀧霊廷の結界？みたいなものを通り過ぎたら一護君に転移でここに移動させるから安心してね。」

雨「流星に無関係なあなたを巻き込むわけにはいきませんからね。」  
リルカ「あんたのことは絶対に向こうの連中にバレない様にするから安心しなさい！」

岩鷲「そういうことじゃねえよ！花火で絶対に俺達が関与していることがバレて兄ちゃんに迷惑がかかるだろう！！」

一護「それに関してはさつき思念通話で海燕にこのこと伝えて許可出たから問題ない。」

岩鷲「兄ちゃん！！！！」

岩鷲は悲鳴を上げたがすぐに開き直って

岩鷲「そういうことなら俺も協力させてもらおうぜ！！」

一同『いやいいよ、向こうの結界通り抜けるまででいいから。』

岩鷲「おいつ！そりやないだろ!!」

俺達はわちやあちやしながらでつかい柱に乗った。

空鶴「そんじやいくぜ！」

彼方！赤銅色の強欲が36度の支配を欲している!!72対の幻、13対の角笛、猿の右手が星を掴む、25輪の太陽に抱かれて砂の揺籠は血を流す『花鶴射法二番・拘咲』!」

空鶴の右腕に巻き付いた手ぬぐいが燃え上がりそれを勢いよく地面に叩き込むと炎が円状に燃え広がり砲弾の俺らは一気に上空に吹っ飛ばされた。

一同『うおおおいいいい!!!シートベルトとかない(のか)(の)(ですか)!!』

岩鷲「ははは！なにかは知らないがこれにそんなものあるわけないだろ！」

一同『うおおおおおおお!!!』

俺達は乗り心地に対して文句を言うところ岩鷲は笑いながらそう返した。

しばらくぶっ飛んでいるとようやく軌道が安定したのか横側になって飛んでいるので柱の上で結界を張って作戦等を立てる。

一護「これでよしと！」

雨竜「・・・うつぶ、ま、まさかこんな荒っぽい突撃するとは思わなかったよ。」

チャド「・・・ああ、俺もまだ少し気持ちが悪い。」

織姫「・・・い、一護君が酔い止め薬を作っておいてくれてなかったらヤバかったね。」

雨「そ、そうですね。さすがにこれはきついです。」

リルカ「・・・あやうく、胃がシエイクされて吐くところだったわ。」  
雨竜達は酔い止め薬を飲んでいる。

俺はこの程度の重力に振り回されたくらいじゃ酔うこともないの  
で飲む必要はないが一応飲んでおく。

一護「さてとりあえず俺達がやることはルキアの奪還と処刑の中止  
この二つだな。」



雨竜「十中八九、死神たちが邪魔してくるのは目に見えているね。」  
一護「ああ、だがあくまでも向こうにあまり俺らが悪印象を持たれるのはできる限り避けたい。基本的に不殺を心がけようか。」

チャド「まあ、そうなるか……。俺は異論はない。」

織姫「私もよ。」

雨「私もです。」

リルカ「あたしもよ。」

一護「よし、じゃあ二人一組で別れて行動しよう。」

雨竜「それはまたどうして？… ああ一か所に集中していると全戦力を向けられるからか。」

一護「そういうことだ。てことで組み分けするぜ。俺とリルカ、雨竜と雨、チャドと織姫だ。」

織姫と雨「異議あり!!」

リルカ「良いじゃない、どこに問題があるの?」

織姫と雨「リルカちゃんが羨ましい!!」

織姫と雨の私情全開の異議に俺は答える。

一護「いやね?俺と雨と織姫は高度の回復術があるから一応雨竜も回復術は使えるけど俺らほどじゃないからこの3人は一緒にするわけにはいかないんだよ。」

織姫と雨「うう〜でも〜」

一護「なら夜一さんも俺とリルカと一緒に来るってのはどうだ?」

夜一「儂を巻き込むのはやめてもらってよいか!」

あんた今まで昼寝していた癖になにを言っているの?

織姫と雨「それならいいよ(です)」

チャド「この事件の原因が分かったらそいつを殴る理由が女性陣にもできたな」

雨竜「だね」

織姫「そいつは絶対に拒絶して上げるね」

雨「ですね顔面がはれるまで殴ります。」

一護「こわっ!」

俺は女性二人の怒りのオーラに僅かに怯んだ。

岩鷲「あんたら、少しいいか？」

一護「ん？どうした岩鷲」

俺は岩鷲に呼ばれたので意識をそっちに向ける。

岩鷲「そろそろ継ぎ足さないと落ちるから術式を使うからな。」

一同『わかった（りました）（ったわ）』

岩鷲「それじゃいくぜ！」

かかくしゃほうにばん・つぎのこうじょう

花鶴射法二番・継の口上 三雀の縁 四竜の縁 五方塞がりて六里

還らず、天風・狸々・匙・楡の杖、千灰千智白雲の計、太陰に寄りて  
緋の影を踏まず（…以下略）

岩鷲が継の口上を詠唱を終えて花火を加速させて瀨霊廷の瀨霊壁  
や、霊力を遮断する殺気石せつきせきを超え、その上に張られているの遮魂膜しゃこんまくを  
貫通した瞬間

一護「という訳で岩鷲、あんたの役目はここで終了だ、家に帰って  
くれ。」

岩鷲「おい！ここまで来て帰らせるなよな!!」

一護「これ以上は俺達の領分だ！戻って茶でもすすって朗報を待つ  
ている!!『空間転移』」

俺は転移術で岩鷲を志波家の屋敷に転移して地面との衝突の衝撃  
に備える。

どつごおおおおおん!!!!!!

一護「さて、暴れますか!」

一護一行『おうっ!』

俺達は顔を隠し二人一組十猫一匹で瀨霊廷を突っ走った。

side 死神

総隊長も含めた隊長、副隊長が揃う中総隊長は十三番隊隊長志波海  
燕に言った。

山本「さて、志波海燕何か申し開きはあるかの?」

海燕「はて、何のことでしょうか?」

志波海燕は白々とぼけた。

山本「たわけえ！おぬしの所の花火のせいで瀨霊廷に侵入者を入れ  
よって！どう責任を取るつもりだ!!」

海燕「そもそもそいつらが侵入者って誰が決めたんですか？空鶴がまたノリで作った花火が暴発したとかそんなのでしょう？」

山本「… 全く、口だけは達者じゃの… 仕方がない護廷十三隊の全名に告げる今すぐ瀨靈廷に侵入した連中を排除せよ！」

6・13以外の隊長『了解!!』

6・13番隊以外の隊長たちは瞬歩でその場から消えた。

白哉「総隊長、私はこの処刑には反対ですので失礼します。」

山本「よい、流石にこの処刑がおかしいのは儂でもわかっておる。おそらくその侵入者も今回の不可解な事件の影響でこのような強引な方法で侵入せざるを得なかったのであろう。ギリギリまでは儂も時間を稼ぐのでな。おぬし達も立場を悪くせぬ程度にその侵入者に手を貸してやれ。」

白哉「… 了解しました。失礼します。」

海燕「そんじゃ俺も手伝ってきますよ。」

二人もまた、瞬歩でその場を後にした。

山本「… さて此度の事件の首謀者の目的はどのようなものであれ尸魂界に危害を加えるのであれば容赦はせぬぞ。」

護廷十三隊を統べる最強の死神は悠然とその身に秘める霊圧を放ち姿を見せぬ首謀者に威圧する。

29話：「少しはマシンになったようだな。」

side 一護

瀨霊廷への突撃に成功した俺達は手筈通りに二人一組になって各方向からルキア奪還に向かった。

突入した俺とリルカと夜一さんは高速移動技で高速で屋根の上を走っている。

一護（とりあえず今の所は順調だな。）

リルカ（そうね、でも少なくとも簡単には通してくれないと思うわ。）

夜一（慎重に進むぞ。）

一護（了解、じゃ加速していくぞ!!）

リルカ・夜一（いや、聞きなさい!!）

俺は速度を上げようとしたら

??? 「見くつくけつた〜」

一護・リルカ・夜一『…：… うん?』

俺達は何事かと思いい建物の下を見ると

??? 「つい! つつつい! ついつい! つつつい! てるーん!」

一護・リルカ・夜一『…：…』

なんか変な踊りしているつるつぱげがいた。

一護「何だそのダサイ踊りは?」

??? 「おい! この俺のツキツキの舞のどこがダサイっていうんだ!!」

一護・リルカ「全部!」

??? 「よくし、じゃあ覚悟しやがれ。今すぐ構えろ!」

そう言いつるつぱげは刀を抜刀して構える。

一護（こうなったら仕方がないな、リルカもう片方のおかつぱの相手を頼む。）

リルカ（分かったわ。一護も怪我しないでね。）

一護（分かっている、隊長でもないのに怪我はしないって。）

リルカにそういうとリルカは完現術<sup>アックセル</sup>：加速<sup>セル</sup>で加速しておかつぱに蹴りを叩き込んで俺たちと距離を離れた。

おかつぱ「ッ!」

一護『：これで仲間の助けは借りれないな』(変声チョーカー起動中)

???「へっ!むしろ好都合ってもんよ!てめえ名は何だ?」

一護「俺が敵対組織に正体を明かすとかそんな間抜けに見えるか?」

???↓一角「そうかいならお前は名乗らなくていい、てめえは俺の名だけ覚えておけばいい。俺は更木隊第三席斑目一角だ!てめえを殺す男の名だ!」

つるつぱげの男、一角はそう言いこちらに駆けて鞘で殴り掛かってきたので血装フルトで強化した四肢で受け止めた。鞘を受け止めた瞬間に即座に刀で攻撃してきたがそちらは左手で防いだ。

一角「へっ!やたらとかてえじゃねえか。」

受け止められた瞬間に一角は距離をとって俺にそう言ってきた。

一護「俺が固いのではなくてお前の斬撃が貧弱なだけだろ?」

俺は煽って向こうの戦意を上げさせる。

一角「へっ!言うじゃねえか。だがこの俺の力を見誤るなよ!!延びろ!『鬼灯丸』!!」

一角はそう言って刀の柄と鞘を合わせて斬魄刀を解放した。

解放された鬼灯丸は長い木の棒に刃物が付いた槍といった形状でその実態は槍と三節棍が融合した武器なのだが全始解で最弱の称号を預かっている斬魄刀だ。

理由はあまりにも脆すぎるということが挙げられている、なんせ原作でも休業期間10日の一護に掴まれるだけでひびを入れられたので俺が掴むと多分破壊できるんじゃないだろうか?

一角「はっはあ!」

一角は槍を突き出してくるがゴーグルの機能で一角の卍解の最大威力の攻撃でもない限り俺の衣類さえ切り裂くことができないと出ているのでさっさとルキアを助けるため軽く拳に力を込めて鬼灯丸の刃に合わせて軽めのジャブを放って刃を砕いた。

一角「なッ!」

一護「…なんだ？お前、まだ力を隠しているのか？なら使った方がいいぞお前のその貧相な槍では俺にかすり傷すらつかないぞ？」

一角「…へっ俺が力を隠しているだあ、何言っついていやがる。寝言は寝てから言え！」

一護「それはこちらのセリフだ、俺は心を読むことができてな、それでお前はまだ力を隠していることはわかってる。」

…まあ嘘は言っついていないな。能力を応用すれば心を読むことなんて朝飯前だし。

一角「…もしお前の言っつてることが本当でも俺は使う気はないぜ？」

一護「そうか、だがそんなくだらないものは早々に捨てた方がいいぞ、お前の仕事は俺達の排除。なのに与えられた仕事も満足にこなせないやつが意地を張る資格はないからな。」

一角「…ッ！」

一護「意地を張るっつてことはそれ相応に能力があるやつだから許されるんだよ。能無しの意地ほど無意味なものはない。」

一角「俺が能無しっつて言いたいのか!!」

一護「実際そうだろう？隊長格の実力があるなら兎も角、お前は第三席という中途半端な立場…まあ第三席でも隊長格クラスの力があると云われれば文句はないがお前にそんな力がないのは今の一連の攻防で分かったからな…少なくとも俺の言葉で怒りを覚えるのなら全力で職務を全うして強くなってからにしてもらおうか。幸いと云っつていいのかわからないが今この瞬間は誰も見ていないからな。」

一角「ッ!!まさかてめえ!？」

一護「使えよ、卍解。お前の意地も何もかも打ち砕いて理解させてやるよ。お前のそれは意地ではなくて単なる思い上がりだということ。」

俺は思いつきり悪役のごとき挑発をしたがこの後の破面との全面戦争のことを考えると十三隊の中でも虚刀破面に対抗できる奴って結構数が絞られるんだよね。少しでも戦力が増やせるなら俺は悪役でも何でもやってやるよ。

あと一角の斬魄刀がやたら弱いのは一角が死にたがりの精神性をしているのが原因の一つだと思われえるんだよな。斬魄刀は心を映す鏡、一角の死にたがりな内面が写し取られてあんな脆い感じになっちゃったんだと思われる。だから叛骨精神でもなんでもいいから生きる理由を作つてやれば少しはましになるだろう。

一護「どうした？ビビッて使わないのか？それならほかのマシな奴と戦った方がよさそうだな。これならあのおかつぱのほうがマシだったな。」

俺はもうお前には興味ありませんよ的な態度で一角を煽つて立ち去ろうとすると

一角「… 待てよ、どこ行こうとしていやがる。」

一護「どこつてあのおかつぱと戦いに行こうとしているだけだが？お前のような何もかも中途半端な雑魚を倒してもつまらんからな。」

一角「… いいぜ、お望み通り全力で戦つてやるよ、そんで誰にも言うんじゃねえぞお！」

一護「… ほお、そうかそうかじゃあ見せてくれよ。その卍解つてやつをよ。」

一角「卍つ解!!」

一角は刃のない棒つきれを構えてその解号ワードを言った。

霊圧が爆発的に上がったが虚刀虚の進化する際の霊圧など比べたら1割にも届かないな。

霊圧が収まるとそこには異なる形状の斧が3つ鎖でつながれている斬魄刀を持った一角の姿があった。

一角「『龍紋鬼灯丸』!!」

一護「少しはマシになったようだな。」

観れば龍の掘り込みが最初からMAXになっている。

一角「はっ！敵の言葉で目を覚まされるたあ、情けねえ話だなあ。いいぜ、意地貫くためにもどこまでも強くなってやるよお!!」

先ほどまでの情けない男の中にあつた女々しきはなくなり今は灼熱のごとき熱が宿っている。

一護（これは少し、真面目に相手した方がよさそうだな。）

俺は全身フルート・ツイーネアルデリエに動 静 血 装で強化して受けの構えを取った。

俺のゴーグルから出た解析結果は通常の血装だと砕けないと出たので上位の融合血装を使った。

一角「いくぜえ!!」

一角は左の大剣型の斧で切りかかって来た。

一護「… フツ！」

俺はジャブを放って迎撃して大剣を砕いたがすぐに再生した。

一護（なっ!? 再生能力!!? そんなのこの卍解にはなかったはずだ!!）

一角「すげえだろ!!俺の龍紋鬼灯丸はな、砕かれても即座に修復して修復すればするだけ霊圧と硬度と破壊力が上がっていくのさ!!」

一護（そういうことか、おしゃべりな奴で助かった。）

能力が分かったので俺は一角の懐に入り一撃で意識を刈り取った。

一角「ぐほあああ！」

俺は一角の意識が消える前に一言

一護「お前がまだ悔しいって思っているんならそれを糧に這い上がってこい。次戦うときはもつと強くなってから戦やろうか。」

一角「い… い… ぜ」

そう言って一角は意識を失った。

リルカ「随分と遊んだわね、今は非常事態なのよ?」

一護「リルカ、そっちも終わったのか?」

リルカ「問題ないわ、最初は藤孔雀っていう斬魄刀が4枚刃になるだけかと思っただけ途中で瑠璃色孔雀って能力使われてヒヤツとしたくらいよ。」

リルカからその戦いについて聞き終わると俺達はルキア奪還のために中央の建物に移動を再開した。

side 死神

山本「それで侵入者の旅禍たちはどうなっておる?」

隊員1「はっ!そ、それが十一番隊第三席並びに第五席が意識を失って戦闘不能になっており現在回復中との事」

山本「そうか、おぬしは下がってよい」

隊員1「はっ!失礼します。」



総隊長は報告した隊員を下がらせると思案顔になった。

山本（ふくむ、朽木白夜並びに志波海燕この両名が揃って認める者たちは相応の実力があるのか。）

隊員の話聞く限りでは隊長クラスで無ければ戦うことさえできないだろう、他の平隊員ではまともに戦うことさえできないことは想像に容易い。

現に第3、5席と戦ったもの以外の者たちが遭遇した平隊員たちは一撃で戦いではなく作業のようなものだったという。

??? 「山本総隊長」

山本「うん？ 藍染惣右介、おぬしどうした。」

藍染「いえ、このままでは瀧霊廷の治安に異常をきたしてしまします。ここは狛村第七隊隊長と東仙第九隊隊長をその席次を倒した者たちにぶつけたらどうでしょう？」

山本「そうかわかったではその二人に連絡を入れてくれ」

隊員2「了解しました。」

連絡に行く隊員は瞬歩で即座に移動した。

藍染「では私も行ってきます。総隊長」

山本「そうかいって来い。」

side 一角

一角「… ハッ！ そうか俺負けたのか…。」

俺は青空ではなく医務室の天井を見ているということは俺は負けたのだろう。

一角「… くそお… 悔しいなあ」

俺は口から情けない言葉が出てしまったがそれほどまでに言い訳のしようもないほど完膚なきまでに敗北を植え付けられた。

こっちはすべてを出し切ったのに向こうは手加減も手加減、こっちを殺さないようにしながら戦うまでに余裕があった。

一角「… 一体いつ以来だ。こんなに悔しいって思ったのは？」

俺は記憶をずっと昔まで遡って悔しいと思ったことを探したが見つからなかった。

更木隊長に出会った時でさえ初めて負けたというのに憧れという感情はあれども悔しいとは思えなかった。

一角「… 負けねえ、あいつを倒すのはこの俺だ！」

俺は更木隊長の元で戦い続ける思いは変わらねえ、だがあいつの全力の状態に最初に勝つのは隊長じゃねえ、この俺だ!!

「… よお、こっぴどくやられたようじゃねえか。」

「…???」

いきなり声が聞こえると入り口に大柄な右目に眼帯をつけた大男と小柄な幼女、十一番隊隊長、更木剣八と副隊長草鹿やちるの二名がいた。

一角「… ツ！隊長！すみません負けました。」

更木「それはいい、それよりお前を倒した奴はつええのか？」

一角「… はい、俺が卍解しても奴は全力とは遠くそれどころか俺を殺さないように手加減するほどでした。」

更木「そうか、お前の卍解とも戦<sup>や</sup>り合ってみてえが今はそいつだな。」

一角「隊長、あんたがあの時言った約束を果たすために俺は強くなりますよ。」

俺は隊長にそう言った。

更木「へっ！いい面じゃねえか！そんな時を楽しみにしているぜ!!」

隊長はそう言って副隊長と一緒に部屋を出て行った。

そして俺は体を休めるために今一度眠りに入った。

side 更木

更木「… ふっ、あの一角があそこまで追い詰めておきながら手加減するほどの敵かあどんな奴か楽しみだな。」

やちる「楽しそうだね剣ちゃん」

更木「ああ、久々に最高の斬りあいが出来そうだな。」

やちる「… はやく私を使ってよね」（ボソツ）

更木「ん？なんか言ったかやちる」

やちる「なくんにも言っていないよ、剣ちゃんそれよりも早くいかな

いとその相手違う人が取っちやうよ！」

更木「それもそうだな急ぐぞ！やちる!!」

やちる「うん!!」

この時更木剣八は思いもよらなかった。その相手が生涯にわたって自身の最高の好敵手ライバルになることをまだ知らない。

### 30話：「俺には関係ない」

side 雨竜

僕と雨は襲い来る雑魚共を純粹な格闘術のみで一撃で意識を刈り取りまくりながら進んでいるがここまで順調だと逆に不安だ。

?? 「見つけたヨ、旅禍どモ」

雨竜・雨 「っ!!?」

僕たちは声がした方から即座に距離をとった。

?? 「ふむ、中々の反応だヨ、少しこちらでも警戒度を上げた方がよさそうだね」

奇妙な格好をした男と女性の死神がいるが…？何か雨と似た気配を感じるが、似たような存在か？

?? 「初めまして私は護廷十三隊十二番隊隊長涅マユリと言うよ。よろろ」

雨竜 「『光の雨』 雨 『天光天照』」

僕は神聖滅矢の雨を雨は極太のレーザーを放った。

マユリ 「ちよ」

隊長を名乗っていた男は僕らの放った技に飲み込まれた。

凄まじい衝撃が発生してそれが収まった光景は

マユリ 「お、お前らふ、ふぎけるなよ。」

胴体部分に大穴が空きあちこちに小さな穴が開きまくって息も絶え絶えでポロポロな男がそこにいた。

雨竜 「ふぎけるも何もノコノコ挨拶している敵に攻撃するのは当たり前じゃないか。」

雨 「そうですね、よくそれで喜助さんの後釜を出来ますね。」

マユリ 「…なに？今そっちのやつは何と聞いた？」

雨 「…？、何がですか？」

マユリ 「い、今お前はわ、私がこの世で一番気に入らないやつの後釜とかい、言ったはずだヨ」

雨竜 「僕から言うのもなんだが戻って休んだ方がいいと思うが」

雨 「ですね。」

マユリ「ボロボロにしたやつらが言うんじゃないヨ!!」

???「マユリ様今すぐにお戻りしてください。それ以上は命にかかわります。」

マユリ「お前が私に指図するんじゃない!!ネム!」

雨「うわあ、こういうのをDV親父っていうのでしょうか?喜助さんとは大違いですね。」

マユリ「...!!やはりあの男を知っているのか!!貴様は一体あの男の何なんだ!!」

雨「うくん?娘でしょうか?...いえどちらかと言えばそちらにいる方と似た存在ですかね?」

ネム「私とですか?」

雨はネムと言われた女性と自分が似たような存在と言ったのでやはりさつき感じたのは間違いではないようだ。

マユリ「...ゴハツ!ま、また、またお前は私の先にいるのか浦原喜助!!」

男は何故か血反吐を吐いて地面を叩きつけているがさつきから思ったけどそいつ頑丈過ぎない?

マユリ「...ごふっ!く、業腹だがこれ以上はホントに命にかかわるのでネ、その女は何れ解剖しよう!」

雨竜「悪いが逃がさないよ!」

こいつは危険と判断した僕は矢を放つてとどめを刺しにかかる。マユリ「ごふっ!では御機嫌よう。」

男は液体のようなものになって高速移動して逃げて行った。

雨竜「...なんだったんだ一体?」

雨「さあ?とりあえず先に進みましょう。」

ネム「あの少しよろしいでしょうか?」

雨「... なんですか。」

ネムと呼ばれた女性は雨に話しかけてきた。

ネム「あなたは被造魂魄と言っていましたけど本当ですか?」

雨「まあ、大まかな定義はそれで合っていると思いますよ。私もジン太も。」

ネム「ジン太？」

雨「まあ弟みたいなやつですね。」

ネム「私と似たような方が二人も…ありがとうございます。」

雨「そうですね、じゃあ私達は先を急ぎますね。」

雨はそう言つて先に進むので僕も先に進んだ。

side 一護

一護（なんだ？なんか今出落ちが起こつた気がするが？）

リルカ（何言っているの一護？）

一護（こつちの話だ気にするな。）

俺、リルカ、夜一さんは屋根の上を突つ走つて移動しているがまだ付きそうにない。

とりあえず、近くにある高台のようなものに移動すると

リイイイイイイイイイ

夜聞く虫の羽音が聞こえた。

一護「なんだ？」

リルカ「何かしら？」

夜一「何じゃ？」

???「見つけたぞ賊ども!!」

虚無僧のような鉄笠や手甲を着用し、顔や手を隠している大男がいる、そしてそれに追隨して3人の男が付いてきた。

???「狛村、先走るな。こいつらは生半可に突つ込んでも返り討ちに会うぞ。」

???↓狛村「東仙しかしこの者たちはいきなり瀨霊廷を襲撃するような奴らだぞ！」

???「隊長！落ち着いてください、下手に感情を乱すと敵の思つぽですよ。」

狛村「鉄左衛門… すまんなどうやら儂は少し焦つていたようだ。」  
なんか話がこんでるし不意打ちできるならそうしたほうがいいよね？

一護「賊つて俺達は元々正式に許可を出されてきたから来たのにそつちが力尽くで追い返したから強硬手段を取つたんじゃないか。」

俺は貰った許可証を見せた。

狛村「ぬ、ぬうう！た、確かにそれは通行証ではあるがなぜあんなことをした!!」

一護「一体何の話?」

???「とぼけんじやねえよ!!お前らの仲間のせいでこっちは隊長一人が死んだんだぞ!!」

一護「…は?マジで何の話?」

いきなりそんなこと言われたけど何の話…ってまさか

一護(オーバーこちら一護、雨竜隊員オーバー)

雨竜(なんだ一護、なんか問題発生か?)

一護(なあお前のほうで変な格好をした隊長を名乗ったやつぶっ飛ばした?)

雨竜(ああ、涅とか名乗っていたがそれがどうしたのか?)

一護(…そいつは死んだのか?)

雨竜(いや死んではないが?)

一護(分かった、切るな)

俺は雨竜との通話を切ったが疑問が出来たので向こうに質問した。

一護「…なあ、それはどこで起きた?」

狛村「…何を言っている?五番隊隊舎だが」

一護「ならそれは俺等とは無関係だぞ。俺らはそっちには誰一人として行っていないからな。」

???「何ふざけたことい…」東仙「よせっ!檜佐木!」檜佐木「ですが隊長!」

東仙「この者たちが藍染隊長殺害とは関係がない以上その話を蒸し返すのは逆に問題だ。だが理由がどうあれこのまま我々が帰るのはそれはそれで問題だ。すまないが我々と少し付き合ってもらおう。」

一護「…話ができるやつがいてくれて嬉しいよ。いいよ、戦おうか?」

リルカ(じゃあ私は取り巻きの相手するから一護は隊長二人お願いね。)

一護(了解)

俺とリルカはそうやり取りするとリルカは完現術<sup>アーク</sup>：加速<sup>セル</sup>で移動した。

狛村「鉄左衛門、任せるぞ。」東仙「檜佐木、相手をしてこい。」

射場「分かりました隊長！」檜佐木「…分かりました。」

取り巻き二人も瞬歩で移動した。

一護「じゃ、始めようか？」

俺は動フルート・ヴィーネアルテリエ静血装で全身と強化した。

狛村「…貴公は武器を持たぬのか？」

一護「別に武器があるうがなかるうが俺強いよ？」

東仙「だろいな、お前が倒した席次はおまえは無手で戦っていたと

聞いている。」

一護「無駄話はこれくらいにしていくぞ！」

俺はその言葉を皮切りに地を蹴って東仙要にジャブを放つ。

東仙「ッ!」

東仙は驚愕しながらも刀で受け止める。

狛村「はああ!!」

狛村左陣は受け止めた隙に斬りかかってくる。それを俺は後ろに

蹴りを放って刀を止めた。

東仙「厄介だな、鳴け『鈴虫』」

斬魄刀を解放して超音波を発してきたが俺にはその手の攻撃は効

かないので殴り掛かる。

東仙「やはり通用しないか、ならば『清虫<sup>すずむし</sup>式<sup>しき</sup>・紅飛蝗<sup>べにひこう</sup>』」

東仙要は大量の刃の雨を降らす技を使って攻撃してくるが一つ気

になることを言った。

一護（やはり通用しない、かどうやらこれは確定だな。）

俺は降り注いでくる刃の雨を強化した拳のラッシュで破壊した。

東仙「ッ!?!何という力技だ。」

狛村「まさか、東仙の技を力押しで破るとは…。」

隊長二人は俺の技の突破の仕方に怯んでいる。

一護「どうした？隊長の力はこんなものか？」

俺はそう煽ると



東仙「仕方がない、狛村、私がやる。」

狛村「… わかった、東仙」

狛村はそう言って大きく距離をとった。

東仙「卍解」

その言葉で刀の鐔の輪を10個に増やし、展開して九相図の漢字が1字ずつ書かれている巨大なドーム状の空間を作り出す。

東仙「清虫終式・閻魔蟋蟀」  
すずむしついでしき・えんまごおろぎ

この卍解は空間内にいる者は、視覚、嗅覚、聴覚、霊圧感知能力を完全に遮断され、無明の地獄へと突き落とされる。

一護（面倒な卍解だな…。だが俺には関係ない『空間識覚』）  
くうかんしきかく

俺は聖文字肉 シュリフツthe Body 体の肉体的操作の応用で失った感覚のリソースを触覚に回してそれをさらに研ぎ澄まし、大気の微細振動を捉える事で、幻惑の術の類を無視して広範囲の索敵を行う。周囲の直接触れていないものの姿を捉える事も可能である索敵系の技だがこういうものにはとても有効だ。

一護（これで問題ないな。じゃあ行きますか。）

俺は走って東仙に殴り掛かる。

東仙「なにっ!？」

一護「フツ！」

東仙が驚愕の声を上げるが俺は構わず殴り続ける。

東仙「ぐおおお！」

一護「先ず一人」

俺は右ストレートを叩き込んで気絶させた。

気絶させたことで卍解は解除させたのでもう一人に向けた。

一護「よし残りはあんた一人だけだよ。人狼族」

狛村「… 貴公は儂の秘密を知っているのか。」

一護「… おっ？予想したことを言ってみただけ俺の推理力も捨てたもんじゃないね。」

俺はすでに知っているけど、それっぽく振舞ってみる。

狛村「… そうか、だが貴公は儂のことをそんなに気味悪がっているようには見えないが」

一護「外見そが何か関係あるのか？結局のところ性格が最悪なら意味がないだろう？」

狛村「…そうか、だが貴公が今は儂らの敵としている以上儂も全力で相手をしよう！卍解!!」

狛村左陣は霊圧を高めて解放した。

狛村「『黒繩こくじょう天譴てんげん明王』」

狛村左陣の卍解、自身と連動する巨大な鎧武者、明王を召喚する能力

一護「いいね、そういう分かりやすい力は嫌いじゃねえな！」

狛村「いくぞ！黒くろずくめの者よ！」

一護「うおりやあああ!!!」

明王の大刀を振りかぶり攻撃してきたのでそれを拳で迎え撃った。  
〜10分後〜

俺は久しぶりに満足な真っ向勝負が出来て楽しかった。

俺の目の前には気絶した狛村左陣が倒れている、頭のヘルムが壊れて犬の頭部が見えているがそれは俺には関係ない。

リルカ「終わったかしら？」

一護「ああ、久しぶりに満足がいく真っ向勝負ができた。」

リルカ「それはよかったわ。」

一護「よし、今度こそ進もうk」???「ようやく見つけたぜえ」一

護「…最悪だ」

俺は今聞こえてきた声にうんざりした。

俺は声の聞こえた方を向くと眼帯をつけた大男がいた。

一護「…今度は何だよ。」

???「そんなのは簡単だ、てめえと戦やりに来たんだよ!!」

面倒だが逆に考えればここでこいつを倒せばもう俺達を阻む障害はもうないと言っていいのではないのだろうか。ならば目的遂行のためにもここでこいつを倒す。

一護「いいぜ、相手してやるよ、だけど場所を移すぞ。ここには怪我人がいるからな。」

俺はそう言って気絶している二人を指した。

??? 「…ちっ！しょうがねえな逃げたら承知しねえぞ!!」

一護「分かっているさ更木剣八」

更木「そうかよ、ならいい」

俺達は迷惑にならない所に移動した。

sideチャド

俺と織姫は襲い掛かってくる死神たちを不殺を心がけながら蹴散らして前に進む。

チャド「まだまだ先になりそうだがこのままなら数時間もあれば着きそうだな。」

織姫「そうだね。」

とりあえず、建物を突っ切っていこうとして結構広めの場所に出た。

織姫「とりあえずどこかで休んでおこうか。水分補給とかしておきたいし。」

チャド「ああその方がよさそうだな。」

「やあくやあくようやく見つけたよ。」

「全く緊急事態だからと言って俺も駆り出すな。」

チャド・織姫「ツ!!」

俺達は即座に戦闘態勢に入った。

「まあまあ落ち着きなさいって僕たちは味方だから。」

「すまないね、でも海燕からルキアの処刑を止めたいと言っているから手伝わせてくれないかな？」

チャド「…海燕さんから？分かりましたけど簡単に俺達に手を貸して大丈夫なんですか？」

「今回のに関しては明らかに不自然以外の何物でもないからね。裏で手を引いている黒幕を見つけるためにも君たちの力を借りるのが一番だからね。」

「そういう訳だから、手を貸してくれないかな？」

二人はそう言い協力を申し込んできたので

チャド「…分かりました。俺達もルキアを助けたいので協力してください。」

織姫「そういうことなら手を貸してください。」

??? ↓京楽「こちらこそ僕の名は京楽春水よろしくね。」

??? ↓浮竹「こちらこそよろしくね、俺の名前は浮竹十四郎だ。」

チャド「俺の名前は茶渡泰虎ですよろしくお願いします。」

織姫「わ、私は井上織姫です。」

俺達はルキアの処刑を食い止めるために京楽さん、浮竹さんと一緒に共闘関係になった。

31話「そういうなよ、戦い方なんて人それぞれなんだから」

sideチャド

俺達は浮竹さん達と協力関係になったので水分補給などができる場所に移動して色々互いに情報共有した。

浮竹「…なるほど、この事件の発端はそっちで起こった事故が原因だったのか。」

とりあえず、水分補給などをしながら浮竹さん達に俺達の情報を話した。

京楽「そして、こつちだと四十六室が謎の判断をしてね、僕たちは疑問しかない上に君たちがこのような強硬手段にならざる事態が起こっているということになっている以上四十六室が何らかの事態になっていると僕は予想しているよ。」

チャド「なるほど、洗脳か何かをされているということですか？」  
京楽「断定はできないけど、それが一番可能性がありそうだね。」

俺達はお互いの情報を合わせて精査した結果四十六室と呼ばれる行政機関が洗脳の類をされているという結論に至った。

織姫「うん、…うん、わかったよ、とりあえず後で集合場所を連絡するよ。」

織姫は雨竜達に連絡は終わったようだ。

浮竹「仲間たちへの連絡は終わったかい？」

織姫「いえ、もう一組いるんですけどとりあえず片方とは合流しようって連絡しました。」

浮竹「わかった、それじゃ合流場所に関してだけど…」  
次に雨竜達との合流場所に関して話をする。

織姫「…わかりました、じゃあすぐに連絡しますね。」

浮竹「ああ、早めに合流してこの事件を解決しよう。」  
チャド「ええ」 織姫「はい」

合流場所が決まり雨竜達に連絡を入れて移動した。

（20分後）

雨竜「チャド、織姫さん無事のようだね。」

チャド「ああ、そっちも平気そうだな。」

雨「途中、隊長を名乗る変な格好したDV野郎をぶっ飛ばしましたけど。」

京楽「・・・変な格好？ああ涅隊長か、大方暢気に喋っているところを一気に攻撃されて倒されたとかそんな感じかな。」

雨竜・雨「そうですね、大体そんな感じですよ。」

浮竹「凄いなキミたち、それで残りの仲間には連絡出来たかい？」

織姫「それがなぜか連絡がつかないんですよ・・・なんか電波だが霊波が滅茶苦茶乱れている感じでつながらないんですよ。」

京楽「・・・捕まったとかそんな感じかな？」

一同『一護達に限ってそれはないので大丈夫です。』

浮竹・京楽「「そ、そうかい」」

俺達は即答したので浮竹さんが少し引いた感じになってしまったがそれほどまでにあり得ない可能性だった。

すると

ザー・・・ザー・・・ザザザアアア

織姫「・・・あれ、リルカちゃんからの回線がつながっている？」

リルカ『・・・姫・・・織・・・織姫!!』

織姫「リルカちゃん良かった！漸く繋がったよ!!」

リルカ「ごめ」ドゴーン「くたばりやがれええええええ」「はっ！すげえな！だがお前の力はそんなもんじゃねえだろ!!」「ズバーン」「まだまだ上げるぞついてこい!!」「誰に物言ってやがる!!」「リルカ「ちよつとあなた達あたしたちまで巻き込まないで!!」

・・・なんか連絡機から場違いな会話が聞こえてくる。

織姫「え、えくとリルカちゃん今どうなっているの？」

リルカ「聞いているの通り、一護の加速結界で一護と更木剣八ってやつが戦闘中なのよ。」

京楽・浮竹「「何?」」

リルカの連絡で浮竹さん達が驚いた声を上げる。

チャド「どうしたんですか？そんなに驚いて？」

浮竹「・・・更木はな、超が付くほどの戦闘狂なんだ」

京楽「・・・この非常時に彼はまたなのか。」

チャド「でも加速結界使っているっほいからそんなに時間が経たずに終わりますよ？」

雨竜「そうですね、向こうから連絡が来るまでこつちでいろいろ調べ物をしましょうか。」

京楽「君たちが良いならそれでいいけどホントにいいのかい？」

一同『大丈夫です。』

浮竹「わかった、じゃあ時間が惜しいしすぐにでも行こうか。」

一同『了解です。』

俺達は一護を待つのは時間がないので向こうから連絡が来るまでの間に調べものなどをするために中央の建物に急いだ。

side 一護

移動して人の迷惑にならない所に移動した俺達は互いに対峙している。

更木「・・・その僅かな動作でめえの強さがよくわかるぜ、最初から全力でいった方がいいな。」

更木はそう言っただけで眼帯を外した。すると爆発的な霊圧が放たれた。

・・・ すごい感じる圧がこの時点でロアと同じくらいあるなんてな。単純な戦闘力は俺達の領域に迫っているな。

一護「そうかい、じゃあ存分に楽しんでくれよな」パチンツ!!

俺はそう言っただけで加速結界を張って外套などを外した。

更木「：へえ、正体を明かすってことは全力で戦うってことか？」

一護「だって、お前の相手は全力を出す可能性があるっていうのに外套類が邪魔なんだから。それに問答はこれくらいにしようぜ。」

俺はそう言っただけで全身を強化して死覇装と二本の斬魄刀を出現させて抜刀した。

更木「それもそうだな、それじゃ始めようぜ！」

更木はそう言っただけで刀を抜いて爆速で切りかかってきた。

俺はそれを脇差しで受け止める。

そしてすぐさま刀で切りかかるが更木は即座に刀を引いて斬撃を受け止める。

更木「オラア!!」

更木は手刀も織り交ぜて一撃必殺を体現するかの如く急所を狙ってくるので焦らずに俺も更木の攻撃に対処する。

更木「ハッ!はあ!やっぱり俺の予想通りでめえは最高だな!!」

一護「奇遇だな、俺もだ!」

今度は俺のほうから斬りかかる、いつもの3歩法合わせ技で加速して刀と脇差しの二刀を使い攻撃する。

脇差しをメインとした手数で更木の隙を作り隙が出来た瞬間に即座に刀で切りかかるが更木もそれを本能で理解しているのか明確な隙を作らないでいた。

一護(そうだよな、普通はこうなるのが自然だよな。… ホント俺つてぶっ飛んだ力を持っていたんだな。)

今までは力のごり押しばかりで格下を蹴散らすしかなかったが口ア然り更木然り同格との戦いつてというのはこうも己を成長させてくれるもんだと理解した。

一護(… さて、加速結界のおかげで時間は特に気にする必要はないがさつさと倒すことには変わりないので遊ばずに倒すか。)

一護「『重撃白雷』」

俺は刀で攻撃しながら脇差しから赤い光線を放つ。

更木「チッ!めんどくせえな」

一護「そういうだよ、戦い方なんて人それぞれなんだから。」

更木「まあ、それはその通りだな。」

更木は更に剣速を上げながら首に攻撃したが俺は刀で防ぎながら脇差しで刺突を繰り返す。

更木は俺の手を掴んで投げるが俺はすぐさま受け身を取って着地して地面に『赤火砲』を放って更木の体勢が崩れて掴んでいた手が緩んだので即座に脱した。

一護「… 今のはヒヤッとしたな。」

更木「俺もここまで戦いが長くできる相手がいることが最高だぜ。」



一護「そうかい、そうかい。ならもつと楽しもうか!!」

更木「当たり前だ!!」

俺達は再び激突した。

↳加速結界内で2日後↳

まさかの2日間も戦いになるとは思わなかったが特に疲れるということもなくあまりにも同格との戦いが楽しいあまり互いが互いの長所を取り込んでお互いが現在進行形で強くなっているのだからというタイミングで一気に勝負を仕掛けないといけないというのが互いが今考えていることだ。

一護「流石だな、剣八!」

更木「ああ、そうだなとお前の名前は何だ?」

一護「一護、黒崎一護だ。更木剣八!」

更木「そうか一護!さあもつと戦おうぜ!!」

一護「ああ!」

俺達はそう言って再び地を蹴ったが更木はこの2日間の戦闘で俺の瞬歩を見て無意識に模倣して体得したので俺と高速戦闘にシフトした。

まるで某戦闘民族漫画じみた高速戦闘になっているがまあそれはどうでもいいだろう。

剣筋も元々の獣じみた太刀筋だったのが元の面影がすっかり残りつつも俺の剣術を取り入れて剣八らしくも流麗な剣術に昇華されている。

かくいう俺も剣八の戦い方を取り入れて俺の戦い方がメインでありながら獣じみた戦い方が組み込まれたので油断したところで一撃必殺の攻撃を叩き込むといった感じになっている。

一護「随分と戦い方が変わったな!!」

更木「人のこと言えんのか!!」

俺達は軽口を叩きながら剣速を加速した。

俺は鬼道を剣術、剣技、白打の攻撃に織り交ぜながら剣八にダメージを蓄積させる。

剣八も俺の剣技等を自分に合わせて放ってきてダメージを与える

が聖文字シュリフトと回道の組み合わせたゾンビ戦法でじわじわと剣八が徐々に押され始めた。

一護「どうした！もうへばったか!!」

更木「抜かせ！」

剣八はそう吼え剣速を加速してくるが今の剣八の攻撃力ではダメージを与えられない。

一護（よし!!このまま押し切る。）

俺はこのゾンビ戦法で明確にダメージを蓄積していく。

side 剣八

俺は一角を倒した奴を見つけて戦おうとしたが向こうは怪我人を巻き込みたくないとか言って場所を移したが俺の予想通り戦いが始まるとあいつは俺の想像を上回る強さで戦いをしてきたので今まで眠らせていた力も引き出して戦いが長引いたが向こうはダメージを与えても与えてもすぐに治ってくるので徐々に俺が押され始めてたので今まで感じたことのない焦りを覚えた。

更木（クソツ！このままだと負けちまうな、ふざけんなよ！まだ戦い足りねえっての!!こんなあの時以来の戦いをこんな簡単に終わってたまるかってんだ!!）

俺は今まで無意識に抑え込んでいる力を引きずり出して戦って少しでもこの戦いを長引かせようとしたときに奇妙な声が聞こえた。

???（・・・ 剣八・・・ 更木の剣八）

更木「誰だ！邪魔すんじゃねえ！」

俺は最高の戦いを邪魔してくる声に文句を言った。

???（・・・ ようやく届いたのですね、私の声が、お前を、誰よりも長く、誰よりも近くで、ずっと見てきた 私の声が、初めまして 更木 剣八）

更木「おいっ！今すぐ出て来い!!」

???（出てくるも何も私はもうあなたが握っているではないですか。）  
更木「ああ!!握っているだあ!!」

俺は自分の手を見てみるとそこには斬魄刀があるだけだ・・・ まさか

更木「てめえ、まさか俺の斬魄刀か？」

???（ええ、ようやく私の声が届けることができたので伝えましょう私の名を）

更木「名前？たしか始解つつうやつか？それがあれば奴とまだまだ戦えるのか？」

???（私の力を引き出すのはあなたですよ。更木剣八、では伝えましょう。私の名は『野晒』<sup>のやらし</sup>です。さあその力を存分に発揮しなさい。）  
そう言っつてその声は聞こえなくなったが俺は笑みを浮かべた。

更木（はっ！今の声なんだっついい。これであいつとまだ戦える！）

俺は今聞こえた声と言った名を言う

更木「呑め『野晒』！」

俺は斬魄刀を解放した。

side 一護

剣八が急に霊圧をさらに引き上げると突然

更木「呑め『野晒』！」

解号を言い名を言うことで斬魄刀を解放して超巨大な戦斧になった。

更木「これでまだまだ楽しめるな！一護お！」

一護「ふふふ、まさかこの土壇場でその力を引き出したか、いいぜこれは俺も全力で戦っつてやるよ！『斬月』『万華鏡』！」

俺は笑みが零れながらも全力で相手をするため二刀の斬魄刀を解放して二刀を構える。

一護「いくぜ！『月牙十字衝』！」

俺は斬月の力を模倣した万華鏡を横に一閃してその後、斬月を一閃して十字の斬撃を飛ばした。

超巨大な斬撃が剣八を襲うが

更木「あめえよお!!」

剣八は戦斧で力任せに破壊した。

一護「分かっているよ！」

俺は月牙十字衝をブラインドにすることで野晒の力が最大限発揮

しきれない距離に踏み込んで二刀を振ろうとしたが

更木「あめえって言っただろお!!」

剣八はそう言いながら戦斧の刀身を掴んで間合いを調整した。

一護「チッ!」

俺は即座に二刀を使い防御した。

一護「はっ!中々、味な真似すんじゃないやねえか!そんな力任せな方法でその戦斧の弱点を埋めてくるとはな!」

更木「まあこいつはデカさと硬さが売りだからな、だがこのデカさをどう使うかを考えたらこうなったのさ!!」

剣八はそう言って戦斧を横薙ぎに振るってきたが俺は跳んで回避して斬月を振るって斬撃を飛ばした。

剣八は一瞬戦斧を手放して身軽になり斬撃を回避してすぐさま戦斧を掴んで斬りかかってくる。

俺は即座に戦斧の側面を蹴って斬撃を逸らしたが剣八は筋力に任せて薙ぎ払って俺をぶっ飛ばした。

一護「ぐうつ?!」

更木「ようやくまともに攻撃が通ったな!!」

だが俺は即座に肉体を再生して剣八に切りかかる!

一護「『炎虎』!!」

俺は万華鏡で流刃若火を再現して炎の虎を飛ばして、俺はその後ろから斬月を大きく振りかぶり剣八に咬みつくかのように斬りつける。

更木「そうこなくちやな!!おらあ!」

剣八はそう言って戦斧を振るい、炎虎を薙ぎ払って筋力にもものを言わせて強引に切り返してきた。

ドツガガガアアアアアアアアアア!!!

斬月と戦斧の衝突で凄まじい衝撃が両者に襲い掛かった。

剣八「うおお!!」

一護「ぐおお!!」

俺達は壁にたたきつけられるかのようにぶっ飛んだ。

一護「痛ってえ...」

更木「くはは!ここまで楽しいのは今までで初めてだ!さあまだま



更木「抜かせっ、次は全力を出させてやるよ。」

一護「じゃあ今度は卍解を使いこなして来いよ。」

更木「ああ、次は俺が勝つ。」

一護「それこそ抜かしなよ、今度も俺が勝つ。」

俺はそう言っ立ち去ろうとする

???「剣ちやくん！」リルカ「一護く！」

一護「どうやらお互い迎えが来たから俺は行くぜ。」

俺はそう言っリルカとルキア奪還のため移動を再開した。

side 剣八

やちる「剣ちやん大丈夫？」

更木「大丈夫なわけねえだろうがあ。」

体がおもてえが俺は久々に忘れていた物を思い出していた。

更木「次は負けねえ、今度は絶対俺が勝つ！」

そして俺はあいつに勝つという明確な目標が出来た。

やちる「良かったね、剣ちやん！」

更木「何言ってんだ、お前も一緒にだろ？」

やちる「え？」

更木「お前、俺の斬魄刀だろ？やちる。」

やちる「… あはは、バレちゃった？」

更木「野晒を使っていて何故かいつも使い慣れた感じがしたんだがお

前と一緒にいるのと同じだったんだよ。」

やちる「… そうだよ、私が剣ちやんの卍解だよ。でも剣ちやんが

私を使うと私はまた刀に戻っちゃうけど。」

更木「そんなの、技術開発局のやつらにつくらせりやいいだろ。い

いか、今度は俺たち二人であいつを倒すぞ！やちるう!!」

やちる「うん!!」

### 32話：「謝罪なんて言うなよ」

side 一護

俺は剣八との最高の戦いの余熱を走りながら取り除き目的の場所に到着した。

一護「えつと、ここでいいんだっけ？」

俺は織姫達から聞いた場所に来たが肝心の織姫達がない。

リルカ「さつき連絡が来たんだけど、どうも移動したらしいわよ、あと面倒なことに処刑時刻が早まったらしくてもう残りの隊長が双極の丘って所に移動したって。」

一護「待て待ていくらなんでも早すぎる!!」

明らかにいろんなことがすつ飛ばしているじゃねえか!!

リルカ「とりあえず、京楽さんと白哉さんと海燕さんは向こうで時間をできるだけ稼いでいるらしいわ。で浮竹さんと織姫達は原因を探しているからあたしたちは処刑を急いで止めにくわよ!」

リルカの言葉で俺は意識を切り替える

一護「ああ、だがこのままだと間に合いそうにないな... 空間転移しようにも俺行ったことない場所はさすがに無理だぞ。」

夜一「それならいい方法があるぞ。」

と今まで完全に空気だった夜一さんが人間の姿でそう言ってきた。

一護「なに?ここからすぐにその処刑場がある丘まで行ける方法あるの?」

確か原作だと、天賜兵装だったかなを使い行っていたがこの場所からだと取りに行くのに時間がかかってしまうと思っていたが

夜一「一護、おぬしの能力で儂と一緒に天賜兵装を取りに行くぞ。」

一護「俺を雑用に使うのやめてくれませんか?」

まさかの俺頼りかよ、まあ今は緊急事態だから別にいいけど。

一護「了解です、じゃあ行きますよ。」

夜一「うむ」

俺は夜一さんの記憶を読み取って夜一さんの実家が管理している天賜兵装のある場所まで直行した。

〈天賜兵装倉庫〉

夜一「ここじゃ、相変わらず便利な男よな。」

一護「俺は便利道具じゃないですよ。」

リルカ「まあ良いじゃない、でどれを持っていくの?」

夜一「名は忘れてしもおたが能力は覚えておるぞ、その外套とこの紐のついた盾のような物じゃ」

一護「これか?」

夜一「そうじゃ」

確かこのマントの名前は天踏絢っていつて空を飛ぶ力があるやつだ。

こつちは双極の機能を停止するやつだったはずだ。

一護「さくって早速黒幕の野望を打ち砕くか。」

俺はマントを羽織り……元々黒外套着ていたのにさらにマントを着るとかどうなんだろうか?……まあいいか。

一護「夜一さん、双極の丘ってどっちだっけ?」

夜一「それはの……」

俺は夜一さんから場所を聞いて俺が先行した。

sideルキア

結局処刑の時間が急遽早まり私は処刑間際までにやってしまった。

兄様たちは私の無罪を主張しているが総隊長は上の指示が変わらぬ以上処刑しなければならぬと言っているのでこのままだと私は死ぬだろう。

ルキア（済まぬな一護……）

私は友に心で謝罪を言ったが

一護「謝罪なんて言うなよ、お前は悪いこと一つもしていないんだし。」

ルキア「……え?」

私は聞き覚えのある声が聞こえると三日月の雨が降り注いだ。

隊長たち『ツ!?!』

私を拘束していたところのみ破壊して残りは威嚇目的に放ったよ  
うだ。



一護「よっ！来たぜ！」

ルキア「遅いわ！たわけえ!!」

一護はあの時着ていた黒い外套を羽織っていたが口調ですぐに分かった。

…だが一ついいか？

ルキア「…一護よ、何故おぬしは外套の上に外套を着ている？」

一護「霊圧遮断の外套と併用した結果こうなったただけだ。気にするな。」

ルキア「そ、そうか」

私はなにか釈然としないが一護はなぜか私を振りかぶった…え？

一護「恋次!!!」

何と一護は躊躇なく私を恋次に投げ飛ばした。

ルキア「おおおおおおわああああああああ!!!!!!」

恋次「おおいいいいいいいいい!!!!!!お、お前何してんだああああ!!!!!!」

恋次はそう叫びながら私を受け止めたが恋次は一護に文句を言っている…うん、私もそう思う。

一護「恋次、早くルキア連れて逃げろ!!死んでも離すんじゃねえよ!!」

恋次「!分かったぜ!!」

恋次はそう言いながら私を抱いてその場から逃げた。

side 一護

どうやら処刑前に間に合ったらしく俺は斬月の能力の三日月の刃でルキアの拘束具のみを破壊して残りは他のやつらに当たらないようにして威嚇した。

そしてルキアと少し話をして恋次にルキアを投げつけた。

一護「恋次!!!」

ルキア「おおおおおおわああああああああ!!!!!!」

恋次「おおいいいいいいい!!!!!!お、お前何してんだああああ!!!!!!」

恋次は文句を言っているが俺はそんなことを気にせずにあの言葉を言う。

一護「恋次、早くルキア連れて逃げろ!!死んでも離すんじゃないよ!!」

恋次「!分かったぜ!!」

恋次はそう言いながらルキアを抱いてその場から逃げた。

???「逃がすな!追え!!」

なんかやたら小柄な女が指示を出している。させるかってんだ。

俺は瞬歩で恋次たちと追手の副隊長達の間に入った。

そして俺は斬魄刀を地面に差した。

???「穿て『巖靈丸』」

銀髪の老人は斬魄刀を解放して刀から細剣に変化して刀身から雷を帯電させている。

???「ぶっ潰せ!『五形頭』!」

結構大柄な男は刀の刀身がモーニングスターに変化させた。

???「面を上げる『侘助』!」

片目が髪で隠れている男は刀身が7の字に変化した。

???「奔れ!『凍雲』」

背の高い女は刀身が3つに増えた。

???「弾け!『飛梅』!」

シニョンの髪型の女は刀身を所謂七支刀の様な形状に変化した。

え...っと、追手にいる副隊長は1、2、3、4、5番隊だな。

...あれ?3、5番隊の副隊長って謹慎中じゃなかったっけ?

まあ、こいつらなら強化した徒手空拳で十分に気絶できるだろう。

そう思ってたら

ユ(いかん、あのレイピアとデカイ女は不味い。今すぐに一護の秘めた力を解放する。)

ホワイト(大丈夫なのか!!?今の一護でも解放度5%でもきついんだぞ!?)

ギョク(そうですよ!!それにあの二人のどこが危険なんですか!!)ユ(レイピア持ちは死体に紛れて背後から不意打ちしてくるほどの

キチガイだ、デカイ女はというよりあの女の上司はさつき一護が戦った剣八の名を作った女の部下だから危険じゃないはずがない。」

ホ・ギョ（なるほど、じゃあ解放しよう!!）

なんか中の人達がやらかしそうな気配がするが気にする必要はないな。

俺は瞬歩で距離を詰めて大柄な男をモーニングスターを破壊して気絶させた。

即座にレイピア持ちを顎を蹴り上げて気絶させた。

片目が隠れた男は俺の動きが止まった瞬間に切りつけたが特に何ともなかったので腹に掌底を叩き込んで気絶させた。・・・？なんか威力が倍な気がするが気のせいか。・・・まあ、死んではいけないから良いが。

??? 「そ、そんな斬魄刀も使わずに・・・」

デカ女はなんか言っているがこちらでも距離を即座に詰めて気絶させた。

さて残りは一人だな、あとはこの女を気絶させて終いだな。

??? 「・・・たし・・・が・・・ない・・・」

一護 「・・・？何だ、よく聞こえないが？」

俺は小声で良く聞こえなかったから聞き返した。

??? 「何・・・言っているんですか？藍染隊長を殺しておいて!!」

一護 「・・・はあ？何言ってるんだお前。俺は隊長どころか隊員の一人も殺していないが」

??? 「嘘よ・・・藍染隊長にさつきあなたが放った三日月の刃が刺さっていたんだもん・・・」

女は泣きながら震える手で刀を握りながらそう言った。

一護（あくこの前の虚刀虚軍団襲撃で斬月の能力を見せたからな。それを利用されたか。）

藍染のアドリブ能力は厄介だな、柔軟な対応と云えばいいのか？

一護 「悪いが俺は無関係だから倒させてもらうよ。」

??? 「信じられない！、あなたをこころd」一護 「おやすみ」

俺は背後に回って首に手刀を打ち込む。

上手く威力を調整して気絶させた。

一護（… どうやら夜一さんがあの小柄な女の相手をしてくれているようだな。）

俺は感知能力で夜一さん達の状態を確認した。

side 夜一

俺は先行した一護の後を弟子の一人のリルカと一緒に追った。

リルカ「あくもおく一護、速過ぎよ！」

夜一「そういうな、リルカよ。一護の使っているのは天賜兵装じゃからの。」

リルカ「さつきから思ったんだけど天賜兵装ってなんなの？」

夜一「なんでも、世界を作った神から賜った物らしいぞ。」

リルカ「ふくんそうなんだ、でも一護だったら作れそうね。」

夜一「ハハハ、いくら何でもあやつでもそんなことできぬよ。」

いくら一護の才能が飛びぬけても人間が神を超えることはないからの。

俺らは軽口を叩きながらも速度を上げて双極の丘が見えると小柄な少女が一護に敵意を向けておるので捕まえて別の場所まで連れて行った。

夜一「久しぶりじやの、碎蜂」

俺は元部下だったものに言った。

碎蜂「… 四楓院夜一、貴様よくもココノ顔を見せたものだな。」

… 今の俺は四楓院ではないのじやがまあそれをわざわざ言うことでもないしの、このまま話を進めるかの

夜一「まあ積もる話もあるじやろうが今はこの馬鹿騒動を終わらせてからにするかのう。」

俺はそう言って碎蜂をここで足止めをするのが一番じやろう、下手に隊長格と戦って怪我人を出すよりそれが最善の選択のはずじやと判断した。

碎蜂「ふざけたことを旅禍に肩入れをするなど言語道断だぞ！今ここで倒す!!」

碎蜂がそう言つて腰に吊るしてある斬魄刀を抜刀した、すると私とリルカの周りに隠密機動の隊員たちに囲まれた。

碎蜂「貴様は知っているはずだ、刑軍軍団長の抜刀は処刑演武の開始を表す。」

碎蜂がそう言ったが

夜一「リルカ」

リルカ「分かったわ」

儂が一言そう言うのとリルカも儂の言いたいことを理解して即座に周りにいた隊員たちを瞬時に気絶させた。

碎蜂「なっ!？」

リルカ「こんなものかしらね」

リルカが即時に隊員たちを制圧したことでさすがの碎蜂も驚愕した。

夜一「流石じゃの」

リルカ「流石にこんな雑魚たちに苦戦してたら虚刀虚の相手なんてできないわよ。」

リルカはそう言っておるがまあこれはこやつらが経験してきた事態が異常なだけじゃの。

碎蜂「・・・ギリッ

碎蜂は儂らを見て死覇装の腕部分を引きちぎり始めた。

そして隊長羽織を脱ぐと懐かしい出で立ちになった。

夜一「刑軍統括軍団長刑戦装束か、懐かしい姿じゃのう。」

碎蜂「貴様と私、どちらが優れた戦士であるか理解<sup>わか</sup>らせてやる!!」  
そう言い、碎蜂が瞬歩で加速したが一護と出会う前の錆がついていたころの儂では少し苦戦したかもしれないが儂はそう思いながらも瞬歩で碎蜂の背後を取った。

夜一「遅いのう」

碎蜂「なっ!？」

碎蜂は驚愕の顔をしたが即座に儂と距離をとった。

碎蜂「馬鹿な、貴様は100年余り実践から離れていた、なのにどういうことだ。」

夜一「まあ、儂の鍛えた弟子たちに簡単に負けるにはいかぬのでな。死に物狂いで鍛え直したにすぎぬ。」

偶に喜助の実験に付き合ったりして新しい力を手に入れたりしたが基本的には己の得意分野を伸ばしたりしたな。

碎蜂「…ふざけるな…そんなことは認めない!! 尽敵整殺『雀蜂』!!」

碎蜂はそう言って斬魄刀を解放して瞬間を使ったがまだ瞬間のほうは未完成のようじゃのう。

碎蜂「どうだ!これが私の奥の手だ!鬼道と白打の融合した物だ、まだ名前は無いがな!!」

夜一「碎蜂、それは瞬間と言った物での、高密度に練った鬼道を背中と両肩に纏わせて打撃の瞬間に炸裂することで打撃の威力を上げる隠密機動に伝わる奥義だ。そしてその軍団長の刑戦装束はその技を使うことを前提とした作りになっておるのじゃ。」

儂はそう言って瞬間を使った。

碎蜂「ツ!!」

夜一「折角じゃ、斬魄刀のさらなる使い方を見せてやろう。」

儂は斬魄刀を抜刀しその力を使うための解号を唱える。…喜助のやつがこれを作ったことで斬魄刀を宥めずに済んだことは感謝しておる。

夜一「『魂は更なる高みへ』」

その言葉を合図に斬魄刀の霊圧が解き放たれ斬魄刀が儂に吸い込まれた。

そして儂の中にある天賜兵装番四楓院家の血の役割を解き放ちその身に纏った。

夜一「『心装・天賜戦姫』『瞬間・雷神戦形・天の羽衣』!!」

儂の身に五大貴族の姫君だった頃としての衣装を彷彿とさせる姿でその手に天賜兵装の剣が出現しており儂の瞬間の属性は雷の属性を引き出した形態をこの姿に合わせた形態に変化させて雷でできた天の羽衣のような形状になった。

碎蜂「あつ…あつ…」

碎蜂はどうも今の儂の姿に昔の思い出が重なっておるようじやの。

夜一「… どうやらもう戦意はない様じやの」

儂はそう言つて心装を解除した。

碎蜂「… どうして」

夜一「… ん？なんじや」

碎蜂「… どうして、私をあの時連れて行つて下さらなかったの

すか…」

碎蜂が泣きながらそう言った。

33話：「… なにも今じゃなくてもいいじゃん。」

side 一護

「どうやらあの女を夜一さんは何とかしたようだな。だけど、心装を使うのはやめてくれよ。あれ対藍染たちとの戦いで、の切り札なのに…」

「俺はそう思いながらも斬月を地面から抜いて無銘に戻して納刀した。」

山本「… おぬしか、今瀨靈廷で暴れている旅禍の集団の纏め役は」

一護「そう言ったらどうするってんだ？」

「俺は嫌な予感がするが聞き返した。」

山本「何、部下が世話になったのでなちいと礼をさせてもらおうと思ってるな。」

「そう言ってる総隊長のじいさんは杖から刀を出現させた。」

一護「… あんたさあ、そういう建前を言うのは構わないけど、本音の顔のニヤケ笑いは抑え込んでくれない？」

「言葉の内容と顔のニヤケ笑いが一致しないので俺はそうツッコんだ。」

山本「… ふつ、この歳になっても面白いことには体は正直なものよな。」

「総隊長はそう言っているがこの場には気絶させた副隊長がいるので俺は瞬歩で移動した。」

side 山本

「旅禍のというよりは本来は客人と呼ぶべきものたちの頭領の立場にいる者は気絶した副隊長を巻き込むわけはいかないので瞬歩で誰もいない開けた場所に移動した。」

山本「どうやらこの老骨の我儘に付き合ってくれるということか。」  
京楽「山じいこの緊急時に何言ってるのさ。」

「春水はそう言っておるが今まで儂を超える死神は1000年いなかっただけで、これほどの血の昂りを止めるという方が無理な物よ。」

卯ノ花「総隊長、私もご一緒してもよろしいでしょうか？」



山本「うむ、よかろう」

春水「卯ノ花隊長も何言ってるのさ。」

烈は見た目に反して儂と1000年近くの付き合いなので何を考えているかある程度分かる。おそらくあの男と斬り合いたいのじゃろうて。

山本「春水、理由がどうあろうと護挺十三隊の総隊長の儂があの男と戦わなかったというのは色々不味いので、悪いが行ってくるぞ。」

京楽「… 全くこういう時の山じいは本当に止まらないんだから。」

山本「それに此度の黒幕はどうもあの男と儂が潰し合うのを待っているようじゃしの。尻尾を掴むためにもここは戦う以外にないのじゃ。」

京楽「それっぽい理由なのがまた山じいらしいね…。でもそれなら僕からはもう何も言わないよ。」

山本「そういう訳で烈、行くぞ！」

卯ノ花「はい、総隊長」

儂らは瞬歩であの男のいる場所に移動した。

side 一護

俺は開けた場所に移動して外套類をしまつて死覇装と斬魄刀を呼び出して準備万端で総隊長のじいさんが来るのを待った。

山本「待たせて済まぬな。」

一護「… 総隊長の爺さんの相手をするのはいいけど、そっちの女死神はなんで来たの？」

卯ノ花「それは私もあなたと戦うために来たんですよ。」

ユ（ヤバい、山本重國とあの女と戦ったら今の一護でも危険だ!!）

ホワイト（おいっ！どうすんだよ!! 一護も謎の不殺するつもりだから全力を出さないしょ!!）

ギョク（もうこうなったら仕方がないです。いざって時はホワイト！あんたが表に出るのよ!!）

ホワイト（そういうことなら分かったぜ！）

なんか中の人達がうるさいけど、俺としては剣八との戦いの余韻が

まだ残っているのか剣八とは異なる強さの二人とは一度剣などを交えておきたかった。

卯ノ花「そして一つ聞いておきたいんですがあなたは十一番隊の更木剣八という死神をぐ存じですか？」

一護「知っているも何も俺が倒したけど？」

卯ノ花「・・・そうですか」

なんか悲しそうな表情をほんの一瞬したがすぐに戻した。そして俺は続けてこう言った。

一護「あいつはここに来て戦ったやつの中で一番強かったよ。途中で始解を解放した後の戦いは特に楽しかったよ。」

俺がそう言うと

卯ノ花「・・・えっ!？」

山本「・・・なんじゃと？あの者が始解を戦いで会得したのか？」

一護「そうそう、それに俺さ、ちよつと特殊な術が使えてね、結果を張ってその結界内と外の時間をずらして時間を大幅に確保できる術を使っててさ、剣八との戦いはあんたらの視点では一瞬で終わってたって認識でも俺達は数日徹夜で戦っていてな。」

俺は自分の能力でバラしても問題ない物を伝えたと

卯ノ花「・・・そうですか、それは素晴らしい力ですね。」

卯ノ花烈は素敵な獲物を見つけた顔をして

山本「なるほどのう、それはよい力じゃのう。ではちとこの老骨と死合おうか。」

総隊長の爺さんもやる気に漲った表情をして上裸になった。

・・・もしかして俺、やっちゃった？

一護「・・・なんかすっげえ気が重たくなっただけど戦<sup>や</sup>るか。」

俺は腰の二本の斬魄刀を抜刀して構えた。

山本「・・・最後に戦う前に一ついいかのう？」

一護「何？先に戦いたいって言ったのはそっちだろう？」

山本「いや、それはわかっておるがおぬしは志波家に所縁のある者かのう？志波海燕と驚くほど似ておるのでな。」

そういえば全力で戦うために外套とかを外していたんだったな。

まあ答えても問題ないな。

一護「俺は確かに志波家と所縁はあるよ、あんたらの所の志波海燕は俺の従兄妹だからな。」

山本「なるほどのう、そういうことか……。じゃが何故おぬしから滅却師クインシーの気配を感じるのじゃ」

すると爺さんの気配が一瞬で変わった。

一護（……これ変に誤魔化すと戦争になりそうだから正直に答えた方が良いかな。）

俺はそう思つて爺さんに話す。

一護「俺の父志波一心が純血統滅却師エリート・クインシーの俺の母である黒崎真咲と結婚したから俺は死神と滅却師の混血児になるんだよ。」

俺は隠すことなくそう言った。

山本「……なぜそのようなことをしたのか聞いておるのか？」

一護「何でも、虚と戦っていた父が自分を助けてくれた母がその虚の影響で死にかけたから恩人を死なさないために助けた結果、結婚して俺が誕生した。」

俺がそう言うと

山本「はあ……。相も変わらず志波家の者はこう義理堅いのじゃな。そういうことなら儂がとやかく言う筋合いはないが元部下だった十番隊の日番谷冬獅郎と松本乱菊には謝罪しに来るように言つておいてくれ。」

一護「あいよ」

俺はそう言うのと今まで黙っていた卯ノ花烈は斬魄刀を抜刀した状態で話しかけてくる。

卯ノ花「お話も済みましたし早速始めましょうか。」

なんか嫉妬の気配もするが大部分は自分にとって久方ぶりの最高の斬り合いができるという感情が多いな。

一護「……でどっちから戦やる？」

卯ノ花・山本「私です／儂じゃ」

両方同時に言った。

ビキッ

一護（なんか変な音が鳴ったな。）

俺がそう思っていると

卯ノ花「あらあら、総隊長ここは普通に部下から戦うのが自然でしょう？」

山本「何を言っておる、おぬしは回道が使えるのでのう。それならわしが先に戦うのが道理じゃろうて。」

なんか二人で言い合いになっている。

とりあえず不毛な言い争いでしかないので俺が割って入る。

一護「元々は爺さんの相手するためにここに移動したんだから総隊長から始めようか。」

山本「そうかそうか、では始めようかのう、烈！ちいと離れておるのじゃ」

卯ノ花「はいはい、わかりましたよ。…ですが次は私ですよ。」

卯ノ花烈はそう言っている程度距離をとったがその気配は絶対に負けるなよという意思を俺にぶつけてきた。

一護（…まあ、あの人とは純粹な斬り合いしてみたいし勝ちますか。）

俺は今回加速世界は使わずに戦いを行う。

俺は動フルート・ヴァイナルテリエ静 血 装で全身を強化して両方の斬魄刀を解放した。

山本「…二本の斬魄刀にそれぞれ別の能力か、ますます楽しんじゃわい。」

一護（…この人ってこんなに戦闘狂だっけ？）

俺は内心でそう思った。

そう思っていると爺さんは抜刀して構える。

山本「最初から俺も全力で相手をしよう。万象一切灰燼と為せ『流刃若火』！」

解号と名を言い斬魄刀を解放すると刀身から爆炎が噴き出る。

近くで見ると凄まじいな、さすが炎熱系最強最古の斬魄刀だな。

一護（ここは『掬花』や『氷輪丸』とかを使って戦った方がいいな。）

俺はそう判断をして万華鏡から水と冷気を放った。

山本「…水と冷気じゃと？斬魄刀に二つの能力はないはずじゃ

が…」

一護「とりあえずこの馬鹿騒動を起こした黒幕を何とかしたいから協力したいので俺の斬魄刀の能力を言うけどこっちの大刀は斬月で能力は切れ味の良い月輪の発生と操作でこっちのガラスのような刀身の脇差しは万華鏡って言って能力は自分が知った斬魄刀の始解を模倣できるんだよ。」

山本「便利な能力じゃな、しかしどこでその力を知った？」

一護「ここに突入する前に志波家に行ったんだけどそこで和尚って死神に全斬魄刀に関する書物を貰ったんだ。」

俺はそう言って本来の理由を誤魔化す。

山本「…なるほどのう、あやつは時々霊王宮を離れておるが何故そんなことをしたのか。」

一護「まあそれは後にしようぜ。」

山本「じゃな、では行くぞ！」

そう言って爺さんは爆炎と瞬歩を組み合わせて爆速で切りかかってきた。

刀には炎を纏わせてきているので俺は冷気を纏った万華鏡で受け止めた。

ゴオオ！

熱を冷気がぶつかってその際に発生する熱の膨張によって俺と爺さんは軽く吹っ飛ぶ。

一護『『氷龍』！』

俺は氷輪丸の能力を模倣して氷の龍を放った。

山本「はあっ！」

爺さんは炎をぶつけることで相殺したがその際に水蒸気が発生したので俺はそれを目くらましに使用して斬月で斬撃を飛ばしながら歩法融合して一気に死角に回りこむが

山本「甘いわあ!!」

爺さんは俺が水蒸気を利用することを予測していたのか炎を圧縮した地雷を設置していたが俺は剣八との戦いで開花した超直感で回避して斬月で切りかかる。

一護「はああ!!」

山本「しやあつ!」

斬月と炎を纏った流刃若火はぶつかり合って凄まじい衝撃が発生するが俺はそのまま脇差で刺突を放つが即座に爺さんは体捌きで回避して左拳で殴り掛かってくるが俺も蹴りを放つて即座に距離を開ける。

山本「やるのお!久方ぶりの感覚じゃぞ!!」

一護「俺もだ!あんたみたいな歴戦の老戦士と戦える機会はそうはねえからな。」

山本「言うのうっ!小童が!!」

俺達はそう軽口を叩きながらも再び歩法で加速して激突した。

side 雨竜

雨竜「... うん?何だこの強大な霊圧は?」

僕たちは四十六室の謎を探るために浮竹さんと一緒に四十六室のいる場所に移動していたら突如異常な霊圧を感知して足を止める。

浮竹「これは... 元柳斎先生の霊圧か!どうしてあの人が戦っているんだ?」

どうも浮竹さんの知り合いらしいがこれほどの霊圧の大きさは僕たちが知る限りでも一護以外で感じたことはないな。

... いや敵も含めるとあのロア・ベリアルも一緒か。

チャド「世界は広いんだな、まさか一護に近い霊圧を持つ者がいるなんて。」

浮竹「まてまて、その一護というのは君たちと歳はそう変わらないんだよな?」

一同『そうだけど』

浮竹「... まさか元柳斎先生と互角かそれ以上の霊圧を既に持っているとはな。」

雨竜「今はそんなことを気にしている場合ではないですね。僕たちは僕たちのやるべきことを優先しましょう。」

浮竹「... そうだな、よしっ!急ごう!!」

浮竹さんがそう言って僕たちは移動する速度を上げる。

〈5分後〉

「僕たちは四十六室がいる部屋まで来た。」

浮竹「ここだ、まだこの時間ならいるはずだ。」

僕たちはそう言っただけで部屋に入ったんだけど中は想像を超える悲惨な事態になっていた。

雨竜「ツ!!」

チャド「…これは!？」

織姫「っ!」

雨「…ひどいですね」

そう部屋には死体がたくさんあったのだ。

浮竹「とりあえずここにいる人たちに話を聞いてもらおうか」

一同『…え』

何故か浮竹さんはこの状況でおかしなことを言った。

雨竜「何…言ってるんですか!!?こんなに死体があるのに」

チャド「そうですね!!ここに生きている人はもういないのに!!」

織姫「何を言っているんですか!!」

雨「そうですね!いくら何でも不謹慎です!!」

浮竹「死体?何を言っているんだ君たちは?ここに死体なんて無いじゃないか?」

浮竹さんはまるで現実が見えてないかと思うような発言をしているが当の浮竹さんはまるで幻を見ているかのごとき反応だった。

雨竜（…ツ!まさか!!）「チャド!!浮竹さんに!!」

チャド「ツ!そういうことかわかった、すみません浮竹さん!!」

僕の言葉で即座にチャドは右腕を黒腕に変化して浮竹さんの頭を掴んだ。

浮竹「茶渡君?!いきなり何を!!」

チャド「大丈夫です、もう終わりましたから。」

チャドはすぐに手を離すと浮竹さんは僕たちの言っていたことを理解した。

浮竹「これは!?!そういうことか!四十六室が洗脳されていたのではなくて俺達が幻を見せられていたのか!!?」

浮竹さんの反応と僕らの反応でおかしいと感じた時、すぐに浮竹さんの認識がおかしくされたことを理解した僕はチャドの能力で浮竹さんの弄られた感覚を戻した。

浮竹「ありがとう、君たちのおかげで根本的な間違いに気づけたよ！」

雨竜「いや、これはどうしようもないですよ。いつの間にか幻覚を見せられていたんですから。」

僕はそう言ってくる浮竹さんにフォローした。

チャド「問題が今回の黒幕の目的がいまだ不明ということだな。」

浮竹「ああ、ルキアを処刑することがそいつらの目的なら一体それになんの意味があるというのか…。」

織姫「でも、その黒幕たちがどこにいるのかが分からないですよね、これだけの騒ぎが起きてるのに誰も気づかないなんて」

雨「ですね、誰も普段はいかない所に隠れているのか、それともその者たちの能力で何処かに潜伏しているのでしょうか？」

僕たちは走りながら各々が意見を出しているいるが、今だ敵の目的どころかその姿を見ることがさえできていない。

浮竹「待て、雨ちゃん。君は今なんて言った？」

雨「え？能力で潜伏ですか？」

浮竹「その前だ！」

雨「誰も普段はいかない所ですかね？」

浮竹「それだ!!」

雨竜「浮竹さん、何か心当たりでも」

浮竹「ああ、瀨霊廷でも限られたものしか立ち入ることのできない場所があつてね、あそこなら姿を隠しておくには最適だ。」

浮竹さんは心当たりのある場所があるらしく僕たちは急いでそこに向かった。

〜10分後〜

僕たちは目的地に到着したが

浮竹「ゴホツゴホツ」

浮竹さんが持病の咳をしているので僕たちは持ってきていた薬を



渡した。

浮竹「ごくっ！ごくっ！ぷはあ！ありがとうおかげで苦しくなくなつたよ。」

薬を飲んだ浮竹さんは僕たちに礼を言ってくるが

織姫「いえいえ、御礼なら一護君に行つて下さいよ。それは一護君が作った物なんで。」

浮竹「その子はすごいんだな。」

雨「ええ、私達の自慢の男性です!!」

浮竹「そうか、では俺達も頑張らないとな、早く行こう！」

一同『はいっ!』

僕たちは目的の建物に入って奥へと進んでいくと

???「おや、もう来たのか？ずいぶんと速い到着だね。」

???「おやおや、えらいここに来るのが早いな、結構時間を稼げた思たのに」

奥に進んでいくと眼鏡と掛けた優男と僕達を追い出した狐のような男がいた。

浮竹「藍染、市丸まさかお前たちが…」

藍染「…ふむ、この様子はどうも鏡花水月が解除されているね、彼の報告通り彼らには幻覚系は通用しないし解除も容易いのか。」

ギン「めんどいな彼らには真つ向勝負しか勝ち目えあらへんのか」

二人は暢気にそんなことを話している。

浮竹「鏡花水月だと？それは確か別の能力だったはずだ！」

藍染「…ふむ、彼らには通用しないならバラしても大して問題ないな、それなら話しておこうか。僕の斬魄刀鏡花水月、有する能力は完全催眠だ。始解の解放の瞬間を一度でも見た相手の五感・霊感等を支配し、以降解放の度に何度でも相手を支配していくことが出来るというものでね。」

浮竹「ツ！そうかあの時にすでにお前の術中に嵌っていたのか!!」

藍染「そういうことだ。ではそろそろ行かせてもらうよ、今は彼と総隊長が戦闘中のようなだからね。このような絶好の機会を捨てるわけにはいかないからね。」

藍染はそう言つて市丸が何かしようとするが  
チャド「させるか!!」

チャドは完現術を行使して鎧を纏い殴り掛かる。

藍染「では少し遊んでからにしよう。『破道の九十・改 黒棺・  
奈落』」

男はチャドを黒い箱に閉じ込めてそれを圧縮することでチャドを  
一撃で戦闘不能にした。

チャド「ごはあ!」

一同『チャド(君)!!』

浮竹「茶渡君!!」

僕たちは驚愕した。チャドを一撃で戦闘不能にしたのもそうだが  
問題なのは男が使った鬼道のほうだ。

雨竜「今のは一護の…」

藍染「彼は非常に興味がそそられる存在だ。特に彼の使ったりした  
破道はね。だが今は我々の目的を遂行しよう。では諸君、御機嫌よ  
う。」

そう言つて狐男の市丸ギンは白い布を広げると藍染と一緒にどこ  
かへ転移した。

浮竹「不味いぞ!早く奴を追いたいが茶渡君の手当てを…」

織姫「大丈夫です!もう終わりました!!」

チャド「すみません!先走ってしまつて…」

浮竹「そ、そうか、だがこれで急げるな、早く奴の企みを阻止しよ  
う!!」

一同『はいっ!!』

僕たちは急いで奴らの追跡に入った。

side 一護

俺はバーニング爺と絶賛打ち合いをしている。

一護「はああああああああ!!」

山本「でりやああああああ!!」

俺達は咆哮を上げながら刀を振るう。

一護『『紅蓮氷龍剣』! 『月虹・片割れ月』!』

俺は万華鏡から紅い氷の龍を放ちながら斬月を振るって相手の位置を的確に狙い定めた上で、上から地面に三日月を縦に突き刺す様な斬撃を複数放つ月の剣技を放った。

山本「そう来なくてわのお!!『破道の八十八 飛竜撃賊震天雷砲』!」  
『城郭壁・炎上』!!」

爺さんは左手から雷撃を圧縮した光線を放ち、流刃若火の炎を自身の上で壁として展開して防御した。

一護「まだまだ!」

俺はそう言っただけの力を解放する。

一護「卍解!『天鎖斬月』!『万華鏡 千変万華』!」

俺の死覇装が黒いコートのような形状に変化して斬月が卍の形状に変化した黒刀になった。

万華鏡のほうは変化なしだ。

山本「それがおぬしの卍解か!来いっ!!」

一護「行くぜ!」

俺達が加速しようとした時

浮竹『こちら浮竹十四郎より伝令!!今回の事件の主犯は藍染惣右介、市丸ギン、東仙要と判明!今すぐに奴らの追跡を頼みます!!こちらもすぐに向かいますので!!』

浮竹さんの言葉で折角の楽しい時間に水を差された。

一護「... なにも今じゃなくてもいいじゃん。」

俺は不貞腐れた感じの言葉を吐いたのだがそれは許してくれ。

山本「おのれえ、ここからが良いところじゃったのに」

爺さんも拳を握り締めている。

卯ノ花「... 私に至っては戦うこともできなかつたのに文句を言わないでくださいよ。」

卯ノ花さんに至っては文句を言いつつも戦い自体が出来なくて原因に対して目が笑っていない。

一護「... とりあえず、追跡行きましょうか。」

山本「そうじゃのう」卯ノ花「ですね」

俺等3人はそのまま瞬歩で移動した。

ちなみに俺は正解を維持したまま移動した。

side 恋次

俺はルキアを抱き抱えたまま平野を走り追手から逃げている。

恋次「はっ！はっ！」

ルキア「れ、恋次」

ルキアがなんか言っているが俺はあいつとの約束を守る！

??? 「どうやらちようど良いタイミングのようだな。」

いきなり前から声がすると空間から白い布が出てきて市丸隊長と死んだはずの藍染隊長が出てきた。

恋次「なっ！」

俺は驚いたがすぐに刀を抜いた。

恋次「吠えろお！『蛇尾丸』!!」

俺は斬魄刀を構えるが

藍染「ふむ、いい構えだが前しか見ないのはよくないよ？」

恋次「何？」

俺は藍染隊長の言葉に疑問を浮かんだが背後から切られてしまった。

恋次「ぐあああ!!」

ルキア「恋次!!」

幸いにルキアの声でなんとか意識をつないで倒れることはなかったが予想以上の傷に意識が残っている方が奇跡なくらいだ。

藍染「よくやった要」

東仙「いえ、私は任務を果たしただけです。」

隊長3名が裏切った事実が判明してこのことを早く伝えたいが立つのもやつとの状態だ。

藍染「さて、早くしないと彼が来てしまうな。」

そう言つて藍染隊長は手袋のようなものをしてルキアの鎖結と魄睡を貫いたが何故が黒い穴のようなものが出現して中から紫色の玉が出てきた。

藍染「…ふむ、魂魄に異常なしか、素晴らしいな彼の作り出したものは。さてこれで君の役目は終わりだ。」

そう言つて、藍染は刀でルキアを切ろうと抜刀し振り上げた。  
恋次（クソツ！動けよ！俺の体!!）

俺は傷だらけの体を動かそうとするがそれより早く刀が振り下ろされた。

ガキイン!!

ルキアに振り下ろされた音とは思えない音が辺りに響いた。

藍染「…ほう、なかなか来るのが速かったじゃないか。黒崎一護」

一護「…ようやく会えたな、虚刀虚を生み出した元凶があ」

一護が黒い刀で藍染の刀を受け止めていた。

藍染「一体どうやってここまで来た？あの場所からここまで相当な距離があるはずだよ？」

一護「俺の融合歩法を舐めんじゃねえよ！」

一護はそう言ったが先ほど感じた場所からここまで相当な距離があるにもかかわらずほんの短時間でできて見せたという。

藍染「…ふむ、想定外ではあるが目的は達成したから良いとしようか。」

一護「目的？何のことだ？」

藍染「おや？浦原喜助から聞いていないのかい？」

一護「…なんでそこであの阿呆<sup>喜助</sup>が出てくんだ？俺達はルキアの無実証明のために来たただけだが？」

藍染「…ほおそうか、では教えておこうか彼女の中にはこの崩玉というのがあってね私はこれを手にするためにこの事件を起こしたんだよ。」

一護「なんとなく理解した。要はあの馬鹿がそれをルキアに入れたことが原因ということか後であいつをシバいておこう。」

藍染「理解が速くて助かるよ。」

藍染はそう言つて崩玉を懐にしまうと

藍染「では私達はそろそろ行かせてもr」夜一「させると思ったのかの」藍染「これはこれはお早い到着だ」

藍染たちの周りには既に碎蜂隊長と隠密機動の面々と隊長たちが取り囲んでいた。

だがあの男は逆に笑みを浮かべた。

夜一「…何が可らしい？」

藍染「いやなにあの時彼女をこちらに引き入れられた自分の幸運に感謝していたとこだ。」

恋次（…まさか!?）

この状況を文字通りひっくり返せることのできる存在が一人いた!!

???「全く、ここまでやって追いつめられるって情けないわね。」

その声をする同時に囲んでいた面々は全員が俺の後ろにいた。

一同『っ!!?』

藍染「そうは言っても彼らの実力が我々の想定を軽く超えたに過ぎない。」

ロア「まあ、そうなんだけどね、久しぶりね一護♡」

黒髪の破面女がそこにいた。

一護「…はあ、ロアかよ。面倒くさいな、今出てくることもないと思うが？」

ロア「仕方ないでしょ?この雄との約束なんだから。」

一護とロアと呼ばれた女は旧知の知り合いとでもいうべき気安い会話をしている。

一護「…しよすがないな、あまりこれ以上の戦闘行為はしたくないがお前らに一泡吹かせずに帰られるのも癪だ」

一護はそう言って顔に手を当てると虚の霊圧を発して顔に虚のような仮面を出現させた。

一同『なっ!!?』

隊長たちは驚愕の声を上げた…。だが奴らは驚くどころか笑みさえ浮かべていた。

一護『さて、ロア少し俺と遊ぼうか。』

side 一護

俺は最高速度で藍染たちがいるところに急行したがルキアがちょうど切られそうになっているので天鎖斬月で受け止めて色々聞いた後夜一さん達が捕獲しようとするがロアの登場でそれも上手くいか

なくて悔しいがどうしよう？

ホワイト(おいつ！今なら俺のほうから仮面を出すことができるぞ!!)

一護(マジかなら頼む!!)

ホワイト(任せろ!!)

ホワイトからの朗報に俺はOKサインを出す。

とりあえず俺はロアと少し話すと

一護「…しようがないな、あまりこれ以上の戦闘行為はしたくないがお前らに一泡吹かせずに帰られるのも癪だ」

一俺はそう言って顔に手を当てると虚の霊圧を発して顔に虚のよ  
うな仮面を出現させた。

一同『なっ!!?』

周りは驚いているが今はこいつらに一泡吹かせたいので無視する。

一護『さて、ロア少し俺と遊ぼうか。』

ロア「いいよ、一護！私も鍛錬じゃなくて同格の存在と戦いたかったんだ!!」

ロアはそう言って腰の虚刀を抜刀した。

一護『いくぜ!』

俺は虚化の状態が解放されたことで素の状態でも響転ソニードと鋼皮イエロを使用可能になったので俺は鋼皮と動ブルート・ウィーネアルテリエ静血装を融合して全身を強化して響転を含めた4歩法を融合して加速した。

一護『はああ!!』

俺は卍解した二振りを振るい黒い斬撃を飛ばした。

ロア「アハハ!」

ロアも笑いながら虚閃セロを放ったが容易く破壊してロアに直撃した。

ロア「凄いや！やつぱり一護は最高だよ！じゃあ私も全力で！吹き抜けなさい!! 『風霊聖剣』!!」

ロアは虚刀を納刀して自身の斬魄刀を抜刀して刀剣解放を行った。  
黒髪が金髪に変化してポニーテールに纏められ服がALO編の  
リーファの服に変化していて手には直刀が握られている。

一護『いくぞおロアアアア!!』

ロア「うん!!一護おおおおお!!!」

俺達は加速して剣を打ち合った。

一護『「輝彩・天満織月・絶」!!』

俺は腕から輝彩骨刀の刃を生やしそこからも三日月を飛ばして天満織月の隙間が生じる弱点を埋めそれに聖文字 絶 対 切 断を付与した。

ロア「アハハ!じゃあ私は!『霊嵐の剣舞』!」

ロアは回転しながら巨大な竜巻を生成して俺の月輪を相殺した。

一護『これならどうだ!!』

俺は天鎖斬月を天鎖穿月に変えて万物貫通を付与した一点集中の矢を光の「雨」で放った。

ロア「次は弓ね!次から次へと楽しいわね『空刃・五月雨』!!」

ロアは真空刃を雨を放ち俺の矢を相殺した。

一護『まだまだ!「紅蓮爆龍剣」!!』

俺は万華鏡から加速を付与した黒炎の龍を飛ばした。

ロア『「虚閃龍」!!』

ロアも龍型の虚閃を放ってこれまた相殺した。

一護(さつきから俺の攻撃を簡単に相殺しているけどロアのやつも崩玉の力を限界まで引き出しているから滅茶苦茶無理しているな!)  
はたから見ていると簡単にロアは相殺しているが俺からすると相対の無茶をしている。

一護(当然か、俺は生まれてから自分の力を理解して鍛錬を積み戦闘経験を積み上げてきたのに対してロアは力は得たがそれを最大限発揮できるくらいに同格の存在や格下でも厄介や敵とは戦えなかったからどれくらいの配分で戦えばいいかわからないんだな。)

俺はそう分析するとロアを追い詰めるために再び技を放とうとすると突如空間から光が降り注ぎロアと藍染たちを包み込んだ。

一護「...?何だこれ?」

山本「それは『反膜』大虚が同族を助ける際に使用する光線。光の中は隔絶された異空間となり攻撃など外部からの干渉を受け付けないのじゃ。」



一護『そうか』

俺は爺さんの説明を聞いてそんなものあつたなと思った。とりあえず俺は戦闘が終了したので仮面を外した。

藍染「では死神たちよさよならだ。」

藍染は偉そうに俺たちに言ってきた。

浮竹「・・・地に堕ちたな、藍染」

藍染「驕りが過ぎるぞ、浮竹。誰も天に立つてなどいないさ、君も私も神さえも・・・だがそんな耐えがたき天の空白ももう終わる。」

そう言つて藍染は眼鏡をはずして

藍染「私が天に立つ！」

左手で髪をオールバックにして右手に持ってた眼鏡が砕け散りながらそう言つた。

ロア「一護!!今度は私が勝つからね!!」

一護「お前の場合勝つても負けてもお前が勝つようになってるから良いじゃねえか!!」

ロア「それはそれこれはこれ、負けっぱなしは好きじゃないの!!」

一護「じゃあ次も俺が勝つ！」

俺はロアにそう言い切つた。

そして、ロアたちは消えて行つた。

一護「はあ・・・疲れたあ」

俺はくたびれたようにそう言うと

山本「済まぬな此度はこちらの者が迷惑をかけて」

一護「いいつて俺らもあいつらには散々な目に合わされたからいっぺん殴らないと気が済まないから。」

山本「そうか、では手を貸してくれぬか」

一護「いいいぜ、俺らも手を貸すからあんたらも手を貸してくれ」

山本「よかろう」

俺達は共闘関係の握手をしてルキアの処刑騒動はひとまず終わりを告げた。

### 34話：「見てて楽しいですね。」

side 一護

とりあえず、俺達は外套などを外して仕舞って正体を明かして自己紹介しておく。

一護「初めまして、俺は黒崎一護だ。よろしく」

雨竜「僕は石田雨竜と言います。」

チャド「俺は茶渡泰虎だ。よろしくお願いします。」

織姫「私は井上織姫と言います。よろしくお願いします。」

雨「私は袖屋雨うしろと言います。よろしくお願いします。」

リルカ「あたしは毒が峰リルカよ、よろしくね。」

俺達は全員それぞれの自己紹介を終えた。

山本「では今こちらで自己紹介できるものからしておこうかのう。

儂はこの護挺十三隊総隊長、山本元柳斎重國じゃ。」

碎蜂「私は二番隊隊長の碎蜂だ。」

卯ノ花「私は四番隊隊長の卯ノ花烈と申します。」

白哉「私は六番隊隊長朽木白夜だ。」

京楽「僕は八番隊隊長の京楽春水だよ。」

日番谷「俺は十番隊隊長の日番谷冬獅郎だ。」

海燕「俺はこの中だと唯一知っていると思うが一応言っておく十三番隊隊長志波海燕だ。」

とりあえず俺達は気絶していない隊長たちと親睦を深めることにした。

日番谷「あんた、海燕隊長と良く似ているが知り合いか何かか？」

一護「・・・俺、あんたの元上司の実子なんだよ。ごめんな、あの馬鹿が迷惑かけて」

日番谷「いや、あの人に何か事情があつたんだろ？なら俺からは何も言わないでおくさ。」

一護「なら後である馬鹿親父に謝らせに行くわ。」

日番谷「そうか、そういえばあんたは・・・」

一護「一護でいいよ。変な言い方されても困るし」

日番谷「なら俺も冬獅郎でいいさ。」

一護「そうか、よろしくな冬獅郎！」

日番谷「ああ、一護！」

俺は冬獅郎と仲を深めた。

碎蜂「・・・貴様、夜一様とはどういう関係だ？」

一護「いきなりどうした？」

碎蜂「夜一様が貴様のことをよく話すが貴様にただならぬ感情を夜一様が抱いていると見える。」

一護「誤解だぞ？とりあえず親睦を深めるためにこちらをどうぞ。」  
俺は碎蜂に夜一写真集を手渡した。

碎蜂「ふんっ！このような紙切れでこの私を買収できると思うなよ！・・・よしっ！一護っ！貴様とは趣味が合うな！」

予想通りに碎蜂が釣れたのでこちらとも親睦を深めておけたが

碎蜂「はあくこの夜一様もよいな！・・・は？何だこれは？」

一護「・・・どうした？」

碎蜂「・・・一護、これは何だ？」

碎蜂が見せて来た写真には夜一さんが瞬閔・雷獣戦形  
「瞬露黒猫戦姫」  
しゆんりゆうくろくびようせんき

の状態で喜助に甘えている写真だった。

一護「あく、それかあ。でも別に何処か問題あるか？」

碎蜂「問題しかないわあ！夜一様がああ男にいかがわしいことをさ  
れているのだぞ!!」

一護「いかがわしいって夜一さん、喜助と結婚しているぞ？夜一さん  
から聞いていないのか？」

碎蜂「・・・は？ナニツテイルノダオマエハ？」

一護「夜一さくん、ちよつといい〜」

夜一「何じや一護儂になんか用かのう？」

一護「碎蜂に喜助と結婚したこと言っていないのか？」

夜一「別にいうほどの事でもないしのお」

一護「いや言っておいてくれませんか!?見て下さいよ！碎蜂が無  
言で刀研ぎ始めているじゃないですか!!」

碎蜂「ヨルイチサマガキスケトケツコン、ヨルイチサマガキスケトケツコン…」

一護「夜一」「こわっ!!」

俺達は碎蜂を説得して何とか正気に戻した。

一護「落ち着いたか?」

碎蜂「… 許さんぞお! 浦原喜助え!!」

一護「俺、戻ったら喜助シバくから参加するか?」

碎蜂・マユリ「是非参加させてくれ/もらおうか!!」

一護「… なにお前?」

マユリ「これは自己紹介をさせてもらおうか。十二番隊長の涅マユリだ。」

一護「ああ、雨が言つてた確か喜助の後釜だっけ?」

マユリ「それは不愉快だからやめてもらおうか。」

一護「それはすまん、ところでこちらにこんなものが」

俺は昔作つた物の研究データをマユリに見せた。

マユリ「何だね? (紙をペラペラ)… 素晴らしい!」

マユリは俺が見せた研究データを見てそう叫んだ。

マユリ「なんてことだ、これにはまだこんな応用の仕方があるのか! それにこっちはこんな発展の仕方があるのか! おい! まだないのか!」

一護「ふっふっふ、まだまだありまっせ、マユリの旦那あ」

俺はポーチから研究データの紙束を出した。

マユリ「はっはっはっは!! ではとことん語ろうではないか!」

俺達は気が済むまで科学者トークに熱が入った。

マユリ「… ふう、年甲斐もなくはしゃいでしまったようだね、だが徐々に自分の知識が更なる高みに至れた予感がするよ。」

一護「ああ、俺もだ。あんたは喜助とは違う方向で素晴らしい科学者だよ。どちらが上とか優劣が付けられないほどにね。」

マユリ「はっはっは、嬉しいことを言ってくれるじゃないか科学仲間よ!」

俺はマユリと語り合っている中で自分の秘める素養をうっかり洩

らしてしまつて一悶着あつたがとても仲が良くなった。

マユリ「… 奴の真似をするのは癩だが科学者としての興味に逆らうことはできないネ、おいつ！ネム！」

一護「… うん？真似？… まさか!？」

俺は嫌な予感がしたが俺は嫌な予想が当たつてしまった。

ネム「はい、なんででしょうか、マユリ様。」

マユリ「ネム、お前はこいつと結婚するんだヨ。」

一護「ああ、やっぱりか、まあ今更か。」

俺は運命として受け入れる。

ネム「はい、分かりました。… よろしくお願いします。」

ネムは行儀良くお辞儀してくるのだが

織姫「ネムさん、ちよつとこつちきて！」

織姫はネムを強制的に連れて行つた。

マユリ「頼むヨ。」

一護「… 分かつたよ。」

俺はマユリと仲良くなり嫁？が増えた。

一護「白哉、恋次色々あつたが何とか終わったな。」

白哉「ああ、何とかルキアの処刑を食い止めることができた感謝する。」

恋次「ありがとう！お前が間に合わなかつたらルキアが切られていた!!」

一護「いいって、それにまだ終わつてない。」

白哉「… そうだな、裏切り者の藍染を倒さねばならないがあの女がいる以上更なる鍛錬をしなければなるまい。」

恋次「ああ、もう見ている事しか出来ねえのは嫌だ！」

一護「おう！とりあえず、瀧霊廷の立て直しが終わつたら現世にある俺達が使っている修練場を使う？恋次は使う約束してたけど。」

白哉「よいのか？」

一護「ああ、そもそも強くなつてもらわないと俺達の負担がヤバい。」

恋次「分かつたぜ、何が何でも強くなつてやる。」

一護「ああ、頼む」

白哉「それにあの破面には借りがあるからな。」

俺達は気が済むまで話し合った。

京楽「初めまして君が一護くんだね。」

一護「京楽さん初めましてちゃんと話すのはまだでしたね。」

京楽「そう気を張ることはないよ。」

一護「いや、喜助然り馬鹿親父然りで碌な奴がいなくてね、まともな大人相手だとこんな感じなんですよね。」

京楽「いや、まいったね、そう言われちゃ僕もあまり言えないねえ」

浮竹「一護君、初めまして俺は浮竹十四郎だよ。それにしてもホントに海燕とよく似ているね。」

一護「初めまして浮竹さん、仲間たちの引率ありがとうございます。」

浮竹「それはこっちのセリフだよ。君の仲間たちのおかげで奴らの力を突破出来たんだから。それに君が作った薬のおかげで結構楽になったんだよ。感謝しているよ。」

一護「それは良かったです。」

京楽「それにしても、あの虚は尋常じゃない強さだね。山じいクラスでようやく相手になるのかい？」

一護「ええ、あいつは白哉たちでも苦戦した奴らを雑用と言う奴ですの。」

京楽「これは生半可な強さじゃ歯が立たないねえ、僕らも鍛え直すしかないさそうだね。」

浮竹「そうなりそうだな。」

一護「それなら、俺達が使ってる修練場を使いますか？」

京楽「いいのかい？」

一護「ええ、強い人たちがいると俺達の負担が少なくなりますからね。」

京楽「君もちやつかりしてるね〜」

浮竹「そういうことなら遠慮なく使わせてもらおうよ。」

一護「ええ」

俺は京楽さんと浮竹さんと仲が良くなった。

一護「さくてと次は… うん？」

俺は次に誰と話そうかと考えていると何か始解している  
阿呆従兄妹の海燕と武器を展開しているチャドと雨竜がいる。

一護「… なにしているの？」

海燕「一護！良いところに来た！いとこ従妹達を誑かしたこの二人を倒すぞ！」

雨竜「一護！この人止めてくれ！」

チャド「話を聞いてくれないんだ！」

一護「… ああ、そういえば親父がお前らのこと言ってたな。」

海燕「そうだ！こいつらの力が叔父が言ってた特徴に合致するんだ！さあ一緒に倒すぞ」一護「別にその二人なら俺は認めているからいいんだが、それにこの二人を妹たちの旦那にするって言ったのは親父達なんだが…」

海燕「叔父イイイイイイイイ！！！！」

海燕は地面を思いつき叩いて嘆きの叫びをあげた。

一護「よし、何も見なかったことにしよう。」

俺はその場を離れた。

卯ノ花「一護さん、お話をよろしいでしょうか。」

一護「いいですよ、なんですか？」

卯ノ花「更木剣八について何ですけど戦ってどんな感じですか？」

一護「そうですね、あいつと戦っていて俺はあいつの戦い方を取り入れたりしましたし逆にあいつも俺の戦い方も取り込んでいましたからね。今のあいつは理性と技を持つ暴力の獣と言った感じですかね。」

俺は剣八と戦った感想を言った。

卯ノ花「… そうですね、私では彼の力について  
いけませんので少しあなたに嫉妬しているんですよ。」

一護「なら俺達が普段使っている修練場を使いますか？あそこなら大幅に力を底上げできますよ。それに俺達が使っている剣術や剣技をまとめたノートがあるから見ますか？」

卯ノ花「… よろしいのですか？」

一護「いいですよ、女性の初恋の手伝いをするのは嫌いではないですから。」

卯ノ花「ツク！いい、一護さん!!か、揶揄わないでください！」

俺がそう言ったら卯ノ花さんが恥ずかしがって顔を手で隠した。

一護「自分の気持ちに正直になるのは駄目じゃないですよ。別に藍染みたいなものでもないですしね。」

卯ノ花「… で、ではお手伝いしてくださいね。」

一護「いいですよ、あの脳筋は簡単には気づきそうにないんで俺に手伝えることであれば問題ないですよ。」

卯ノ花「ありがとうございます。」

俺は卯ノ花さんと仲が良くなり彼女の恋の手伝いをする事になった。

一護「爺さん、今の隊長たちの実力だと言っちゃ悪いがキツイ。」

山本「じゃろうな、あの破面の女は厄介以外に称することが出来ぬしな。」

一護「現状、対抗できるのは俺、爺さん、剣八の3人だ。」

山本「そうじゃろうな、じゃが儂らがあの女に構っていると他の主力が一気に殲滅してくると」

一護「だから俺達が使っている薬品類の資料を四番隊に渡してあるし修練器具がこっちでも使えるようにマユリに設計図を渡しておいたけど、まだ量産までは時間が掛かるから俺達が使っている現世の修練場を使うことになるけど良いかな。少なくとも後方支援に関しては問題なくなつたかな。」

山本「それがよさそうじゃの。おぬしらのおかげで死人が少なくなりそうじゃわい。」

一護「それはどうも」

俺は爺さんと現状の問題点を話し合い結論を出した。

その後俺達は瀨霊廷で多少破損した場所の修理に手伝った。

山本「良いのか？おぬしも参加して」

と爺さんが言ってきたので



一護「理由はどうあれ戦闘して破壊したのは俺だしな。」  
俺はこう言って仕事を手伝った。

狛村「すまないな、一護殿。貴公は本来はこのようなことをさせるわけにはいかないのだが。」

一護「いいって、早く修理とか終えて修練しに行きたいんでしょ?」

狛村「… 気づいていたか」

一護「俺があんたらに会った時仲良さそうだったからね、焦っていると思っただけだからな。」

狛村「… ああ儂は東仙の友であると思っていたのだが友の心を何一つ理解していなかったその結果東仙を裏切らせてしまった。」

一護「まあ、心を全部理解することはできないしな。それにそういうのは本人が言わないと解決しないしな。」

俺は狛村さんの言葉に俺は自分なりの言葉をかける。

狛村「そうだな、儂が全てを理解するというのは傲慢だろうな。だがそれでも友の苦しみを理解していなかったのは儂にとっては耐え難い!!」

一護「なら今度は間違わないようにすればいいじゃん。」

狛村「…!」

一護「強くなつて友達目を覚まして友達が苦しみを吐露出来るくらい安心できる何かをあんた自身が手に入れればいいじゃん。」

俺は自身の経験から狛村さんにアドバイスをする。

狛村「一護殿、かたじけない。儂は今度こそ東仙の友を名乗れるくらいに強くなる!!」

一護「応援しているよ、さっ!話の続きは仕事が終わってからにしよう。」

狛村「うむ!!」

俺は狛村さんと仲が良くなった。

俺は瀟霊廷を歩いていたら後ろから視線を感じた。

一護（この視線の感じは… 女か?）

視線の様子からどうも行くか引くか迷っている感じがするな。

一護（少しカマをかけるか。）

俺は少し早足になって速度を上げるとついて来ている気配も同じくらい速度を上げた。

人目が付かない所に移動すると瞬歩で背後を取った。

一護「お前、なんで俺をつけてきたんだ？」

???「ひっ！」

後姿を見るとどうもシニヨンの髪型の女らしい…。あれ？こいつって

一護「お前って確か丘で気絶させた…」

???「あ、…。あの私は雛森桃…。って言います…。あなたによ、用があ、あつてですね。」

一護「声が小さくてよく聞こえねえ」

雛森桃は名前以外がぼそぼそ小声で話すのでイライラして少し強めの言葉をぶつけてしまった。

雛森「ひっ！ご、ごめんなさい」

一護「…。で？何の用？」

雛森「あ、あの時疑ってしまつてすみません。」

一護「あの時？…。ああ丘で俺に言いがかり付けてきたやつか？あれは結局藍染の策略だったんだから気にするな。」

俺は別にこいつから被害を被った訳ではないのでそう言つて雛森を安心させるが

雛森「で、でも藍染隊長が裏切つたのは副隊長の私がしっかりしていなかったから…」

一護「雛森桃、先に言つておくがああ男はもう隊長ではないし副隊長だからとかそんな義務間で行動するな、行動するなら自分でしっかり考えてその上で行動しろ。副隊長だからとかで頑張つても誰も幸せにならないしお前も単に辛いだけだ。今のお前は何がしたい？何を叶えたい？」

雛森「わ、私は…。あれ、私って何がしたかつたんだろう？」

雛森は俺の言葉を聞いて自分の言葉を言おうとしたら何故か答えられず涙を流しながら地面にへたり込んでしまった。

一護（… 藍染の洗脳に近いほどのカリスマ性は厄介だな。この女

は元から心が強かったのにそれがこんなになるほどか… 仕方がないな俺がこいつが立ち直るまで俺が話し相手になるかあ。」

俺は加速世界を使つて、俺はへたり込んだ雛森に視線を合わせるために座った。

一護「よしっ！じゃあお前が何をしたいかはわからないのなら俺と話をしよう。」

雛森「… え？い… いんで… すか、こん… な何も… ない空… つぼの私な… んかに構っ… ていてい… いんで… すか？」

一護「… 無価値とか空っぽとか言うなよ、自分を信じてやれないこと言うのは一番虚しいんだからな。」

… 俺は恥ずかしいがああの時の俺が救われたやり方で助ける。

俺は雛森を抱きしめて頭を撫でる。

雛森「… え？」

一護「いい子… いい子」

俺はゆっくり優しく撫でて優しい言葉をかけると

雛森「う… ぐあ… うわあああああん!!!」

雛森は思いつきり泣いた。… 防音結界を張っているので叫び声をあげても問題ない様になっている。

〜5分後〜

雛森「お見苦しいところをお見せして申し訳ございません…」

一護「大丈夫だからいいぞ。それよりスッキリして心の整理がついたか。」

雛森「… はい、整理できましたけどまだ何をやりたいとかは見つかりませんが一つだけ今行動する理由はあります。」

一護「… うん？なにかな。」

雛森「一護さんに助けられた恩を返すことです。」

一護「… そうか」

俺は一瞬返すのに間が出来てしまったがなんせ雛森の目に浮かんでいる感情は彼女本人は気が付いていないが恋慕の感情だ。この子の状態で恋の類は依存とか下手をすると病んでしまうので早めに何

とかしないといけないが

雛森「だから一護さんのことをもつと色々教えてください。」(目のハイライトオフ)

一護(まずいなもうすでに精神が病<sup>浸</sup>んでい<sup>食</sup>るしているな。どうするか。)

俺があーだこーだ考えていると

??? 『任せて!!』

一護「誰だよ!!この状況で!!」

織姫「雛森ちゃん!!こつちに来れば一護君のことをもつと知れるよ!」

雨「あなたもこつち側に来れば一護さんの役に立ってますよ!!」

リルカ「そうよ!一人にはならないわ!!」

ネム「雛森様、あなたもこちら側に来てもらいます。」

一護「ここにきて一番役に立たねえ!!加速世界を使っているのに何で来れた!!」

3人娘『ギョク』

一護「ちつくしよおおおおお!!!あいつのこと忘れてたああああ!!!」

俺はギョクと言う特級の危険人物のことを忘れていた。

雛森「...え、えつとあなた達は」

織姫「いいからこつち来て!!」

雨「そうですよ!!」

リルカ「早くしなさいよ!!」

ネム「こちらへ」

雛森「え、ちよ、ちよつと待ってくださいイイイイ!!」

雛森は嫁ーズに連れ去られていった。

少ししてあいつらがいるところを見たが滅茶苦茶仲良くなっているが冬獅郎から「雛森を頼む」って言ってきたからまた増えたのかと頭を抱えた。

爺さんから三、九番隊の副隊長の精神治療を頼むと言ってきたので話をする。

いくら協力者でも外部の人間に任せもよいのか？と爺さんに言う  
と

山本「逆に外部のおぬしの言葉のほうがあやつらも耳を傾けるじゃ  
ろうて」

とのことだったので俺も戦力を増やすためにもこの仕事を受けた。

一護「えくと、吉良イツルさんと檜佐木修兵さんと松本乱菊さんで  
すね。ようこそ出張！黒崎クリニツクへ。」

イツル「ふざけているのですか？」

一護「真面目にやっているさ、あんたらの場合は多少ふざけて場の  
空気を変えないとまともに話をしないでしよう。特に今のあんたら  
だと」

檜佐木「お気遣いありがとうございます。」

檜佐木はそう言つて礼をしてくる。

松本「私はなんで？」

一護「あんたも話し合いしておかないとって思つてね。先ずはイツ  
ルさんから部屋に入ってください。」

イツル「はい、分かりました。」

俺とイツルさんは借りた部屋に入って向かい合つた。

一護「では今あなたが抱えている悩みを言ってください。」

俺は真面目な口調で言つた。

イツル「…僕は今副隊長でいていいのか悩んでいます。隊長の補  
佐をすることが仕事ですけど隊長の暗躍に気づけなかつた自分が副  
隊長を続けていいのかわからなくて。」

一護「なるほど、あなたの悩みは理解しましたが副隊長を辞めると  
いうことはしない方がいいですよ。」

イツル「…それはまたどうして？」

一護「理由はいくつありますがまず、今の三番隊は隊長がいませ  
ん、そこで副隊長もいなくなると三番隊の隊員たちの不安を増加させ  
てしまいかねません。それにあなたはやめたいとは思つていてもど  
ちらかと言えば辞める気がないほうが強いらしいというのが二つ目  
ですかね。それに今あなたが抜けるとあなたは裏切り者たちと通じ

ている内通者ということになってしまおうということが3つ目の理由です。」

俺は聖文字 The Eye sthe Mind 眼 と精 神を組み合わせて心を読んでイヅルに適切な助言を言っていく。

イヅル「そうですね、確かにその2つ目の理由は僕が感じていることですしその通りなんですけど、やっぱり僕が副隊長でいい資格はないですよ。」

イヅルはそう言って自分を卑下にするが

一護「今更何を言っているんですか？資格も何もあなたは周りに認められたから副隊長にいますのでしょう？なら死ぬまでその責務から逃げないでください。」

イヅル「・・・」

一護「あなたが自分を卑下にするのは別に構いませんがあなたが背負っている副隊長の役職はあなたがふさわしいと認められて就いたんですから自分勝手な理由で辞めるのは困ります。」

イヅル「・・・分かりました。ですがまだ答えは出せていませんが気持ちの整理はつきました。ありがとうございます。」

イヅルはそう言ってお辞儀して退室しようとするので

一護「では次の檜佐木さんに入ってくるように言ってもらえませんか。」

イヅル「分かりました・・・ 檜佐木さん、順番です。」

一護「では檜佐木さん、あなたの悩みを聞かせてもらえませんか。」

檜佐木「・・・俺は東仙隊長に多大な恩がある。戦いに恐怖を感じて体が震えてた俺に色々教えてくれた恩人なんだ、だけどその隊長が裏切ってしまった俺はどうすればいいかわからなくて。」

檜佐木さんがそう俺に今感じていた悩みを吐露した。

一護「なるほど、狛村さんとは別の意味で東仙さんに関する悩みですか・・・ こればかりはあなた次第としか言えませんが、強いて言うならあなたが東仙さんにどうしたいかを考えるといいですよ。」

檜佐木「・・・俺が東仙隊長にどうしたいのか？」

一護「ええ、あなたは今東仙さんにどんな感情を抱いていますか？」

憎しみとかですか、それとも怒りですか？」

檜佐木「違う！俺は東仙隊長にそんな感情抱いてねえ!!」

檜佐木さんは俺の言葉に怒鳴ってくるが

一護「ならあなたはもう大丈夫ですね。」

俺は檜佐木さんに自分はもう大丈夫だと言う。

檜佐木「え？」

一護「憎しみや怒りを抱いていないのならあなたがとるべき行動は  
自ずとわかりますよ。自分が今なんで悩んでいるのかを理解すれば  
答えはわかりますよ。」

檜佐木「・・・俺の悩み・・・東仙隊長・・・裏切り・・・感謝している」

一護「焦らず、落ち着いて、一つ一つの要素をゆっくりでいいから  
まとめてください。」

俺は檜佐木さんにそう助言すると。

檜佐木「ありがとうございます、俺は東仙隊長を説得して見せます  
！」

一護「悩みが目標に代わって良かったです。」

檜佐木「ありがとうございます、失礼します！」

一護「では、檜佐木さん。松本さんに入室するように言ってくださ  
い。」

檜佐木「分かりました。乱菊さん、入ってください。」

一護「では松本さんあなたの悩みを言ってください。」

松本「・・・別に私に悩みはないですよ、強いて言うなら最近肩が  
こったr」一護「市丸ギンさんの事ですね？」松本「!!」

一護「これは他言無用でお願いしてもらいたいですけど私は心を  
読む能力がありましてそれであなただが市丸ギンのことで悩んでいる  
ことを理解したので今回追加して呼んだんです。」

俺は自分の能力の1つを開示してそちらに自分のことを言うよう  
にさせる。

松本「・・・そうよ、ギンとは幼馴染なのよ。」

予想通り乱菊さんが俺にギンに関する悩みを言った。

一護「なるほど、つまり要約するとあなたはギンさんのことが大好

きであると」

松本「どうしてそんな話が飛躍するんですか!!」

一護「いや、だって話を聞いているとギンさんの事好きとしか言っていないませんよ?」

松本「くくくッ!!」

乱菊さんは恥ずかしさのあまり顔を手で覆った。

一護「私から言えることは自分の好きという気持ちには多少なりとも素直になることですかね。私も似たような経験がありますから言いますが気持ちを押し込んで素直にならないと取り返しのつかないことになりますからね?」

松本「∴ 分かりました。私、ギンと話をして説得して見せます!」  
一護「それは良かったです、やはり恋する女性の顔というのは見て楽しいですね。」

松本「恥ずかしいので誰にも言わないでくださいね!!」

一護「分かりました。」

俺は乱菊さんからそう言われたのでそう約束した。



### 35話：「縁が繋がった結果だよ。」

side 一護

俺は八番隊副隊長の伊勢七緒さんと四番隊副隊長の虎徹勇音さんと一番隊副隊長の雀部長次郎と七番隊副隊長の射場鉄左衛門さんと親睦を深めている。

一護「まだ皆さんとは話をしつかりできていませんでしたね、黒崎一護と言います。よろしくお願いしますね。」

伊勢「こちらこそ、私は伊勢七緒と申します。今回の事件であなたを巻き込んでしまってすみませんね。」

一護「あなたに謝られるようなことはされていませんので気にしないでください。」

伊勢「そうは言っても… 今回のに関しては我々に落ち度がありますし…。」

一護「それはあの男の能力が面倒なのが原因ですし発動条件的にもどうしようもなかったんですから仕方ないですよ。」

伊勢「ですが…。」

一護「起こってしまったことをいちいち蒸し返すよりこれからどうするかを考えた方がいいですよ。少なくとも俺はそう思いますから。」

伊勢「そうですね、ではご協力お願いします。」

一護「ええ、こちらこそよろしくお願いします。」

俺は伊勢さんと仲が良くなった。

一護「虎徹さん、丘ではすみませんでしたね。」

勇音「いえいえ、私もあの時はすいませんでした！あなたは旅禍でもなんでもなかったんですから。」

一護「そうですね、良かったです。恨みとかをかってなくて。」

勇音「恨んでなんていませんよ。それに一護さんって私のことをデカイ女とか言ってきましたし。」

一護「？、背が高いこととどこが悪いんですか？」

勇音「… 私普通の女より背が高すぎるのでそのことで揶揄される

ことが多いんですよ。」

一護「そうですね、でも俺からすると長所だと思えますよ、女性しか入れない場所とかで背の高さが必要とする場面とかありますしね。そうやって負の側面しか見ないのはやめた方がいいですよ。」

俺は勇音さんが自分のコンプレックスを言っただけで卑下にしたのでポジティブなアドバイスを言う。

勇音「…そうですね、私にはできない場面があるのならいろいろ探してみますね！」

一護「悩みの種が少しでも減ってよかったです。」

勇音「はいっ！」

俺は勇音さんと仲が良くなった。

一護「雀部さん、破面と藍染との戦いではよろしくお願いしますね。今度の戦いではあなたの力が必要です。」

雀部「黒崎殿、私も元柳斎殿から言われましたからな、此度の戦いでは私も全力を出すとしましょう。」

一護「よろしくお願いしますね。俺達も全力で手伝いますから。」

雀部「ところで黒崎殿は洋風の趣味はおありですか？」

一護「洋風の趣味？フェンシングとかなら修行の一環で嗜んだりしていますか？」

俺は洋風の趣味と聞かれたのでフェンシングとかをやったりしたとかを言う

雀部「そうですね！私も特技がフェンシングですので色々趣味が合う方と話したいんですよ！」

一護「それなら、雨竜とかのほうが話が合うと思いますよ。あいつの家って洋風の屋敷であいつ自身フェンシングが得意ですし紅茶とか好きなんです。」

雀部「おお!!そうですね。では石田殿と話してきますので黒崎殿ありがとうございますね！」

一護「趣味の合う奴と会えてよかったですね。」

雀部「ええ！では石田殿と話してまいりますので失礼させていただきます。」

俺は雀部さんと仲が良くなり、雀部さんは雨竜と話し合い趣味の合う友人が出来た。

一護「射場さん、黒外套の時に俺は知っていましたけど改めて黒崎一護です、よろしくお願いします。」

射場「こちらこそ、黒崎さんのおかげで隊長との確執が無くなったので感謝しますよ。」

一護「それは良かったです。隊との信頼関係が良いのはいいことです。」

射場「それに東仙隊長のことで隊長が落ち込んでいたのを何とかしてくださいってくれてありがとうございます。」

一護「いえいえ、俺はただ自分の経験からの言葉を伝えたら偶々豹村さんの問題を解決できただけです。」

射場「それでも隊長を元気にしてくれたことを副隊長の儂からすれば礼の1つもしないなんて恥さらしいところですから。」

一護「わかりましたよ。」

俺は射場さんと仲が良くなった。

俺は瀨霊廷を散歩していると

???「頼む！待ってくれ!!」

一護「うん？この声は恋次か？」

俺は恋次の声がする方へ行くと一角と何やら話していた。

一角「だから他を当たれって言ってるんだろ！」

恋次「だけど、今は隊長が3名もいなくなっただ！卍解を使えるあんたが隊長になってくれれば隊員たちの士気も上がる！頼む！一角さん!!」

一角「無理だな俺は隊長になる資格がねえ。」

恋次「なんでですか!?!」

一角「今の俺は卍解が使える程度でしかねえ、卍解を使いこなして隊長になっているやつらと比べたら俺なんてまだまだ隊長なんて呼ばれる実力なんてないしな、俺はあいつとの戦いでそれを嫌というほどわからされた。」

恋次「あいつ?」

一角「黒い外套を被っていて顔とか分からなかったし声も道具を使つて変えていたから誰かわからなかった。」

恋次「そうっすか。うん？黒い外套？もしかして一護達の中の誰かかもしれないっすよ。」

一角「一護？」

恋次「今、瀨霊廷に客人として来ている連中です。次の戦いの敵のやつらと戦い慣れている凄腕の集団のリーダーです。」

一角「そうか、そりゃ鍛錬するのに不足ねえな。」

一護「お呼びかい？」

俺はタイミングを見て恋次たちの会話に入った。

恋次「一護か。何だよ、いるなら出て来いよな。」

一護「すまんすまん、なんか立て込んだ話っぽかったからな、少し様子見させてもらったよ。」

一角「てめえか手練れの集団のリーダーってのは、俺と手合わせしてくれねえか？」

一護「いいよ、俺も少し運動したいと思つていたし。場所を移そうか。」

恋次「俺もその立ち合いを見てもいいか？」

一護「別にいいよ、特に観られても困るようなもんじゃないし。」

一角「俺もだな。」

そう言つて俺達は誰にも迷惑にならない場所に移動した。

俺は肉体を強化して徒手空拳の構えを取る、一角も刀を抜いて鞘と一緒に構える、疑似二刀流の構えを取る。

一角「その構え。お前か！」

一護「アタリかな？」

俺がそう言つと一角が

一角「へっ！そうか！なら遠慮なくいかせてもらうぜ！」

一角はそう言つて一気に距離を詰めて刀を振るってくるが冷静に素手で受け止めジャブを放つが鞘で受け流しながら衝撃を体捌きで軽減して即座に距離をとつた。

一護「この3日で随分と戦い方が変わったな。」

一角「あたぼうよ！お前に言われた通り強くなるために自分に合った戦い方を模索したんだよ!!」

一護「それはいいことだな。」

以前の一角は技巧派の戦いに見えて真つ向勝負をしてきたが今は攻撃が効かず力で負けたとみるや即座に距離をとって勝ち筋を冷静に見極めるクレバーな戦い方に変わっている。

恋次「すげえ…」

恋次も今のたった一回の攻防の中にある内容を即座に理解してそう呟いた。

一角「下手に近距離に詰められるとこの前と変わらねえな！延びろ！『鬼灯丸』！」

一角は即座に斬魄刀を解放した。

それを見た俺は刀を抜いた。

一角「ようやく斬魄刀を抜いたか!」

一護「今のあんたに無手で戦うのは失礼だからな…いや俺は刀となくとも強いがそれでも成長したあんたに失礼だと思ったから斬魄刀で相手をしてあげるよ。」

一角「そりやありがてえな!」

一角はそう言っているがすり足で冷静に間合いを調整して槍を構えて待ちの姿勢に入った。

一護（いやホントに戦い方が変わったな、これは下手にツッコんだらこつちが一泡吹かせられるな。）

俺は刀一本の一刀流で相手をするので刀を両手で握って構える。

一護「行くぜ?」

一角「こいつ!」

俺は瞬歩で加速して距離を一瞬で詰めようとするが一角も瞬歩で距離を開けようとするが速度は俺の方が圧倒的に速いのですぐにやりが意味をなさない距離に詰めたが

一角「裂ける!『鬼灯丸』!」

一角は槍から三節棍に変えて白打と織り交ぜて変幻自在な戦いでしょうとしてくるが俺も刀と白打を組み合わせた真つ向勝負で相手

をする。

（1分後）

一角「はあ……はあ……くそっ！やっぱ……遠いな！」

一護「凄いな、たったの3日で俺相手に1分も持つなんて死に物狂いで鍛え直したんだな。」

俺は5秒もあれば倒せると思ったのにここまで持つとは思わず、賞賛の言葉を一角に言う。

一角「そりやありがてえな！だがこのままやられるのは俺の矜持が許さねえ！」

一護「じゃあ次の一撃で終わらせようか？」

一角「いいぜ」

俺は刀を構えて剣気を漲らせる。

一角「へっ！そう来なくちやな！」

俺達はそれ以上言葉を言わずに最後の激突をした。

一護『『九頭龍閃』』

俺は一瞬九斬の大技を放った。対する一角は

一角『『流星一烈』！』

一角は自信の持てる全ての槍術の技術と体捌きを組み合わせ自身身の渾身の力と最高速度の刺突のカウンターを放った。

技が激突したが俺の刺突が容易く一角の技を破り残りの八発の斬撃が一角を襲った。

一角「くそっ！や……っば、遠……い……な」

俺は即座に回道で回復させた。

一角「てめえ、いきなり回復すんなよ！気絶と意識の覚醒を同時に体験したわ！」

一護「貴重な体験じゃんか。」

一角「そうことじゃねえ！」

恋次「一護！一角さん！」

一護「恋次どうだった？俺らの戦い？」

一角「まっ！戦いというより一方的な蹂躪に近かったがな。」

恋次「そんなことないっすよ！凄かったです。」

一護「俺も油断していたし…鍛え直すか（ボソツ）」

一角「なんか言ったか一護？」

一護「いや何も？」

俺は小声で言ったことを一角が聞いてきたが俺は知らないふりをした。

一角「かあくく！それにしてもお前って本当につええな！」

一護「そりや俺の師匠が夜一さんと喜助と鉄裁さんだし。」

恋次「改めて聞くとホントにすげえな師匠のメンツ。」

一護「縁が繋がった結果だよ。」

俺はそう言った。

一角「一護、俺はいつかお前の全力を引き出してお前に勝つぜ！」

一護「そうか、まあ俺も全力を出せる相手がいるのは大歓迎だからな。」

恋次「一護、俺もだ！お前には恩があるが男として負けたくねえからな！」

一護「いいぞ」??「ほう。俺を抜きで面白れえこと言ってんじやねえか。」一護「ああ、ヤバい奴が来ちまった。」

俺達は振り向くと剣八とやちるがいた。

一角「た、隊長!？」

恋次「更木隊長なんでここに!!」

更木「なんでって、面白い戦いの気配を感じてきてみれば一護が居たからな、俺も混ぜてもらおうと思っただけ。そしたら俺を抜きで一護に勝つとか抜かしてやがったからな、いいか！一護と全力で戦って勝つのはこの俺だ！」

一角「へっ！いくら隊長でもそれは出来ねえ相談だ！一護に勝つのはこの俺だ！」

恋次「そうっすよ！いくら更木隊長でも抜け駆けはなしっすよ！」

更木「なら、まずは俺を倒してからだな！」

一護「とりあえず、剣八とも打ち合いたいんだけど…」

更木「じああ、早速戦うじやねえか一護お！」

俺は剣八とルールを決めて剣の打ち合いをした結果、瀨霊廷の一部

を吹き飛ばして剣八と俺は爺さんに滅茶苦茶怒られた。

その結果、瀨霊廷で俺は剣八と互角の戦いができることが知れ渡った。ただしヤバい奴認定されてしまった。



## 尸魂界編終了時の各自ステータス

バグー side

バグー以外は特に追加項目は無いんでバグーのみ

黒崎一護

この作品屈指のバグ、作者もこいつがここまでオカシクなるとは思わなかった。覚悟を決めたのでハーレムになることへの抵抗は特にないがヤンデレや喧嘩に関しては滅茶苦茶怒る。

追加された新能力

虚化

まだ自在に使うことはできないがアンロックされたために追記する。

この力の目覚めで素の状態イエロで鋼皮ソニードと響転ソニードを使用可能になった。

神通脚しんつうきやく

現状4歩法を使えるバグーのみ使用可能な歩法の極致、まだ完成したばつかなので修練を優先する気満々。

戦闘狂

精神性を強化。

バグーにとって今までは戦闘というのは格下を処理するという側面が強かったが剣八との戦いで同格と競い合う楽しさを知ったことで目覚めた。

基本的に他人に迷惑をかけないのであれば戦いも吝かではなくなった。

超直感

同じく剣八戦で覚醒させた能力カ。

今までは頭で考えてから動いていたので半歩の遅れがあったが超直感の獲得のおかげで考えと行動がほぼほぼタイムラグなく行動できるとなった。

野生の戦闘スタイル

これも剣八との戦いで会得した物

今までの詰将棋じみた戦いに野生の隙が出来たら一撃必殺の戦い

方が組み込まれた。

死神 side

山本元柳斎重國

総隊長

この作品においてバグーの出現でかつての戦闘狂時代の感覚が蘇った。ただし、他人の命も大事に扱うといったチヨコラテは残っている。

能力は原作とそう変わりないが既に完成しているのでそう問題ない。

雀部長次郎

この作品の虚刀虚の出現で全力を發揮できるようになった人。バグーとは友人を紹介してくれたのと本人が自身の特技と一緒にやれるので仲が良い。

能力は原作と大差ないがこちらもバグーブートキャンプで大幅強化します。

碎蜂

バグーとは定期的に夜一の写真を送ってもらうように色々手配するくらい仲が良い。

夜一の教えを碎蜂にアドバイスとして色々伝えたら同士認定された。

能力は原作と大差ないがこちらもバグーブートキャンプで大幅強化します。

吉良イヅル

ギンの裏切りでいろいろ悩んでいたらバグークリニックで心の整理が付けた。

能力は原作と大差ないがこちらもバグーブートキャンプで大幅強化します。

卯ノ花烈

バグーとは戦いが出来なかったので修業の際に手合わせを約束している。

あとバグーには剣八をおとすために協力してもらっている。

能力は原作と大差ないがこちらもバグーブートキャンプで大幅強化します。

虎徹勇音

自分のコンプレックスに関してアドバイスした結果多少は自分の背の高さに関しては気にしなくなった。

回道に関しての話が盛り上がった。

能力は原作と大差ないがこちらもバグーブートキャンプで大幅強化します。

朽木白夜

バグーへの恩義が天元突破している人。

ルキアの命の恩人でありルキアを滅茶苦茶強くしてくれてルキアの無実証明のために旅禍の汚名を背負ってまでルキアを助けてくれたのでどうやって恩を返せるか緋真と海燕（こっちは嫌々）に相談している。

能力は原作と大差ないがバグーブートキャンプで超強化する予定。

阿散井恋次

ルキアの恩があるがバグーの強さに憧憬のようなものを感じていつか勝ちたいと思っている。この作品でバグーの友人でありライバルの一人

能力は原作と大差ないがバグーブートキャンプで超強化する予定。

狛村左陣

東仙の裏切りを知って心に溜まった泥を抜き取ってくれた恩人。バグーからするとちよつと御節介を焼いた程度でしかないが本人からすると大恩に報いたいと思っている。

能力は原作と大差ないがバグーブートキャンプで超強化する予定。

射場鉄左衛門

隊長との確執等を取り除いてくれた恩人。バグーもこういう人は嫌いではないと思っっているくらい仲がいい。

能力が分からないのでこの人は基本裏方に回す予定。

京楽春水

基本的にバグーの周りの大人が自由奔放な夜一、やらかしの喜助、

くそうぜえ一心の三強のせいでもな大人だと敬語等を使うのでこの人は緩いんだけどやるべきことはやる大人なので基本敬語でしゃべるほどの常識人。

能力は原作と大差ないがこちらもバグーブートキャンプで大幅強化します。

伊勢七緒

今回の件で巻き込んでしまったことを謝罪していたがバグーからするとなにもされてないのに謝られても困るので話をして折り合いをつけた。鬼道に関する話で盛り上がった。

檜佐木修兵

東仙に関して悩んでいたところバグークリニツクの相談で悩みを東仙を説得して戻ってきてもらう。という目標に変えてくれた恩人。能力は原作と大差ないがこちらもバグーブートキャンプで大幅強化します。

日番谷冬獅郎

雛森に関して元気づけてくれたためバグーに雛森を任せました。バグーとは友人と呼べるほどに仲がいい。

能力は原作と大差ないがこちらもバグーブートキャンプで大幅強化します。

松本乱菊

ギンのことで悩んでいたところをバグーにバレて強制的にバグークリニツクのお悩み相談に参加したらバグーに色々揶揄われた。

能力は原作と大差ないがこちらもバグーブートキャンプで大幅強化します。

更木剣八

死神 side のバグーポジこいつは素の力でバグーと真つ向勝負ができるオカシイヤツ。

バグーもこいつも互いを好敵手ライバルと認識している。

能力

剣術

元々の獣じみた太刀筋にバグーの剣術を取り込んだ結果、剣八らし

さが残ったまま流麗で力強い剣術に昇華された。バグーと互角  
体術

こちらも剣術同様なため省かせてもらいます。

歩法

瞬歩

バグーが使っているのを見て無意識に模倣した。

バグーに速度負けしない速さ。

始解

野晒

超巨大な戦斧、剣八の力に耐える頑強さとバグーにも通じる重量がある。

剣八はこれを軽々振るいかつ刀身を掴んで筋力に任せて間合いを調整して戦うのでバグーも結構苦戦した。

卍解

まだ解放されていない。

???

斑目一角

黒外套を着ていた一護に色々言われた結果、卍解が使えることを隠すこともなくなり死にたがりな性格が改善されてバグーを倒すことを目標になった男。

戦い方も死に急ぎに近い戦い方から冷静に戦局を分析して勝ちを選ぶほどにクレバーな戦い方に変わった。

戦闘スタイル

原作同様に刀と鞘を使った疑似二刀流で戦うが技巧派な戦いになったことで単純に見えて厄介な戦い方に変わった。

始解

鬼灯丸

最弱の始解と周知の事実だったかこの作品だと脆くなくなっ  
て一角の戦い方にとても合う始解になった。

基本的には槍をメインで使うが槍での戦闘に不向きと判断したら三節棍を使って戦う。

白打も得意で武器と組み合わせた変幻自在な戦いが得意。

卍解

龍紋鬼灯丸

言わずと知れた最弱卍解だがこの作品では再生機能と修復時に強度が上がる能力がある。ちなみにまだこの卍解にはとある力がある。

涅マユリ

バグーとは同じ化学トークで大いに盛り上がりバグーの素養を知って娘のネムをバグーと結婚するように言った。

能力は原作と大差ないがこちらもバグーブーツキャンプで大幅強化します。

志波海燕

原作では故人、この作品では姪に駄々あまなダメ従兄妹。

バグーも一心を彷彿とさせるウザさのため基本的には雑な扱いになる。

能力は原作と大差ないがこちらもバグーブーツキャンプで大幅強化します。

志波都

原作では故人、海燕の妻、この作品では姪を可愛がる才色兼備の良妻。

能力はこちらもバグーブーツキャンプで大幅強化します。

始解

影縫い

見た目は刀身が黒い小太刀

影を操る能力がある。

白打も鬼道も得意。

浮竹十四郎

この作品では隊長職をやめたが十三隊に席自体はにおいて基本的には裏方に回っている。バグーたちとは藍染の策略阻止のために一緒に行動したので仲がいい。

能力は原作と大差ないがこちらもバグーブーツキャンプで大幅強化します。

new 嫁ーズ

涅ネム

身長

167 cm

体重

52 kg

スリーサイズ

B90

W60

H87

マユリの科学者としての興味によって強制的にバグーのハーレムに投入されたがバグーはもうこれは運命と受け入れてネムと色々話したりしている。

能力は原作と大差ないがこちらもバグーブートキャンプ等で大幅強化します。

雛森桃

身長

151 cm

体重

42 kg

スリーサイズ

B80

W59

H78

この作品では藍染に刺されていないのと藍染の偽造死体に三日月の刃が刺さりまくっていたので丘でバグーと相対したときに勘違いで殺意をぶつけたがバグーからは特に何ともなく即座に気絶させられた、その後自身の勘違いだと知ると謝りに行ったがその時にバグーに色々言われて自身が何を望んでいるのかわからずに自身のアイデンティティが無いことに精神崩壊しそうになるのをバグーに救われ

て即座に堕ちてヤンデレになりそうだったが嫁ーズの介入でヤンデレになることもなくバグーのハーレムの仲間入りした。

能力は原作と大差ないがこちらもバグーブートキャンプで大幅強化します。



## 破面篇までの修行篇

### 36話：「準備をしておくからな。」

side 一護

俺達は瀨霊廷に来て1週間が経って立て直しも終わり現世に戻って準備等を済ませておくと爺さんに伝えた。

一護「というわけで爺さん、俺らは戻って修練場とかの準備をしておくからな。そっちも終わったらルキアから場所を聞いて来てくれよな。」

山本「うむ、分かったぞ。此度の戦いを早急に終わりにせねばなるまいからな。こちらも準備をすぐに終わらせるので現世で待つておれ。」

一護「了解。じゃあ戻るぞ。」

バグーパーティ『了解!』

俺達は穿界門せんかいもんを通して現世に戻った。

そして俺達が最初にやることは…

浦原商店く

喜助「あ、あのなんでアタシは逆さまで宙吊り状態になっているんですか?」

一護「だって今回の事件の元凶だからな?何を言っているんだ?」

雨竜「ホントだよ、いくら何でも今回は擁護できませんからね?」

チャド「すみません、おとなしく一護にシバかれてください。」

織姫「そうですね!何かルキアさんを助けられたから良かったもののどうしてくれるんですか!!」

雨うらみ「今回ばかりはおとなしくしてくださいよ?」

リルカ「そうよ、非常識すぎるわ!!」

俺達はこの事件喜の元凶助の一人に文句を言っている最中だ。

一護「とりあえず俺に殴られるのは確定として喜助、俺と同じ虚の力を持つ者たちの居場所ってわかる?」

喜助「…! 分かりましたでは彼らに連絡を入れときますが彼ら

は死神達の事を嫌っているのだからここでは修行できませんよ。」

一護「わかつている。という訳でいっぺん死ねやああアアアア  
!!!」

俺は話すべきことを話すとある程度の力で喜助をぶん殴った。

喜助「ぐはああ!!」

喜助はぶっ飛んで気絶した。

喜助回復中

喜助「いや、酷い目に合いましたよ。」

一護「おつ?まだ殴られたいか?」

喜助「すみません、何でもないです。」

喜助はそういつて土下座してきた。

一護「とりあえず、死神sideの受け入れをしておけよな。」

喜助「わかりました、とりあえず彼らにも連絡しておきますね。」

一護「わかった、雨竜お前らはみんなが来た時に案内等を頼む、俺は虚の力の修行をしてくる。」

雨竜「分かったよ。」

チャド「わかった、一護も修行頑張つてこい。」

織姫「頑張つてね、一護君!」

雨「私達も手伝えたら手伝いに行きますよ。」

リルカ「怪我しないでね。」

一護「分かっている。」

喜助「彼らに連絡したんですけど一護さん一人であることが条件なんすけど大丈夫ですか?」

一護「問題ない元よりそのつもりだ。」

喜助「そうですね、ならこの日時にこの場所に来てほしいらしいです。」

俺は喜助に紙を受け取ると指定日時が記されていた。

一護「了解、さてこれで最後の素養の覚醒と鍛錬ができるな。」

俺はそう言つて修行の準備に入った。

side 尸魂界

山本「それでは、現世に修行しに行く者たちの第1陣の者たちを決

めようではないか。」

総隊長の言葉に隊長たちは気を引き締める。

山本「皆の者たちもすでに知っているが来るべき戦いの敵は今までは比にならぬ強さじゃ、故にかの者たちが使っている修練場を借り、己の強さを高めることを命じる！」

隊長たち『了解!』

隊長たちはそう返事をしたが

山本「じゃが、だからと言って瀨霊廷の警備を疎かにするわけにはいかぬそこでまず第一陣の選抜者達決めたいと思う。」

ピシッ!

一瞬で会議室の空気が変わった。

山本「儂は少し離れてもおぬしたちだったら特に警備に支障はないのでな。儂は現世に行かせてもらおうぞ。」

卯ノ花「総隊長?あなたは今瀨霊廷の実権を持っているのですから、今いなくなられるのは困ります。それに四番隊の実力が上がれば戦場で即座に回復できるのですから我ら四番隊を派遣するべきです。」

抜け駆けする総隊長を卯ノ花が阻止する。

白哉「私達はもとより使う約束をしていたので問題はないな。」

白哉は既に使用を約束していると言っている。

更木「おい!それはずりいだろ一護とはまだ戦いたりねえんだからよお!」

更木は白哉に文句を言う。

マユリ「私は作るのに忙しいからね、外しても構わんよ。」

マユリは修練器具と修練場の作成に取り掛かっているため外してくれと言っている。

海燕「ルキアがいるから俺らも行くのが自然つすよね?」

海燕も部下を理由にして参加権を獲得しようとしていた。

狛村「我々も修練したいが瀨霊廷の警備を疎かにするわけにはいかぬが...」

京楽「僕らも参加しないとまずいんだよね、何とかならないかな

？」

「貊村は参加はしたいが警備を緩めるわけにはいかないと唸っている。」

京楽も何とかならないかと考えている。

山本「……致し方ないのう、こうなつたら運試しといこうかのう。」

隊長『運試し？』

山本「うむ、前に黒崎一護達が遊びでやっていた物じゃがそれで恨みつくなく決めてたのじゃ。」

卯ノ花「して内容は？」

山本「数字のついた棒を箱に入れそれを抜いておつたぞ、それを今回は参加できるものとできないものに分けてやれば問題ない。一二番隊は参加しないとのことで抜いた十二隊で行おうと思うのじゃがどうじゃろう？」

隊長『問題ない』

隊長たちの同意を得て箱に参加の赤と参加できない何もついてない棒が半分ずつ入った箱が用意された。

山本「では同時に行くぞそれで文句はなしじゃ」

総隊長の言葉で一斉に抜いた。

赤：4、6、7、10、11、13

赤のメンツ『よしっ！』

参戦不可のメンツ『くうう！』

山本「仕方がないのう、次に持ち越しじゃな。次の抽選まではこちらで鍛錬をするでしょう。」

総隊長の言葉で今回はお開きになったが次が早く来ないか全員がうずうずしている。

side 一護

あれから二日後、俺はある集団に呼び出された日時場所に修行道具等を持ってきていた。

一護「……そろそろか」

俺は町はずれに倉庫が大量にある場所の一角に来ていた。

??? 「時間通りやな、見た目と違うて真面目やな。」

一護 「そういうあんたもそんな胡散臭そうな態度で時間通りだな。」  
俺は声が出た方に視線等を向けると金髪のおかつぱの大阪弁で話  
す男がいた。

??? 「ほな、行こか。ここじゃまだ話がでけへんしな」

一護 「ああ」

俺は返事をして男についていった。

少し歩くと一つの倉庫が目に入った。

一護 「あそこか？」

??? 「そうや、あそこで話をしよか。」

男はそう言つて倉庫に入つていったので俺も一緒に入る。

中に入ると一緒に入った男も含めて8人の男女がいた。

??? 「連れてきたで〜」

??? 「おっそいな阿保真子!!ちんたらし過ぎや!」

真子 「やかましいなひよ里!ちゃんと時間通りに連れてきたやろ  
!」

男はなんかうるさくてムカつく女に文句を言っている。

??? 「で、そいつか?俺達と同じ虚の力を持つ奴っていうのは?」

タンクトップの男が俺を見てそう言ってきたので挨拶をしておく。

一護 「初めまして俺は黒崎一護と言います。よろしくお願いします。」

俺は挨拶をしたが

ひよ里 「なに礼儀正しゆう挨拶してんねんムカつかんといて!なん  
であたいたちがこんな奴に稽古つけなあかんのや!」

チビがなんか言っているが無視して金髪の男に聞く。

一護 「え〜と、真子さん?どうしたら虚の力を制御して仮面を呼び  
出せるんですか?」

ひよ里 「無視すんな!!」

平子 「ハハハ!ひよ里を無視するのはなかなか骨のある男やな!ほ  
なちよいだけテストしよか。それと真子でええ」

一護 「分かったぜ。それとテスト?何をすればいいんだ?」

平子「簡単や、俺と少し打ち合いをするそれだけや。」  
一護「分かったぜ、真子」

俺は即座に死神化した。

平子「自分、ごつつ便利やな、そんじややろか。」  
俺は虚化獲得のテストが開始された。

37話：「お前をぶっ飛ばせば文句はないよな？」

side 浦原商店

雨竜「そろそろか。」

チャド「そうだな、準備は出来てるが一護がないからまとめられるか心配だが・・・」

織姫「大丈夫だよ、それに何時も一護君に頼ってばかりなのは駄目だと思うんだよ。」

雨「そうですね、それに一護さんは私達を信じているから任せてくれたんですよ！ならその信用に答えないと。」

リルカ「そうよ！私達は一護の仲間なんだからこれくらいやらないと」

チャド「・・・ そうだな、よし！何が何でも一護が信じて託したミッション必ず成し遂げて見せる！」

雨竜「ああ、そうだね！」

ルキア「来たぞ。」

雨竜達が話し合っているとルキア達が店に入ってきた。

入ってきたメンツは朽木ルキア、志波海燕、志波都、浮竹十四郎、朽木白夜、阿散井恋次、卯ノ花烈、虎徹勇音、山田花太郎、狛村左陣、射場鉄左衛門、更木剣八、草鹿やちる、班目一角、綾瀬川弓親、日番谷冬獅郎、松本乱菊の17名なのでとりあえず地下室に移動した。

↳地下室

雨竜「ここが僕たちが使っている修練場です。」

卯ノ花「なるほど、ここが・・・ ところで黒崎さんはどこにいますでしょうか？」

チャド「すみません、一護はある力の制御の修行でここにはいません。」

更木「なんだよお、一護の奴いねえのかよお。」

リルカ「大丈夫よ、ここには戦闘訓練用に無限組手ができる道具があるからそこで鍛錬して一護が来た時に強くやってあげばいいじゃない。」

剣八は一護がいないことにの文句を言うがすかさずリルカがフオローする。

更木「ほお、そりや良いな！じゃあ今はそれで我慢してやる。」  
やちる「リルリル、久しぶり〜」

リルカ「やちるじゃない、あなたも元気そうね。」

やちるはリルカとは一護が剣八との戦いで話していたので仲がいい。

雨竜「とりあえず、地獄昇柱からやりましょうか、こっちに来てください。」

雨竜達は全員で巨大な建造物に移動した。

〜地獄昇柱〜

雨竜「ここが最初にやる試練の地獄昇柱です。」

卯ノ花「ここでは何をするのでしようか？」

雨竜「それh」喜助「そこからはあっしの仕事ですよ、雨竜さん！」

雨竜「はいはい、では任せますよ。喜助さん」

喜助「ええ、では説明させていただきますね。」

(〜喜助説明中〜)

喜助「という訳ですが分からない所はありますか？」

卯ノ花「いえ、特にはございませんよ。」

更木「ごちやごちや言っているが要はこれを登れって事だろ？簡単じゃねえか。」

白哉「そう簡単に行けるとは兄は相変わらずだな。」

更木「ああ！なんだと!!」

織姫「落ち着いてくださいよ〜」

雨「ここで不用意な喧嘩をする場合出てってもらいますからね？」

喧嘩しかけた二人だが雨の出禁発言で流石に矛を収める。

雨竜「さて、真時玉で時間は確保されていますので存分に始めてください。」

雨竜の言葉で最初の修行が始まった。

side 一護

一護「さて、じゃあ始めますか。」



俺は二刀を抜いて構える。

平子「ほな俺もやりまつか。」

真子も刀を抜いて構える。

俺達はほぼ同時に走った。

一護「はあっ！」

俺は刀を振るって袈裟切りを放って脇差しで刺突を見舞う。

平子「シッ！」

真子も刀を振るって俺の袈裟切りを受け流して刺突を体捌きで回避してすぐに距離をとった。

平子「自分、強すぎでは？まだ16やろ？」

一護「ちよつとした道具で修行時間を大幅に確保したからな、それで死に物狂いで鍛えたんだよ！」

真子はたった1回の攻防で俺の強さを認識したらしく愚痴ってきたが俺は普通に返す。

平子「・・・こないに強いのに虚の力まで必要なのか？」

一護「むしろ制御しないと暴発するじゃん、暴走したらどうするよ？」

平子「それもそうやな。」

真子はそう言って刀を納刀したが

ひよ里「阿呆真子！もう言いうちがやる！」

チビがなんか言って仮面を出現させて真子を蹴飛ばしていた。

平子「何すんだ、ひよ里！」

ひよ里「何すんだってたつた一回しか打ち合うてへんのに何修行つける気になつてんねん!!うちはまだ認めてへんさかいな！」

そう言つて仮面を被つて刀を抜いて構える。

一護「面倒くさいがここでお前をぶっ飛ばせば文句はないよな？」

俺はチビにそう言うと

ひよ里「はっ！うちがそんな簡単にいてこませる思わんといてや！」

チビがそう言つて斬りかかるが剣八とかの剣速と比べたら欠伸が出るほどのノロさだったので少し遊んでやろうかと刀を構えるが

ギョク（おい：： ホワイト、殺<sup>や</sup>れ）

ホワイト（殺しはしねえが少し脅してやろうか。）

ユ（そうだな。）

一護「：： え？」

なんか中の人達の殺気がすごいけど：： そう思ったら

ホワイト『おい？ 黙って聞いていれば随分と舐めた態度をとるじゃねえか？』

仮面の軍勢『ツ!?!』

ホワイトは俺の体に乗っ取ると仮面が出現して神速の速さでチビの首を絞めて壁に叩きつけブローリーがベジータを岩盤にラリオットをかました感じのへこみを作ってしまったチビを気絶させた。

そして俺は原作の一護同様に全員に取り押さえられた。

平子「合格や、虚の押さえ方魂の芯まで叩き込んだる。」

平子は取り押さえられた俺に言ってくる。

一護「とりあえず、あのチビの手当てしなくていいのか？」

平子「せやったら問題あれへん、これでひよ里も少しは懲りるやろ。」

真子はそう言っているが後でこっさり治療するつもりだろ。

一護「とりあえず、何からすればいいんだ？」

平子「自分はもう既に死神の力はある意味で完成してるさかいな。これなら最初から虚の制御に入っても問題あれへんやろ。なんしか、ひよ里が起きるまで休んどってくれ」

そう言つて俺は取り押さえられた状態から解放された。

side 死神

修行が始まって4時間が経過した。

地獄昇柱に挑んでる選抜メンバーの死神たちはバグーと喜助が作った合作のその洗礼を味わっていた。：： というよりも

やちる「あつはは！ また溝があるよ！」ガコツ！

一角「おいっ！ またk」どごっ！ 一角「ぐはあ！」綾瀬川「一

角ううううううう!!!」恋次「一角さアアアアアアアん!!!」射場「一

角ううううううう!!!」花太郎「大丈夫ですか!!!」

十一番隊副隊長の草鹿やちるが罨である溝やボタンをボンバ力起動するので初回のはずなのにバグーが鍛錬するレベルの難易度に変化してしまっている。

ちなみに隊長格とルキアとバグーメンバーは初めて2時間でクリアしている。

白哉「… 凄まじい修行効果だ。」

白哉はその効果を驚いている。

海燕「そうだな、こんなに効果のある修行は初めてだな。」

海燕もまたその高さに驚いている。

卯ノ花「そうですね」

卯ノ花も内心で成長の実感を感じてワクワクしている。

ちなみに更木はリルカから聞いた虚像との無限組手ができる場所に行っている。

日番谷「それにしてもお前らはここでこんな修行をいつもしているのか？」

雨竜「いや、これに一護との模擬戦が偶にあるんだ。」

卯ノ花「それは羨ましいですね。」

織姫「そうは言っても私達の今の実力だときついんですからね。」

狛村「ところでこの後はどうすればよいのだ？」

狛村は雨竜に質問した。

雨竜「それはこの後は各自が好きな修行をすればいいですがそれはあれに聞けばいいですよ。」

隊長『あれ？』

隊長たちは雨竜の言葉に疑問符を浮かべると

???'『皆さまこの地下修煉場上位鍛錬場所へようこそ』

謎の宙へ動く機械がこちらに来て話しかけてきた。

雨竜「これはこの施設の各施設にあるものだけどこれは移動タイプで同中に設置してあるやつなんです。ちなみに名前は『MI』<sup>エムアイ</sup>です。」

MI『MI』と申します、私の仕事は皆さまに各施設への案内と施設の使い方と説明です。」

隊長『なるほど』

そして各隊長は各々やりたい修行を行える施設を確認すると各自移動した。

side 白哉

白哉「…ここか。」

私は地獄昇柱と呼ばれる試練を突破して肉体と霊圧を底上げした後、絡繰りの案内である施設に来た。

MI「ここは歩法訓練施設です。ここでは歩法での回避力と精密動作上昇を目的に作られました。」

MIと名乗る絡繰りの説明を聞いて私は装置を起動した。すると私の周りが足場の悪い岩場に変化した。

白哉「なるほど、足場が悪い状況で如何に速度を落とさずにかつ精密な動きを鍛えるということか。」

私が内容を理解すると

MI「では修業を開始します。」

私の周りから空に浮く謎の絡繰りが現れると光線が飛んできたので瞬歩で回避を始める。

side 狛村

狛村「ここか」

儂はあその後、案内された施設で耐久力と筋力強化の鍛錬ができる施設に来ている。

MI「ここでは重力を増加して高重力下の中素振りをしてもらい、その後に耐久力強化のため四方八方からくる攻撃の雨を耐えてもらいます。ご安心を過剰に攻撃することはありませんので。」

狛村「かたじけない」

儂はそう言ってどれくらい重力下で修行するかを決めるが

狛村「そういえばここでの現状の最高重力下で修行した者は誰なのだ？」

ふと疑問に思ったことを聞いたが

MI「はい、それは黒崎一護様で普段は2000倍での修行で現状の最高は10000倍です。」

狛村「…」

儂はその狂気ともいえる鍛錬に絶句してしまっただがそれほどの鍛錬を乗り越えて当たり前にしたからこそあれほどの実力を獲得したのだろう。

狛村「だが儂もそれくらい強くならなければ東仙の目を覚ますことなどできぬう！さあ！始めてくれ!!」

MI「分かりました、では重力トレーニング10倍スタートです。」

修行の開始が宣言されると儂の体が異常に重くなったが

狛村「この程度…！耐えきらねば話にならぬ！」

儂は気合で素振りを開始した。

side 卯ノ花

卯ノ花「ここですか？」

MI「はい、ここが武術等の鍛錬とそれらに関する書物がある施設です。」

私は各々が鍛錬のために解散して移動した施設に来ていた。

MI「では求める情報が書かれた本をお求めになられたら私に言うてください。」

卯ノ花「分かりました。」

私はそう言って近くにある本を手に取った。

卯ノ花「…これはなるほど、一護さんが良く使っている剣技などがまとめられているのですか。」

私が手に取ったのは一護さんが使っている剣術と剣技に関する本だった。

卯ノ花「ふむふむ、このようなものもあるのですか…そしてこちらには…なるほど織姫さん達が使っている女性が使うことを前提にした剣技をまとめたものですか。」

私は気が済むまで本を読んだ後知識のままの剣技を自分のものとするべくその施設内にある鍛錬場に移動した。

MI「ここでは物理攻撃を受けると即座に再生する自動人形を相手に剣技の鍛錬が出来ます。」

卯ノ花「分かりました。では早速始めてくれませんか？」

MI「分かりました、では始めます。」  
開始の宣言がなされると甲冑を纏った太刀を持った人形が現れて構える。

卯ノ花「ふふふ、人形ですがなかなかの気配ですね。誰を模したのでしょうか?」

私はついこぼした言葉に

MI「それは一護様を模していますが本人程の力はございません。あくまで剣技等を僅かに再現した物です。」

卯ノ花「それはそれはこれで僅かとは、いつか本人とも撃ち合いたいですね。」

私はMIさんの言葉について笑みを浮かべてしまったが人形が斬りかかってきたので意識を切り替えて私も斬りかかる。

side 剣八

更木「はっはああ!」

俺は今女から聞いた場所で刀を持った虚と戦いまくっている。

とりあえず100体以上を倒したがまだまだできるらしく一護はこんな楽しいものを使っていたのをズルいと思いつつも楽しいからどうでもいいと思いついに集中した。

side 浮竹・海燕

浮竹「いや、あの地獄昇柱の効果凄いね!全く苦しくなくなるなんて!!」

海燕「良かったすね、浮竹さん」

生まれつき重い病気を患っていた浮竹だが地獄昇柱の鍛錬効果で病気の元となった不純物が洗い流されてそれを純度の高い霊圧で補われた結果健康体になったのだ。

浮竹「これはどうすれば彼に恩を返せるのだろうか?」

海燕「そうっすね、後で叔父貴に聞きますかね?」

そうこう言っていると目的の施設についた。

MI「ようこそ、海燕様に浮竹様ここでは鬼道の鍛錬をする施設となっております。」

海燕「それにしても俺の甥っ子で冷静に考えなくてもヤバくね?合同

とは言えそんなすげえ施設を作るなんて。」

浮竹「それはそうだけど、そのおかげでいろいろな恩恵が受けられるんだから。」

海燕「そうっすけど。」

MI「ここでは鬼道に関する書物と鍛錬するための鍛錬場の二つで構成されている施設です。」

俺達は説明等を聞いて鍛錬を始める。

side日番谷

俺は卍解の鍛錬のためにある施設に来ている。

日番谷「ここか？」

MI「はい、ここは斬魄刀の鍛錬を行うために作られた施設です。」  
俺は基本的な見た目は他と大差ない見た目の施設に入ると斬魄刀を解放した。

日番谷「霜天に坐せ!『氷輪丸』!」

俺は斬魄刀を解放すると氷と水を支配する氷雪系最強に関する斬魄刀、氷輪丸を解放した。

更に俺は

日番谷「卍解『大紅蓮氷輪丸』!」

卍解すると俺の背に氷で出来た竜の翼が展開し右腕に氷の竜の手甲が装着された。

MI「では卍解修業コースを開始します。」

日番谷「うおおおおおおおおおおおお!!!」

俺は咆哮を上げてを上げて周囲からくる攻撃に対処した。

sideルキア

隊長の方々が各々が鍛錬をしているが私達は私達で鍛錬に励んでいた。

ルキア「はあっ!」

私が袖白雪を振るうが織姫も刀で受け止める。

そこに雨竜が矢を放ってくるが雨が銃弾を放って破壊した。

周りを見るとリルカと茶渡が組み手をしている。

ルキア「それにしても恋次たちは大丈夫であろうか？」

織姫「大丈夫だと思うよ？ 私達は私達で修行を頑張らないと」  
ルキア「それもそうだな。」

私は気持ちを切り替えて修行に集中する。

side 地獄昇柱組

隊長たちが訓練している傍らで今だ柱に足止めを喰らっているメンツはというと

一角「いいな！絶対に押すなよ！絶対に押すなよ！」

やちる「もくわかつているよ〜つるりんは心配性だな〜」

一角「このやり取り何回目だと思ってるんだ!!」

やちる「え〜3回？」

一角「389回目だ！バカやろおおおおお!!!」

やちる「も〜つるりんって細かいな〜」ドゴツ！『おっ』

一角とやちるが漫才やっているとまたやちるが罫を押してしまい全員が構えると霊圧が全快まで回復した。

やちると一角除く全員『ナイスっ!!』

やちる「やったあ！どお？つるりん！（ドヤア）」

一角「腹た〜ちよつと待て」

やちる「うん？どうしたのつるりん」ドドドドドドドドドドドドドドドド  
『えっ..』

霊圧が回復して喜んでいると上から油のような霊圧が雪崩のごとく落ちてきた。

男『うおあああああああああ!!!』

やちる「わああああい!!」

女性陣『きやあああああ!!!』

また振り出しに戻っていた。



38話：「勝者が敗者に指図される謂れはない。」

side 狛村

高重力下で素振りをはじめ2時間が経過した。

狛村「998!999!1000!はあ…はあ…」

儂は10倍の重力下で素振りをやり切った。

MI「狛村様、素振り、お疲れ様です。では少し休みましょうか。」

MI殿がそう言つて重力が元の状態に戻った。

狛村「はあ…はあ…これは確かに辛いが確実に儂の糧になるな。」

儂はただの素振りですえ、成長を感じる修行にますます熱が入りそうになるが今は冷静に体を休める。

MI「では狛村様飲み物です。お飲みください。」

狛村「かたじけない。」

儂は渡された飲み物を飲んだが程よい冷たさで飲みやすい。

狛村「ごくっ!…ごくっ!…ぷはあ!」

MI「狛村様、10分ほど休んだのちに耐久力強化の修行に入ります。」

狛村「うむ、わかった。」

儂は10分休憩したのち修行を再開した。

side 白哉

修行を始めて2時間が経過した

白哉「ふっ!はっ!」

私は瞬歩での高速移動での精密回避のキレが増している事が手に取るように分かった。

白哉(この数百年間の鍛錬が無駄ではないがこれほどの刺激ある鍛錬は初めてのことだ。)

すると、攻撃の速度が緩まり

MI「白夜様、まだ続けますか?」

と言ってきたので

白哉「…問題ない。続けてくれ。」

MI「分かりました。」

再び先ほどの速度に戻ったので集中を戻した。

side 海燕・浮竹

海燕「『氷牙征嵐』！『生々流転』！」

俺は吹雪を放つ氷雪系の鬼道と水の龍を放つ流水系の鬼道を斬魄刀で再現して放ちそれらが合わさり吹雪を纏う氷の龍になった。

的に直撃したが頑丈過ぎる上に壊れても即座に再生するので跡形もなく壊すレベルじゃないとあいつは倒せないので十分鍛錬に熱が入る。

浮竹「『牙気烈光』！」

浮竹さんも緑の波紋の円から複数の緑の閃光の放つ破道を放った。

浮竹「これ良いな！」

海燕「俺等だと、火力の出る破道は重宝しますからね。」

俺の斬魄刀の性質上直接的な攻撃力が鬼道系でも中間くらいで浮竹さんに至っては自分で火力を出すには少々工夫があるのでこういった鬼道はありがたい。

浮竹「次のやつも試してみよう！」

海燕「そうっすね」

長年の病気がなくなつてテンションが高くなつて休憩せずに次を試そうとするので

海燕「試すのはいいですけど少し休憩しましょう、流石に2時間もぶつとうしで鍛錬はやり過ぎですよ。」

浮竹「そ、そうか体が軽いものだからつい熱が入ってしまったよ。」

海燕「少し休憩したら続きをしましょう。」

MI「ではこちらで休憩してください」

すると、近くに休憩用の椅子と机が出てきて机に茶と茶菓子が出ていた。

海燕「いいのか？」

MI「はい、こういうのは案外頭も疲れるので甘いものを少し摂取するのが良いので。」

海燕「さつきから思ったけどお前つてただの機械なのか？」

MI「まあ、私は被造魂魄の技術を一部応用して作られていますから。」

浮竹「そうか、じゃあ遠慮なく頂かせてもらうよ。」

MI「どうぞ、ごゆっくり」

俺達は茶と茶菓子に舌鼓を打ちながら鬼道の話をした。

side 卯ノ花

卯ノ花「あはは、素晴らしいですね！これほど気持ちの高ぶりは久々です！」

私は機械仕掛けの人形とは言え同格の存在と久々の斬り合いに興奮している。

卯ノ花「次はこれですね、『龍巢閃・咬』！』」

全身の急所を攻撃する高速乱撃を一部のみを狙い集中攻撃する剣技を放った。

小柄な私の体格を生かした高速剣を最大限生かす剣技の中でも私が気に入った技の1つである。

人形「『盛炎のうねり』」

人形は自身を中心にして渦巻く炎のように前方広範囲を薙ぎ払う前面を覆う障壁としても機能する剣技で防ぐが一点集中の攻撃を凌ぎきれずに太刀が押し折れてしまった。

MI「終了です。」

卯ノ花「楽しいですね。」

MI「タオルです。」

卯ノ花「ありがとうございます。」

私は貰った手ぬぐいで汗をぬぐっていると今の戦いの感触を思い出していた。

卯ノ花（中々良い戦いでした。いつか彼や一護さんとも互角の斬り合いを試してみたいですね。）

さっきの人形の強さですら一護の強さをわずかしか再現できていないと聞いているので鍛錬を重ね彼らと互角の斬り合いをしたい欲求が増加したので少し休憩したらまた戦ろうと思った。

side 日番谷

日番谷「はああ！『竜霰架』!!」

俺は向かってくる炎に氷の十字架を放ったがほんの僅かに凍らせることは出来たが即座に溶けたので氷の障壁を展開して防ぎながら回避した。

日番谷「はあ…はあ…」

俺は乱れた息を整えながらも構えと集中を崩さない。

MI「日番谷様、少しご休憩した方がよろしいですよ。」

日番谷「いや、まだだ…」

俺はMIにそう言ったが

MI「いえ日番谷様、修行というのは休憩も含めて修行ですのだからだやみくもに自分を苛め抜けばいいというものではございませんよ。」

日番谷「…分かった。」

MI「焦らずとも、ここでは外と時間の流れが異なりますので十分な修行が出来ますよ。」

日番谷「…そうだったな、それじゃあ休ませてもらうぜ。」

MI「ええ、ごゆっくり。」

sideルキア

私は雨竜達と打ち合いを終えて休憩している。

ルキア「それにしても私達がクリアしてから更に4時間が経過したのにまだ恋次たちは登り切っておらぬのか？」

雨竜「流石に遅すぎないか？副隊長なら遅くても3、4時間もあればクリアできるはずだけど…」

私達はあまりの遅さに首を傾げていると

喜助「いや〜いまちよつと面倒なことが地獄昇柱で起こっていますそれで恋次さん達が攻略できていないのですよ。」

一同『面倒なこと？』

私達は喜助の発言に疑問符を浮かべた。

喜助「ええ、どういう訳か罫がドンバカ起動しまくるせいで一護さんが鍛錬するレベルの難易度に変化してしまっているんですよ。」

一同『……』

私達は事の深刻さに絶句してしまった。

喜助「ちよつと修理してきますね。」

一同『そうしてくれ』

私達は全く同時に言った。

喜助「あとルキアさん、一護さんから言われてた代物の試作品が出来たので後で試してくださいませんか？」

ルキア「?分かった。」

喜助はそう言って修理に行った。

side 地獄昇柱

一角「いいか！俺達がまずクリアするからお前はその後クリアしろよ!!」

やちる「えゝその間退屈じゃんゝ」

一角「おつ?今までさんざん罨を起動してたのに文句を言う口はこれかあゝ?」

やちる「いひやい、いひやいよくふるいん」

一角は罨を起動しまくるやちるにキレて頬を伸ばしている。

喜助「皆さくん、ちよつといいですかゝ」

恋次「あんたどうした?」

喜助「いえ、ちよつとですね、罨が起動しまくるせいです3時間ほど前から難易度が今の皆さんには荷が重すぎる難易度になってしまってますね。」

やちる除く一同『…』

足止め組はやちるに視線を集中させた。

喜助「ですので少しだけ待っていてくださいね。」

喜助はそう言ってメンテナンスに入った。

一角「よく少し休憩するとしてちよつと話をしようか副隊長?」

やちる「えゝどうしたの?つるりん?」

都「やちるさん?ちよつと向こうでお話をしましょうか?」

やちる「え、なんかミヤミヤ怖いよ?」

やちるはとりあえずこっぴどく怒られた。

ゝ1時間後ゝ

喜助「終わりましたよ」

喜助が修理を終えたというと

一角「わかったぜ。」

恋次「面倒かけてすまないな。」

射場「これで一気に行こうかあ」

山田「そうですね」

綾瀬川「僕も早くこんな油のような感触はうんざりだからね。」

男性陣はそう言っただけで、気が高めた。

都「いいですね、今回からは不用意に行動しないでくださいね。」

やちる「え」

都「い・い・で・す・ね？」

やちる「わ、分かったよ」

やちるは都に叱られていて

勇音「早く終わらせて隊長たちと同じ修行に参加しないと。」

乱菊「そうね、早く終わらせないと。」

女性陣もやる気を漲らせた。

一角「行くぞ!!」

一同「了解！」

やちる「はあ、いい」

全員は再び柱に突撃した。

sideルキア

1時間ほど経過して喜助が戻って来た。

喜助「終わりましたよ」

ルキア「そうか、そして試作品とは？」

私は戻ってきた試作品について聞くと

喜助「それは向こうに行きましようか。」

私達はこの地下にあるラボと呼ばれる工房に移動した。

喜助「これですね。」

ルキア「これは… 手甲や袴、腰に付けるポーチとベルト… それ

にブーツ？か？」

喜助「そうですね、死覇装のカスタムパーツですね。」

喜助は男性と女性の下着類と腰の部分が改良してある袴とブーツと腕に装着する手甲それに一護が使っているポーチのデザインが違うのとそれを止めるベルトが机に置かれた。

喜助「この手甲には霊圧を込めると腕力が上昇できます。同じくブーツには脚力を上昇できますね。下着類は着心地が良く量産し易い物が作れました。ポーチも結構な量を収納できますよ。」

喜助がそう言って説明してくるが相変わらずの技術力だな。

喜助「ちなみに尸魂界でもマユリさんが作っているので向こうでも普及していますよ。」

ルキア「そうか。」

私はそう言って奥の部屋に移動して受け取った、試作品を装備した  
が中々の着心地だな。

ルキア「着たぞ」

喜助「どうつすか？」

ルキア「特に変ということはないぞ？」

織姫「似合っているよ！」

雨「良いですよ。」

リルカ「良いじゃない！」

ルキア「そ、そうか」

織姫達に似合っていると言われて照れくさい気持ちになつてしまった。

喜助「ではその状態で修行をしてくださいね。装備の効果を発揮しておかしかつたりしたら言ってくださいね。」

ルキア「分かった。では修行を再開するために戻ろうか。」

織姫達『うん！』

私達は修行に戻る。

side 一護

俺はチビが起きるまでの間に他のメンツと仲を深めていた。

羅武「やっぱこの作品良いよな」

一護「そうつすね、俺も術とかのインスピレーションを貰うために創作物を読んだりしてますからね。結構色んな作品読んでますよ。」

羅武「そうか！お前つてあんまりこういうの読まなそうつて思ったけど話が合うな！」

一護「そうですか、それは良かったです。」

ローズ「一護、君もなかなかいい音色を響かせるね。」

一護「まあ、能力でいろいろ試行錯誤してたら音楽でいろいろできる能力を見つけたんでギターとかをやっていたら自然とうまくなっていたんですよ。ローズさん」

ローズ「偶にでいいから僕と一緒に演奏してくれないか？あとローズでいいよ。」

一護「分かったよ、ローズ」

羅武とは漫画関連でローズとは音楽関連で仲が良くなった。

ハッチ「その術はそんな感じですよ、一護さん。」

一護「むずいな、俺も結構術の理解が深くなったと思っただがまだまだだな。」

俺はハッチさんから五ご養よう蓋がい、匣はち遺い、六ろ方ほう風ふう陣じん、八はち叉ぎ双よう崖そうがいが習まっているが4つの内3つは直ぐにできたが4つ目の八はち叉ぎ双よう崖そうがいがやたらとむずく少し手こずっている。

ハッチ「一護さんは呑み込みが早いですね〜」

一護「伊達に喜助のスパルタ鬼道修行を乗り越えてきてないですよ。」

ハッチ「まあ、あの人は隠し事は多いですけど根は悪人ではないのですがね。」

一護「善悪を簡単にほっぽり捨てる好奇心を少しは抑えてほしいがな。」

ハッチ「そうですね。」

俺とハッチさんは術に関する話題で仲が良くなった。

リサ「それで一護はどうか？」

一護「・・・リサさん、俺は男ですけど、こういうものを読んだこと知るとあいつらが切れるのでやめてもらえませんか？」

リサ「リサで言い、なんや女おるんか？せっかく趣味が合いそうなのにな」



一護「興味があるのはいいけど、他人が嫌がるならすぐに引いた方がいいよ、変な誤解が発生するから。」

リサ「そうかい、せやけどうち諦めへんさかいな。何が何でもすめたるさかい。」

一護「へいへい、頑張れよな。」

俺はリサと変な友情が芽生えた。

六車「一護、お前の格闘技ってどんなのを使うんだ？」

一護「それはだな拳西……って感じで」

六車「そうか！俺は白打が得意だからな、あとで手合わせしてくれないか。」

一護「いいよ。」

俺は拳西と格闘技の話題で仲が良くなった。

白<sup>ましろ</sup>「ねえねえベリたんはさくどのヒーローが好き？」

一護「俺はベリたんではないですよ、でもそうですねこの中だところが好きですかね。」

白「わあ〜いベリたんと同じだ〜！」

白が抱き着いてくるが着ている服が体にぴっちりくっついていているライダースーツなので体の感触をもろに感じ取れるが織姫達に抱き着かれるのに慣れているので妹たちの相手をする感覚に近いのだが……

ギョク（おいつ！お前え、なにご主人に抱き着いているんですか！！そんな貧相な身体でご主人が興奮すると思ってるんですか！！てかそこ変われ！）

ホワイト（普段修行時に事ある毎に抱き着いているやつが何言ってるんだか？）

ギョク（それはそれ、これはこれ）

ユ（物は言いようだな。）

ギョク（おじさんは黙って！）

中の人達が漫才やっけてうるさい。

とりあえず、白とも仲が良く？なった。

一護「真子、あのチビ起きた？」

平子「まだだ一護、少し灸をすえすぎてな」

一護「わりいな」

平子「気にすんなよ、あれはひよ里が突つかかったのが悪いんやさかい」

真子はそう言っているがあれはどちらかと言えば中の人達が暴走した結果なので俺としては悪いことをしてしまった認識なのだがそれは今はおいて置き

一護「真子、お前らが良ければだが藍染との戦いを手伝ってくれないか？」

平子「なんや？俺達の力が無うても尸魂界のやつらがおるやろ？」

一護「それはそうなんだけど、どうしても敵戦力とこちらの主戦力の数が合わないんだよ。」

俺は自分たちの数とおおよその数を予想して真子に伝える。

平子「なるほどな、せやけど俺達は戦いに参加する理由はあれへんしな。」

一護「別に死神たちに協力しろとは言わない、そつちが参加するかは好きにしたらでいいから。でも何もせずに藍染に一発かます機会を捨てるのは真子たち次第だからな。」

平子「・・・そうかあ、それありかもな。(ボソツ)」

一護「なんか言った？」

平子「いや、なんも」

俺と真子は軽口をその後叩きあった。

〜30分後〜

ひよ里「ふあく、なんか氣い失うとつたけどうちはまだ認めてへん!!・・・は？」

チビの声が聞こえてきたけどそんなことはどうでもいい

一護「よしっ！上がり！」

平子「しもうた!!そこでそらあれへんやろ！」

羅武「真子！お前何やってんのお!?!お前じゃなきや一護止められなかつたんだぞ!!？」

ローズ「流石だね、そこでそんな奇策に来るとは」

ハッチ「はいまた一護さんが一番です。」

一護「よしっ！一番だし景品貰うぞ！」

リサ「ちよ、ちよい待ってや、あんたに情けはあれへんの!!？」

一護「勝者が敗者に指図される謂れはない。」

リサ「ぐはあ！」

六車「もつかいだ！負けっぱなしは性に合わねえ！」

白「そうだ！そうだ！」

一護「いいぜ！」

ひよ里「・・・なにやってんねん？」

一同『ボドゲ』

ハッチ「ひよ里さんが目を覚まさないので一護さんが持ってきていたボードゲームをしようとなりまして現状一護さんが一位を独走していていますね。」

ひよ里「そんなんを聞いてへん！なんでこいつとゲームなんてやってんねんって聞いてるんや!!」

平子「ひよ里、自分はホンマにやかましいな、そんなんこいつと仲良うなつたさかいやってるんやろ。ちゅうか自分も参加してこいつの独走止めるの手伝えや。」

ひよ里「はあ!?!なんでウチまでやらなあかんの嫌やで！あんた達だけでやつとつたらええやんか!!」

平子「そうか、ほな自分はそこでおとなしゅうしとってくれや、この一回やったらこいつの修行に入るさかいな。」

ひよ里「え・・・」

一護「とりあえず、話は終わったんなら最後の一回やって修行を終わらせてからまたやろうか。」

ハッチ除く一同『そうだな』

ハッチ「そうですね。」

ひよ里「ちよ、ちよ・・・とまって！」

一護「・・・なに？お前も参加したいの？」

ひよ里「う・・・うう・・・うちも・・・うちもやる!!」

チビも参加したボドゲをなつて親睦を深め終わったため修行を開

始した。

え？勝負の結果どうなったって？それはおまえらが好きにしたらいい。

### 39話：「初めからそう言え」

side 死神

真時玉の効果で1日経過した。

修行を終えた者たちはたまった汗を流すために修練場にある温泉施設に来ていた。

狛村「ふう、僅か1日でこれほどの鍛錬ができるとは思わなかった。」

白哉「同意する。これなら外で5日後に戻るがそれでも十分な量の鍛錬ができる。」

日番谷「おかげで卍解などを大幅に鍛えられた。」

海燕「戻ったら戻ったでそれに合わせた鍛錬になりそうだな。」

浮竹「ああ、そうだね。」

恋次「くそう、はやく俺達も早く参加したいっすよ。」

一角「羨ましいっすね、俺達は副隊長のせいで滅茶苦茶足止め喰らったので何とか柱を登り切ったつてのにそんなの間かされたら早くやりたくなるじゃないっすかあ。」

綾瀬川「全くだね、僕も近距離の対応力を磨いておきたいからね。」

一角「お前の斬魄刀は不意打ちが強みだからなああの状態で戦えないときついからな。」

綾瀬川「ああ、そうだね。」

実はリルカが綾瀬川の斬魄刀を一角たちに言ってしまったのだが特に嫌悪とか言わずに普通に良い能力などと言った言葉をかけてくれたので関りが変化することもなく、今まで通りの関係を維持している。

射場「縛道を鍛えられたら隊長の補助が出来そうやな。」

山田「それにしてもどうして僕がここにいるのでしょうか？いままさらですが・・・」

他のメンツが隊長格しかいないので山田は効いてくるが

狛村「何でも一護殿の斬魄刀の能力で他の斬魄刀の能力を模倣できるらしいのだがその中でも良い能力と総隊長殿に言っておったの

だ。」

山田「そ、そうだったんですか…。」

男性陣たちは各々が修行で得たものを共有して話が盛り上がった。…ちなみに剣八がなぜいないのかは皆さんはたぶん察せるだろう。

く女湯く

織姫「はあく生き返るねく」

雨「きつい修行の後はやはりこれですねく」

リルカ「そうねく」

勇音「私達はまだ修行に入れていませんけどこの温泉はいいですねく」

乱菊「すごいわねくここ温泉以外にも娯楽施設が色々あるのねく」

織姫「一護君と喜助さんがハイテンションで作ってましたからねく」

雨「ここの作成に二人は力を込めていましたからねく」

リルカ「でもそのおかげでこうして極楽気分になれるのよねく」

温泉に浸かっている面々はその効能で張り詰めた気持ちが緩んでらけていた。

やちる「ういく」

やちるもまたその効能で滅茶苦茶くつろいでいた。

都「いいですねく」

卯ノ花「ですねく」

都と卯ノ花はサウナでくつろいでいた。

都「それにしても、柱に上り切った後の修練はそれほどにきついのですか？」

卯ノ花「そうですねですが効果は確かにありますよ、私も素晴らしい剣技を習得できましたから。」

都「そうなんですか、私も早くやりたいですね。」

都は知らなかった卯ノ花が習得した剣技はバグーも愛用する最強の神速の殺人剣だということ。

織姫「それにしても乱菊さんって綺麗ですねく」

乱菊「そういう織姫達も綺麗じゃない。」

雨「私は勇音さんの背の高さが羨ましいですね。」

虎徹「そ、そうですか？私は少しは気にならなくなりましたけどそれでもこんなに大きいのはどうかと思いますよ。」

雨「だって一護さんの背が高いのでキスとかしにくいんですもん。」  
リルカ「そうね、少しくらい分けてくれない？」

虎徹「せ、接吻!？」

勇音は雨たちの積極性に顔を赤らめた。

乱菊「恋って良いわね」

乱菊はそんなことを言うが

織姫「え？乱菊さんも好きな人をいるのに何言っているんですか？」

乱菊「ゴホッ！ゴホッ！な、何言ってるのかしら!!」

雨「だって私達と同じ恋する人の気配をしているんですもん。」

リルカ「恋する乙女の感覚舐めないでねそれと恋している者の表情しているじゃない。」

乱菊「ちよ、ちよっと待ちなさいよ!？ち、近づいてこないでよ!!」

3人娘『誰！誰！誰なの!？』

乱菊「い、いやあああああ!!!」

ルキア「全く騒々しいな」

結局乱菊は3人娘の圧に負け自分の恋に関する話をする羽目になった、それを見ていたルキアは静かに一人で温泉を楽しんでいた。

side 海燕・浮竹・弓親・射場・虎徹。 山田

射場「ここですか？」

海燕「そうだけ、ここで鬼道の鍛錬ができる。とりあえず、破道は出来れば色々使えたら便利だからな。」

浮竹「俺達からすると攻撃力を補える破道はあつて損はないからね」

弓親「どんなのがあるんですか？」

海燕「全部はまだ知らないけど破道だけでもいろいろあつたぜ。」  
弓親「なるほど」

虎徹「回道の本もあると良いですけど」

山田「僕も破道は苦手なんで回道に関する知識を深めたいですね。」

6人は入って鬼道関連の修行に入る。

〜2時間後〜

弓親「ふむ、なら僕はこれかな？『八尺瓊勾玉』」

弓親は高熱の光の玉を機関銃ガトリングの如く打ちまくる破道を放った。

1発の威力は20番台だがそれを100発放つので威力は十分ある。

直撃した的は大きく抉れた。

弓親「いいね」

弓親はこの技の美しさを気に入った。

射場「どりやああ！『岩鉄壁』！」

射場は地面から鉄の硬さを持つ石壁を出現させた。

射場「はあ…はあ…なんて霊圧消費の術や…」

ちなみにこの技は喜助が作ったのだが対バグ一用に作った術の1つなので霊圧消費が馬鹿にならないレベルで並みの霊圧の持ち主が使うとすぐに枯渇するレベルの消費量なのだ。

したがって射場が肩で息をするのも当然なのだ。

勇音「え…つとこの術式だとより回復速度が上がりやすくなるけど消耗度が増えて…」

山田「副隊長、こつちにも病気の治療に効果のある回道の本がありますよ！」

勇音「そうですか、ではそちらも後でいいので貸してくださいませんか？」

山田「はい！」

勇音と山田も回道の本を読んで己の腕を磨いている。

海燕「いや〜みんなやっているね」

浮竹「それにしても偶に消費の激しすぎるのがあるのはなんでだ？」

MI「それは一護さんが作ったものと喜助さんが作った術が混合しているからです。」



MIは浮竹の疑問に分かりやすく説明した。

side 卯ノ花・一角・日番谷・都

卯ノ花「ここが昨日から私が鍛錬している修行場ですよ。」

日番谷「なるほどな、卍解の鍛錬が一段落が付いたから剣術の修練に来たが色々あるな。」

MI「ここは一護さんと喜助さん達が実践で使えると判断した武術の本しか存在しませんので好きな本をお読みください。」

一角「そうかい、ちなみに槍と三節棍の本はあるか？」

MI「はい、こちらにあります。」

一角はMIの指示に従って本を取りに行った。

都「小太刀術の本はあるのかしら？」

MI「それはこちらです。」

都「ありがとう。」

MIはちようど元に戻そうとしていた小太刀術の本を渡した。

日番谷「でりやあああああ!!!」

日番谷は高速の刺突を連続で放った。

卯ノ花「甘いですよ、『龍巻閃』りゅうかんせん」

卯ノ花は体を回転させて相手の攻撃を躲しながら背後に回り込み、遠心力を加えた一撃を背中や後頭部に食らわせる返し技として使って最も威力を發揮する剣技で迎え撃った。

日番谷「ぐはああ!」

MI「勝負あります。」

日番谷「くうう」

いくら殺傷力が低い木刀とは言え首に超高速且つ回転を加えた一撃なため動けずにいる。

MI「回復します。」

MIはそう言つて治療した。

日番谷「すまねえな」

MI「これが私の仕事ですので」

卯ノ花「ではもう一度行きましようか？」

日番谷「お願いします。」

日番谷は再び構えて卯ノ花に斬りかかっていた。

side 恋次・白哉・剣八・やちる

更木「昨日はつい楽しくて斬りまくったがそろそろ卍解の修行もしねえとな。」

白哉「兄はそもそも始解すら会得していないのに何を言っておる。」

更木「これを見てもそう言えるのか？呑め『野晒』」

剣八は白哉の煽りに対して始解を見せることで黙らせた。

白哉「・・・いつ会得した？」

更木「尸魂界で一護と戦った時だな、あの戦いはとても楽しかったぜえ。」

やちる「次は勝つもんね！剣ちゃん！」

白哉「貴様は貴様でなぜやる気なのだ？」

恋次「俺も早く卍解を修得しねえとな。」

MI「では皆さん、各々に会った修練場所を作成するので少しお待ちを」

MIがそう言うと即座に修練場所が作成され複数のMIが出てきた。

MI『では皆さんこちらです。』

各自がMIの指示に従って移動した。

更木「で？俺は何をするんだ？」

MI「剣八様は既に斬魄刀の具象化はしているので後は卍解の名を聞けばいいだけですよ。」

更木「だとよ」

やちる「うん、卍解の名前はね『晒曝』だよ！」

やちるは技術開発局が作った特殊な護符で斬魄刀に回帰することなく剣八に力を貸せるようになっていたので元氣よく名を教えた。

剣八「そうか！じゃあ行くぜ！卍解『晒曝』!!」

卍解と名を言うのと野晒の形状は始解時より劣化し、半分に折られた斧の形となる。一方で、剣八の肌は赤く染まり、角が生えて鬼のような形相になった。

剣八「：： すごいな、力が沸き上がってきやがる。・・・ 少しでも制御

をミスると体をぶつ壊しちまうほどに。」

剣八は荒れ狂う力に意識を持っていかれそうになるが何とか卍解を解除した。

更木「はあ、はあ、この俺が疲れるとはな…。だがあの力をもにすれば一護と更に楽しい戦いができるな！」

MI「では制御ができるまで心装の習得でもしますか？」

更木「・・・なんだそりゃ？」

MI「喜助様が開発した斬魄刀での新たな戦い方ですね。こちらは卍解程消耗等が少ないので長く戦えますよ。」

更木「・・・ほう、そりや良いな。でどうすんだ？」

MI「ではやちる様、あなたの力を解放してください。」

やちる「私はもう剣ちやんに力を貸しているよ？」

MI「いえ、斬魄刀の力ではなくてあなたが持つ死神の力ですよ。」

やちる「ああ！そっちか！分かったよ、出ておいで『三步剣獣』」

やちるは刀を抜いてそれを呼ぶと毛に覆われた動物のような前獣、黒い布をまとった骸骨のような後獣という二体の獣が現れる。

更木「ほう、中々強そうじゃねえか。」

MI「あなたの心装はこの二匹の獣を身に纏うことで身体能力が上昇して二本の剣での戦闘が出来ますよ。あと剣八様の場合は卍解とも併用できますが慣れないうちはしないほうがいいですよ、冗談抜きで体を壊しますので。」

更木「そりや良いな、てか戦いが楽しめなくなるから無茶はしねえよ。」

MI「そうですか、では体得の仕方を教えますね。」

更木「おう」

MIは剣八に心装のレクチャーをした。

MI「では白夜様、斬魄刀修練を開始します。」

白哉「頼むぞ」

MI「今回は始解の状態で卍解並みの刃の数にまで増やすでよろしいですね。」

白哉「そうだ。」

MI「ではこの的を始解で粉々にしてください。」

白哉の前に巨大な大岩が5つほど出現した。

MI「これは同時に粉々にしないと即再生しますので頑張ってくださいね。」

白哉「わかった、散れ『千本桜』」

白哉は始解を解放して大岩を破壊しにかかった。

MI「では恋次様斬術修行を開始しますね。」

恋次「俺は卍解を会得したいんすつけど…」

MI「今のあなただと、斬魄刀に完全には認めてもらえていませんので完全な卍解は修得できませんよ?」

恋次「マジか!てかなんであんなことまでわかるんだ!!」

MI「私にはそう言った機能が多数搭載されていますからね。その機能の1つで分かるんですよ。」

恋次「そ、そうかじゃあ他で鍛えてくるしかないか…」

MI「問題ないですよ、私単体でも専用施設で無くてもある程度はここでも鍛えられますから。」

恋次「そうかじゃあ頼む。」

MI「了解しました。ではまずは剣術から」

MIは竹刀を出現させた。

恋次「竹刀でいいのか?」

MI「問題ないです。これは特注で作られていますので真剣とも撃ち合えますから。」

恋次「わかったぜ!吠えろ!『蛇尾丸』!」

恋次は斬魄刀を解放して蛇腹剣に変化させた。

MI「では行きますよ。」

恋次「行くぜ!!」

恋次は蛇腹剣を伸ばして攻撃したがMIには足がないので移動の流れが予測できない上に動きで滑らかに移動して回避し竹刀で切りかかってくる。

恋次「くっ!」

恋次はすぐさま受け止めるがMIの斬撃は想像以上に重く受け止

めただけで足腰に負担がかかる。

MI「まだまだ行きますよ?」

MIがそう言うのと竹刀を滝に打たれるが如く連続で上段からの斬り下ろしが降り注ぐ。

恋次「うおおおおお!!!」

恋次は必死に受け止めるが耐えきれずにぶっ飛んだ。

恋次「く、くそおお...」

MI「今のを最低限受け止められなければ強くなれませんよ。」

恋次「もう一回だ...」

MI「ではこれを受け止めるために剣術、体術、鬼道、筋トレ、体幹トレ、ニングをしましょうか。それをクリアできれば先ほどのように吹き飛ばされずに済み尚且つ卍解も習得できますよ。」

恋次「... 分かったお願いします。」

恋次はそう言っ頭を下げた。

MI「ええ、まずは怪我の治療と腹ごしらえですね。」

MIはそう言っ食事などを出した。

MI「けがの治療をしながらこれを食べてください。この後の鍛錬がきついで」

恋次「分かりました。いただきます。」

恋次は素直に出された食事を食べ始めた、それを見たMIは恋次を治療し始めた。

sideルキア・乱菊

乱菊「これ良いわね、着心地とかが特に」

織姫「似合っていますよ。乱菊さん」

雨「... それにしても乱菊さん然り、織姫然り、リルカ然り胸が大きくて羨ましいですね。」

織姫「前にも言っただけど雨ちゃんも十分大きいよね?」

リルカ「むしろなんで僻んでいるのよ。」

雨「だって、私の場合喜助さんに成長を弄っようやくこのサイズなのに特にそういったことしてないのに大きい人たちに言われても困ります!!」

雨はそう言っているが

乱菊「大丈夫よ、だつてほら」

乱菊はそう言つてルキアを指す。

ルキア「な、なんだ？」

乱菊「何もしていないのに小さい子だっているんだからあんたはま  
だましなほうよ。」

雨「・・・それもそうですね。」

ルキア「雨よ、何故そこで私に憐みの視線を向ける!？」

side 狛村

狛村「うおおおおおおおおお!!!」

狛村は20倍という高重力下で四方からくる円状のビットの攻撃  
を捌いている。

だが高重力下での動きは想像以上の負担がかかるので基本は急所  
への攻撃を刀で防ぎそれ以外は気合で耐えるといった感じの防御で  
やり過ごしている。

MI「時間です。」

MIの宣言で攻撃が止み重力が解除された。

狛村「はあ・・・はあ・・・」

MI「飲み物とタオルです。」

狛村「かた・・・じけない・・・」

狛村は汗を拭いて飲み物を飲み干す。

MI「順調に成長していますね、これなら心装の習得ももうじきで  
きるかもしれませんね。」

MIは気になることを言った。

狛村「心装?」

MI「ええ、喜助さんが開発した卍解とは別の斬魄刀を使った戦闘  
方法ですよ。ものによっては卍解よりも多用するかもですよ。狛村  
様の場合は卍解をその身に纏うといった感じになるのでしょうか?」

狛村「なんと明王を我が身に纏うだと」

MI殿の言葉に儂は喜びを隠せないでいた。なにせ儂の卍解黒縄  
天譴明王は大型の敵にはとてつもなく有効だが小さい敵が相手では

どうしても捕えきれないでいる。それに儂が戦うであろう東仙もまた長年一緒に戦っていたため弱点も熟知しているために新たな力を得られるのは非常にいい朗報だった。

狛村「それは何か禁術のほうなものを使うのか？」

MI「いえ、あくまで使うのは斬魄刀だけですよ。」

狛村「それを聞いて安心した。」

儂としては禁術に頼ってまで力を得たくはなかったが使うのは斬魄刀だけと聞いて安心した。

MI「では休憩が終わったら心装の習得に入りますか？」

狛村「頼む！」

MI「分かりました。」

MI殿がそう言ったので儂は体を休めた。

side 一護

俺達は地下に来ると平子は

平子「そんじや、一護自分の意識を精神世界へ送るわ。そこで自分は内なる虚と戦うて屈服さすんや。」

一護「了解」

平子の修行内容はもうとっくに終わっているんだけど… あっ！ そうだ！虚修行の最中で平子達が俺と戦うから修行つけよう。

平子「ほな、行くねん」

平子はそう言って俺の顔面に手をかざすと意識が落ちた。そして俺はいつもの精神世界に来ていた。

… だけど

ギョク「いいわね！あの女の時は私がやるからね!!」

ホワイト「分かってるから黙ってる！」

ユ「全く、静かにやれんのか」

一護「… なにやってんの？」

ギョク「え？それっぽくホワイトが暴れてるように見えるために操作しているんですか？」

ホワイト「だな」

ユ「私は今回不参加だからどうしようかと考えている。」

一護「ふくん、そういえば例の件はどうなっているんだ？」

ユ「それに関してはこんな感じだ…」

一護「ふむふむ、どれもいいな。まあまだ時間あるしとりあえず保留にしようか。」

ユ「そうか」

俺はおっさんと心装のデザイン決めをしている間にホワイト達は平子達をボコつていた。

side 仮面の軍勢

平子「ハツチ、結界を十重で頼む」

ハツチ「分かりました。」

横になった一護を囲むように結界が10個重ね掛けで展開される。すると

一護? 『グルあああああ!!!』

仮面が装着された一護が跳び起きた。

そして刀を抜くと出刃包丁に変化させた。

平子「てことで拳西、まずはおまえから頼むで。」

六車「分かった」

六車はコンバットナイフを構えて虚一護を迎え撃とうとするが瞬きと反応する間もなく距離を詰められ大刀で切りかかっていた。

六車「っ!?!」

六車は反射で大刀を防いだが

六車(なんだ!この威力は!!?)

その異常な攻撃力に六車は怯んだが虚一護は容赦なく攻撃を加える。

一護? 『グルあああああ!!!』

虚一護は叫びながら大刀を小枝か何かを振り回すかのごとき連撃を放った。六車は何とかさばっているが

六車(くそっ!このままじゃじり貧だ!)「断風!」

刀身を炸裂させ虚一護と距離をとった。

六車「く、クソッ!なんて強さだ…」

六車は虚一護の強さに僅かな時間で息を切らしている。



一護「ぐるうう」

虚一護はうめき声を上げるが何故か追撃をしてこなかった。

六車「?何で攻撃してこないんだ?」

その状況に不思議がっていると

ひよ里「もうええ次や!ハッチ!拳西を出さんかい!!」

ひよ里はそう言って結界内に入っていった六車も強制的に出された。

六車「おいっ!いくらなんでも早すぎるだろっ!」

平子「阿保か、さすがに消耗が激しい奴を戦わせ続けたら自分のインターバルが増えるやろ。他のやつ負担を考えんかい。」

六車「くっ」

ひよ里「さあゝて次はうちのb」虚一護「グルあああああ!!!」

ひよ里が入ってくるのを確認すると虚一護が有無を言わずに斬りかかってくる。

ひよ里「くっ!なんでウチが入ってきたら滅茶苦茶な勢いで来るん!!?」

… まあ今の一護の精神世界内では

ギョク（おらあ!ぶっ殺してやるうううう!!!）

一護（殺すなよ!絶対に殺すなよ!!）

ギョク（止めないでください!!ご主人あいつはクロス）

一護（殺したら二度とお前の力は借りないぞ）

ギョク（そ、そんなく分かりましたよお殺しはしませんけど甚振るくらいはいいですよね?）

一護（それもダメ）

ギョク（ううく分かりましたよお一撃で戦闘不能にするならいいですよね）

一護（初めからそう言え。）

ギョク（えへへく後でデートしてくださいね）

一護（暴れているからプラマイゼロな）

ギョク（グハッ）

漫才をやっている。

虚一護は大刀を振るって三日月を飛ばした。

三日月は地面を切り裂きながらひよりに迫る。

ひよ里「くっ!」

ひよ里は間一髪で避ける。

虚一護「グルああああああ!!!」

虚一護は三日月ではなく斬撃を巨大化させて放ってきた。

ひよ里「うわああ!!!」

ひよ里は斬撃の余波でぶっ飛んだ。

間一髪で外れた斬撃は近くの岩山を吹き飛ばした。

平子「交代や、次はリサか」

リサ「任しときな」

リサが結界に入ると虚一護はひよ里からリサに標的に変更した。

虚一護「グルああああああ!!!」

虚一護は両腕から刀を生やして大刀と手刀と一緒に連撃を放ってきた。

きた。

リサ（こいつ!うち達が最も得意とする戦い方に合わせてきてる!?）

リサと外から見てる平子は虚一護が直感で自分たちの戦い方に合わせていることを理解した。

リサ「…なめんな!!」

リサは体捌きを洗練して致命傷を回避しながら虚一護に切りかかるが

ガキイン!!

虚一護は動フルート・ヴェーネアルテリエ静イエロ血装と鋼皮の合わせ技とその他諸々の強化能力で防御能力が異常の域に達しているので刃が通じないのだ。

リサ「無茶苦茶だ…!」

そう呟くのも仕方がないだろう。

虚一護「グルああああああ!!!」

虚一護が咆哮すると全身から刀身を生やしてそこから月輪を放ちまくった。

リサ「くっ…!」

リサはすべて回避しようとするが避けきれずに左腕を切り裂かれてしまった。

リサ「がああ!!」

平子「くっ!交代や!」

平子は急いでリサを交代させて羅武ラッブが結界に入った。

羅武「おいおい、まだ3分も経ってないぜ?」

虚一護「ぐるるう?」

虚一護が羅武の言葉に首を傾げる。

羅武「虚のお前に言ってもわからないが行くぜ!」

羅武は瞬歩で加速したが虚一護は神通脚でその速度を軽く上回った。

羅武「なっ!?!」

羅武は驚愕したが虚一護がその隙を見過ごすはずもなく腕の光る刀で切りかかる。

羅武「打ち砕け『天狗丸』!」

斬魄刀を解放して刀が巨大なトゲ付き棍棒に変化したがる刀で両断された。

羅武「ぐっ!」

重量が変化した際に虚一護が蹴りを入れてぶっ飛ばされた。

平子「次や!」

流星に虚一護の強さに平子も焦り始めた。

ローズ「一護、君にそんな姿は似合わないよ。」

ローズはそう言っつて刀を抜いたが

虚一護「グルあああああ!!!」

虚一護が大刀を黒刀に変化させて霊圧がさらに増加した。

ローズ「流星にこれは冗談では済まないよ...」

通常の刀剣の重量に変化したのか連続で振るって黒い斬撃を飛ばしまくる

ローズ「奏でろ『金沙羅』!」

ローズは斬魄刀を解放して金色の鞭に変化させた。

鞭を振るって斬撃を逸らし必死に回避するが虚一護はそんなのお

構いなしに斬撃の隙と回避する先に黒い斬撃を放ってくる。

ローズ「金沙羅奏曲第十一番『十六夜薔薇』！」

先端の薔薇を対象に刺し、ムチを指で演奏するように奏でる事で、その薔薇から楕円形の爆発を連続で起こす技を連続で奏でることで黒い斬撃を凌ごうとするが

虚一護「ぐららあああああ!!」

虚一護は咆哮を上げると瞬時に鞭を掴んでぶん回し岩場に叩きつけた。

ローズ「ぐはあ!!」

平子「くっ！俺が行く!!」

ローズが戦闘不能になり平子が出撃した。

平子は刀を抜いて瞬歩で加速しながら特殊な歩法で対象を幻惑しようとするが

虚一護「ぐあああ!!」

虚一護は超速の斬撃を放つが切り裂いたはずの平子は霞のように消え本物の平子が斬撃を放つがやはり効かない。

平子「くっ！『破道の六十三 雷吼炮』！」

雷を帯びたエネルギー波を放つがうっとしいとしか思っていない虚一護は

虚一護「ぐるるるるるるるるるるるあああああああああああ!!!!!!」

大声を上げて相殺した。

平子「ぐあああああ!!!」

余波でぶっ飛ばされて平子が壁に叩きつけられた。

白「ようやく白の出番だね、任せてよ!!」

平子「し、白……さ、最初からほ、本気でいけや」

白「わかった！へくんしくん！」

白は仮面を被って響転ソニードと瞬歩の融合歩法を使ってくるが一護の使うのと比べたら不完全なためすぐに追いついて殴るが南白は小柄さを生かして回避して距離を離すが黒刀を振るい黒い斬撃を放った。

白「白パンチ！」

霊圧を込めたパンチを放つが威力が雲泥の差なので容易くぶっ飛

ばされて右腕がボロボロになってしまった。

虚一護「ぐああああ!!!」

虚一護はすぐさま跳躍して白の頭上から上段から落下と重力を上乗せした月牙を纏わせた上段切りを見舞った。

白「くうう！まだだよ！」

白は融合歩法で回避した、虚一護の斬撃が大地を両断したが白は虚一護の真上に居た。

白「白きいいいいいく!!!」

全力の跳び蹴りを放った……が軽く掌で受け止めた。

虚一護「ぐるううう？」

虚一護はなんでそんな威力の技に大層な名前つけているんだ？という態度で白をヌンチャクのようにぶん回して地面にたたきつけまくってぶん投げた。

白「がはっ!!」

白は死にこそしなかったがそれでも戦闘不能判定のダメージを受けた。

虚一護「ぐああああああああ!!!!!!」

平子「こりやきつついな。」

平子達は泣き言を言いながらも暴走する一護を止めるために再び立ち上がった。

40話：「おかげさまでね。」

side 一護・仮面の軍勢

!!!

虚一護「ぐあああああああ!!!」

虚一護と戦い始めて20分が経過した。

平子「冗談にしてももう少しジョークがあってもええやろ…」

羅武「はあ… はあ… 残ったのは俺とローズと真子、それに拳西だけか…」

ローズ「はあ… このままだとまずいよ…」

拳西「おいつ！ハッチは結界の維持で戦闘できないしよ！このままだとじり貧だぞ!!」

平子「しゃあない、俺のは状況的に無理でも自分らのは問題あれへんさかいな、自分ら！卍解つこて一護を止めんかい!!」

平子は自分ののは使えないから虚化して拳西たちに卍解を使えと言った。

羅武「それしかないか…」

ローズ「仕方がないね、やるよ！」

拳西「こうなりや。出たところ勝負だ!!」

3人も腹をくくって霊圧を高める。

3人『卍解!!』

三人は同時に斬魄刀を解放した。

羅武『酒呑童子!!』

羅武の卍解は始解とそんなに変化はしていないが斬魄刀の質量を最大100倍にまで上げることができる能力がある。

ローズ『金沙羅舞踏団!!』

ローズの卍解は空中に指揮棒を持つ右手と空の左手、数十人の顔に金沙羅の先端部分がついた人形を召喚する。

能力は音楽を操り幻覚を見せる事、幻覚であっても実際にダメージが入る強力な技だが音が聞こえない相手には効果がなくなってしまう弱点がある。

拳西『鐵拳断風!!』

能力解放と共に両腕が風神の羽衣のような装甲に覆われ、斬魄刀がメリケンサックのような形状に変化する。

炸裂の威力が拳にこめられており、刃が触れている間無限に炸裂し続ける能力。

3人の卍解の凄まじい霊圧を浴びても虚一護はどこ吹く風だ。

平子「行くで…!!」

3人『おうっ!!』

平子の合図で一齐に突撃した。

羅武「うおおおおおおおおお!!!」

羅武は最初から最大質量にした状態で虚一護を攻撃したが神通脚しんつうぎやくで背後をとった。

ローズ『第二の演目【海流】』シー・ドリフト

人形が回転し、水流の壁に閉じ込める。

虚一護「ぐるうう!!」

平子の斬魄刀『逆撫』は通用しなかったがこれはなぜか通用した。

平子「ローズのは効いてる!?ならいける!!」

拳西「うおおおおおおお!!!」

拳西はメリケンサックを虚一護に押し付けると無限炸裂を叩き込んだ。

虚一護「グおっ!」

だが軽く吹っ飛んだがあまりダメージが効いているようには見えない。

平子「虚閃」セロ

平子は刀を水平にして虚閃を放つ

ローズ『第二の演目【火山の使者】!』プロメテウス

人形の作った火を相手にぶつける技を放ったが

虚一護「ぐあああああああ!!!」

大声を放ってかき消し虚閃を黒い斬撃で防いだ。

ローズ「不味いねえ今ので完全に金沙羅舞踏団を攻略された。」

平子「この状況で一番の有効打が使われへんくなるのはきついなあ」

拳西「何とか声を上げさせなくさせれば行けるか？」

羅武「とりあえず、俺と拳西と真子で何とかしないとな。」

4人は作戦を決め、再び突撃した。

一護（そろそろ終わらせようか。）

ギョク（ですね）

ホワイト（あの金髪の能力が効いたのは焦ったが結局それだけだったしなあ）

ユ（油断し過ぎだ）

俺達は真子たちとの蹂躪劇という名の修行をしたが流石にこれ以上は意味のないものになりそうだから終わらせよう。

一護（ホワイトく殺すなよな。）

ホワイト（分かっているわ!!）

ホワイトはそう言って最後の仕上げに入った。

平子「はああああ!!」

平子は虚化によって響転ソニードが使えるようになったので瞬歩との併用するが歩法の極致である神通脚で即座に平子を上回り黒刀で切り裂いて蹴り飛ばした。

平子「ぐああああ!!」

結界に叩きつけられ平子は気絶した。

羅武「うおおおお!!」

羅武は再び最大威力の攻撃をしたが虚一護はただの筋力で受け止めて卍の鏢でぶん殴った。

羅武「ぐはあ!!」

羅武は地面に叩きつけられて気絶した。

拳西「どりやああああ!!」

拳西は雄たけびを上げながら殴り掛かってくるが

殴った虚一護は蜃気楼のように消えた。

拳西「なっ!!?」

虚一護は隠密歩法『空蟬』を応用して作った『蜃気楼』という歩法技を使った。高速移動と急激な緩急をつけた足捌きで残像を生み出し、敵を幻惑する。非常に使い勝手が良い技で一護もお気に入りの技



の1つ。

拳西の動きが止まった瞬間に無防備な腹部に打撃を叩き込んで岩場に叩きつけた。

拳西「がはあ！」

ローズ「くつ！『第三の演目！デモンズスレイヤー【魔王殺し】』！」

人形が周り光の剣を持つ勇者が現れたが虚一護は地面を黒刀で叩きつけて爆音を発生させて音をかき消し地面を叩いて巻き上げた土砂を飛ばして攻撃した。

ローズ「うおおお!!」

演奏が止まった一瞬で神通脚で距離を詰めて顔面を殴って気絶させた。

虚一護「グルあああああ!!!…ぐるうう!!?」

虚一護は蹂躞劇を終えて勝利の雄たけびを上げるが突如苦しんで元の一護の姿に戻った。

〜30分後〜

仮面の軍勢『う…：…：…ううううん…：…』

仮面の軍勢は意識を取り戻した。

一護「目は覚めたか？」

ハッチ「そんなに怪我が酷くなくて良かったです。」

平子「一護、ハッチ…：…：…てことはなんとか虚を抑え込んだんやな。」

一護「おかげさまでね。あとは使用方法と制御さえできれば完璧だよ。」

平子「はっ！そらよかったわ…：…一護、自分なんか修行用の道具やらあるか？」

一護「あるけど…：…使いたいなの？」

平子「まあな、あの虚の強さにボコボコにやられたさかいな。鍛え直したいや。」

一護「いいよ、俺もなんか御礼したかったし。」

平子「そうか。」

俺達はそう言って少し休憩した。

side 死神

一護が修行を開始して1時間が経過したのでこちらでは10日が経過した。

隊長格たちは順調に実力を伸ばしている。

今は剣八を除いた隊長格がバグメンバーと模擬戦をしている。

白哉「はあっ！」

白哉は10日間で数を大幅に増やした千本桜の刃で斬りかかる。

雨竜「はあ！」

雨竜も矢を放って刃を叩き落とす。

チャド「『巨人の<sup>エル・ディレクト</sup>一撃』！」

霊圧を纏った打撃で海燕を攻撃したが

海燕「それならもう攻略済みだ！『雲波紋突き・曲』！」

海燕は水流を纏った捩花を斜め上から弧を描く様に突き下ろす事で、敵の攻撃の威力を相殺する突き技で相殺した。

卯ノ花「はあ!!」

卯ノ花は神速に近い速度の斬撃を放つ。

リルカ「てりやあああ!!!」

リルカも連続で蹴りを放って斬撃を相殺した。

浮竹「『金剛爆』!!」

浮竹は大爆発する火の玉を放つが

雨「はあああ!!」

二丁拳銃から青白い弾丸を放って相殺した。

粕村「うおおおおおおお!!!」

粕村は重力トレーニングの成果で上がった筋力で高威力の剛剣を振るってくるが

織姫「フツ!!」

織姫は刀で受け流して距離をとる。

白哉「・・・まさか10日でここまでの強さに至れるとは」

雨竜「まあでもまだ時間がありますからとことんやって強くなつて

おいた方がいいですよ。」

白哉「無論だ」

海燕「ふう、今回はこれくらいにしとくか？」

チャド「ですネ」

卯ノ花「楽しいですね、今度は誰と戦いまししょうか？」

リルカ「… さつきから思ったけど卯ノ花さんって戦闘狂か何かですか？」

卯ノ花「それはどうでしょうか？」

浮竹「いや、いい汗かいたよ！」

雨「そうですね、私もいい鍛錬が出来ました。」

狛村「手合わせ感謝する。」

織姫「いえいえ、私もですよ。」

隊長たちと雨竜たちは中を深めていた。

side 剣八

更木「はっはあ!!」

剣八の体に右にもこもこを模した衣装が左にホネホネを模した装甲が装着されている。そして両の手に右には野晒を片手剣サイズになった物と左に白骨の片刃剣が握られている。

剣八は剣を振るってその力を馴染ませていた。

MI「剣八様もう少しで心装を3分維持できますよ。」

更木「そうか!!」

やちる「頑張れ！剣ちゃん!!」

やちるも体を動かしながらも剣八を応援している。

side 一角・都

一角はいまMIと打ち合いをしている。

一角は槍で巧みにMIの攻撃を捌いているがMIはこの10日間で一角の戦闘スタイルをインプットしたので相性の良い正面突破のゴリ押し戦法に押されている。

MI「甘いです。」

MIは大上段からの攻撃を仕掛ける

一角「させねえ!『三連星』!!」

一角は反射に至るほどの槍捌きで3つの突きをほぼ同時に放った。上段の攻撃に3つの突きが当たるかと思っただがそれはフェイントで上段から下段の斬撃に変化した。

一角「なっ!?ぐはあ!!」

一角はフェイントに気づかず攻撃を喰らってしまった。

MI「勝負あります。」

一角「く、くそお!もっかいだ!!」

MI「分かりました。」

MIは再び竹刀を構える、一角もまた槍を構えた。

都「ふっ!!」

都は小太刀を連続で振るいMIに攻撃させないようにする。

MI「中々の身のこなしになってきましたね。」

MIはそう言っ小太刀を受け流して竹刀で突きを放った。

都「ゴほっ!」

竹刀の突きが喉に当たり都は息を詰めらせてしまい、過呼吸になってしまった。

MI「すみません、やり過ぎました。」

MIは謝罪しながら回復させた。

都「だ、大丈夫です。」

MI「少し休憩にしましょうか。」

MIはそう言っ都を休憩させた。

side弓親・射場

弓親「ふう、大分鬼道の類の手数が増えたな...今度は近接だな」  
弓親は鬼道の鍛錬を切り上げて近接の訓練をしに行った。

射場「うおおおりやあああああ!!!」

射場は重力訓練場で筋トレをした後耐久上昇訓練で縛道で攻撃を  
凌いでいる。

side勇音・山田

MI「この術式はここを改変すると効率は良くなりますけど靈力の  
消耗が高まってしまいますがこっちだと...」

勇音「なるほど...MIさんの説明はわかりやすいですね!」

MI「ありがとうございます。」

山田「すみません、ここはどうすればいいですか？」

MI「それはですね…。」

勇音と山田はMIの分かりやすい説明で回道を鍛えている。

side 恋次

恋次「997、998、999、1000!!」

恋次は10倍重力下の中素振りをし終わった。

MI「水です。」

MIは水を出してきた。

恋次「ありがとな」

ごくっ！ごくっ！と水を飲んで体を休める。

恋次「ぷはあ！とりあえず、俺の今の力はどれくらいだ？」

MI「断定はできませんがここに来る前よりは確実に成長していますよ。」

恋次「そうか、とりあえず次のやつを頼む。」

MI「分かりました。次は白打の訓練です。拳を構えてください。」

恋次「おう！」

恋次は拳を構えた。

〜1時間後〜

恋次「はあ…はあ…。」

MI「恋次様、白打の訓練終了です。」

恋次はMIにボコボコにされて地面に大の字になっている。

恋次「く、くそっ！なんでこんなに強いんだ？」

MI「私は一護様の戦闘力をベースに戦闘アルゴリズムが構築されていますから。まあ、完全とはいきませんが。」

MIは自分の元となった存在を言ったので恋次にさらなるやる気が漲った。

恋次「なるほどな！よしっならあんたに勝てないと一護に勝てないってことだな！」

MI「では次は剣術です。構えてください。」

MIは再び竹刀を構える。

恋次「おう！吠えろ！『蛇尾丸』!!」

恋次は蛇尾丸を構えてMIに突撃した。

side 一護・仮面ヴァイザードの軍勢

あの後一護は持つてきていた鍛錬器具を出して仮面の軍勢は一護と一緒に鍛錬をし始めた。

理由はこのままだとまた一護がし暴ぎ走したら今度こそ死ぬかもしれないと思ったからだ。

一護「あく真時玉があればもつと効率よく修行できるのに」

一護は愚痴を言いながらも体を動かす。

平子「そんな便利な物あるのに何で持つてこーへんかってん？」

一護「あれ、基本的に設置型だから外すと再設置に時間が掛かるし持ち運ぶのにも時間が掛かるから結構不便なのよ。」

平子「そうか、せやったらしやあないな。」

そう言いながらも平子も破道の修練をしている。

これは平子の斬魄刀の性質が藍染と似ていると言って藍染のほうが強いと感じた理由の高火力の破道をボンバカ撃つてきて厄介と言ったので平子も破道の修練を優先しているがそれ以外もきっちり修行している。

一護「とりあえず、仮面の出し方はわかったのはいいけど俺って今どれくらいの時間使えるんだ？」

平子「そら俺達が強なってから確認や。」

一護「それもそうか」

俺はそう言いながら特殊道具で筋トレをした。

それから4日は変わりなく寝泊まりでトレーニングをした。

side 死神

通常の時間軸で4日で一日5時間の鍛錬で50日計200日の鍛錬をして第一陣の死神たちは5日目で尸魂界に戻る日の最後の鍛錬をしている。ちなみに綾瀬川、山田、そして副隊長の勇音、射場、乱菊は先に戻って残りの隊長たちに連絡を入れたに行った。恋次と一角は出来る限り自分を鍛えたいので残っている。

白哉「… とりあえず、我らは今日の鍛錬が終わったら尸魂界に戻

り残りの隊長、副隊長がくることになっているのでな。すまないがまた任せてしまう。」

雨竜「問題ないですよ。」

雨竜達はそう言つて最終日の鍛錬を開始した。

side 白哉・卯ノ花・更木・狛村・日番谷

白哉「・・・では始めようか。」

この5人は現状十三隊の中でも心装を実践で使えるレベルで修得している。

更木「ちょうど俺もてめえらとあんたでこの力を使つて戦いたいと思つてたところだ。」

卯ノ花「ふふふ、私も鍛え直した剣技とこの力を強敵で試したいところでしたよ。」

狛村「ようやく手にした新たな力、貴公たちで試させてもらおう。」

日番谷「俺もこの力を試す相手が欲しかったところだ。」

白哉「・・・では行くぞ！」

更木「ああ!!」

卯ノ花「ええ」

狛村「うむ！」

日番谷「ああ！」

5人は斬魄刀を抜いて霊圧を高め心装を解放するための解号を言う。

5人『魂は更なる高みへ』

5人の霊圧が高まりその身を変化させた。

白哉『心装 始景・千本桜景義』

心装を解放した白哉は姿こそ終景・白帝剣のそれと大差ないように見えるが、白哉の身に隊長羽織に似た白い衣装を纏い、周りに六本の白い刀が浮かんでいる。

更木『心装 野晒・競の悦び』！

心装を解放した剣八は右に始解の野晒が片手剣サイズになった物を持ち、左に白骨の剣を握り左に骨の装甲が右に獣の毛皮のような衣類を身に纏った。

卯ノ花「『心装 皆尽・永久の慾』」

心装を解放した卯ノ花の身に纏っていた死覇装がまるで始解である肉雫みなづきと合わさったかのような形状へと変わっていき、背に浮かぶ球体は肉雫の目を思わせる形に変わっていた。

そして、その目から血のような液体が卯ノ花の手に注がれていくようにして集まり、やがてそれは歪な形の血の刀へと変化していった。

粕村「『心装 黒縄天譴明王・繫縛の真神』！」

心装を解放した粕村は上裸になりそこに明王の鎧が纏わり体毛が真っ赤に変化して手には明王の刀が出現した。

日番谷「『心装 大紅蓮氷輪丸・揺籃開花』」

心装を解放した日番谷の姿は氷の角が二本頭部に現れ背の翼は四枚が増えて卍解より生物感が増してスマートになり、両手両足も氷の甲殻に包まれている。そして、背後に浮かぶ氷の結晶が赤く染まっており、蒼い甲冑と隊長羽織と首元から天の羽衣を思わせる装飾が追加されている。手には卍解状態の鍰と始解の鎖鎌が付いた状態を精巧に再現した氷の刀を握った。

5人は心装を解放すると即座に地を蹴って加速して5名は激突した。

side 海燕・浮竹・一角

海燕「おっ？この感じはあの5人がぶつかり合ったな」

海燕は心装を解放して5人がぶつかり合ったことを感知した。

浮竹「心装か・・・早く俺も習得しないとな。」

海燕「まあそうですね、俺も習得は出来ましたが、まだ使用時間が30秒しか維持できていませんからね。」

海燕の力が形が決まっていけない水というものである以上その身に纏い定着させるといふのは困難を極めるので実践に投入はまだまだ先である。

一角「俺に至ってはMIにまだ一本も取れてねえから先ず一本とらないとな。」

一角もまた愚痴を言いながらもMIと手合わせしており打ち合いをしている。



MI「浮竹様の場合はずもそも斬魄刀の力が浮竹様の中にある者のせいで斬魄刀の力を身に纏えませんが別の物を代用しないといけませんので…」

浮竹「いや、おかげで自分が使えない理由がわかったから大丈夫だよ。」

MIは申し訳なさそうにそういうので浮竹がフォローする。

side 恋次

MI「恋次様、今回の50日でラストですのでできる限り仕上げていきましよう。」

恋次「分かりました。師匠」

MI「私はサポートAIですので師匠と呼ばれることはしていませんよ。」

恋次はMIが付きつきりで鍛えていたので師弟関係になっていた。

MI「まあ、とりあえず始めましようか。」

恋次「分かりました。」

恋次とMIは始解と竹刀を構えて激突した。

恋次「うおおおおお!!!」

恋次は瞬歩で加速して蛇尾丸を振るって斬りかかる。

対するMIは両手で竹刀を握り受けに回って冷静に攻撃を捌く。

恋次「まだまだ! 『蛇咬』!」

恋次は手首の返して蛇尾丸で二連撃を放った。

MI「では私も『稲魂』」

自身を中心として半円を描くように刃を振るって繰り出す高速五連撃で恋次の二撃を防いで残りの三撃を恋次に迫る。

恋次「くっ!」

恋次は瞬歩で即座に距離をとる。

恋次「こうなったら仕方がねえ… 卍解!」

恋次は霊圧を爆発的に高めた。

恋次「『狒狒王蛇尾丸』!」

解放された卍解は巨大な大蛇の骨格のようなデザインに変化した。

恋次「はあ!!」

恋次は蛇尾丸を振るってM Iを叩き潰しに来るがM Iは回避しながら跳躍して蛇尾丸に乗って恋次に接近したが恋次は狒狒王の連結を解除した……がM Iは空中を足場にして跳躍して恋次と距離を詰めた。

恋次 「『狒<sup>ひが</sup>牙<sup>ぜつこう</sup>絶咬』！」

分離した刃節を操作してM IにぶつけてくるがM Iは空中で見事な体捌きで回避した。

恋次 「まだまだだあ!! 『破道の三十一 赤<sup>しやつかほう</sup>火砲』！」

恋次は破道の制御が苦手だったがM Iの指導により制御に難がなくなつた。

恋次は左手から火の玉を連続で放つがM Iは竹刀で切り払いながら距離を詰める。

恋次は刃節を操作してM Iの背後から攻撃するが上空へ即座に跳躍して回避する。

恋次 「はあ…… はあ…… やっぱり強ええ」

M I 「お互いまだ、全力ではないのですからその評価はまだ早いですよ。」

M Iの強さに恋次はそう言うがM Iはまだ互いに全力を出していないのにその評価は早いという。

恋次 「そうでしたね、卍解! 『双王蛇尾丸』！」

恋次は真の卍解の名を言い右腕には大蛇の骨を纏い直刀を生やした「オロチ王」、左肩には強い腕力を持った巨大な狒狒の腕「狒狒王」を装着する。この卍解は現状、狛村左陣、班目一角と同じく自動修復機能を持つ卍解だ。

恋次 「行くぜ! 『オロチ王』！」

刀の刃の形状を枝刃に変化させてM Iに斬りかかる。

M Iは距離をとって斬撃を受けないようにして距離を離そうとする。

恋次 「逃がさねえ! 『狒狒王』！」

恋次は左の手を巨大化させてM Iを掴みにかかる。

M I 「『氷河征嵐』『生主流転』」



side 白哉・剣八・卯ノ花・狛村・日番谷

白哉「ふっ！」

白哉は白い刀を飛ばして攻撃した。

自在に飛来する刀で中・遠距離を支配する白哉の心装は今までの延長線上なため長時間の戦闘を可能にする心装とは相性が良かったが白哉が相対している者たちがこの程度で簡単に終わる相手ではないことを知っている。

更木「ひゃっはあ!!」

剣八の二刀流という手数で戦う戦闘スタイルと心装で上がった身体能力の組み合わせは鬼に金棒なので圧倒的な力の剛剣の連撃で白哉の白い刀を叩き落とすが

卯ノ花「フッフ、私を無視しないでください♡」

卯ノ花は血の刀で剣八に切りかかる。

更木「はっ！ようやくあの時の続きができるな!!」

剣八もまた卯ノ花と戦うために残りの3人から離れる。

狛村「はあああああ!!」

狛村は鍛え上げた臂力に明王の力が上乗せされている状態の振った刀から発せられる剣圧は空気を切り裂き飛ぶ斬撃と化している。

白哉「っ！」

白哉は即座に白い刀を操作して斬撃を防ぐが直撃こそ凌いだがあまりの威力に体が吹っ飛んだ。

日番谷「『氷槍乱舞』」

日番谷もまた氷の造形創造で多種多様な氷の武器で攻撃する。

日番谷のもまた始解と卍解は大差ないが卍解にはあらゆる概念凍結というとてもない権能に進化したけど味方も巻き込みかねないが心装は造形に特化しているので掃討や普段は広範囲の始解で戦い異常な敵には卍解、強敵には心装という感じに落ち着いた。

白哉「はっ！」

白哉は白い刀を手にとって氷の槍を叩き落とし

狛村「ぜりゃああ!!」

狛村は口から炎を吐いて氷の槍を溶かし刀と拳で叩き壊す。

更木「おらああああ!!」

剣八は両の剣で力強くも流麗でそれでいて獣じみた太刀筋の連撃で卯ノ花に切り刻みにかかる。

卯ノ花「はあ!」

卯ノ花もまた血の刀を振るい高速の連撃で二刀流の手数を上回る。

剣八「最高だぜ!この感じはよお!一護とはまた違った楽しさだぜ!!」

卯ノ花「ええ!私もですよ!!」

二人は笑顔でこの斬り合いを楽しんでいる。

更木「おらああああ!!」

両の刀の速度をさらに上げて卯ノ花の速度を超えようとするが卯ノ花は更木の動きを先読みしながら身のこなしの速さなどを洗練させて回避して血の刀で斬りかかる。

卯ノ花「『龍巢閃』!」

相手の全身を高速で連続攻撃する乱撃技を放った。

更木「うおおおおお!!!」

更木もまた両の剣で卯ノ花の剣技を相殺した。

卯ノ花「あははははははははは!!!!!!そう来なくては!困りますよ!!」

更木「俺もだ!!」

二人の戦いはさらに激化する。

白哉「はあ!」

白哉は白い刀を前方に雨の如く射出しまくる。

狛村「まだだ!『流星群』!!」

狛村は刀を高速で振るい白い刀の雨を捌き切る。

日番谷「『郡鳥氷柱』『氷龍の咆哮』」

日番谷もまた無数を氷柱が群鳥のように敵に飛ばしそれを冷気の濁流で加速させた。

白哉「...流石だ。」

白哉は一言そう言う。

狛村「貴公たちもさすがの強さだ。」



それは当然だろう。片方はずっと憬れた存在との全力との打ち合い、もう片方はかつて自身のせいで全力を封じさせてしまった心残りを今度は互いが全力を出して戦うという最高のシチュレーションという互いの精神的コンディションは最高潮に達しているのだから割って入れるのはどこぞのバグただ一人だけだろうがそのバグもこの状況を見たら止めようとしないうらうが。

更木「はっはあ!!」

更木が超速の連撃を放てば

卯ノ花「はっ!!」

卯ノ花もまた神速の斬撃で連撃を一太刀で防ぐ。

その逆もまた然りとこの戦いに収拾がつかなくなり始めた。

更木「はっはあ!最高だ!もつと続けようぜ!!」

卯ノ花「ええ!!さらにもつと!!」

戦いが長引けば互いに強くなり被害が出始めたので流星にやり過ぎだと判断した雨竜が一護に連絡を入れた。

side 一護

ppp... ppp... ppp

一護の携帯に着信が入った。

一護「... うん?俺か?」

平子「なんや?電話か?」

一護「そうらしいちよつと待っててくれ」

俺は電話に出ると雨竜の声が聞こえてきた。

雨竜『一護か?ちよつといいか?』

一護「何だ雨竜?問題発生か?」

雨竜『ああ、卯ノ花さんと剣八がぶつかり合って被害が出そうだからこつちに来て二人を止めてくれないか?』

何か想像以上に大事になっているんですけど

一護「むしろなんでそんな事態になつてんの?」

雨竜『心装を使った模擬戦で狛村さん、日番谷、朽木さん、剣八、卯ノ花さんが戦ったんだけど後者二人以外はある程度戦ったら大技で

決着したけど残りの二人が純粋な斬り合いで戦うから決着がつかなくて余波に巻き込まれそうだから一護が止めてくれないか。』

一護「・・・分かったよ。」

流石にそんな状況になっているなら俺としては止めたくないけど被害が始めかけているなら止めないとな。

一護「ごめん、ちよつと問題が発生したからちよつと戻るな。道具は使っていていいから後で戻ってくる。」

平子「俺達の事言えへんなら別にええで。」

平子達がそう言ったので俺は頷いて浦原商店に急いで戻った。



## 41話：「危なかつた。」

side 一護

俺は浦原商店に到着して地下室に移動した。

一護「雨竜、状況は？」

雨竜「一護、二人は地下の一面で戦闘中だ。」

一護「なるほど、じゃあ行ってくるな。卍解『天鎖斬月』『万華鏡

千変万華』」

俺は卍解して神通脚で現場に急行して二人が見えると月牙天衝を放った。

更木「誰だ!!」卯ノ花「どなたですか？」

二人は邪魔されて不機嫌なのは明白なので殺気をぶつけてくるのは当たり前だが

一護「お二人さん、楽しんで戦うのはいいけど周りのことも気にしてくれよな。危うく被害が出るところだよ。」

俺がそう言うと二人も理解してくれたが折角の戦いが中断されて不機嫌なので俺はこうも言った。

一護「という訳で特殊結界張ってそこで俺も含めた3人で乱戦しない？」

更木・卯ノ花「するぞ／＼しましょう!!」

二人は満面の笑みで了承した。

一護「という訳でルール決めてさつきみたいなことにならないようにしてからしよう。」

俺らはルールを決めて3人は向かい合った。

一護「はあっ!!」

俺は挨拶代わりに黒い斬撃を放つ。

更木「へっ!」

剣八は右の鉈のような斧で切り裂き

卯ノ花「はっ!」

卯ノ花は体のひねりを入れ威力を上げた斬撃を放って防いだ。

さらに爆炎を放ってブラインドにして神速で背後を取りに行く。

更木「どりやああ!!」

剣八は独楽のように大回転して竜巻を起し爆炎を防ぐとともに背後をとらせないようにする。

卯ノ花「『血装 血帯乱撃』」

卯ノ花さんも血を帯のようにしてそれらを高速で振るい爆炎をかき消しつつ俺を近寄せないようにする。

一護「相も変わらず、中々やるな。前に戦った時よりだいぶ強くなっていないか？」

更木「当たり前だ！あのM Iのやつから心装やら剣技やら習得したからな。まあ、欲を言えば卍解も制御できるまで行けたらよかったが。」

卯ノ花「おかげさまでより良い修行が出来ました。」

一護「それはよかった。」

俺達は軽口をたたき合うと再び激突した。

一護「月龍輪尾！」

俺は天鎖斬月を振るい強烈な力で素早く繰り出す抉り斬るような横薙ぎの一閃の技を放つ。

更木「はっはああああ!!!」

剣八は月輪を切り裂きながら突っ込んでくる。

卯ノ花さんも月輪を体捌きで回避しながら血の刀で斬りかかってくる。

俺は二刀を使い3つの剣撃を捌く。

更木「おいっ！一護お!!お前まだ全力じゃないだろ！」

剣八は野生の直感でそう言うってくるので誤魔化すことなくに使う。

一護「分かっているよ！少しくらい準備運動したって良いじゃないか。卍解！『万華鏡・天鎖斬月』！」

俺は二本の卍解を一つにまとめた。

見た目は天鎖斬月と大差ないが刀身が今まで光を吸収するようなマッドブラックだったのが万華鏡のガラスの要素を取り込んで真っ黒な刀身でありながら光を反射するような感じの刀身に變化した。

この状態だと今まで並行してやれなかったことが同時にできる。

とりあえず、柄の鎖に始解時の氷輪丸の月輪みたいな刃を再現した。

更木「そう来なくちやな！」

卯ノ花「行きますよ？」

一護「ああ」

俺は加速して二人の斬撃を受け止める。

剣八は二本の剣の連撃で一護に攻撃するが一護は氷の障壁で防いで黒い斬撃を即座に打ち込む……が卯ノ花が血の斬撃で相殺するので二人の得意の斬り合いに持ち込む。

卯ノ花「『龍槌閃』」

卯ノ花は上空から落ちて落下の加速を加えた斬撃を放とうとするが

一護「『牙突・参式』！」

一護は対空の牙突で迎撃した。構えから跳躍しつつ斜め上へ突き上げる技で卯ノ花を撃墜しようとする。

卯ノ花「っ！」

一瞬息を詰めさせたが即座に別の技に変えようとするが一護の速度が上回ったので刺突が肩に突き立った。

卯ノ花「ぐっ！」

一護はそのまま剣八に投げ飛ばした。

更木「うおおっ!!？」

流石の剣八も卯ノ花を受け止めらざるをえなかったので受け止めた。

卯ノ花「す、すみません……」

卯ノ花は動揺した態度で剣八にそう言うが

更木「気にすんな」

何とも思っていない態度にさすがの一護も

一護（鈍感ってこうもムカつくんだな）

明らかに自分を好いてくれている女性に対してその態度はないだろ？と自分を棚に上げて一護は思う。

とりあえず、一護と卯ノ花は意識を切り替えて再びぶつかり合う。

一護「はああ!!」

俺は黒い斬撃と炎の斬撃を飛ばした。

卯ノ花「はああ!」

卯ノ花もまた血の斬撃で迎撃した。

更木「ひゃつはああ!!」

剣八も斬撃を飛ばしながら接近してくる。

俺は斬撃を引き打ちしながら距離を離しながら穿月で矢を飛ばしまくる。

そして氷輪丸と捩花で水を広範囲に放ってそれを凍らして動きを封じてそこに・黄煌巖霊離宮と流刃若火の雷と炎を月牙に纏わせて放った。

更に念のために灰猫と千本桜景義も使って波状攻撃をする。

卯ノ花「くっ!」

更木「ちっ!」

一護「これで終わり!」

波状攻撃から風死の鎖を放って拘束した。

一護「いや〜危なかった。」

俺はそう言う

更木「嘘つけッ!お前あれでも結構余裕あったじゃねえかあ!もつかいだ!!」

剣八は俺が加減してたのを分かっているのか文句を言ってくるが

一護「無理言うな!そもそも俺が来たのはお前と卯ノ花さんが被害気にせずに暴れたからじゃねえか!!」

卯ノ花「それはすいませんが次は全力を出させますからね。」

卯ノ花さんも気配を変えて言ってくる。… 早急に俺も更なる高みに至らなければ。

とりあえず俺は二人の戦いを止められたので自身の修行に戻ると雨竜に行つて仮面<sup>ヴァイザード</sup>の軍勢がいる場所に戻った。

その後にはそれ以上の騒ぎは起こらなくて安心した。

side 尸魂界<sup>ソウルソサエティ</sup>

あの後白哉たちが尸魂界に戻つて隊長と副隊長達が集まつて情報

を共有した。

白哉「・・・が以上に我々が修練の果てに体得した物です。」

山本「・・・ほう、卍解とは異なる力か、中々強力ではあるな。」

粕村「ですが瞬間的な破壊力などは卍解が上です。」

雀部「なるほど、今まで始解では対応できなかつたが卍解では被害が出てしまう状況などで使えるのですな。」

日番谷「概ね、そんな感じですよ。」

涅「グヌヌ・・・浦原めえ、黒崎一護達を先に解析してそんなものを作っているとは・・・」

マユリはまた喜助に先を越されて悔しそうだがすぐにその力を解析して自分はどうか発展等させるか考え始めた。

隊員1「すみません、皆様会議中に！」

山本「どうした？」

隊員1「はっ！瀨霊廷に謎の侵入者が入り込んでおり隊員たちに怪我人が多数出ております！現状死人は出ていませんが・・・」

山本「なるほどのうこの状況で賊が出よつたか。全名に次ぐ即この事態を收拾せよ!!」

隊長たち『了解!』

即座に瞬歩で賊の捕縛に向かった。

その後、バウントと呼ばれる賊は2時間足らずで制圧された。なお生け捕りで十二番隊の手に渡されたのでその特性とドールと呼ばれる能力を解析出来てマユリは大喜びした。

そして残りの第二陣の隊長たちが現世に遠征を行った。

side 死神

碎蜂「・・・ここか」

不機嫌なのを隠そうともせず碎蜂が言った。

ちなみにメンツは雀部、碎蜂、大前田、イツル、雛森、京楽、伊勢、檜佐木、ネムと言ったメンバーだ。

大前田「なんでそんなに不機嫌なんです?、隊長」

碎蜂「そんなのここが奴の根城に決まっているからだろ!!」

碎蜂からすると夜一を奪った男の住処で修行というのは嫌以外の

何物でもないだろう。

雨竜「皆さん、お待ちしていました。」

雨竜は全員を出迎えた。

そして、全員を地下室に案内した。

雨竜「ここです。とりあえず、あるところではまずは最初の試練をクリアしてください。」

雨竜はそう言って全員を地獄昇柱に案内した。

く地獄昇柱く

雨竜「ここで基礎能力を向上してもらいます。」

雀部「報告にあつたやつですな。」

地獄昇柱の詳細は第一陣のメンバーから聞いているので早速始める。

その後、雀部、碎蜂、京楽は2時間ちよつとで、副隊長達も3時間ちよつとでクリアした。

そして各々が必要な修行のためM Iの指示のもと移動した。

side 碎蜂

M I「では碎蜂様、今日から私と特別講師も交えた修行頑張りましょう。」

碎蜂「特別講師?」

夜一「儂じゃよ、碎蜂」

碎蜂「よ、夜一様!」

自分の敬愛する夜一の登場に碎蜂は大慌てになる。

夜一「そう慌てるでない、とりあえず修行を開始するぞ。」

M I「補助は任せてください。」

碎蜂「はいっ!」

碎蜂は元氣よく返事をして修行を開始した。

side 京楽

M I「では京楽様、修行の補助をさせてもらいます。M Iと申しませう。」

京楽「そうかしこまらなくていいよ」

M I「いえ、私はこういう風にできていますのでお気になさらずに

では早速心装含めた修行を開始します。」

京楽「分かったよ。」

京楽はそう言って修行を開始した。

side 大前田・伊勢・イヅル

MI「では皆様の修行の補助をさせていただきますMIと申します。よろしく願います。」

伊勢「よろしく願います。」

イヅル「お願いします。」

大前田「おうっ！」

三人は三者三葉の挨拶した。

MI「では皆様には鬼道の習熟をしてもらいます。とりあえず大前田様は中級の鬼道を使い塾せるようになってもらいます。」

大前田「お、おうっ！わかったぜ！」

イヅル「僕たちは？」

MI「吉良様と伊勢様は十分に鬼道を使えますのでここにある術で好きなものを修得していただければいいですよ。分からないことがあれば他の私が補助に入ります。」

伊勢「他の私？」

MI「ええ、私は特殊な被造魂魄で特殊な機械に繋いでこれらの端末類を操作しているのですよ。」

MIは自分がどういった存在なのか言った。

伊勢「・・・しかしそれでは」

MI「あっ！ご心配なく定期的に外に出させていただいて自由にさせてもらっていますので。」

MIは決して自分は奴隷の類ではないと言ったので伊勢もそれ以上は何も言わなかった。

イヅル「では僕はあつちで色々見てきますね。」

MI「どうぞ」

イヅルたちはそう言って修行を開始した。

side 雀部

雀部「はあ!!」

雀部はレイピアから雷撃を放ってM Iを攻撃する。

M Iは竹刀で雷撃を切り払って防ぐ。

雀部は即座に瞬歩で距離を詰めて連続の刺突を見舞う。

M Iも竹刀で巧みに防ぐ。

雀部は雷撃も組み合わせて竹刀で防ぎきれないようにする。

3分ほど打ち合いをして雀部はM Iの竹刀を弾き飛ばした。

M I「終了ですね。」

雀部「こちらもよい打ち合いが出来ました。」

M I「それでは休憩が終えたら心装の習得並びに基礎能力の強化です  
ね。」

雀部「ええ」

雀部はM Iの構築した修行メニューを開始した。

sideネム・雛森・三人娘

M I「初めましてネムさん、M Iと言います。」

ネム「はい、M Iさんネムと言います。」

二人は被造魂魄同士なのですぐに仲が良くなった。

ジン太「へえ、あんたが俺や雨にM Iと同じ被造魂魄の姉ちゃん  
かあ」

ジン太も今回は同類が来るというので店番をしていた。

ネム「あなたがジン太ですね。」

ネムは何故かジン太のことは呼び捨てで呼ぶ。

雛森「そうですね、一護さんは今はいないんですか…。」

雨「そうですね、今はある力の修行をしているのでいいですね。」

織姫「とりあえず、私達は私達で修行しようよ!」

リルカ「そうですね、一護の隣に立ち続けるには強くなるしかないし  
ね。」

雛森は一護がないことに落ち込むが織姫達の言葉にやる気を漲  
らせる。

M I「それでは修行を開始しましょうか」

雛森「そういえば、M Iさんは男性でしょうか?それとも女性です  
か?」



雛森は疑問に思ったことをMIに言った。

MI「本体の私は女ですよ。」

MIは自分は女と言った。

雛森「…へえ、もしかしてあなたも一護さんのことお好きなんですかあ？」

雛森は一応は嫁いずのおかげで完全には病んでいないがそれでも一護に纏わりつく女にはいい思いをしていないのは事実だ。

MI「そうですね、私も一護様のごことは好きですよ。でも私だけは一護様のことを幸せにはできないので雛森様たちの力が必要ですよ。」

雛森「…分かりましたよ。でも一番は私ですからね！」

MI「望むところですよ。」

織姫「ちよっと！一番は私だからね!!」

雨「そうですよ!ぽつと出たちは出しゃばらないてくださいね!!」  
リルカ「ちよっと雨!それは禁止って昔から言ってるじゃない!!」  
ネム「私もマユリ様の指で一護様と添い遂げろと言われているので負けませんよ。」

6人はそう言いながらも修行をした。

side 檜佐木

檜佐木「うおおおおおおおおおお!!!!!!」

檜佐木は回転させた風死かせじを放った。!!!!!!

MIは竹刀で弾く。

即座にMIは距離を詰めて刺突を見舞う。

檜佐木「ぐああ!」

一瞬で肺の空気を1cc残らず吐き出したのですぐに呼吸をしている。

檜佐木「はあっ!はあっ!…」

MI「檜佐木様、いったん休憩しましょうか。」

MIは休憩するように言ったので体を休める。

檜佐木「MIさん、俺の斬魄刀が二刀の鎌じゃなくて鎖って本当で

すか？」

MI「ええ、檜佐木様のは鎖が本体で鎌はただのオマケにすぎません。」

檜佐木は修行開始前にMIから自身の斬魄刀について聞かされたので再び聞いた。

MI「鎖が本体ということは檜佐木様は縛道系が得意ということになりますからこの後の鬼道の修行は縛道を中心にやっていきましようか。」

檜佐木「はいっ!!」

檜佐木は返事をして己の恩師の目を覚ますために地獄の如き修行を行う。

く現実も地下も見どころがないので現実で5日後く

side 碎蜂

碎蜂「『無窮瞬間』!」

碎蜂は風を纏う瞬間を夜一の感覚的な指導とMIの理論的な説明で完成させたが今はMIと夜一のタッグを相手に技を磨いている。

夜一「はっ!」

夜一もまた瞬間・雷神戦形で雷速で動いて手刀を放ってくるが風で雷を逸らして手刀を止める。

夜一は更に蹴りを放ってくるので碎蜂は体捌きで回避して距離を離すが

MI「『縛道の六十二 百歩欄干』」

MIは棒状の霊圧を投げつけ相手を捕らえる術で碎蜂の動きを止めにかかると。

碎蜂「くっ!」

碎蜂は何とか強引に回避したが無理をしたので体力を大幅に削ってしまう。

碎蜂「はあっ... はあっ...」

夜一「碎蜂よ、おぬしどうして心装を併用して戦わぬ、折角おぬし

のは儂のと違って瞬間とも同時に使えるタイプなのじゃから。」

MI「そうですね、使いこなすための修行なのに使わなかったら修行になりませんよ。」

碎蜂「…」

MI「おそろくですが喜助様が作った心装を使いたくないのですか？」

夜一「何じゃそんなことかあやつが作った物が何じゃ次の戦いでそんなことを言っておれるほど敵は弱くないぞ」

碎蜂「… 魂は更なる高みへ」

流石の碎蜂も夜一にそう言われたら使わざるを得ないので心装を展開した。

心装を解放した碎蜂の姿は右腕全体が巨大化した雀蜂が覆っていて全身が黒のスーツに黄色の装甲がついている。

背中には蜂紋華<sup>ほうもんか</sup>の形状の翼があり高速飛行が可能で卍解で顔を覆っていた盾が背中に浮遊している。

碎蜂「… 『心装 雀蜂雷公鞭・欣幸ノ至り』」

本人は嫌々ながらも心装を展開して夜一たちとぶつかり合う。

side 雀部

MIと雀部は最後の仕上げに入っている。

雀部「『心装 黄煌殿靈離宮・武雷神』!!」

心装を解放した雀部の姿は白い鎧を身に纏い首周りには雲のような装飾と雷でできた天の羽衣がついていて背には雷でできた雷神の太鼓のようなものが浮かんでいる。

この状態の雀部は始解よりも強力な雷を放てより高精密な操作が可能になり肉体も雨雲と雷に変化させることも可能になったが卍解よりは攻撃範囲と威力は及ばない。

雀部「『雷神刀』」

雀部は右手に雷を圧縮した刀を生成した。

すぐさま超速戦闘に入る。MIもまた高速移動するが速度対決では分が悪いと判断したMIは受けに回った。

雀部「『電轟雷轟』」

周囲にギザギザした雷のような無数の斬撃を繰り出し、敵の全身を切り刻む技を放つ。

MI「『御影梅・渦桃』」

MIは自分を中心とした周囲に向けて連続して無数の連撃を放つ技と体を大きく捻り、反転しながら斬り付ける技を組み合わせて雷速の剣撃を凌ぎきるが

雀部「『火雷神』」

本来は全力の踏み込みからの神速の一閃の突進系の抜刀術の完成形の1つだが雀部の場合は己の体を雨雲に変化させてそれに雷を溜めて巨大化させて雷の龍に形状を変えて突撃する技になっている。

流石のMIもこの一撃で端末の1つが跡形もなく消し飛んでしまった。

MI「いや〜まさか端末をここまで消し炭にされるとは思いませんでしたよ。」

雀部「私も更なる高みへ至れましたよ。」

二人はそう言って技について話し合った。

side 檜佐木

檜佐木「ふっ!」

檜佐木は素振りや攻撃回避、それに防御などの修練を優先している。

檜佐木は一護とのカウンセリングとMIの助言などで己がやるべきことを理解してひたすら防御や縛道、回道を鍛え上げ自身にとって望んだ力を有する正解を会得できた。

MI「そこまでです。」

MIの言葉で檜佐木は素振りを止めた。

MI「檜佐木様、これにて私からのメニューは終了です。残りはあなたが自身の手で磨き上げてください。勿論分からない所があったら遠慮せずに相談してください。」

檜佐木「分かりました、ありがとうございました。先生」

MI「阿散井様にも言いましたが私は皆さまをサポートするために生み出されたので先生と呼ばれる存在ではありませんよ。」

MIは檜佐木にそう言うが檜佐木はお辞儀してまだ足りないと思ったところを鍛えるために歩き出した。

side 碎蜂

碎蜂「はあ！」

碎蜂は飛行能力と風と爆風を使って加速して右の針で刺突を放つ。夜一も黙って受けるようなこともせず雷を放って攻撃を相殺した。

MI「『破道の七十八 斬華輪』」

MIは竹刀を振るって飛ぶ斬撃を放った。

碎蜂は赤いハニカム構造のバリアを展開して防いで盾をMIにぶつけるが

夜一「ここまでじゃな」

夜一は動きが止まった一瞬で碎蜂との距離を詰めていた。

碎蜂「・・・参りました。」

碎蜂は降参した。

side 京楽

京楽「『魂は更なる高みへ』」

京楽は霊圧を高め新たな力を解放した。

京楽「『心装 花天狂骨・花魁道中いろは唄』」

心装を解放した京楽の姿は死覇装に自身の斬魄刀が実体化した「花天」の髪飾りやピンクの帯など、華やかな印象な装飾が追加させた見た目になった。

その後はMIと打ち合いをしたりして力の確認を完全に終えた。

残りの面々もまた己を鍛え上げて基礎能力を大幅に強化した。

そして時間が来たので全員、尸魂界に戻っていった。

side 尸魂界

修行を終え隊長達が終結してその結果を話し合う。

山本「では全員が心装を会得したのだな。」

総隊長やマユリもまた尸魂界に残っていたが心装を会得した者達から聞いたやり方で心装を修得していた。

山本「・・・しかし敵はどうも黒崎一護達を狙っているようじゃ、こ

れ以上あの者達を巻き込むわけにはいかぬ！各自その日が来るまで刃を研ぎ澄ませておけ!!」

隊長たち『了解!!』

隊長たちは返事をして解散した。

s i d e ???

空座町のとある場所

突如霊子が集まり人の形を形成した。

??? 「う…うくん」

## 修行編終了時の各自ステータス

バグーサイドはこの章はバグー以外に新たな力は得ていないので判明した能力を紹介する。

バグー

万華鏡・天鎖斬月

二つの卍解を一つにまとめた姿

基本的に天鎖斬月の姿だが刀身が光を吸収して鉄の輝きが無かったが万華鏡と融合して光を吸収して輝かないのに光を反射するという矛盾の刀身になっている。

能力は二つをまとめたもの。

死神サイド

こちらも追加された者のみ

雀部

心装

黄煌厳霊離宮・武雷神こうこうごんりょうりきゆう ぶらいしん

心装を解放した雀部の姿は白い鎧を身に纏い首周りには雲のような装飾と雷でできた天の羽衣がついていて背には雷でできた雷神の太鼓のようなものが浮かんでいる。

この状態の雀部は始解よりも強力な雷を放てより高精密な操作が可能になり肉体も雨雲と雷に変化させることも可能になったが卍解よりは攻撃範囲と威力は及ばない。

碎蜂

無窮瞬間

風の属性の瞬間の完成形の1つ

風を使った高速戦闘が可能。

心装

雀蜂雷公鞭・欣幸ノ至りじゃくほうらいこうべん きんこう いた

右腕全体が巨大化した雀蜂が覆っていて全身が黒のスーツに黄色の装甲がついている。

背中には蜂紋華ほうもんかの形状の翼があり高速飛行が可能で卍

解で顔を覆っていた盾が背中に浮遊している。

始解の能力と卍解の能力を足したようなものと毒と麻痺の力が使える。あとバリアを張れる。

卯ノ花 烈

心装

皆尽・永久の慾

解放すると死覇装がまるで始解である肉雫<sup>みなづき</sup>と合わさったかのような形状へと変わっていき、背に浮かぶ球体は肉雫<sup>みなづき</sup>の目を思わせる形に変わっていた。

血を操る能力と敵の生命力を吸い取る力がある。

朽木白夜

心装

始景・千本桜景義

解放した姿は終景・白帝剣のそれと大差ないように見えるが、白哉の身に隊長羽織に似た白い衣装を纏い、周りに六本の白い刀が浮かんでいる。

阿散井恋次

卍解

狒狒王蛇尾丸

これは修行途中で恋次が勝手にやった結果修得した物。

MIは呆れたがそれはそれで使える場面があるので状況に応じて真の卍解と使い分ける。

双王蛇尾丸

真の卍解タイムマン特化型で真つ向勝負の時にこの形態で戦う。

これには再生能力があるので壊れても修復される。

狛村左陣

心装

黒縄天譴明王・繫縛の真神

解放すると上裸になりそこに明王の鎧が纏わり体毛が真つ赤に変化して手には明王の刀が出現する。

京楽春水



心装

花天狂骨・花魁道中おいらんどうちゆういろは唄うた

解放すると死覇装に自身の斬魄刀が実体化した「花天」の髪飾りやピンクの帯など、華やかな印象な装飾が追加させた見た目になる。

能力は始解の能力を自身が好きに決められかつ身体能力が若干上がる。

始解のランダムでトリッキーな戦いとは別の強みが出来た姿である。

檜佐木

恩師を正気に戻すためにM Iの特訓メニューを行い続けて縛道と回道を鍛え上げた。

斬術と白打の訓練も行っているので守る戦いが得意になった。M Iの助言の元自身の斬魄刀との対話して屈服に成功した。

卍解

風死絞縄ふしのこうじょう

能力を一言で言うなら自身と対象を鎖で繋いで互いに相打ちになるまで霊圧を消耗させて不死身にする能力

日番谷冬獅郎

心装

大紅蓮氷輪丸・搖籃開花ようらんかいか

解放した姿は氷の角が二本頭部に現れ背の翼は四枚に増えて卍解より生物感が増してスマートになり、両手両足も氷の甲殻に包まれている。そして、背後に浮かぶ氷の結晶が赤く染まっており、蒼い甲冑と隊長羽織と首元から天の羽衣を思わせる装飾が追加されている。

能力は始解の能力の拡張で造形に特化した力。

更木剣八

卍解

晒曝のびあらし

解放すると野晒の形状は始解時より劣化し、半分には折られた斧の形となる。一方で、剣八の肌は赤く染まり、角が生えて鬼のような形相になる。

能力は身体強化に特化した力

心装

野晒・競くらの悦よろこび

解放すると右に始解の野晒が片手剣サイズになった物を持ち、左に白骨の剣を握り左に骨の装甲が右に獣の毛皮のような衣類を身に纏った。

そのほかの者たちも基本能力が大幅に上がっているがここでは割愛する。

new嫁ーズ

MI

一護と喜助が作ったサポート型の被造魂魄。一護は定期的に本体を連れて外の世界を案内している。他の嫁ーズは羨ましがっているが仕方がないと割り切っている。

基本的な戦闘能力は一護の力をベースに作られているためめっちゃ強い。

詳細は本体が出たときに。

# MEMORIES OF NOBODY

## 42話：「何だったけ？」

side 一護

真子達とトレーニングが終わり街を歩いていると、公園で虚に襲われている少女の整プラスがいたので

一護 「『破道の四 白雷』びやくらい」

俺は人差し指から白い光線状の雷を放って虚を倒した。

少女 「お、お兄ちゃん……」

一護 「大丈夫か？今お前を成仏させてやる。」

少女 「え？でも……」

一護 「このままだとまたさつきみたいにあの化け物に襲われるだけだからな。」

少女 「う、うん……分かったよお兄ちゃん」

整の承諾を受けて『魂葬』を使って成仏させた。

一護 「さて、なんか見たことあるやり取りだけど何だったけ？」

俺は前世？の記憶にあるBLEACHの記録を掘り返そうとすると突如謎の霊圧を感知したので死神化して急行した。

現場に行くに変な白い魂魄が広場に溢れかえっていた。

一護 （これって確か映画の……なるほどな。）

俺はこの状況を理解した。

この白い魂魄のようなものは欠魂ブランクと呼ばれるもので謂わば記憶の抜け殻のようなものだ。その抜け落ちた記憶は何処に行ったのかというところ

??? 「はっ！」

黄色のリボンをポニテにしている、死覇装を着ている黒髪の女が欠魂を倒している。

??? 「夕闇ゆうやみに誘いざなえ『弥勒丸』みろくまる」

女は斬魄刀を解放すると先端に小さな刃がついた錫杖に変形した。解放後は先端から発生させた竜巻を自在に操る能力を持ち、複数の敵

を一掃することができる。

??? 「はっ！」

女は竜巻を操って内側に雷が発生して竜巻と一緒に欠魂を一掃した。

??? 「よしっ!! いい感じ！」

一護 「ちよつといいか? 女」

俺は女に話しかける。

??? 「何? あんた」

一護 「俺は黒崎一護と言う。あんた死神だろ? なんでここにいる?」

??? ↓茜雫 「あたしは茜雫! ねえ一護、あたしを案内してよ！」

一護 「いいけど」

俺は茜雫とデートすることになった。

side 浦原商店

女性死神で一護の嫁達は3人娘とMIと一緒に話している。

ちなみに雨竜とチャドはいつもの雑用だ。

楽しく話していたら不意に何かを受信した。

3人娘 『はっ! 一護(君)(さん)に変な女がくっついてる気がする!』

MI 「私も感知しました。」

雛森 「私もです！」

ネム 「これが直感ってやつですね。」

雨竜 「何言ってるの?」

チャド 「ホントだな、一護が織姫達がいるのにそういうことすると思ってるのか?」

女性陣 『女の勘を舐めないでよね!!』

雨竜・チャド 「ご、ごめん/す、すまん」

二人は謝りながら一護に思念を送った。

二人 (頼むから問題を起こさないでよ (こすなよ)！)

二人の思いははたして一護に届くのだろうか。

side 尸魂界

一角「へっ！行くぜ射場さん！」  
槍を構える一角に射場は不思議な形状の刀を構える。

射場「おう！」

射場は高台で一角を見下ろしながら戦闘を開始しようとするが  
一角「……ん？何だ？ありやあ」

一角は見上げていたため射場よりも早く異変に気づけた。  
空に現世が映し出された。

side 一護

茜雫「あははっ！あんなのあるんだ！」

俺と茜雫は遊園地に遊びに来ていた。

一護「おいつ！はしゃぐのはいいがはぐれるなよ！」

俺は茜雫にそう言うがこいつの正体を知っているだけにそう言わざるを得ないんだ。

この女の正体はさつき大量に現れた欠魂の記憶の集合体『思念珠』だからだ。

映画では茜雫を狙った敵が現れてその野望を食い止めるために茜雫は消滅してしまうというものだ。

とりあえず、今は茜雫の相手をして彼女を一人にしないことだな。

俺達は遊園地で遊ぶことになったが茜雫は金を持っていないので俺の自腹だが特に問題なくバイト以外にも株やら投資やらやって金なら結構余裕がある。

茜雫「あはは！どれから乗る、一護！」

一護「そうだなあ、あれから乗るか。」

俺はそう言っつて茜雫とアトラクションに乗るために列に並んだ。

side 浦原商店

冬獅郎「……と言うことがあつてな、一護にもこのことを伝えておいてくれ」

雨竜「分かった、とりあえず、一護に電話するよ。」

冬獅郎と乱菊が尸魂界で起きたことを現世の浦原商店にいる者達に伝えるに来ていた。

織姫「それにしても一護君がこんな状況になるまで気が付かないな

んてあるのかな？」

雨「ですね、いつもならこのようなことが起こっているとすぐに解決に向かいそうなのに」

リルカ「一護って偶に何考えているかわからないときあるからね。」  
雛森「でもこの事件とは関係なく嫌な胸騒ぎが起きているんですが……」

ネム「先ほど感じたものですね。」

MI「とりあえず、私の機能で一護様の携帯にアクセスしましょう。」

雨竜「いつの間そんな機能がMIに搭載されたの？」

MI「この端末には一護様に内緒で喜助様がいくつかの機能を追加していました。」

チャド「とりあえず、喜助さんは後で一回一護に殴られた方がいいと思う。」

MIは一護の携帯にアクセスして一護の声が聞こえてきたと思うと

一護『おい！茜雫！楽しいのはわかったけどあまり俺から離れるな！』

茜雫『あはは！良いじゃない、ねえ一護！次どれに乗ろうか？』

この緊急時に何故か問題解決可能な男は自分たちが知らない女とデートしていた。

嫁ーズ『……』

一護の状況を知った嫁ーズの瞳から光が消えた……。ネムとMIは普通だが二人は感情の起伏が少ないのとそもそも嫉妬をするということがあまりないのでこの二人はいたって冷静ではあるが

織姫「フフフ、ドコノダレダロウ？イチゴグントデートスルナンテワタシタチデモマダナノニ」

雨「ソウデスヨ、ワタシタチガサキノハズナノニナニポットデノブンザイデイチゴサンとデートシテナダ、ゴラ」

リルカ「スコシオシオキシナイトイケナイカシラソノオンナ」

雛森「ソウデスネ、ハヤクソノオンナヲミツケダシテシマツシナイ

ト」

MI「私としては一護さん相手にデートまで持ち込めたその方も加えてしまえばいいと思うんですけど…」

ネム「そうですね、争うだけ一護さんに怒られるだけかと」

6人中、4人が暴走しかけていたが

コン「おっ！来たぞっ!!」

ルキア「日番谷隊長、すみません話の最中に」

日番谷「…いや、大丈夫だむしろいいタイミングできてくれた。」

ルキアとコンがきた、その理由は

コン「俺さ白い変な奴らの中に甲冑着た奴を見たんだ!」

実はルキアが担当していた場所でも欠魂が確認されコンが謎の甲冑を着た男を目撃していた。

喜助「…ほう、それはどんな姿でしたか?」

コン「えくと…確かあ〜」

コンは思い出そうとするが強制的に義魂丸に戻されて解析するために鉄裁に持つていかれた。

喜助「とりあえず、首謀者とその目的がよくわからない以上ここは一護さんが一緒にいる女性が今回の事件のカギになるでしょう。あの人はそう言う巨大な悪意などには何よりも敏感に反応しますからね。」

嫁一ズ『じゃあ一護(君)(さん)(様)を追跡しましょう!!』

ここぞとばかりに嫁一ズは堂々と一護をストーキングしようと言ってきたが

雨竜「それ、バレたら一護に怒られるからやめた方がいいと思うよ?」

チャド「そうだな、俺もそう思うぞ。」

雨竜とチャドがそう言って止めようとするが6人はそんなことお構いなしに行こうとして

喜助「MI、君は今出て行くのはなしですよ。」

MI「え?何故ですか?」

喜助「いやだってその姿で外を出歩かれるのは困りますから」

MI「あっ…」

MIの姿は修行時に使っている端末の1つなので人型でない以外に出すわけにはいかないので喜助が止めに入る。

MI「じゃあ本体でいくのは構いませんよね？」

喜助「その場合は再接続等で一護さんに迷惑が掛かりますがいいですか？」

MI「…今回はさすがにおとなしくしています。」

他の嫁ーズ『あとは任せてねMI!』

MI「皆さん、任せますよ。」

MIの無念を果たすために嫁ーズは一護追跡に入った。

両竜「とりあえず、問題を起こさないか僕たちも行くか」

チャド「…そうだな」

男二人もまた嫁ーズの暴走を止めるために監視役のためについていく。

side一護

茜雫とのデートを始めて3時間ちよつと経過したが茜雫を狙う連中の気配はしないが警戒は緩めないようにしつつも楽しんでいる。

俺達は今遊園地にあるショッピングエリアで昼飯を食いに来ている。

茜雫「どれにしようかな」

一護「そうだな」

俺はメニューを見ながらある視線に対して呆れている…なぜかと言うと

嫁ーズ『…』(ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ)

織姫達の凄まじい視線がささっているので食事に集中できないでいる。

一護(…お前ら、一応聞いておくけど何の用?)

ネム除く嫁ーズ(その女何!?)

一護(…うくん?ちよつとメンドイ状況に巻き込まれているやつ?)

俺は間違っていないことを言う



嫁ーズ（…）

一護（とりあえず俺の邪魔とかしないでね？）

嫁ーズ（…分かった（ました））

とりあえず女性陣はいいとして

一護（大丈夫か？お前ら）

雨竜（君はどうしてこんな状況を簡単に起こせる？）

チャド（おかげで少し織姫達が暴走していたからな。）

一護（それに関してはずまんな。）

俺は雨竜達にそう言っつて茜雫との食事を楽しんだ。

茜雫「うくん、一護！これ欲しい！」

一護「…赤いリボンかいぞ」

俺は茜雫の要望の赤いリボンを購入して茜雫に渡した。

一護「ほらよ」

茜雫「えへへ、ありがとう」

俺達はそのあとアトラクションをいくつか遊んだ後夕方になっておりもうじき日が沈みそうになったので

茜雫「ねえ、一護最後に観覧車に乗りたい！」

一護「いいぞ、早くしないと時間かかるぞ」

茜雫「そうだね、早く行くよ！」

俺達は走って観覧車に急いだ。

side 嫁ーズ&雨竜・チャド

謎の女とのデートを邪魔するなって一護と言われたその後は地獄のような光景で嫁ーズはストレスがマツハに溜まっていった。

ネムですら無意識の嫉妬を覚えるほどストレスが溜まっている。

それほどまでに甘酸っぱい空気になっているからだ。

織姫「う、ううう何あれえ私達もあんな風な空気のデートしたいよお」

雨「お、おかしいですね。私が本来最初にああ言うデートをするはずでしたのに…」

リルカ「…ずるいわ私達が先なのにい」

雛森「イチゴサンガジヤマヲスルナツテイツタイチゴサンガ

ジヤマヲスルナツテイツテイタ」

ネム「何でしょうかこれは？とてつもなく胸が苦しいです。」  
それを見ている男性陣は

雨竜「頼むからこれ以上女性陣にストレスを溜めないでくれよな僕たちの胃が壊れる。」

チャド「・・・雨竜、葉だ」

雨竜「ありがとう。」

雨竜はチャドから胃薬を貰った。

しばらくその後一護達の甘酸っぱいデートを唯々見せられて嫁の顔から感情が消え失せかけていた状態で小物売りの店から茜雫と一護が出てくると文字通りの無表情になった。

茜雫の髪留めに使われていたリボンが黄色から赤に変わっているのだから。

織姫「え？私達一護君からそんなプレゼント貰った覚えないんだけど？」

雨「おかしいですね、私達はなんでこんな苦しみを味わっているのでしょうか？」

リルカ「そうよね、なんでかしら？」

雛森「アハハア・・・一護さんにい纏わりついているうあの女あ・・・焼き払ってもおいしいですよええ？」

ネム「・・・あとでMIとも相談しましょう。この胸の苦しみが何なのかを。」

雨竜「そもそも、君たちが一護をストーキングしようとか言い出したんだから自業自得だろ？」

チャド「そうだな、俺達からはなんも言わんぞ。」

意気消沈状態の4人に男性陣は呆れて言った。

そして観覧車に乗ろうと移動する二人に行きたくはないがここまで来たら最後まで見ようと重い足を動かしてついていった。

side 一護

さてなんかついて来ている雨竜達は放っておいて俺と茜雫は観覧車に乗っている。

夕日がバツクになっていているからすげえ綺麗なんだよな。…景色が  
茜雫「うわあ、綺麗…」

一護「高いところ好きなのか？」

茜雫「そうだよ！なんでかは知らないけどね」

一護「…そうか」

俺は一言間が空いてしまいがちながらも茜雫の言葉に返答した。

一護「この後、お前はどうする？」

茜雫「うーん、墓参りかな？」

一護「そういうことじゃ無くてな。この後の寝泊まりはどうすかかって聞いているんだ。」

茜雫「そつちかあ、うーん特に考えてないかな」

まあ、わかってちやいたがこうなったら仕方がないな。

一護「じゃあ、俺の家に泊まっていけ」

茜雫「え？いいの？」

一護「身元不明の女を放置するわけにはいかないからな。」

茜雫「ありがとう、結構いいところあんじゃん」

一護「一言多いわ。」

俺達は何気ない会話をしながら遊園地を後にすると茜雫が墓参りしておきたいと言っていたので先に済ませるためにその墓に言ったのでが

???'「ふふふ、よう」一護「墓で武器を振り回すな」???'「ぶべらっ

!!

なんか変な男が墓で暴れようとしたので白打でシバいて気絶させる。

一護「おいっ！雨竜！こいつは任せるぞ！」

雨竜「分かったよ。どうも現在発生している問題に関連しているよ  
うだしね。」

俺は雨竜に謎の男を引き渡すと茜雫に墓参りは問題が終わってからにしようと言って家に戻った。

43話：「ここまでくれば問題ないだろう。」

side一護

謎の襲撃者から茜雫を護るために家に連れてきたのだがいつぞやのときみたいに正座されていた。

一護「ねえ、またなんで俺は正座されているんですか？」

真咲「うちのバカ息子がまた女の子をひっかけてくるからに決まっているからでしょう？」

一護「いや、あいつは面倒な状況に巻き込まれているから保護しただけだから」

俺はまた母と妹たちに責められているので弁解する。

夏梨「でも一兄いつて休み中にエム姉えと桃姉えにネム姉えつて数増やしてたのにまだ増やすの？」

一護「俺は好きで増やしているわけではないのですが」

遊子「お兄ちゃん、不純だよ！」

一護「遊子、またかい先に言っておくけど俺は誰にも手を出していないからな。」

真咲「…嘘は言ってないわね。良かったわ、既に手を出しておいて女の子を増やしていたら殴ってたわ。」

一護「そんなことするわけないでしょ、俺を何だと思ってるの？」

真咲「バカ息子？」

夏梨「誑し兄い」

遊子「チャラ男兄ちゃん」

一護「不名誉過ぎる…。」

とりあえず俺は母と妹たちを説得し終えて茜雫を寝かせる部屋に案内して俺は自室で寝た。

～次の日～

俺は茜雫と一緒に街を歩いている。

茜雫「ねえ、どこに行くの？」

一護「適当に散歩でもしようぜ。」

俺はそう言っつて茜雫と散歩を始める。

く2時間後く

俺と茜雫は他愛ない会話をしながら町を回っていると

少年の整フランスがいたので魂葬で成仏させようとする

茜雫「その子のお父さんを探そう。」

茜雫はそう言つて少年の手を取つて歩き出した。

俺も茜雫に周囲の索敵を疎かにしないようにしながらついていく。

一護「なあ、別にそいつを連れて行かなくても俺の力でどうとでもなるだろ？」

茜雫「そういうのは無粋だよ、この子はお父さんに会いたいつて言つてるんだから」

そう言つて茜雫は少年の手を引きながら周りの霊に案内してもらつて祭りをやっている神社に来た。

少年「お父さん!!」

少年は父親を呼びながら走つていった。

茜雫「ほらね、こっちのほうがいいじゃん」

茜雫はドヤつて俺に言つてきた。

一護「そうかい、それでこのあとどうする？」

茜雫「そうだね、あの親子を見てると私も… わた… しも」

そう言つて茜雫は言葉を詰まらせた。

茜雫「あ… れ… 私…」

一護「落ち着け」

俺は茜雫に冷静になるように茜雫に言った。

茜雫に落ち着かせていると右から光が発生したらそこに穿せん界門かいもんが出現した。

中から恋次、乱菊さん、ルキア、冬獅郎、浮竹さん、碎蜂、隠密機動の面々が出てきた。

浮竹「一護君、すまないがその子を渡してくれないか？」

一護「このタイミングってことはこいつの正体に気づいたって事か？」

浮竹「ああ、欠魂ブランクの思念珠である彼女を利用するのが君が捕縛した奴らから聞いたため彼女を保護させてもらいたい。」

一護「俺としてはそうしたいけど敵さんもそうさせまいと来ているよ?」

俺の一言で周りに大量の欠魂が出現し上空に昨日捕まえたやつらと同じ甲冑を着た連中が現れた。

一護「茜雫、俺から離れるなよ?」

茜雫「う、うん...」

なんか茜雫が自身の正体を知って落ち込んでいるのを見て俺は可愛いと思ってしまったのは仕方がないだろう。

一護「とりあえず逃げますか!」

俺は茜雫の手を握って走ると

???「そのむすm」一護「『縛道の九十九 禁』!」???「ちよ!」

俺は甲冑の男を禁で縛り上げた後、茜雫を連れて橋の下まで来た。

一護「とりあえず、ここまでくれば問題ないだろう。」

俺は茜雫にそう言う

茜雫「い、一護...わ、私」

茜雫は震える声で俺に何か言おうとしている。

とりあえず俺は死神化してそつと茜雫を抱きしめて言う。

茜雫「え?」

一護「茜雫、お前の正体がどうであれ俺は『茜雫』と言う死神を否定したりしないから心配するな。」

俺は茜雫の自分じゃない記憶等を持ってしまったことへの苦しみは理解できる。

だから否定の言葉を掛けずにそつと優しく抱きしめて言って彼女の心に届くように言う。

茜雫「い、一い護お...うわああああん!!」

茜雫は会った時からの勝気な雰囲気が消えて俺を抱きしめて大泣きした。

???「貴様ああああああ!!!」

結構いい雰囲気の状態をぶち壊したさつき拘束した男は俺に剣を複数投擲してきたので茜雫を連れて近くにある亜空間への扉に飛び込んだ。

「ノコノコと叫谷に入りおつてむしろ我らが悲願を叶えてく」  
一護「くだらねえ」  
「…なに？」

一護「お前らの狙いが何であれ自分たちの力で成し遂げるならいざ知らず無関係の女を巻き込んでまで叶えるなんてみともないな。矜持とやらはないのか？あんた？まあ、所詮負け犬の矜持なんてたかが知れているがな。」

俺はほとほと呆れて甲冑の男にそう言った。

「… 我らが負け犬だと？ふざけるなああああ!!」

男は両刃の剣を片手に激高しながら斬りかかってくるが俺は二本の刀を抜刀して男の剣撃を捌いて切り返す。

2、3回の打ち合いでこの男の底が分かったので俺は自分に聖文字<sup>シユリフト</sup>英雄<sup>The Hero</sup>を使って肉体性能<sup>スベック</sup>を底上げして男を剣もろとも袈裟懸けに両断した。

「ごはあ… ば、馬鹿な…」

俺は回道で傷を死なない程度に回復して浮竹さん達の所に轉移させた。

謎の男を斬り伏せて残る問題は

一護「茜雫、帰るぞ」

茜雫「… え？でも私…」

一護「お前が存在しなかったけどこれから『茜雫』として生きていけばいいだろ？」

俺は自分の経験からくる言葉を言うと

茜雫「でも、やっぱり無理だよ… 私は思念珠だから一護と同じくらい生きていけないから。」

一護「なんだ、そんなことかよ。ほれっ！」

俺は聖文字<sup>the Miracle</sup>奇跡<sup>the</sup>跡<sup>Miracle</sup>（これはジェラルドのものとは別物）の奇跡<sup>the</sup>を起こす力に全知全能<sup>the Almighty</sup>による未来改変<sup>the Eternal</sup>と永遠<sup>Eternal</sup>の対象に永遠<sup>the</sup>を付与する力にギョクから教わった特殊能力の忍耐の固定能力を組み合わせることで茜雫が普通の死神になるという奇跡が起こる未来を作りそれを未来改変で確定させてその状態が通常の状態に固定してそれを永遠化させることで茜雫を思念珠からの呪縛から解き放つ

た。

茜雫「え?… あ… あ、あ、あ、あ」

茜雫は言葉にもならない状態になっていたので

一護「これでいいだろ?行くぞ」

俺はそう言つてを帰ろうとすると

茜雫「ちよ、ちよっと待ってよ!一護!!」

茜雫もまた叫びながら走ってくる。

とりあえずこの馬鹿騒動も終了かな?

〜数日後〜

とりあえず茜雫を尸魂界に預けておいたので数日は問題なかったが…

一護「で?なんでお前はうちにいるんだ?茜雫?」

茜雫「いいでしょ、私は一護と一緒に生活したいんだから一護の押し入れで生活するね。」

茜雫はそう言つて俺の押し入れを改造し始めた。

一護「別にそれに関してはいいんだけどな、俺の押し入れで生活はやめてくれ。あいつらがうるさくなるから。」

茜雫「あいつら?」

一護「まあ面倒な奴らだ」

俺がそう言うと

ドドドドドド

廊下から複数の足音が聞こえてきた。

一護「噂をすればツてか?」

茜雫「だからなにが?」

ガチャ!

嫁一ズ『一護(君)(さん)(様)!!』

扉が開いて織姫、雨、リルカ、桃、ネムが入つて来た。MIがいな

いのは換装ならなんやらが時間を喰うからだろう。

茜雫「何よあんた達?」

茜雫が織姫たちに言う

嫁一ズ『一護(君)(さん)(様)のお嫁さん!』



茜雫「はあ？何言ってるのあんた達？一護の嫁は私だよ？」

茜雫が病みそうだったので

一護「喧嘩すんなよな？」

俺は殺気等をこいつらの身に集中させて放つ。

嫁ーズ『ご、ごめんなさい…』

とりあえず、一触即発の事態は収まったな。

一護「で？とりあえず何の用？」

織姫「桃ちゃんとネムちゃんから聞いたよ！その子を一護君預かりになったって聞いたんだけど私達は認めないよ！」

一護「どの部分が？」

嫁ーズ『一護（君）（さん）（様）預かりな所が』

一護「それは死神の上層部に言ってくれ」

俺はそう言って女性陣の意見をばっさり切り捨てた。

織姫「うう…ただでさえ出遅れてるのに同棲までされたら勝ち目がないよお。」

雨「くうう、なんですかヒロインとして完璧すぎませんか？」

リルカ「あたしたちのほうが先なのになんで簡単に距離を縮められるの？」

桃「お、おかしいなあ…私が一番出遅れてます。」

ネム「こ、これが嫉妬をしているというのですか？」

なんか女性陣が戦慄等をしているが

一護「とりあえず、茜雫は俺の家で預かるからそんなに心配なら毎日家に来ればいいじゃん」

3人娘『そうだね!!』

桃「わ、私は職務とかあるのでたまには来ますね!!」

ネム「私も来れるときに来ますね。」

茜雫「チツ！分かったけど一護の一番は私だからね！」

茜雫は舌打ちしたがすぐに女性陣に俺の一番宣言をした。

嫁ーズ『望むところ!!』

女性陣もまた啖呵を切るが俺はどくせすぐに仲良くなると断言できただがそれは言わないでおこうか。

この平穩を少しでも早く長く続けられるように藍染たちを倒さないとな。

## 童話竜篇

44話：「関わることもないしな。」

side???

バグ一たちが夏休みを満喫している間のある場所

「入り給え」

「失礼します。」

「失礼するわ」

男は部屋に二人の少女を入れる。

「上官、今回はどのような件で私達を」

「うむ、それはだな童話竜が確認されたのだよ。」

少女たち『ツ!』

男の発した単語に少女たちの体に緊張が走る。

「しかも問題は童話竜が2体、東の日本で確認されたことだ。あそこはドラゴンが表に居ても問答無用で討伐するからな。そして童話竜が暴れたら表に甚大な被害が出てしまう。それ故にお前たちには魔力が膨大に発生している地点に派遣するから童話竜を裏に留めてくれ。」

少女「分かりましたが、私は表で学生をしていますけど…」

男「それに関しては問題ない、表向きに日本に留学することにして

おくので問題ない。」

少女「分かりました。」

少女2「とりあえず、派遣場所にいるやつらとはどうすればいいわけ?」

男「それに関しては向こうが話を聞いてくれるかわからないので接触してもなるべく喧嘩腰になるんじゃないぞ」

少女たち『わかりました』

そうやって部屋を出ていき少女たちは任務のために準備をする。

sideロア

死神たちがバグ一達が作った修行道具等で修行している間に破面<sup>アラシカル</sup>

の一部もまたロアの力で生成された空間で修行している。

ロア「はあ！」

ロアは帰刃<sup>レスレクシオン</sup>状態で風を操り直刀を振るった。

レスト「わわっ！」

シルス「ロア様！やり過ぎです！」

従属官<sup>フランシオン</sup>の二人もロアの基礎能力の高さに押されて白旗を上げているが

ロア「ちよつと！二人がすぐ降参するせいで修行にならないでしょ！今はハリベルちゃん達はいないんだから!!」

レスト「無理です！流石にハリベル様やグリムジョーとかと比べないでくださいよ！」

シルス「そうです！私達はウルキオラとスターク様とあとついでにヤミーと一緒にしないでくださいよ！」

従属官の二人は自身より強くて主のしごきについていける者達の名を出してロアに抗議するが

ロア「二人とも！そんな泣き言ばかり言ってたら一護の番になれないよ！」

レスト・シルス「だから、私たちはその雄の番になんてなりたくないですよ!!」

何時ものやり取りをしているがロアはどこ吹く風で

ロア「このままだと一護にまた負けちゃう！負けっぱなしは性に合わないの!!」

ロアは前回の戦いで一護に手加減されて撤退する羽目になったことを思い出していた。

レスト・シルス「ロア様が負けた!!?」

二人は驚愕の声を上げるがそれは仕方がないことだろう。

ロア「うん、全力は出し切れなかったけど結果だけ見れば私の負けだからね。」

ロアは事実を言うときさすがの二人も覚悟を決めたようであった。

ロア「やつと真面目に戦う気になったんだね!!」

ロアは嬉々として直刀を構えて二人に斬りかかる。

一護達は茜雫と一緒に修行したり夏休みの課題なども終わらせて仲間たちと一緒に地下空間の一面に作ったプールで遊んだりして夏休みを終えて学校に登校した。

一護「いや、中々に濃い夏休みだったな」

雨竜「普通はこんな夏休みは過ぎさないからね。」

チャド「とりあえずは何事もなさそうでもいいな。」

一護「いや、現在進行形で問題が発生しているからな？」

実は少し前に尸魂界側が俺の監視をしないとイケないとかの話が出てきて流石に監視するのはどうかという意見がぶつかって折衷案として俺と仲が良かったネムと桃を俺の家に住み込みにさせるという話になって俺の家に来てしばらく世話になりますと言ってきたときは妹達は大喜びし母も笑いながらOKを出してしまったので頭を抱える事態になった。

一護「ただでさえ今日から茜雫が俺らの学校に転入するっていうのに」

雨竜「それに関しては僕らは知らないからね？」

チャド「すまん、一護」

一護「いいって別に」

とりあえず今日は女性陣が先に行っていたので男3人組で登校しているのどぎやあぎやあ騒がしくないのでゆっくりと歩いて学校まで行っただ。

学校に到着して教室でHRになるまで俺達が世間話などしている

浅野「一護、雨竜、チャド！おはよう！元気してるな！」

一護「啓吾か、元気そうだな。」

雨竜「啓吾、久しぶりだね。」

チャド「久しぶりだな、そっちも元気そうだな」

水色「おはよう、なんか疲れてない？」

一護「水色も相変わらずだな、まあ疲れている原因についてはノーコメントで」

啓吾と水色とも話して時間を潰していると

担任「お〜い、お前ら〜席に付け〜」

担任が来たので俺達は自分たちの席に戻る。

担任「今日はお前らに朗報だぞ〜なんとこのクラスに転入性と留学生がくるぞ〜」

バグーパーティー以外『おお〜!』

俺達は誰がくるのかを知っているので特に驚くことはなく担任は転入生を紹介する。

担任「じゃあ早速入ってきてくれよな〜」

???『はい』

バグーパーティー(((うん?)))

聞こえた3つの声の内一つは自分たちがよく知る声だがもう2つは知らなかった。

???『失礼します。』

そう言つて3人の女が入ってきたが一人は茜雫だが残りの2人は俺には見覚えがある。

一護(BURN THE WITCHの新橋のえるとニニー・スパンコールじゃねえか!!どうなつてんだ!!?)

流石の俺でも想定外すぎる人物達の登場に軽く混乱するが即座に警戒度を限界まで上げる。

一護(考えられるのは一つしかないおそろくだが童話童関連か?)  
俺は考えをまとめるが頭が痛くなってきた。

担任「じゃあ自己紹介してくれ」

???↓のえる「初めまして私は新橋のえると言います。よろしくお願  
いします。」

黒髪のスタイルのいい女、新橋のえるが礼儀正しく挨拶をしてく  
る。

???↓ニニー「初めまして私はニニー・スパンコールよ、よろしく。」  
金髪の女、ニニー・スパンコールは勝気な態度が分かる挨拶をする。

茜雫「初めまして、私は望月茜雫もちづきつて言います。よろしくね。」

茜雫の名字が本人が月に関する言葉が良いというので調べた中で

本人が気に入ったやつを名字にした。

担任「じゃあ、3人は茜雫とのえるが黒崎の両隣でニニーが井上の隣だな。」

担任の教師がそう言って3人の席を言うと3人はそれぞれの席に来たのだが

一護（… うん？何かこの女若干だが俺に怯えてないか？）

新橋ノエルは人が恐怖を感じてそれを表に出さないようにする際に見られる動作を周りに悟らせないようにしている、同じくニニー・スパンコールもだ。

一護（まあ、いいか正直童話竜との戦い以外で関わることもないしな。）

俺はそう高を括ったがこの時の俺は予測すらしなかった。まさかあんなことになるとは…

sideのえる・ニニー

私とニニーは指令で来た地点の町のある高校に留学で来たのだが

校長「では、君たちにはこのクラスに編入して貰います。」

のえる「分かりました。」

ニニー「わかったわ」

校長「それと君たち以外にもそのクラスに別で転入生がくるからその子と少し話しておくといいよ。」

この学校の校長はそう言っているのですその子と少し話そうとするが

茜雫「初めまして、私は望月茜雫よろしくね！」

ポニーテールをした女茜雫は握手してこようとしてくるが

のえる（え？この女から感じる魔力が童話竜のシンデレラの7割くらいあるんだけど）

ニニー（この女つてもしかしてこっちの？）

ノエル（おそらくそうなんだろうけど多分トップクラスの精鋭だと思おうわよ？）

私とニニーは目配せで互いの考えていることを共有したんだけどこの子と敵対した場合決死の覚悟でも二人じゃやられることは明白

なのよね。

どうしようと考えている間に教室に来た。教師の声に私たちは入ったけど茜雫とは比べ物にならないレベル且つ異質な魔力を感じて体が震えることさえできない状態になった。

のえる（な……に？あ……あれ？）

ニニー（な……な、なん……なのあいつ？）

何の変哲もないはずの教室の一面にいるオレンジ色の髪の毛から異質な魔力が放たれていた。

漏れ出ている魔力はほんの僅かのはずなのにシンデレラと相對した時感じた魔力の質を軽く上回りその魔力からはドラゴン特有の魔力と魔法使い（ウィザード）の魔力の他に感じたことのないタイプの魔力が混ざっているながらドラゴン憑き特有の歪な混ざり方ではなく最初からそう設計されてたかのような美しくまとまった魔力だった。

担任「では自己紹介してくれ」

教師はそう言うってくるが私達は今すぐここから帰りたい気持ちでいっぱいだった。

のえる（帰りたいです）

ニニー（同じく、あんな化け物があるなんて聞いてない。）

ニニーと私はほぼ同じタイミングでそう思った。

とりあえず、私たちは何とか自己紹介を済ませたが

担任「じゃあ、3人は茜雫とのえるが黒崎の両隣でニニーが井上の隣だな。」

正直、この教師のことを殴りたいと思ってしまったのは仕方がないと思います。よりによつてなんであの怪物の隣何ですか!?

ニニー（ニニーハ……ご愁傷様。）

のえる（ニニーちゃん！見捨てないでください!!）

私は頑張つて隣の席まで行きましたが男はこつちを少し顔を向けて

一護「よろしくな」

と言つてすぐに前に向いてくれましたが

のえる（なんか先輩の言動のせいで見た目から女好きと思いました



けどこの人は違うんですね。」

自分のよく知る男はことある毎に下着を見ようとするので困りますがこれなら問題ないですね。

「……とりあえず、この方がどのような存在なのか理解してからでないと童話竜とか言ってられません。が正直関わりたくないですが任務である以上何とかしませんと。」

先ずは今日の授業を乗り越えないとってニニーちゃん？あなたは私が怯えている間に隣の方と随分と仲が良くなっていますね？

とりあえず、放課後までに少しでもこの人に気づかれぬように情報を集めましょう。

side 一護

とりあえず、放課後になり俺は少し遅れると言って雨竜たちと別れると少し人通りの少ないところに移動した。

一護「とりあえず、なんで俺の事を監視なんてしてんだ？」

俺は死神化しながらそう言った。

のえる「……やはり簡単に気づきますか？」

ニニー「そうね、こうなったら直接聞いた方が速いかしら。」

そう言っただけで新橋のえるとニニー・スパンコールは出てくるが俺への警戒心が最大限出ている態度だ。

のえる「単刀直入に言います、あなたは何者ですか？」

一護「それはどう答えたらお前たちは納得する？」

俺は質問の意図が理解できないのでそう聞き返す。

のえる「……なるほど、では言い方を変えます。どうしてあなたはドラゴンの魔力を持っているのですか？」

一護「ドラゴン？魔力？何のことを言っているんだ。俺はそんなもんは持っていないぞ？霊力ならあるが？」

俺は知っているがこいつら視点だとそんなこと知らないと思うし少しとぼけた感じで言った。

ニニー「霊力？何言ってるのよ、あんたから確かに魔力を感じるし魔力からドラゴン特有の魔力を感じるのよ！」

ニニー・スパンコールはそう言ってくるが俺はこう答える。

一護「.:。もしかしてだけどこつちとそつちで用語に関して名称が違うんじゃないか？ほらあるだろ地域ごとに名前は一緒だけど意味が違ったり名称は違っても意味は一緒みたいなやつ。」

俺は二人にそう言うよ

のえる「なるほど、確かにそう言われたらこちらでの名称などは知りませんでしたし会話が成り立たないのも納得ですね。」

とりあえず俺達はお互いの情報を共有しようとするよ

虚「ぐあああああああ!!!」

巨大虚ヒュージ・ホロウが出現して俺達に攻撃してくるので俺は人払いの結界を張って空中に退避した。

一護「あぶねえなあ」

のえる「日本のドラゴンはだいたいぶ数を減らしていると聞いていたが」

一護「ああ、ドラゴンって虚ホロウのことなのか。数を減らしているのも何を魂を浄化させて成仏させるのは当たり前だろ？」

二二「成仏？なにいつてんの？ドラゴンは保護するものでしょ？」

一護「お前は何を言ってるんだ？あれは人間の魂が変質して生まれた悪霊なんだぞ？ならさつさと浄化しないと無意味だ。そして保護とかもつての外だ。」

のえる「.:。悪霊？あれは霊的な存在なのですか？」

一護「まあ進化しきれば人間と遜色ない姿形にはなるし人間と同じくらいの知性があるが本質的には全然違うがな。」

俺は虚についてある程度のことを伝える。

二二「.:。じゃあドラゴン憑きがドラゴンを集めるのはドラゴンがそもそも共食いする種族だから同族の気配がする場所に集まろうとするのね。」

一護「おそらく、そつちでは虚が混じった人間が霊圧を抑えようとならないせいで駄々洩れの霊圧を感知してそいつに集まってるだろうな。本来なら虚は共食いされないように霊圧遮断能力があるからな。」

俺は向こうの虚が混ざった人間に虚が集まる理由を考察して二人に伝える。

のえる「ではこちらではドラゴンを討伐する以外に方法はないのですね。」

一護「保護なんて知ったら爺さんたちにどやされるわ。という訳であいつは俺が倒すな。」

二二「今更なんだけどこっつてこんなに人がいなかったかしら？」

のえる「そうですね時間的にももう少し人がいてもおかしくないのですが…」

一護「それは俺が人払いの結界を張っているからな。ここから1km以内に人が来ないようにした。」

二二「えくなにそれえ…」  
のえる「そんな魔法知らないんですけど…」

一護「普通こんな簡単な意識を逸らす術は普通のはずだけどなく俺は暢気にそう言っていると虚は思いつきり跳んだ。」

一護「シビレを切らして強硬手段にでたようだが『破道の三十二黄火閃』  
おうかせん

黄色の霊圧の光線を放つ破道で虚を一撃で倒した。

二人『なっ!?!』

一護「こんなものか所詮あの程度の雑魚じゃ話にならないな。」

二人『…』

二人は俺が虚を瞬殺するところを見て二人は涙目で抱き合っつて怯えている。

一護「なんだ？お前らどうした。」

のえる「い、いえ… お気になさらずに」

二二「そ、そうよ。なんでもないわ」

一護「いや、なんかある態度それ」

俺は呆れてそう言うが

一護「… うん？なんだあいつら？」

俺は町に二人の男女がいるがまだ人払いの結界を張っているのだ

が…

一護「おいっ！あいつらはお前らの仲間なんかか？」

二ニ一「え？知らないわ、そもそも私達は童話竜ってやつらを討伐するためにそいつらを探すために来たんだから。」

一護「じゃああの2人組は何だ？」

のえる「え？…まさか！」

のえるは何か気づいたような反応するが二人組は突如姿を竜に変えた。

一護「…ほう、中々の霊圧だ。だが俺には及ばない。」

片方は上半身が赤い竜で口から炎を吐いておりかつ体から酸のような霧を纏っている。

もう片方はリヴァエアサンを思わせる魚の要素を持ち泡と水を纏った竜だ。

両者凄まじい霊圧を放っているが俺からすると雑魚と変わらない。

のえる「ど、童話竜『レットドレス』、『バブルズ』！まさか二体同時に現れるなんて！」

一護「あれ倒してもいいよな？どのみち倒すんだから」

二ニ一「な、何言っているの!!あいつはさっきのやつとは比べ物にならないのよ!!」

一護「いや、あいつらよりも強い虚となら戦い慣れているから問題ない」

俺は刀を抜いて二体の龍と相対した。

45話：「はい何ででしょうか？」

sideロア

私はシルスちゃんとレストちゃんとの模擬戦などの修行を終えて自室に向かおうとすると

ロア「あれ？おじいちゃん珍しいね。おじいちゃんがこんなところにいるなんて」

私は立場上あの雄の部下になったことになってるけどこのお爺ちゃんも似たようなものだよ。ちなみに私達はエスバード十一刃セロエスバードで名前なんだけど私は第0十一刃でお爺ちゃんが第21セグンダエスバード刃だよ。

バラガン「ロアか、なにちと昔の知り合いの気配を感じただけのことだ。」

ロア「昔の知り合い？」

私は自我を持ったのは数か月前だからそれより前のことはよく知らないんだよね。

バラガン「うむ、折角だから話しておこうか。あやつらとは昔まだ虚圏の黎明期からの付き合いでな、とは言っても儂も奴らも敵同士ではあるがな、何しろ奴らは面倒な性質を持っていてな。」

ロア「面倒な性質？それってお爺ちゃん的能力でもどうにもならないの？」

おじいちゃん的能力は時間干渉系だからよほどの能力でもない限り面倒な性質なんて言わないけど…

バラガン「奴らは他の虚や人間に寄生などして生き延びる能力を持っていてな。しかも寄生し直すと失った進化能力を取り戻すので何度も成長し直しては戦うといった感じになったので奴らとは互いに関わらないといった暗黙の了解になって奴らは住処を遙か西に移したのだよ。」

おじいちゃんはそう言ってるけど一つ疑問が出てきた。

ロア「そうなんだ…あれ？でもそれじゃあなんでその子達の気配が感じるの？」

バラガン「どうも好みの餌の霊圧の匂い気配に釣られてこちらの領土に隣接

している現世の地点に来ているようだ。たしか空座町と言ったか？」  
side 一護

俺は刀を構えて神通脚で加速と圧倒的な踏み込みで不知火を放つてバブルズと呼ばれた方の青い竜を切り裂いた。

バブルズ「グおおおおお!!?」

一護「なんだ？切り裂かれることがそんなにおかしいか？」

煽ったことにキレたのか竜は大量の泡を放ってきた。

一護「『破道の三十三 蒼火墜』」

俺は蒼い炎を放つて泡を消し飛ばした。

レッドドレス「ぐおおおおお!!」

赤い竜・・・レッドドレスは酸を放ってくるので

一護「『破道の五十八 風』」

竜巻を放つて酸を吹っ飛ばしながらレッドドレスを吹き飛ばした。

のえる「す、すごい・・・!」

ニニー「あの童話竜を2体も相手してるのにここまで一方的になるなんて・・・」

一護「おい！お前らも見えてないで戦え!!何のために来たんだよ!!」

俺は半場外野化している二人に言った。

のえる「す、すみません!」

ニニー「ご、ごめん」

二人はそう言つて戦闘態勢に入る。

のえるは笛と銃と足したような武器を構える。

そういえばさつきからずっと気になったことを聞いてみるか

一護「お前らがさつきから乗ってる竜みたいな虚何?」

俺はBURN THE WITCHのことは知っていても詳しい

用語とかは直ぐには思い出せないから二人に聞く。

のえる「これは魔女や魔法使いが騎乗するドラゴンです。」

ニニー「あんた見たいに空を飛ぶ魔法はないからこうでもしないと

空中に逃げるダークドラゴンを追跡できないのよ。」

一護「一応言っておくが俺の知り合いは大体空を跳べるからな?」

ニニー「東の魔女や魔法使いってすごいわね。」

一護「俺は基本別扱いだけど霊体の存在である知り合いたちは死神だぞ？」

のえる・ニニー「え？死神？」

一護「とは言っても生きてるものを何でもかんでも殺す奴らじゃなくて虚を浄化したりとか虚になる前の普通の幽霊を尸魂界に送って魂の循環を行う者達の事を指すんだけどね。」

俺は死神について簡単に説明した。

のえる「ソウル：…なるほど裏に送ったりするのですか」

一護「まあ、積もる話は終わってからのにしようか。」

俺の言葉を皮切りに2体の竜がこっちに突っ込んできた。

一護「俺が前衛で突っ込むから後方支援よろしく！」

ニニー「さつきから私に指図するんじゃないわよ！『マジック#4 スタンボール』！」

ニニー・スパンコールは指先から電気を圧縮したボールを放ってバブルスに攻撃した。

バブルス「ぐああ!!」

バブルスも水流を放って攻撃を相殺したが俺は即座に距離を詰めて二刀の斬撃を見舞った。

バブルス「ごおお!!」

バブルスは即座に大量の泡を放って俺を攻撃してくるがすぐに神通脚で距離を離れた。

レッドドレス「ごああああ!!」

レッドドレスは炎を吐きながらスパンコールと新橋に酸をぶつけようとするが

ニニー・のえる「『マジック#31 ブルー・スパーク』」

ニニーとのえるは青い光弾を放って酸を吹き飛ばしたが威力が足りなかつたらしくて炎と酸が二人に迫っていたので即座に2人の前に移動して炎と酸を剣技で切り払った。

一護「こいつらなんでこんなに強いんだ？この程度の霊圧なら初撃で決着がついたのに？」

俺は疑問に思ったことを呟くと

のえる「童話竜をこの程度つてあなたは何者なのですか？」  
一護「うくん？ガバと陰謀で生まれた神を超える試作品？」

二ニー「こんな状況でよくふざけられるわね。」

嘘は言っていないんだけどなく。まあ今はいいや。

流石に面倒になったので

一護「卍解『万華鏡・天鎖斬月』」

俺は卍解をして更に二刀を一つにして瞬殺に入る。

のえる「…まるで先輩みたいな能力ですね。」

一護「誰だ？そいつこれは俺の知り合いなら斬魄刀解放は出来ることだぞ？」

俺は記憶を掘り返そうとするが今は戦闘中なんで後回しにする。

俺は再び距離を詰めると黒刀を一閃してレッドドレスの翼を切り裂いて墜落させる。

レッドドレス「ごああああ!!!」

すぐに俺はバブルスとの距離を詰めて思いついたことを試してみる。

一護「模倣『一文字』」

俺は黒刀から墨を放ってバブルスを塗り潰した。

■■■■「ごああ？」

これでバブルスは力を失ったな、後は

一護「模倣『白筆一文字』今日からお前は魔海竜だ！そして

『武器化』！」

俺は聖文字武器の武器に関する情報に改造による万

物改造を組み合わせて対象を武器に限定する代わりに凄まじい改造速度を誇り目の前の竜を一振りの剣に改造した。

因みに見た目はFF14のリヴァイアサンにした。

こいつの自意識も改造した際に無くしたので特に問題なく水を操る魔剣になった。

レッドドレス「ごああああ!!!」

仲間が武器になるところを見て流石のレッドドレスも怯えて逃げる気なのか俺に酸と爆炎を放ってきたが



一護「折角だからこいつの力を試してみますか。」

俺は霊圧を込めて魔剣から水を放って酸と爆炎を消し飛ばした。

俺は黒刀と二刀流の構えをとって一足に距離を詰めるとレッドドレスを切り裂いたがレッドドレスは捨て身で切り裂かれた瞬間に酸を俺に放って新橋のえるのほうに突っ込んでいった。

俺は神通脚で距離をとったが神通脚で再び距離を詰め直すには止まって加速の一拍が必要になるのでこのままだと二人がやられるので速度に優れた白雷を放つがレッドドレスは胴体が貫かれようが速度を落とすことなく突っ込む。

のえる「えっ!!」

二ニー「くっ! 『マジック#75 ガトリングクラウン』!!」

スパンコールは光の刃を王冠上に形成し、王冠を発射して攻撃する破道? がレッドドレスに直撃するがレッドドレスは意を介さずに魂魄だけの状態になると新橋のえるに寄生した。

のえる「あがああ!!」

体と魂魄に突如異物が入り込んで拒絶反応を起こし新橋のえるは大暴れする。

二ニー「ニーハ!!? どうして魔女がドラゴン憑きになることなんてありえないのに!!?」

一護「これは…寄生能力か」

二ニー「なにそれ!!」

一護「虚の中でも極稀にある別の対象に取り付いてそいつの魂と肉体を乗っ取る能力のことを言うんだ。」

二ニー「ニーハはどうなるの!」

一護「流石に分からないけど最悪人格ごと乗っ取られるとは思う。」

二ニー「そんなのどうすればいいってんのよ!!」

スパンコールは涙を流しながら自分の無力を呪った。

一護「さて、という訳でこいつを助けるか。」

俺は軽くそう言う。

二ニー「…え?」

一護「とりあえず、まずは魂魄のほうからだな。精神潜航を使えば

マインドタイプ

行けると思うしあとはさつきみたいバブルスを海竜リザアィアサンの魔剣にした時と同じ感じにすれば問題ないかな。」

俺は作戦を立て終わってさっそく実行に移そうとすると

二ニー「ちよ、ちよと待ちなさいよ!!」

なんかспанコールが待ったをかけてきた。

一護「はい何でしょうか?」

二ニー「あんた!さつき人格を乗っ取られるとか悲壮感漂うこと言っておいて何軽く助けるとか言ってるのよ!!?」

一護「だつてお前が質問してきたからそれに答えただけで別に助けられないなんて一言も言っていないもん。」

俺は記憶を掘り返してもспанコールは疑問を叫んでいたのだからそれに答えたはしたけど助けられないとは一言も言っていないな。

二ニー「確かにあんたは助けられないとは一言も言っていなかったわね。でもこの状況だとそう聞こえるから次から次からそう言うことないようにしてね!!」

一護「へいへい、と言う訳でちよつと行ってくるな。」

俺は新橋に黒刀の刀身を当てるThe Mindと聖文字精神の精神操作を応用した精神潜航マインドタイプでこの女の精神世界に入り込む。

sideのえる

熱い、暑い、あつい、アツイ...

炎が自分を焼き続けているようなそんな状況で目の前にレッドドレスが現れ私を塗り潰そうとしてくる。

のえる「誰...か...助けて...」

こんな状況で言うのもなんですけどそんな都合のいいこと起こりはしん

一護「来たぞ」

のえる「え?」

いきなり声が聞こえてくると私の身を焦がしていた炎が消え去った。

一護「無事か?...つてその状態だと違うかあ」

黒崎一護はそう言いながら視線をなぜか外すので視線を落とすと

今自分は何も着ていなかった。

のえる「ツ~~~~!!?」

私は恥ずかしさのあまり胸と股に手を当てて隠しますがこの人には全部見られたのかと思うと恥ずかしすぎます。

一護「文句は俺じゃなくてあいつに言ってくれよな」

黒崎一護は黒い剣を向けるとレッドドレスがいた。

レッドドレス「ぐああああ!!?」

一護「いるはずのない俺がいることに恐怖しているのか?だが悪いがお前はここで終わ<sup>the end</sup>りだ。」

この人は伝説の童話竜であろうこと、状況さえ楽しんでこの人はホントに何者でしようか?

一護「さてあまり長引かせると現実のこいつの肉体が減っちゃうのでね、悪いが瞬殺コースだ。」

すると気配が変わり体が震えるほどの殺気を放った。

レッドドレス「グ… あ… あ… あああ」

伝説の童話竜が声も出せないほどの殺気なのに何故か私は安心してしまった。

一護「模倣『一文字』」

黒い剣からインクのようなものを飛ばしてレッドドレスを塗り潰した。

のえる「この状況でなぜインクで遊んでいるのですか!!?」

一護「うん?ああこれ?これには塗り潰した対象の力を根こそぎ封印する力があるんだよ。」

黒崎一護は何ともないことのようにとんでもないことを言った。

一護「あとはこいつに新たな名を刻んで封印するか、下手にこいつを倒すと3界の魂魄バランスが偏って達磨のおっさんがうるさいしな。」

黒崎さんは何故か愚痴を言いながら次の工程に入った。

一護「模倣『白筆一文字』 今日からお前は炎妃罪竜<sup>レイヴァーティン</sup>だ!」

今度は白いインクで黒くなったレッドドレスに文字を書いた。  
のえる「黒崎さん、これは?」

一護「これか？これは新たな名を刻んで別の力を与えるんだよ。」  
のえる「何しているんですか!？」

一護さんの言うことが本当ならレッドドレスは更なる強さを手に入れたことになりました。ですが一護さんは

一護「大丈夫だつて元々持っていた能力とはまるで別物の力を制御するのにどれくらいの間が必要だと思っているの？あとこいつは黒く塗り潰された時点で元々持ってた力は使えなくなっているよ。」  
のえる「そ、そうですか。」

一護さんは何故か何言つてんだこいつみたいな態度で言ってくる。

一護「さて、最後の仕上げだ。『武器化』!」  
リクリエイトウエボ  
ン

一護さんはレッドドレスを一本の金色の長剣にしてしまった。  
ロングソード

一護「ミッシェンコンプリート」

のえる「あ、あの一護さん一っいいいですか？」

一護「なんだ？」

私は一護さんにある疑問をぶつける。

のえる「あのレッドドレスの剣はどうなるのですか？」

私がそう聞くと一護さんはこう言った。

一護「そりや、お前の中に封印されている状態だな。ここであいつを倒すと半ば融合していたお前の魂魄もろとも消すことになっていたからな。これが俺にできる最良の手段だな、あとしばらくは暴走しないように俺と霊圧回路を繋いでおいたからあんまり俺と離れることはできないぞ。」

のえる「…え？私の魂と融合？私の中に封印？一護さんとはばらく離れられない？…え？」

一護さんの言うことは私はドラゴン憑きと同じかそれ以上に面倒な状況になってしまった。

一護「確か、そつちではお前の今の状況はドラゴン憑きつてやつになっっているんだよな。なら早いとこあれの制御できるようになれば処刑はされないんじゃないか？」

一護さんはレッドドレスの剣を差してそう言うので私は

のえる「そうですね、一護さんの言う通りもうどうすることもでき

ないならば童話竜の力を制御して見せます!!」

一護さんにそう啖呵を切った。

一護「おう、そうだな。ところで早いところ俺出ていくな。流石に素っ裸の女を見続けるのは無理だから。また現実で会おうな。」

そう言つて一護さんが言つて去つていった。

のえる「すっかり忘れてました——!!?」

私は顔を覆つてそう叫んだ。

## 46話：「くたばれっ！世界!!」

side 一護

あの後即座にいつメンに連絡を入れて浦原商店に急行した俺達だが今、俺は面倒な状況に巻き込まれている。

それは…

一護「なにこれ？」

俺のこの言葉しか出てこないのは仕方がないことだろう。

女性陣はのえると何故か爆速で仲が良くなり握手までしてなんか歴戦の戦友ともと再会したようなやり取りをしたと思うとどういいう訳か女性陣は背中にはのえるが抱き着いておりそれ以外には時間経過で女性陣が入れ替わりで抱き着いているのだ。

一護「皆さん、どうして抱き着いているのでしょうか？」

嫁ーズ『イチゴニウムを補給しているだけだよ！』

一護「そんな物質は存在しないしそれはただの変態がやる行為だよ。」

とりあえず俺は問答無用で全員を聖文字 the 超 psychic 能力サイコキネシスの力で念力を使って引きはがした。

嫁ーズ『も、もう少しだけ〜』

一護「ダメだから」

とりあえず、俺はのえる達と遭遇した事件について全員に話した。

一護「と言うことがあってしばらくの間だがのえるは俺と一緒に行動することになった、異論はないな。」

のえる除く嫁ーズ『異議ありッ!』

一護「…一応聞いておこうか、どこに不満があるんだ？」

嫁ーズ『一護（君）（さん）（様）と一緒に行動のところ!!』

一護「それに関しては俺が近くにいないと封印した炎竜の力で肉体が焼けてしまうから仕方がないんだよ。」

俺は一度説明したのにも関わらず駄々をこねる女性陣にそう言う。

織姫「そ、それはそうだけど〜」

雨「まだそんなにアピールチャンスをものできていないのに〜」

リルカ「これじゃあ、ロア達が来たらもつとヤバいっていうのに」  
雛森「うう、私も早く何かしら印象残さないと…」

ネム「…これは夜這いと言うものをしなければならぬのでしようか？」

MI「ネム、それは最終手段ですよ。」

茜雫「私は一護の部屋に同棲しているからいつでも監視できるから問題ない！」

ギョク（ふふふ、ご主人綺麗で可愛いお嫁さんをいっぱい用意しますよ!!）

オカシイな、どうしてこんなことになったんだろう？

あとギョクさん？あなたたってそんなロアみたいなこと言う人でしたっけ？

のえる「一護さん、不束者ですがよろしくお願いしますね。」

一護「違う、そうじゃない」

とりあえず、俺はこの場の空気を何とかするためにテレビをつける。

キヤスター『ニュース速報です。たった今、日本とイギリスと言った各国は結婚制度を一夫多妻制と多夫一妻制に変更が決定され可決されm』一護「くたばれっ！世界!!」ガシャーン!!

俺は防音結界を展開してテレビを破壊した。

一護「ハッ!!？」

嫁ーズ『一護（君）（さん）（様）』（オメメキラキラ）

一護「…もうどうにでもなれ。」

俺は運命として受け入れた。

とりあえず、ぶっ壊したテレビは修復（+改造して）地下室に移動した。例の如く真時玉は起動してある。

一護「とりあえずはのえるお前の斬魄刀を使いこなせるように修行しようか。あとお前は今日から俺の管理下になるってスパンコールが言っていたけど大丈夫なのか？」

のえる「それは大丈夫ですよ。」

一護「そうか、なら始めようか。」

のえるは俺の合図で封印した後生成された斬魄刀を抜刀したが普通の日本刀ではなくリリカルなのはシグナムのシュベルトフォルムの形状だ。

一護「じゃ俺は今回はこっちなな」

俺は五角形の滅却十字を媒体に約束された勝利の剣の形の霊子武装を生成した。

一護「行くぞ。」

のえる「分かりました」

俺とのえるは地を蹴って加速して互いに剣をぶつけ合う。

side ニニー・スパンコール

私は連絡期で裏ロンドンにある本部に連絡を取った。

ニニー「という訳で新橋のえるがドラゴン憑きになり現在、童話竜の力を日本にいる魔法使いイチゴ・クロサキの力で抑え込んでいる状態です。」

トロンボーン「分かったよ、とりあえず他の方にも伝えておくからのえるにはよろしくと伝えておいてね。」

ニニー「・・・分かりましたが彼にはどう伝えれば」

トロンボーン「どうもこうもないでしょ、伝えとかなきゃいけないんだから。」

私はニニーハに好意を寄せる男に申し訳が無かったがそれでも伝えておいた方がいいとあとで彼に連絡を入れられるようにしておいてもらった。

私は連絡を終えると、のえる達がいるという店に来た。

ニニー「あのー少しいいですか。」

喜助「その恰好は・・・ ああ一護さんと一緒にいた方の連れですね。今彼らは地下室に居ますのであそこから降りていけばいいですよ。」

ハットを被った男はそう言って指を指したのでその先に行くところか地下への入り口があったので階段を下りて行った。

入り口から入ると

一護「のえる！そこはもつと踏み込みを強くして振れ！」

のえる「はいっ！一護さん！」



のえるは封印した後に出現した剣を振るってイチゴと剣の修行をしていた。

一護「・・・うん？スパンコールか連絡は終わったか？」

二ニー「二ニーでいいわ、イチゴ少しいいかしら？」

一護「別にいいがなんだ？」

のえる「二ニーちゃんあなたまさか・・・」

二ニー「ニーハが思うことじゃないから安心してイチゴ、あなたの持つ海竜リヴァイアサンの魔剣を譲ってほしいのよ。」

私はイチゴの目を見て要求した、いくらなんでもこんな要求は普通飲まないけれど私は要求せざるを得なかった。

あの時、私が手負いのレットドレスを倒せてればニーハがドラゴン憑きにならずに済んだ。だから無茶でもイチゴの持つ童話竜が封印された魔剣を手に入れたい。

一護「何だそんなことか、ほら。」

イチゴは特に躊躇がなく私に海竜リヴァイアサンの魔剣を渡した。

二ニー「はあ!?!イチゴあんた正気!?!」

信じられないことにイチゴは私に魔剣を手渡してきたので驚きの声を上げた。

一護「なんで驚いているんだ？ああ、のえるみたいに封印状態にしておけて事かちよつと待ってる。」

イチゴはなんか納得して魔剣に魔力を纏わせていくと魔剣が通常の剣に変化して圧倒的な気配が収まった。

一護「これでいいんだろ？」

さつきまで片刃の剣だったのがシンプルな刀身でライトグリーンの鏢の細剣に変化したのを手渡してきたが

二ニー「イチゴ！あんた何考えているの!?!童話竜が封印された魔剣をポンツと手渡してんのよ!!」

一護「いや、俺は武器は自前で結構持っているし使え慣れてない武器を死蔵するよりこれを求めているやつに渡した方がいいだろ。それにお前がこれを求めているのは何も世界を滅ぼしたいとかみたくない願望ではないだろ？」

一護は何とも私の心を見透かしたかのようなことを言ってきた。  
一護「ほら、お前は欲しいって言って俺がやるって言ってた。素直に受け取れ。」

二ニー「…分かったわ、でもいつか御礼はさせてもらうわ。」

一護「すぐじゃなくていいからな。」

私はそう言って細剣を受け取った。

side 一護

俺は二ニーに剣を渡すともう一つやるべきことをする。

一護「ちよつと待ってるよ。今、鞘を作ってやるからな。」

俺は自分の斬魄刀の鞘を解析して二ニーの細剣の鞘を作成する。

〜10分後〜

一護「ほれ、できたぞ」

俺は赤い色の鞘を完成させ二ニーに渡した。

二ニー「ありがとう」

俺は一緒に鞘の留め具も一緒に渡した。

二ニーは腰に留め具を付けて細剣を差した。

一護「さて、とりあえず二人は魔力などの基礎能力の強化、剣術な

どの武術の体得、術の強化。大まかにこの3つを重点的にやろうか。

MI！二人の修行の相手を任せるぞ!!」

MI「かしこまりました、一護様。」

俺は修行をMIに丸投げした後、のえるについていった。

side 二ニー

あたしは変な柱をニーハと一緒に数時間かけてクリアした後

MIっていう機械が相手になってくれるのだけれど滅茶苦茶強かった。

私も魔力が大幅に上がったんだけど向こうはそれ以上の魔力と剣術と体術と魔法を組み合わせて戦ってくるから魔法が主体の私では手も足も出なかった。

MI「二ニー様、まずは基本から鍛え直してその剣の力を引き出すことを優先した方がよろしいですよ。」

二ニー「そうね、童話竜の力を必ず引き出して見せるわ!」

私はそう意気込んで自分の手にある海竜の魔剣リヴァイアサンに視線を向けた。

sideのえる

私はMIさんと一緒に一護さんに見られながら修行をしています。  
のえる「はあ！」

私は踏み込んでMIさんに剣を一閃しますがMIさんは竹刀で防いで反撃に耐えられずに竹刀を突き付けられた。

MI「ここまでですね。」

のえる「はい」

私は剣を白い鞘に納刀した。

MI「とりあえず、今は一護さんの補助を無くす方がいいですね。」  
のえる「私としては補助がある方がいいですけど制御しないと話にならないのでしますね。」

一護「そうだな、俺と100m以上離れられないとか不便以外の何物でもないからな。」

一護さんがそう言っていますが私は一護さんとあまり離れたくないです。

side一護

俺はのえる達の修行を手伝う傍らに俺達も来るべき破面アレンジカルとの戦いのために力を蓄える。

とりあえず、地下で10日間の修行を終えた後のえるを連れて家に帰ったがいつもの如く母と妹たちに正座させられていた。

一護「またですか？」

真咲「また女の子を誑してきたバカ息子だからよ。」

夏梨「また誑し兄いしてきたからね。」

遊子「またチャラ男兄ちゃんしてきたからね。」

一心「父さんは悲しい！息子がこんな女遊びをするようになってしまったことが悲しい!!」

一護「髭親父、元を糺せば親父が雨うるを俺に許可なく許嫁にしたのが原因だと思うけど」

何時もの如く母と妹たちに責められるのは仕方がないが諸悪の根源である髭親父がハイテンションで俺を攻めてくることにイラツと

くる。

一心「だつて、昔はあんまり仲のいい友達が少なかったから親の親切で雨ちゃんを許嫁にしたのに一護がちよくと目を離れたら色んな女の子を家に連れてくるんだもん。」

一護「それでも親父が俺を攻める筋合いはないからな？」

真咲「ところで一護、あの子つてもしかしてそう言うこと？」

一護「流星に気づくか、うんそういうことだよ」

似たような経験をしている母さんは即座にのえるが家に来た理由を察した。

真咲「はあく、仕方がないわねえ。なんかニュースでもなんか結婚制度が変わったって言ってたし。」

一護「それに関しては俺は知りませんからね、政府に文句を言うてください。」

俺は母から文句を言われながらもあとでのえると話をするつもりだ。

因みに妹達はのえるやネムと桃と茜雫と遊んでいた。

side ニー

とりあえず、私はバルゴに連絡を入れる。

ニー「と言うことでニーハは日本にいる魔法使いイチゴ・クロサキの管理下になったわ。バルゴ」

バルゴ「そんな…のえるちゃんが？」

バルゴは信じられない声を出すが事実を下手に捻じ曲げると碌でもないことになるのは明白だから素直に伝えないといけない。

ニー「とりあえず、私はそつちに戻って童話竜の力を封印した剣を持っていくけどニーハの場合はイチゴの近くから離れられないから私だけ戻ることになるわ。」

バルゴ「…はい。」

バルゴはそう言ったのを聞いて連絡を終える。

ニー「…はあ、しんどいわね。」

とりあえず、イチゴを何時かリバス・ロンドンに連れてこないといけないわね。そうしないと説明に時間が掛かるわ。

## 童話竜篇終了時のステータス

sideバグー

望月茜雫

身長

154 cm

体重

43 kg

スリーサイズ

B 81

W 59

H 80

MEMORIES OF NOBODY篇のヒロイン、元は思念珠だったが例の如くバグーがバグ能力で普通の死神にしまった。イレギュラー中のイレギュラーなのでバグー預かりになった。寝床がバグーの部屋の押し入れになってバグーが作った空間拡張霊具で広くして改造している。

能力

身体能力

女性陣の中では下から数えた方が速いが普通基準だと結構高いほう。

霊圧

隊長格相当

斬拳走鬼

バグーと一緒に修行してバランスよく鍛えた。

斬術

剣術

バグーの相手ができるレベル

斬魄刀

名前『弥勒丸』

解号「夕闇に誘え」

見たい

解放すると先端に小さな刃がついた錫杖に変形した。

能力

解放後は先端から発生させた竜巻を自在に操る能力を持ち、複数の敵を一掃することができる。

卍解

厳しい修行の末修得しているがここでは伏せさせてもらう。

白打

夜一監修の元、無窮瞬間まで修得した。

歩法

瞬歩

夜一を師範としたので相当早い。

鬼道

回道も含めて相当なレベルに達したがバグー達ほど突出していない。

side BURNTHEWITCH

ニニー・スパンコール

BURNTHEWITCHのW主人公の片方

童話竜が二体が日本に目撃され相棒の新橋のえると一緒に日本へ行くがバグーと遭遇する羽目になり会った当初は得体が知れなすぎで内心ビビっていたが二体の童話竜との戦いでお互いに壁がなくなつたがその戦いでのがえるが童話竜『レッドドレス』の力で寄生されてドラゴン憑きになってしまい何もできずに無力を感じバグーが作った童話竜『バブルス』を封印した海竜リヴァイアサンの魔剣を譲ってもらった。

魔剣

所謂斬魄刀だがロンドンsideはそんなの知らないなので魔剣と  
言う名称になった。

当然始解と卍解はあるが名称が違う。

封印時はSAOのウインドフルーレ  
第1解放リリース・ワン

始解状態にあたる第1解放と言い名称を言うと言と解放される。  
海竜の魔剣リヴァイアサン

バグーがバブルスの名と力を封印して上書きした力  
見た目はFF14のリヴァイアサン

能力

水を自在に生成・操作する能力

刀身に水を纏わせれば切れ味が落ちることなく切れ味を大幅に強化できる。

リリース：オブ・ドラゴン  
竜力解放

所謂卍解に当たるもの

解放すると剣の形状が封印時のものに戻る。

バブルス  
童話竜・人魚姫

バグーに封印された本来の力を解放するもの。

解放されても特に制御に難があるだけで封印からバブルスが解き放たれることはない。

能力

泡を生成・操作する

第1解放と比べれば地味だが生成した泡は結構頑丈でクッションのように使えたりと結構万能。

また、高速で放つて相手にぶついたり攻撃にも使える。形もある程度変えられる。

備考

とりあえず、バグーが修行メニューを一冊の本に纏めたものを持つてリバス・ロンドンに戻りました。

new嫁ーズ

新橋のえる

身長

165 cm

体重

54 kg

スリーサイズ

B 9 0

W 6 2

H 8 7

BURN THE WITCHのW主人公の片方

童話竜が二体が日本に目撃され相棒のニニー・スパンコールと一緒に日本へ行くがバグーと遭遇する羽目になり会った当初は得体が知れなさ過ぎて内心ビビっていたが二体の童話竜との戦いでお互いに壁がなくなつたがその戦いで自分は童話竜『レッドドレス』の力で寄生されて精神世界でバグーに助けてもらった。その際にその状況の影響で惚れた。レッドドレスは封印できたがそのせいでドラゴン憑きになってしまいバグーの管理下になってしまったが本人は嬉しいようだ。

### 魔剣

封印時はリリカルなのはのシグナムが持つレヴァンティンのシユベルトフォルム

リリース・ワン  
第1解放  
レヴァンティン  
炎妃罪竜

バグーがレッドドレスの名と力を封印して上書きした力

見た目は落第騎士の英雄譚の妃竜レヴァンティンの罪剣

### 能力

竜に関する力を自在に行使する能力

大雑把だが所謂ドラゴンにできることなら何でもできる。あらゆる属性の魔法も使えるし再生力が付く。身体能力も大幅に上がるがスタミナの消費が激しい。

リリース・オブ・ドラゴン  
竜力解放

解放すると剣の形状は封印時に戻る。

レッドドレス  
童話竜・赤頭巾

バグーに封印された本来の力を解放するもの。だがのえるの魂魄と融合した影響で能力が変質している。

解放されても特に制御に難があるだけで封印からレッドドレスが解き放たれることはない。



能力

## 第1解放の拡張

第1拡張でできたことに十あらゆる竜の伝承を再現できる。

具体的には能力に関係ない竜は金目のものを集めるといった感じのことをその状況に合わせた感じになる。

例：金目のものを集める↓金稼ぎが得意になるといった感じ

またニニーと違って魔剣の力が自身に融合して封印してあるので完全ではないがある程度童話竜・赤頭巾の力が使える。

響<sup>ソニー</sup>転<sup>ド</sup>

虚である童話竜と魂魄が融合しているなら使えるのでは？とバグーが思ったので練習させたらできたがまだまだな程度。

同じく虚弾<sup>ハラ</sup>と虚閃<sup>セロ</sup>、探査回路<sup>ベスキス</sup>も使用可能と言ったことが発覚した。

## 破面篇

47話：「意外に平和は簡単に崩れるもんだな。」

side 一護

俺達のはのえる追加というイレギュラーに見舞われたがそれ以外は特に何も起こらなかった。

強いて言うなら尸魂界側で映画の内容の事件が2件ほど起こったけど特に俺が出張ることなくすぐに解決したから良いけど。

そして尸魂界篇から数か月が経過した。

一護「ああく平和だな〜」

雨竜「君は暢気だな」

俺と雨竜は買い出しに出ている。

チャドとは別行動をしている。

雨竜「今日は女性陣がやたら張り切っているね。」

一護「もうじき12月だからな〜」

俺達はクリスマス用に色々準備のためにデパートとかに行こうとすると凄まじい霊圧を感知した。

一護「意外に平和は簡単に崩れるもんだな。行くぞ雨竜！」

雨竜「ああ!!一護！」

近くにチャドがいるので心配はしていないが急いだほうがいいだろう。

俺達はいつもの公園に周りに気を使いながら急行した。

side チャド

チャド「くっ?!なんて強さだ...！」

俺は突如感じたすさまじい霊圧を感じ取ったため普段の虚退治用に用意してある人払いの結界を展開する霊具を使って人を離れた。

そして目の前の浅黒い大男と拳を打ち合うが互いに力が拮抗して膠着状態になっている。

能力こそ使っていないが後ろにいる男と女二人が加勢したら負けてしまう。

??? 「くそっ…！ごみの分際でいい加減やらやがれ!!」

俺と戦っている男は俺がやられないことにイラついて叫ぶ。

??? 「俺達を認識したら即座に無力な奴らを離すか… 中々判断までの速度が早い上にヤミーの攻撃にも耐えきる耐久力、弾き返す膂力、速度も申し分ないな。藍染様が警戒している者たちの一人か？」

色白の男が俺の戦い方を観察している。一護と似た敵の能力を解析してから叩き潰すタイプか？

??? 「それはいいからあの男を探しに行ってもいいわよね？ウルキオラ」

??? 「そうよ、私たちは現世に来れるからついてきたんだから別に単独行動してもいいわよね。」

ウルキオラ 「お前らは、馬鹿なのか？見知らぬ場所での単独行動をするとかどうかしている。」

? 毛の女と薄い紫色の髪の女はそう言って何処かへ行こうとする。くっ！このままだと町に被害が出てしまう。

織姫 「『孤天斬盾 一連！』ドパンツ！ドパンツ！

すると織姫と雨が来て何処かへ行こうとする女二人に攻撃した。

??? 「ちよっ!」

??? 「なに!」

二人の女は即座に回避した。

織姫 「チャド君！大丈夫！」

チャド 「織姫！大丈夫だ、特に怪我らしいものは貰っていない。」

雨 「今日は一護さんと楽しい時間を過ごすはずだったのに許しません。」

??? 「一護ですって!!」

二人の女は何故か一護の名前に反応した。

織姫 「えっと、あなた達は一護君に用があるの？その前に名前は何か？」

この状況で織姫は女たちの名前を聞く

??? ↓レスト 「私はレスト、一護ってやつに用があるのよ。」

??? ↓シルス 「私はシルス、同じく一護ってやつに用があるの」

雨「女の破面<sup>アランカル</sup>… ああロアの使いかなにかですか。」

雨は即座にあの破面の手先だと断定した。

シルス「ちよつとあんた！ロア様の事呼び捨てにしないで!!」

レスト「そうよ！そうよ！」

雨「やかましいですよ、あんな女に敬語を使う気はないです!!」

シルスとレストは雨に抗議するが即座に切り捨てられた。

???「この俺を無視すんじゃない!!」

大男は怒りながら虚弾<sup>バラ</sup>を連射してきたため俺は右腕を  
巨人の黒腕に変化させて結界を展開して受け止める。

???「くそがああああ!!」

男はキレながら殴り掛かってきたので俺は前に出て男の拳を受け止める。

ウルキオラ「おいヤミー、せめて虚刀くらいは抜いたほうがいいんじゃないか？その男は舐めてかかっていいほど弱いわけじゃない。」

ヤミー「うるせえぞ！ウルキオラ！」

ウルキオラの助言を無視してヤミーと呼ばれた男は拳に虚弾<sup>バラ</sup>を纏わせて殴りかかってくる。

俺は黒腕の盾で受け止めて左で殴るが特にダメージが入っている  
感触がしない。

少し時間はかかるが被害を出さずに戦うにはこれが一番だろうな。

side 女性陣

女性陣は各々対峙している。

レスト「だからっ！早く一護を出しなさいよ！」

織姫「嫌だからね！一護君のことをよく知らない女に渡す気はないからね！」

シルス「一護を倒してロア様の目を覚ましたいだけなのよ！だから早く出しなさいよ!!」

雨「それは魅力的な提案ですがお生憎様一護さんはあなた達程度では勝てませんからね？」

女性陣はあーだこーだと騒いでいる。

side 3 人称視点

感情のままに暴れるヤミー、自分本位に行動するシルスとレストを見ているウルキオラは

ウルキオラ「全く、これでは何のために来たかわからないな。」

一護「同意するぜ」

雨竜「全くだね」

ウルキオラ「お前たちはいつからいた？」

一護・雨竜「ついさっきだな。」

一護と雨竜がついさつき到着したが状況がよくわからないので敵であるはずのウルキオラに話を聞こうとして話しかけた。

ウルキオラ「そうか、だが敵である俺に話しかけてくるのは理解できないが」

一護「嫌だつて状況を聞こうにもお前以外にまともに会話できそうなのがないんだもん。」

そう言つて一護はヤミーの相手しているチャドや女子同士の話をしている女性陣を指す。

ウルキオラ「・・・なるほどな。」

流石のウルキオラも理論的な言い分に反論できないでいた。

一護「で？お前らはなんで来たんだ？理由次第では争わずに済むが」

ウルキオラ「藍染様の命令でな、お前たちと接触して来いと言われたから来た。」

雨竜「そういうことか・・・つてなんで僕らは敵とこんな穏やかに会話しているんだ？」

雨竜は疑問が生じたが仕方がないだろう。

一護「とりあえず、あいつらの会話を聞くと俺に用があるらしいから相手してくるわ。」

一護はそう言つて女性陣の相手をしに行つた。

side 一護

一護「なんか呼ばれたけど何しているんだお前ら？」

織姫・雨「一護君(さん)!!」

レスト・シルス「ツ!?お前が!!くたばれえええええ!!!」

いきなり二人の女破面は虚刀を抜いて斬りかかってきたので  
静動血装で全身を強化して白打で相手をする。

レスト「はあ!!」

薄紫髪の女は上段から虚刀を振り下ろしてきたので刀の側面の  
そつと拳で受け流して体勢を崩して懐に掌底を叩き込んでぶつ飛ば  
した。

レスト「がふっ!」

シルス「っ!?はああああ!!」

? 毛の女は鋭い刺突を繰り返して出てくるが雨竜の刺突よりは遅い  
し鋭くもないから軽く避けて首に軽く手刀を打ち込んで気絶させた。

シルス「こふっ!」

一護「とりあえず、制圧したけどどうしよう?」

俺はそう思ったら

ウルキオラ「いや、十分だ。」

バグーパーティ『っ!』

俺は気を緩めた一瞬でウルキオラが女二人を回収していた。

ウルキオラ「お前たちの力の一端を確かに見させてもらったぞ。あ  
とこいつらの心配とかはするな。どうせあの女が何とかするだろう  
からな。帰るぞ、ヤミー」

ヤミー「チツ!今日の所はここまでにしてやる!おいつ!!ごみ野郎  
!お前は俺がぶつ殺してやるから次に会うまで死ぬんじゃねえぞお  
!!」

ヤミーはチャドにそう言ってウルキオラと一緒に黒腔ガルガンタを開いて  
虚圏ウエコムンドに帰っていった。

一護「とりあえず、危機は去ったか。今すぐ、全員に連絡して浦原  
商店に急ぐぞ。」

雨竜・チャド・織姫・雨うるる『わかった!!』

4人の返事で即座に行動を開始した。

side破面アランカル

ロア「♪♪♪そういえばシルスちゃんとレストちゃんがウルキオ  
ラとヤミーと一緒に現世に行ったんだよね。いいなく私も現世に

行つて一護と戦いたいなく」

破面最強の女第0十一刃セロエスバードロア・ベリアルは現世に行つた部下を思いながら物騒なことを言った。

ハリベル「お前が行つたら被害がとんでもないことになるだろ。」

褐色の美女破面、第3十一刃トレスエスバードティア・ハリベルは呆れて言う。

ちなみにハリベルの従属官はギリギリまで鍛錬しているのでお茶会には不参加である。

今日は女性破面のお茶会を開いている。

ロア「そういえば、昔ハリベルちゃんの前の第3トレスが女性雌だったんだけどどこにいるかなく見つけたら一護の番候補にしようつと！」

ハリベル「お前はまだ増やそうとするのか…」

いつものロアの願望駄々洩れっぷりにハリベルは呆れている。

ロア「いや〜ハリベルちゃん達も強くなつたねえ〜昔と比べたら比にならないよ！」

ハリベル「お前に言われても嫌味にしか聞こえないがまあお前ほどの実力を持つてる者からの評価はありがたいが。」

ロアは力の成長速度はぶっ飛んでおり今なお霊圧や身体能力が自動で強化されるといふ頭のオカシイ能力を有している。

それだけならまだ対策のしようがあるがロアは武術も含めてあらゆる戦闘能力を鍛え上げている上に瞬時に対象の力を見通す洞察力も有している上にその能力が再現可能なら簡単に真似ることもできる。

レン「ロア様、お茶の御代わりは？」

ロア「うん！お願いね。」

ロアの従者レンがお茶の追加を入れる。

リリネット「おいつ！来たぞ!!」

ロア「あつ！リリネットちゃん！ようこそ私のお茶会へ！」

入ってきたのは黄緑色の髪で露出度の多い恰好をした少女、十一刃エスバードの中でロアに次ぐ実力者の第1十一刃プリメーラエスバードココロ・スタークの従属官リリネット・ジンジャーバックである。

レン「リリネット様、こちらでございませす。」

レンはリリネットを席に案内した。

リリネット「ありがとよ。」

リリネットは案内された席に座った。

レンはお茶を入れた後リリネットは飲みながらハリベルたちと他愛ない会話をした。

リリネット「ありがとな、あん時私とスタークを拾ってくれて」

リリネットは二人しかいなかった時に自分達にワイワイできる仲間を紹介してくれたロアに礼を言う。

ロア「いやああの時に凄い霊圧を感じて行ったら二人が居たから来るって言ったら二人が付いてきただけだから別に良いって」

ロアはのほほんとしながらそう言う。

ロカ「ロア様お茶会の所すみませんが少しよろしいでしょうか？」

ロア「ロカちゃん？いいよ」

入って来た女の破面アランカルロカ・パラミア、本来なら第81オクターバエスパーダ刃ザエルア

ポロ・グランツの従属官のフラシオンはずがロアがロカを気に入れたためザエルアポロを半殺しにして力づくで自身の従属官フラシオンにしてしまった。

ロア「どうしたの？何かあったの？」

ロカ「はい、先ほどウルキオラ様とヤミー様が帰ってきましたしてシルス様とレスト様が戦闘不能状態でウルキオラ様に担がれていました…」

ロア「それ気絶？」

ロアが二人の状態を聞いてきたのでロカは答える。

ロカ「はい、外傷はほとんどなくほぼ一撃で気絶させられています。」

ロア「あくなるほどね、多分二人は一護と戦ってやられたんだね」

二人の戦闘能力を知っているロアは誰が二人と戦ったのかを即座に把握した。

ロカ「それと東仙様が時期に十一刃エスパーダ全員を招集するようです。」

ロア「えくしかたないなくもう」

ロカの招集命令の伝達に憂鬱な気分になった。



ハリベル「仕方がないだろう？ 私達は組織に属しているのだからこれくらいは許容しろ。」

ロア「はあくい、はあ早く一護の番になって子作りして育児したい。」

ハリベル「いい加減にしろ、準備をしておけ」

会話を済ませたロアとハリベルはお茶と茶菓子を食べきる。

48話：「ただの俺の我儘だから気にするな。」

side 浦原商店

一護達は破面アランカルの襲撃を退けた後、すぐに残りの仲間アランカルに連絡を入れて浦原商店に急行して尸魂界側に喜助に連絡を入れた。

山本『そうか、奴らが襲撃してきたか。』

山本重國は一護の報告を聞いてそう言った。

一護「犠牲者が一人も出なかったのが幸いなんだよな。」

一護はこういう時用に作った人払いの結界を張れる霊具を作っておいてよかったという。

山本『じゃが、今回の件で向こうが我らと戦争がしたいという意味表示をしてきた以上我らも総力を挙げて向かい撃たなければならぬ。』

一護「破面はともかく元より藍染はぶっ飛ばすのは決定事項だからな。」

俺は破面で話ができるやつのことを思い出しており流石に話を通じるやつを殺したくないのであくまでも倒す敵は裏切りの藍染一派と総隊長に言う。

山本『まあ、おぬしの言わんとすることも理解はできるがそれができるかはその時になってからじゃな。』

一護「それはただの俺の我儘だから気にするな。それで？これからどうする。敵の狙いが俺らとそれ以外にあるとして準備が終わっても俺等より総戦力の質はまだ向こうの方が上な気がするが？」

一護はヤミーが虚刀を使わずにチャドと互角に戦っているところを見て敵戦力を分析した。

山本『それに関してじゃが、こちらから援軍を向けるのでな。そ奴らと一緒に次の襲撃に備えてくれ。』

一護「あいよ。」

一護はそう言って連絡を終えた。

一護「……ということだ。尸魂界ソウルソサエティからの援軍が来るまで俺達は修行して力を蓄えておこうか。」

「雨竜「だね、気を一瞬緩ませたとは言え一護が認識できないレベルの響転ソニックドを使う奴は厄介だからね。」

雨竜はウルキオラの響転ソニックドのレベルで敵の強さを理解したので修行には特に不満はない。

チャド「俺もあのヤミーつてやつが俺を目の敵にしているからな。」  
チャドもまたヤミーのタフさにさらなる強さを求めるために闘志を燃やしていた。

織姫「私達はロアの刺客から一護君を護るために強くなる!」

雨「そうですね!」

リルカ「あんな奴らには負けない!」

雛森「そうですね!早くこの騒動を終わらせて一護さんといちゃらぶします!」

ネム「私もマユリ様の指令を果たします。」

MI「私としてはその方たちと仲良くしたいのですがね。」

茜雫「私はそいつらは話しか聞いてないから分からないけど同じ一護のことが好きなら別にいいと思うけど... けどまあ、一護の敵なら倒すしかないよね♪」

のえる「私はその方達の事をよく知りませんが一護さんの敵なら斬るまでです。」

女性陣は相も変わらずといった様子だ。

一護「という訳で修行を開始だ!」

バグーパーティ『了解!』

一護の合図で各々が修行を開始した。

side 尸魂界ソウルソサエティ

山本「全員集まったようじゃな。ではこれより藍染一派に関する会議を開始する。」

総隊長は一護の報告を聞いて即座に隊長たちを招集した。

山本「先ほど、現世にいる黒崎一護より破面の襲撃を受けたのとこと!それにより敵の狙いが黒崎一護達にあると推察されこれを阻止する!」

総隊長の言葉に全員が気を引き締めた。

山本「という訳で現世に彼らの護衛……彼らの実力で護衛はおかしな話じゃがまあそこはいいじゃろ。という訳で日番谷冬獅郎、松本乱菊、班目一角、綾瀬川弓親、阿散井恋次、朽木ルキア、志波海燕、志波都を選抜隊として現世への派遣を命じる。」

総隊長は比較的の問題を起こしにくいメンバーを選出した。

名を呼ばれた者達は静かに頷いた。

その後会議は進まり

山本「という訳で本日は解散」

総隊長の言葉で会議は終わった。

side 破面  
アランカル

広い空間に柱のような足場がある部屋に破面は集結している。

0と書かれた場所には長めの黒髪の色白の美女で最強の破面、ゼロ・エスパイダー第0十一刃のロア・ベリアルが座っており後ろに従属官のロカ・パラミアとロアの雑用のレン、凍夜、トリスが整列している。

1の前には下顎骨のような仮面の名残を首飾りのように着けた黒髪フリメーラ・エスパイダーの中年の男。第1十一刃のヨーテ・スターク、隣に従属官リリネット・ジンジャーバツクがいる。

2の場所には仮面の名残である頭部の王冠状の飾りをつけた隻眼の老人。第2十一刃セグンダ・エスパイダーのバラガン・ルイゼンバーン、彼の従属官シャルロット・クールホーン、アビラマ・レッダー、フィンドール・キャリアス、チーノン・ポウ、ジオルヴェガ、ニルゲ・パルドウツクが控えている。

3の場所には金髪で褐色の肌をしており、白の過激な衣装が特徴的である美女。第3十一刃トレス・エスパイダーのティア・ハリベル背後にエミルー・アパツチ、フランチェスカ・ミラ・ローズ、シイアン・スンスンの通称3トレスベスティア獣神の3人娘、その背後に彼女たちのペットのアヨンが控えている。

4の場所には誰もおらず

5の場所には黒髪の長髪の左に眼帯を付けた細い男。第5十一刃クイント・エスパイダーのノイトラ・ジルガ、その背後に従属官テスラ・リンドクルツが控えている。

6の場所には右顎を象った仮面を着けた、端正な顔立ちに水浅葱色の髪の男。第6十一刃のグリムジョー・ジャガージャック、その背後フラシオンに従属官シャウロン・クーフアン、エドラド・リオネス、ナキーム・グリーンディーナ、イールフオルト・グランツ、デイ・ロイ・リンカーが控えている。

7の場所には坊主で頭部には棘のような仮面の名残があり、首には首飾り、耳には仮面が変化した髑髏のピアスをしている黒人風の男。セラティマ・エスパーダ第7十一刃のゾマリ・ルルーがいる。

8の場所には眼鏡のような形状の仮面を付けた桃色髪の男。オクターバ・エスパーダ第8十一刃のザエルアポロ・グランツがおり、その後ろに従属官メダゼピ、ルミーナ、ベローナ他多数と従属官の数は十一刃の中で最多を誇る。

9の場所には四対ののぞき穴が開いた縦長の仮面で頭部全体を覆い、フリルの襟飾りが付いた死覇装を着用している男。ヌペーノ・エスパーダ第9十一刃のアーロニーロ・アルルエリがいる。

10も場所には第10十一刃の従属官の子犬の虚ホロウクツカプーロが座っている。

ロア「あくもうこれホントに堅苦しいなくこの空気〜」

ロアは集まって早々口を開くが集会特有の堅苦しい空気に文句を言う。

バラガン「ロアよ、そう文句を言うな。つまらん報告会なぞ、さつさと終わらせればよいこと。」

破面の中でも最年長のバラガンはロアを窘める。

藍染「やあ、破面アランカルの諸君、全員集まっているようだね。」

白い死覇装に変えた、藍染惣右介、市丸ギン、東仙要の3人が入ってきてその後ろにルドボーン・チエルトと2人の女破面アランカルのロリ・アイヴァーン、メノリ・マリアがついている。

ロア「遅いよ！あんたが呼んだのに一番遅いって舐めてんの!!」

ロアは遅れてきた藍染に抗議する。この中で唯一藍染を倒せる存在なため流石の藍染でも慎重にロアを対処する。

藍染「それは済まない、だが舐めているわけではない。」

ロア「それならいいよ。…で？何でいきなり全員を集めるの？別に報告なら雑用や従属官経由でも問題ないよね？」

ロアは文句を言うのはやめ自分たちを呼び出した理由を聞いた。

藍染「ウルキオラの能力は知っているはずだ。その関係で全員に一度にまとめて共有しておきたかった。」

藍染はロアにそういうと流石のロアも納得した。

ロア「そういうことなら別にいいわよ。」

ロアはそう言っただけでウルキオラが来るまで待った。

ウルキオラ「失礼します。」

第4十一刃ウルキオラ・シフアーと第10十一刃ヤミー・リエルゴが入って来た。

藍染「ウルキオラ、来て早々に悪いが君が見たものを全員に見せてくれないか？」

ウルキオラ「分かりました。」

ウルキオラは藍染の指示で自身の目玉をくり抜いて握りつぶした。

共眼界ソリタ・ヴィスタと言う自身が見たものを他者に共有するもので十一刃内でも使えるのは素で超速再生を有するウルキオラとロアだけだ。

共眼界ソリタ・ヴィスタで一護達の情報が十一刃エスパーダに共有された。

ウルキオラ「以上です。奴らは相応の実力を持っています。」

藍染「ありがとう、ウルキオラおかげで今の彼らの実力を測れそうだ。」

藍染はウルキオラにそう言うがそれに文句がある者が言う。

グリムジョー「おいっ！あんなカスども倒せずに何おめおめ逃げ帰ってきてんだあ！ああ!!」

ウルキオラ「うるさいぞ、あいつらの強さは探査回路ベスキスで確認済みだ。あの場で戦っても互いに不利益だったからな。」

グリムジョーがウルキオラに吠えるがウルキオラは理論然とした態度で反論する。

ロア「はいはい、グリムジョー…ちょっと黙ろうか？」

二人の醜い言い合いにロアは殺気と霊圧で無理やり黙らせた。

グリムジョー「ツ!?チツ!!分かったよ。」

流石のグリムジョーもロアを怒らせるわけにはいかないでおとなしくなった。

藍染「全く、グリムジョーそんなに彼らと戦いたいなら君が現世に行って戦えばいいじゃないか。従属官フラシオンも何人か連れて行っても構わない。」

藍染は尸魂界ソウルソサエテイの強化度合いを知りたいのでグリムジョーの部下を使い捨てる気満々だがグリムジョーはそんなこと露知らずに獣じみた笑みを浮かべて藍染に言う。

グリムジョー「分かりましたよ、奴らを叩き潰してきます。」

ロア「はあ…：それなら、私の雑用も貸すよ？いざってときは強制的に連れ帰ってきてもらうね？」

流石のロアもグリムジョーが心配で自身の雑用3人を連れて行くように言う。

ロア「というわけで頼むよ。レン、凍夜、トリス」

雑用『わかりました！ロア様!!』

雑用達は膝をついて主に言った。

グリムジョー「余計なことすんじゃないやねえよ!!」

グリムジョーは抗議してくるがロアにはそんなこと関係ない。

ロア「他者の優しさは素直に受け取るべきだよ？」

ロアは笑顔で優しく言った。

グリムジョー「チツ！分かったよ…。」

グリムジョーも渋々了承した。

side 現世

一護達は真時玉を起動した地下で修行中で仮面の軍勢ヴァレイザードの面々にも一護が連絡を入れてありいつでも行けるようにはしておけと言う感じのことを言っている。

そして通常の時間軸で2日経過した。

喜助「皆さん、客人ですよ。」

バグー除くバグーメンバー『客人?』

一護は知っているのに驚いていないがそれ以外は？マークを浮かべている。

そして中に入ってきたメンツを見て納得する。

恋次「来たぜ、お前ら」

ルキア「久しぶりだな。おぬしら」

日番谷冬獅郎「暫くこっちに居ることになった。」

松本乱菊「よろしく。」

班目一角「一護お！久しぶりに手合わせしろやあ!!」

綾瀬川弓親「よろしく頼むよ」

志波海燕「よお！一護しばらくお前んちで世話になるぜ」

志波都「一護、また姪達と遊ばせてもらいますね。」

一護は比較的に問題を起こしにくいメンツが揃っているので安心だ。と内心で思っている。

一護「とりあえず、全員は現世での寢床。：叔父と叔母以外で決まっているの？」

恋次「おう！此処の宿泊施設を使えるようにしてもらっておいた。」

一護「ああ、あそこか。俺と喜助が遊び半分の気持ちとその場のノリで作ったやつか。」

実は地下の修行施設には結構でかめの宿泊施設があり客室が宿泊者の好みの内装に自動で変わる優れものだ。

一角「俺達はとりあえず、町とかで探して見つからなかった場合はここにするつもりだ。」

弓親「僕も同じだ。」

一護「そうか」

一角・弓親コンビは違うらしい。

乱菊「私は織姫の家に泊めてもらうつもりだからよろしくね。」

織姫「分かりましたよ、乱菊さん」

リルカ「ちゃんと家事は手伝いなさいよ。」

冬獅郎「俺もここを使うつもりだ。」

冬獅郎もまた此処の施設を使うつもりのようなのだ。

とりあえず、今日はいったん解散した。

一護達はネム、雛森、茜雫、のえる、海燕、都の6人で黒崎家への帰路についている。



海燕「俺は悲しい！従兄いとこがこんな女遊びをする奴になっているなんて!!」

一護「親父と同じこと言ってるけど原因は親父だからな？」

都「はあ…海燕あまり一護君を困らせるのはやめてあげなさい。」  
海燕のウザ絡みに一護はジト目で抗議して都は呆れて海燕に言う。  
全員が歩いていると虚の気配と霊圧を感じたので全員が救援に向かった。

場所は近くなのでそんなに時間が経たずに着くとアフロ頭の男が鈴が付いた円月輪型の斬魄刀を手に終始圧倒して無傷で虚を倒していた。

海燕「うん？あいつは車谷くるまたにか？」

一護「誰だよ？」

一護は知っているが一応念のために海燕に聞いた。

海燕「あいつは十三番隊第6席だよ、元々優秀だったけどお前が瀧霊廷の修行設備を整えてそこで修練したら滅茶苦茶強くなってな、書類仕事も真面目だしそれで俺が上に掛け合ったら昇級したんだよ。ちなみに俺や日番谷に総隊長みたいに地水火風に属する斬魄刀なため上の連中もかなり期待しているんだよ。」

一護「マジかよ。」

一護は車谷ことイモ山さんを知っていたただけにかなりのギャップを感じている。

イモ山「うん？海燕隊長に都副隊長!!ご無沙汰しております!!」

イモ山は自分の上司に気が付いて急いでこちらに来て頭を下げている。

海燕「おう！車谷、仕事は順調そうだな。」

イモ山「いえいえ、自分なんてまだまだですよ。」

イモ山は謙遜しながら言うが一護の目から見ても中々の能力があるのでは？と言うレベルだった。先の戦いでも自分の能力に有利な場所に被害を出さずに虚を誘導しながらも自分は無傷に立ち回っていたので強くなきやできない芸当だ。

イモ山「ところで自分の目が可笑しくなければ海燕隊長が2人いる

ように見えるのですが…」

イモ山は一護と海燕を交互に見ている。

海燕「はっはは！こいつは俺の従兄妹だよ。」

イモ山「海燕隊長の!?よろしくお願ひします!」

イモ山は上司の血縁者に頭を下げる。

一護「いきなり頭を下げないでくれ俺は海燕と血縁関係者ではあるけど頭を下げさせるようなことはしていないって」

海燕「いや十分しているだろ?何言ってるんだ?」

海燕は瀨霊廷での事件解決、さらに死神全体のレベルアップなどのことをしておいて何を言っているだという態度だ。

その後一同はイモ山と別れて黒崎家に向かった。

一護「ただいま帰ったぞ」

一護は自分の帰りを告げ家に入っていた。

夏梨「一兄いおかえり〜義姉達も?」

遊子「お兄ちゃんおかえり!お義姉ちゃん達も?」

一護「そうだな、あと海燕と都さんも来ているぞ」

夏梨「ホント!!」遊子「やったあ!!」

海燕「夏梨と遊子!!来たぞお」

都「夏梨に遊子、元気にしていましたか?」

海燕と都が姿を現すと花梨と遊子は一目散に突撃した。

一護は自室に戻ると茜雫、のえる、ネム、雛森、海燕、都も一護の部屋に入る。

一護は盗聴などができないように結界を張った。

一護「とりあえず、これでゆっくり話ができるな」

海燕「そうだな、とりあえず敵は一護達を狙う以外に目的があると思うから瀨霊廷で調査を進めているな。」

海燕は尸魂界の状況を一護に伝える。

一護「こっちは4体の破面アラランカルの襲撃を喰らった。1体は俺の一瞬の隙で俺の背後にいた2体の破面を回収して見せる実力がありもう1体はチャドと互角の殴り合いができるレベルだ。」

一護は自分たちが相対した破面アラランカルの情報を海燕と都に伝える。

海燕「なるほどな、とりあえず、敵の上位の実力を持つ奴を知れて良かった。」

都「ですね、少しでも情報があると作戦の立てようがありますからね。」

二人は納得して情報交換を続ける。

「場所は変わって」

ここはある建物の屋上一角と弓親はコンビニの袋を持っている。

一角「おい、弓親妙だと思わないか？」

弓親「なにがだい？一角」

一角は何やら思案顔で自分の手に持つものを見て弓親に言う。

一角「これだ、『手握りおむすび』こんな複雑な袋にこれほどの握り飯をそこらの店にずらりと並んでいやがる。しかも店番をしている女はとてこれを握ったようには見えなかった。これは裏で誰かが糸を引いてるとみるぜ俺は。」

弓親「奇遇だね、僕も今ちようどそう思ったところさ。」

一角と弓親はコンビニおにぎりを見て何らかの陰謀が渦巻いていると勘違いしているが只の量産品でしかないので何の陰謀もないのだが悲しいことにツツコミ役のバグーたちがいないので二人の勘違いはまだ続く。

side アランカル 破面

グリムジョー「早速行くぞ、お前ら」

グリムジョーは従属官フラシオンを連れて現世に行こうとする。

レン「よろしいのですか？あなた達もご一緒で？」

アパッチ「いいだろ！レストとシルスの敵討ちに行つて悪いかよ！」

トリス「別にあの二人は死んではいけないんだけどね」

ミラ・ローズ「まあ、ようやく戦えたのに何もできずに手加減されたのは悔しいからな。」

凍夜「それは一護と言う男が強かったただけだろうか？」

スンスン「そう言うことではないですよ。」

エミルー・アパッチ、フランチエスカ・ミラ・ローズ、シイアン・

スンスンの3トレスベステイア 獣神の3人娘とペットのアヨンも一緒についてくるよ  
うだ。

レン「まあ、我々は黒崎一護に対する囿のようなものといざという  
時の緊急離脱が仕事ですから。」

そうこう言いながらも破アランカル面達は黒腔ガレガンタを開いてその中を最速で突っ  
切っていた。

現世に到着するとグリムジョーは全員に言った。

グリムジョー「おいつ！全員で探査回路ペスキスで霊圧を持った奴を根こそ  
ぎ探し出せ!!」

グリムジョーの従属官フラシオン『わかった』

3トレスベステイア 獣神『わかった(りました)』

3トレスベステイア 獣神娘たちも不本意ながらも探知に入った。

レン「では我々も」

凍夜「だな」トリス「うん!」

ロアの雑用三銃士も探査回路を最大にした。

感じ取れる霊圧は20人。

トリス「あれ？これって前に戦った二人の死神の霊圧だよね？」

凍夜「俺も感じたぞ、片方しかないがそれでも十分だな。」

レン「私もあの時に戦った女の死神の霊圧を感じしましたよ。どう

やら私達は運が良いようですね。」

雑用三銃士はあの時に戦った死神たちと決着をつけられると知り  
喜ぶ。

グリムジョー「数が多いな、尸魂界から援軍を呼んだな。お前ら  
さっさと殺しに行くぞ。」

グリンジョーの言葉に全員が散会した。

side 現世側

情報交換していた一護達は破アランカル面の霊圧を感知した。

一護「ツ!?もう再襲撃か!?!いくら何でも早すぎるだろ!」

一護はグリムジョー達の襲撃は知っているがそれにしては数が多い  
のに疑問符を浮かべたが即座に迎撃の準備を済ませる。

海燕たちも準備を済ませ、即座に一護と茜雫とのえる以外が技術開

発局の新しく改造された義魂丸を飲んだ。

一護も死神化して即座に外に出て空中を駆ける。

一護「全員死ぬなよ!!」

ネム・雛森・茜雫のえる『わかってる（います）!!』

海燕「分かっているってそれにあいつも来ているしよ!!急ぐぞ!都  
!」

都「勿論です!」

海燕と都はかつて苦汁を舐めさせられた破面アランカルトリスの場所に急  
ぐ。

ネム、雛森、茜雫、のえるもまた一護と一緒に行動する。

恋次とルキアもまた凍夜とレンの霊圧を感じその場所へと急ぐ。

それ以外は運で決定される。

## 49話：「お前は何者だ？」

side 一角・弓親

一角たちは凄まじい霊圧を感じると技術開発局が一護から貰った改良型義魂丸の設計図を基に改造した義魂丸を飲み霊体になると即座に移動を開始した。

少し移動すると白い死覇装を身に纏った鼻の上にアイマスクのような仮面の名残を着けた、左半分坊主・右半分が赤の長髪という物凄い髪型をしている巨漢の男と髪は金色の長髪で左前頭骨に仮面の名残を着けた伊達男がいた。

??? 「ふん、どうやら貴様らが俺達に殺される死神のようだな。」

一角 「どうやら、お前らが相手してくれるようだな。」

一角は油断せずに刀と鞘を構えて慎重に敵の動きに対応できるようにしている。

一角 「弓親あ！そっちの金髪の相手は任せる！」

弓親 「分かっているよ、一角」

弓親もまた刀を抜いている。

??? 「ふん、こんなゴミ共が俺の相手が務まるとでも思っているのか？」

金髪の男は一角たちを見下しているようだがこの二人はかつての実力とは大きく成長している。

一角 「御託はいいいぜ？さっさと戦<sup>や</sup>ろうぜ！」

一角は瞬歩で巨漢の男に突っ込んだ。

??? 「ぬううっ！」

巨漢の男は虚刀を抜いて応戦した。本来破<sup>アランカル</sup>面には鋼皮<sup>イエロ</sup>という常時皮膚が最低でも鋼の硬度に達しているのだが一角からすると三下程度の硬さなど鼻から眼中になく自身が超えたいと思う最強の男の硬さを斬るべく日々鍛錬しているのでどんな斬り方と踏み込みで斬れるかわかるほどまでに観察眼が鍛えられていた。

一角 「へっ！どうやらお前は<sup>この</sup>斬り方と踏み込みが有効のようだな。」

「……どうやらお前は雑魚と一方的に見下せるような相手ではないらしいな。」

巨漢の男は一角の実力を理解して雰囲気が変わった。即座に虚刀を構えて響転ソニックドで高速戦闘を開始する。

一角「へっ！そう来なくちゃな！俺は更木隊第3席班目一角だ！てめえを殺す男の名だ！」

一角は名乗りを上げて瞬歩で加速した。

弓親「どうやら、一角達は始めたようだね。でも流石にこれを使ってから初めてよね。展開『戦闘用異空間異空：街中戦場』」

弓親は懐からルービックキューブのような立方体を取り出すと自信と金髪の男と一角と一角の相手をしている巨漢の男を特殊空間に取り込んだ。

「ぬうう！これは!?!」

「チツ！面倒な」

破面の二人はこの空間の面倒さに気づいた。先ほどまでと同じ場所に見えて特殊な異空間であるここでは黒腔ガルガンタを強引に開かなければこの空間から出ることができないようだ。

一角「弓親、すまねえな。」

弓親「気にしないでくれ、こういうのは僕の仕事だ。」

弓親はそう言つて金髪のほうに斬りかかる。

「チツ！」

金髪は舌打ちしながら虚刀を抜いて応戦する。

一角「さくてこれで思う存分に斬りあえるな！」

「???」斬り合いを楽しむとはな……まあいい、どのみちお前はここで死ぬだけだからな。」

一角と巨漢の男もまた超高速の斬り合いを再開した。

side 海燕・都

海燕と都も一護達と離れて目的の場所に行く可憐な少女と見まがうほどの顔をした少年の破面アランカルがいた。

トリス「あつはは、探査回路ベスキスで感知したけどあの夜の決着をつくれるね！」

海燕「へっ！それはこつちのセリフだけ！今日は逃がさないぜ！」  
海燕は刀を抜いて構えるとトリスもまた虚刀を抜いた。

都「展開『戦闘用異空間：荒野』」

都は弓親と同じ霊具を起動して異空間を生成すると一角達が戦っている空間の荒野の場所に移動された。

トリス「へえ、面白い道具だね。じゃあ行くよ!!」

トリスは虚刀を構えて響転ソニックドで加速した、それと同時に海燕と都も瞬歩で加速して激突した。

side 恋次・ルキア

恋次とルキアはレンと凍夜と相対している。

凍夜「久しいな、あの桜の正解を使う男はいないようだな？」

恋次「済まねえが隊長はいねえんだ。だがお前をがっかりさせるよ  
うなことはねえから心配すんな。」

凍夜は白哉がいないことに少し残念そうにするが恋次はすかさず訂正する。

凍夜「分かっている、貴様が纏う気配はあの夜あの男の補助しかできなかつた弱者ではなく俺らと対等の強者の気配だ。」

凍夜は虚刀を抜いて片手で構えると恋次も刀を抜いて正眼に構える。

両者は無言で加速して激突した。

レン「お久しぶりですね。では早速始めましょうか。」

ルキア「久しいな、レンよ。展開『戦闘用異空間：平野』」

二人は少し言葉を交わすとルキアは霊具を起動して戦闘を開始した恋次と凍夜も巻き込んで異空間の平野に転移した。

そして刀と虚刀を抜いて斬り合いを開始した。

side 日番谷・乱菊

冬獅郎と乱菊もまた二人の破面アランカルと対峙していた。

片方の細い男が不意で乱菊に虚刀で斬りかかるが冬獅郎が間に入ってその刃を止める。

日番谷「どうやらためえが相手してくれるようだな。俺は十番隊隊長日番谷冬獅郎だ。」



??? ↓シャウロン「初めまして私は破面・No.11シャウロン・クローファンと申します。隊長……どうやら私はアタリのようなですね。」

日番谷「残念だがお前は外れた。」

乱菊「展開『戦闘用異空間：都市』」

乱菊は霊具を起動して自身と冬獅郎と敵二人を異空間の都市に転移した。

sideイモ山

イモ山は普段と同じように任務を行って帰宅途中だったが突如強大な霊圧を感じて刀に手を掛けています。

イモ山「な、なんだ!!? この馬鹿でけえ霊圧は!!」

??? 「見く付けたあ」

イモ山は声のする方に目を向けると半月状の仮面の名残を被った男がいた。

??? ↓デイ・ロイ「なんか、パツとしないやつがいるな。まあいい、俺は破面・No.16デイ・ロイ・リンカーだ! という訳でさつさと死ねや!!」

デイ・ロイは虚刀を抜いて斬りかかるがイモ山もまた斬魄刀を抜刀してデイ・ロイの斬撃を受け止める。

デイ・ロイ「なあ!」

デイ・ロイはイモ山が自身の斬撃を受け止めたことを驚愕した。

イモ山「くっ! なんておもてえ攻撃だ。だが受け止められねえほどじゃねえな。」

このイモ山はあの一護をして中々強くね?と思わせる実力を有している。舐め切ったままで戦って勝てるほど弱くはない。

ちなみにイモ山は霊具『異空間』を持っていないので通常の空間で戦っている。

side嫁ーズ

バグー嫁ーズは途中で合流すると霊圧を感じた方へ移動した。

そこには3人組の女破面と奇妙なデカイ虚のようなものがいた。

??? 「ちっ! 一護のやつは居ないのかよ。」

??? 「うるさいぞ、アパッチそれならこいつらを人質にしておびき出せばいい。」

??? 「あら？そこのうるさい品性のない女より冷静ですね？ケダモノ」

アパッチ 「誰が品性のない女だ!! スンスン!!」

??? 「誰がケダモノだ!! いい加減にしろよ スンスン！」

スンスン 「嫌ですわね〜 こういう品性のない言葉使いの女達といると私まで品が無い様に見られてしまいますわ〜」

何故か仲間内で言い争いをしていた。

嫁ーズは思った『こいつら、あの女アからの刺客だと』そう認識した瞬間に霊具『異空戦場』を起動して山岳地帯の草原場所に転移した。

アパッチ 「なっ!? スンスン! てめえのせいで変な場所に飛ばされたじゃなねえか!! どうすんだよ!」

スンスン 「知らないですわよ、そんなことそれより早くこの者たちを倒して一護と言う男をおびき出しましょう。」

??? 「そうだな、さつさと倒すぞ。アヨン! 死なない程度に叩き潰しな!!」

アヨン 「グおおおおお!!!」

アヨンと呼ばれた怪物は褐色の女の言葉に反応して織姫達に襲い掛かる。

織姫達は武器を展開して回避行動に移っていた。

ネム 「茜雫さん、のえるさん、リルカさんあの3人はあなた達に任せます。この虚は私達が倒しますので」

織姫・のえる・リルカ 『わかった(りました)(わ)』  
ネムの言葉に3人はアパッチたちに向かった。

茜雫 「はあ!」

茜雫は刀をスンスンに振り下ろす。

スンスンは軽やかに避けると袖から釵を突き出した。  
ガキーン!

金属のぶつかり合いが起こり周囲に音を響かせた。

スンスン 「なかなかやりますね。ですがやられてもらいますね?」

茜雫「そつちこそ、一護は渡さないよ!!」

スンスン「何を言っているのかはわかりませんがさつさと終わらせます。」

スンスンは釵を左に持つと右に虚刀を抜いて構える。

両者は地を蹴って加速して刀を振るった。

リルカ「りやあ!!」

リルカは装甲を纏った蹴撃を連発で放つがアパッチは鋼皮イエロで強化された四肢で迎え撃つ。

アパッチ「あめえんだよ!!」

響ソニード転アと完現術クセ：加速ルで超高速戦闘で瞬時に10、20の拳撃と足刀が放たれる。

アパッチ「おいつ! さつさとやられるよ!」

リルカ「ふざけたこと言わないで! 負けたら一護を誘い出して口には言えないことする気でしょ!」

アパッチ「お前は何言ってるんだ!! そんなことするわけないだろ!!」  
リルカ「あんたみたいな女は力づくで奪おうとするって相場が決まってるのよ!!」

アパッチ「勝手に決めつけてんじゃねえ!!」

アパッチは叫びながら円の一部分が欠けた形状のチャクラムを投擲しながら響ソニード転トで距離を詰めてきて虚刀を抜いて斬りかかってくる。

リルカはその攻撃を対処しながらアパッチの攻撃を予測した。

???「つたく、スンスンもアパッチもがむしやらに戦いやがって」

のえる「初めまして、私はのえると言います。あなたは?」

???↓ミラ・ローズ「ああ? あたしはフランチエスカ・ミラ・ローズだ、あいつらやあの人達からはミラ・ローズって呼ばれてる。」

のえるは言葉の通じる人型ドラゴン：・破面相手アランカルに對話で時間稼ぎができないか試みる。

のえる「本日はどのような件でこちらに来たのですか?」

ミラ・ローズ「そりや、知り合いの敵討ちだな。あいつら悔しそうにしていたからな。」

のえるはミラ・ローズと会話しながらも油断なくいつでも行けるよ

うにはしている。

のえる「ではこのまま帰っていただけませんか？」

ミラ・ローズ「無理だな、それにこのまま私だけ戦わずに帰ったらアパッチとスンスンがうるさいからな。」

ミラ・ローズはそう言つて虚刀を抜いた。

のえる「はあ…… どうかやら交渉決裂ですな。」

のえるも覚悟を決めて白鞘に収まった解放前の魔剣を抜いた。

両者は響転ソニードで加速して刃を交えた。

一方その頃ネム、雨うるる、雛森、織姫、本体のMIの5人はアヨンと戦闘中だ。

アヨン「ゴおおおおおおおおおお!!!」

アヨンは仮面の左右から以上に大きい瞳を展開して仮面の下から巨大な口を開いた本気モードで叫びながら織姫達に殴り掛かってくる。

織姫「『三天結盾』！」

織姫はバリアを張つてアヨンの攻撃を防いだ。

ネム「これで！」

雨うらみ「どうですか!!」

ネムはマユリ特製の特殊霊具の重火器を取り出して霊圧を弾丸上にして打ちまくる。

同じく雨も武装アームズ・リングの腕輪で重火器を生成してボンバカ撃ちまくる。

ドガガガガガガガガガガガガガガ!!!

轟音を響かせながらアヨンの肉体を抉つたが超速再生を有しているのか虚刀を取り込んだ個体なのか肉体が逆再生して復元した。

MI「はあ!!」

MIも今回の事を想定して端末ではなく本体できている。

全身を黒を基調としたドレスアーマーを身に纏つていて黒色で前髪ぱつつんでポニーテール、花の髪飾りを頭部の左前に付けている。体型は織姫達と比べても同等レベルのスタイルの良さを誇っており顔つきも幼さを残すがそれでも10人中10人美人と呼べる顔つきである。

手には漆黒の意匠が施された片刃の大剣。銘は『暴虐之王』が握られている。

この大剣は一護の斬月をベースに一護が作成したものでMIは持つてる武器の中で一番愛着がある代物だ。

MI「はあ！」

MIは大剣を振ると黒い霊圧の斬撃が飛んでアヨンを切り裂くがアヨンは意にも介さずに肉体を再生して方向を上げながらMIに殴り掛かる。

雛森「弾け！『飛梅』!!」

雛森は七支刀から巨大な火の玉を飛ばしてアヨンに隙を作る。

MIはアヨンに隙でできた瞬間に即座に瞬歩で距離をとった。

MI「強いですね、何ですか？この生物は？」

雛森「そうですね、もうすぐ罨は張り終わりますけどそれでも倒せるかわかりませんね。」

雛森はアヨンは知能が低いという弱点を把握し、即座に鬼道で罨を張ることでアヨンを倒そうとするがMIの斬撃を意を介さない所を見ると罨が通用するかわからないようだ。

5人は長期戦覚悟でアヨンに向かった。

side 一護

一護は莫大な霊圧を感知してその中でも一番高い奴の場所に急行した。

一護「ここか？」

一護は到着した場所に到着したが破面は居なかったが剣八戦で体得した超直感で認識外からの虚刀の一撃を回避した。

???「チツ！外したか。」

シヨートジャケツト風の破面死覇装を着た、端正な顔立ちに水色のリーゼント風の髪をした不良風の男性破面が虚刀を振り抜いた態勢でいた。

一護「お前か？今回の騒動の主犯は？」

???「あゝ、んなこと知ってどうすんだよ？」

一護「別に俺は黒崎一護、お前は何者だ？」

一護は目の前の男を既に知っているがそんなことは相手は知らない  
ので一応形式上聞いておく。

???↓グリムジョー「そうかい、俺は第6十刃セスタ・エスパードグリムジョー・ジャ  
ガージャツク。てめえを殺しに来たぜ。」

グリムジョーは名乗り終わると虚刀で連続で斬りかかってくるの  
で一護は結界を張って肉体を鋼皮イエロブルート・ヴェーネアルテリエと静動血装イエロブルート・ヴェーネアルテリエとその他諸々の強  
化能力で強化し二刀を抜いて応戦した。

## 50話：「次はちやんと決着をつけようか」

side 一角・弓親

巨漢の男と一角は現在進行形で斬り合いをしている。

一角は巨漢の男の体格から自身のほうが力が劣っていると認識した瞬間に敵の能力を引き出させるためにわざと隙のある戦闘方法で相手をしている。

一角「はあっ！」

一角は右の鞘で殴りつけると巨漢の男は空いている左手で防御して左の刀の斬撃を虚刀で防ぐ。

???（この男、戦い方は荒いが腕は確かだ。挑発するだけのことはある。右の鞘で防御し、左の刀で攻撃する実に単純……だがこの男どちらかと言えばこの俺の手の内を出させるためにわざとこの戦い方をしているようにも見える。言動こそ戦い好きのバカのそれだが実際にそうだろうが身のこなしの端々に冷静に戦況を見極めようとする行動が見え隠れしている。油断して踏み込み過ぎれば切られるな。）

巨漢の男は刀の打ち合いの中、先の言動から一角の戦い方を分析している。

???「はあっ！」

巨漢の男は掌に霊圧を溜めると一角に強烈な掌底を叩き込んだ。

バルマ・ブランチャ  
手 甲掌というシンプルな技だがこの男のように体格と臂力に優れたものが使うと必殺の一撃に昇華される。

一角はその攻撃を刀と鞘を十字に構えさせて後ろに跳躍して攻撃を受けきるが一角はあまりの攻撃の衝撃にダメージを受けてしまった。

一角「がはあ！」

一角は血を吐きながら体がよろめく。

???「驚いたな、この一撃はエスパーダ十一刃の中で最強の破面アランカルの従属官フラシオンからも認める威力はあるというのにお前はその程度にすんでいるとは。」

巨漢の男は一角のダメージを逃がす技術に驚嘆する。

エスパーダ  
十一刃最強その称号を預かる者の従者が生半可な実力で務まること

はない、かの女を慕う者たちの中から従属官フランオンと雑用の二つがあり選ばれるが従属官のほうは実力が多少劣ろうとロアが気に入れば従属官にはなれるがそれでも相応の実力を持てるようにロアがある程度になるまで鍛えるが雑用のほうは完全なる実力主義で負けたら強制的に役割を交代させられる仕組みなため現在まで雑用の立場にいるあの3人は未だその座を保っている、ロアがいなければ十一刃エスパーダに名を連ねていてもおかしくないほどに。

一角「へっ！いくら最強の破面の従者からお墨付きをもらおうがそれいつらは只の腰巾着だろ。延びろ！『鬼灯丸』！」

一角は刀の柄と鞘を合わせて斬魄刀を解放して霊圧を高める。

???「そうか、それがお前の斬魄刀か。どうやら俺も解放して戦った方がよさそうだな。」

巨漢の男は一角の開放に伴って自分も解放すると言った。

一角「俺の力を認めるってか？」

???「いや、お前のような奴は生半可な力で戦っても埒が明かねえ。なら圧倒的な力でねじ伏せた方が速いからな。」

そう言い男は虚刀を一旦納刀して己自身の斬魄刀を抜刀した。

???「熾おきる『火山獣ボルカニガ』」

男は解号を言い刀剣解放を行った。

解放した男の姿が変化して鼻の仮面が消え、両耳の付近に仮面のようなものが形成され肩の関節から両腕にかけての部分が巨大化し、見た目は鎧のような形状となった。

???↓エドラド「これが破面アランカルの刀剣解放、帰刃レスレクシオン！…：…：…：そういえばさつきお前は俺に名を名乗っていたな。俺は破面アランカル・No.13トレットエドラド・リオネスだ!!」

エドラドは名を名乗ると右腕を突き出し右拳から凄まじい火炎を放ってきた。

一角「くっ!!」

一角は即座に避けるが余波だけでも凄まじい火力に一瞬怯む。

一角が一瞬怯んだ瞬間エドラドは瞬時に響転ソニードで距離を詰めて全力でぶん殴った。



エドラド「ぜりやああああああ!!!」  
鋼皮で強化された剛拳が一角に直撃して思いっきりぶっ飛んだ。

一角「ぐあああああ!!!」

一角はなんとか空中で体勢を元に戻すがエドラドは距離を詰めて火炎を放って一角を地面に叩き落した。

一角「ゴハッ！」

エドラド「終わりだな、戦士にとって諦めは時に美德だぞ。俺はお前を粉々になるまではしたくねえ。」

エドラドは一角にそう言うが一角はボロボロの体で何とか立とうとする。

一角「くっ…う」

エドラド「そうか、残念だ。」

エドラドは一角にとどめを刺そうと火炎を纏った拳を振り下ろした。

ドゴーン!!

凄まじい衝撃が起こり振り下ろされた地面が陥没したが一角は何とか受けきった。

エドラド「ん？」

一角「くっそお、まさかここまで力の差があるとはな。こうなったらあれで戦ってみるかな。」

一角は何やらぶつぶつと言い始めそして

一角「『卍解』！」

凄まじい霊圧を発し卍解を発動した。

エドラド「なんだと、卍解…だと」

エドラドは藍染やロアから卍解は一握りの強者の死神しか修得していないと聞かされていたがまさか自分が戦ってボロボロにされていた男が習得しているとは思わなかったようだ。

一角「卍解、『龍紋鬼灯丸』!!」

一角は鎖でつながれた3つの形状の異なる斧の卍解を構えるときらに

一角「延びろ!!『龍紋鬼灯丸』!!」

一角の言葉で卍解の形状が変化して3つを組み合わせた巨大な斧槍ハルバードに合体変化した。

エドラド「…スゲエじゃねえか。なら俺も全力で相手をしてやる。『超越せよ』」

エドラドもまた一角の霊圧の高まりに自身の全力で粉碎する覚悟を決め虚刀を再び抜いて解放した。

エドラド「超越刃オバーブレイド『超越の火山獣』」

超越刃（ロア命名）を解放したエドラドの姿は通常の刀剣解放する前とさほど変わらないが解放して変化した腕を通常サイズまで圧縮しているような姿に変化した。

全ての力を見せた二人は

一角「世辞はいい、スゲエかどうかは…」

一角とエドラドは霊圧と気配を強める。

一角「死んでから決めろお!!」

一角のその言葉を合図に空中に跳躍した。

一角「はっはあ!!」

一角は斧槍を振るってエドラドの強化された鋼皮イエロを切り裂くがすぐさま再生した。

一角（くそっ！この再生さえ無きや押し切れるってのによお!!）

一角は鬼道がとてつもなく適性がないのでM Iも鬼道より武術を磨けと言うほどなのでひたすら己の得意を磨いたがエドラドのようなタイプだと相性が悪すぎるのだ。

斧槍ハルバードを振るい刺突を放つがエドラドは肩から火炎を噴射して回避する。

一方のエドラドも一角の初撃を受けてその性質を理解した。

エドラド（なるほどな、先の貧相な槍のようなものは本来の変幻自在の戦闘で敵と戦うものならこの卍解は俺のような力を得意とする者との戦闘に使うものなのか。しかもただ力に頼った代物ではなく斧槍ハルバードと3つの形状の異なる斧を巧みに使い分けると言ったこともできる…他にも能力があるかも知れない…だがこの男の性格を考えると性根の曲がった能力ではないだろう。ならば力と力の真っ向

勝負で叩き潰す!!)

エドラドはこの僅かな時間の戦闘で一角の性格を理解して幻覚系や複雑な概念系の能力ではないと辺りをつけていた。そして自身の能力を最大限生かした真っ向勝負でケリをつけようとする。

莫大な霊圧がエドラドから放たれ高められていく。

一角もまた真っ向勝負で一撃で仕留めないといけなさと理解しているので限界まで霊圧を龍紋鬼灯丸に込めていく。

一角「行くぜ？」

エドラド「ああ」

霊圧がお互いに最大まで高まると互いに最速で突っ込み攻撃が交差した。

ドガアアアアアアン!!!!!!

お互いに攻撃が直撃して一角の正解は粉々にぶっ壊れたが能力のおかげで直ぐに修復したが一角は力尽きて地面に落下した。

エドラド「はあ…はあ…虚刀のおかげで命拾いしたぜ。」

エドラドもまた肉体を大きく抉られたが虚刀の再生でダメージは回復しつつあった。

エドラド「班目一角か…おそらくあのダメージ量では生きていないだろうが見事だったぞ。」

エドラドは肉体の再生とダメージの大きさから一時戦闘から外れることにしたため黒腔ガルガンタを開いて元の空間に戻っていった。

一角「はあ…はあ…くそっ！何とか生き残ったが…不味いな。」

一角はギリギリで生き残ったが無事とは言えずにいた。今も体を這いずって移動している。

一角「く…く…そ」

一角はそのまま気を失った。

side 弓親

弓親もまた目の前の金髪の男と斬り合いをしている。

弓親「ふっ！」

刀で袈裟切りを放てば男もまた虚刀で防いで切り返してきてそれ

を弓親は体捌きで軽く躲す。

??? 「チツ！雑魚の分際でうつとしい!!」

男は苛立ちながらも虚刀の剣速を上げるが弓親は慌てずに男の斬撃を受け流しながら

弓親 「破道の五十四 廃炎<sup>はいえん</sup>」

弓親は円盤状の炎を放ち焼きつくす破道を使って金髪の男に直撃させた。

??? 「ぐはあ!!く、くこそ!!雑魚の分際で調子に乗るな!!突き砕け  
『蒼角王子』!!」

頭に血が上った男は虚刀を納刀して自身の斬魄刀を抜刀して刀剣解放した。

解放した男の姿は、上半身が牛のような巨大な姿（牛のような顔の内部にはイールフォルトの顔がある）に変化した。

??? ↓イールフォルト「俺の名はイールフォルト！覚悟しろ!!死神い!!」

弓親「やれやれ、そんなに激高して叫び続けるなんて美しくないね。

咲け『藤孔雀』

弓親も斬魄刀を解放した。解放すると刀身が4枚刃のシヨーテルのような形状に変化した。

弓親とイールフォルトは何度もぶつかり合いをした。

イールフォルトはパワーで弓親を押そうとするが弓親は受け流しや巧みな足捌きでイールフォルトは思うように攻撃できないでいる。

隙ができる弓親の鋭い斬撃でイールフォルトの角が切り落とされた。

イールフォルト「くっ?!『超越せよ』!!」

流星のイールフォルトも虚刀を解放した。

イールフォルト「超越<sup>オーバーブレイド</sup>刃『超越の蒼角王子』!!」

虚刀を取り込んで進化したイールフォルトの姿は赤い闘牛の鎧を身に纏ったような形状をしている。

弓親「なるほど、これが例の… だけど僕の敵じゃない。」

イールフォルト「調子に乗るなよ!!」

イールフォルトは弓親の煽りに激高しながら突撃するが  
イールフォルト「うお！な、なんだ!?これは!!」

イールフォルトはいつの間にか霊子の網にとらわれていた。

弓親「簡単な罠だよ。さてあまり長話をする気はないね。裂き狂え  
『瑠璃色孔雀』」

弓親は藤孔雀の本来の名を呼んで斬魄刀を解放した。

解放と共に蔦でイールフォルトを縛り、その霊圧を吸収するという  
もの。そして吸い上げると蔦についている蕾が開花し、その花をくわ  
えることで自身の霊圧にすることが出来る。

弓親「さあ、チェックメイトだ。」

弓親は処刑宣言をした。

イールフォルト「や、やめろおおおおお!!」

イールフォルトは叫ぶが弓親からすれば関係のない話だ

如何に虚刀の力で強化できると言ってもその根本的な部分である  
霊圧を吸収されてしまえば話は別だ。霊圧が減少する度に強化され  
るが瑠璃色孔雀がそれ以上の速度で霊圧を吸収し根こそぎ吸収しき  
りイールフォルトは絶命した。

弓親「さてとりあえず、急いで一角を救護に向かわなければ」

弓親は急いで一角の元に急いだ。

その後一角は弓親のおかげで一命をとどめた。

sideイモ山

イモ山はデイ・ロイと戦闘中だが場所が悪いので煽りながら場所を  
変えて岩の多い山側に移動していた。

イモ山（よしッ！ここなら俺の力を最大限生かしながら町への被害  
を減らせる。）

デイ・ロイ「ようやく、追いつめたぞ！良くも人を馬鹿にしなが  
ら逃げられたものだな!!」

デイ・ロイはキレながら虚刀で斬りかかってくるがイモ山は特に焦  
ることなく冷静だ。

イモ山「お早う『土鯰』!!」

そしてイモ山は斬魄刀を解放した。

解放した斬魄刀は鈴が付いた円月輪に変型した。有する能力は大  
地操作と言う強力な能力を有している。

イモ山は地面を殴ってデイ・ロイの通過する場所の地面から巨大な  
土の槍を発生させつつ周りの大岩を操作した。デイ・ロイに大岩を直  
撃させて土の槍で貫いて上半身をぶつ飛ばして即死させた。

イモ山「ふう、こいつが焦って直線的な攻撃してくれて助かった  
ぜ。」

一応、ちゃんと死んだか確認したがちゃんと仕留められたようだ。

side 恋次

あれから10分近く打ち合っているがこれではがちが明かないの  
で互いに力を解放した。

凍夜「凍てつけ『凍結の蟲王』！」  
コキユートス  
レスレクシオン

凍夜は刀剣解放してその身に青白い甲虫のような鎧を身に纏った。

恋次「吠えろ！『蛇尾丸』!!」

恋次もまた斬魄刀を解放して蛇腹剣に変化させた。

凍夜「『術式展開』はあ!!」  
じゆつしきてんかい

凍夜は武の構えをとり、足元に自らを中心とした雪の結晶を模した  
陣を出現させ恋次に殴り掛かる。

恋次「ふっ！」

恋次もまた蛇尾丸を伸ばしながら四肢を死覇装のカスタムパーツ  
の機能で強化して凍夜に殴り掛かる。

凍夜は蛇尾丸を手甲で弾くと距離をさらに詰めた。

恋次は弾かれた蛇尾丸を元に戻すと刀と白打を合わせた戦法で凍  
夜の最も得意とするクロスレンジでの戦闘を開始した。

凍夜「はああああ!!!」

恋次「うおおおお!!!」

拳と拳、拳と刀が打ち合う。

一瞬で10、20の攻撃が交差し終わると一旦距離を取った。

凍夜「やるな！やはりあの時の俺の予感はずしかったな!!」

凍夜は恋次の成長に歓喜の声を上げる。

恋次「そりやどうも、てことで終わろうぜ!! 卍解！『狒狒王蛇尾丸』」  
ひひおうぎびまる

!!

恋次は卍解を使用して巨大な骨の大蛇に変形させた。

恋次は解放した狒狒王蛇尾丸を振るって凍夜を叩き潰そうとするが凍夜は虚刀を抜いていた。

凍夜「『超越せよ』!」

凍夜の霊圧が爆発的に高まった。

凍夜「オーバーブレイド超越刃!はかいさつ・あかざ破壊殺・猗窩座」

姿が解放前のものに戻ったが霊圧等が異常に上昇しており姿も死人の様な肌の色に紅梅色の短髪、どこか幼さも残る顔立ち、細身ながらも筋肉質な体格の若者といった外見であり、顔を含めた全身に藍色の線状の文様が入っており、足と手の指は同じ色で染まっていて、爪に至っては全て髪と同じ色である。

振り下ろされた狒狒王蛇尾丸を拳でぶっ飛ばした。

恋次「くっ?!? 狒狒王蛇尾丸を素手でぶん殴って勝つとはな。」

凍夜「おい! 俺は全力を出したぞ!! お前も全力で来い!!」

凍夜は狒狒王蛇尾丸を殴った際に感じた違和感を感じ取って恋次はまだ全力で無いことを見抜いた。

恋次「チツ! やっぱりバレるかしようがねえな。卍解! 『双王蛇尾丸』」

恋次は卍解の真の名を言っつて解放した。

解放された双王蛇尾丸は右腕には大蛇の骨を纏い枝刃を生やした刀「オロチ王」、左肩には強い腕力を持った巨大な狒狒の腕「狒狒王」を装着された。

凍夜「それがお前の全力か! さあ存分に戦おうか!!」

互いに霊圧を高め激突した。

恋次「『オロチ丸』!」

恋次は名を呼んで右の直刀を枝刃を生やした刀に変化させ斬りかかる。

凍夜も恋次の双王蛇尾丸の力を理解しているのか、下手に距離を詰めずに虚閃ヒロを連発した。

恋次「くっ!」

恋次は双王蛇尾丸の刀と腕を振るって虚閃を弾く。

凍夜「『破壊殺乱式』」

凍夜は拳打による連携・乱打を放って恋次を迎え撃った。

拳打の乱打に対して恋次がとった行動は

恋次「『狒狒王』！『狒骨握撃』!!」

恋次は一瞬で来た凍夜の隙について狒狒王を巨大化させ霊圧を込めて対象を握り潰す大技を放った。

凍夜「グ……ううう!!?」

メキ……メキメキ

圧倒的な握力で凍夜を握り潰そうとする。

レン「超音波」

恋次「ぐわっ!!」

凍夜を握りつぶしかけた時、横から超音波を喰らってダメージを受けてしまい握っていた力が緩んでしまい凍夜が抜け出してしまった。

凍夜「はあ……はあ……危なかった。感謝すればいいのか、レン。」  
レン「ええ、すみませんね。あまり自分のことを優先するとロア様からのご命令を無視するわけにはいきませんのでここで引かせていただきます。あなたの連れれの女性死神にはまたいづれ決着をつけましょうと言っておいてください。」

レンはそう言って凍夜を連れてもう一人の場所まで撤退した。

恋次「っ！ルキア!!」

恋次は直ぐにルキアの場所に急いだ。

到着した恋次はルキアの状態を見て安堵した。

ルキア「れ、恋次か……すまん。情けない姿を見せて……しまつて」

ルキアは大怪我していたが回道で傷を回復していたので死んではいないが息が荒くかなりのダメージを受けていた。

恋次「何があつたんだ？お前がここまで追い詰められるなんて」

ルキア「レンのやつがこの前戦った時よりはるかに強くなっていてかつ私の卍解の性質上あやつの超音波という技のせいで使うことが出来なかったのな。そのせいでこの有様だ。」



恋次「そうか、とりあえず早く安全な所に移動しよう。」

恋次はルキアを抱き抱えて急いで移動するが

ルキア「おいっ！恋次!!別に抱き抱える必要はないだろ！」

恋次「いいだろ！別にこれが一番楽なんだから!!」

恋次は腕の中でぎゃあぎゃあ騒ぐルキアに文句を言いながらも速度を強めた。

side 海燕・都

海燕は刀に霊圧を込めて渾身の力で振り下ろした。

海燕「喰らえ！『月牙天衝』!!」

トリスはこの技を知っているので虚刀に虚閃セロを纏わせて防御した。

トリス「波斬り！」

虚刀から虚閃セロが激流のように放出され虚刀を振り抜く。この技は本来は第3十一刃トリス・エスパーダティア・ハリベルの技だが彼女を師事して修得した物だ。

都「させない！『縛道の三十九 円閨扇』」

円形の盾を出して繰りトリスの斬撃を防いだ。

トリス「これは全力で相手した方がいいね。はばたけ『翼撃王』」

トリスは海燕たちの実力を把握すると解放すると全身が金色の大鷲と獅子を足した鎧を身に纏った。

海燕「ここからが本番だ！水天逆巻け『振花』！」

海燕もまた斬魄刀を解放して三又の槍に変化した。

海燕は槍に流水を纏わせて手首の回転を軸にした修練の末パワーアップした槍術で対応する。

トリスもまた鉤爪の付いた徒手空拳で相手をする。

都「沈め『影縫い』」

都も斬魄刀を解放してトリスの動きを見過ごさないようにする。

トリスもまた虚刀を抜いていつでも都と海燕の両方の相手ができるようにしている。

刀と槍、鉤爪の付いた拳と槍が激突して金属音が辺りに響く。

海燕は距離を取って即座に激流を発生させて手首の回転で生成した波濤でトリスを叩き潰そうとする。

トリス「『剛勇吼波』！」

トリスは激流の波濤にグリフォン型の霊圧の気弾を放って相殺した。

海燕「ちっ！こうなりやこれを使うか！卍解！『天逆鋒』！」

海燕の卍解は日番谷とかと同じで始解と卍解の差がほとんどない、強いて言うなら卍解すると霊圧にブーストがかかるくらいだ。

トリス「あはは、ようやく卍解を使ったね。じゃあ僕も『超越せよ』！」

トリスもまた虚刀を取り込んで帰刃を超えた力を発揮した。

トリス「超越刃『超越の翼撃王』！」

両者全力の状態だがトリスは先ほどからあの女が静かなことに疑問を抱いている。

トリス（おそらく、斬魄刀の能力で陰に潜んでいて油断した直後に不意打ちしてくると見た。）

トリスはこの前の不覚を取った時のことを思い出し、探査回路で周囲の探索を怠らずに海燕の動きも注意深く見ている。

両者は僅かな時間、静止したような時間だったがすぐさま加速して激突した。

霊圧を圧縮した鉤爪の付いた拳は掠るだけで生半可な實力しかない者を消滅させるだけの力が込められているが海燕もまた激流を纏った槍で迎え撃つ。

数分の激突の果てに決着をつけまいと二人は大技を放つ。

トリス「『剛勇吼弾』!!」

トリスは先ほど放った技を弾丸上にまで圧縮してそれに自身の血を混ぜて放つ最強の虚閃、王虚の閃光を混ぜることで威力を飛躍的に上げるトリス最大の技だ。

禍々しい黒紫色の弾丸が発射され海燕に迫る。

海燕「へっ！そう来なくちゃなあ!!都！準備はいいな。『生主流転』」

！『氷河征嵐』！『根源の波動』!!」

海燕もまた水の龍を放つして破道と氷と嵐を発生させて攻撃する破道を組み合わせて氷の龍でトリスの技の威力を削ぐがそれでもま

だ威力を殺しきれずに海燕に直撃して十分なダメージが入るがそんなことお構いなしに海燕は周囲にある水の球体から水の柱を生み出し、相手にぶつける大技を放った。

トリス「まだだよ！『雷剛弾』！』」

虚閃<sup>セロ</sup>の気弾を連射して海燕の根源の波動を相殺して響<sup>ソニード</sup>転で距離を詰める。

トリス「『剛勇衝打』!!』」

霊圧を収束させ、強力な突きを放った、それに対してダメージを受けて動けない海燕は

海燕「前にも言ったが戦いは何も一人でやるもんじゃねえぞ！都!!』」

都「卍解『嵌合暗翳庭』』」

都は地下修練場の修行でM Iの指導の元卍解を修得に成功した。

都の卍解も始解の拡張で解放すると自身の影を拡大させてその影を自在に操作するというものだ。

トリスの足元から巨大な影の刃が出現してトリスを串刺しにした。

トリス「ごはあ!!』」

トリスは不意に攻撃を喰らって吐血して再生しようにも刃が腹に刺さって再生できないでいる。

海燕「これで終わらせてやる。『波濤激流波』！』」

先ほどの根源の波動のように水球を発生させるがそれを一つに圧縮して一直線に放って直線状の物体を破壊する海燕の持つ技の中で破壊力が一番高い技だ。

圧縮された水の柱の激流がトリスを吹き飛ばしたがトリスは霊圧を直撃する場所に集中させて防いでいた。

しかし、トリスのダメージ量も相当なもので再生してパワーアップしようとするが目に見えて再生が遅く都は止めをさしに影の濁流を発生させてトリスに迫らせるが

凍夜「させん！』ガキイン！』」

凍夜が割って入り鬼道系である影の濁流を自身の特性で無効化した。

トリス「な、何しに来たのさ…。」

トリスは邪魔されてイラついた感じに凍夜ともう一人に言う。

レン「何しに来たと言われましてもロア様の命令を忘れて死にかけていたから助けただけです?」

レンからしても二人の醜態に呆れて言葉も出ない様子だ。

レン「残っている方を連れて戻りますよ。」

レンはそう言って凍夜にトリスを担がせて残りの破面アランカルの場所に向かおうとする。

都も逃がさないという意味で向かおうとするが

レン「追ってくるのは構いませんがそちらの隊長は諦めた方がいいですよ?」

レンは海燕を指さしながらそう言った。

流星の都も海燕を置き去りにできないので黙って3人を見逃した。

3人はそのまま響ソニック転で移動した。

side日番谷・乱菊

乱菊は目の前のおかつば頭の破面アランカルと相対している。

刀と虚刀がぶつかり合うが未だに一太刀入れることができないでいる。

乱菊は鬼道を織り交ぜて攻撃を仕掛ける。

乱菊「『金剛爆』」

乱菊は距離を取ると着弾時に大爆発して広範囲を焼く破道を放った。

???「ちっ!」

破面は虚刀を斬るが切った瞬間に爆発して肉体を焼く。

乱菊「唸うなれ『灰猫』!」

乱菊は解放して刀身が灰と化して操作する。

乱菊「はあ!」

乱菊は柄を振るって灰を男の周囲に檻のように展開した。

乱菊「『金剛爆こんごうばく・烈火灰燼れつかかいじん』!」

灰を男が浴びた状態で爆炎の弾を放つことで炎弾の熱が灰に干渉して粉塵爆発を起こして男を木っ端微塵に破壊した。

乱菊「ふう、少し疲れたわね。一旦みんなと合流した方がいいわね。」

乱菊は織姫達の場所に瞬歩で移動した。

一方の日番谷はシャウロンと打ち合いをしている。

日番谷「はあ！」

日番谷は氷の龍を飛ばして攻撃するがシャウロンもまたNo.11も番号を背負っている身としてそれ相応の実力を有している。虚刀に霊圧を纏わせて切り裂いた。

日番谷は氷柱を雨の如く降らせて攻撃するがシャウロンは虚弾を放って数を減らして体捌きで躲ききると虚刀で斬りかかる。

日番谷は刀で受け止めて柄から伸びている龍の尾を模した刃物がついた鎖鎌で腕を拘束した。

シャウロン「ぬ!？」

日番谷「これで終わりだ。『凍結時間』」

この技は卍解状態で使うのだが始解でも至近距離なら特に問題なく使えるようになった。

瞬時にシャウロンの全身が凍り付いて砕け散ると思われたが

シャウロン「截たて『五銚テイヘレタ蟲』」

解放したシャウロンの姿は昆虫の外皮を思わせる鎧の姿に変化し、辮髪はハサミムシの尾のような装甲で覆われ、顔の仮面の領域が顔の左半分から顎まで広がり、右に伸びていた突起が後ろへと伸びた形状に変形する。両腕には鋭く伸びた爪を装備している。

解放した瞬間の霊圧で全身の氷を破壊した。

シャウロン「ここからですよ。」

シャウロンは両腕についている爪で高速の連撃を放ってくるが日番谷もまた刀で捌いていく。

何度も打ち合うながら場所を移しているが日番谷はこの状態を待っていた。

日番谷は落ち着いて霊圧を高めた。

日番谷「卍解『大紅蓮氷輪丸』！」

解放と共に、刀を持った腕から連なる巨大な翼を持つ西洋風の氷の

龍を日番谷自身が纏い、背後に三つの巨大な花のような氷の結晶が浮かぶ。このとき刀身の鏢が微妙に変化し、元々の鏢に少しずらした鏢が重なっているような形状となっている。

日番谷は瞬歩で即座に味方を巻き込まないように範囲を絞って瞬歩で4回地面を踏んだ。

日番谷「『四界氷結』」

四歩のうちに踏みしめた空間の地水火風と言った概念系全てを凍結するが今だ未完成なためシャウロンの帰刃レスレクシオンの力だけしか封じられなかった。

シャウロン「っ!? 『超越せよ』!」

シャウロンは日番谷のこの技の危険度を理解して即座に虚刀を解放した。

シャウロン「超越刃オーバーブレイド 『超越の五鋏蟲』!!」

装甲が全身にまで及び腕の太さも増しており、両の爪の人差し指以外は縮まっているが鋭さはそのまま人差し指はより長く鋭くなった。背に会った尾は腰に移動していた。

シャウロンは爪から斬撃を飛ばしてきたが氷柱で攻撃して相殺した。

日番谷「『氷竜旋尾』!」

氷で形成された斬撃を敵に向けて放つ。

シャウロンもまた虚閃セロを放って相殺した。

互いに膠着状態ではあるが日番谷はまだ余力を残した状態だが下手に全力を出すと味方にまで被害を出しかねない。

レン「そこまでにしていただきましようか。」

日番谷「ッ!」

レンの出現で日番谷の警戒度は最大限まで高めた。

レン「そう、気張らないでください。シャウロン、一旦引きますよ。これ以上無駄に犠牲を出すわけにはいきませんので。」

シャウロン「...分かりましたよ。」

シャウロンは帰刃と超越刃を解除した。

日番谷「逃がすと思っっているのか?」

日番谷は刀を構えるが

レン「別にこのまま戦うのはそちらの勝手ですがあなた方もこれ以上戦うのは不利益だと理解しているはずです。」

レンの言葉で流石に警戒したまま刀を降ろす。

レン「話が速くて助かりますね。では行きますよ。」

レンはそう言ってシャウロンを連れて残りの破面の元に移動した。

side嫁ーズ

スンスンと茜雫は斬魄刀を解放して戦闘をしている。

スンスンの帰刃は『白蛇姫』アナコンダと言うもので解放するとナーガを思

わせる半人半蛇の姿に変わる。頭の仮面が首の後ろまで伸びた形状に変わり、左頬に右頬と同じ仮面紋が現れる。袖の下には腕が変化した大蛇が隠れている。

能力は純粋な身体能力強化と蛇特融の柔軟性を持つ。

スンスン「はあ!」

スンスンは蛇の体で薙ぎ払ってくるが茜雫もまた始解の能力で竜巻を放ってスンスンをぶっ飛ばした。

スンスン「さっさとやられてくれませんか?」

茜雫「好き好んで負けたいなんて思わないわよ!」

茜雫は『弥勒丸』みろくまるを鍛え上げて風を自在に操る斬魄刀に昇華させたので竜巻以外にも風を使った様々な事象を発現できるようになった。

茜雫は小さな刃がついた錫杖を振るって真空の刃を飛ばした。

スンスン「うつとしいですね」

スンスンは虚刀を振るい真空刃を弾いて響転ソニードで加速して虚刀を振るうが茜雫はその一撃を防いだ。

茜雫「くうう」

アパッチ「いい加減やられて一護をおびき出す人質になってくれませんか?」

茜雫「なる…わけ…ないでしょ!!」

茜雫は突風を起こしてスンスンをぶっ飛ばした。

スンスン「はあ、諦めの悪いことですね。」

茜雫「うっさい! 諦めの悪いのは一護譲りよ! 卍解! 『風天』ふうてん・

志那都比古』!!」

茜雫は卍解を解放して霊圧が爆発的に増加した。

茜雫の卍解は両端に金刃がついた薙刀に変化して能力も始解の拡張だ。

スンスン「それがあなたの卍解ですか？ではこちらも『超越せよ』スンスンもまた虚刀をさらに解放した。

スンスン「超越刃オーバーブレイド『天荒竜アナコングダの白蛇姫』」

虚刀でパワーアップしたスンスンの姿は頭部は眼にあたる部分がゴーグルの様な形状で、蛇の頭髪が生えている。

全体もマゼンタのラインの入った黒を基調とした蛇のようなスーツに変化しており肩には蛇の頭部を模した金のアーマーが装着している。

スンスン「ではいきますよ?」

スンスンは金の蛇が巻き付いた錫杖を構えて響転ソニードで茜雫との距離を詰めた。

茜雫「そつちこそ!」

茜雫も薙刀を振るい風を放った。

スンスンは風を錫杖を振るって防御して姿を消した。

茜雫「っ!?どこ!!」

茜雫は霊圧探知と視界から消えたスンスンを探そうと辺りをキョロキョロする。

茜雫「...いや、一護だったら多分こうする。」

茜雫は風の結界を張った。

すると、背後からガキイという音が響いた。

茜雫「そこお!」

茜雫は薙刀を後ろに突き出した。

スンスン「ちっ!」

スンスンは舌打ちしながら回避して距離を取る。

茜雫「まどろっこしいわね、もっと直球で来なさいよ!」

スンスン「嫌ですわよ、そんな面倒くさいこと。」

茜雫「そんな陰湿なことのほうが面倒くさいわよ!」



茜雫はスンスンの戦い方から性格を予測したが当の本人は面倒くさいと一蹴した。

スンスン「それにしても一護っていう男は薄情ですわね。自分の番が襲われているのに助けに来ないなんて。随分と臆病者ですよのね？」

茜雫「あゝ？」

スンスンはここに居ない一護のことを罵倒したので茜雫の逆鱗に触れた。

茜雫『縛道の六十一 六杖光牢』『破道の八十八 飛竜撃賊震天雷砲』

茜雫は6つの光の帯でスンスンを拘束しようとしてスンスンは即座に避けたが回避先に極大の光線を放っていた。

スンスンは響転ソニードで加速することでギリギリで回避したが避けきれずに足が焼き払われた。

スンスン「ぐうう！」

スンスンは足を即座に再生したが致命的な隙が出来てしまった。

茜雫「覚悟はいい？」

茜雫は目の光が消え失せ薙刀を構え技を放つ。

茜雫『黒繩大龍巻』

茜雫は真空の刃が付与された巨大な竜巻を放った。

スンスン「きやああああああ!!」

流星のスンスンもこの攻撃をまともに受けてぶっ飛んだ。

スンスン「う、ううう…」

スンスンは真空の刃の竜巻で服がボロボロになってしまってもではないが恥ずかしくすぎる格好になってしまった。

茜雫「覚悟はいい？」

茜雫はゆっくりと薙刀を振り上げた。

そしてスンスンに振り下ろされかけたその時

アヨン「うおおおおお!!!」

生みの親の一人のスンスンのピンチを察知したアヨンが5人を振り切ってここまで来た。

茜雫「はあ!?あの5人振り切って来たの!!」

アヨンは叫びながら茜雫に殴り掛かってくるが茜雫は風の防壁で拳を受け止めて止まった一瞬で瞬歩で距離を取った。

そしてアヨンの相手をしていた5人が来た。

MI「すみません、あの謎の生物がどこかへ走って行くので追っていったんですけど大丈夫ですか？」

茜雫「大丈夫なわけではないでしょ？おかげで一護を馬鹿にした女に止めさせなかったじゃない。」

雨「その話詳しく」

織姫「なになに？どんなこと言ったの？」

ネム「とりあえず、あれを倒してからにしましょうか。」

雛森「ですね」

雨、織姫、雛森は目から光が消え失せた。

スンスンはアヨンのおかげで肉体を再生しきった後トリスが迎えに来たのが幸いし予備に持ってきていた死覇装を受け取った。

アパッチ「おらあ!!」

アパッチは斬魄刀を解放してリルカの相手をしていた。

アパッチの刀剣解放は『碧鹿鬪女』レスレクシオン シエルバ と言い、解放するとヘラジカのような角が形成され、鋭い爪を持ち、首から下が毛皮のような服で覆われる。仮面紋が右目にも現れ、眼の色も左右で同じになる。

能力はシンプルな身体強化で特に脚力が大幅に上昇している。

アパッチは蹴りを連続で放ってくる、リルカもまた蹴りを放って応戦する。

アパッチ「さつさとやられる！」

アパッチは上段蹴りを放ってリルカを吹っ飛ばしたがリルカは体勢を立て直してすぐに跳び蹴りをアパッチに叩き込んだ。

アパッチ「がはっ！」

アパッチは後ろにぶっ飛んだがすぐにアパッチも体勢を立て直して再びリルカに突撃した。

リルカもまたアパッチとの距離を詰めた。

そこから先は泥臭い殴り合いが始まった。

派手な技を使わない純粹な殴り合いが始まり蹴りと拳による乱撃

戦が始まった。

アパッチ「うおおおおおおおおおお!!!」  
リルカ「はあああああああああ!!!」

互いが一步も引かずに殴り合っており何故か笑顔で殴ると同じ場所  
に殴り返しての繰り返しをしておりスポコン漫画のようなやり取り  
になっていた。

数分間の殴り合いを終え一旦距離を離すと

アパッチ「はあ…はあ…やるじゃねえか…」

リルカ「そつちこそ、はあ…やるじゃない…はあ」

アパッチは今の殴り合いでリルカのことを少しは理解できた気が  
した。

アパッチ（こいつは最初ふざけたことをいう奴だと思ってたけど  
中々気の合うやつだな。そこでこいつが好きに一護ってやつはそん  
なにあたしたちが思うほど腑抜けた奴って訳ではなさそうだな。）

あの会議で見たオレンジ色の髪の毛の姿しか見てなかったがリル  
カとの殴り合いでリルカのことが少し理解できた範囲では一護はそ  
んなに悪い奴ではないということだ。

アパッチ「てめえ、名前は何だよ？あたしはアパッチ。」

リルカ「あたしはリルカよ。」

アパッチ「そうかよ、それじゃそろそろ本気で戦<sup>や</sup>るぞ。『超越せよ』」

アパッチは虚刀を取り込んでパワーアップした。

アパッチ「超越<sup>オーバーフレイド</sup>刃 『王鹿碧鹿闘女』!!」

超越刃をしたアパッチの姿だが先ほどあまり変化はせず、ヘラジカ  
のような角の色が濃い青に水色のラインの模様が入り、鋭い爪を持  
ち、首から下の毛皮のような服の色が白に青のラインが入った。仮面  
紋が右目にも現れ、眼の色も左右で赤くなった。

リルカ「ならあたしも! 『ラビットドラゴン』!!」

リルカも最強の力を身に纏った。

互いにこれ以上の言葉を言わずに霊圧を高めた。

アパッチ「『鹿王蹴<sup>バタダ・デ・ペナボ</sup>撃』!」

アパッチは足に霊圧と雷を纏わせて跳びながら回転して全力の踵

落としを放った。

リルカ「『悪魔風脚・フレアブレイク』!!」

リルカもまた炎を纏った全力の跳び蹴りを放った。

ドガアアアアアアアン!!!

両者の激突で凄まじい衝撃が起こり、アパッチとリルカはぶっ飛んだ。

アパッチは右足が吹き飛んだが即座に再生したがリルカは左脚が拭き飛んでしまった。

リルカ「うぐつ… ああああ…」

リルカは激痛のあまり声も出なかった。

アパッチは肉体こそ無事ではあるが体力を大幅に削られていて且つ気絶して立っことができないでいた。

凍夜「どうやら、無事そうだな。」

凍夜はリルカに手を出さずに気を失っているアパッチを連れて撤退した。

ミラ・ローズとのえるは剣と剣をぶつけ合っていた。

ミラ・ローズ「はあ!」

のえる「ふっ!」

のえるは戦闘技術こそ一護から免許皆伝と言えるくらいは鍛えられているが戦闘経験とかの部分でまだまだ未熟でしかないので己の力を過信せずに踏み込み過ぎないようにしろよと言われているのでできる限りダメージを受けないようにしながら戦っている。

のえる「第1解放、炎妃罪竜」

のえるは金色の魔剣を解放して炎を纏わせてミラ・ローズに斬りかかる。

ミラ・ローズもまた虚刀に虚閃を纏わせて炎を纏った金色の剣と打ち合う。

ミラ・ローズ「ちっ! スンスンとアパッチのやつ大口叩いてやられんなよ。仕方がない、さっさと終わらせないと不味いな。喰い散らせ『金獅子将』!!」

仲間二人がやられたのを察知したミラ・ローズは刀剣解放した。

解放すると帰刃前よりも巨大な大剣を装備し、ライオンを思わせるビキニアーマーを纏った姿に変わる。頭の仮面が兜のような形状に変わり、眉間に仮面紋が現れ、頭髮もたてがみを思わせるほどに増量する。

のえる「これが…あなた方の解放ですか。」

のえるは魔剣の力で肉体を強化してミラ・ローズの剛剣と打ち合いを始めた。

数分間、打ち合いのえるは少しずつではあるが押され始めた。

理由は今まで剣を使って実戦で戦ったことが無かったためミラ・ローズのような接近戦のノウハウを知っているものとは天と地ほどの差があるため押され始めている。それでも徐々に押されているとはいえむしろその程度で済んでいる時点でバグーが作った魔剣とブートキャンプ効果が異常か理解できるだろう。

のえる「くっ！竜<sup>リリース・オブ・ドラゴン</sup>力解放！『<sup>リリース</sup>童話竜・<sup>トト</sup>赤頭巾』！」

のえるは卍解（のえるの場合名称は違う）して能力を強化した。

ミラ・ローズ「なんだそれ？卍解ってやつか？」

のえる「一護さんのは名称が異なりますが概ねそうですね。」

ミラ・ローズ「そうかい！」

ミラローズは大剣を振るってのえるの剣と打ち合いを再開した。

先ほどまではのえるが押されていたが今度はミラ・ローズのほうが押され始めた。

これは簡単な話、どう足掻いたら現実では百獣の王と呼ばれる獅子でも幻獣最強の竜に勝てる道理はない。

同じ力押しを得意とする者たちがぶつかり合った場合より強い力が勝つのは明白だ。

ミラ・ローズ「ちっ！力でアタシが負けるとはな！」

ミラ・ローズは力で負けていることを理解した瞬間、受け流しなどの技術<sup>わざ</sup>で対処する。

ミラ・ローズ「はあ！」

ミラ・ローズは大剣を振る際に腰のひねりと体重を斬撃に上乘せしめてのえるの剣戟の威力を上回った。その一撃でのえるは剣を弾き飛

ばされそうになったので吹っ飛ばされないように踏ん張ったが致命的な隙が出来てしまった。

ミラ・ローズ「『獅子王斬』！」  
コロテ・デル・レイ・レオン

ミラ・ローズは大剣に虚閃を纏わせて全力で大上段からの振り下ろす大技を放った。

のえる「がふっ！」

ギリギリで後ろに跳んだことが幸いして致命傷にはならなかったので竜の生命力を再現して傷を治療したがそれでも剣での斬り合いの痛みはのえるにとってはあまり馴染みがない（普通はそうだろうけど）ので内心でビビってしまっている。

のえる（ツ…これが剣に斬られる感覚ですか…痛いですね。ですが一護さんはこんな痛みを受けても戦い続けているのですから私が弱音を吐くわけにはいきません。）

のえるは恐怖を抑え、戦意を高め剣を構えて一護から本当の本当に最後の切り札として使えよ？と言われた切り札を切った。

のえる「竜神憑依」  
ドラゴンスピリット

竜の力を最大限発揮する状態だが一護からすると制限時間以内に仕留めなければ反動が異常の欠陥技でしかないと言っているのをごぞという時やもうどうしようもない以外はつかうなど念押しするくらい反動がキツイ。

ミラ・ローズ「ちっ！このまま大人しくやられてくれれば良かったが仕方がない。『超越せよ』」

ミラ・ローズも全力で戦うべく虚刀の力を解放した。

ミラ・ローズ「超越刃『灼熱金獅子将』」  
オーバーブレイド  
レオーナ・カローナブラザード

超越刃を使ったミラ・ローズの姿は髪は解放前の長さに戻って頭部に金の獅子を象った兜を被っておりビキニアーマーだったものが白いスーツに変わりその上に金の鎧を身に纏い手足には金の装飾が追加されている。

手に持つ大剣は柄が追加されており刀身の先が錨のような形状に変化した。

のえる「『妃竜の息吹』！」  
ドラゴンブレス

のえるは自身の魔力を摂氏3,000度の高熱火炎に変えて放出した。

ミラ・ローズ「おらあ!」

ミラ・ローズもまた高熱を帯びた光を剣に纏わせて火炎を切り裂いていく。

火炎を切り裂いて距離を詰めたミラ・ローズはのえると剛剣の打ち合いを始めた。

ミラ・ローズ「おらあああああ!!!」

のえる「はあああああ!!!」

二人の高速の剣の打ち合いで発生した衝撃で大地が陥没しているがお構いなしに打ち合った。

3分ほど打ち合った後互いに内心でその力を認め合っていた。

ミラ・ローズ（やるじゃねえか、あたしとここまで対等な力比べができる奴のなんてロアやハリベル様みたいな規格外を除いていなかったからな。）

ミラ・ローズと力比べができる同格がいなかったため、のえるのこ<sup>ライバル</sup>とを好敵手として認めた。

のえる（初めてですね、一護さんやチャドさんみたいなパワー型の男性ならまだわかるんですけど竜の臂力に獅子の力で対抗してくるなんて…）

のえるもまた自身の力にここまで拮抗する存在は一護達ぐらい（比較対象がオカシイ）しかいなかったので驚いている。ちなみに嫁ーズの中で腕力だけならのえるが一番。

ミラ・ローズ「へっ!あんまり時間かけるわけにはいかないからこれで終わらせるぜ。」

ミラ・ローズはそう言つて霊圧を高めた。

のえるも言葉を発さずに魔力を高める。

ミラ・ローズ「<sup>コロテ・デル・レイ・レオン・ヒーベ</sup>超獅子王斬!」

ミラ・ローズは大剣に虚閃<sup>セロ</sup>を高熱の光と混ぜたものを纏わせて全力で大上段からの振り下ろし飛ばす大技を放った。

のえる「<sup>カルサリテイオ・サラマンドラ</sup>天壤焼却焦熱竜神之焰!!」





互いに解放するかという状況で第三者が声をかけてくる。

レン「グリムジョー戻りますよ。」

レンがグリムジョーに声を掛けてくる。

グリムジョー「あゝあ？何言ってるんだ!!まだやれるってんだ！」

グリムジョーは邪魔してきたレンに文句を言うが

レン「こちらに被害が出ていますから戻らないとロア様になにを言われても知りませんよ？」

レンはロアの名を出した。

グリムジョー「ちっ！仕方がねえ・・・」

さすがのグリムジョーもロアを怒らせるのは不味いと思いきや、刀を納めた。

一護も二刀を納めた。

一護「次はちゃんと決着をつけようか。」

グリムジョーはその言葉を聞いて、獰猛な笑みを浮かべ

グリムジョー「いいぜ！てめえは俺が倒す！」

グリムジョーは一護に宣戦布告した。

その後、アランカル破面達は黒腔ガルガンタを開いて虚圏ウエコムンドに帰っていった。

とりあえず一護は即座に浦原商店に移動して怪我人達の治療を開始した。

51話：「君らはなんでそんなに怒っているの？」

side アランカル  
破面

グリムジョー達は虚圏ウエコムンドに戻って虚夜宮ラスノイチエスに帰還した。

全員がそれぞれの場所に戻った。

レン「失礼します。ロア様。」

ロア「入っていいよ」

レンはロアの合図で凍夜とトリスを連れてロアの自室に入った。

ロアはベットでぐでぐとしてしている。

ロア「どうだった？」

ロアがレンに質問してきたのでレンが答えた。

レン「私は特に問題ありませんが凍夜とトリスが命令を無視して死にかけてしまいました」

凍夜・トリス「「っ…」」

レンは二人の失態を誇張などは抜きにして事実のみを言った。

ロア「ああ、別にいいよ、死んでないから特に説教とかしないから心配しないであと今の立場を変えるとかしないから3人以外で雑用できる子たち居なかったから。」

ロアからすると替えのきかない3人なので即刻解雇などはしない。

レン「なんと寛大なお言葉、ありがとうございます。」

ロア「それはいいから、早くお茶入れて〜ハリベルちゃん達も呼んでお茶会しようか！」

レン達は深々と頭を下げるがロアからするとそれはいいからお茶を入れてと言った。

ハリベルたちが来たのでお茶と茶菓子を食べながら女子会が開催された。

ロア「それでさありりネットちゃんはスタークとどこまで行ったの？」

りりネット「はあ!?何言ってるんだよ!!スタークとはそんな関係じゃねえよ!!」

ロア「え、でもどっちが元とはいえそうでなきやいつも一緒に居

ないでしょ。」

ロアはリリネットの今までの境遇を教えてもらっているので二人の関係性を把握している。

ハリベル「ロア、あまりそう言ってるな。リリネットも困っているだろう。」

ハリベルはロアの暴走を戒める発言をした。

ロア「ところでスタークって普段何やってるんだろう？リリネットちゃんといつもいるときは一緒に寝てる場所しか見てないし…」

リリネット「ちよつと待て！なんでそのこと知ってたんだ！」

リリネットはロアが自分たちが一緒にいるときのことを知っているのか聞いてみると

ロア「あのギンって雄やっがみんなの普段を録画したものをを見せてくれたよ。」

ハリベル「すまん、ロアちよつと急用ができた。」

ハリベルは自分のプライベートを覗かれていた事実を知ってギンたちを始末しようと斬魄刀と虚刀を持って部屋を出ようとする。

ロア「ああ、大丈夫だよ。ボコボコにしてデータとかは私が回収しといたから。」

ハリベル「…そうか」

ロア「これを一護に見せてハリベルちゃん達の事よく知ってもらおうからね!!（ドヤア）」

ロアはそのバカでかい胸を張ってどや顔でそう言った。

ハリベル「…ロア、流石にそんな真似は許さないぞ。」

流石のハリベルも自分のプライベートを流出する真似は許さないと霊圧と殺気を放ちながら虚刀をゆっくり抜いている。

ロア「え〜ハリベルちゃんってなんで一護の事嫌うのよ。会ってもいないのに毛嫌いするのは悪いことだよ。」

ハリベル「私の意見をガン無視しているからだ！」

ロアはハリベルにそう言うがハリベルはロアの発言に文句を言った。

ロカ「あ…あの〜ロア様、一ついいですか。」

ロア「ん？どうしたのロカちゃん。」  
今まで黙っていたロカはロアに言った。

ロカ「その、一護って方は本当に大丈夫なのでしょいか。私とハリベル様は姿しか知りませんので。」

ロカは自分を救ってくれた今の主が怪しい男に騙されていないか心配の言葉を言う。

ロア「大丈夫だよ、一護は誰かを不幸にするようなことはしないから。」

ロアはそう断言した、流石にそう言われたらロカもそれ以上は言わなかった。

ロア「さて、お茶会の続きしよいか！後現世の情報を収集して現世の服とか作ったからみんなで着ようよ！」

ロアは強制的に話題を変えた。

ハリベル「はあ……相変わらず変わらないなお前は。」

ハリベルはそれ以上言わずに椅子に座って茶を啜った。

ロカ「ところでロア様、現世の服とは？」

疑問に思ったロカはロアに聞いた。自分達には今着ている死覇装があるので特に問題はないはずなのだがそれに対してロアはこう言った。

ロア「ロカちゃん！私達は雌メスなんだから見た目には気を遣わないといけないんだよ！」

ロアはロカの洒落っ気のなさに今度こんなになるまでにしたザエルアポロをボコボコにしようかと思った。

レスト「ロア様」シルス「来ましたよ！」

ようやく一護に舐めプされた心の傷が癒えた二人がロアの部屋に来了。

ロア「良かった〜二人とも一護と戦って以来元気なかつたよね〜」  
レスト・シルス「っ！！」

二人は一護の名前を聞いて頬を赤らめた。

ロア「う〜ん？もしかして二人とも一護のこと好きになつたんだね！！」

ロアは能力を使って二人の心を読むと一護の私以上の圧倒的な力を感じた上に怪我無く意識のみを刈り取られたことで昔から暑苦しい雄オスばかりに襲われてしかいなかったから一護のことが好きになっただんだね!!

シルス・レスト「ち、違いますから!!」

ロア「そんな恥ずかしながらにさく私の力を知っているんだからそんな嫌々してても一護のこと好きって気持ちは隠せないよ!」

ロアは二人の弁論など許さないと言わんばかりに自身の力を証拠に上げるとさすがの二人も観念した。

ロア（良かった、これで後はハリベルちゃんだけでもいいから一護の番にしないとね!）

欲を言えばスンスンちゃん達も番にしたいけど無理そうだしいいや。

アパッチ・ミラ・ローズ・スンスン『失礼します。』

ハリベルの従属官フラシオンの3人娘達も入って来た。

ロア「よくし揃ったところでファツションショー開始だよ!!」  
トレスベステイア

3 獣神『いきなりどうしたんですか?』

入って早々いきなりそんなことを言われた3人は突っ込んだ。

ロア「いや、だって3人だって美人なんだから服くらい色々着た方がいいじゃん!」

ロアはそう言って色々な服を取り出した。

ちなみ男性たちは退出済みだ。

アパッチ「まあ、服位なら別にいいか。」

ミラ・ローズ「それもそうだな。」

スンスン「変に番とか言われないマシですね。」

3人は納得してロアの出した衣類を手を取った。

因みにロアが出した衣服は普通の服の他にメイド服、巫女服、チャイナ服、ナース服、学生服（セーラー、ブレザー）、ミニスカ女性警官服、水着（スク水タイプからe t c . : .）、アニメキャラの服と言ったコスプレでよくあるものばかりなのはロアが望んだ情報を得られる能力で現世の情報を収集したのはいいが男が好きそうな恰好で調べ

た結果オタク趣味の情報ばかりヒットしてしまっただのが原因だ。

スンスン「私はこれにしますわ。」

スンスンは腕や脚や背中が露出したチャイナドレスを着た。

アパッチ「じゃああたしはこれするぜ。」

アパッチはジャージを着た。

ミラ・ローズ「それじゃあたしはこれだな。」

ミラ・ローズは女性用スポーツウェアを着用した。

ハリベル「では私はこれにしよう。」

ハリベルはやたら露出の多い水着を選んだ。

ロカ「で、では私はこれで・・・」

ロカは緑のセーターをベースにしたシンプルではあるが清楚な格好になった。

シルス「じゃあ私はこれね。」

シルスはGGOのシノンの服を着た。

レスト「じゃああたしはこれ!!」

レストは巫女服を着た。

リリネット「そんじゃアタシはこれだな!」

リリネットは初等部の学生服を着た。

ロア「じゃあ私はこれかな」

ロアはホットパンツにチューブトップを着た。

ロア「いや〜みんなに似合っているね・・・シルスちゃんのはなんか異常にしっくりするんだよね」

ロアはみんなを見てそう評価した。

とりあえず、みんなが色々服をとつかえひつかえしながら時間が経過した。

side 藍染

藍染「・・・ふむ『異空戦場』とは中々に面白いものを作るじゃないか。」

藍染は戦死した破面の虚刀を回収して虚刀に蓄積されたデータから異空戦場の事を知ると興味深そうな顔をする。

ギン「それにしても敵はんもだいぶ強なってますな」

ギンは破面を瞬殺した乱菊を見て安心そうな顔でそう言った。

東仙「敵もだいぶ強くなっているようですしこちらも何か手を打ちましようか？」

東仙は敵の戦力を分析して何か策を打とうと藍染に進言する。

藍染「そうだね…。そういえば黒崎一護には二人の妹がいたはずだね。」

藍染はいいことを思いついたので二人に言った。

sideグリムジョー・ヤミー

ヤミー「うおりやあああああ!!!」

グリムジョー「当たるか!!」

ヤミーの剛腕が迫ってくるがグリムジョーは避けると拳が地を砕いた。

この二人は片やチャドを片や一護を打倒するために互いをサンドバックに修行している。

グリムジョー「おらあ!!」

グリムジョーは虚刀でヤミーに斬りかかるがヤミーは鋼皮イェロで強化された拳に霊圧を込めると虚刀と打ち合いを開始した。

グリムジョーとヤミーは思う存分に戦いをしていたが流石に解放まで行って互いがズタボロになって超越刃オバーブレイドまで解放しかけたのだが被害が虚夜宮ラスノーチエスにまで出始めてロアが二人をシバいてロカに治療させた。

side現世

一護達は破面ブランクの襲撃を何とか撃退したが怪我人が多数出たので浦原商店で治療している最中だ。

一護「こっぴどくやられたな、リルカ」

リルカ「うっさいわよ、一護。次は勝つわ。」

破面との戦いで吹き飛んだ足は織姫の力で治っているが消耗した体力や霊圧は回復できないので安静状態だ。

一護「俺からすると初めての破面との戦いで五体満足で生き残ったのえるは凄いな。」

一護はのえるを見てそう評価した。

のえる「ありがとうございます。」(わくい！一護さんに褒められましたあゝ!!)

のえるは一護にそう返すが内心ではハイテンションだ。

一護「君らはなんでそんなに怒っているの？」

一護は眼の光が消えている茜雫、雛森、織姫、雨うるさにそう言った。

茜雫「だってその破アランカル面の女が一護の事臆病者って言ったんだもん!!」

一護「別にいいだろ、俺はその時グリムジョーと戦っていたんだから。」

一護は別に多少馬鹿にされようがどうでもいいと言うので流石の嫁ーズも渋々黙った。

MI「恋次様、リベンジおめでとうございます。」

恋次「え・・・つとどちら様で？」

MIは因縁の相手にリベンジを成功させたことを言ったら見知らぬ女性に祝福されて困惑している。

MI「そういえば本体でお会いするのは初めてでしたね。私はMIですよ、恋次様。」

恋次「えっ?!師匠ですか?!?ご無沙汰しています!!おかげであいつと戦って撤退まで追い込めました。」

恋次は目の前の女性が自分を鍛えてくれた師匠のMIだと分かり頭を下げる。

MI「だから師匠ではないのですが・・・まあもういいでしょう。」

MIも師匠呼びに対してもう何も言うまいといった態度になった。

MI「それにしても一角様はこっぴどくやられましたね。」

MIはズタボロで体中包帯でミイラ状態の一角に言う。

一角「くそっ!そう言われても仕方がねえくらいの有様だから文句は言えねえ。」

一角はエドワードにボロボロにされたので寝ながら愚痴を言った。

海燕「ぐえっ!キツちいなあ」

海燕もまたトリスから受けた傷を治療を終えてベットで横になって安静している。



都「大丈夫、海燕？」

都は心配して海燕に言う。

海燕「問題ねえな、あの野郎次会った時は必ず倒す。」

海燕はトリスとの再戦に戦意を漲らせた。

日番谷「…以上です。」

日番谷と乱菊は破面の襲撃を総隊長に連絡を入れていた。

山本「そうか、では引き続き警戒しておけ。」

乱菊「了解です。」

一護「ではとりあえず、今日は一旦帰って休息しよう。」

一護は全員にそう言ってお開きになった。

海燕達も傷自体は回復しきっているので家に戻って休むことになった。

## 52話：「勝負ありだ」

side 現世

破<sup>アランカル</sup>面襲撃から何日か経過したが特に何か起こった訳でもなく死神組が現世を満喫しているだけだった。

海燕「はあくやっぱうちの従妹達は可愛いなあ〜」

都「そうですね〜早く私達も親になりたいですね〜」

海<sup>海</sup>燕<sup>燕</sup>とその妻は妹たちに構っており二人も海燕と都に甘えていた。

夏梨「海燕さんって都さんとうやうって知り合って結婚したの？」

夏梨は海燕に都さんとの出会いを聞いた。

海燕「う〜ん？実は昔、志波家が大変だった時に俺達は頑張って立て直したりしてそんな時から知り合って都がグイグイ来て結婚したって感じかな〜」

海燕は重要な所は省きながらもしつかりと要点だけは夏梨たちに伝えた。

遊子「そうなんだあ!!」

遊子はキラキラした目で都を見た。

都「は、恥ずかしいですねえ」

一護「安心してくれ都さんよ、俺なんか酒に酔っ払った状態の二人に惚気た結婚話を聞かされたから。」

俺は恥ずかしがってる都さんに親父達から結婚秘話についての状況を言った。

都「あらあら」

俺達は他愛ない会話をしながらも時間を見つけては浦原商店で修行をして実力を高めていく。

side 破面<sup>アランカル</sup>

藍染「…というわけでウルキオラ、君に任せるよ。」

ウルキオラ「了解しました、藍染様。」

ロア「へえ〜そうなんだ。でも酷いことはしないでよね?」

ウルキオラは藍染から指令を受けロアはそれを聞いて楽しそうにし、藍染の後ろにいるロリ達に殺気をぶつける。

ロリ達はロアの殺気に体を震わせる。

藍染「そう、彼女たちを怖がらせないで上げてくれ。」

藍染はロアに殺気を抑え込むように言う。

ロア「はいはい、分かったわ。で？誰が行くの？」

ロアは仕方ないわねと言うような態度で殺気を抑え込んだ。

藍染「この作戦上、必ず彼が邪魔してくるのは明白だからね。君と何人か連れて行くといい。」

ロア「気前が良いじゃない、分かったわ。じゃあそうね、ハリベルちゃんとロカちゃんとグリムジョーと…」

ロアはとりあえず、今行けるメンツで最大限問題ないメンバーを選出した。

作戦決行は1週間後となった。

side 現世

現世では一護達はもうじき冬休みに入るので終業式までもうじきなのだが尸魂界から貴族のお嬢様が来たが謎の刺客たちに襲撃され戦闘中だった。

一護「なにお前ら？いきなりなんだし。」

一護は謎の斬魄刀や虚刀以外の刀を使ってきた男を滅却師クインシーの力や完現術フルブリンクで対処した。

???「ば、馬鹿な、何故… 猥叉刀ぼつこうとうの力が通用しない!？」

刺客が刀の名称を洩らした。

一護「猥叉刀？確かそれって…」

一護はその名に聞き覚えがあるのでとりあえず、襲撃してきた連中の精神に干渉して記憶を読み取ったのち今回の主犯連中の情報を手に入れておいて尸魂界に送りに行った。

一護「… という訳だ。貴族のじゃじゃ馬娘の相手をしてたら襲われたんだけど奇妙な刀を使ってくるから注意してくれよな、爺さん。」  
山本「全く、この緊急事態の時に仕事を増やさないでにおいてほしいものだな。してその刀は？」

一護「安心しろ、マユリのやつに渡しておいた。」

一護は襲撃者を預けた後技術開発局に行つてマユリに猥叉刀を渡

しておいた。

一護はラボの奥からなんか悲鳴が聞こえてきたけど何も聞かなかったことにしておく。

山本「なるほどのう、じゃがおぬしは少しゆっくりしておれ、最近三番隊に新しい隊長が加わったのでな。時期にこの事件も解決するであろう。」

一護「・・・ そうだといいいけどな。」

一護はもう既に主犯の存在を知っているがそれを言っても簡単に信用されるどころか厄介な問題を起すだけなので言葉を濁した。

瑠璃千代は現世で夜一から貰った情報で実家に戻っていたがいきなり背後から何者かが瑠璃千代目と口を押えて連れ去ってしまった。

一護「・・・ うん？ どうやらちよつと面倒なことになったようだな。」

山本「どうした？」

一護は念のために瑠璃千代に仕掛けておいた追跡用の術式に反応が変わったことを察知してそれを山本重國に伝えた。

山本「承知した、では二番隊隊長にこのことを伝えておこう。」

一護「いざという時は俺も出られるようにしておくからな。」

一護は死神化して二本の斬魄刀と死覇装を出現させた。

とりあえず、瑠璃千代を攫った下手人は二番隊に即座に捕らえられたようでは瑠璃千代は一護が借りている部屋で護衛している。

一護「お前、戻って早々誘拐されかけるって俺が追跡用の術式を仕込んでなかったら終わってたぞ。」

瑠璃千代「うるさいわ！ わらわもこんなことになるとは思わなかったのじゃ！」

一護「何事も最悪は予測しておくものだぞ。特に貴族や上に立つものとして危機管理能力は必須技能だぞ。」

一護は文句を言う瑠璃千代に貴族に必要な技能の1つを教えた。

一護「いいか、上に立つ者は常に自分の立場を理解してその特権や不利益になることを理解してそれに対し対応出来なきやいけないぞ。」

瑠璃千代「うう〜じゃがな〜」

???「失礼してもよろしいですか。」

突如入り口が数回ノックされまだ幼い少年の声が聞こえてきた。

一護「ん？誰だ？」

瑠璃千代「ん？この声は…愁しゆうか？」

一護「誰だ？」

瑠璃千代「わらわの許嫁じゃ」

一護「そうか、じゃあ入れるか」

一護は瑠璃千代の言葉を聞いて警戒しつつも客人を部屋に入れた。

愁「瑠璃ちゃん！大丈夫だった！」

瑠璃千代「おお！やはり愁か！わらわは無事ぞ！一護のおかげで事なきを得たわ！」

愁「あ、あなたが…ありがとうございます。瑠璃ちゃんを助けてくださって」

一護「いいって、このくそ忙しい時期に面倒ごと起こしてくれた連中に1発殴らないと気が済まないんでね。」

俺達はそれから2日間の間1番隊舎で蹴鞠などして時間を潰していた。

十三隊はその間に吉良イヅルが貴船理を倒して猿爻刀を回収、俺が渡した分も合わせて証拠が集まり今回の事件を起こした霞大路家にガサ入れが開始され雲井堯覚を捕縛するらしい。

一護「さて、とりあえずこの馬鹿騒動が終わったらお前らは家の立て直しになるけど頑張れよな。」

瑠璃千代「うむ！」愁「はい!!」

一護は二人に激励を送ったその直後

ドゴン!!

一護「…なんだ？」瑠璃千代「なんじゃ!!」愁「なんですか!!」犬龍「瑠璃千代様！大丈夫ですか!!」

いきなり起こった爆発に一護は咄嗟に結界を張って衝撃などをシャットアウトした。

そして瑠璃千代の護衛の犬龍、猿龍が急いで部屋に入って来た。

一護「安心しろ、結界を張っておいたから被害はねえよ。」  
犬龍「そ、そうか感謝する。」

一護「とりあえず、俺は爆発の原因を何とかしてくる。」

一護は装備を確認して爆発の発生地帯に急行した。

一護は入って総隊長の隊長部屋に入ると部屋がズタボロになっていた。

部屋の中央には総隊長と鍛え上げられた中年の男が立っていた。

一護「おい……爺さん、そいつが今回の事件の主犯か？」

山本「……そういうことになるのかのう」

一護「いや、なんでそんなに自信なさげなんだ？」

???「貴様が黒崎一護か。俺の計画をことごとく邪魔をしておって」

一護は総隊長に男のことを聞くと何故か総隊長は自信なさげに言う  
と男が一護に怒気の籠ったセリフを言った。

一護「邪魔も何もそっちが襲ってきたから迎撃しただけだが？」

一護からしたらそっちが襲ってきたのに邪魔も何もあつた物じゃない。  
一護「ところで爺さん、なんでさつきと制圧しないんだ？あんな

らすぐに反撃できるだろ？」  
???「しないんじゃないんで出来ないんだ、黒崎。俺の獏刃刀は死神の

霊圧、力を打ち消すんだ。」  
一護は総隊長の無反撃状態に知ってはいたが聞いておかないと不

自然になるので聞いておくと敵はペラペラとしゃべってくれた。  
一護「なるほどな、じゃあ俺なら特に問題ないな。」

『ソード・オブ・ペンタグラム  
『五芒星の外套剣』』  
一護は五角形の滅却十字に完現術を行使して五角形の滅却十字か

ら完現光が発生し一護の体に纏わりつき白いシャツに黒のズボンに  
黒のブーツそして白いファーが首についた黒コートがその身に出現  
して五角形の滅却十字が小剣に変化した。

ギョク（久々に完現術主体の出番きたアアアアアああ!!!）

中のギョクも久々の完現術主体の戦闘でテンションMAXのよう  
だ。

??? 「なんだ？それは？」

男は一護の力を知らないので完現術フルブリングを死神の力と勘違いしているようだ。

一護は瞬歩を除く歩法を組み合わせて加速して斬りかかる。

??? 「くっ！」

男は貝殻のような盾はついた大剣を振るって防いだが純粋な膂力だけで押し込まれた。

一護は小剣から長剣に変化して青白い斬撃を飛ばしぶっ飛ばした。

一護「おい、あんたはなんでこんなことをしてかしたんだ？」

一護は男にこの事件を起こした理由を聞いた。

??? 「くっ… 黒崎… 何故、貴様はそんなことを聞いてくる。」

男は一護が自分にそんなことを聞いてくるか返してくる。

一護「俺からするとあんたがそんなに悪い奴だと思えなくてね、なら相応の理由があると思ってね。」

一護は剣を打ち込んだ感触から男の性格を理解していた、確かに復讐心はあるのだろうがそれだけではないというのもわかつている。

??? 「… お前にはわからないだろうな、身内を理不尽に奪われた気持ちなど」

男は一護に総隊長に自分の父を殺されたことを伝えると一護は男にあることを言う。

一護「… なあ、今の話を聞いていると親父さんはなんで爺さん殺されたんだ？別に法律に違反したとかそんなことしてないんだろ？」

??? 「何を言っている！山本重國にとって不都合だから斬られた!!それ以外にないだろう!!」

一護は疑問に思ったことを言うと男は激昂した。

一護「だどよ爺さん、その男ってなんか直近で任務についていたりしていないかったのか？」

一護は山本総隊長に疑問を伝えるとこう答えた。

山本「… 如月秦成はな獏叉刀の秘密を探るために霞大路家に潜入していたのじゃ。」

山本は一護の疑問を答えたことで一護は男に自分の推理を言った。

一護「…これは俺の推測だから全部を真に受けなくていいが聞いてくれないか？」

???「…いいだろう、言ってみろ。」

一護は男の父が潜入中に雲井堯覚に捕まって猯爻刀の実験体にされて総隊長はやむを得ず殺さざるを得なかったのだらうという推理を男に伝えた。

???「…っ!?だがそんなことをいきなり信じれるわけないだろう!!」

男はその信憑性の高い推理に動揺するが直ぐに振り払って武器を構える。

一護「だろうな、なら力尽くで止められてもらうぜ。そういや、まだ名前を聞いていなかったなあんと名前は何だ。」

???↓天貝繡助「俺は天貝繡助だ黒崎！」

一護は名前を聞いた後長剣を構えて融合歩法で加速して長剣を連続で振るう。

男は左の解の盾で防ぎながら炎を噴射してきたが一護は聖文字シユリフトで生成して冷気で相殺する。

一護「赫灼かくしゃく・灼熱プレイジング・エンド両断」!

一護は刀身の刃先に灼熱The Heatで生成した炎を圧縮してそれを斬撃として飛ばした。

天貝「ぐううう!!」

天貝は斬撃を受け止めたがあまりの威力に吹っ飛んだ。

一護（さつさとあの猯爻刀を破壊しないとな。）

一護は即座に距離を詰めて霊圧を込めた斬撃で右の龍の形状の鎧を攻撃しまくる。

天貝「ぐううう!!させるか!『業炎龍牙』!!」

天貝は自爆覚悟で地面から無数の熱線を放ってきたが一護はもう既に全知全能the Almightyで結末まで知っているのだから。

一護は熱線を見殺して猯爻刀に剣を力任せに叩きつけて破壊した。

天貝「ぐああああああ!!!」

叩き割った衝撃で腕を壊してしまっただがそれでも一護は油断せず



に剣を首元に突き付けた。

一護「勝負ありだ。」

天貝「……ここまでか。」

流石の天貝も勝機がないと悟った。

そして残りの隊長たちも来ると夜一が一護の推理とほぼ同じ言う  
と狼狽してそしてケジメをつけるために自害しようとしたので一護  
は止めようとしたが京楽が一護に待ったをかけて天貝はそのまま一  
護が知るように炎で自害した。

結局のこの事件の影響で一護の名は瀨霊廷にさらに広がることにな  
ったが当の本人はあまりいい思いはしていなかった。

一護（なんか、すっげえ後味が悪いな。）

内心で苦虫を噛んだような感情が残っているのだった。

53話：「一方的に来て勝手に帰っていったし…。」

side アランカル  
破面

作戦が決まって1週間が経過したので破面sideは現世に移動していた。

ロア「さあ！行くよみんな!!」

ロアの号令でロカ、レスト、シルス、スターク、リリネット、ハリベル、グリムジョー、新しくグリムジョーの従属官フランシオンになったルピ、ヤミーを連れて現世に到着した。

ロア「とりあえず、ウルキオラが保護し終わるまで時間稼ぎをしようか。」

スターク「全く、俺まで駆り出さなくてくれよなくまああんたの頼みなら仕方がないけどよ。」

スタークは気だるげに言うが恩人の頼みなので断るわけにもいかず時間稼ぎなら特に文句はなさそうだ。

ロア「まあ十中八九一護と戦うから本気で戦わないと死ぬよ?」

スタークの発現にロアは釘を刺した。

そうこう言っているうちに全員は現世に到着した。

side 現世

一護達は破面の霊圧を捉えた。

一護「またかよ！それにこの数の霊圧この前の二人に匹敵する奴らのほうが多くないか?」

チャド「この前の霊圧も感じ取れるな、そいつとは俺が相手をする。」

一護は十一刃エスパーダの霊圧を感知して何故か疑問を浮かべた。

チャドはヤミーの霊圧を感知して自分が相手をすると言った。

尸魂界sideも破面の霊圧を感知して戦闘態勢に入った。

海燕「一護！いけるか!!」

一護「問題ない、さっさと追い返すぞ!」

全員は即座に移動しようとして一護は雨竜に俺の家で待機してくれと言ってきた。

雨竜「何故だい？」

一護「なんか嫌な予感がするから妹たちの護衛にしといてくれないか？」

一護の第六感が警鐘を鳴らしていたので雨竜に残ってくれと言った。

雨竜「分かった、杞憂であればいいといいけどね。」

雨竜は俺の家に急行して俺達は破面のいる場所に移動した。

町はずれの森林に現れた破面<sup>アランカル</sup>達だがグリムジョーだがすぐに独断専行で一護の元に移動した。

ロア「あくもうまくまたくグリムジョーは相変わらずだなく。…つてうくん？」

ロアは不意に後ろから気配を感じたので振り向くと黒腔<sup>ガルガンタ</sup>を開いてワンダーワイスが出てきた。

ワ「あくぐうくあくく」

ロア「相変わらず何言っているかわからないねくワイちゃん。」

ロアはワンダーワイスを撫でながらそう言う。

ヤミー「なあ！俺もあいつをぶちのめしに行つていいか!!」

ロア「それはいいけど多分、もうすぐ来るから少し待つていれればいいと思うよ」

ロアがそう言うのと一護を除く死神と人間の混成チームが到着した。

ヤミー「へっ！ようやく来てめえをぶちのめせるじゃねえか!!」

ヤミーは拳を構えてチャドに殴り掛かる。

チャドも腕を変化させて戦闘を開始した。

とりあえず、混成チームは異空戦場を起動した。

ロア「おおくこれが話に聞いていたやつだね。」

ロアはどこか嬉しそうにしている。

ハリベル「ロア、何故そんなに嬉しそうにしているんだ？」

ハリベルは友人の反応に呆れている。

ロア達ははしゃいでいると火球やら弾丸の一斉掃射やらなんやらの攻撃が飛んできたのでロカが対処した。

ロカ「流動操糸<sup>ヒーロツリ</sup>」

ロカは自身の反膜ネガシオンの糸に霊圧を込めて強度を底上げして操作して攻撃を全て逸らした。

ロア「あれ〜？一護と一緒にいた雌たちだよ？数増やしたの？」

ロアは攻撃してきたメンツを見て一護の番達だと認識したが前よりも数が多いので嫁ーズに聞いた。

雨「今日こそ、あなたを倒します!!」

雨は嫁ーズの中でも過激派連中代表としてロアの言葉を見無視して宣戦布告した。

ロア「え〜別にみんなも一護の番なんですよ？なら別に争う必要はないよね？」

ロアからすると一護の番なら別に戦う必要がないので少しでも仲良くなろうと話をする。

雛森「やかましいですよ、ただでさえ一護さんは魅力的なのにどんどん増えるのにこれ以上増えてたまるものですか。」

ロア「それはあなたが雌としての魅力がないだけなんじゃないの？」

ロアは雛森を頭のとっぺんから足のつま先まで見てそう言った。  
ブチッ!

それを聞いて一部の嫁ーズの地雷を踏み抜いた。

茜雫「…そうねえ、あんたみたいに恵まれたプロポーション持つてる女にはこの苦しみは理解できないでしょうねえ？」

雛森「敵です、あなたは敵です。敵は排除しないとですよ。」

茜雫と雛森は眼の光を消してロアに殺意をぶつける。

この二人は風呂とかに入ると嫌でもその戦力差を見せつけられるのでロアのこの発言で今まで溜まっていた鬱憤が爆発した。

ロア「これは戦うしかないかな〜」

ロアも諦めて虚刀を抜いた。

ロカもシルスもレストにハリベルも虚刀を構える。

スターク「蹴散らせ」ロス・ロボス『群狼』

スタークはリリネットを取り込んで帰刃レスレクシオンして左目に眼帯をはめ、

首の周りや腕、足に毛皮を巻いたような姿となつて腰に二本の虚刀が

差されている。

スターク「行くぜ？リリネット」

スタークは銃になったリリネットに話しかけるが

リリネット『………』

リリネットはスタークを無視したのでスタークに銃の撃鉄部分をグリグリされた。

リリネット『痛い！痛い！そこお尻!!』

スターク「うるさいぞ！お前が協力しないからじゃねえか！」

スターク達は漫才しているが日番谷と海燕は既に斬魄刀を開放しているのだが油断が出来ないほどスタークの霊圧に蹴落とされている。

スターク「全く… わりいな、隊長さんたち。俺はあんたらに恨みとか特にないがロアさんがまだこっちに居る以上相手させてもらうぜ。」

スタークはそう言つて銃を構えると

スターク『無限装弾虚弾』

スタークは虚弾を秒間100000発撃ち込む技を放ってきた。

日番谷「なっ！」海燕「嘘だろ!!」

二人は弾速の速さとその弾数に驚愕しつつも何とか回避しながら防いだりしているがそれでも虚閃より威力は劣るとはいえ速度はその20倍はある虚弾を瞬間100000発放ってくる以上1発でも受けたらそこから連鎖的に喰らい続けて終わるので必死に避けている。

海燕「くそっ！」

海燕は手首の回転を加えて波濤に叩きつけて津波をスタークに放ったが

スターク「バリア・ネガシオン  
反膜の障壁」

スタークは反膜を攻撃がくる方向にのみ展開して海燕の攻撃を打ち消した。

海燕「なに!？」

海燕は明らかに破面の帰刃の能力と言うよりは自分たち死神が使

う鬼道のような技に驚愕した。

スターク「なんだ？自分達と似たようなことを虚である俺達が使うことがそんなに変か？」

スタークは気だるげにそう言ってきた。

日番谷「これならどうだ！『郡鳥氷柱』!!」

日番谷はスタークの背後に移動して巨大な氷柱を無数に放つてくるがスタークは響転ソニードで移動して虚弾バラを連射してくる。

二人は明らかに手を抜いていることを理解しているので何が何でも全力を出させるべく全力を出す。

海燕「卍解！『天逆鉾』!」

日番谷「魂は更なる高みへ『心装 大紅蓮氷輪丸・揺籃開花』!」

海燕は卍解、日番谷は心装を解放してスタークと相対する。

スターク「?そっちの水を使う隊長さんのは卍解なのは分かるがそっちの氷の隊長さんのは何だ？」

スタークは卍解のことは聞いていたが心装のことは初見なので知らなかった。

日番谷「簡単なことだ、俺達だって進化しているんだ。」

スターク「そうかい、まあ手の内を簡単には話しちゃあくれないか。」

スタークはげんなりしながらも銃を構えて虚弾バラを正確に連射してくる。

ヤミー「おらあ!」

ヤミーは四肢を霊圧で強化して殴り掛かる。

チャド「ふっ!」

チャドも全身を鎧に変化して殴り合いを開始した。

数十発の打撃の応酬をして取っ組み合いになった瞬間

ヤミー「喰らいやがれ!!」

ヤミーは口から虚閃セロを放った。

チャド「ぐああ!!」

チャドも至近距離での虚閃セロが直撃した。

ヤミー「おらあ!『虚術：豪炎波』!!」

ヤミーは霊圧を豪炎の波に変えてチャドを迫撃する。  
チャドも黙ってそれを受けるつもりもなく暴風ストーム・ハンドリクンの手甲を装備して炎を風の防壁で打ち消した。

チャド「…なんだ？今のは…」

チャドは今の攻撃が死神の使う鬼道に近いものであると感じ取った。

ヤミー「面白れえだろ！、今のは虚術アビューツって言ってな、色々できんだよ!!」

ヤミーは自分の能力をペラペラ話した。

喜助「それはそれは面白いっすね。チャドさん、加勢しますよ。」

喜助も今回は加勢するために準備を終わらせて来た。

チャド「すみません、喜助さん」

チャドも今の炎の術を連発で喰らうと無視できないダメージなのでこの加勢はありがたいと認識している。

ヤミー「けっ！雑魚は群れないと戦えないのは仕方がねえからよ、俺様は優しいから別にいいぜ。」

ヤミーは傲慢な発言をしながら霊圧を高めた。

チャド「喜助さん、あいつの技はヤバい。」

喜助「でしょうね、なので最初から飛ばしていきます。『魂は更なる高みへ』」

喜助も手段こそ大量に持ってきたが敵の正体不明の術に心装を解放した。

喜助「『心装 絡繰紅姫』」  
からくりべにひめ

心装を解放した喜助の背後に円盤に5本の機械仕掛けの刃の爪がついた指が展開され手には始解の紅姫が握られている。

ヤミー「なんだ、正解アビューツってやつか？まあいいや、じゃっ！さっさと死ねや！『虚術アビューツ：火星』!!」

ヤミーは上空から巨大な火球を落とす術を使ってきた。

喜助とチャドはそれを見て目配せで合図を送りあった。

喜助は赤い斬撃を放って空間に亀裂を作ってそこからヤミーの背後に移動した。

チャドも上空の火球を『神砂嵐』で相殺した。

ヤミー「なに!? ツ! 後ろか!!」

ヤミーは即座に背後に移動した喜助に裏拳を放った。

喜助「っ!」

喜助は自身の血管に霊圧を取り込んで強化できるように改造して皮膚を硬化させた。

ヤミーの裏拳で吹っ飛ばされたが大したダメージは受けていなかった。

常日頃から一護の鉄拳を受け続けてきたのでダメージの殺し方は熟知している。

喜助「これは少しメンドイっすね。」

喜助は持久戦になるのは明白なので霊具を取り出してチャドと連携を取ってヤミーとの戦闘を続行した。

ルピ「縊れ『鳶嬢』」

ルピは解放して背中から8本の触手が生やして残ったメンツの相手をやる。

触手の変幻自在な動きをしながらルピ本体は虚閃や虚弾を連射してくる。

恋次「くそっ!!」

恋次達は触手だけなら問題ないがそこに虚閃や虚弾も加わるので距離を詰めにくい。

なんとか距離を詰めるべく鬼道も放っているが攻撃の威力自体は向こうが上なので中々距離を詰められない。

ルピ「『虚術：毒付与』」

ルピは対象に猛毒を付与する虚術を使って更に追い詰めにかかる。

恋次「くっ! 卍解!」一角「卍解!!」都「卍解!」

卍解を使える者達は卍解して戦況の打開を図る。

恋次「『狒狒王蛇尾丸』」一角「『龍紋鬼灯丸』!!」都「『嵌合暗翳庭』」

乱菊「なら私達も。唸れ! 『灰猫』!」弓親「咲け『藤孔雀』」  
乱菊と弓親もまた斬魄刀を解放した。



side 一護

一護はグリムジョーが強襲してきたので即座に人気などが無い場所に移動して結界を張った。

一護「…いきなりだな、悪いが時間かけてられないぜ」

グリムジョー「抜かせ!! さつさとおっぱじめるぞ! 軋れ! 『豹王』!!」

グリムジョーは開幕早々刀剣解放して体は甲殻に覆われ髪は鬣のように伸び、毛に覆われて尖った耳、尖った手足の爪、鋭い牙に耳は水色、手足は黒色になるなど半獣人を思わせる外見となった。

一護「そうかい! 卍解『万華鏡・天鎖斬月』!!」

一護も最初から二本の卍解を合わせた状態でグリムジョーの相手をする。

一護は黒い月牙天衝を連射しまくってグリムジョーを接近させないようにしながら氷柱や獄炎の槍、霊子兵装から神聖滅矢を空中に生成して飛ばしまくった。

グリムジョー「『豹鉤』!」

肘の装甲の隙間から放つ棘爪を発射しまくって一護の攻撃を相殺した。

グリムジョー「『王虚の閃光』!!」

グリムジョーは自身の血を混ぜて威力を上げた虚閃を放ってさらに追撃の技もほぼ同時に放った。

グリムジョー「『豹王の爪』!」

グリムジョーは両手の爪から10本の霊圧の刃を形成しそれを飛ばして一護を切り裂こうとする。

王虚の閃光と豹王の爪が途中で融合して一護に迫ってくるのでこれには一護も虚化という手札の1つを切った。

一護「『穿面斬・蘿月』!!」

虚化して強化された黒い回転鋸のような形状の巨大な二連の刃を横に地面を削りながら複数並べて放ち、敵をすり潰す技を放った。

ドガアアアアアアア!!!

両者の技がぶつかり合い! 結界内で凄まじい衝撃と爆音が発生した。

グリムジョー「チツ！」

一護「・・・」

この結果を見てグリムジョーは舌打ちして一護は思案顔になっていた。

一護（グリムジョーの技の威力・・・俺の虚化状態の月の剣技を相殺するだど？ロアと修行などをしていたのか？）

一護はグリムジョーの異常な成長速度を感じ取りもう少し力を解放して戦ったほうがいと判断して抑え込まれている霊圧をほんの僅かに解放した。

グリムジョー（なっ!?こいつまだ上がるのか!!）

グリムジョーは一護の霊圧の上昇を野生の勘で感じ取ったがより好戦的な笑みを浮かべる。

両者がぶつかり合おうとすると横から雷撃のエネルギー波が飛んできたので思いつき跳んで距離を取った。

グリムジョー「誰だ!!」

グリムジョーは邪魔をしてきた乱入者に文句を言う。

平子「誰言われてもそんなお前に言う筋合いはあれへん思っけど」

乱入者の平子はグリムジョーの文句にそう返した。

一護「真子、援軍に来てくれたのはいいけど何もこっちじゃなくていいんだよ?」

平子「まあ、ええやん。そんなんよりこいつをちやつちやと撃退する方が先や。」

平子はそう言って虚化した。

グリムジョー「なに!?それは黒崎の!!」

グリムジョーは驚愕するがそれが隙となってしまうた。

平子「『黒虚閃』『破道の八十八 飛竜撃賊震天雷砲』」

平子は刀を水平にして黒い虚閃と極大の光線を融合して放ちグリムジョーをぶっ飛ばした。

グリムジョー「ぐああああああ!!!」

グリムジョーはダメージを即座に虚刀の機能で再生しているがそ



リベルちゃんだよ」

ハリベル「おいつ！ロア！毎度思うが勝手に決めるな！まあ良い一護、お前がどのような存在か虚<sup>ウエコムンド</sup>圏で見極めてやる。」

そう言っつて破面たちは帰っていった。

一護「一方的に来て勝手に帰っていったし… まあ今は被害確認だ。」

平子「そんじや、俺は一旦戻って今回の事あいつらに伝えとくわ。」

一護「分かった。またな。」

平子「そんじやまたなく、一護。」

一護は連絡を取ろうと連絡機を取り出し平子も仮面<sup>ヴァイザード</sup>の軍勢の面々に伝えるため戻った。

一護「おいつ！そつちはどんな状況だ!!」

織姫「一護君！こつちは怪我人はでたけど死人は出てないから心配しないで！」

海燕「おうっ！一護こつちは全員無事だ！チャドがああヤミーつてやつとの戦闘で大怪我負ったくらいでそれ以外は概ね問題なねえ！」  
織姫と海燕の言葉で安堵しかけた一護だがここで一つ疑問が生じた。

一護（グリムジョーはウルキオラが作戦成功したから戻れと言ってきた。じゃあ… 何の作戦が成功したんだ？）

一護は原作の記憶からここではウルキオラが織姫を攫うというものだが織姫は攫われてはいない… てことは何をなすために来た？

一護「… まあ、考えても仕方がないな。とりあえず、雨竜にも連絡を入れておくか。」

一護は雨竜に連絡を入れた。

雨竜「い、一… 護。ご、ごめん。遊子… ちゃん達を… あのウルキ… オラつて破面<sup>アランカル</sup>に連れ… 去られた。」

連絡機からズタボロの雨竜の声が聞こえてきた。

一護「… あ？」

連絡機から返って来た内容に一護は過去最大限にキレた。

54話：「何のために準備をしてたと思ってるの？準備万端だ！」

side 現世

<sup>アランカル</sup>破面を退けた連合軍だが夏梨と遊子が連れ去られたことを知って即座に黒崎邸に急行してズタボロの雨竜を回収して浦原商店に移動した。

そして雨竜は織姫に傷を霊圧を回道で治療した。

一護「よし：：雨竜、連れ去られた時のことを説明しろ？」

一護は怒気と殺気を放ちながら雨竜にその時のことを言えと言う。

雨竜「分かったから殺気を抑えてくれないか？」

雨竜は『はあ：：』と息を吐くと連れ去られた時のことを話し始めた。

くくく回想くくく

雨竜は一護から妹たちの護衛のため黒崎邸に移動した。

雨竜「こんにちは、真咲さん一護は居ますか？」

真咲「あら？雨竜君じゃない、一護は今はいないわ。」

雨竜「知っています、実は今日はこっちの要件で来ましたので。」

雨竜は事情を知っている真咲と遊子と夏梨の二人に不信感を出さないためにこのようなやり取りをする。

真咲「なるほど、分かったわ。それならちょうど良かったわ、今買い物に行こうとしたんだけど雨竜君、ちよつとでいいから遊子と夏梨の相手してくれないかしら？」

真咲は雨竜に娘の相手をしてあげてくれと頼んだ。

雨竜「分かりました。」

雨竜は了承して家に上がった。

雨竜「お邪魔させてもらうよ。」

遊子「あっ！雨竜お兄ちゃん！こんにちは!!」

夏梨「雨竜兄い、どうしたの？今、一兄いはいないよ？」

雨竜「大丈夫、さつき一護に連絡してすぐ帰るから家で寛いでく

れって言ってたから。」

雨竜は黒崎家の裏の事情をあまり知らない二人に不審がられないようにしながら話を合わせる。

しばらく話をしていいる突如、よく知る破面アラシカルの霊圧を感知した。

雨竜（ツ!!来たか!!）

雨竜は防御を固めつつ周囲を警戒していると

ウルキオラ「『虚術アビユーツ：睡眠ノベス・デ・スミエーノ雲』」

ウルキオラの声が聞こえたと思ったら部屋に雲のようなものが出現すると夏梨と遊子は突如糸が切れたかのように眠ってしまった。

雨竜「なっ!?これは!!」

雨竜もまさかこのような術を使ってくるとは思わず声を上げてしまったが即座に霊子兵装を展開した。

ウルキオラ「ほお、既に俺が来ることを感知して護衛を配置していたか、抜け目がないな。」

角が生えた仮面の名残を左頭部に被った、黒髪に白い肌を持つ瘦身の男、ウルキオラ・シファアがいきなり部屋に現れた。

雨竜「悪いけど、この二人は渡さないよ。」

雨竜はそう言って『異空戦場』を発動した。展開された異空間の場所は遮蔽物が多い森林とそれに隣接する山岳地帯のフィールドだ。

ウルキオラ「…ふむ、こうなった以上は仕方がないな。力尽くで貰っていくぞ。」

ウルキオラは虚刀を抜いた。既に雨竜は飛廉脚ひれんきやくで距離を取っている。

ウルキオラは探査回路ベス・キスで雨竜の居場所を感知すると即座に響転ソニードで距離を詰め虚刀を振り下ろした。

雨竜「っ!?!」

雨竜はその速度に驚愕しつつも動ブルート・サイネアルテリエ静血装で全身を強化して魂を切り裂くものを抜いて虚刀を受け止める。

即座に斬撃の応酬が始まり高速移動しながら山岳地帯に移動した二人は距離を離す。

雨竜（くっ!なんて奴だ、これでも剣の腕はそこそこあると思って

いたがまだまだだね、僕も….)

雨竜は内心で己に自虐しているがそれでも冷静に戦況を把握している。

雨竜は魂を切り裂くものだけでは無理と判断して聖文字で炎を生成して魂を切り裂くものに纏わせ炎の長剣にした。

ウルキオラ「なるほどな、炎…それが貴様の能力の一端か。」

ウルキオラは即座に虚刀に虚閃を纏わせて斬りかかると雨竜もまた加速して炎の長剣を振るった。

数度の打ち合いで互いに譲らない攻防をしているがウルキオラは霊圧を高める。

ウルキオラ「あまり、お前の時間稼ぎに付き合うつもりはない。

『虚術：雷 帝 の 鉄 槌』

ウルキオラは上空から無数の雷の雨を落としてきた。

雨竜「くっ!」『外 殻 動 静 血 装』!!

雨竜は「動 静 血 装」を体外まで拡張させ、円形のドームの防御壁を作り出してウルキオラの落雷を防御した。

ウルキオラ「これも防ぐか…仕方がない。鎖せ『黒翼大魔』」

ウルキオラは雨竜の実力の高さに帰刃してさっさと倒そうという結論に出た。

刀剣解放したウルキオラの姿は背中に黒い翼の生え死覇装も全身を包むロングコートのような姿になった。

ウルキオラは虚刀を構え、響転で距離を詰めるが先ほどまでとは桁の違う速度で距離を詰めた。

そして、雨竜はウルキオラに袈裟懸けに斬られた。

雨竜「ぐあああ!!!」

雨竜は数m程後ろに飛ばされた。

雨竜「ぐうう!!(なんて速度だ!!)そして動 静 血 装を使っている状態の僕を簡単に切り裂くなんて!」

雨竜は滅却師の回復術で傷を治すと 雷 霆 で動体視力と反応速度を極限まで上げた。

そして雨竜もまた全力で相手をする。

雨竜「いくぞ！ 『滅却師完聖体 天使の王』!!」

雨竜は滅却十字を媒体に完聖体を発動し、背に霊子の両翼が展開され滅却師の全能力を大幅に強化した。

雨竜は尸魂界篇の弓を展開するが今までのと違って弓の上下のりム部分が刃になっっている。

両者は空中で凄まじい速度で移動しながら互いに武器を振るう。

雨竜は炎の長剣となった魂を切り裂くものと刃弓の疑似二刀流を振るいながら空中から神聖滅矢を生成してウルキオラに放つ。

ウルキオラもまた冷静に虚刀を振るい雨竜の二刀の斬撃を捌きながら矢を羽で撃ち落とす。

ウルキオラ「『虚術：雷 帝 剣 雨』」

ウルキオラもまた大量の雷の剣を雨の如く射出してきた。

雨竜「ぐっ！」

流星の雨竜も捌ききれずにダメージを負ってしまい墜落しかけたが即座に体勢を変えて地面との激突を回避する。

ウルキオラはさらに追撃を仕掛ける。

ウルキオラ「『黒虚閃』」

黒い虚閃を放って止めをさしにかかるが雨竜も聖隷で周囲の物質を霊子に分解して極大の矢を生成して万物貫通を付与して放つが、かつてロアが一護の絶対切断を付与した攻撃を力任せに破壊した時と同じように雨竜の攻撃を押し切り黒い虚閃が雨竜に直撃した。

雨竜「ぐうほあ!!」

雨竜はなんとか、『外殻動静血装』を展開してさらに動静血装で全身を強化することで何とか死なずに済んだ。

雨竜「はあ… はあ… くそっ！ 完聖体でも圧されるか！」

雨竜は息をするだけでも精一杯なのに何とか立ち上がろうと四肢に力を込める。

ウルキオラ「もういい、十分だろ？ 諦めて大人しくしているがいい。」

ウルキオラは雨竜に諦めろと言い、黒腔を開いて夏梨と遊子の回収に戻ろうとするが霊子の矢が飛んできたので避ける。



雨竜「諦めるだつて？冗談言わないでくれ。もし諦めたら僕は一護に殺されるつての。悪いが死んでも君を止める。」

雨竜は乱装天傀らんそうてんがいを発動し全身を操り人形のようにして無理やり立ち上がってその身と武器に雷と炎を纏い、万物貫通the X-axisを発動して炎の長剣と矢に万物貫通を付与した。

ウルキオラ「そうか、なら知るがいいこれが真の絶望の姿だ。」

ウルキオラは雨竜の諦めの悪さに完全に止めをさそうと霊圧を更に高めるがその霊圧の変化に雨竜は眉を顰める。

ウルキオラ「『刀剣解放第二階層』」

ウルキオラはその姿を完全な悪魔を思わせる姿へと変えた。

雨竜「な、なに…」

雨竜もこれには言葉を失った。何せ、話に聞いていた『超越刃』オーバーブレイドを使うものとはかり思っていたので予想もしなかった力の登場に硬直してしまった。

ウルキオラ「これは藍染様にもお見せしたことのないものだが…まあいい、覚悟はできているな。」

ウルキオラはそう言い虚刀に霊子の刃をコーティングして響転ソニードで帰刃レスレクシオンの時より遙かに超える速度で距離を詰めて虚刀で斬りかかるが雨竜もまた極限まで力を高めているので何とかウルキオラの動きを捉え攻撃を捌いている。

ウルキオラ（ほお、この姿となった俺の動きについてくるのか、中々やるな。だがあまり悠長に時間を使う訳にもいかない。さっさと終わらせよう。）

ウルキオラは内心で雨竜の実力を評価したが時間をかけるわけにもいかなないのでとつと終わらせるために最大火力の技の連発で放ち終わらせにかかる。

ウルキオラ「『王虚の黒閃光』『フラゴール』『虚術：エンペラードル・トルエノ・リユーピア・エスパーダ』アビユーツ『虚術：雷帝の鉄槌』エンペラードル・トルエノ・マルティノ」

ウルキオラは自身の血を混ぜ強化した黒い虚閃セロを放ち、虚刀に纏わせた霊子の刃の斬撃を極大に拡張させ飛ばし、雷の剣を雨の如く飛ばし、雷の雨を鉄槌の如く落とす。

雨竜「くっ!? 『オーロラ・レーゲン極光の雨』」

雨竜もまた自身の技の中で最も広範囲を殲滅可能な技でウルキオラの放った技を相殺しようとするが向こうのほうが一発の威力が上なのか雨竜の攻撃が押され雨竜は攻撃に飲み込まれた。

ウルキオラ「…死んだか」

ウルキオラはその一言だけを言い残して黒腔ガルガンタを開いて現世にいる寝ている夏梨と遊子を回収して虚圏ウエコムンドに戻っていった。

雨竜「はあっ!…はあっ!何と…か生…き残れ…だが…流…石にも…う無…理だ。」

雨竜はボロボロだが何とか煙幕が発生した瞬間に自身に the X-axis 万物貫通を発動して攻撃を貫通させたがそれまでに喰らった攻撃のダメージと今までの無理が反動としてきてもう指一本も動かさな  
いでいた。

そうして瀕死の状態でいると連絡機が鳴ったので何とか連絡機を起動して一護に現状の緊急事態を伝える。

雨竜「い、一…護。ご、ごめん。遊子…ちゃん達を…あのウルキ…オラって破面アランカルに連れ…去られた。」

何とか言葉を紡いだ。

一護「…あ?」

今まで聞いたことのないレベルの一護のキレた声が返ってきた。

くくく回想終了くくく

雨竜「…と言うことがあったんだよ。」

雨竜はウルキオラと抗戦して敗北した事実を伝える。

一護「マジかよ、そんなに強いのかよ。」

一護はウルキオラの強さは知っていたがそれでも雨竜とそこまでの差があったとは思わなかった。

雨「うるる情けないですよ!雨竜が負けたせいで夏梨ちゃんと遊子ちゃんが攫われてしまったじゃないですか!!」

織姫「そうだよ!何をやっているの!雨竜君!!」

リルカ「そうよ!そうよ!これで二人が怪我したりしたとかだったら許さないわよ!!」

3人娘は嫁ーズの中でも遊子と夏梨と付き合いが長いので雨竜に文句を言いまくった。

一護「お前ら、落ち着けここで雨竜を責めるのは違うだろう。そもそも原因は藍染だからあいつの顔を殴ろう。」

一護は怒れる嫁ーズのうちの3人娘を落ち着かせている。

ちなみに一護は冷静に見えて目のハイライトが消えるレベルでキレている。

海燕「はあっ!? 帰還命令ってどういうことですか!!」

海燕達死神たちは尸魂界ソウルソサエティに今回の件を報告すると今すぐに帰還しろと言われた。

山本「それは藍染惣右介の目的が重霊地『空座町』の破壊であることが判明した。」

山本は藍染の目的を解明するべく隠密機動を総動員した結果大霊書回廊だいらいしよかいろうで霊圧の痕跡が発見されその目的である王鍵の創造であると分かり即座に現世にいる死神たちを尸魂界へ帰還させ襲撃に備えると言った。

海燕「ふっぎけんじやないですよ!! こちとら可愛い姪二人攫われているのにノコノコ帰るわけにはいかないでしょ!!」

海燕と都の従兄妹夫婦と死神の嫁ーズは怒り心頭で総隊長に文句を言う。

都「お願いします! 総隊長! 夏梨と遊子の救出に行かせてください!」

ネム「お願いします、救出に行かせてください。」

茜雫「そうよ! 行かせてよ!」

雛森「お願いします! 総隊長!!」

山本「ダメじゃ、今不用意に戦力を減らすわけにはいかぬ。今すぐに帰還せい。」

そしていきなり穿界門せんかいもんが開くと更木剣八と朽木白夜が出てきた。

更木「つくわけだ、帰るぞ。」

白哉「悪いが暴れるようであるのなら力尽くでも連れて帰らせてもらう。」

海燕「…ちっ！」

海燕は舌打ちしながらもその命令を受け帰還した。

一護「多分だけど、尸魂界の援護は今回は受けられないから俺達で勝手に救助しに行くぞ。突入は2日後、各自準備を済ませておけ。」

チャド「分かった。」

雨竜「今回の件は僕に責任がある、何が何でも二人を助け出す。」

チャドは一言だけだが覚悟を決めており雨竜は自身に責任があるのでこちらもまた覚悟を決めている。

織姫「フフフ…ただでさえ虚の大群をけしかけただけじゃなく遊子ちゃんや夏梨ちゃんを攫うとかどうしてあげようかな？」

雨「ですです、武器類は完全にメンテしてありますので跡形もなく消してやりますよ。」

リルカ「そうね、顔面が変形するまで蹴り抜いて上げるわ。」

3人娘は目のハイライトを消して藍染に殺意をぶつけている。

MI「全く、私達だけならいざ知らず遊子と夏梨に手を出したこと後悔させてあげます。」

MIもまた今回の件に関してはキレているので容赦する気はないらしい。

のえる「私も二人とはまだ日が浅いとはいえ未来の義妹たちを助けて見せます！」

のえるも気合十分のようだ。

一護「とりあえず、準備を行うがその間に学校連中に心配かけないために特殊義骸と義魂丸である時見たく誤魔化すぞ。」

一護は虚刀虚軍団襲撃時に使った手を使い再び学校連中を誤魔化すとそれぞれ一旦解散して準備に入る。

～1日経過～

雨竜「…」

雨竜は今回の一件で自分の弱さを呪い、より強くなるために真時玉で修行していた。

一護「雨竜、ちよつといいか？」

修行中の雨竜に一護が声をかける。

雨竜「一護かすまないけど後でいいか」

一護「いや、叶絵さんが来ているんだけど」

一護は雨竜の母である叶絵が来ているというときさすがの雨竜でも一旦修行を止まざるを得なかったので手を止めて叶絵の元へ向かう。

雨竜「母さん、何の用ですか？」

叶絵「雨竜、あなたに渡すものがあるので来たんですよ。」

叶絵は真剣な表情で綺麗な小箱を雨竜に差し出した。

雨竜「これは？」

雨竜は受け取りながら首を傾げる。

叶絵「それはあなたが最も必要になったときに渡してくださいとお義父様の遺言でしてね、今がその時だと。」

雨竜「っ!?!師範の!!」

雨竜は焦る気持ちを抑えながらも小箱を開けた、中には錆びついた五角形のペンダントが入っていた。それには雨竜には見覚えがある。

雨竜「これは一護が使う…」

一護「そつ、五角形の滅却十字クインシーこれが本来の滅却師が使うものさ。」  
すると話を聞いていた一護が話に参加してきた。

雨竜「そうか、でも君も純血統滅却師ではないだろう?」

一護「それは母さんが力を失ったから仕方なく母さんが俺に譲ってくれたからなんだよ。」

一護は五角形の滅却十字を継承した時のことを話した。

雨竜「そうか、とりあえず僕はこれを使った修行を限界までしてくるよ。」

一護「おう、頼むぜ。」

雨竜はそう言って修行に戻り一護もまた準備を済ませるべく歩き出すと

叶絵「一護君、私はあなたが雨竜の知り合いで嬉しいですよ。」

叶絵は一護に礼を言ってきたので一護は一旦止まると

一護「叶絵さん、俺も最高の相棒ができて嬉しいのでお相子ですよ。」

一護も礼を言うのと今度こそ準備を済ませるために歩き出した。

side 破面 アランカル

遊子と夏梨と言う一護を誘き出すための餌を回収し終わりその二人はをロアが預かることになった。

ロア「♪♪♪」

ロアは二人が起きるまでの間鼻歌を歌いながらお茶を飲んでいた。

遊子「うくん…」夏梨「う、うくん…」

二人にかかっていた対象を眠らせる虚術アビュールツの効果が切れて二人は起き始める。

遊子「…あれ？ここ何処？ねえ夏梨ちゃん起きて？」

遊子は夏梨より早く目が覚めて周囲を見て自分の家ではない所に居たので横で寝ている夏梨を起こす。

夏梨「遊子くなに…え？ここ何処？」

夏梨を寝ぼけていたが意識がはつきりすると遊子と同じ反応をした。

ロア「お早う、グツスリ寝れた？」

ロアはそんな二人に優しく接する。

遊子「え…つとどちら様ですか？」夏梨「誰！あんた!!」

二人はロアを警戒している。

ロア「そんなに怖がる必要はないよ、私、一護の番つがいだから」

ロアは二人の兄の名を出しながら自身は一護の嫁と言って警戒を下げさせようとする。

遊子「…え？またお兄ちゃん増やしたの？」

夏梨「あの誑たぢし兄い、またかよ。」

この二人の反応はいつもの反応をした。

レン「ロア様、ハリベル様がお見えです。」

ロア「わかったよ、入らせて」

ロアはハリベルを部屋に入れさせた。

ハリベル「入るぞ」

ハリベルは一言言って入ってきた。

夏梨「…誰？」遊子「こつちも綺麗な人…」

夏梨はハリベルを警戒しているが遊子はハリベルの美貌を見て口

アを見た時と同じ感想を洩らした。

ハリベル「まずは自己紹介をしよう。私はティア・ハリベルだ。よろしくな。」

ハリベルはこう見えて子供が好きなので花梨と遊子の相手をしに来た。

ロア「ハリベルちゃんも一護の番なんだよ〜」

ハリベル「おいつ！ロア！いい加減にs」

遊子「そうなんですか！」

遊子はキラキラした目で二人を見る。

夏梨「ホントに誑たらし兄いだな。」

夏梨も呆れながらも二人をちらちら見る。

ハリベル「ち、違っ…」

ハリベルは訂正しようとしたが遊子の態度に訂正しようにもできずにいた。

side 現世

事件発生してから2日経過して準備を完了させ今回の事件のそもそもの元凶である喜助を顔面がボコボコになるまで殴った後ウエコムンデ虚圏ガルガンダに行くための黒腔けいかいぎを開く繋界儀がある場所に移動しながら作戦を決めている。

一護「基本的には尸魂界の時と同じツアーマンセルで行くぞ。」

雨竜「分かった、メンバーはどう分ける。」

一護「俺とのえる、雨竜と雨、チャドと織姫、リルカとMIだ。」

チャド「分かった」

MI「了解です。」

3人娘『異議ありッ!』

チャドとMIは了承したがいつも通り3人娘は文句を言ってくる。

一護「いつも通り聞こうか?どこに不満がある?」

3人娘『のえるちゃんが一護(君)(さん)と一緒に所!!』

一護「リルカはこの前一緒だったから文句を言われる筋合いないし、のえるを選んだのはまだ実力が俺達に追いついていないから万が一が無い様に俺と組んでいるだけだ。」

一護は反論できないように理由をしつかり言うとは澁々ながら諦めた。

喜助「では皆さん。準備が出来たので早速行きますけど問題ないっすか？」

一護「何のために準備をしたと思ってるの？準備万端だ！」

一護の言葉に全員が頷く。

その言葉を聞いて喜助は繫界儀を起動する。

喜助「では行きますよ。『我が右手に界鏡を繋ぐ石、我が左手に実存を縛る刃、黒髪の羊飼、縛り首の椅子、叢雲来たりて、我・鴉を打つ！』」

喜助は詠唱を完成させると空中に黒腔ガルガンタが開かれたのでバグ一御一行はその中に突入した。

喜助「…ふう、行きましたか…そろそろ出てきたらどうですか？」

喜助は一護達を見送ると背後にいる者達に言葉をかける。

啓吾「あはは、ちなみに何時頃から？」

すると岩陰から啓吾、水色、たつきが出てきて啓吾が喜助に聞くと喜助「そんなもん、ここに来る前からですよ。一護さん達は助けに行くことだけ考えていたので気づいていませんでしたけど。」

一護達は今回の誘拐騒動で普段とは考えられないほど冷静さを失っていたので啓吾たちの追跡に気づいていなかった。

喜助「全く、一護さんも詰めが甘いんですよ、義骸で彼らを欺けるほど生半可な絆を紡いでいないでしょうに…。」

喜助は虚空に消えた一護にそう言った。



54話：「なんとというか、オーソドックスだな。」

sideバグ一達

バグ一達は黒腔内を爆走している。

ちなみに無駄に霊力を消費するわけにはいけないので滅却師クイーンシーの力で黒腔内ガルガンタの霊子进行操作して足場を作れる一護と雨竜が先行して後ろに残りのメンバーが追尾している。

一護「たくっ！藍染の奴も随分と面倒なことをしてくれたものだな。」

一護は足場を作りながら愚痴を言う。

雨竜「一護、文句を言う暇があるなら霊子と足を動かせ。」

一護「へいへい」

チャド「それにしても足場を作るだけなら俺達もできるが」

チャドの言う通り完現術者たちは霊力を消耗することなく足場を作れるがそれに関して一護が言う。

一護「いや、できる限りお前らの負担はなくしておきたい。向こうで何が起きるかわからない以上タンクとヒーラーたちの消耗はないほうがいい。」

一護の意見に残りも納得して無言になって走る速度を上げた。

そうしてバグーパーティは爆走して虚圏ウエコムンドに到着して目の前の壁を蹴り壊した。

side破面アランカル

遊子と夏梨は連れ去られて2日経過したがその間にロアとハリベル、その従属官フランゴンの女破面アランカルと仲良くなっていた。

遊子「ねえ、ロアお姉ちゃん達はお兄ちゃんとはいつ結婚するの？」

夏梨「遊子、ティア姉えやロア姉えに迷惑かけること言うなよ……私も気になるけど。」

……滅茶苦茶懐いている。

お菓子を食べながら話をしていると突如凄まじい圧力が発生した。

遊子「な、なに……!？」

夏梨「な、なんだよ!!」

遊子と夏梨は抱き合って震えを誤魔化す。

ロア「あくもう来たんだ〜」

ハリベル「この感覚、相当に怒っているようだな。」

二人はこの圧力を放っている男の気配を感じ取った。

トリス「ロア様、ハリベル様、藍染様より集合のご命令が入りました。」

するとトリスが二人に集合の連絡を入れた。

ロア「はあく、夏梨ちゃん、遊子ちゃんちよつと待ってね。」

遊子「うん！」夏梨「分かった」

二人は返事すると部屋から出て行った。

1つのテーブルに12の椅子がある会議室に11人の破面が<sup>アランカル</sup>入ってきた。

スターク「つたく、もう来たのかよ。準備早すぎだろ。」

スタークは欠伸をしながら侵入者に文句を言う。

バラガン「そう言うな、向こうからしたら至極当然ではある。」

バラガンはスタークの文句にそう言った。

ウルキオラ「…ふっ、どうでもいいがな。」

ウルキオラは興味がない用だ。

ノイトラ「ははは！面白そうでいいじゃねえか!!」

ノイトラは面白そうに言った。

グリムジョー「けっ、俺としては鍛錬の邪魔されてうぜえとしか思わないがな。」

ヤミー「俺もだな」

グリムジョーとヤミーは敵と定めた男を倒すために修行をしていたのに邪魔されて苛立っている。

ザエルアポロ「僕としても新しい実験で作った試作品類を試せるから別にいいけど。」

科学者であるザエルアポロはロアが存在でインスピレーションを得て作った試作品を試せる相手に興味が出ている。

ゾマリとアーロニーロは黙って席に座る。

ロア「まあ、誰が来たかはもうわかっているとは思うのに何で私た

ちを呼んだんだろ？」

ハリベル「仕方ないと思うが組織としてこういうのは必要だ。」

ロアとハリベルは仲良く話し合いしながら席に座った。

そして少しすると藍染が入って来た。

藍染「やあ、<sup>エスパーダ</sup>十一刃諸君、元気そうぞ何よりだ。そして襲撃だ、まずは紅茶を入れようか。」

ロア「何かツコつけてんのよ。」

side バグー パーティ

壁をぶち破って着地した一護達はヒーラーを真ん中にして円形の陣を展開して各々武器をいつでも取り出せるようにしている。

一護「・・・暗いな、地下か？」

雨竜「・・・どうやら、そのようだね。」

一護達は自分たちが出た場所が地下であると理解したので警戒しつつも着実に歩を進めた。

一護「・・・とりあえず、上の階に続く場所を目指すか。」

雨竜「そうだな、下手に固まったままこんな狭い場所で戦闘をするわけにはいかなからな。」

チャド「・・・それでここから出た後はどうするんだ。」

一護「一応、キャンプ道具などは持ってきたから数週間は問題ないようにしてある。とりあえず、敵の本拠地を見つけるのが先だな。」

チャド「分かった。」

一護、雨竜、チャドの3名の修羅場を潜り抜けた者達は周囲を警戒しながらも作戦を小声で決めている。

織姫「それでどっちに進めばいいかな。」

織姫はやみくもに進むわけにもいかないので意見を出した。

一護「そうなんだよな、ここの構造が入り組んでいるから困ってんだよね。」

流星の一護も初見の場所では勘頼りになってしまっている。

一護はとりあえず全知全能で未来視を使いその道順を辿る。

一護「次は・・・左か」

一護の的確な判断で道なりに進んでいくが

ガコツ!

何かスイッチを踏んだ音が響いた。

一同『……』

全員がその音に止まってしまった。

一護「……誰だ?」

一護の言葉に全員が足元に視線を向けるとのえるの所だけ少し沈んでいた。

のえる「……ごめんなさい。」

すると前方から大岩が転がってきたが一護の鉄拳で粉々にした。

一護「なんというか、オーソドックスだな。進むぞ。」

一護達にとつては罨にもならないので問題なく、対処したので歩みを進めようとする<sup>アランカル</sup>と背後から巨大な手が伸びてきた。

一護「っ!走れ!!」

一護の言葉で全員が一斉に走り始めた。

しばらく走っていると明かりが見えてきたので広間に出たがそこで異形の破面<sup>アランカル</sup>がこちらに弾丸上の霊子を連発してくる。

全員は即座に散開して攻撃を回避した。

一護は即座に『白雷』を放って頭部を貫いて倒した。

背後から来たのも『雷吼炮』で消し飛ばした。

一護「つたく、手間取らせんなよな。」

一護は愚痴を言いながら処理を終えたが突如建物が振動を始めた。

一護「……今度は何だよ。」

雨竜「一護!早く出るぞ!」

一護「分かっているよ!」

一護達はすぐに近くの階段から上階へと昇って行った。

そして階段を上り切ると砂の大地と月光の光が降り注ぐ夜の砂漠だった。

一護「……何と言うか、何にもないな。」

一同『同じく』

全員は揃って同じことを言った。

一護達はとりあえず、キャンプセットを取り出して一旦休息をとつ

ている。

一護「とりあえず、これからの方針を決めようか。」

一護は水分補給をしながらここから遠くに見えるデカイ建造物を見ながら言う。

雨竜「デカいな、ここからでも全容が見えるということは相当遠くにあるなこれは。」

雨竜は建物と自身たちの場所の位置を逆算して距離を割り出した。

MI「では私の持つ長距離移動用の端末で移動しましょうか。虚圏こゝなら霊子の供給に問題ないですから」

MIは鞆から巨大なキャンピングカーを取り出した。

一護「いや、移動は休憩を終えてからだ。下手に体力が全快してない状態で敵と遭遇するわけにはいかないからな。」

方針を決め終わると一護達は食事を取り腹を満たすと少しの間交代で仮眠を取ったあと一同はキャンピングカーに乗って砂漠を進む。

MI「とりあえず、あの建造物を目指しましょう。」

MIは建造物に向かうように自動操縦モードに切り替えた。

一護「とりあえず、全員武器の状態の最終確認だ。万が一不備があるわけにはいかない。」

一護の指示に自身の武器の状態とその他道具類をチェックをした。

一護「・・・問題はなさそうだな・・・ん？MI、ちよつと止めろ。」

MI「はい、分かりました。」

MIは一護の言葉にキャンピングカーを停止させた。

雨竜「どうした？一護。」

一護「・・・いや、なんか見えて・・・ほら。」

一護が指を指すとその先には

「あはははははは!!」

「ふはははははは!!」

「どっはははははは!!」

「ばわわわわわわ!!」

一同『・・・』

なんか泣いている幼女を追いかけている不審者二人と謎生物がい

る。

一護「… とりあえず、助けるか。」

一同『… 了解。』

一護達は救出メンバーと待機メンバーに分けた。

一護「んじや、行ってくるな。」

救出メンバーには一護、チャド、雨竜の3名になったので女性陣は待機した。

3名は各々の高速移動技を使い一護は幼女を優しく抱き抱え保護し、雨竜とチャドは不審者二名と謎生物を鎮圧した。

一護達は不審者たちを制圧し終わると正座させた。

一護「で？お前らなんでこんな事案にしか見えないようなことしてたんだ？」

???↓ネル「ほんとくに申し訳ござらねあでした。ネルだちの無限追跡鬼ごっこがそんな誤解を生んでだなんて。」

ネル達は土下座をしながら謝罪した。

一護「無限」チャド「追跡」雨竜「鬼ごっこ…。」

一護達は狂気じみた遊びに絶句してた。

ネル「如何せん、ウェコムント虚圏には娯楽つつう物がねえもので、はあく」  
ネルは頭を押さえながらそう言う。

一護「いや、遊んでたのはいいいけど君、ちよつと泣いてたよね？」

一護は泣いてた理由を聞いてみると

ネル「はあく、い、ネルはドMなもんでちよつとくらいきつくねえと楽しくねえんす。」

一護「子供になんて言葉を教えているんだ!!」

一護は不審者二人を鉄拳制裁した。

雨竜「そのネルっていうのが君の名前なのかい？」

ネル「そうですう、ネルは破面アランカルのネル・トウと申します。」

ネルは自己紹介した。

ネル「ちなみにこっちは」

ネルは残り二人に手を伸ばすと

???↓ペツシエ「ネルの兄のペツシエです。」

??? ↓ドンドチャツカ「兄のドンドチャツカでやんす。」

ネル「それで後ろのでつけえのはペットのバワバワっす！」

一護「そ、そうか」

流石の一護も引いていた。

チャド「… それにしても現世に来た破面アランカルと相当雰囲気が違うな。」

チャドはヤミー達とネル達を見比べた。

ネル「それはそうっすよ！現世に行ったのは数字持ちヌメロスの人達っすもん。」

雨竜「数字持ち？」

雨竜はネルの言った単語に疑問を持った。

ネル「数字持ちヌメロスっていうのは大虚メノスグランデ以上で破面化アランカルした人達の事っす、それで二桁の数字を名乗れて十刃エスパイダの人達に直接支配してもらえらるっす。」ペツシエ「いいよな」ドンドチャツカ「羨ましいでやんす」ネル「10人の十刃エスパイダは数字持ちヌメロスの中でも戦闘のエキスパート！ネル達のようなゴミ虫とは天と地ほどの差があるっす。」

ネル達は説明してくれたが一つ気になることを言った。

チャド「… 10人？十一刃エスパイダは第0十一刃ゼロ・エスパイダから第10十一刃ティエノ・エスパイダの11人じゃないのか？」

チャドはヤミーと戦っていた時にヤミーが言っていたこととネルの言っていることに矛盾を感じていた。

ネル「…？、何言ってんすか？ネルの知っているのは10人っすよ？」

どうもネルの知る限りでは十一刃エスパイダは10人らしい。

一護「多分だけど、この子が知っているのは昔の情報で今は11人変わったほいな。」

ネル「っつか、そんなこと言ったら、あんたらのほうが破面アランカルっぽくねえっすか。」

ネルは一護達に指を指しながらそう言うので一護は神速で虚化の仮面の一部を右頭部に呼び出した。

ネル「真ん中の人は恰好こそ黒衣着物着ているっすけど面の名残は

あるっす。けど他の人達はそんなのねえじゃねっすか。まるでに…。」

ドンドチャツカ「まるで人間みたいでやんす」

ペツシエ「人間みたいだ。」

ビギッ!

三人から何か致命的に壊れた音がした。

ぴゅ

場の空気が凍って沈黙だけが発生した。

ネル「あ、あのくあんたらのご職業はく…。」

ネルは冷や汗を流しながら自分達の種族について聞いてきた。

一護「黒崎一護、破面?なのかな。」

雨竜「石田雨竜、滅却師だ。」

チャド「俺は茶渡泰虎、完現術者… まあ異能を持った人間だ。」

ネル「だあく!!」ペツシエ「えええええ!!」ドンドチャツカ「ど

えええええ!!」

ネル「滅却師!!」ペツシエ「完現術者だとお!」ドンドチャツカ「人

間でやんすく!」

3人『二人合わせて悪者だあく』

3人は雨竜とチャドを指さして悪者呼びした。

一護「君ら、この二人のことよく理解してなかったのか…。」

雨竜「一護、虚化して自分にだけ被害が来ないようにするのはやめてもらおうか。」

雨竜は虚化して逃げた一護に非難の眼差しを向ける。

ネル「だつて!何なのかじゃないっすか!!」ペツシエ「やはり悪者か!」ドンドチャツカ「悪者だったかでやんすく」

雨竜「調子が狂うな。」

チャド「こんな破面アランカルもいるんだな。」

雨竜は3人のノリについていけずチャドは呆れている。

そして3人は少し距離を開けるとなにやらヒソヒソと話し始めた。

ネル「ど、どうするっすか!」ペツシエ「うくん」ドンドチャツカ「ピンチでやんすく」



ネル「やっぱネルはあの不思議な格好の破面アランカルの人を悪者から助けるべきだと思うっす。」

ペツシエ「だがあの二人に勝てる気がせんなく」

ネル「それでも同族は助けるっす」

ドンドチャツカ「そうだ！あの破面アランカルも悪者も一緒に無限追跡鬼ごっこに誘って遊んでいふりをしながら悪者二人をやっつけるってのはどうでやんすか」

ネル「グッドアイディアっす」

ペツシエ「それなら、勝てるかもしれんな」

3人は作戦会議をしているようだが一護達には全部筒抜けだ。

そして3人は一護達のほうに向くと悪い笑みを浮かべた。

ネル「悪者さんと同族さん、一緒に遊んでくれっす。」

一護「・・・いや、あの」

一護は断ろうとしたら

ネル「行くっすよ」

ネルは開始の宣言をして一護に走っていくと腰の斬魄刀の内脇差しのほうを抜き取っていった。

一護「おいっ！返せよ!!」

一護はネルを追いかける。

ギョク（おいっ！こら！小娘!!それを手に取っていいのは私とご主人だけですよ!!今すぐに手放せええ!!）

流石のギョクも主以外で握られたためご立腹だ。

ペツシエ「ふははは!!行くぞ」ドンドチャツカ「待つ出やんす」

ペツシエとドンドチャツカも一護を後ろから追尾する。

雨竜「まったく、敵意がないからって油断し過ぎだ。」

雨竜は呆れている。

バワバワ「ばわわわわ」

バワバワが体を動かし始めると雨竜とチャドに襲い掛かっていく。

チャド「なっ!?!」雨竜「ちよっ!」

二人も無限追跡鬼ごっこに強制参加させられた。

雨竜「なんで僕らまでこんなことに時間を使っている場合ではない

んだけど…」

チャド「こつちが聞きたい。」

二人は現状に突っ込んだ。

ドンドチャツカ「おわく新手が3人も増えたでやんす〜」

ペツシエ「これぞ！無限追跡鬼こつこの神髓！数が増えるほど楽しさが増す！その奥深さまるでジャンケンの如し！」

一護「いや、ジャンケンは別に数が多くても楽しくはないだろ!!」

一護はネルを追いながらペツシエに突っ込みをいれた。

ネル「あはははは!!… あっ！」

ネルは泣きながら笑って走っていたが気に躓いてしまつて転んでしまつた。

一護「っ！」

一護は即座にネルを抱き抱えると横に跳躍した。

そしてペツシエとドンドチャツカはネルと同じようにこけたので

二人を踏み台にして思いつきり跳躍した。

そしてバワバワがペツシエとドンドチャツカに突っ込んだ。

一護「大丈夫か？」

一護はネルに聞くと

ネル「はいっす…」

ネルは答えた。

一護はネルから脇差しを取り返し腰に差すと虚夜宮ラスノーチエスへ行くためにキャンピングカーに戻ろうとすると

ネル「ま、待つつす！このまま逃げる気っすか!!」

ネルは一護を挑発してきた。

一護「いや、元々は虚夜宮あれに用があつて来たんだよ。お前らのは予期してなかつた、ついでだよ。」

一護はネルの挑発に返答したが

ネル「うわ〜！ひどいつす！弄ばれたっす！こんなことなら殺されたほうがマシっす〜！」

一護「いや、なんでだよ…」

一護は呆れながらそう言う。

??? 「ならば、我が殺してくれよう!!」

MI 『一護様、急いでください。』

流石のMIも遊び過ぎている一護達に文句を言ってきた。

一護 『わかつているよ。』

一護は強烈な霊圧も柳の如く受け流しながら砂の巨人を無視している。

ネル 「白砂の番人ルヌガンダ様く!!」

ネルは驚きの声を上げながら砂の巨人の名を言う。

ルヌガンダ 「今s」一護 『氷河征嵐』

砂の巨人がなんか言う前に一護が氷雪系の鬼道で氷漬けにして『衝』で粉碎した。

一護 「雨竜、チャド。流石にMIからさつさと戻って来いと言われたから急ぐぞ。」

雨竜 「了解」チャド 「分かった」

3人はどこ吹く風で戻っていくと

ネル 「ま、待つつす〜!いつごろ〜!」

一護 「なんだよ、悪いけど俺達はこれ以上時間を使うわけにはいかないんだ。」

ネル 「違うっす!ネル達もついていくっす!」

一護 「はあ!?!いいのかよ!」

ネル 「だって、一護達と一緒に居たのをルヌガンダ様に見られた以上、ネル達も侵入者扱いされちゃったじゃねえっすか〜!」

ネルは泣きながらそう言ってきたので一護も頭を掻きながらネル達も連れていくことにした。

一護 「とりあえず、ドンドチャツカはバワバワに乗ってついて来てくれ、流石にお前のような巨体が入るように設計されてねえ。」

ドンドチャツカ 「ガーンでやんす。」

ドンドチャツカはショックを受けながらバワバワに乗った。

砂漠を猛烈な速度で移動する浮遊する乗り物とそれに追従する奇妙な生物がいる。

一護 「はぐはぐ... とりあえず、急ぎでいかないとな。」

一護はネル達との相手をした際に使った体力分を補給している。  
ネル「うめえくす」

ネルは一護を椅子代わりにして菓子類を食べている。  
ペツシエ「これはなかなか・・・いいな！」

ペツシエもおにぎりを頬張っている。

ドンドチャツカ「うまいでやんすく」

流星に一人は可哀そうなんで空間操作で部屋とドンドチャツカの  
前の空間を繋いでドンドチャツカが除け者にならないように配慮し  
た。

嫁ーズ『いいなあ・・・』

嫁ーズは一護の上に座っているネルを見て羨ましそうにしている。

雨竜「いや、雨は似たようなこと昔つるしていただろ？」

雨の幼少期時代を知っている雨竜は雨にツッコんだ。

ちなみに雨竜とチャドも栄養補給をしている。

side 破面アランカル

監視用霊具を起動してルヌガンダの相対した相手が映し出された。

そこには一護、雨竜、チャドの姿が映っていた。

ウルキオラ「ほう・・・」

ウルキオラはあの状況から生き残った雨竜を評価していた。

一護とチャドを見たヤミーとグリムジョーは今すぐに突撃しに行

こうとするのでロアと藍染が霊圧で強引に止めた。

藍染「さて、侵入者だが無意味に戦力を削る必要はない。向こうも  
できるだけ戦いは避けるだろうからね。」

ロア「そもそも、一護がここに来てるのはあんたの作戦のせいだけ  
どねく」

藍染の提案にロアが突っ込んだ。

その後、話し合いを終えて全員が各自の部屋に戻っていった。

side バグ一達

一護達は流星に暇なんでトランプなどの娯楽用に持っていた  
遊び道具で遊んでいた。

一護「ほいつ！」

また一護が1位上がりした。

ネル「また負けたつすう〜!」

雨竜「くっ!またか!」

全員が一護の独走を止めるべく結託までしてるのにそれでも1位を維持している一護に文句の1つも出る。

一護「さて、とりあえずゲームをやったけどそろそろ真面目に虚夜宮あに突入した後のことを考えようか。」

一護は流石に遊び過ぎたから大真面目な態度になって作戦を決めようと言ってきた。

雨竜「…それもそうだね。」

流石の雨竜も真剣な表情になった。

センサーアナウンス『高レベルの霊圧を検知しました。対処します。』

期待に搭載されている探知機に反応があったので搭載されている武装が展開され攻撃を開始した。

一護「いや〜楽でいいな。」

雨竜「まあ、有象無象に襲われることが無くて助かるのは事実だ。」

一同はのほほんと話をしているが外の爆音がどんどん大きくなってきた。

一護「…なんかさ音、近づいてない?」

一同『…』

ドンドチャツカ「あ〜でやんすけどなんか死神みたいな格好した連中が鬼の形相でこっちに来てるでやんすけど…」

ドンドチャツカは申し訳なさそうに言ってきた。

一護一行『…えっ?』

一護達はそれを聞いて攻撃を止めた。

海燕「ぐおらああああ!!一護おお!!いきなり何すんだああああ!!」

ボロボロになった海燕はキャンピングカーに入れると開幕一番に怒鳴ってきた。

一護「いや〜すまんすまん、まさか来れるとは思わなかったから。海燕の怒りなどこ知らずの態度で一護は言ってきた。」

ちなみにこつちに来たメンツは海燕、都、恋次、ルキアの4名だ。

一護「ちなみに茜雫たちは？」

一護は絶対来るであろうメンツがいないので海燕に聞いた。

海燕「あくそのなんだ、あいつらの場合絶対に突撃するのはわかり切っているから監視を大量につけられて動けずにいんだよ。」

一護「納得。」

海燕の情報を聞いた一護は納得した。

恋次「とりあえず、俺達は戻った後隊長の手引きで浦原さんの所からこつちに来たんだよ。」

恋次は飯を食いながらここに来た経緯を言った。

side 尸魂界

隠密隊員「総隊長！6番隊副隊長阿散井恋次、13番隊隊長志波海燕、同隊副隊長志波都、同隊3席朽木ルキアの反応が尸魂界から消えておりました。」

隊員の報告を聞いて山本総隊長はため息を吐いた。

山本「はあ、あやつら…」

side バグ一達

一護「てかいのかよ。」

海燕「るっせえ！従妹達も助けられないのに隊長なんてやってられつか。」

一護は命令違反して大丈夫なのか？と海燕に聞くと海燕はふんつと鼻を鳴らしながらそう言いながら飯を食っている。

ネル「あの一護？ちよつといいつすかあ？」

一護「うん？どしたネル」

ネルは先ほどから感じている違和感を聞こうとする。

ネル「その死神、一護とよく似てるっすけどなんでっすか？」

一護「あくそのなんだ？」

一護はどう話そうか考えていると

海燕「そいつは俺の従兄だぞ。」

海燕が簡単にカミングアウトした。

ネル「え？ええっ！！てことは一護も死神いっ！！で、でも気配は破面

の気配にそっくりで面の名残もあるっすよ!!」

一護「あく俺の場合は色々特殊だから一応は破面って事にもなるんじゃないね?」

一護はネル達に自身の素養を話した。

ネル「はええ。一護っておかしいんだな。」

一護「悪かったな。おかしくて」

ネルの言葉に一護はツツコミをいれた。

55話：「… そんじや、行くぞ！」

side バグ一達

海燕達と合流した一護達は砂漠を爆走して途中、二体目の砂の巨人に襲われ砂嵐で少し吹っ飛ばされたが目的地である虚夜宮ラスプーチエスの一面に到着した。

一護「とりあえず、ここから中に入るか。」

一護は刀を抜いて構える。

恋次「そうだな、それが分かりやすいな。」

恋次も同じく刀を抜く。

海燕「へっ！そういう分かりやすいのは嫌いじゃねえな一護！」

海燕も刀を構える。

3人は刀に霊圧を込めると同時に振り下ろして壁を粉碎した。

一護「なんか、建物にしてはボロボロだな。古い建物か？」

雨竜「確かにこの老朽の仕方は時間経過によるものだから一護の考えはその通りかもしれない。」

雨竜も一護の考えに賛同した。

一同は道なりに進むと空気の流れる音が聞こえてきたのでそちらに行く壊れた梯子の付いた大穴があるので一行はその穴に飛び降りた。ちなみにネルは一護が抱えて降りた。

一護「暗いな、『破道の三十一 赤火砲』」

一護は火の玉を生成、制御すると通路全体を照らした。

海燕「相変わらずの制御能力だな」

海燕は一護の制御能力をみてそう言う。

一護「当たり前だよ、ただでさえ今も生まれつき持っていた霊力の大半が無意識に抑え込まないと自滅しかねないほどあったから制御能力をひたすら鍛えたりしたんだよ。」

海燕「… え？一護ってこれでも生まれつき持ってた霊力だけの内抑え込んでいる霊力だけで戦っていたの？」

一護「そうだけど」

一護のまさかの発言に海燕達死神たちは絶句していた。



道なりに進んでいくと分かれ道があったので右の道に行った。

その道を進んでいくと周囲の壁とは異なる材質の壁が見えてきた。

一護「おっ！ビンゴかな。」

雨竜「なるほど、ここからは新しく増築した物か、つまりここからは現在でも使用されている建物つて所だね。皆、気を引き締めていこう。」

雨竜は壁を触りながら予想を言う。

一護「まあ、とりあえず俺がこの壁をぶち抜くけど準備はいいな？」

一護は全員を見ながら準備はいいなと言うと全員が頷いたので雨竜を下がらせた。

そして一護は刀を抜刀して壁を破壊した。

そしてぶち抜いた壁の先に階段があるので全員が上っていきがその先にも壁があるので破壊しながら進んだ。

数回同じことをするとまともな場所に出た。

一護「ようやく、それらしい場所に出たな。」

そこは5つの分かれ道がある部屋だった。

雨竜「5つか、これは風潰しになりそうだね。」

雨竜は流石に敵本拠地での戦力分散は避けるべく1本ずつ調べようと提案する。

ルキア「いや、複数人に分けて5つの道別々に行こう。」

ここでルキアがぶっ飛んだことを言い出した。

海燕「おい、ルキアそれは愚策つてもんだぜ。流石にそれは認められないつての。」

海燕も隊長としてルキアを制止した。

都「そうよ、ルキア少し落ち着きなさい。」

都もルキアのこの提案を認めるわけにもいかずに止める。

雨「私としては早く義妹達を救出したいんでそれもありませんけど。」

雨もルキアのぶっ飛んだ案を支持する。

MI「私としては敵地で戦力の分散は不味いのでやめていただきましたんですけども...」

MIは論理的にこの案を却下していかうとする。

とりあえず、分散派と纏まって行動派の2グループに分かれた。

一護「とりあえず、各々の主張はわかった。とりあえず、折衷案としてこの場所を記録したから連絡機で取り合って転移用霊具を使ってヤバそうならここに帰れるようにしたからひとまず、複数人のチームに分けて進もう。」

一護達は元々決めていた振り分けになった。

一護とのえる、雨竜うづると雨、チャドと織姫、リルカとMI、ルキアと恋次と海燕と都の振り分けだ。

一護「ほいつ、これがここに戻る用の転移霊具な使い方は……」

一護は各自に転移道具を渡し、使い方を伝えた。

一護「……そんじや、行くぞ！」

一護の言葉で一斉に各自の道に進んだ。

side アランカル 破面

東仙は監視室で一護達の動向をチェックしていた。

ギン「なんや、東仙さん覗きつて趣味悪いんとちやいますか？」

ギンが部屋の入口にいた。

東仙「ギン、心外だなキミも奴らの動きが気になるからきたのだから市丸。」

ギン「いややなあゝ冗談じゃないですか、そないな怖い顔せんといてくれませんかね。」

ギンはそう言って部屋に入ろうとして足が何者かに捕まれて止まった。

ワンダーワイスがギンの足の裾を掴んでいた。

ギン「東仙さくん、この子何とかして〜」

東仙「ワンダーワイス」

東仙の言葉にワンダーワイスも渋々話したが怪訝そうな目をギンに向けながら爪を噛んでいる。

ギン「なんやあの気難しいあの子は東仙さんやロアにはえらく懐いているな。」

ギンはワンダーワイスの東仙やロアにはえらく懐いていることを

不思議がつている。

東仙「純粹なものはそれ自体が惹かれ合う、その子が何に純粹かは計りかねるがな。」

東仙は自分の考察を言う。

ギン「なるほどな、だから僕とは仲ようしてくれへんはずやね。」

東仙「まともな者ならだれでも君に警戒心は抱くさ。そんなことよ  
り見るメンバーを編成して5つの道に分かれて行動しているようだ  
ぞ。」

東仙は一護達の様子を確認しながらギンに言う。

ギン「あら、まあ彼らの実力なら固まるより別れた方が色々動きや  
すそうやね〜」

ギンはそれを見て納得する。

東仙「それに奴ら面白いところを通っているようだ。」

東仙は一護達が今いる場所について言及した。

ギン「ああ、<sup>トレス・シフラス</sup>3 桁の巢兼選<sup>グランテ・ラ・クラシファイカシオン</sup>別の間やね。」

ワンダーワイス「トレス？グラン？」

ワンダーワイスはギンの発した単語に反応した。

東仙「ああ、そういうえばお前はここに来たのは最近だから知らないの  
も無理はない。3桁の数字は？奪の証、通称<sup>プリバロン・エスパーダ</sup>十一刃落ち、そして  
選<sup>グランテ・ラ・クラシファイカシオン</sup>別の間と言うのはロアの雑用決めのための場所でもある。

彼女の所にいる、レンに凍夜、トリスはそこにいた。」

side一護のえる

一護とのえるは通路をまっすぐ走っていた。

一護「・・・ 囲まれているな。」

のえる「そうですね」

一護達は大量の視線を浴びているのを肌で感じ取っていた。

二人は周囲を警戒していると

ネル「いつごろの“え”る“〜”」

ネルが泣きながら走ってきた。

一護「ネル！なんで来た!!」

ネル「超加速！」

ネルの頭の仮面が光ると凄まじい速度で突っ込んできた。

一護は難なく受け止めた。

ネル「いつご、ぐすつ、いつごお…」

一護「おい、ペツシエとドンドチャツカはどうした。」

ネル「ぐすつ… ドンドチャツカとペツシエならネルの後ろ…」

ネルはそう言つて後ろを振り向くが誰もいなかった。

だが一護は一際強い気配を3つ感じ取った。

一護「のえる」

一護はネルを抱き抱えると腰の刀を抜いた。

のえる「わかつています」

のえるもまた待機状態の魔剣を抜いた。

そして上から何かが下りて… 否落ちてきた。

???『どわああああ!!!』

どがああん!!

派手に床を破壊して土煙が上がった。

一護・のえる・ネル『…:…:』

流星にこの3名でも黙ってしまった。

そして砂埃から

「るるるるるる」

「はははははは」

「うふふふふ」

ふざけた感じの音が聞こえてきた。

砂埃が消えると

「へいつ!」

「はあつ!」

「うっふくん!」

ラテン系ダンサーは変なポーズを取っており細身のマッチョの男はカッコつけたポーズを取りスタイルの良い女はお色気ポーズを取っている。

一護達は一護はドン引きした表情を取りネルはドン引きして変顔をしておりのえるも無表情で引いている。

??? 「なんつだ！その顔は！この吾輩たちの華麗なる登場の仕方によ  
のようなアクションは何だ!!」

??? 「そうだ！この俺のカッコイイ登場を見てその表情は何だ!!」

??? 「そうよ！この私の姿を見てその態度は何なのよ!!」

謎の3人組は一護達のリアクションに文句を言ってきた。

一護 「いや、だって華麗なる登場と言われても君ら落ちてきたじゃ  
ん。」

一護は冷静にツッコんだ。

??? 「そのような平静を装うな!!」

一護 「装ってないよ。ガチで平静なんだよ。」

一護はラテン系ダンサーのツッコミに冷静に返す。

??? ↓ドルドーニ「まあいいそこは吾輩と貴様のセンスの差と言うもの。  
そして今から倒される敵にとやかく言うのは無粋と言うもの。  
覚悟しろ！この破面・No. 103ドルドーニ様が貴様を叩き潰し  
てくれよう!!」

??? ↓アスタ「俺は選別者のアスタ！貴様らを倒しロア様のご寵愛を  
賜る者!!」

頬にペイントのような仮面の名残をつけた黒い髪をポニテにした  
細マツチヨの男アスタ。

??? ↓メイ「私は選別者のメイ！あなた方を打ち倒しロアお姉さまの  
ご寵愛を受け賜る者!!」

頭部に鹿の角の様な装飾の付いたカチューシャのような形状の仮  
面の名残をつけてメイド服型の死覇装を着ている金髪爆乳ツイン  
テールの女メイ。

一護 「・・・103、選別者？なんだそれ？」

一護は十一刃落ちは知っていても選別者のことは全く知らなかつ  
た。

ドルドーニ「・・・いいだろう、坊や、ニーニヨ、その嬢ちゃん達に吾輩たち  
のことを教えておこう。吾輩は十一刃落ちプリバロン・エスパーダと言われるものだ。  
十一刃落ちエスパーダと言う、吾輩の他に何人かここにいる。そしてこつちの者  
達は選別者・・・我が師であるロア・ベリアル様の僕・・・否雑用係にな

りたいと願うかわり者達だな。」

アスタ「誰が変わり者だ!!」メイ「そうよそうよ!!」

ドルドーニが自分達の事を話すとアスタたちの説明があまりにも雑なもので当人たちが苦情を入れている。

アスタ「まあ、このおっさんの説明が雑なので俺達が代わりに説明しよう。選別者グランビカロとはロア様のご寵愛を賜るべく日夜研鑽を行っている者達の事だ。」

メイ「そしてロア様直々に認められた者達は見事ロアお姉さまのご命令を受けてロア様のために働ける者達を名誉ある雑用ブラセウス・ブレモ係となれるのですよ。」

アスタとメイは丁寧に選別者グランビカロの説明をしたが一護は気になったことを聞いた。

一護「あれ?でもその立場ってロアからすると単なる雑用って認識だったと思うけど...」

一護がそう言うときアスタとメイは猛反発した。

アスタ「貴様!ロア様を呼び捨てにするとは何様のつもりだ!!」

メイ「そうですよ!ロアお姉さまを呼び捨てにするなんて許されることではないですよ!!」

一護「そうか?俺何時もあいつを呼び捨てにしてるけど特に気にしてなかったぞ?」

二人と周りの怒気に一護は軽く流しながらそう言った。

一護の態度にアスタは何か気が付いた。

アスタ「...貴様、まさか黒崎一護と言う人間か。」

一護「うん?そうだけど」

一護は自分の名前を聞かれたので素直に答えると

メイ「そう...そうですか、なら死になさい!!」

メイはその肯定の言葉に虚刀を抜いて斬りかかってくる。

アスタも周囲にいる者達も虚刀を持って一護に斬りかかってくるので肩に移動していたネルを優しく抱き抱えながら刀で応戦を開始した。

ドルドーニ「では吾輩の相手は君になるのかい、嬢ちゃん。」

ドルドーニは不思議な構えをとりのえるに言う。  
のえる「ツ…」

のえるもまた魔剣を抜いて炎妃罪竜レイヴァアティンを解放した。

のえるは炎を鎧のようにして剣にも白い光を放つほどの熱を収束した。

ドルドーニ「準備はいいようだな。では行くぞ!!」

ドルドーニは地面を蹴り抜いてのえるに蹴りかかった。

side 雨竜・雨うるる

雨竜と雨も道なり沿って走っていくと途中後ろからペツシエが来たので合流して3人で移動した。

雨竜「全く、どうして君たちはそうおかしなことになるんだ。」

ペツシエ「いや、すまん、一護。ネルがどっか行ってしまつてなあ」

雨竜「僕は石田だ!」

雨竜は名前を間違えるペツシエに苛立ちながら突っ込んだ。

雨「次、間違えたら殺しますよ?」

流石の雨も好きな男の名を間違われて使われることにはキレてペツシエに殺気を放つ。

そして道なりに進むと大量の円柱がある部屋に出た。

そこには二人の男女がいる。

??? ↓チルツチ「よく来たわね。私は破面アランカル・No. 105チルツチ・

サンダーウィッチ、覚悟しなさい!」

左頭部に小型の飾りのような形をした仮面の名残があるゴスロリ風の服を着ている女性、チルツチは虚刀を既に抜いて臨戦態勢に入っている。

雨竜「なるほど、戦やる気満々のようだね。」

雨竜も滅却十字を媒体に弧雀を生成し魂ゼーレを切り裂くものを抜いて

構える。

??? ↓ギル「さて女、先に名乗っておこうか。俺は選別者グランビカロのギルだ。」

厳つい雰囲気キツクの右目に眼帯のような仮面の名残が付いた禿頭の男ギルは名乗りながら虚刀を抜刀した。

雨「そうですか、ですが私にとっては単なる障害でしかありません。」

雨は両手に銃剣干将・莫邪を呼び出してガンⅡカタの構えを取る。ペツシエも自身の武器である究極ウルティマを取り出した。

ペツシエ「おお！黒崎の剣と私の究極ウルティマはよく似ているな！」

雨竜「僕は石田だと言っているだろう！あとよく似てない!!」

ペツシエのボケに雨竜は苛立ちながらツツコんだ。

side チャド・織姫

チャドと織姫もまた途中で合流したドンドチャツカと一緒に道なりに進んでいた。

チャド「全く、どうしてそうなるんだ。」

チャドは呆れながらドンドチャツカに言った。

ドンドチャツカ「面目ないでやんす〜」

織姫「まあまあ」

そしてしばらく走っていると広間に出た。

そこには二人の男女がいる。

??? ↓ガンデンバイン「おうおう、俺は破面アラソカル・No. 107 ガンテンバイン・モスケーダだ！神の名にかけてフェアな戦いをしようじゃねエか。」

アフロ頭の男、ガンデンバインはそう言いながら虚刀を抜いた。

チャドも無言で拳を構える。

??? ↓ゴーシユ「私はロア様にお仕えする（予定）選別者グランビカロのゴーシユよ。」

黒髪の女、ゴーシユは名乗ると虚刀を抜いて構える。

織姫「そうですね。」

織姫は一言言つて刀を出現させた。

ドンドチャツカも口から棍棒を取り出した。

side MI・リルカ

MIとリルカも道なりに走っていくと前方から金属がぶつかり合う音が聞こえてきたので急ぐとそれなりの広間に出た。そこではロアの雑用と名乗ったレンが10人の破面に囲まれていた。

レン「・・・おや？どうも侵入者が来たようですよ。」

選別者達グランビカロ『そんなの知るか!! てめえをぶつ飛ばしてロア様の雑用係に



なるのだあ!!』

レン「ですが彼女たちを倒せたのならば私からロア様に進言しますがどうでしょうか？」

選別者たち『くたばれええ女アアアアア!!』

あつさり手のひら返ししてきた破面たちは躊躇なくMI達に斬りかかってくる。

MI「仕方ないですね。」

MIは竹刀に霊圧をある回路に込めて真剣にしてリルカもラビツトアーマーを身に纏って破面たちの対処をする。

side 海燕・都・恋次・ルキア

4名もまた道なりに沿って走っていた。

そしてこちらにもまた広間に出ると破面がいる。

???「ん?なんだよ、俺の所に来たのかよ。メンドクセネエナ。」

四対ののぞき穴が開いた縦長の仮面で頭部全体を覆い、フリルの襟飾りが付いた死覇装を着用している。

海燕「…何もんだてめえ」

海燕は刀に手を掛けながら破面に聞く。

すると海燕に見覚えがあるのか破面は嬉しそうな声を上げる。

???↓アールニール「お前はスタークと戦った隊長だな。なら俺は当たり前だな。俺達は第9十刃アールニール・アルエルだ!」

まさかの十一刃エスパーダの登場に即座に斬魄刀を抜いて臨戦態勢に入った。

アールニール「サテ、腹ヲスコシ満タストスルカ。」

アールニールもまた虚刀を抜いた。

## 56話：「んなことできるかよ!!」

side 一護・のえる

一護はアスタとメイ以外の選別者グランピカロを制圧し終わると近くにある虚刀を数本回収した。

一護「…鬱陶しい。」

ハツキリ言っただけを抱き抱えていなければとつくに制圧は済んでいるのだが流石に子供を放置して戦闘するわけにはいかないので慎重に対処している。

アスタ「チツ！不甲斐ない奴らだな。」

アスタは制圧されたメンツを見て舌打ちした。

メイ「そうよ！お姉さまの雑用ブラセウスケ・ブレモ係になると言っただけで厳しい修行を乗り越えたのに不甲斐ない…」

メイもやられたメンツを見て呆れている。

アスタ「だが奴の実力が本物だ、舐めてかかる訳にはいかない。跳ばせ『疾風忍者』！」

アスタは斬魄刀を解放した。

見た目は黒のアンダースーツに緑の装甲をつけて頭部に狐のような仮面を付けている。

手にはナツクルガードにも刃の付いた緑の刀を握っている。

メイ「仕方ないですね、妬やき尽くせ『龍帝王』！」

斬魄刀を解放したメイの姿は全身を黒い鎧を身に纏い顔に黒龍のマスクを装着し右腕が黒龍の頭部を模した手甲に変化して左に刀身が幅広い黒い柳葉刀を持っている。

一護「…『万華鏡』」

一護も流石にこの霊圧の敵にネルを庇いながら加減しながら戦うのはきついと判断したのか脇差しのほうを解放した。

一護は風を操作して自身とネルに風の鎧を身に纏って融合歩法で加速して刀身に纏わせた風の刃で攻撃する。

アスタ「くっ!?!」メイ「くうう!」

二人は一護の攻撃が苛烈となり二人は容易く追い詰められている。

アスタ「くっ!?このままやられるわけにはいかない!?『超越せよ』!!」

メイ「お姉さまのご寵愛を賜るチャンスを手放すわけにはいかないわ!!『超越せよ』!!」

二人は虚刀を解放してさらなる力を解放した。

アスタ「超越刃『破壊人狼』」

超越刃を解放したアスタの姿は赤いマフラーの様な物をなびかせて鬮と昆虫を組み合わせた様な顔、両肩に配置された狼の顎の様な意匠や漆黒のボディなど不気味な容姿、その手には柄の上に同じ形状の装飾がついて赤いどくろの意匠が付いた直剣を持っている。

メイ「超越刃『無間龍』!!」

超越刃を解放したメイの姿は金色の装甲を纏う戦士となり、そしてその装甲にはたくさんの竜のレリーフの付いた物だ。

一護「ちっ!」

一護もネルを庇ったままではそれなりに苦戦するかもしれない霊圧を放っているため舌打ちした。

ネル「い、いつご…ネルを離してけろ」

一護「はあ!?何言ってるんだ!!?んなことできるかよ!!」

流石にネルのこの提案を飲むわけにはいかずにネルに怒鳴ってしまった。そしてこの致命的な隙を逃さずにアスタとメイは同時に攻撃を仕掛ける。

アスタ「双児響転・十影」!『疾走剣舞』!!」

アスタは響転に特殊なステップを加えて残像を発生する技を使い10個の分身を生み出しその手に持つ刀に虚閃を纏わせて連続斬りを放ってくる。

メイ「虚閃」!『竜雷崩撃』!!」

メイは自身が放てる最大威力の虚閃と竜の形状をした雷撃を飛ばしてきた。

その射線上にどうしてもネルが入っていたので一護は攻撃に対して背を向けて自身を壁にしてネルを庇った。

一護「ごはあっ!」

一護は連続の斬撃と虚閃、そして圧縮雷撃を喰らってぶっ飛ばされてネルが怪我しないように自身が壁に激突してネルに怪我をさせないようにした。

ネル「いつごと!!」

ネルは自身を二度も庇った一護に悲痛な声を上げた。

一護は即座に傷を回復させて破けた死覇装も修復した。

一護「痛ってて・・・大丈夫か？ネル？」

一護は激突して崩壊した壁の中でネルに怪我がないか聞いてくる。

ネル「ネルよりも一護のほうが心配す!!なんでネルを庇ったんすか!!」

ネルは自分を庇った一護に悲痛な叫びをあげるが

一護「怪我がなければ大丈夫だよ。さてあいつらボコしに行くか。」

一護は結界をネルの周囲に張ってネルの安全を確保すると一護は壁から出ようとすると

ネル「いつごと・・・いつごと・・・」

ネルは泣きながら一護の名前を呼んでいる。

一護はその間に両手に二本の斬魄刀を手に持つと歩みを進めていたが突如背後から爆発的な霊圧を感知した。

一護「は？」

流石に間抜け声を上げながら一護は振り向く。

ネル? 「一護、私も戦う。」

そこには長身爆乳美女がいた。

一護「・・・え?どした?」

流石に一護もこの時にネルがこの姿になることは想定外のようにだがすぐに高速で頭を働かせて原因を理解した。

一護(ギョクさん?またですか?)

ギョク(別にいいじゃないですかご主人)

一護はギョクに思念通話で会話しているとネル?は露出度がえげつないことになっているボロ布のまま自身に抱き着いてきた。

ネル「一護♡」

一護「おい!とりあえず、今は戦闘中だから離れてくれないか!ネ

ル！」

ネル「うん！分かった！だから私も戦うね！」

ネルは刀を抜こうとするが一護はそれに待ったをかけた。

一護「そつちじゃなくてこつちを使えよ、さつき何本か回収してたからな。」

そう言つてポーチに仕舞つていた虚刀をネルに手渡した。

ネル「ありがとう！一護！じゃあ行つてくるね。」

一護「お前、その状態病上がりだろ！無茶すんなよな！」

一護も二本の斬魄刀を手にとって再びアスタとメイに向かつていく。

一護「ネル！調子を取り戻すまでは無理すんな！すぐにこいつを制圧するからそれまで耐えろよ！」

ネル「分かった！」

ネルも虚刀を片手にメイに斬りかかる。

アスタ「くっ！今度こそ貴様を倒す!!」

アスタは再び感知できない分新技で翻弄しようとしてくるが一護にとつてはもはや一度見た技なので直感で本体を見抜いて肉体を強化した一撃で斬り伏せた。

アスタ「ごはあ!!」

アスタは一撃でダメージ過多で超越刃が解除された。

一護はアスタを回復させると斬魄刀と虚刀を少し距離の離れた場所に置いて対虚用の拘束具で拘束した。

ネル「はあ！」

ネルは響転で翻弄しながら虚刀で切りかかっていく。

メイ「はあ!!」

メイは小細工抜ききの真つ向勝負で殴り掛かっていく。

ネル（くっ！まだこの姿に戻ったばかりだからキツイ…！）

ネルは今までのブランク込みなので超越刃を使っているメイ相手だと苦戦は必至だ。

よつてネルは一護が戻ってくるまで時間稼ぎに徹している。

メイ「そろそろ！どうしたんですか！あの男がいなければ何も出来

ないんですか!!」

メイはネルを煽りながら殴り掛かってくる。

するとネル以外の周囲の時間が止まった。

ネル（え!?何これ!）

ギョク（はあ… 不甲斐ないですね。そんなんではご主人に振り向いてはくれませんかよ?）

ネル（っ!?誰!!）

ネルは謎の声に叫んだ。

ギョク（まあまあ、とりあえずあなたには超越刃を修得等をしてもらいたいのので声をかけたのですよ。）

ギョクはそう言ってネルに修行をつけた。

ちなみにこの間数分間の出来事だ。

そして修行を終わったので時は動き出した。

メイ「っ!?何なのよ!!あなたの霊圧!さっきまではそんなになかったでしょう!!いくら虚刀で強化できるって言っても限度ってものがあるでしょう!!」

メイは急激に上昇したネルの霊圧に叫んだ。

ネル「あなたにそれを言う理由はあるのかしら?」

ネルはバツサリ切り捨てて虚刀に虚閃セムを纏わせて袈裟切りにメイを切り裂く。

メイ「があああ!!」

メイは肉体を再生させたがまさかの超越刃を使っているにもかかわらず、向こうは斬魄刀を解放すらしてないのにも関わらずに虚刀のみで今の自分と互角以上に戦っている事実<sup>事実</sup>に動揺している。

一護「これ以上はやり過ぎだから終わらせるぞ。」

一護はメイの動揺した一瞬を突いて一撃で気絶させて超越刃を解除させた。

そしてアスタたち同様に拘束して拘束した連中を一か所に纏めた。

一護「さてネル、行くぞ。のえるが待ってる。」

ネル「うん♡分かった!」

ネルは一護に甘えながらついてくる。

一護「ところでその露出の多過ぎる恰好何とかならない？」

ネル「服今これ以外持っていないから無理。」

のえるもまたドンパニーニ……ドルドーニと戦闘中だ。

ドルドーニ「そらそら、どうした嬢ちゃん」

ドルドーニは鋼皮イェロに霊圧を込めて強化して蹴り技を主体にのえるの解放した魔剣と打ち合っている。

のえる「くっ！はあ！」

のえるは距離を離すために魔剣から爆炎を放つ。

ドルドーニ「ふっ！」

その爆炎を響ソニック転で難なく回避する。

そしてのえるの動きが一瞬止まった瞬間に高速の跳び蹴りを放つ。

のえる「くっ！」

のえるはその跳び蹴りを剣で受け止めたが即座に後ろの壁にぶつ飛ばされてその壁を砕いてその先の部屋にまで飛ばされた。

のえる『マジック#44 フラッシュ・バンパー』

のえるは光の網を張り、衝撃を抑えながら敵を捉える魔法で衝撃を殺して体勢を整える。

のえる「妃竜ドラゴンウイングの炎翼」

のえるは背中に炎の翼を生成して空中戦にも対応できるようにした。

ドルドーニ「ふっ！即座に足場がないのを理解して翼を生成したか。中々の対応の速さではないか。」

ドルドーニは虚刀を抜いて蹴り技と組み合わせた戦いを開始する。

のえるは単純な剣術と体術を組み合わせつつ魔法と能力を組み合わせてドルドーニの攻撃に対応している。

のえる「竜力リリス・オブ・ドラゴン解放 『童話竜・赤頭巾』!!」

魔剣は解放する前の形状に戻ったがその魔力は解放前とは比べ物にならないレベルにまで上昇した。

ドルドーニもまたその霊圧を感じ取って本気で相手をすることにした。

ドルドーニ「ふっ！その霊圧に敬意を表して吾輩もまた力を出そう

ではないか。旋れ『暴風男爵』

ドルドーニは刀を僅かに抜いて刀剣解放をした。

帰刃をしたドルドーニの姿は脚部に竜巻を模った鎧と、肩の部分に猛獣の角のような鎧が形成され変化した。

のえる「行きます！『妃竜の大顎』！」

のえるは解放したドルドーニに炎の龍を飛ばす技を放った。

ドルドーニ「行くぞ！嬢ちゃん、『男爵蹴脚術』」

それに対しドルドーニは相手の攻撃を蹴りで御する技。上段・中  
断・下段の三種があり、高さによって使い分ける技を放ち対処した。

のえるは得意の炎の技でドルドーニを攻撃するがドルドーニは蹴り技にのみで対処した。

のえる「それなら！『妃竜の羽衣』！！」

のえるは膠着状態を打開するために炎のドレスを展開させること  
によって相手の攻撃を防ぐ鎧とし炎の火力をアップさせ、発する燐光  
を周囲に飛ばすことによってレーダーのような役割を 果たすこと  
も可能の技を使う。

のえる「喰らってください！『マジック#68 スーパーナル・ジエ  
イル』『妃竜の巣』！！」

のえるは上空より光の槍を無数にふらし、敵の動きを封じる魔法を  
放ってドルドーニを拘束し魔剣を地面に突き刺すことによつて 地  
面に無数の亀裂を生み出して、その亀裂部分から紅蓮の炎を噴出させ  
フィールドをマグマの海へと変化させる大技を放った。

ドルドーニ「ぬうう!!? 『単鳥嘴脚』!!」

ドルドーニは鳥の嘴を模した風を発生させ、それを纏った蹴りを繰  
り出す技を放って拘束を強引に破壊して空中に躍り出た。

のえるも炎翼で空中に浮遊した。

のえる「はあ… はあ… これで終わらせます！『竜神憑依』!!」

自身に竜の力を憑依、強化する大技を使って肉体を数十倍にまで大  
幅に強化した。

未だに反動があるので最大稼働時間が5分程しかないがそれでも  
この状態はあの一護に有効打が与えられるレベルの魔力を持っている



る。

ドルドーニ「・・・どうやらそれが嬢ちゃんの本気のようなだね。」

ドルドーニはその霊圧を感じ取って足からより強大な竜巻を放つてくる。

のえるは竜巻を炎を纏っていない拳で破壊した。

ドルドーニ「なに!？」

ドルドーニもまさかこんな力業で防がれるとは思っておらず動揺して隙が出来た瞬間にのえるは爆炎を拳に纏わせて超高速でドルドーニとの距離を詰めた。

のえる「『妃竜の炎拳』!」

炎を纏った単純な打撃だが今ののえるの腕力はチャドや一護と並ぶのでドルドーニ程度であれば大ダメージになるのは必須だ。

ドルドーニ「ごはあ!!」

ドルドーニは大ダメージを受けたが虚刀の機能で即座に再生した。のえる（・・・やはり一撃で気絶させるか、消し炭にするかの二択しかないのでしょうか？）

のえるはなんとか殺さずにドルドーニを制圧できないか考えをまとめようとしている。

ドルドーニ「・・・そうか嬢ちゃん。『超越せよ』」

ドルドーニはのえるの考えていることを理解すると超越刃を解放した。

ドルドーニ「超越刃『隼王暴風男爵』」

超越刃を解放したドルドーニの姿は白い隼を模したスーツに白い鎧を身に纏った。

そしてドルドーニは油断したのえるに超高速の一撃を叩き込んで壁に叩きつけた。

のえる「がはあ!」

ドルドーニ「そのようなチョコラテのような甘さは戦場では捨てるのだよ。嬢ちゃん」

ドルドーニはのえるの内心にある甘さを捨てるように言っつて止めをさそうとすると背後から黒い斬撃が飛んできた。

ドルドーニは即座に蹴り壊した、

一護「悪いな、こいつは殺させないぜ。」

天鎖斬月を解放した一護がのえるをお姫様抱っこして庇っている。  
ドルドーニ「次は坊やが吾輩の相手をしてくれるのかね？」

ドルドーニは不敵な笑みを浮かべながら構えを取るが一護は

一護「悪いが一撃で終わらせてもらうぜ。」

一護は虚化して月牙天衝を放つて一撃でドルドーニを斬り伏せた。

ドルドーニ「…見事」

ドルドーニはその一言だけを言い意識を落とした。

ドルドーニ「…なぜ吾輩を治した。坊や」

一護「いやだつて、別に俺達はあるたらを殲滅するために来たわけではないからな。」

一護は意識を取り戻し何故傷を治したのかと問うドルドーニにそう返した。

ドルドーニはその後原作でも言っていたことを言うで一護に斬りかかってきたので一護もまた無言でドルドーニの攻撃を受け流しドルドーニを切った。

その後気絶したのえるを抱えてネルと合流し直して先に進んだ。

不意打ちして斬られたドルドーニだが今来ている連中に自分が一護と仲がよさそうな所を見られるわけにはいかないので敢えて邪険に扱うようにすると到着した葬討部隊エクスティアスの足止めをする。

ルドボーン「ほう、まさかその傷で我々の相手をするつもりか？」

ドルドーニ「ふっ！言うじゃないか小僧共ホブンスエロ」

ドルドーニは超越刃どころか帰刃すらできない状態でありながら二刀を抜いて葬討部隊エクスティアスに向かっていった。その際にドルドーニは内心で先ほど刃を交えた二人に忠告をした。

ドルドーニ（坊やニニヨ、嬢ちゃんベ。君たちの中にあるチョコラテはここに置いていけ、心を鬼にするのだ。）

二人にそう言ったドルドーニは葬討部隊エクスティアスとの戦闘に集中した。

57話：「これでいいのか？」

side バグー

ドルドーニたちとの戦いを終えた一護達は今、本来の姿に戻ったネルの衣服を作成している。

一護「つつたく、面倒な奴もいたもんだな。」

一護はネルの昔の話を聞いて愚痴を言いながらのえるが測って聞いたネルの体格などから衣類を作成している。

ネル「ねえねえ、一護♡その妹達ってどこにいるの早く会いたいよ」

ネルもネルで一護から妹の話を聞いて会いたがっている。

のえる「・・・」

のえるはネルをジツと見て何か考えている。

一護「・・・どうしたのえる？」

一護が疑問に思ったので聞くとのえるは

のえる「・・・いえ、何もございません。」

一護「いや、それなんかあるやつの反応だよね？」

一護はそう言うがのえるは黙秘を続ける。

のえる(ううううう！何ですか！幼女の時に好感度稼ぎまくってそこから大人モードで強襲掛けるとか反則じゃないですか!!)

のえるは内心でネルに対して嫉妬していた。

ちなみにネルの意図せずやったことだが雨うると全く一緒なのがネルが成功したのは色々状況が重なったのもある。

一護「とりあえず、もうすぐできるけどこれでいいのか？」

一護はネルの装備ができると言うと普通に喜んでくれた。ちなみに見た目は千年決戦篇の奴と十刃時代の死覇装を合わせたような感じのやつだ。

ネル「うん！これでいいよ。」

のえる「ネルちゃん、あなた元々そんなに露出の多い服ではなかったのにあんなに露出の多い恰好になって恥ずかしくないのですか？」

ネル「？特にそんなことないけど」

のえる「そうですか…!」

のえるはネルにあんな露出の多い恰好して恥ずかしくないのかと問うとネルは特に気にしてないような反応をするのでのえるは呆れている。

side 雨竜・雨・ペツシエ

雨竜達も戦闘中である。

雨竜「はあ! 『灼熱雷霆滅矢』!!」

雨竜は聖文字灼熱の炎を纏わせ雷霆の雷で雷速にま

で加速させた神聖滅矢を連射しまくるがチルツチは冷静に虚刀と先端に円盤がついたムチで防御した。

チルツチ「くっ!?!」

チルツチは防ぎ切ったのはいいがその攻撃力の高さに顔を歪める。

雨竜「悪いけど君如きにこれ以上時間を使っている暇はないんだよ。」

雨竜は少し苛立ちながらチルツチに上から目線な態度をとる。

チルツチ「馬鹿にして…! 掻っ切れ『車輪鉄燕』!!」

雨竜の態度にキレたチルツチは刀剣解放した。

解放したチルツチは刃の羽が付いた翼、鳥の脚のような長い腕、長い尻尾が形成される。

雨竜「その程度なら僕には届かないよ?」

雨竜は前に戦ったウルキオラの帰刃の重圧と気配を比べてそう言った。

雨竜は魂魄の弱点である「鎖結」と「魄睡」を矢を放って攻撃する

が  
チルツチ「甘いわよ! 『断翼』!」

チルツチは翼の刃で直接切りつける技で矢を撃ち落とした。

雨竜「大気の戦陣を杯に受けよ『聖噬』」

雨竜はチルツチの周囲に霊子の球体を生成しドイツ語の詠唱をするとその霊子の球体が弾けて空間を瞬時に削り消滅させる術を行使した。

チルツチ「ごはあ!!」

チルツチはこの術をまともに受けてしまい大ダメージを受けてしまったが即座に虚刀で再生した。

雨竜「終わりだ。」

雨竜は再び「鎖結」と「魄睡」を矢を放った。

チルツチ「させないわ！『超越せよ』!!」

チルツチは虚刀を解放した。

その際に放たれた霊圧で矢を消し飛ばした。

チルツチ「超越刃！『超越の車輪鉄燕』！」

超越刃を使ったチルツチの姿は帰刃の鳥を思わせる鎧と仮面を装着した姿だ。

チルツチ「…よくもこの姿にしてくれたわね！覚悟しなさい!!」

雨竜「悪いけど、そんな覚悟はしないね。」

チルツチは激昂するが雨竜には関係ない。

チルツチ「喰らいなさい!!」  
断翼 散

チルツチは翼から刃を飛ばして攻撃する技を放った。

雨竜「無駄だつて」

雨竜は矢を連射して攻撃を相殺して飛廉脚で距離を詰めて魂を切り裂くもので刺突を放とうとする。

チルツチ「させないわ！」  
断人 大斧

チルツチは羽から刃を射出一つに集め扇形の刃を形成する

それを距離を詰めてきた雨竜に落としてきた。

雨竜「ちっ！」

雨竜は舌打ちしながら距離を離れた。

チルツチ「私を馬鹿にしたこと後悔させてやるわ！」  
断人  
剣士

チルツチは大声を出しながら霊圧の大剣を形成して飛ばしてくる。

雨竜「…仕方がないね、『完全反立』」

雨竜は自身とチルツチの大剣を入れ替えて刺突を二度放った。

チルツチ「あ…がつ…！」

チルツチは「鎖結」と「魄睡」を破壊され地に伏せた。

雨竜「悪いけど、殺しはしないから安心してくれ。」

雨竜は一言チルツチにそう言っただけに進んだ。

雨「くっ！」

雨は銃剣から弾丸を放ちながら距離を取る。

ギル「ふっ！」

ギルは片刃の大斧型の斬魄刀を盾代わりにしながら防いで虚刀で切りかかってくる。

弾丸は防御をすり抜けて辺りはするも鋼皮の強度もそれなりにあるのかダメージが入っていない。

雨「くっ！（やはり私の攻撃力では突破が難しいですね、これを何とかしないと勝てない!?!）」

雨は実は結構焦っていた、最近新参者たちに追い越されていることに。

茜雫やネム、雛森は自身の斬魄刀や鬼道などで火力は十分確保されているので虚刀の再生と鋼皮の防御力を持つ破面相手でも勝つことができるが雨の場合、鬼道で火力を補えるがそれを放つまでの時間が稼げないので決定打に欠ける状態が続いていた。

同期である織姫やリルカも攻撃力は特に困っていないので問題ないので焦りに拍車がかかっていた。

そして最近になって表れたのえるは一護と肩を並べる程の力を有しているこのまま自身だけ置いてけぼりになるのを恐れていた。

ペッシェ「喰らうがいい!!私の究極の威力を特と味わうがいい!!」

雨が内心で焦っている間にペッシェが霊子の刃の剣『究極』を振るってギルに斬りかかっていく。

ギル「ふっ！」

ギルは虚刀を納刀して斧を巧みに操り攻撃を防いでいく。

ペッシェ「隙あり!!『無限の滑走』!!」

ペッシェはギル目掛けて触れた物をヌルヌルにする液体を口から放出した。

ギル「ぬうう!?!」

ギルは踏ん張ろうとしたがヌルヌルしているために武器や足元が

安定しないでいる。

ペツシエ「はあ!!」

ペツシエはその隙を見逃さずに斬撃を放った。

ギル「ぐう！」

ギルは袈裟懸けに斬られたが即座に再生する。

ペツシエ「ええい！うつとしいぞ!!」

ギル「それはこっちのセリフだ！粉碎せよ！『地重物の鋼王』！」

ギルは戦況が不利になったことを察知すると刀剣解放した。

解放したギルの姿は顔にはサイの角やゾウの鼻・牙などありサイやゴリラを彷彿させる屈強な上半身になり、腕もゴリラのような形状になり、腰にも象を思わせる鎧が出現する。また左腕に2連装の大砲が装備されている。

解放したギルは能力で重力を操作して自身の体勢を安定させた。

ギルはそのままペツシエを殴りかかっていくが足元に何かが転がってきた。

雨「ペツシエ！今すぐ離れて目と耳を防いでください!!」

ペツシエ「心得た！『超加速』!!」

ペツシエは高速移動して言われた通りに目と耳を塞ぐと

キーーーーーン!!

凄まじい閃光と音が鳴り響いた。

ギル「ぐおおお!!」

これを真正面から喰らったギルは三半規管と視力と聴覚が一時的にマヒしてしまった。

雨「一気に決めます!!」

ペツシエ「承知！」

二人は一瞬出来た隙を逃さずに攻撃を叩き込みにかかる。

ギル「ぐううう!!『超越せよ』!!」

流星にここまで追い込まれてしまった以上超越刃を解放した。

ギル「超越刃！『玄武の王』！」

超越刃を解放したギルの姿は全身を亀の甲羅を思わせる金色の鎧で覆った、古代中国の武将を彷彿とさせる重厚で厳つい外見をしてい

る。

ギル「喰らえ！」

ギルは再生の力で失った視力と聴覚を取り戻し酔いも回復した。

そして重力を拳に収束して響転ソニックドで高速移動した。

雨とペツシエも高速移動して攻撃するがゲルの攻撃力と防御力に攻めあぐねている。

雨（早く決着をつけないと……!!）

雨は時間が経つたびに焦りを募らせている。

雨竜「いつまで時間を使っているんだ。」

流石に見かねた雨竜がギルを背後から狙撃した。

ギル「ぐおお!!？」

背後から不意打ちを喰らってギルは勢い余って壁に激突した。

雨「……すみません、雨竜」

雨は雨竜に礼を言った。

ペツシエ「助かったぞ！黒崎!!」

雨竜「僕は石田だと何度言ったらわかる？」

二人はまた漫才をしている。

雨竜「とりあえず、さつさとケリをつけるよ。」

雨竜はそう言つて魂ゼーレを切り裂くものを弧雀シユナイダーにつがえた。

雨「……雨竜、ここは私にやらせてください。」

雨は雨竜に待ったをかけた。

雨竜「無理だね、今回僕たちがここに来たのは遊子ちゃんと夏梨

ちゃんの救出だ。君の我儘を聞くために来たわけじゃない。」

雨竜は正論で雨を納得させる。

雨「……はい、分かりました。」

雨は渋々、雨竜の手を借りる。

雨竜「ペツシエ、君と雨が前に出てくれ。」

ペツシエ「わかった」雨「分かりました。」

二人は納得して前に出た。

そして、雨とペツシエは前に出ながら弾丸と虚弾バラを連射しながら距離を詰める。



ギルも反重力の壁でそれらの攻撃を防ぎつつペツシエの『無限の滑走』を警戒した。

今の状態で一瞬とは言え動きを鈍らされると雨竜の攻撃を凌げないのはわかり切っているので今注意すべきペツシエと雨竜のみだ。

雨竜は魂を切り裂くものを矢として放ちながら空中から雷を落としました。

ギル「くっつ！」

ギルもこれほどの攻撃力の攻撃を防ぎきることが出来ずに再生を越えたダメージが蓄積していた。

雨「瞬間！！」

雨は高濃度に圧縮した鬼道を己の手足へと纏い、打撃が当たった瞬間炸裂させる鬼道と白打を融合させた奥義を使った。

雨は強化された打撃を放ってギルの硬い装甲を破壊しながらダメージを更に蓄積させた。

雨「これでどうです！『月閃瞬間』！『天光天照』！！」

雨は更に瞬間に属性を持たせて強化して拳から極太の光線を放った。

ギル「ぐううおおおおお！！！！『反重力鎧』！！」

ギルは攻撃を受けながら雨の光線を重力操作で反射した。

雨「きやあああああ！！」

雨はその反射された攻撃をまともに受けてしまい壁に激突した。

ギル「はあ…はあ…危なかった…」

ギルは肩で息をしながらそう言ったが

雨竜「いや、これで終わりだよ。『破芒陣』」

雨竜は先ほどから魂を切り裂くものを放て描いた滅却印の陣にギルを閉じ込めていた。

雨竜「チエツクメイトだ。」

雨竜はそう言って銀筒に集めた霊子をゼーレシュナイダーに流し込むことで陣内で爆発を起こした。

ギル「ぐわああああああ！！！！」

ギルはその爆発のダメージで超越刃が解除された。

爆発の後には超越刃が解除されたギルが気絶している。  
雨竜達はギルを簀巻き状態にして部屋の端に寝転がして先に進んだ。

sideチャド・織姫・ドンドチャツカ

ガンデンバイン「『龍拳』!」ドラグラ

ガンデンバインは刀剣解放を行った。

解放したガンデンバインは巨大なダンゴムシやアルマジロのような装甲が両腕に装着された。

ガンデンバインは両拳に虚弾バラを纏わせて殴り掛かる。

チャドは霊圧を込め完現術で強化した拳で迎え撃つ。

拳の乱打で互いに拳が直撃するが特にダメージを受けているような感じはない。

数分間打ち合いを終え距離を離れた。

ガンデンバイン「…『超越せよ』」

ガンデンバインはダメージがないことを理解すると虚刀を解放した。

ガンデンバイン「超越刃『超越の龍拳』」オーバーブレイド ドラグラ・テラセネンチア

超越刃を解放したガンデンバイン両腕に龍を模した装甲が装着された。

チャド「…『巨人の黒鎧』『悪魔の白鎧』」アルマドラ・ネグラ・ヒガンテ アルマドラ・ブランカ・デル・デアプロ フルアリング

チャドは皮膚に完現術を行使して白と黒の鎧を展開した。  
再び拳の乱撃戦が起こった。

ガンデンバイン「はあ!」

ガンデンバインは至近距離から虚閃セロを放ったがチャドは体捌きでその奇襲を回避した。

ガンデンバイン「なに!?!」

チャド「悪いな、その奇襲はもう喰らったことがあるんでな。  
『巨人の一撃』」エル・デイレクト

チャドは黒腕に霊圧を纏い強烈な打撃をガンデンバインに見舞った。

ガンデンバイン「ごはあ!!」

ガンデンバインはぶっ飛ばされて壁に激突した。

チャド「…降参してくれないか？決着の付いた奴にこれ以上の追撃はしたかねえ」

チャドはガンデンバインに降参するように言う。

ガンデンバイン「…ごふっ！連れねえこと言つてんじゃねえよ。まだまだ勝負はこれからだ。『主よ我等を許し給え』!!」  
ディオス・ルエゴ・ノス・ベルドリーネ

ガンデンバインは傷を再生しながら両腕に霊圧を溜めてそれをチャドに向かって解き放った。

チャド「…そうか、『魔人の一撃』」  
ラ・ムエルテ

チャドは白腕に霊圧を込めて真実の上書きを使い解き放たれたエネルギーを無力化しガンデンバインを殴り倒した。

ガンデンバイン「ぐはあ!!」

ガンデンバインは壁に叩きつけられ壁にどくろの形状のへこみを作り超越刃が解除された。

チャド「…俺の勝ちだ。」

チャドはその一言だけを残し織姫とドンドチャツカに加勢に行く。

織姫「はあ!!」

織姫は孤天斬盾を放ちつつ完現術アケクセ：加速ルで加速しながら刀で切りかかっていく。

ドンドチャツカも棍棒を振りかぶりながら織姫の後ろから追撃を掛けようとする。

ゴーシユ「『ヒエロ・エン・ホルボ粉 氷』」

ゴーシユは冷気を放出して二人を凍り付かせつつ、飛ぶ斬撃も響転ソニードで回避した。

織姫「『双天帰盾』」

織姫はドンドチャツカと自身の氷を拒絶で消して今度はドンドチャツカを前に織姫がカバーするフォーメーションで戦おうとする。

織姫「ドンドチャツカさん、いけますか?」

ドンドチャツカ「問題ないでやんす」

ドンドチャツカは棍棒を振り回しつつ暢気な声で言った。

ゴーシユ「舐められたものですね、ではこちらもそれなりの力で相

手させていただきますね。凍てつきなさい『薄氷の女王』デルガード・ヒエロ・レイナ

刀剣解放を行いゴーシユの体に白い純白のドレスに変化して顔に頭部全体を覆う仮面が装着された。

ゴーシユ「今度は確実に体の芯まで凍らせてあげます。  
『ヒエロ・エン・ホルボ  
粉 氷』」

ゴーシユは先ほどとは比べ物にならない程の冷気が二人を襲おうとするが

チャド「させん！」

加勢に入ったチャドの張った結界で防がれた。

織姫「チャド君！」ドンドチャツカ「助かったでやんすく」

チャド「ここからは俺も加勢する。」

二人は頼もしい味方の参戦に士気が上がる。

ゴーシユ「…仕方ないですね。『超越せよ』」

ゴーシユもチャドの結界の強度に超越刃を解禁する。

ゴーシユ「超越刃オーバーブレイド『絶氷の女王』」

超越刃を解放したゴーシユはその身の純白のドレスを青白い物へと変え頭部についていた仮面は消失しており代わりに行き結晶の形をした髪飾りを付けている。

ゴーシユ「行きます！『氷姫の剣』」コリーメ・プチヤ

その手に氷の剣を二本生成して斬りかかっていく。

ゴーシユの二本の氷の剣による攻撃はチャドの防御を打ち破ることが出来ず、逆にチャド達の攻撃もゴーシユの体捌きによる回避で当てる事が出来ずにいる。

チャド達は連携なども一流なのだが広範囲攻撃などはほとんど持ち合わせておらずできるにしても僅かな準備が必要なので決定打を打てずにいる。

ゴーシユ「いい加減にやられなさい!!『氷姫の斬嵐』」コリーメ・コージェ・ストーム

ゴーシユは吹雪と氷の刃が入り乱れる竜巻を放った。

チャド「させるか!『神砂嵐』!!」ストーム・ハンドリクン

チャドは暴風の手甲を装備して量の手甲から竜巻を放って氷の竜巻を相殺した。

ゴーシユ「っ…！しかしこの程度で」チャド「何を言っている。まだ気が付かないのか？」ゴーシユ「え？」

ゴーシユはチャドの言った言葉に一瞬硬直すると真上から影が発生した。

ドンドチャツカ「『ドンドチャツカプレス』でやんす〜」

ゴーシユ「い、いやあああああああ!!!」

ドンドチャツカは飛びかかってゴーシユを押しつぶした。

ドンドチャツカは少しの間そのままできて少ししてから退くと超越刃が解除されて泡を吹いて気絶したゴーシユがいた。

ゴーシユ「きゅ、きゅううう…」

チャド「何とというか、戦っていて感じたんだが思っていた通りの性格をしていたな。」

織姫「…うん、そうだね。」

ドンドチャツカ「大丈夫でやんすかね〜」

3人は暢気に言いながらも縛って部屋の端において先に進んだ。

58話：「ちよつとまずい?」

sideリルカ・MI

MIとリルカは強襲してきた破面ブレイクを制圧し終わると先に進んできた。

チャド「MI!リルカ!無事か!」

雨竜「そつちは無事そうだね」

チャド達と雨竜達と合流した。

MI「チャド様、雨竜様そちらも無事で何よりです。」

リルカ「大丈夫そうね、一護は?」

MIは雨竜達の無事を確認しリルカは一護のことを聞いてくる。

織姫「それが一護君達とはまだ合流できていないんだよね。」

雨うる「そうなんですよね。」

織姫と雨は一護達とは合流していないことを言う。

ペツシエ「ネルの奴は無事だといいいんだがな」

ドンドチャツカ「そうでやんすね」

ペツシエとドンドチャツカはネルの安否を心配している。

・・・が肝心のネルがかつての姿とかつて以上の力を得ているとは

夢にも思っていないかった。

雨竜「ネルが一護の所に行っているなら心配はないが早めに残りも合流しよう。」

雨竜達は歩みを進める。

side海燕達

一方その頃十一刃エスパーダの一人第九十一刃ヌバー・エスパーダのアール・アルエリと

戦闘中の海燕達と言うと

海燕「喰らいやがれ!『破道の五十四 廃炎』!」

海燕はアール・アールに円盤状の炎を放ち焼きつくす破道を放った。

アール・アール「甘いな『反膜の障壁』」

アール・アールは攻撃の方向のみに反膜ネガシオンを張ることで攻撃を遮断した。

恋次「吠えろ!『蛇尾丸』!!」

恋次は中距離から蛇尾丸を伸ばしてアローニーロに攻撃した。

アローニーロは無言で虚刀を使って蛇尾丸を打ち払った。

アローニーロ「うつとしいな『虚術：魔水の死槍』」

アローニーロは海燕以外を一掃するべく即死クラスの激毒が混ざった水の槍を複数飛ばす術を行使した。

恋次「チツ！『破道の三十一 赤火砲』！」

恋次は火球を連射することで自身の攻撃を相殺する。

都「『破道の六十三 雷吼砲』！」

都は雷のエネルギー波を放つ破道で相殺した。

ルキア「『次の舞 白漣』！」

ルキアも巨大な凍気を一齐に雪崩のように放出して水の槍を一掃した。

アローニーロ「中々やるな、ではこれならどうだ。『虚術：滅殺の嵐』『王虚の閃光』」

アローニーロは触れた対象を粉々にする竜巻を恋次たちに自身の血で強化した虚閃を海燕に放った。

恋次「にやろう…！『金剛爆』！卍解！『狒狒王蛇尾丸』！」

『狒骨大砲』！！

恋次は竜巻に高威力の火球と卍解して竜巻に自身の霊圧を解放し、蛇尾丸の口からレーザーの様な霊圧の光弾を発射する技を放つ。

都「『破道の七十三 双蓮蒼火墜』！卍解『嵌合暗翳庭』『影帝滅壊』」

！

都は青い炎を放つ上級破道と卍解して影の濁流を竜巻に放った。

ルキア「『破道の九十一 千手皎天汰炮』『参の舞凍牙白刀』『次の舞

白漣』！！」

ルキアも竜巻に無数の光の矢を浴びせ冷気の斬撃を飛ばし冷気の雪崩を浴びせることで都、恋次の攻撃と合わさり竜巻を相殺した。

海燕「水天逆巻け『掬花』！『波濤絶海』！『零波紋突き』！」

海燕もまた王虚の閃光を何とかするべく始解して手首の回転で激

流の波を発生して王虚の閃光の勢いを緩めてそこに水流を纏った突きを放って相殺した。

アーロニーロ「ウム、コレハ術デナントカデキソウニナイナ。喰  
い尽くせ『喰虚』！」  
グロトネリア

アーロニーロは余りにも粘る海燕達に刀剣解放した。  
レスレクシオン  
下半身から巨大な蛸のような怪物が生えてきた。

海燕「ここからが本領発揮ってか？」

海燕達は気を引き締める。

アーロニーロ「さて、さっさと倒すか。『喰虚再現』」  
グロトネリア・リップロドクシオン

アーロニーロは下半身の蛸から炎や雷、触手と言った様々な攻撃を放ってきた。

海燕達はその多種多様な攻撃に徐々に押され始めた。

海燕「くそっ！なんだこの攻撃の数は！」

海燕はその攻撃の種類の高さに叫ぶ。

アーロニーロ「当たり前だ、俺の能力は喰らった虚の力を使えるのだから、そして俺が今まで喰った虚の数は33650体だ、果たしてこの数の虚の軍勢を相手をお前らにできるかな？」

アーロニーロは自身の能力を海燕達に明かしさらに攻撃を強める。

恋次「く、くそっ！これならどうだ!!」

恋次は狒狒王蛇尾丸を薙ぎ払ってアーロニーロを叩き潰そうとする。  
る。

アーロニーロ「『反膜の障壁』」  
バリア・ネガシオン

アーロニーロはその攻撃を防いだ。

都「『影刃断演』」

都は斬魄刀を影に差してアーロニーロの影から無数の影の刃を生やして攻撃する。

アーロニーロ「ぐっ！やるな。だが所詮は直線的な攻撃、その程度なら再生できる。」

即座にアーロニーロは虚刀の機能で再生した。

そして再び圧倒的な物量の攻撃を行った。

海燕「こうなったら…！卍解『天逆鉾』！」

海燕は卍解して流水をアーロニーロの攻撃にぶつけると攻撃が消えた。



アールニール「なに?」

アールニールは困惑した。なにせ攻撃を相殺とかが起こるわけではなく消滅したということでアールニールは驚愕した。

海燕「おっ?なんか驚いているがドンドン行くぜ!!」

海燕はしてやったりの顔を見ると流水を纏った三叉槍で攻撃を行っていく。

都、恋次、ルキアは遠距離から鬼道で補助する。

アールニール「...『超越せよ』」

アールニールは海燕の正解を危険と判断して虚刀を解放した。

アールニール「超越刃オーバーブレイド『肥沃な喰虚』!」

アールニールは超越刃をしてその姿を異形のものへと変化させた。

頭部は二つあり帰刃時の色合いの衣類?のようなものを身に纏っており下半身には蛸の触手が付いたローブのようなものがあり口の付いた触手が腰のあたりに装着している。

両足は裸足だが足の部分が手の付いた不気味なものだ。

ハッキリ言って今まで見てきたどの超越刃を上回る気味の悪いものだ。

アールニール「さあ、覚悟しろ」

二つの頭部から同時に言っつて再び波状攻撃を行った。

海燕「くっ!」

海燕は流水の結界を張って攻撃をかき消していく。

アールニール「...なるほどな、お前のその水には虚の力や存在を問答無用で浄化ができるようだが自分以上の力を持つ虚を浄化するには時間があるか効きにくいと見た。」

アールニールは海燕の防衛行動を見てその能力の本質を理解して浄化できない量の物量作戦に出た。

海燕「うおおおおお!!!」

恋次「どりやああああああ!!!」

都「やああああああ!!!」

ルキア「はあああああ!!!」

4人は死に物狂いで波状攻撃を抗った。

アールニーロ「これで終いだ。『強欲の暴食』」

アールニーロはピンク色の液体を洪水のようにぶちまける技を放った。

4人『うわあああああ!!!』

余りの物量攻撃にとうとう4人は飲み込まれてしまった。

アールニーロ「死んだか、とりあえず同胞たちに知らせるか。『認識同期』」

アールニーロは倒れ伏した海燕達の情報を十一刃含む同胞たちに共有してしまった。

sideロア

一方、ロアは夏梨と遊子を相手にお茶を楽しんでいた。

ロア「それで、一護のこともっと知りたいんだ」

夏梨「えつと、一兄いはよく出かけたりしてて家にいる時間は基本少ないんだ。」

遊子「そうなんだよね、偶に家族でイベントに遊びに行く時以外で私たちの相手ってホントに小さい時くらいだね。」

二人はロアの質問に素直に答えている。

遊子「あっ！でも最近は従兄妹の海燕さん達が遊んでくれるんだ！」

ロア「従兄妹？誰それ？」

夏梨「えつと、馬鹿親父側の家の人達で都さんっていう綺麗な人と結婚していて色々話したり遊んでくれて楽しいんですよ。あっ！そういうば遊子が写真をペンダントにしていたっけ。」

ロア「そうなの？見せてよ。」

ロアが遊子に見せてほしいと言うと遊子は素直に見せてくれた。

遊子「うん！これがそうだよ。」

遊子は首にかけていたペンダントの写真を見せた。

ロア「どれどれ... え？」

ロアは写真を見るとその写真にかつて雑用にボロボロにされていた海燕達の姿が映っておりロアは硬直してしまった。

ロア（えっ？えっ？嘘でしょ？この二人ってあの時の雄と雌だよな

？てことはちよつとまずい？)

もし海燕達をノリで殺しかけたことがバレると嫌われてしまうと感じたロアが雑用達に殺気を飛ばしながらこのことを思念で伝えた。

ロア(分かつているね?)

トリス・凍夜(勿論でございます!!)

二人は内心で敬礼した。

夏梨「そう言えば、なんか遠くで凄いい音が鳴っているけど大丈夫なの？」

夏梨は先ほどから遠くで鳴っているアーロニーロと海燕達の戦闘音について聞いて聞いている。

ロア「だ、大丈夫だよ！偶に知り合いの実験で建物の一画がぶつとんだりしているけどここは基本平気だよ!!」

ロアは内心で焦りながらなんとか誤魔化そうとするが

アーロニーロの『認識同期』で海燕達がボロボロになって倒れ伏している情報が頭に入ってきてきてロアはこう思った。

ロア(おいコラ、馬鹿ニーロ何してくれてんの?)

ロアは内心でアーロニーロをどうシバこうか考えていると花梨と遊子が突如泣き始めた。

ロア「えっ?えっ?なに!どうしたの!?!」

ロアは急いで二人を泣きやまそうとすると二人は泣いている理由を言った。

遊子「だって...だって...海燕さんたちが...」

夏梨「なんか死にかけている場面が頭に流れ込んでくるんだよお...」

アーロニーロの認識同期で二人も同胞認定されておりそれで情報が共有されてしまっていた。

ロア(：よしアーロニーロの奴をぶつ飛ばしてこよつと。)ゴゴゴゴゴゴゴツ!!!

ロアは尋常じゃない殺気と霊圧を花梨と遊子に悪影響を与えないようにしながら放っている。

トリス・凍夜(いやホント何やってんですかああああ!!!)

雑用二人はアールローのやらかしに内心で冷や汗を流しまくっていた。

ロア「大丈夫だよ、二人の従兄妹の人達は死んでないから安心してね！お義姉ちゃん<sup>ねえ</sup>が助けてくるから心配しないでね！！」

夏梨「ぐすつ…！ホント？ロア姉え…」

遊子「約束だよ？ロアお姉ちゃん…」

ロアは二人をあやしなから準備を即終え急いでいこうとする。

ハリベル「ロア、そんなに急いでどうしたんだ？」

ロア「ちよつと、馬鹿アールのせいで二人が泣いちゃったからシバいてくるね。」

ロアは部屋に入って来たハリベルの質問に対しすぐに返答して出て行った。

ハリベル「… もしや、アールローの共有にあの二人も入っていたのか？もしそうなら後で私も参加するか。」

ハリベルはまだ多少ぐずっている二人をあやしてあげた。

side 海燕達

海燕「ぐうう!!く、くそっ！お、お前ら… 無事か？」

なんとか死なずに立とうとする海燕は恋次たちに言う、

恋次「な、なんとか無事つす。か、海燕隊長。」

恋次もまた立ち上がろうとする。

都「も… 問題ないわ、早く姪達を助けに行かないと。」

都も必死に立ち上がろうとする。

ルキア「はあ… はあ… 私も問題ないです。」

ルキアも袖白雪を杖代わりにして立ち上がろうとする。

アールロー「… うん？なんだまだ生きていたのか？存外しぶといな。まあいいか、さっさと倒してしまえば済むことだ。」

アールローは再び波状攻撃を仕掛けようと霊圧を高める。

海燕（く、くそっ！このままじゃ… 死ぬ！）

海燕は明確に死を予感するレベルまでに追い詰められていた。

少しでもなんとかしようと思性で瞬歩を使い恋次たちの前まで移動して結界を張って耐えようとする。

アールロニーロ「フッフ、ナンダ」「悪あがきか？まあいい死ぬ  
グロトネリア・コリユシア  
『強欲の暴食』」

アールロニーロは再びピンク色の液体を洪水のようにぶちまける技  
を放った。

海燕・都（つーごめん（なさい）遊子、夏梨）

海燕と都の二人は姪二人に内心で謝った。

ロア「ちよくと、馬鹿ニーロく覚悟はいいかしら？」

アールロニーロの攻撃はロアの力でかき消された。

アールロニーロ「はあ!!お前いきなりなんだ!!なんで邪魔をする!!」

アールロニーロはロアが邪魔してくる理由が分からずに文句を言う。

ロア「邪魔するに決まってるでしょ!!あんたがその二人を死なせか  
けたせいで義妹達いもづこが泣いちゃったでしょ何してくれんのよ!!」

ロアはアールロニーロが海燕と都を死なせかけたせいで花梨と遊子  
が泣いたことを言った。

海燕「おいっ！てめえ言うに事欠いて俺達の可愛い従妹達がお前の  
妹だと！冗談も大概にしやがれ！」

海燕はボロボロの状態だろうがお構いなしにロアに文句を言った。

ロア「だって一護の番になるから間違っていないもん。」

ロアは何言ってるんだこいつと言った感じで海燕の文句に返した。

ルキア「海燕殿！叫ばないでください！治療が遅れます。」

ルキアは結界が張られた瞬間から海燕達に回道を施していたが  
中々時間が足りずにいたがロアの出現で時間が少なからずに確保さ  
れたので治療が一気に進んだ。

海燕「よしっ！これであいつをぶっ飛ばせる！」

ロア「えく？あんたさつきまでボロボロにされていたのに大丈夫く  
？」

海燕「るっさいわ!!お前の手を借りるつもりは毛頭ない！」

ロア「じゃあ私の好きに戦わせてもらうね。」

アールロニーロ「好きに戦わせてもらおうじゃねえだろ!!お前はこっち  
側だろ!!」

アールロニーロはロアの死神 side につく発言にツツコミを入れ

た。

ロア「大丈夫大丈夫、殺しはしないから。ただちよつと再起不能にするだけだから。」

ロアは輝く笑顔で物騒なことを言う。

アーロニーロ「そのどろろが大丈夫なんだよ!?!」

アーロニーロはこの状況を脱するために死に物狂いになった。

ロア「さあ!覚悟しなさい!」

アーロ「んな、覚悟」「ハナイ!!」

ロアは虚刀を抜いて響転ソニートで加速して距離を詰めて斬りかかっていた。

アーロ「ぐっ!」

アーロニーロは切り裂かれてダメージを負うが即座に再生した。

海燕「卍解!『天逆鉾』!」

海燕は解除された卍解を再度解放して浄水を纏わせて刺突を見舞っていく。

アーロ「くっそ!ロアがそっちにいるせいでやり難い!!」

ロア「ちよつと!あんたに呼び捨てにされるのなんか嫌なんだけど!!」

ロアは呼び捨てにされて斬撃の嵐を見舞った。

海燕「喰らえ!『波濤螺旋撃』!!」

海燕はドリルのように回転する水を纏わせて瞬歩で距離を詰めて刺突を見舞った。

アーロ「ごはあ!!」

アーロニーロはぶっ飛ばされ壁に叩きつけられた。

傷は再生し、アーロニーロは何とか立ち上がった。

アーロ「ぜはあ...ぜはあ...なんで俺こんなに追い詰められているんだ?」

ロア「それはあんたが義妹達を泣かせたからよ。」

アーロニーロは現実逃避をするがロアがバツサリ切り捨てた。

海燕「だからあの二人は俺達の従妹であつてお前の妹じゃねえんだよ!」

海燕はロアのセリフにツッコんだ。

ロア「はいはい、それは後でね。『アビューツ虚術：拘束』」

ロアは虚術でアローロニーロを縛ると転移でどっかに行った。

海燕「おいこら！逃げるじゃねえ!!」

海燕は激昂しているがもうすでにロア達は居ない。

都「海燕、いったん連絡を取って回復を優先しましょう。」

都は海燕を落ち着かせて合流を提案する。

海燕「…仕方がねえか。」

海燕も渋々納得して連絡を取った。

sideロア・ハリベル

アローロニーロを連れ戻ったロアは花梨と遊子の相手をフラッシュオン従属官と雑用達に任せてアローロニーロをハリベルと一緒にシバいている。

ハリベル「…『オーラ・アズール波蒼砲』」

ハリベルは斬魄刀に霊圧を溜めてそれを打ち出す技をアローロニーロに放った。

アローロ「ごふう!…ちよ、ちよと待て!?ロアはまだ…わかりたくないが分かるがなぜお前まで!!」

アローロニーロはなんでお前まで!?と言う反応をするのでハリベルが答える。

ハリベル「…お前のやらかしであの子たちを泣かせたからだ。」

アローロ「お前もかよ!」

ハリベルの返答に再びアローロニーロが突っ込んだ。

ロア「さあ〜馬鹿ニーロ、覚悟しなさい!!」

ロアはそう言って霊圧を高め文字通りとれる攻撃手段全てをアローロニーロに叩き込んで3日程アローロニーロは寝たきりの状態になった。

59話：「・・・いや違うか。」

side 雨竜達

雨竜達は連絡機から海燕達の連絡を受信して一旦そちらへ合流した。

雨竜「大丈夫でしたか？」

雨竜は海燕達にそう言った。

海燕「・・・おう、気に入らないがな。」

海燕は不機嫌な態度でそう言う。

チャド「・・・どうして、そんなに不機嫌なんですか？」

チャドは不機嫌な理由を聞く。

都「それはあのロアって破面アランカルが夏梨と遊子達の事を義妹いせうと呼びびしていたせいかと」

3人娘『詳しく』

都の言った理由に3人娘が食いついた。

都はそのことを言う

織姫「フッフ、あの女言うに事欠いてナニツテイルノカナ？」

雨「そうですね、私たちのほうが長く二人をキズナを紡いできたんです。そんなぽつと出程度じゃこの時間の長さは超えられません。」

リルカ「随分と調子に乗ってるじゃない、覚悟していなさいよ。」

3人娘は目からハイライトを消しており殺気を高めている。

MI「はいはい、3人とも落ち着いてください。とりあえず食事をして休息を取りましょう。」

MIは3人娘を落ち着かせてキャンプセットを設置していた。

雨竜「そう言えば一護とはまだ合流できていなかったな。早めに合流しておきたいな。」

雨竜はそう言って連絡機を取り出した。

一護『おう、雨竜か？無事のようにだな。』

一護の声が聞こえてきた。

雨竜「まあ、君なら無事なのはわかっていたが今どこだ？」

雨竜は何処にいるか聞いた。



一護「うくん？どこだここ？」

雨竜「こつちが聞いているんだよ。」

一護の暢気な発言に雨竜は若干切れ気味に言った。

一護「冗談だから冗談、実は俺達は先に進んでいてそっちには行けそうにないから後で合流しようか。」

雨竜「そうか、分かった。」

雨竜はそう言っただけで連絡を終えて体力の回復を優先した。

side 一護・のえる・ネル

一護は雨竜との連絡を終えると結界を張りその中でキャンプセットで休憩を取っていた。

一護「雨竜との連絡終わったぞ〜」

一護は暢気な声を上げてネルとのえるに言う。

のえる「一護さん、もうじきカレーが出来ますよ。」

のえるは時短調理器具を使ってカレーを煮込んでいる。

ネル「美味しそうだね〜」

ネルはカレーの匂いを嗅いでいる。

一護「とりあえず、どこ行けばいいんだ？」

一護はここの構造を全く知らないので結構その場しのぎでいいていた。

ネル「私の知ってる範囲でいいなら案内できるよ？」

一護「おっ！それはありがたいな！頼むよネル」

一護はネルに微笑みながら頼んだ。

ネル「わあ〜いい！一護に頼られたあ〜」

ネルは大喜びして一護に抱き着いた。

のえる「ネルちゃん！一護さんに抱き着くのはやめてください！」

ネルが一護に抱き着いたことにのえるは抗議するが

一護「？別にネルだしいいだろ？」

一護からすると子供のころからギョクに抱き着かれ続けたので慣れていたのでネルにそう言った思惑がないので突き放す必要を感じないのだ。

のえる「うううううう!!!」

のえるは呻き声をあげた。

一護「おっ！もうすぐ煮込み終わりそうだな。」

一護は鍋を見てもうすぐできると分かったので皿などをテーブルに置いていった。

そしてカレーなどをよそって食事を用意し終わった。

一護「そんじや食うか」

ネル・のえる「はい（うん！）」

一護達はそう言って食事を始めた。

side 破面<sup>アランカル</sup>

ロア「二人ともく終わったよ〜！」

ロアはアーロニーロをハリベルと一緒にシバキ終わると夏梨と遊子の相手に戻った。

ロア「そろそろご飯にする？」

夏梨「ロア姉え… うん」

遊子「ロアお姉ちゃん… うん、わかった。」

二人はロアの言葉と一緒に食事を取る。

レン「ではこちらが本日のメニューとなります。」

レンはそう言ってテーブルに食事を乗せていく。

女性陣『いただきます。』

全員が食事を開始して虚<sup>ウエコムンド</sup>圏は一時落ち着いた。

side 雨竜達

雨竜達は食事を終えるとすぐさま道を進んだ。

雨竜「さて、全員が全開とはいかないけど7，8割ほど回復できたようだね。」

チャド「まあ、俺と雨竜はダメージらしいダメージを貰っていないから平気ではあるが海燕さん達がな。」

チャドも海燕達のダメージの状態を確認して現状を把握している。

海燕「… すまねえ、あの十一<sup>エスパーダ</sup>刃の攻撃が想定以上に受けちまってまだ回復しきれてねえんだわ。一応、回復しきれないダメージ量ではないんだけどな。」

海燕はチャドの発言に返答した。

織姫「すみません、私の能力だと傷とかは何でも回復できるんですけど霊圧までは回復に時間が掛かりんです。」

織姫は自身の能力の欠点を言って謝っている。

都「いえ、大丈夫です、むしろ回道では治らない欠損レベルの怪我さえ直してしまう織姫さんの能力は凄いですね。」

都は織姫の謝罪に対して大丈夫だと言いむしろその能力を称賛した。

恋次「とりあえず、連れ去られた一護の妹さんたちの所に急ごうぜ。」

恋次は先を急ごうと言う。

ルキア「だが急ごうにもどこにおる？」

ルキアは場所の予測をしようにもここの構造がよく分からないので困っている。

MI「そう言えばペツシエさん達は何か隠し事をしている動作をしていましたけどどうしたんです？」

ペツシエ・ドンドチャツカ「ギクツ！」

ペツシエ達、二人の破面アランカルはMIの言葉にバレバレの反応した。

雨竜「・・・よしっ！今すぐ言え」

チャド「大人しく白状した方が身のためだと思っぞ？」

雨竜は弓をチャドは黒腕と白腕を展開して二人に制圧して脅した。

ペツシエ「待て待て！私たちが何を隠しているというんだ!!」

ドンドチャツカ「そうでやんすくおいらたちは何も隠してないでやんすく」

二人は急いで弁解している。

MI「では何故隠し事をしている者の動作を先ほどからしているのですか？」

MIは理論然とした態度でペツシエに言う。

ペツシエ「い、いや〜いったい何のことでしょうか・・・」

ペツシエは未だに誤魔化そうとするので雨竜は神聖滅ハイリツヒ・ブファイ矢を生成し弓につがえる。

雨竜「・・・言え、今すぐに」

痺れを切らした雨竜は殺気を放つ。

ペツシエ「了解です！」

ペツシエは観念して自分たちの過去を言う。

（過去話中）

ペツシエ「…と云うことでして今は子供になってしまったネリエ  
ル様をお守りするのが今の我々の使命ですので連中とは無関係です。  
そしてこの構造はそれなりに知っていますので多少は案内できま  
す。」

ペツシエは話し終わると雨竜達は揃って頭を抱えた。

雨竜「…だからネルだけちゃんとした人型の破面アランカルだったのか。」

雨竜はネルの容姿が普通の人間だった理由が分かったのだがそれ  
はそれとしてこいつらの扱いをどうすればいいかわからなかった。

チャド「…とりあえず、こいつらは最初から敵ではなかったんだ  
から別に処断とかは必要はないんじゃないか？」

チャドはペツシエ達の扱いは今まで通りにすればいいと言った。

織姫「…後でネルちゃんを思いつき構ってあげようか。」

雨うる「ですね」リルカ「そうですね」MI「ええ」

織姫の言葉に嫁ーズは同意しているが肝心のネルが元の姿に戻つ  
て一護に甘えているなど露にも思っていない。

雨竜「まあ、それで第0ゼロ・エス・バード十一刃の場所は何処かわかるかい？」

ペツシエ「それが、私たちが居た頃はあのロアアランカルって破面は居なかつ  
たので場所はわからなくてですね…」

ペツシエは申し訳なきように言った。

雨竜「じゃあ、あの黒髪の破面アランカル…ウルキオラの場所に行けば分か  
るかもしれないが…」

雨竜はウルキオラがをロアに次ぐ実力を保持していると考えそい  
つを倒せたらロアが出てくると考えている。

チャド「…そもそもあの女は一護にベツタリだからな。時間が経  
過すればどの道二人は保護できるのでは？」

一同『…』

チャドの発言に全員が黙った。

「???」 「やあやあ、侵入者の諸君ごきげんよう。」

突如前方から男の声が聞こえてくる。

雨竜「…何者だ？」

ペツシエ「む？奴は確か破面アランカルで科学者をやっている変わり者の…ウロボロス！」

「???」 ↓ザエルアポロ「僕は第8十刃オクターバ・エスパーダのザエルアポロだよ。あといきなり他者の名前を間違える上に君のほうがよくぼど変わった姿をしているじゃないか。」

眼鏡のような形状の仮面の名残を付けた優男、ザエルアポロはペツシエの発言に返す。

ペツシエ「この姿になったのは貴様のせいだろ！」

ドンドチャツカ「そうでやんす〜！」

ザエルアポロ「は？…ああ、そういうことか。貴様らはあの時の…あの小娘は一緒ではないのか？せっかくあの現象に興味があったから来ているのなら被検体モルモットになつてもらおうかと思ってね。」  
ザエルアポロは本性であるマッドサイエンティストの部分を隠すことなく出た発言をしている。

織姫「うわあ…ロリコンなんだあの破面アランカル…」

雨「最低ですね…」

リルカ「変態ね…」

MI「倫理的に許されない方ですね…」

ザエルアポロ「なぜ、そんな風に言われたいいけないんだ？」

ザエルアポロは嫁ーズのボロカスに言ってくるので疑問に思う。

ザエルアポロ「まあ、いい君たちを倒して被検体モルモットになつてもらおうか。」

ザエルアポロはそう言つて虚刀を抜いた。

海燕「理由はなんであれ、あいつを倒して姪達を救助するぞ。」

海燕達は武器を展開して戦闘を開始した。

side 一護

一護達はネルの案内で道を進んでいると雨竜達の霊圧の高まりを感じた。

一護「… うん？雨竜達は戦闘中のようだな。この霊圧の高さは相手は十一刃<sup>エスパーダ</sup>… いや違うか。」

一護が相対した十一刃はロア、ウルキオラ、ヤミー、グリムジョー、ハリベル、スタークと言った十一刃の中でもトップクラスの實力者のみとしか会っていないなかったので雨竜達の戦っている相手が十一刃ではないと即座に把握した。

すると、前方から覚えのある霊圧を感じた。

一護「… のえる、ネル少し離れてろ。」

ネル・のえる『わかった（りました）』

二人は素直に一護から離れた。

グリムジョー「よお、ようやく決着を付けられるな。」

水色の髪の男の破面<sup>アランカル</sup>、グリムジョー・ジャガージャックが現れた。

一護「… ああ、そうだな。」

一護は二刀を抜いて構える。

グリムジョーもまた虚刀を構える。

両者は歩法を使って加速して激突した。

side 雨竜達

雨竜達は武器を展開してザエルアポロと戦闘を開始したがものの5分ほどで制圧が完了した。

雨竜「… 十一刃<sup>エスパーダ</sup>を名乗ったのに弱すぎる？」

雨竜は簡単に制圧できたことに疑問を浮かべる。

チャド「… もしやこいつは影武者か何かなのではないか？」

チャドもヤミーと抗戦した経験からこのザエルアポロは偽物と断定した。

MI「とりあえず、注意しながら進みましょう。」

MIは注意して進もうと言うと全員が頷いて進んだ。

???「… やれやれ、少しでも情報を引き出そうとしたのに存外やるじゃないか。」

物陰に隠れていた本物のザエルアポロは雨竜が進んだのを確認すると出てきてそう呟いた。

## 60話：「逃がすか！」

side 雨竜達

雨竜達は影武者アポロを制圧し終え先に進むと前方から異常な霊圧を感じて雨竜達は即座に回避した。

そして避けると何かが高速で飛んできて後方で大爆発した。

雨竜「なんだ!？」

雨竜は今しがた起こった爆発の発生源に向かって叫ぶ。

???「よお、ようやくてめえをぶっ潰せるな。」

すると前方からよく知った男の声が聞こえてきた。

チャド「・・・ヤミーか。」

そこには第10十一刃<sup>ディエノ・エスパーダ</sup>ヤミー・リエルゴがいた。

ヤミー「おいつ!てめえ!さっさとこの俺を戦えや!」

ヤミーはそう言っ<sup>ソニック</sup>て響転で距離を詰めチャドに殴り掛かって壁をぶっ壊しながら外に出た。

雨竜「・・・っ!織姫さん!リルカ!チャドの援護を!」

織姫・リルカ『了解!』

織姫とリルカは雨竜の指示でチャドの援護に向かった。

雨竜達はチャドのことをリルカ達に任せ先に進んだ。

先に進んでいくと再びザエルアポロが現れた。

雨竜「・・・やっぱりか。」

雨竜は弓を展開して構える。

海燕「雨竜、ここは俺達に任せてくれ。」

海燕はそう言っ<sup>うるる</sup>て刀を抜いて先に行けと言う。

雨竜「・・・分かりました。雨、MI行くよ。」

雨「分かりました、MI」

MI「了解しました。」

雨竜は雨とMIを連れて先に進んだ。

海燕「いいのか?お前ら?」

ペツシエ「問題ない、奴には借りがあるからな。」

ペツシエはそう言いながら究極<sup>ウルティマ</sup>を抜いた。

ドンドチャツカ「そうでやんすく」

ドンドチャツカも棍棒を口から出した。

雨竜達は道を進んでいくと覚えのある気配を感じた。

雨竜「…この気配は。」

雨竜は弓を展開して魂を切り裂くものを抜いた。

ウルキオラ「…まさか生きていたとはな。そしてその殺気、俺を倒す気であるな。まあ貴様からするとそれが正しいか。」

ウルキオラはそう言つて虚刀を抜いた。

雨竜「雨、M I！サポートを頼む!!」

雨「分かりました！」M I「了解です。」

雨は拳に手甲を装着し、M Iは刀を抜いて構え雨竜は飛廉脚で距離を詰めて魂を切り裂くものでウルキオラに斬りかかりウルキオラもまた虚刀で受け止める。

受け止めた際の余波で周囲が吹き飛ぶ。

sideチャド達

ヤミー「オラオラ!!」

ヤミーは鋼皮で強化された拳のラツシュを放った。

チャド「うおおおおお!!!」

チャドもまた霊圧を纏わせて強化した拳で迎え撃つ。

ドカンッ！ドカンッ！ドカンッ！ドガガガガガ!!!

高速移動しながら某戦闘民族漫画みたいな殴り合いが発生した。

そして数分間の殴り合いを終え両者少し距離を取った。

ヤミー「はあ…はあ…やるじゃねえか、この俺様が認めた男は

お前の他にもう一人しかいねえっていうのによお。」

チャド「はあ…はあ…それはありがたいな。」

互いに息を切らせながらヤミーはチャドを認めるような発言をする。

ヤミー「…いいぜ、てめえにはこいつで相手してやるよ。ブチ切れる『憤獣』!!」

ヤミーは斬魄刀を抜いて刀剣解放を行った。



解号を言うと刃が、爆発して赤いオーラを出しながら肥大化していく。

帰刃が完了するとその姿は象に似た複数の足と長い尾を生やした、百足と蠍が混ざったような下半身の巨人の姿となる。この際、下半身に赤い前掛けをしている。尻尾の先端はハンマーのようになっており、肘や背中から黒い杭のようなものを生やしている。頭の突起は黒くなり、つながったように並んでいる。

ヤミー「行くぜ!!」

ヤミーは叫びながら赤黒い虚閃<sup>セロ</sup>を連射していく。

チャド「くっ!」

チャドはその身に鎧を展開して虚閃<sup>セロ</sup>を防御していく。

リルカ「はあ!」

リルカはラビットアーマーを身に纏って完現術<sup>クセル</sup>：加速<sup>ル</sup>で急いで追いついてきてヤミーに蹴りこむ。

ヤミーはその蹴りを鋼皮<sup>イェロ</sup>のみで受けきる。

ヤミー「てめえ!!折角の決着を邪魔すんじゃねえ!!」

ヤミーは怒りながらさらに力を上げながらリルカとチャドを同時に攻撃する。

チャド「させるか!」

チャドは完現術<sup>クセル</sup>：加速<sup>ル</sup>でリルカの前に移動して結界を張って防いだが攻撃の衝撃が想像以上に高かったため二人は遠くまでぶっ飛ばされた。

チャド「うおっ!」リルカ「きやあ!」

チャドとリルカは空中で体勢を立て直して着地した。

チャド「くっ!なんてパワーだ。」

リルカ「ホントよ!織姫の回復があるけど織姫の速度って私たちの中でも下から数えた方が速いからそれまで生き残らないといけないのは面倒よ。」

リルカは愚痴を言いながらその身に纏っている鎧をラビットドラゴンに変化させた。

ヤミー「へえ、そっちの奴はまだ理解できるがお前も中々頑丈じゃ

ねえか。」

ヤミーは高速でノシノシと移動してきた。

織姫「『孤天斬盾・6連』！」

織姫は防御不可の跳ぶ斬撃を6つ飛ばしてヤミーの右腕を切り裂いた。

ヤミー「ぐはあ！てめえやるじゃねえか！けどなあめえんだよ！

『アビュット虚術：豪炎波』!!』

ヤミーは足元から豪炎の波を発生してチャド達に放った。

チャドは結界を張りリルカと織姫もその結界の中に入り豪炎の波を防いだ。

ヤミー「おらあ!! 『アビュット虚術：火星』!!』

ヤミーはかつて使った火星をマルチ超える規模の大火球を落としてきた。

チャド「これは… マズイ！」

リルカ「ちよっ！流石にこの規模は一護や雨竜並みの破壊力が必要じゃない!!』

織姫「『双天帰盾』！ 『三天結盾』！」

織姫は回復用に結界と防御用の結界を張りチャドもまた結界を張り耐えきる構えを取った。

ドガアアアアアアアア!!!

火星が落ち凄まじい衝撃が発生した。

side 海燕達

海燕達はザエルアポロと戦闘を行っている。

ペツシエ「ドンドチャツカ！最初から飛ばしていくぞ！アレをやる！」

ドンドチャツカ「アレでやんすね、分かったでやんす！」

ペツシエとドンドチャツカは合図を出しペツシエがドンドチャツカに乗りペツシエが究極ウルティマを構えてドンドチャツカは口から砲台のようなものを発生させた。

ペツシエ・ドンドチャツカ『セロ・シンクレティコ融合虚閃』

二人は虚閃を同時に放ち、二つの虚閃を融合させてより威力を高めてザエルアポロを攻撃した。

ザエルアポロ「っ！」

ドガアアアン!!

着弾して凄まじい衝撃が走り大爆発を起こした。

side 一護達

一護はグリムジョーと戦闘中だ。

グリムジョー「おらあ!!」

グリムジョーは黒く変色した爪で貫手を放っていく。

一護もまた冷静に二刀を操り攻撃を捌いていく。

一護「はあ！」

一護は刀を一閃して剣圧を飛ばした。

グリムジョー「喰らうか！」

グリムジョーは響転ソニードで回避した。

一護「逃がすか！」

一護もまた神通脚しんつうぎやくで距離を詰めて切り裂く。

グリムジョー「ぐっ！」

ダメージは切り傷程度なら即座に再生する。

グリムジョー「喰らいな! 『虚閃』」

グリムジョーは虚閃セロを連射する。

一護「『縛道の三十九 円開扇』」

一護は円型の盾を展開して虚閃セロを防いだ。

グリムジョー「チツ! 軋れ! 『豹王』!!」

グリムジョーは舌打ちしながら帰刃レスレクシオンした。

一護「はあ... 卍解『万華鏡・天鎖斬月』」

一護もまたため息を吐きながら二刀を合わせ卍解した。

両者は高速移動しながら斬撃を飛ばしながら牽制する。

一護は千本桜景義と灰猫の波状攻撃で動きを止める。

一護「『月牙天衝・追影』」

一護はグリムジョーの動きを止めると月牙天衝を放ってそれに月

牙天衝をぶつけて威力を底上げした技を使う。

グリムジョー「くっ! 『黒虚閃』」

グリムジョーは黒い虚閃セロを連射しまくり一護の攻撃を相殺した。

一護「まだまだ!」

一護は顔をかきむしる動作をしながら虚の霊圧を溜めると虚化した。

更に速度を上げグリムジョーの周囲に分身を作りながら翻弄しながら黒虚閃を連射しまくる。

グリムジョー「くっそ!? 『王虚の閃光』!」

グリムジョーは血を混ぜて強化した虚閃を360度回転しながら放って一護の攻撃を何とか相殺する。

一護は更に穿月に変化させて周囲に黒い神聖滅矢を生成、属性を付与して一斉掃射した。

一護「『苦悶の環』」

更にグリムジョーの周囲を取り囲むように無数の神聖弓を生成。全方位から神聖滅矢を連射し集中砲火を叩き込む技を使い何が何でも仕留める勢いで攻撃する。

グリムジョーもまた『豹王の爪』を周囲に放ちまくり矢を一掃した。

グリムジョー「はあ…はあ…畜生お…こうなりや『超越せよ』!」

虚刀を抜いて超越刃を発動した。

グリムジョー「超越刃『破壊豹王』!!」

超越刃を解放したグリムジョーの姿は帰刃の時の姿から髪の毛が白くなり、脚が豹らしくなり、尾が二股・上半身裸と、野性味が増した姿になった。

グリムジョー「『豹王の爪』」

グリムジョーは同じ技を放つが先ほどまでてや比べ物にならないほどの威力の斬撃を飛ばしてきた。

一護「ちっ!」

一護も月牙天衝を連射して相殺を試みるが威力が足りずに斬撃がこちらに迫ってくる。

一護は静動血装と鋼皮にその他諸々の強化能力で全身強化して攻撃を受けてぶっ飛ばされるがダメージはないのですぐさま体勢を整えてすぐに距離を詰め直した。

グリムジョー「ちっ！『グラン・レイ・ゼロ・オスキュラス王虚の黒閃光』』  
血を混ぜた黒い虚閃セロを一護に放った。

一護「『不知火』』」

一護は炎を纏わせた斬撃を放って相殺した。

グリムジョー「まだまだあ!!」

爪に霊圧を纏わせて格闘戦を仕掛けていく。

一護「かかって来い！気が済むまで相手してやる!!」

一護もまた剣術で対処した。

一護とグリムジョーの戦いが激化していたころ

セスタ・エスパルダ  
フランチオン第6十一刃の従属官ルピ・アンテノールは藍染の指示で名ばかりの警備をしていると突如凄まじい霊圧を感じた。

ルピ「なんだよ、また侵入者かよ...」

ルピは呆れながら虚刀を抜こうとしたがいきなり上半身が吹き飛んだ。

ルピ「...え？」

ルピは自分が死んだことに気が付かずに絶命した。

実は一護とグリムジョーが戦っていた時に一護がグリムジョーの相殺した攻撃の内の一つが相殺しきれずに弾き飛ばされてルピに直撃してしまった。

そして少しすると何人かの人影が来た、

剣八「なんだよ、少しは他ごたえのあるやつがいると思ったら只の死体じゃねえか。」

剣八は面白そうな相手だと思っていたのに単なる死体にがっかりした。

マユリ「私としては歓迎以外の何物でもないヨ。回収しておけネム、欠片も残さずにネ。」

ネム「了解しました、マユリ様。」

相も変わらずマユリは喜んでおりネムに回収するように言いネムもマユリの指示を受諾して回収作業を行っている。

烈「とりあえず、先に進みましょうか。総隊長のご命令ですので。」  
卯ノ花烈は総隊長からの指令を実行するために問題児二人を纏め

役として先に進むように言い。

茜雫「待っててね！夏梨、遊子！」

茜雫に至っては私情全開だ。

ラスノーチエス 3人の隊長と副隊長そして異分子イレギュラーの死神と後ろで蠢く謎の影が  
虚夜宮に向かって進軍する。

## 61話：「今！戦闘中!!」

side 茜雫たち

茜雫達は虚夜宮ラスノーチエスに向かって爆走していた。

茜雫「あくもおく遠い!!マユリく距離どのくらい?」

茜雫は走りながらマユリに距離を聞いている。

マユリ「やかましいヨ、あの建造物との距離はまだまだあるヨ、そうだねえ最低でも100km以上はあるかな。瞬歩の連続使用でも半刻以上はかかるヨ。」

マユリは茜雫に嫌味を言いつつもきちんと虚夜宮までの距離を言う。

剣八「チツ!どうやらお楽しみはまだまだ先のようだな。」

剣八は舌打ちしながら文句を言った。

卯ノ花「では急ぎましようか。」

この中でまともそうに見える烈ではあるが内心では早く破面アラシカルを切りたいと思っている。

ちなみにこのメンツだけなのは他は後ろで準備を整えて虚圏ウエコムンダ抛点周りを整備しているからだ。

side 海燕達

融合虚閃で起こった爆発は少しすると収まった。

そこにはその姿を変化させたザエルアポロがいた。

ザエル「啜れ『邪淫妃』」

帰刃したザエルは首から下が触手に覆われてドレスのような服に変化し、背中に四本の羽が生える。眼鏡が飾りに変化し、道化師のメイクのような仮面紋が現れた姿になった。

ザエル「全く、危ないじゃないか。それをまともに受けていたら木っ端微塵になっていたね。」

ザエルは暢気に技の威力を計っている。

海燕「よそ見してんじゃねえぞ!」

海燕は始解してザエルに刺突を放っていく。

ザエル「よそ見はしてないさ。」

ザエルはそう言って普段は服の中に収納してある巨人2体を操って海燕の相手をさせる。

海燕「チツ！面倒くせえな！」

海燕は巨人の攻撃を槍で打ち払いながらザエルにどう攻め込むか考えている。

恋次「喰らえ！『破道の三十一 赤火砲』！吠えろ！『蛇尾丸』!!」

恋次は火の玉を放ちながら蛇腹剣を伸ばして攻撃した。

ザエル「ふっ！」

ザエルは虚刀で受け流しながら火の玉を虚閃で相殺した。

ルキア「『破道の三十三 蒼火墜』！」

ルキアは遠距離から鬼道で補助した。

ザエル「『蒼火墜』」

ザエルはルキアの放った破道をそのまま放って相殺した。

ルキア「なに!？」

恋次「…伊達に十一刃<sup>エスバーダ</sup>つてか？あの女と同じようなことしやがって。」

恋次はかつてロアが『飛竜撃賊震天雷砲』を見よう見真似で使ったことを思い出していた。

ザエル「僕を彼女と同じように扱ってくれるのは嬉しいけど彼女のととはちよつと違うかな。」

ザエルは大仰な役者のような動作をしながらそう言う。

ザエル「先に言っておくよ。僕の力を模倣などのちやつちいものと一緒にしないでくれ。」

ザエルはそう言って響<sup>ソニック</sup>転で距離を詰めて計算したような角度から虚刀と触手を振るう。

恋次「ちっ！なんだ！俺達の動きに合わせたような感じは!!？」

恋次は明らかに自分たちの回避しようとする先や防御をすり抜けるような機動で虚刀と触手が振るわれることに驚愕している。

ルキア・都「『破道の七十三 双蓮蒼火墜』！」

ルキアと都は蒼火墜上位版を放って恋次をザエルから離そうとする。



ザエル「『虚術：豪炎波』」  
アビユーツ リアマボテローサ

ザエルはヤミーに匹敵するほどの炎の術を行使した。  
ルキアと都の二人の放った蒼炎をかき消した。

海燕「おらああああ!!!」

海燕は力づくで巨人を打倒した。

ザエル「おや？もう倒したのかい？流石は隊長だ。」

ザエルは素直に海燕の実力を称賛した。

海燕「お前に褒められても嬉しくねえよ！」

海燕はそう言つて流水で攻撃する。

ザエル「やれやれ、うるさいね。『黒虚閃』」  
セロ・オスキュラス

触手から黒い虚閃を放つて海燕の攻撃を相殺して海燕に攻撃が迫る。

海燕は瞬歩で回避した。

恋次「卍解！『狒狒王蛇尾丸』！『狒骨大砲』!!」  
ひこつたいほう

都「卍解『嵌合暗翳庭』『影刃断演』」

恋次と都は卍解して恋次は高威力の大技で都は恋次の放った技の隙を補うように技を放った。

ザエル「やれやれ、次から次へと…」

ザエルは虚閃を連射して恋次たちの攻撃を相殺する。

ルキア「舞え『袖白雪』『参の舞 凍牙白刀』」  
とうがしらふね

ルキアは冷気でできた三日月の斬撃を飛ばした。

ザエル「だから無駄だつて」

ザエルはそう言つるとルキアの攻撃が霧散した。

ルキア「ツ!？」

ルキアはその光景に驚愕したがすぐに意識を切り替えて鬼道の詠唱に入った。

side 一護

一護はグリムジョーと凄まじい攻防を繰り返している。

グリムジョー「おらああああ!!!」

グリムジョーは霊圧を込めた爪を用いた格闘戦で一護に迫るが一護は砂を土鯨の能力で操作してグリムジョーの動きを阻害しながら



ノイトラ「オラア!!」

ノイトラは鎌を連続で振るってきた。

一護もまた黒刀で防ぎながら虚閃<sup>セロ</sup>を放ってノイトラを攻撃するが鋼皮<sup>イエロ</sup>の強度が予想以上に硬く受けきった。

ノイトラ「ちっ! うつとしい!!」

ノイトラはそう言いながら鎌を振るった。

一護は直ぐに後ろに跳躍して回避した。

一護はどうやって制圧するか考えている。

ノイトラ「なに… よそ見してやがる!!」

ノイトラはそう言っ<sup>ソニート</sup>て響転で距離を詰めて鎌を振るった。

ガキンツ!

ノイトラの鎌はネルの刀で受け止められた。

ノイトラ「なっ!?! ネリエル… てめえ… なんでその姿に!?!」

ネル「一護のおかげで戻れたのよ。それよりノイトラ覚悟はいい?」

ネルはそのままノイトラの鋼皮<sup>イエロ</sup>を切り裂いた。

ノイトラ「ぐっ!」

ノイトラは再生しながら即座に距離を取ると虚弾<sup>バラ</sup>で牽制した。

ネルはそれを切り払うと響転<sup>ソニート</sup>で距離を詰め斬りかかる。

ノイトラ「喰らうかあ!!」

ノイトラは連続で鎌を振るってネルを攻撃する。

ネル「フツ!」

ネルはすぐさま、体捌きで回避すると刀を振るって切り裂く。

ノイトラ「ちっ! くそがあ!!」

ノイトラは激昂しながら舌から虚閃<sup>セロ</sup>を放った。

ネル「…」

ネルは虚閃<sup>セロ</sup>を前に黙って突っ立っていると虚閃<sup>セロ</sup>を掴んで飲み込んだ。  
だ。

ノイトラ「…! しまった!!」

ノイトラは驚愕の顔を見るとネルは飲み込んだ虚閃<sup>セロ</sup>に自身の虚閃<sup>セロ</sup>を上乗せして放った。

ネル「があ!!」

ネルのカウンター技『重奏虚閃』セロ・トープルが見事に決まりノイトラに直撃した。

その光景を見たネルは一護の方を振り向いて突撃した。

ネル「一護く♥」

一護「ネル!?今!戦闘中!!」

一護は慌ててネルを離す。

ドゴーン!!

するとノイトラがいた方から轟音が鳴った。

ノイトラ「ちっ!忘れてたぜ、『重奏虚閃』セロ・トープルはお前だけの固有技だったな、ネリエル」

ノイトラは被っていた帽子の一部が吹き飛んでいたがほぼ無傷であつた。

ネル「... もう少しだけ待ってて一護」

ノイトラ「... ムカつくぜ、ネリエル。お前の実力が今の十一刃エスパーダに通用すると思ってるのか!!」

ノイトラは先ほどより霊圧を爆発的に上昇して響転ソニードの速度が比にならない程に上がってネルとの距離を詰めて振り下ろした。

ガゴンっ!!

先ほどよりも圧倒的な重厚な音が響いた。

ネル「ぐっ!」

ネルは斬魄刀を抑えながら苦悶の声を洩らした。

ノイトラ「そろそろそろそろ!!」

ノイトラは連続で鎌を振るってネルを攻撃してついには吹っ飛ばした。

ネル「はあ... はあ... しょうがない。まだ体が馴染み切っていないけど... 謳え『羚羊騎士』ガミューサ」

ネルは斬魄刀を解放して帰刃レスレクシオンした。

解放すると上半身が人、下半身が羚羊という半人半獣のケンタウロスを連想させるような姿となり斬魄刀は、大型の両刃のランスに変化した。

ネル「…行くよ！」

ネルはその言葉を合図に4足で地を蹴り加速した。

ノイトラ「ッ！」

ノイトラも鎌を振るって迎撃するがそれよりも早くランスがノイトラを貫いてぶっ飛ばした。

ノイトラ「ごはあ!!…やるじゃねえか、だけどな!!」

ノイトラは吠えると肉体が再生して霊圧もまた先ほどよりも上がった。

ノイトラ「もういい、さつさとくたばりやがれ!!ネリエルう!!祈れ!!『サンタテレサ聖嬰螳螂』!!」

ノイトラは叫びながらレスレクシオン刀剣解放した。

解放したノイトラは頭部には三日月のような角が生え、仮面の名残の歯は牙のように尖り、腕は昆虫のような外骨格に覆われ4本(最大で6本)に増え斬魂刀はオーソドックスな形状の大鎌に変わり、全ての腕に所持した。

ノイトラ「オラオラオラア!!!」

ノイトラは6倍になった手数!!!の暴力でネルに斬りかかる。

ネル「くっ！」

ネルはランスで捌きながら虚閃セロを放つが強度が底上げされたノイトラの鋼皮イェロを貫けずダメージを与えられずにいる。

ノイトラ「ぜりゃああああ!!!」

ノイトラの6つの鎌がネルを切り裂いて吹っ飛ばされた。

ネル「はっ…はっ…こうなったら実践では初めてだけど仕方ないよね。」

ネルは再生しながらそう言い虚刀を抜いた、それを見たノイトラは驚愕した。

ノイトラ「なんででめえがそれを持ってんだ!!それはでめえがいなくなっただ後に作られたものだぞ!!」

ノイトラはネルが虚刀を持っていることに怒り叫んだ。

ネル「そんなの一護が回収したのを私に渡してくれたからよ。それよりも『超越せよ』」

ネルはノイトラの叫びに冷たく返し超越刃を解放した。

爆発的な霊圧がネルを包むとその身と力を更なる高みに至らせた。

ネル「超越刃『羚羊の光槍』」

ネルは超越刃の姿は帰刃時の姿の色を全体的に濃い色へ変化。  
馬上槍もドリルのように回転している霊子の槍になった。

ネルは先ほどよりも爆発的な霊圧と速度で距離を詰めてランスを突き出す。

ノイトラ「チツ!!」

ノイトラもまた6本の鎌を巧みに操りネルの攻撃を捌き続けてその隙に斬るがネルは再生で意に介さずに刺突を繰り返す。

ノイトラ「チツ！オラア!!」

ノイトラは力任せにランスを弾くと鎌で力任せのゴリ押しでネリエルを切り裂きまくり消耗させまくった。

ネル「があ!!」

そしてネルは元の姿を取り戻しかつて以上の力を得たが短期間では流石のギョクの力をもつてしても馴染むことが出来ずに超越刃が解除されてしまった。

ノイトラ「∴ 漸く、てめえを斬れる時が来たなあ∴ ネリエルウ!!」

ノイトラは帰刃を解除して元の三日月を二つ重ねた鎌型の斬魄刀を振り上げ降ろしたが一護が済んでのところでネルを助けた。

ノイトラ「∴ てめえ、邪魔すんじゃねえ!!」

邪魔をされたノイトラは一護に吠えるが

一護「悪いな、ネルを殺させる気はないから続きはあいつと楽しんでくれ。」

一護はネルをお姫様抱っこしながら冷静にノイトラに言った。

ノイトラ「あゝ なんかのことだ!!」

ノイトラは咆哮しながら探査経路で周囲を探索すると凄まじい霊圧を感じ取りそちらに意識を割くことになった。

ちゅつどおおおおおおん!!!

凄まじい衝撃と轟音を響かせた。何かが落ちてきた。

剣八「よお、一護。なんか面白そうなやつと戦っているじゃねえか。」

茜雫「一護！来たわよ！私が来たからにはもう夏梨と遊子は一安心よ!!…っ！何よその女!!?」

剣八と茜雫は風の板のようなものに乗って天蓋の上に来て天蓋をぶち破って来て少し離れた所に落ちたので風の板に乗りながらここに来たようだ。

剣八はノイトラを見ながら凶悪な笑みを浮かべ茜雫は一護に御姫様抱っこされているネルを見て叫ぶ。

海燕達のほうにもマユリとネム、そして卯ノ花の霊圧を感じた一護はネルを抱えたまま、のえると合流することにした。

## 62話：「後でちやんと話すから」

side 茜雫達

ラスノーチエス

茜雫達が虚夜宮に10分もかからずにこれたのには理由があった。

ラスノーチエス それは虚夜宮に突入する前まで遡る。

茜雫「あくもおく遠いくよおく!!」

余りの遠さに叫ぶ茜雫

マユリ「やかましいと言っているじゃないカ、今回持ってきた中は高速移動用のものはないのだから走る以外に方法は無いヨ。」

マユリは茜雫の叫びに嫌味を言いつつも冷静に言う。

茜雫「・・・こうなったら、卍解『風天・志那都比古』!!」

茜雫は突然金の両刃の付いた薙刀の卍解を解放した。

マユリ「一つ聞こうか?君が何をやろうとしているのか想像はつくが何をしようとしているのかネ?」

マユリは予想はついているが当たってほしくないのだが一応聞いた。

茜雫「そんなの決まっているでしょう?風でぶっ飛んでいくに決まっているでしょう?」

茜雫は何言ってるんだ?的な態度でマユリに言う。

マユリ「馬鹿かネ?貴様やその蛮族なら兎も角、私はそんなに頑丈ではないのだヨ。」

マユリは茜雫の方法に文句を言う。

茜雫「大丈夫、大丈夫。：別に風でぶっ飛ぶとは言ったけどそんな荒っぽい方法じゃないから。『風の箱舟』」

茜雫は風を操作して直方体の形状に操作して二つ生成した。

マユリ「ほう?中々、面白いじゃないか。そういうことなら問題はなさそうだね。」

マユリは茜雫のやろうとすることに納得して中に入っていた。

剣八たちも中に入ろうとすると

茜雫「あつ!剣八、あんたこつちね、私は一護のほうに一気に行き



たいから。一護のほうならあんたのお気に召す相手と会えるかもよ。」

茜雫は剣八にこっちに乗れば強敵に会えると言うと

剣八「なるほどなあ、分かったぜ。」

剣八は納得して箱型の船に乗ると空中に浮遊して急速に速度を上げ一気に虚夜宮<sup>ラスノーチエス</sup>までの距離を減らして5分ちよつとで天蓋の上に着した。

茜雫「えくと、一護の霊圧は… うん？あっちに海燕さん達の霊圧を感じるからマユリ達はあっちね。」

茜雫はマユリ達が乗ってる方の箱舟を移動させて降ろした。

剣八「おっ！あっちから面白そうな奴の気配を感じるな!!おいつ！あっちに行け!!」

剣八はその方角を指すと確かに一護の霊圧を感じ取った。

茜雫「あんたって霊圧感知がダメダメな癖にこう大六感に優れているの羨ましいわね。」

茜雫は箱舟を移動させて天蓋の上まで来ると天蓋を壊すべく風の砲弾を放った。

茜雫「あら？少し場所がズレたかしら？」

剣八「おい… 何やってんだよ。」

剣八は呆れた。

やちる「あはは！セナセナってばおっちよこちよいだね!!」

茜雫「やちる！なんであんたここにいるのよ！」

するとここには先ほどまでいなかったやちるがいた。

やちる「だつてこれのおかげで剣ちゃんの所にならいつでも行けるんだよ。」

やちるはどや顔で護符を見せるがこれはやちるが元々は斬魄刀の一部だからできることである。

茜雫「はあ… とりあえず、この先にのえるがいるっばいから先に合流しちやおうか。」

茜雫はそう言って風の板を生成すると3人はそれに乗ってのえるの場所まで行った。

茜雫「あつ！いたいた… うん？あいつって」

茜雫達はのえるを見つけたが何者かと戦闘中だった。

猪のようなマツチヨな巨人の姿の破面アランカルとのえるが戦闘している。

やちる「あつ！えるえるだ！じゃああたしが楽しんでいい？剣ちやん！」

やちるは剣八にそう言うと

剣八「おう、いいぜ。俺は一護のほうにいる奴と楽しむからよお。」

剣八がOKを出すことやちるは躊躇なく下りた。

茜雫「ちよ!?ここ結構高さあるんですけどお!!」

茜雫は叫びながらも板の速度を上げて一護達の真上に到着すると板を解除して落ちて地面に着地した。

剣八「よお、一護。なんか面白そうなやつと戦っているじゃねえか。」

茜雫「一護！来たわよ！私が来たからにはもう夏梨と遊子は一安心よ!!… って！何よその女!!」

剣八はノイトラを見て笑みを浮かべ茜雫は漸く一護と再会できたのに見知らぬ女が一言抱き抱えられている光景に叫ぶ。

…とここまでが一護と合流する前までの茜雫達の様子だ。

side 海燕達

正体不明の技か能力か道具のいずれかに苦戦している海燕達だが突如天井が破壊され何かが落ちてきた。

海燕「くそっ!?!ここで新手かよ!!」

海燕は苦々しい顔をしながら文句を言ったが返ってきた声に聞き覚えがあった。

マユリ「全く、独断専行した身で助けに来て上げた味方にそれはないのでは無いかネ？」

卯ノ花「まあまあ、今はその破面アランカルの対処が優先ですよ涅隊長。」

恋次「涅隊長！卯ノ花隊長！なんでここに!!」

まさかの援軍に恋次が驚愕の顔をして声を上げる。

マユリ「あの一護阿の好呆いている者達共とネムのワガママと総隊長の指令でネ、援軍としてきたって訳ダ。」

卯ノ花「ちなみに総隊長は呆れていましたが戻られたら拳骨を受ける覚悟をしてくださいね?」

卯ノ花はそう言つて大怪我を回道で無理やり動かしている恋次たちの治療に入った。

海燕「・・・うつす」

海燕は総隊長の拳骨を受ける場面を想像して軽く震えた。

ルキア「それはそうと後ろにあるそれは何でしょう?」

ルキアはマユリ達の後ろにあるガシヤガシヤと音を立てている布切れを被つた物を指を指して聞くとマユリは答える。

マユリ「それはその実験素材破面に試験運用する際に見せるから措いてくれたまエ。」

ザエル「・・・僕を前に随分と余裕じゃないか。」

ザエルはそう言いながら虚閃セロを連射しながら触手を振るってきた。

マユリ「全く、羨のなつとらん事だね、『鏡門』・・・さて出番だよ『改造霊導自動人形零号』共」

マユリは結界を張ると先ほどから布を被つて蠢いていた者達の布が吹き飛んでその姿が露になった。

無骨なマネキンを思わせる形状をした者達に様々な形状の武器を所持した者達ばかりだ。

マユリは何やら色付きの片目の眼鏡のような霊具を取り出し左耳に装着した。

海燕「あ? 面白いえばバウントつて連中が似たようなものを使つたな。手前え、あいつらを実験して改造したな?」

海燕はこれらに見覚えがあつたので率直に聞くとマユリは普通に答えた。

マユリ「それがどうかしたのかネ? 尸魂界ソウルソサエティに侵略した賊共も私達の発展の糧になれたのだから喜ぶべきじゃないのかネ?」

海燕「いけしやあしやあと言うなよ・・・」

マユリは罪悪感のかけらもなく言うので海燕は呆れた。

二人が暢気に話していると一体の人形がザエルに向かって剣から炎を放つた。

ザエル「ちっ！鬱陶しいね」

ザエルは舌打ちしながら攻撃を打ち消してドールのコピー軍を生  
成した。

マユリ「…ほう？」

マユリはコピーを一瞬で生成した能力と攻撃をかき消したことに  
興味を示しながらも左目の装置で情報を収集しながら鬼道で多角方  
向から攻撃を開始する。

マユリ「さて、実験を開始しようじゃないか。『破道の三十二 黄火  
閃』搔き筆れ『疋殺地蔵』」

マユリは左手から黄色い閃光のような物を放つ破道を使いながら  
右手に持った斬魄刀を解放してうねった三本の刀身の根元に赤子が  
浮かび上がったような不気味な姿になった。

マユリ「ではまずはこれだネ。『記録入力「振花」』」

マユリは三叉槍の描かれたプラスチックの板を赤子の口に噛ませ  
ると刀身から水が発生してそれを鞭のようにしならせてザエルを攻  
撃した。

海燕「おいっ！それ俺の『振花』じゃねえか!!なんでお前が使えん  
だ!!」

海燕は自身の斬魄刀の能力を使われたことに「立腹だ。」

マユリ「うるさいネ、それを言うなら黒崎一護の斬魄刀『万華鏡』  
だって似たような物じゃないかネ？まあ彼の斬魄刀の能力を解析し  
て私の斬魄刀を改造したがネ。」

海燕の文句にマユリはあっさりと返した。

海燕「お前！一護の斬魄刀も解析してたのかよ!!」

マユリ「まあネ、卯ノ花隊長とあの更木剣八蜜族が戦っていた時の情報  
を手に入れたのは僥倖だったヨ。」

マユリは喜びながら疋殺地蔵に『氷輪丸』を記録入力して『振花』の  
水を氷輪丸で凍らせ槍の形状にしてザエルに飛ばした。

ザエル「ちっ！『虚術：豪炎波』」

ザエルは豪炎の波を放って相殺した。

ザエルはマユリを警戒しているが周りに居た人形たちは空間操作

の力でザエルの背後に回っていた。

人形たちは炎や風の連携攻撃でザエルを攻撃した。

ザエル「ぐっ！鬱陶しいぞ!!」

ザエルは触手を振るって人形たちを弾き飛ばしながら人形のクローンを大量に作って人形にけしかける。

マユリ「ふむ、まだまだ耐久力に難ありか… 『雷吼炮』」

マユリは人形の損傷具合から攻撃の威力を収集しつつ左手から雷のエネルギー波を放った。

ザエル『『王虚の閃光』』  
グラン・レイ・ゼロ

ザエルはマユリの攻撃をバリアを張って防御して血を混ぜて強化した虚閃<sup>セロ</sup>を放った。

マユリは足に装着した飛廉脚を発動させる霊具を起動して高速移動した。

海燕達は瞬歩を使って回避した。

マユリ「ふむ、これは予想以上の仕上がりになったが霊力の使用量が多いな… 改良が必要だね。」

マユリは装置の結果から改良する場所を考察していた。

ザエル「… あまりこれ以上、侵入者に時間を使うわけにはいかないなあ。『超越せよ』」

ザエルは超<sup>オーバー</sup>越<sup>ブレイド</sup>刃を解放した。

ザエル「超<sup>オーバー</sup>越<sup>ブレイド</sup>刃『邪淫妃の嬌抱』』  
フォールニカラス・コフングリット

肌は病的にまで白くなり下半身はまるで鳥の足のように変化し、無数の触手は桃色に染まってより毒々しい色合いになっていた。

また、尻尾の先の穴には薄紫の球体が浮遊しており、尻尾の先からは薄紫色の霊子が噴き出して空中へと消えていく。

マユリ「これが報告にあつたやつだね、ではこちらも少し実験器具のランクを上げた方がよさそうだね。『魂は更なる高みへ』」

マユリはザエルの超<sup>オーバー</sup>越<sup>ブレイド</sup>刃から計測された霊圧量などから始解では無理そうという判断をして心装を解放した。

マユリ「心装『金色足殺地蔵・改輪手腕』」

マユリの両腕に刃物のように鋭い5本の紫のネイルのようなもの

が付いた金色の手甲と背後に木製の輪っかに中心の足殺地蔵の顔が付いており輪っかからはメスや注射などの化学で使う実験器具のようなものが付いたものだ。

sideチャド達

チャド達はヤミーの巨大火球を防御技の重ね掛けで受け止め切れただが想像以上の威力にそれなりの距離、吹っ飛ばされた。

チャド「はあ……はあ……ヤミーの奴ここまでの破壊力があるとは……」

チャド達は織姫の双天帰盾で回復中だった。

リルカ「どうすんの？ 私たちの攻撃力じゃあ、あいつの巨体をどうできないわよ？」

織姫「そうなんだよねえ、一護君や雨竜君みたいに破壊規模の大きい攻撃はできないしね。」

リルカはヤミーを倒そうにも攻撃力の不足を言い織姫はこの場に居ない最強コンビのことを考えていた。

チャド「……だがあいつを何とかしないとどの道、進みようがないからな。やるしかない！」

チャドは覚悟を決めヤミーの場所まで三人は完現術<sup>ア</sup>：加速<sup>クセル</sup>で移動した。

ヤミー「ほう……あれを喰らって生き残るたあやるじゃねか。ただどなあ!!」

ヤミーはその巨体からは想像できない速度で移動しながら拳を振り上げ地面に叩きつけて大地を震動した。

チャド「『神砂嵐』!!」

チャドは両腕から竜巻を放ってその拳を破壊した。

ヤミー「ぐあああああ!!この野郎!!」

ヤミーは破壊された拳を再生してその怒りでその姿を変化させ下半身は赤い毛に覆われ、怪獣のようなヒレを持った尻尾も生えている。上半身は普通のデブのようになっていて、顔の目より上が、後ろに突き出した4本の角に覆われていて、下顎も鋭いキバをいくつも生やしている。更に背中からも2本の巨大な角を生やした状態に

なった。

ヤミー「おらあ!!」

ヤミーは更に威力が上がった虚弾を連射しまくった。

3人は体捌きで虚弾を回避しながら距離を詰めて攻撃をするがチャド以外の攻撃は硬度がさらに上がった鋼皮で受け止められて通らない。

チャド「『風王連拳』!!」

チャドは巨大な風圧の拳を大量にヤミーに放ちまくって攻撃しなくなり大ダメージを与えた。

ヤミー「くそがああああ!!!」

ヤミーは怒りを更に高めてその身を変化させた。

二本足に戻っており、巨大な尻尾が生え、下半身の足以外が全て毛皮で覆われている形態になった。

ヤミー「うおおおおおお!!!」

ヤミーは響転で高速移動を開始してチャド達も完現術：加速で加速して攻撃に対応できるようにした。

side 雨竜達

雨竜は魂を切り裂くものに炎を纏わせて炎の長剣にして飛廉脚で加速して斬りかかるがウルキオラもまた響転で加速して虚刀を振るう。

雨「はあ!!」

雨は瞬歩でウルキオラの背後を取り手甲を纏った拳を叩き込んだがウルキオラは鋼皮で強化された拳で受け止めた。

MI「はあ!!」

MIは動きを止めたウルキオラに斬りかかるがウルキオラの鋼皮の強度が想定以上で刃が通らない。

雨竜「くつ!」

雨竜は空中に光の矢と神聖滅矢を生成してウルキオラに打ち込んだ。

ウルキオラ「『虚術：雷 帝 剣 雨』」

ウルキオラもまた雷の剣を雨の如く射出して相殺した。

ウルキオラ 「『虚閃』」

ウルキオラは三人を弾くと左人差し指を雨竜に向け光線を放った。

雨 「『月閃瞬間』！」

雨は瞬間を使いウルキオラに殴るがウルキオラは虚刀を巧みに操って連続で刺突を放って雨を壁に叩きつけた。

雨 「ゴフツ!!」

雨は血を吐いて崩れ落ちたが何とか立とうとする。

ウルキオラ 「やめておけ、その傷では貴様は戦うどころか立つことさえままならないだろう、諦めろ。」

ウルキオラは淡々とやめろと雨に言った。

雨竜 「M I！雨を頼む!!」

M I 「分かりました！」

雨竜は肉体を動フルート・ウイーネアルテリエ静血装で強化すると飛廉脚で距離を詰めてウルキオラを吹っ飛ばしながら壁を破壊しながら外へ出た。

ウルキオラ 「・・・ほう？この前よりも成長しているようだな。」

雨竜 「当たり前だ!!」

雨竜は炎の長剣フランベルジュを振るって、ウルキオラに斬りかかるが虚刀で受け止め受け流しながら刺突を放ってくるので雨竜は冷静に捌きながらどう倒すか考えている。

そしてしばらく打ち合いなどをしてしていると突然、ウルキオラと雨竜は互いに知っている者の気配を感じ取った。

ヤミー 「おらああああ!!」

ヤミーはその拳を振り下ろしてチャドを攻撃するがチャドもまた白腕で迎え撃った。

どごおおおん!!!!

凄まじい轟音を響かせた。

ヤミー 「はあ... はあ... とつととくたばりやがれ!!... ん？ウルキオラじゃねえかなんでここに居んだ？」

ヤミーはウルキオラに気づいて疑問を言った。

ウルキオラ 「ヤミー... お前は天蓋の下での刀剣解放は禁じられているだろう？なのになんで解放している？」



ウルキオラはヤミーの性格を知ってはいるが一応聞いた。  
ヤミー「んなもん、こいつをぶっ潰すためだろうが!!」

ヤミーはそう言ってチャドに殴り掛かる。

チャド「くっ!」

チャドも迎撃する。

ウルキオラ「はあ… ヤミーの奴は相変わらずだな。」

ウルキオラはそう言って雨竜が無言で放った矢を打ち払った。

雨竜「ふっ!」

雨竜は炎の長剣、刃弓弧雀の疑似二刀流を振るい連続で攻撃を仕掛ける。

戦いは更に激化する。

side 一護

一護はネルを抱き抱えたまま茜雫を連れのと合流するために急いで移動しているのだが

茜雫「ねえ… 一護、その女何? やっぱり胸? 胸なの? 大きいのが良いの?」

茜雫の瞳から光が消失して面倒くさいことを言っている。

一護「ネルのことは後でちゃんと話すから今はのえると合流だ。」

一護は躊躇なく会話をぶった切り速度を上げた。

茜雫「うう… ようやく会えたのになんかまた増えてるしい…」

茜雫は歯を食いしばりながらも速度を上げた。

一護達はのえるがいるところに到着するとそこにはボロボロの破面アランカルがいてのえるとやちるはのほほんと言っていた。

やちる「それでね、えるえる」

のえる「えっと、えるえるとは私の事ですか? やちるちゃん。」

やちる「うん! のえるだからえるえる!!」

やちるは自信満々にそう言う。

のえる「は、はあ…」

一護「お〜い、のえる〜」

一護が声を上げながら二人に話しかける。

やちる「あっ! イッチー! セナセナ! 剣ちゃんは?」

一護「剣八なら向こうで斬り合いを楽しんでいるよ。とりあえず、ネルが起きるまで休憩でもしているか。のえる頼む。」

のえる「分かりました。」

一護はのえるにキャンブセットを開くように言うとのえるもわかったと言いきキャンブセットを展開してネルを横にした。

茜雫「ちよつと！のえるあの女何!? 一体何時会ったのよ!!」

茜雫はのえるにネルのことを聞くと

のえる「あゝ… 何といえればいいでしょうか。とりあえず食事をしながら話しましょうか。」

一護とのえるは携帯食料を取り出して食べながら茜雫にネルのことを話した。

## 63話：「見つけた。」

side 一護

一護達は茜雫にネルのことを伝えたと茜雫はジト目で一護を見る。

茜雫「・・・相変わらず、なんですぐ女に懐かれるのよ。」

茜雫は一護にそう言う。

一護「一応、言っておくが俺はモテたくて頑張っているわけではな  
いからな？」

一護はそう弁解していると

ネル「ん・・・んう・・・」

ネルの傷が完全に癒えたのか目を覚まし始めた。

ネル「ふわあ・・・ あ♥一護く♥」

ネルは寝起き早々一護に抱き着いた。

一護「おいつ！起きて早々これかよ!!ネル！」

ネル「えへへく」

一護はネルのことを力尽くで引き？がそうとすればできるが一護  
のよく知るネルはネルトウの時が大半を占めているのであまり力を  
込めるわけにもいかずにいる。

茜雫「こらく！一護が困っているじゃない!!離れなさい!!」

・・・  
まあ、そんなこと知らんと言わんばかりに茜雫がネルを離そう  
とする。

ネル「ちよつと!?私の細やかな幸せを邪魔しないで!!」

茜雫「これのどこが細やかな幸せよ!!いいから離れなさい！」

茜雫は力づくでネルを一護から引き剥がしたがネルはムスツとし  
た。

ネル「むく」

一護「さて、ネルも完治したということで夏梨と遊子の所に行きま  
すか。」

一護はそう言っている技を使う。

一護「『エコーロケーション 反響マップ』」

一護は聖文字シユリフトThe sound音 響シユリフトThe soundによる音を自在に操る能力で超音波の反響

により物体の距離を把握する技を使った。

一護は聴覚を最大限まで高め虚夜宮の構造を把握しようとする。ちなみに最初からこれを使わなかった理由は単純にネルの相手やペツシエ達のキャラの濃さに忘れていたからだ。

一護「——見つけた。」

一護は少しの間、喉から超音波を放出していたので結構喉を酷使させたので飲み物を飲みながら突入する際のことを考えた。

茜雫「なんで行かないの？場所はわかったんでしよう？」

茜雫は考えている一護に聞く。

一護「いやあ、だつてロアの部屋に行くつてことは女の部屋に突入するつて事じゃん。なんかそういうのはね？外聞的に。」

一護はロアの部屋に突入する際に手順を間違えると起こることを考えていたためにあまり力ずくの作戦が通用しないのだ。

ネル「じゃあ私達が先に入ればいいんだよ！一護。」

とネルが案を出してくれたので一護はその案でいこうとする。

一護「OK、とりあえず、それで行こう。」

一護達は先に進むためにキャンプセットなどをしまい先に進もうとするが一つ気になったことがあった。

茜雫「そういえばやちるはこれからどうするの？」

茜雫は進む理由のないやちるにどうするのか聞くとやちる「私？私は剣ちゃん所に行くよ。」

そう言つてやちるは護符を使つて剣八の所に転移した。

一護「よし、これで問題はなくなつたな。行くか。」

一護達は高速移動技を使い虚夜宮の内部に戻つた。

side 海燕達

海燕達は虚夜宮の壁をぶち抜いて天蓋の下、青空の下、戦闘をしている。

マユリは多種多様な化学器具を用いてザエルアポロを追い詰めている。

ザエル「ぜはあ...ぜはあ...これは虚にのみ有効の毒でも撒いてるのか...」

ザエルは先ほどから感じていた体の異常にすぐさま気づいた。

マユリ「ほう、まさか三下風情がこれに気づくとは君の評価を少し上げた方がいいネ。」

マユリはザエルの勘の良さを評価した。

ザエル「…ムカつくね、ではこれはどうかな?」

ザエルはそう言うのと触手を腕の形状に変化させそこから刃を生やしまくり超高速回転させて削岩機のようにしてマユリに向けて放った。

マユリ「ふむ、記録入力『氷輪丸』『袖白雪』」

マユリは足殺地蔵に2種類の氷雪系の斬魄刀をデータをインストールすると周囲に氷の防壁を作成して削岩機が接触した瞬間にその触手が瞬間冷凍され粉々に砕け散った。

海燕「おらあ!」

ザエルに隙が出来た瞬間に海燕が横から槍で攻撃を見舞った。

ザエルは響転ソニードで回避すると触手を海燕に突き刺した。

海燕「ぐっ!」

マユリ「全く、何をやっているのかネ?」

海燕「う、うるせえ!てかなんだ?なんであの程度のダメージで済んだんだ?」

マユリ「おや?熱くなっていたのに存外に冷静だね?」

海燕のダメージの少なさに疑問を浮かべそれに嫌味を言うマユリ、海燕の疑問の答えはザエルの手に持つ物を見たことで発覚した。

海燕「…人形?」

ザエル「…ふむ、これは胃か。」

ザエルは人形を開けて何かを取り出してそれを砕いた。

海燕「ごはあ!!な、なんだ…いきなり内臓が砕け散った感覚が…」

海燕はいきなりのダメージに吐血しながら倒れかけたがなんとか倒れずに膝をつく程度で済んだ。

マユリ「…なるほど、あの人形はダメージを共有することができ  
るのか。面倒だね。」

マユリは海燕をスキャンしてその現象を即座に把握した。

恋次「海燕隊長！大丈夫ですか!!」

すると、回復した恋次とルキア、都と烈、ペッシェとドンドチャツカと改造<sup>ド</sup>霊導自動人形<sup>ル</sup>零号達が来た。

海燕「す、すまねえ…。あいつの人形を作成する…。技のせいで内臓をやられち…。まった。」

海燕は内臓のダメージで言葉を紡ぐのも大変だが何とかザエルの情報を恋次たちに伝えた。

烈「では、こちらで治療を開始しますね。」

烈は投擲用の短剣をザエルの人形を持つ手に目掛け高速で飛ばし人形を弾き飛ばしてキャッチした。

ザエル「ちっ!」

マユリ「貸したま工、それを安全に消す方法を見つけようじゃないか。」

海燕「ふざけんなよ！お前に渡したら碌な目に合ったもんじゃねえぞ。」

海燕は頑固として人形を離さずにいる。

マユリ「そのまま力を込め続けたら君にダメージが入るがいいのかネ?」

マユリは一応忠告した。

海燕「お前に持たせるよりはマシじゃ!」

海燕はそう言って治療に入った。

ザエル「僕を無視しないでほしいなあ」

ザエルはそう言って竜巻を飛ばしてきた。

マユリ「しつこいじゃないか。記録<sup>インストール</sup>入力『弥勒丸』」

マユリは茜雫の斬魄刀を足殺地蔵に記録入力して竜巻を相殺した。

マユリ「…ふむ、これは帰<sup>レスレクシオン</sup>刃の能力を再現…。いや生物の特徴などを再現する特性の副次的な物だね。」

マユリはここまでの攻防で収集した情報を元にザエルの能力を把握した。

マユリ「まあ、いいネこれ以上は面白みのある情報はなさそうだ

ネ。」

マユリはそう言って周囲に注射型の霊子の矢のような物を生成した。

滅却師の神聖滅矢クインシー・ハイリッヒ・プファイルを解析して自身の作った薬品を打ち込んだ対象に注入できるように改造したものだ。

マユリは躊躇なく注射を一齐掃射した。

ザエル「ぐっ！」

ザエルは防御術などで攻撃を打ち消したりしているがこの矢には虚の霊圧を分解する性質があるので無効化できずに薬品を打ち込まれた。

マユリ「まあ、この薬品に名をつけるなら『超人薬』と言ったところか？まあ、今の君に言っても意味のないものだがネ。」

マユリはザエルに打ち込んだ薬品は「時間感覚の延長を、強制的に引き起こすこと」という効果を発揮するものだ。

今のザエルは感覚だけが引き延ばされた状態で動かすことが出来ずにいる。

マユリ「では、100年先まで御機嫌よう。」

マユリは対破アランカル面に作った心肺停止薬をザエルに投与して心肺を停止して決着した。

マユリ「全く、準備もなしに突撃したうえで死にかけるとは情けないネ、少しは君の甥の黒崎一護を見習った方がいいと思うヨ。」

マユリはザエルを倒し終わりその死体を回収すると海燕に嫌味の雨を言った。

海燕「ぜ…はあ…うるせえ」

海燕は治療は終わったがまだ内臓破壊の影響で話すのが困難な状況だ。

マユリ「ところで、そこにいる虚は何かネ？ぜひとも研究材料にしたいネ。」

ペツシエ「逃げるぞ！ドンドチャツカ!!」

ドンドチャツカ「はいでやんす!!」

マユリはペツシエ達を見てそう言うのとペツシエ達は身の危険を感じ

じ逃げようとする。

マユリ「まあ、いい。さつさとあの男の事件室に行こうかね。面白い実験器具などがありそうダ。」

マユリはペッシェ達のことを放っておいてザエルの部屋に行こうとしていたが内心で奇妙な感覚があった。

マユリ（それにしても、あの破面<sup>アランカル</sup>……妙にあっさりやられたネ。まだ何か隠してたような気がするがネ。）

マユリはその予感を頭の片隅に止めて置く程度にして回収作業に入るためにザエルの部屋に行った。

ザエル「ぜはあ……ぜはあ……あの狂気科学者め<sup>マッドサイエンティスト</sup>！よりもよつてあんなえげつない薬品を僕に打ち込みやがって!!」

ザエルは超越<sup>オーバーフレイト</sup>刃の状態で復活した。

何故ザエルが復活できたのは『受胎告知』<sup>ガブリエール</sup>という本来は他人に自分を孕ませて復活すると言う転生術なのだが嘗てロアにボコボコにされ彼女に使おうとしたがロアは直感というか女の勘というか一護以外の男にそんな目に合いかけたロアに完膚なきまでにボコボコにされたために更に改良を重ね、周囲に自身の情報のバックアップを取りそこから復活ができるようになるものに改良し直した。

これは元々はザエルの従属官<sup>フラシオン</sup>だったロカ・パラミアの能力ではあったのだがその能力を取り入れることで更に復活の場所を選べるようになりこの技を露見するリスクを減らせるようになったが

ザエル「……やはり、霊圧は全快までとはいかないね。もう少し改良した方がよさそうだね。とりあえずは回復を優先した方がいいね。」

ザエルは今の状態ではマユリにまた返り討ちにされることを理解しているので一旦身を隠した。

side 剣八

一護達がのえると合流するために移動した後互いに名を名乗った後剣八はノイトラと斬り合いをしている。

剣八は刀で切りかかるとノイトラもまた大鎌ではなく虚刀で迎え



撃つ。

剣八「はっはあ!!」

剣八は笑いながらノイトラに斬りかかる。

ノイトラ「ちっ!うぜんだよお!!」

ノイトラは鋼皮イェロで強化された四肢で手刀と足刀の追撃を掛けるが

剣八はその身に莫大な霊圧を纏って攻撃が効きにくい。

ノイトラ「ちっ!」

ノイトラは虚刀をしまつて大鎌を構える。

ノイトラ「ぜりやああああ!!」

ノイトラは大鎌で剣八を叩き潰そうと連続で殴打する。

剣八はそれを打ち払いながら懐に刃を滑り込ませて切り裂くが再生する。

剣八は再生することに意を介さずにむしろ長く斬り合いができる  
と内心で悦び剣速を上げた。

ノイトラ「うぜんだよお!!祈れ!『聖哭螳螂』!!」

ノイトラは刀剣解放レスレクシオンして6刀の鎌で斬りかかる。

剣八「そう来なくちやな!!」

剣八は更に喜びつつも刀を持つ手の力をさらに強めて斬りかかる。

それから何十発も刀を鎌を打ち合い互いに切り裂かれるがノイトラは再生し、剣八も技術開発局が改良した死覇装に追加された回道が自動発動して流石に大ダメージを完治させるほどではないがそれでも大半の刀傷程度なら回復できるようになったので意にも介さずに互いは斬撃の嵐の応酬を繰り返す。

ノイトラ「喰らえええ!!」

ノイトラは響転ソニードで距離を離すと黒虚閃セロ・オスキュラスを放った。

剣八「おらあ!!」

剣八は刀を一閃して黒の虚閃セロを切り裂いた。

そして瞬歩で距離を詰めて刀で切り裂く。

ノイトラは6本の鎌で手数ソニードの暴力で切り裂こうと響転で距離を詰めて切り裂こうとするが剣八は両手で刀を握り振り下ろしてノイトラを切り裂いた。

ノイトラ「うはあ!!…いい加減にくたばりやがれえ!!『超越せよ!!』」

ノイトラは剣八に切り裂かれたことでぶち切れ超越刃を解放した。オーバーブレイド

ノイトラ「超越刃『絶望の聖哭螳螂』!!」オーバーブレイド

超越刃を解放したノイトラの姿は体中が黒い甲殻に覆われ、六本に増えていた腕も二本へと戻り、二本の角には黄色い霊子が電撃のように纏われていく。

肩や腰のあたりからは四本の黒い霊子の刃が展開していき、黄色い霊子で縁取られてギザギザとした形状に変わっていた。

更には前腕部にも鎌のような刃が二本追加され、合計で六本の刃が展開した姿になった。

剣八「はははは!!そう来なくちや面白くねえなあ!!」

剣八は喜びながら斬りかかる。

ノイトラ「ふぎけんじゃねえぞ!!」

ノイトラは霊子の刃を伸ばしながら両腕の刃で斬りかかるが剣八は6本の刃の斬撃を刀を瞬時に6連撃を繰り返して切り払う。

剣八「はっはあ!!いくら刀が6本合ってもそれを同時に斬れば問題ねえな!!」

などと剣八は脳筋発言でノイトラの連撃を凌ぐがそれができるのが剣八が一護くらいしかないのである。

ノイトラ「ふぎけんじゃねえ!!」

ノイトラは怒号を上げながら斬撃の速度を上げるがやはり先ほどと同じ結果になった。

ノイトラ「ならこれでどうだあ!!『王虚の黒閃光』!!」グラン・レイ・ゼロ・オスキュラス

ノイトラは血を混ぜた黒い虚閃を放った。セロ

だが剣八は瞬歩で距離を詰めながら刀で一刀両断して余波でノイトラをぶっ飛ばした。

ノイトラ「ぐはあ!!この野郎!!『聖哭螳螂の断鎌』!!」サンタテレサ・グアダニーヤ

ノイトラは霊子の刃と両腕の鎌に王虚の黒閃光を纏わせて霊子の刃で剣八を突き刺そうと高速で伸ばしながら両腕の鎌で渾身の力

で切り裂こうとする。

剣八はノイトラの気迫に笑みを浮かべながら刀を大上段で構えながら一つの名を呟いた。

剣八「いいな……呑め『野晒』」

剣八は斬魄刀を解放して思いつき振り下ろした。

剣八の斬撃はノイトラの刃を全て粉碎してノイトラを切り裂いた。

ノイトラ「ごはっ!!」

ノイトラは一撃で<sup>オーバーレイド</sup>超越刃を解除するレベルの大ダメージを受けてしまい倒れた。

剣八「ふうく、中々楽しかったぜ、ノイトラ。」

剣八はノイトラに礼を言っ立ち去ろうとする。

やちる「剣ちゃん、楽しかった?」

やちるはそう言っ剣八の肩に乗った。

剣八「おうっ!」

剣八は笑みを浮かべながら<sup>ラスノーチエス</sup>虚夜宮に向かって走り出した。

ところ変わっノイトラの死体がある場所

ノイトラ「う……うう……」

ノイトラはギリギリで死んではいなかったがそれでも放っおけば死に至るレベルのダメージである。

ぎっ!ぎっ!

すると何者かが砂漠を歩いてくる音が聞こえてきた。

ノイトラ「だ……れ……だ……だ……」

ノイトラは掠れた声で歩いてきたものに言った。

ネム「……」

歩いてきたのはマユリに剣八が戦っている<sup>アランカル</sup>破面の死体を回収して来いと言う命令を実行するべく、回収能力に特化した改造<sup>ドール</sup>霊導自動人形零号を連れてきたのだ。

そしてネムはノイトラを瞬間冷凍し氷漬けにしてマユリ達と合流するために移動した。

## 64話：「最っ高だぜ！」

sideチャド達

チャド達はヤミーと苛烈な戦闘を続けていた。

ヤミー「うおおおおおおお!!!」

ヤミーは只の咆哮のみで周囲を吹き飛ばした。

チャド「くっ！なんて声量だ。」

チャドは拳から霊圧を放ったがヤミーの鋼皮イエロは想定以上の硬度であまり効果がない。

ヤミー「喰らいやがれ!!」

ヤミーはそう言っバラて高威力の虚弾を連射しまくりにチャドは盾と境界を展開して防ぐがあまりの威力に吹っ飛ばされた。

リルカ「はあ!!」

リルカは両足に悪魔風脚ディアブルジャンプを超える蒼炎を纏う魔神風脚イフリートジャンプを使ってヤミーを蹴るが多少表面が焦げ付いただけで特にダメージにならないでいる。

織姫「『孤天斬盾』！」

織姫は防御不可の斬撃を放つが今のヤミーの霊圧の防壁を突破できずにいる。

チャド「っ！やはり俺達では攻撃力が足りないか！」

チャドは現状を分析するがやはり範囲攻撃などに限っては自分達では無理と判断して時間稼ぎに移行した。

ヤミー「うおおおおお!!!」

ヤミーは叫び声を上げながら突進!してきてチャドをぶん殴!ってぶっ飛ばした。

side雨竜

雨竜はウルキオラと天蓋の上の空中で超高速戦闘をしている。

既に雨竜は完フオルシユテンディツヒ聖ミカエル体『天使の王』を使って超高速飛行している。

ウルキオラもまた帰レスレクシオン刃レして虚刀に雷を纏わせている。

雨竜は聖スクラザエライ隷スを使い周囲の霊子を吸収し雷を追加して炎の長剣フランベルジュを強化して斬りかかる。



入っているロア達と一護達が居た。

雨竜・チャド『…』

二人は顔を見合わせながら状況を把握した。  
時は少し遡る。

side 一護

一護、のえる、ネル、茜雫は走りながらマップの情報を逐一確認しながら走っている。

一護「えつと…次はこっちか。」

一護はマップの情報を頼りに進んでいくと目的の部屋の扉が見えてきた。

一護「あそこだな。」

茜雫「わかったわ!!突撃イイイイ!!!」

一護「おいつ!話が違うぞ!!」

茜雫は目的の場所だと分かるや否や風を纏い扉に突っ込んだ。

どごおおおん!!

遊子「えっ!?えっ!?今度は何!!?」

夏梨「っ!!」

遊子は困惑して夏梨は構えている。

茜雫「遊子!夏梨!来たわよ!!」

遊子「えっ!?茜雫お姉ちゃん?」

夏梨「茜雫義姉<sup>ねえ</sup>え、なんでここに居るの?」

茜雫「そんなの二人を助けに来たに決まっていますでしょう!!」

遊子と夏梨は茜雫が居ることに疑問を浮かべていると茜雫は理由を言った。

遊子「助けに?でもここに居るのってお義姉<sup>ねえ</sup>ちゃんしかないよ?」

夏梨「そうだよ、茜雫義姉<sup>ねえ</sup>え、ここにはロア義姉<sup>ねえ</sup>えとティア義姉<sup>ねえ</sup>え達しかないよ?」

シスターズはここ数日でロア達を敵ではなくて家族と言う認識でいた。

茜雫「ちよおお!!そいつら誘拐犯たちなんですけどお!!目を覚まし

て二人ともお!!」

茜雫は二人の認識に対して叫び声をあげる。

一護「入るぞく」

一護は軽い口調で部屋に入る。

ロア「あつ!一護来たのね。こつちに来てお茶でも飲みましょう」

ロアは一護が入ってくると椅子に座ってお茶をしようと言ってくる。

そしてのえるとネルが入ってくるのを見た夏梨たちは

夏梨「誑し兄い、ロア義姉えとティア義姉え達だけじゃ飽き足らずにまた増やしたの?あと何その恰好?」

遊子「チャラ男兄ちゃん、また美人な人をお義姉ちゃん増やしたの!」

夏梨はネルを見て一護にジト目を向け遊子はネルを見て目をキラキラしている。

一護「あの夏梨さん、遊子さん。これには深い訳がありましたね。」  
一護は夏梨たちに事情説明している。

ロア「あなたがネリエルちゃんね♪あなたも一護の番なのね♪」  
ネル「うん♪そうだよ♪」

ネルとロアはあつて早々意気投合した。

茜雫「ネル!なんで仲がいいのよ!!そいつは夏梨たちを誘拐した連中なのよ!!あとこいつには借りがあるのよ!!」

ネル「うくん?私的には同族だから戦う理由とか特にないし二人の無事だから恨みとか特にないし。」

茜雫「もおおおお!なんでよおおおおお!!!」  
ネルの裏切りに茜雫は叫び声をあげる。      !!!!!!

ロア「ねえねえ!一護!この前の借りを返したいから戦いましょう!!」

夏梨・遊子「「えつ!」」

一護「別にいいが?というかこちとらストレスが溜まって仕方がなかったからお前に全力をぶつけるな?」

ロア「うん♪いいよ♪」

二人はそう言つて刀を抜いた。

ハリベル「全く、ここで戦うな。二人を巻き込む。」

ハリベルは念のために水のバリアを花梨と遊子に張っている。

遊子「待つて！なんでお兄ちゃんとロアお義姉ちゃんねえが戦うの!!!」

夏梨「そうだよ！なんで!!」

二人は状況がよくわからず、叫んだ。

一護「う〜ん？なんでかな？因縁の始まりはロアが斬りかかってきたからかな？」

ロア「そうだね〜あの時は結構内心だと焦つてたからね〜」

一護とロアは会つた時のことを思い出していた。

すると二人の耳に異音を感知した。

一護・ロア「「ん？なんだ（なに）？」」

二人は頭に疑問符を浮かべているが念のために夏梨と遊子にロアは風を一護は音の鎧を纏わせた。

ドガアアアアアアン！

突如、部屋に何かが激突して壁がぶつ壊れた。

ロア「私の部屋ああああ!!!」

ロアは突如、自分の部屋が壊されて叫び声を上げる。

土煙が上がりながら聞き覚えのある声が聞こえてきた。

雨竜「ぐ、ぐううう…」

チャド「う、うおお…」

雨竜「…チャ、チャド…なぜ君も？」

チャド「う、雨竜…お前もか。」

雨竜「僕はウルキオラにぶつ飛ばされてここにそういう君は？」

チャド「俺もヤミーにぶつ飛ばされてここに」

雨竜・チャド『…』

状況を把握した二人は固まった。

一護「…よお、元気そうだな、そっちの状況は分かったわ。」

一護は二人に声をかけた。

ロア「ふふふ、あんた達よくも人の部屋を壊してくれたわね。」



一方、ロアは部屋を壊されてご立腹である。

雨竜「それに関してはウルキオラに言ってくれ。」

チャド「同じく、ヤミーに言ってくれ。」

二人はウルキオラとヤミーに罪の所在を擦り付けた。

夏梨・遊子「「えっ!?嘘!?!」」

妹二人は雨竜とチャドの恰好を見てあの時助けてくれた初恋の人達が身近にいたことに驚いている。

雨竜「と言う訳で僕たちはウルキオラと戦ってくるね。」

チャド「俺もヤミーと」

二人はそう言って高速移動して消えていった。

ロア「・・・後でウルキオラとヤミーはシバこう。」

ロアは知人二人をシバく気満々だ。

一護「とりあえず、直しておくか。」

一護はそう言って破壊された壁を修復した。

ロア「一護!とりあえず、天蓋の上で戦うよ!」

一護「う〜い。」

一護とロアは転移で天蓋の上に移動した。

夏梨「ねえ!茜雫義姉<sup>ねえ</sup>え!何が起こっているの!!お兄いのさっきの何!!」

遊子「そうだよ!説明して!!」

遊子と夏梨は茜雫に事情説明を求める。

茜雫「え、えくとそれはね。」

茜雫はなんとか二人に説明した。

く天蓋の上く

一護「んじゃ、始めようか。」

一護はそう言って『万華鏡・天鎖斬月』、『虚化』を使い更に持ちうる全ての強化能力を使って肉体を強化し霊圧を鎧の如く身に纏い準備を完了した。

ロア「うんうん、一護も全力で戦ってくれるんだね!じゃあ私も!

吹き抜けなさい!!『風<sup>シルフィード</sup>霊聖剣』!!」

ロアも刀剣解放した。

ロア「まだまだだ!!」

ロアはそう言つて霊圧を高めた。

その霊圧は異質なものに変化した。

一護（…これは!?）

一護はロアが何をするか理解した。

ロア「『刀剣解放第二階層』!!」  
レスレクシオンセグンダエターパ

ロアの姿はそこまで大きく乖離した姿ではなく衣服の緑の部分が黒くなつたくらいだがその気配は先ほどとは比べ物にならないくらい上がつており今の一護よりも霊圧が上だ。

一護はこの事実には笑みがこぼれ出た。

一護「最っ高だぜ! ロアアアアアアア!!」

一護は神通脚で加速して黒刀を振り上げた。

ロア「うん! 私もだよ! 一護おおおお!!!」

ロアもまた咆哮を上げながら響転ソニードで加速して直刀がさらなる解放に変化して黒い両刃の大剣に変化した。

ロアは大剣を振り上げ斬撃を放つ。

二人の斬撃が衝突して天蓋が消し飛んだ。

side 雨竜

一護とロアの衝突を検知した雨竜とウルキオラは頭を抱えた。

雨竜「…一護の奴、何をやっているんだ。」

ウルキオラ「全く、天蓋を吹き飛ばすとは何をやっている。」

二人は呆れながらさらに攻防は激化する。

ウルキオラ「『刀剣解放第二階層』」  
レスレクシオンセグンダエターパ

ウルキオラは第2解放した。

雨竜（来た!!）

雨竜はウルキオラのさらなる解放を見てさらに気を引き締める。

ウルキオラ「…行くぞ。」

ウルキオラは虚刀を構え響転ソニードで加速し袈裟切りに切り裂こうとするが雨竜はこの前よりも流れるように対応した。

ウルキオラ（…ほう。）

ウルキオラは雨竜の成長具合に興味を示した。

雨竜もまた刃弓と炎の長剣の疑似二刀流で斬撃の嵐を見舞う。

ウルキオラ『黒虚閃』フランベルジュ  
セロ・オスキュラス

ウルキオラは黒い虚閃を至近距離で放った。

雨竜「くっ！」フルートヴェーネアルテリエンハーベン『外殻動静血装』！

雨竜はバリアを張って吹っ飛ばされながらもダメージはない。

ウルキオラは重力加速を加えながら虚刀で刺突を放つ。

雨竜もまた周囲の霊子を吸収して極大の矢を放った。

どごおおおん!!!

激突して凄まじい轟音を響かせた。

ウルキオラは大ダメージを受けたが肉体は虚刀と素の超速再生で完治した。

ウルキオラ「あまり、これ以上不毛に戦いを長引かせるつもりはない。『超越せよ』」

ウルキオラはそう言って超越刃を解放した。

ウルキオラ「超越刃」オパーブレイド  
ムルシエラゴ・ホビラナーダ『無還の黒翼大魔』

超越刃を解放したウルキオラの姿は髪の毛と肌が白くなり、第二階層から翼が1対増え、より悪魔らしくなったというよりは墮天使に近い容姿になった。

ウルキオラ『雷霆の槍』ランサ・デル・レランパーゴ

ウルキオラは霊子で出来た槍を生成した。

ウルキオラは先ほどとは比べ物にならない速度で距離を詰めて槍で刺突を繰り返した。

雨竜「くっ！」

雨竜はその刺突を掻い潜りながら炎の斬撃を繰り返しながら空中から矢を生成、射出する。

ウルキオラは雨竜に虚閃を放ちながら雷撃を落としまくる。

雨竜もまた何とかウルキオラの攻撃を捌きながらダメージを与えるが超速再生が瞬間再生に変化しているので即座に修復されダメージが全く入らない。

雨竜「うおおおお!!!」

雨竜は咆哮を上げ炎の斬撃を飛ばした。

ウルキオラは冷静に槍を投擲した。

チユツどおおおおん!!!

雨竜「ぐわああああ!!!」

雨竜は攻撃の衝突で発生した余波で大ダメージを受けてしまったが何とか生きておるが墜落した。

一方ウルキオラも余波でダメージを受けたが即座に再生した。

雨竜「ぐっ!うう:」

雨竜は何か立ち上がるうとして『乱装天傀』を使った。

ウルキオラ「またその技か。相も変わらず諦めの悪いことだ。」

雨竜「お生憎僕たちは諦めの悪いことだね。」

雨竜はそう言つて五角形クインシークロスの滅却十字を取り出した。

ウルキオラ「?」

ウルキオラは雨竜の取り出したものに疑問符を浮かべた。

雨竜「これが僕の全力だ:」

雨竜はそう言つて五角形クインシークロスの滅却十字を媒介に完聖体を上乗せした。

爆発的にその霊圧を上昇させた。

雨竜「そうだな: この姿に名をつけるなら『滅却師完聖体』

サイト・シユリツツ  
第二階層』!!」

雨竜は新たな力を発動すると身に纏っていた装束が変化して神父と牧師の服を足したような白に青いラインの入った服になりその背には翼のようにも見える光の帯が四本現れた。その根元には鎧のような装甲が形成されており、それは片や手や腰の部分にも現れた物になった。

ウルキオラ「: まだ戦う気か。」

ウルキオラは槍を再び生成して構える。

雨竜は十字架を象つた霊子の長剣を形成した。

両者加速して激突した。

sideチャド

チャドも戻った後ヤミーと激闘を繰り広げていた。

ヤミー「でりやあああああ!!!」

ヤミーの破壊の拳がチャドに向かつて放たれるがチャドもまた風

を纏った剛拳を放って応戦している。

ドガンッ！ドガンッ！ドガンッ！

両者の拳が大地を砕きながら霊圧をお互いに高めている。

織姫とリルカはチャドの援護に回っている。

織姫はヤミーの攻撃に対しては四天抗盾で攻撃を弾き飛ばしたりする。

するとヤミーの意識外から攻撃が飛んできた。

ヤミー「うおお!!」

海燕「大丈夫か!!」

恋次「助けに来たぜ!!」

ルキア「無事か!!」

都「援護に来ました。」

烈「大丈夫ですか?」

織姫「海燕さん達来たんですね!」

リルカ「そっちも無事で良かったわ。」

織姫とリルカは援軍の登場に喜んだ。

ヤミー「なんだあ?雑魚がそろそろ湧き上がって来やがって、折角の決着に水を差しやがってムカつくぜ!『超越せよ』!!」

ヤミーはチャドとの戦いを邪魔されたことにキレて超オーバーブレイド越刃を解放した。

ヤミー「超オーバーブレイド越刃『憤怒の巨人』!!!」

全体が禍々しくなり全体に薄紫色の岩のような装甲が付き背から4つの尾のような突起物が出てきており腰から炎のような刺々しい尾が生えている。

胸の穴は赤い霊圧で埋まり背には赤い宝玉のようなものが浮いている。

両手足には鋭い爪の付いた黒い手に赤いひび割れのようなものに変化した。鋭い牙が生えており顔には赤黒い霊圧が仮面のように纏わりついている。

ヤミー「喰らいやがれえええ!!!」

ヤミーは拳から禍々しい爆炎を放った。

海燕「『卍解！』あまのさかほこ『天逆鉾』！」

海燕は卍解して波濤を放ちヤミーの業火を相殺する。

恋次「卍解『狒狒王蛇尾丸』!!」

恋次もさすがに巨体に対応するために狒狒王のほうを解放した。

恋次「うおおおお!!『狒骨大砲』!!」

恋次は大技を放つがヤミーは虚閃セウケンを放って恋次の攻撃を消し飛ばして恋次たちを吹き飛ばした。

海燕達『うおおおお!!』

海燕達は空中で体勢を立て直した。

チャド「うおおおお!!」

チャドはその手に大剣を取り出して変化させ巨大な霊圧の斬撃を見舞った。

ヤミー「ぐうううう!!!」

ヤミーはその斬撃を喰らいながら受け止めた。

ヤミー「ぜはあ!!やるじゃねえか!!」

ヤミーは霊圧を強めながら加速して殴りかかっていく。

チャド「うおおおお!!!」

チャドもまた加速して斬りかかる。



両者は少しの間笑うとすぐさま空を蹴り加速した。

黒の刀と大剣が激突する度に凄まじい轟音を響かせた。

ロア「喰らいなさい!!」

ロアは空中から黒虚閃セロ・オスキュラスの雨を一護に集中させて落とした。

一護「そうこなくちやな!! 『音響流星群』!!」ボイスメテオレイン

一護は空中に飛ばしていた音の積乱雲から音の塊をロア目掛けて流星の雨の如く降り注いだ。

両者の放った破壊の奔流が激突して大爆発を起こした。

一護は神通脚で距離を詰めて空いている左手に音の振動を乗せている。

一護「『ビートパンチ』!!」

一護は左腕に強化能力を集中して音の振動と超音波を乗せてロアを全力でぶん殴った。

ロア「ごふっ!」

ロアは血反吐を吐きながら砂漠に叩きつけた。

ロアはすぐさま再生して一護に向かっていった。

一護「『黒虚閃』」セロ・オスキュラス

一護は仮面から黒い虚閃を放った。

ロア「『風霊の鎧』!!」ストーム・アーマー

ロアは風を鎧のように纏い一護の攻撃を防いで大剣を振るって一護を切り裂いた。

一護「ぐうっ!」

一護は切り裂かれて出血しかけたがすぐに傷口を聖文字シユリフト the body肉体の肉體操作で凝固して出血を防いだ。

一護は両腕から輝彩滑刀を展開して光輝かせて黒刀を神殺槍かみしにのやりで伸ばして片手で薙ぎ払う。

ロアは大剣で防ぎなが距離を詰めて鋼皮イエロで強化された手刀を放つ。  
一護も左腕の刀で迎え撃つ。

ガギン!!

金属で作られたものでもないのに異質な音を響かせた。

二人は距離を離し遠距離戦を開始した。



一護「『月牙天衝・追影』『赫灼・噴炎熱線波』『音響爆裂波』  
『輝彩・天満織月』『王虚の黒閃光』『苦悶の環』『連鎖爆裂』  
『破道の八十八 飛竜撃賊震天雷砲』『破道の九十一 千手咬天汰炮』  
！」

一護は月牙天衝を連続で放ちぶつけ加速させ、圧縮した青黒い蒼炎の熱線を放ち爆音の震動波を放ち両腕の刀と黒刀から周囲を埋め尽くす量の渦状の月輪を折り重ねて放つ波状攻撃を放ち、血を混ぜた黒い虚閃を放ち空中から巨大な神聖滅矢を放ちまくり聖文字 The Dimension 次 元の一部である空間操作と爆 裂を組み合わせた亜空間に込めた爆発を霊圧を圧縮して一気に解放することで任意の空間に連続で爆発を起こす技を使い雷を圧縮した光線と無数の光の矢を浴びせる破道を使った。

普通の敵なら明らかな過剰攻撃ではあるがお生憎様今一護の目の前の敵は普通ではない。

ロア「『空刃・五月雨』『突風風拳』『天雷衝撃波』『霊嵐の剣舞』  
『王虚の黒閃光』『拡散型天嵐爆裂波』『連鎖轟雷』『飛竜撃賊震天雷砲』『霊嵐の矢雨』！」

ロアもまた真空の刃をぶつけて加速させ風を圧縮した物を拳から放ち雷のエネルギー波を放ち真空の刃を纏った竜巻を放ち血を混ぜた黒い虚閃を放ち広範囲に炸裂するように風を爆発させ連続した落雷を放ち一護と同じ雷を圧縮した光線を放って風を纏った虚閃の矢を放った。

ちゅどおおおおおおん!! 両者の技が激突し凄まじい衝撃が発生して一護とロアは大ダメージを負った。

一護「ぐううううう!!!」  
ロア「つゝゝゝゝゝ!!!」

両者は歯を食いしばりながら墜落していく。  
どおおおおん!!

凄まじい轟音を響かせながら地面に叩きつけられた。

一護「はあ... はあ...」  
ロア「はあ... はあ...」



どがあああん!!

二つの黒い斬撃が衝突して轟音を響かせた。

一護はその際に発生した煙幕をブラインドにして背後を取った。

一護「『バーナーフィスト』」

圧縮した蒼黒い炎を左拳に纏い全力でぶん殴る。

ロア「『閃光蹴撃』」

ロアは背後の一護の拳に真下から半円を描きながら高熱を纏った左足で光速の蹴りを上に蹴り抜いた。

どおおおん!!

一護「ぐっ!」

ロア「きゃっ!」

二人はぶつ飛びながら体勢を立て直した。

一護「ちっ!左拳がイカレちゃった。」

一護は大火傷して蹴りでボロボロになった拳をだらんと垂らしながらそう言った。

ロア「痛いなあ...もお」

ロアもまた大火傷した左足を抑えながら再生を開始する。

両者はダメージを回復しながら気軽に話し始めた。

一護「つたく、こんだけ攻撃を浴びせてもダウン一つとれないって自信無くすんだが。」

ロア「それはこっちもよ。頑張つて鍛錬とか頑張ったのにこれじゃあ一護に認めてもらえないじゃない...」

ロアは口を尖らせながら言う。

一護「: あ?何言つてんだ?俺はあれに関しては何にももうとつくに認めているんだが...」

一護は右手で頬をかきながらそう言うのとロアは頬を赤くしながら足のダメージや傷を無視しながら一護に抱き着いた。

ロア「一護く♥だーい好き♥」

ロアは一護に好きと言いながらキスした。

一護「んむうっ!」

一護はなすがままにキスを受け入れた。

ロア「ぶはあつ！という訳で子作りしましょう！」

一護「いや、それは無理。」

ロア「えくくく」

一護はロアの子作り発言はさらつと断った。

side 雨竜

サイト・シユリツツ  
第二階層を解放した雨竜と超オーバーフレイド越刃を解放したウルキオラはこちらもロアと一護に負けず劣らずの激闘を繰り広げていた。

雨竜は霊子の長剣を振るってウルキオラに斬りかかった。

ウルキオラは霊子の槍で攻撃を受け止めるが空中から矢を発射する。

ウルキオラもまた虚閃セロで迎撃した。

両者は空中で激突を繰り返し剣と槍が激しく火花を散らした。

雨竜「『極光オーロラ・レーゲンの雨』！」

雨竜は万物貫通を付与した神聖滅矢ハイリツヒ・プファイエルの雨に周囲に展開した光球から光線の雨をウルキオラに放った。

ウルキオラ「『虚術アビユーツ：雷エンペラードル・帝トルエノ・剣リユーピア・雨エスパード』」

ウルキオラは雨竜よりも霊圧があるので万物貫通を無効化して攻撃を相殺した。

雨竜「はあ!!」

雨竜は空中から光線の雨を放った。

ウルキオラは巧みに飛行することで攻撃を回避した。

雨竜は加速して刀身に炎と雷を纏わせて万物貫通を付与して刺突と斬撃を織り交せて攻撃する。

ウルキオラも無言で霊子の槍で迎撃する。

雨竜「うおおおおお!!!」

ウルキオラ「……!!!」

雨竜は咆哮を上げウルキオラは無言で攻撃を苛烈になる。そしてさらに攻防を繰り広げること数分間、両者目に見えるくらいに疲弊している。

雨竜「はあ…… はあ…… このままだと、ジリ貧もいいところだな。」

ウルキオラ「ふう…… まさかここまで粘るとはな。」

雨竜とウルキオラは一言言うのと霊圧を爆発的に上げ次の一撃で決めると言わんばかりに高めた。

雨竜「ラワーヘン・スン・シユテイ・イ・アーツ・フ・アイル蒼空の剣矢!!」

雨竜の腰に装着されていた装甲が分離して合体して巨大な弓を形成して長剣に万物貫通と青炎と青雷を付与して霊子を供給しまくって巨大化させてウルキオラに向けてぶっ放した。

ウルキオラ「これで終いだ。トルメンタ・デ・ムルシエラゴ蝙蝠の虚無嵐」

ウルキオラはすべてを無に還す漆黒の大竜巻を放った。

ドゴオオオオオオオオン!!!

技の激突で凄まじい衝撃と轟音が響き一護とロアが虚夜宮にバリアを張っていたおかげで消滅することはなかった。

二人は技の衝突に発生した際の衝撃で大ダメージを受けて互いに元の姿に戻った。

雨竜「ぐううう……」

ウルキオラ「……」

両者指一本動かすことが出来ずにいた。

ウルキオラ「……不思議ものだな、どういう訳か清々しいと思っ  
ている自分がある。」

雨竜「……奇遇だね、僕もだよ。」

二人は激戦の後とは思えない気軽に会話をする。

雨竜「最初は君に負けたことが原因であの二人を連れていかれてしまったから何が何でも君を倒さないと思ったけど戦っている最中からそんなこと忘れていたよ。ただ君を倒したいっていう感情のほうが強くなっているね。」

雨竜はウルキオラに自身の内心で思っていたことを言う。

ウルキオラ「……そうか、俺もお前がああ状況から生き残ったことを知った時から何故か興味を持ったのを疑問に思っていたからな。」  
ウルキオラもまたそう言った。

一護「よお、終わったか?」

ロア「ウルキオラ? あんだ、よくも人の部屋を壊してくれたわね?」  
すると戦いが終わるまで待つていた一護とロアが来た。

ウルキオラ「…そんなことを俺に言われても困る。」

ロア「あんたさあ、吹っ飛ばす場所くらい予測して攻撃しなさいよ!!!」

ウルキオラはロアの文句にそう言うがロアは怒り心頭だ。

一護「とりあえず、回復しようか」

一護はそう言つて雨竜の治療に入った。

ロアもウルキオラの回復させた。

sideチャド

ヤミー「でりやああああああ!!!」

超越刃を解放して禍々しい拳を振り上げてチャドに殴り掛かる。

チャドは完現術：加速で回避する。

どごおおおん!!!

轟音を響かせ大地を砕いた。

チャド「はあ!!」

チャドは黒白の大剣で斬りかかる。

ヤミーの皮膚を切り裂くがすぐに再生した。

チャド（くっ!これでは埒が明かない!!!）

チャドは内心で焦りながらもヤミーの攻撃を的確に回避したりする。

すると海燕達は全力でヤミーに攻撃する。

海燕「喰らえ!『根源の波動』!」

恋次「『狒骨大砲』!」

都「卍解『嵌合暗翳庭』『影帝滅壊』!」

都も卍解して影の濁流を放った。

ルキア「舞え『袖白雪』『参の舞 凍牙白刀』!」

ルキアもまた凍気の斬撃を飛ばした。

ヤミー「てめえら!邪魔すんじやねえぞお!!」

ヤミーは怒りながら霊圧を強めながら虚閃を放つて海燕達の攻撃をぶっ飛ばした。

海燕達は瞬歩で回避した。

卯ノ花「『魂は更なる高みへ』『心装 皆尽・永久の慾』」

卯ノ花は心装を解放して血の刀を手に持ってヤミーに斬りかかる。  
ヤミー「ぐっ！てめえもか!!」

ヤミーは卯ノ花に殴り掛かるが回避した。

そして何やら凄まじい速度で何かが走ってくるとヤミーの左手を切り落とした。

ヤミー「ぐああああああ!!!」

剣八「はっはあ!!面白そうな奴がいるじゃねえか!!」

剣八は野生の勘でヤミーの強さを感じ取って急いでこちらに走ってきてぶつた切つたのだ。

ヤミー「てんめえ...許さねえぞお!!」

ヤミーは手を切られた怒りで霊圧が相乗効果で異常なほどにまで膨れ上がる。

ヤミー「くたばりやがれえええええ!!!」  
『怒獣の噴火』!!!  
ベルシオン・イーラ

ヤミーは地面を殴りつけると地震が起こり大地がひび割れ凄まじい勢いでマグマが噴き出た。

チャド「ぐおおお!!」

剣八「ちっ!」

卯ノ花「ふっ!」

海燕達『っ!』

全員は空中へ逃げることで何とか回避したがそれでも少くないダメージを受けてしまった。

ヤミー「ぜはあ...ぜはあ...どうだ!!」

ヤミーの力は凄まじいが怒りと言うのは短時間でなら凄まじい効果を見込めるが長時間持続させるには肉体と精神に多大な負荷をかけ続ける。

ヤミーは租の性格故に長時間使えるがここまで長時間戦闘するところが今までなかったためにどれほどの負荷がかかっているのかは本人を以てしてもわからなかったのだ。

チャド「...すみませんがここからは俺一人でやらせてください。元々は俺が買った喧嘩なんで。」

チャドはそう言つて降りていく。

海燕達はチャドの覚悟を理解して見守ることにした。

チャド「待たせたな、決着をつけようか。」

チャドはそう言つて拳を構える。

ヤミー「はあ……いいぜ、終わらせようぜ！」

ヤミーもそう言つてありつたけの霊圧を拳に込めた。

チャドも右腕を白腕に変えこちらも霊圧をありつたけ込めた。

チャド「『ラ・ムエルテ魔人の一撃』！」

チャドは白腕の力を最大限発揮してこの一撃で戦いを終える意思を込め全力で殴り掛かる。

ヤミー「『イーラ・エクスフロダ憤怒の一撃』!!」

怒りで生産した力を全て、森羅万象を灰燼に帰す紅蓮の炎に変えて全力で殴る。

ちゅどおとおおおおん!!

技の激突でチャドとヤミーを巻き込んでぶっ飛ばした。

チャド「ぐおおおおお!!!」

ヤミー「うおおおおお!!!」

二人は衝突の際に起こつた衝撃をまろに受けて元の姿に戻つた。

チャド「ぜはあ……ぜはあ……もう駄目だ。」

ヤミー「はあ……はあ……」

二人はほぼほぼ瀕死の状態になっている。

剣八「けっ!もうここに面白そうなやつは居なさそうだな。」

剣八は勘でこれ以上面白いと思える相手がいないのを感じたので

刀を肩で担いでそう言う。

ロア「はいはい、ヤミーはこっちで預かるからじゃくねく」

ロアはいきなり現れヤミーを担いでいくとどこかに消えた。

織姫「あの女くいきなり来て何なの!!?『双天帰盾』!」

織姫はロアに怒りながらもチャドを回復させた。

そして、いきなり声が響いた。

藍染「やあ、死神そして黒崎一護とその仲間達諸君よ。私の計画に乗ってくれてありがとうと言つた方がいいのか。」

今回の事件の主犯、藍染は東仙に天挺空羅を発動させ自身の声を



虚圏ウエコムンドにいる一護達に届けさせた。

藍染「これで要注意となる者達は虚圏ウエコムンドに幽閉することができた。… ついでに隊長格をさらに3名を幽閉できるとは思わなかったが。」

藍染がそう言った瞬間、黒腔ガルガンタが閉じてしまった。

虎徹「隊長く大変です!! 私たちが通つて来た黒腔ガルガンタすべて封鎖されました!!」

転移の布で転移してきた勇音は緊急で伝えることを伝えに来た。

卯ノ花「… やられましたね。」

リルカ「こつちから開くことは出来ないんですか!!」

リルカが再び開けないか叫ぶと

マユリ「無理だネ。」

マユリがザエルの研究室をあさり終わりついでに新たな実験素材を手に入れてここに来てリルカの言葉にそう言った。

マユリ「現時点で黒腔ガルガンタの構造を把握しているのは浦原喜助ただ一人だ。こちらから連絡する手段のない我々ではどうすることもできない。… 癪な話だがネ。」

マユリは歯を軽く食いしばりながらそう言う。

卯ノ花「ですが、我々隊長格に課せられた指令は二つ、黒崎一護一行に手を貸すことと空座町での隊長格たちの戦闘可能にすることの二つ。」

織姫「えっ?! 隊長さん達が空座町で戦ったら跡形もなく消えてしまいますよ!!」

織姫は卯ノ花が言ったことに驚きながら言う。

マユリ「それに関しては一つ補足しておこう。ただそのまま隊長格たちを配置することを戦闘可能にするとは言わないヨ。浦原喜助が転界結柱という空座町を4点のポイントで囲むことで囲んだ街を尸魂界ソウルソサエティの流魂街ルコンガイの外れに作った偽の空座町と入れ替えることで隊長格たちが町をいくら壊そうが問題ないようにしたんだヨ。… まったく、ただでさえ心躍る新技術の可能性の分析などをしているというのに余計な仕事を増やしてくれたもんだヨ。おかげで十二番隊の隊員

たちの殆どが過労で使い物にならなくなってしまったじゃないか。」  
ぼそつと何ならとんでもないことを呟いたことをリルカの耳は聞き逃さなかったがリルカはスルーした。

side偽の空座町

偽の空座町ではいくつもの影が高速で移動している。

一番隊、二番隊、六番隊、八番隊、十番隊、十三番隊が空中に立っている。

そして空中に黒腔ガルガンタが開きそこから藍染、東仙、市丸が出てくる。

山本「どうやら、間に合ったようじゃのう。」

藍染「間に合ったか。：一体何がだい？そこにあるのは偽の空座町だと言うのはわかっている。本物の空座町は尸魂界にあるのだろう？それならば何も問題はない、君たちを倒して尸魂界に行き王建を創生すればいいことだ。：：スターク、バラガン、ハリベル、ゾマリ、来るんだ。」

藍染がそう言うとき黒腔ガルガンタが4つ開きそこから4組の破面達アランカルが出てきた。

## 66話：「それだけは勘弁して下さい。」

side偽の空座町

隊長格たちは敵には聞こえない程度の声量で互いに情報を共有する。

そして十三隊の隊長たちと藍染たちが相對している中真つ先に総隊長が刀を抜刀して解放した。

山本「万象一切灰燼と為せ『流刃若火』！『城郭炎上』!!」

総隊長は炎での塊で押し込み身動きを封じる技を使い藍染、市丸、東仙を包み込み動きを封じた。

山本「さて、ゆるりと潰していこうかのう。」

ギン「アツイ、アツイ、総隊長さんもヤンチャが過ぎますねえ。」

ギンが炎の壁の熱に暑がりながらそう言うと言とうと藍染が言う。

藍染「今はまだ我々が動く時ではない。今は様子を見ようじゃないか。」

藍染は状況を見ようと言う。

バラガン「さて、どうするか… 敵は山ほど。ボスはそのザマ。」パチンツ！

バラガンはそう言いながら指を鳴らすと従属官が丸めている絨毯を広げてその中にある大量の骨が出てきて玉座の形になった。

ハリベル「バラガン、藍染様に対して口の聞き方がなっていないな。」

ハリベルは夏梨たちと話せなくなつて内心で苛立っている。

バラガン「お前こそ儂への口の聞き方がなっていないぞ、ハリベル… さて、ロアがいない上にボスがああザマだからな、代わりに儂が指揮をとらせてもらおうぞ。」

ミラ・ローズ「何だと…」

ハリベル「よせ、ミラ・ローズ」

ミラ・ローズはバラガンに噛みつきこうとするがハリベルが止める。

スターク「まあ… いんじやねえの？」

スタークは気だるげに言う。

リリネット「… ふんっ!!」

リリネットはスタークの態度に思いつき腰を蹴る。

スターク「痛つて！なにすんだ!!」

リリネット「るっさい!!もうちよつとシャキツとしろよ!」

ミラ・ローズ「何やってんだ…!」

ミラ・ローズはスターク達のやり取りに呆れた。

ゾマリ「私も特にないですよ。」

ゾマリも特に何も言わずに受け入れた。

バラガン「さて、話はこうだったな。足元の重霊地の空座町は偽物だと、ボスは尸魂界ソウルソサエティに行き本物を潰せばいいと言うが果たしてそんな面倒をするか。先ほどの話からするに柱で取り囲んでその力で偽の空座町を入れ替えているのだろう。その柱がなくなればどうなる?… フィンドール!」

フィンドール「了解しました。陛下」

バラガンは自身の従属官フィンドールに合図を出すとフィンドールは腕についている刃で笛を吹いた。

そしてその合図で黒腔ガルガンタが四方に開きそこから大型の虚ホロウが大量に出現した。

バラガン「柱を置くのは四方に置くと相場が決まっているからう。」

バラガンがそう言うのと虚が攻撃した所から柱が出現した。

大前田「どっ!どうすんすか!!柱の位置がバレちまつてるじゃないつすか!!このままじゃ本物の空座町が元通りになっちまうじゃないつすか!!」

大前田はバラガンがあっさり柱の位置などを看破して攻撃を開始させた事態に大声を上げながら騒いでいる。

碎蜂「うるさいぞ、大前田。」

そんな大前田を見た上司の碎蜂や他の隊長たちは比較的に着ている。

山本「さよう、何も重要な柱に何もつけていないと思うてか?」

総隊長がそう言うのとバラガンは一言言う。

バラガン「… ほう?」

バラガンは不敵な笑みを浮かべながら状況を見ている。

柱を攻撃していた大型の虚達は突如出現した人影に斬られた。

班目「延びろ！『鬼灯丸』！」

班目は解放した槍を振り下ろし

弓親「咲け『藤孔雀』」

4枚刃になった刀を振り虚の頭部の一部を4枚に切り下し

吉良「面を上げる『侘助』！」

イツルは7の字型になった刃を振り下ろし虚の頭部を粉碎し

檜佐木「…」

檜佐木は無言で刀を抜刀し一閃して虚を切り裂いた。

山本「ちゃんと、腕利きを護衛させておる。」

大前田「… っ！隊長たちは知ってたんですか!!」

碎蜂「当たり前だろ、門に集合した時に伝えたはずだ。大方、油煎

餅でも食べていて話を聞いていなかったんだろう。」

碎蜂がそう言うとき大前田は何やら勘違いをしていたことを大声で

言うとき乱菊に揶揄われている。

大型の虚を瞬殺した死神たちを見たバラガンは思案顔になった。

バラガン「ふくむ… クールホーン、アビラマ、フィンドール、ポ

ウよ。」

呼ばれた4人『はっ！どのようなご命令でしょうか！陛下！』

バラガン「ちと、あの4人の死神達と遊んでくるがいい。ついでに

柱を破壊できるならそれでよい。」

呼ばれた4人『了解いたしました！』

バラガンの命令を聞いた従属官達フレーションは高速で飛行するような姿勢で

四方に移動する。

バラガン「さて、死神達よ… ちと遊ぼうではないか。」

バラガンは威厳のある声でそう言った。

班目「… 来たか！」

班目は近づいてくる巨大な霊圧を感じ取り身構える。

ズドオオオン!!

巨大な何かが衝突し陥没した。

一角「……デカいな。」

チーノン「私は陛下の従属官フラシオンチーノン・ポウだ。さて死神少し私と遊んでもらおうか。」

そう言つて握り拳を作つた

一角「ほう？ 斬魄刀も虚刀も抜かなくていいのか？」

ポウ「安心しろ、これが私の武器だ。」

一角「まっ！ てめえらの硬さは知つてからよお。だがあいつほどじゃねえ。」

一角はそう言つて最初から飛ばしていく。

一角『『卍解』！ 『竜紋鬼灯丸』!!』

一角は卍解を解放して3つの巨大な形状の異なる斧へ変化した。

一角「行くぜ!!」

一角はそう言つて瞬歩で加速して斧を振るつた。

アビラマ「うおおおお!! やつてやる!! やつてやる!! やつてやる!! やつてやる!! やつてやる!! やつてやる!! やつてやる!! やつてやる!! やつてやる!! やつてやる!!」

アビラマはイツルの前に到着するなりいきなり叫び始めた。

イツル「……何をやっているんだい？」

イツルはアビラマのその行動を理解できておらず敵であるのにもかかわらず普通に聞いてしまった。

アビラマ「ああ？ んなもん、戦士が己を鼓舞する儀式をするのは当然じゃねえか。てめえもやれよ。」

イツル「嫌だね、そんな絶叫ごっこ。」

アビラマ「ああそうかよ。ノリのねえ野郎だな。つか、てめえ名前前はなんだ。俺は陛下の従属官フラシオンアビラマ・レッダーだ。」

アビラマはそう言つて名乗つた。

イツル「……三番隊副隊長、吉良イツル。」

イツルが名乗つた。

アビラマ「三番隊？ ……ああ、市丸ギンが尸魂界ソウルソサエティに置いてきたつていう部下かよ。」

イツル「ツ!!」

アビラマ「なるほど、確かにそんなシラケた面の奴おいてくるに決

まってるわな。」

アビラマがそう言うのと何かが通り過ぎた。見るとアビラマの仮面の名残の左側が切られ出血している。

イズル「……あまり、僕を怒らせないように、君も傷の浅いうちに死にたいだろう?」

イズルは殺気を放ちながら怒りの感情の乗った表情をしている。

アビラマ「……なんだよ、できるんじゃないか。そういう顔。」

アビラマはそう言って虚刀を抜いた。

フィンドール「初めまして、私はフィンドール。バラガン陛下のフライオン従属官だ。君は?」

檜佐木「……九番隊副隊長、檜佐木修兵だ。」

互いに名乗り合った。

フィンドール「さて、陛下の命令だ。少しの間、私たちと遊んでもらおうか。」

フィンドールはそう言って虚刀を抜いて斬りかかる。

檜佐木も斬魄刀を抜いて応戦した。

弓親もまたフライオン従属官の霊圧を感じ取り納刀した刀に手を掛けながら構えを取っている。

そして、気配が近づいてきたので勢いよく振り向いた。

クールホーン「はいはいはいは〜い! 注 ちゅうくもく 目!!はあい!!バラガン陛下

の第1のフライオン従属官、シャルロット・クールホーンちゃんの登場よ!」

空中から手を叩きながら降りてきてやたらハイテンションで名乗りを上げた筋肉モリモリマッチョマンのオカマがいた。

弓親は何故か目を閉じていた。

クールホーン「あら?なんで目を閉じているのよ?」

クールホーンは不思議がって弓親の周りをまわりながら聞くと弓親はこういった。

弓親「僕は醜いものは見ない主義でね。」

パアッ!

弓親がそう言った瞬間クールホーンはビンタをかました。

弓親「痛ってえ!何んだてめえこの野郎!!」

クールホーン「何すんだって人の顔見るなり醜いって！いい？本当に醜いっていうのはねえあなたのように他人を見た目で判断する人のことを言うのよ……ああ、今の私の言葉って深いわねえ。」

弓親「やかましい！てか！そんなに深いこと言っただろ!!」  
弓親はそう言っただけで斬りかかる。

クールホーン「嫌ねえ、そうやって余裕がなくギャアギャア騒がしい男は嫌われるわよお、この私やロア様、ハリベル様のように冷静で気高く美しくなくてはならなくてよ！」

クールホーンはそう言いながら虚刀で弓親の斬撃を流麗に捌き続ける。

弓親「うっさいわ！この不細工！」

クールホーン「ふっ、挑発しても無駄よ。真に美しきものは相手が何を言おうと冷静に自分を貫く者よ。」

本来の世界戦のクールホーンだったら弓親の挑発に乗っていたがこここのクールホーンはロアの美しさに一方的なライバル視をして果敢に挑んでは軽くあしらわれボコボコにやられては何度もリベンジしに行くのだがその都度ボコボコにされ自信を失いかけたがロアが助言をしてそれを受け入れたことでクールホーンは精神的に更なる高みに至れたことでロアのことを認めている。それ故に元々の性格に加え生半可な挑発は意味をなさないので。

弓親「知るかあ！君の存在は僕からすると許容できるか!!」

クールホーン「ふっ！甘いわね。」

クールホーンと弓親の互いの信念を掛けた戦いは激化する。

side ラスノーチエス 虚夜宮

一方、黒腔を閉じられ幽閉中の一護達だがそんなことをさしておき現在、一護は別の意味で窮地に陥っていた。

一護「あの……夏梨さん、遊子さん話を聞いてくれませんか？」

夏梨「……私たちに隠し事してた一兄いなんて知らない。」ピイツ

遊子「そうそう、雨竜お兄ちゃんたちのあの姿の事知ってたのに教えてくれなかったお兄ちゃんなんて知らないもん」ピイツ

おそらく、三界における最強の男は今、妹達のご機嫌取りの最中



だった。

茜雫「夏梨、遊子。一護の話聞いて上げて一護やお義父さんとお義母さんは二人にいらぬ心配を掛けないように話さなかつたんだよ？」

のえる「そうですよ、心配だから安心して暮らせるように一護さんは頑張っていたんですよ。」

茜雫とのえるは一護の補助に入っている。

夏梨「…じゃあ、今度、私と遊子にも一兄い達が使っている不思議な力を教えて。」

一護「え、ええ、俺としては二人に危ないこと教えたくないんだけど…」

遊子「もう、お兄ちゃんとは口きかないもん！」

一護「分かりました、教えますからそれだけは勘弁して下さい。」

一護は即座に折れて土下座した。

ロア「こおくら！一護をあんまり困らせないでね。夏梨、遊子！それを見ていたロアは二人を叱る。」

夏梨「ロア義姉ねええ、でもお…」

遊子「ロアお義姉ねえちゃん、だってえ…」

ロア「でもでもないじゃないでしょ！兄である一護が妹である二人を心配して頑張ったのにその態度はないでしょ！！いくら二人が一護に傷ついてほしくないからってそれはないでしょ！！」

夏梨・遊子「…はい」

流石に二人もシユンとしている。

一護「…すまん、ロア助かった。」

一護はロアに礼を言う。

ロア「やったあゝ一護に褒められたあゝ」

ロアは喜びながら一護に抱き着いた。

一護「うおおい!!」

茜雫・のえる「「ちよおい！なにやってんのお（ですかあ）!!」

茜雫とのえるは大声を上げながらロアを離そうとする。

ネル「なんか騒がしいなあ… ああゝロアちゃんズルい！私も一護

に抱き着く〜！」

ネルは先ほどまで昔よく話していたロカと話していてなんか騒がしくなってきたのでこちらに来たのだ。

一護「とりあえず、放してくれ!!ロア、ネル!ちよつと教えてほしいことがあるんだけど良いか?」

ロア・ネル「うん?なくに?一護?」

二人は不思議ながら一護に聞くと

一護「ちよつと黒腔ガルガンタの開き方教えてくんね?藍染の馬鹿をシバキに行かないと空座町がやべえんだよ。」

ロア「いいよ、それに私もあいつを殴らないと気が済まないんだよねえ〜」

ロアは藍染あの馬鹿のせいで義妹たちが泣いてしまったのでシバきたいのである。

ネル「じゃあ開き方教えてあげるね。」

ネルがそう言つて一護は黒腔ガルガンタの開き方の修行に入った。

その光景を見ていた茜雫とのえるはと言うと

茜雫・のえる「むう〜〜〜」

頬を膨らましながら嫉妬していた。

## 67話：「別に問題ないんだがなあ。」

side偽・空座町

戦闘が開始され数分が経過した。

イツルは刀を構えて待ちの姿勢でアビラマを迎え撃つ。

アビラマ「おらあ!!」

アビラマは虚刀に霊圧を込めて斬りかかる。

イツルは冷静に避けて距離を離す。

アビラマ「逃げんじやねえぞ!!」

アビラマは虚閃を連射した。

イツル「『破道の五十七・大地転踊』」

イツルは周囲の破棄されたコンクリを操って虚閃を防御した。

そしてアビラマの攻撃を凌ぐと隙を見つけるために距離をとった。

アビラマ「てめえ…！頂を削れ『空戦驚』!!」

そんなイツルの行動を見たアビラマはキレて刀剣解放した。

刀剣解放したアビラマは翼が生え、ガルーダを思わせる鳥人の姿に変わった。

アビラマはその翼で飛翔し翼から鋼鉄の硬度を持つ翼を射出しまくる。

イツルはその攻撃を縛道で凌ぐ。

フィンドールと檜佐木は互いに全開で戦っている。

フィンドールは仮面を9割近くまで破壊し帰刃レスレクシオンである

『蟄刀流断』を解放して右の巨大なシオマネキの様な白いハサミと左手に持つ虚刀と小型のハサミで攻撃する。檜佐木も始解である『風死』を解放して戦闘をしている。

檜佐木が回転を乗せた風死で攻撃する。

フィンドールもまたハサミから高圧水流を放って迎撃した。

風死が高圧水流を切り裂くが響転ソニックで回避する。

フィンドールは虚刀から水の斬撃を放って攻撃するが檜佐木は縛

道の『円閘扇』で防御した。

フィンドール「流石だ、副隊長を任せられるだけはあるということ

か。」

檜佐木「敵に褒められても嬉しくねえよ。」

檜佐木はフィンドールの言葉を受け流しながら鎖鎌を巧みに操って攻撃する。

檜佐木「『蛇紋斬・双極』」

檜佐木は二本の鎌の両方を高速回転させつつ同時に敵へ放つ技を使った。

フィンドール「『断頭の蟹鋏』」

フィンドールは大鋏に霊圧を込めて鎌を打ち払った。

一角とポウもまた全力で戦っている。

一角は斧槍ハルバードに変形させた『龍紋鬼灯丸』を振るいポウの帰刃レスレクシオン『巨腕鯨』カルデロンの能力で巨大化したクジラ人間のような肉体に攻撃する。

ポウもまた巨大化した豪腕を振るって迎え撃つ。  
どがああん!!

二人の攻撃が激突し凄まじい衝撃を発生させた。

一角「硬えなあ!!おらあ!!」

一角は斧槍ハルバードに霊圧を込めて斬りかかる。

ポウ「無駄だ。」

ポウもまた拳に霊圧を込めて打突を放った。

両者の攻撃は激しさを増した。

クールホーン「でりやあああああ!!!」

クールホーンは大声を上げながらすさまじい気迫の顔で弓親に斬りかかる。

弓親「くっ!」

弓親もまたかつてのように真名の解放に躊躇いはなくなったがやはり癖のような物だろう。

だがその性質上、ここぞという時以外は『藤孔雀』で対応するようになっている。

クールホーン「必殺う!!『ビューティフル・シャルロツテ・クールホーン』s・ミラクル・スウィート・ウルトラ・ファンキー・ファンタステック・ドラマテック・ロマンテック・サディステック・

エロテイツク・エキゾチック・アスレチック・ギロチン・アタック』!!!!」  
クールホーンは空中で回転して勢いをつけ、虚刀を相手の頭上に向かつて振り下ろした。

弓親「ちっ!」

弓親もまた斬魄刀で受け止めたのだが…

メキツ… バキツ… ボキイ…

体からなつてはいけない音を響かせ弓親をぶつ飛ばし地面に叩きつけた。

クールホーン「あら? 私つたら美しさのあまり弱い者いじめをしてしまったかしら? でも仕方ないことよね… 真に美しきものは他を寄せ付けぬ者のことを言うのだから!!」

クールホーンは体を抱きしめながらくねらせる。

つして土煙から高速で弓親が出てきて斬りかかる。

弓親「キモイわあ! 咲け『藤孔雀』!!」

弓親は叫びながら斬魄刀を解放して刀身を4枚刃にして斬りかかる。

クールホーン「それがあなたの斬魄刀? 頂点に近い美しさを持つ私からすると大したことはないけどもあなたのもいいと思うわよ?」

クールホーンはそう言つて虚刀で受け止め弓親に蹴りを入れた。

クールホーン「解放して戦うあなたの美しさに敬意を表して私も本気で戦わなければ美しくないわ! 煌めけ!! 『宮廷薔薇園ノ美女王』!!」

クールホーンはそう言つて自身の斬魄刀を抜いて刀剣解放をおこなった。

解放するとバレリーナのような格好になったクールホーン。

弓親「: ぶっ! はははははは!! なん… だっ! それ!! あははははははははははは!!」

弓親は腹を抱えて大笑いしている。

クールホーン「ふう… 相手の姿を見るなり笑うなんて美しくないわねえ… とうっ!」

クールホーンは弓親の隙を見逃すに跳躍した。

クールホーン「喰らいなさい!! 必殺う!! 『ビューティフル・シャル

ロツテ・クールホーン☒S・ラブリー・キューティ・ミラクル・スウィー  
ト・ウルトラ・ファンキー・ファンタスティック・ドラマティック・  
ロマンティック・サディスティック・エロティック・エキゾチック・  
アスレチック・パラディック・アクアティック・ダイナミック・ダメ  
ンティック・ロマンティック・ギロチン・サンダー・パンチ』!!!」  
クールホーンは長つたらしい技名を言いながら回転と重力加速度  
を付けた両手を真上で組んで振り下ろす技を放った。

弓親「さつきから思ったんだけど…長いわあ!!」

弓親はなんとか精神を戻すと藤孔雀に霊圧を込めて受け止めるな  
りなんなりしようとする。

ズドオオオン!!!

ふざけた技名からは想像もつかない轟音を響かせ弓親は再び地面  
に叩きつけられた。

弓親「ごはあ!!」

弓親はあまりの威力に血反吐を吐きながら倒れたが傷は死覇装に  
搭載された回道で治癒が始まった。

弓親「く…くそっ!あの野郎…!ふざけてるけど実力は本物  
だ…!」

弓親は何とか立ち上がりながらクールホーンを倒すために策を練  
り上げる。

クールホーン「ふっ!ボロボロになりながらも立ち上がり勝つため  
に見つともなくとも足掻く…懐かしくも美しいわねえ…いいわ  
!あなたのすべての美しさを掛けて私にかかって来なさい!!」

クールホーンは大仰なポーズをしながら弓親に挑発した。

side 虚夜宮 ラスノーチエス  
ウエコムンド

現在一護達は虚圏から脱出するべく虚の力を持つ破面と大差な  
い一護がロアとネルから黒腔の開き方を教わっている。

一護「ちっ!あの馬鹿がロア達の黒腔を封じてなけりやロア達の  
で行けたのに!」

現在、虚圏にいる破面の黒腔は現世に居るのと一体を除いて開  
くことができないようになってる。

故に一護は完全虚化……否ロアが言うには帰刃<sup>レスレクシオン</sup>状態になり黒腔<sup>ガルガンタ</sup>を開く修行をしている。

ロア「それにしてもなんで一護は私たちと同じなのかな？」

ロアは疑問に思ったので聞いてみると

ネル「小さい時の私の記憶に一護って生まれつき死神と虚の力を持って生まれたらしいんだあ。」

ネリエルがネルトウの時に聞いたことを伝える。

一護「まあ、それは後でいいだろ。」

一護はそう言っている間に空間に黒い線のような物が発生する。

ロア「おおうもう空間に穴を開けるところまで行くんだあ〜早いねえ〜。」

ロアは暢気に言いながら次のステップを教える。

夏梨「うぎぎ……難しい……！」

現在、夏梨は雨竜と茜雫に魂魄から霊圧を引き出す感覚を教えるもらいつつ周囲の霊子を集め方を教わっている。

遊子「むう〜〜〜」

遊子は頬をむくれながら不貞腐れている。

のえる「ゆ、遊子ちゃん元気出してくださいよお。」

のえるは遊子を慰めている。なんでこんなことになっているのかについてだが一護が約束したように力の使い方を教えようとしたのだが一護が夏梨と遊子の素養を調べたら夏梨には完現術<sup>フルブリンゲ</sup>と滅却師<sup>クインシー</sup>の素養があると伝えたが遊子には何の素養がないことを伝えたことでこの状況になってしまった。

一護「俺としては危ないことしなくていいんだから別に問題ないんだがなあ。」

一護からすると夏梨も力が無かったらどれだけ良かったことかと内心で思いながらも黒腔<sup>ガルガンタ</sup>を開くまでにはいけたがまだ完全には使いこなせていないので修行を続けている。

遊子「……お兄ちゃんと夏梨ちゃんだけズルい。」

一護「一応、親父も力を持っているし母さんは力を持っていたからな？」

遊子是不貞腐れているのを見て一護がフォローしようとするが効果がないので溜息を吐きながら時間が解決することを祈ろうと一護は内心で思った。

雨竜「うん、少しは霊子を集められているね。完現術はチャドフルプリンゲに教えて貰おう。」

夏梨「・・・うん」

雨竜が滅却師の基本技能である霊子の収束をできるようになったが完現術は一護かチャドか織姫、リルカの4人しかいない上に一護は修行中、他の3人は別の場所にいるために教えることができないでいる、夏梨がチャドの名前を聞くと顔を赤くしている。

一護（はあ・・・早く平穏を手に入れて二人の恋が実るといいなあ・・・）

などとシスコン全開で妹二人の未来の幸せを願いを考えている一護は黒腔ガルガンタの修行に集中した。



68話：「何でもいいから早く習得してこの騒動を終わらせますか。」

side偽・空座町

偽の空座町では転界結柱をめぐって激しい戦闘が繰り広げられている。

アビラマはイヅルの逃げる戦法にイラつきながらも鋼の翼を弾丸として打ちまくっている。

イヅル「『破道の五十八・てんらん嵐』！」

イヅルは竜巻を放つ軌道でアビラマの翼の弾丸を相殺すると建物の中に非難した。

アビラマ「ちっ！逃げるとは卑怯な奴めっ!!」

アビラマはイヅルのことを馬鹿にはしながらもイヅルの攻撃などには神経を集中して対応できるようにしている。

イヅル「さて、どうするか…あの翼や羽の飛び道具が厄介だ。鬼道で対応しているけどやはりここはどうかして距離を詰めないと僕の斬魄刀は効果を発揮できない…ここはわざと隙をさらしてみるか？『破道の三十一 赤火砲』」

イヅルは左側にある壁に火の玉を放って破壊した。

アビラマ「ちっ！そんな見え見えの誘いに誰が乗るかっての。」

アビラマはその罫は無視して建物に翼の弾丸を放ちまくって破壊しにかかる。

イヅル「…面を上げろ『侘助』！」

そしてがいきなりイヅルが現れると斬魄刀を解放して4つの翼を瞬時に10回ずつ切りつけた。

そして計40回斬られたことにより侘助の能力での重量が増加され地に墮ちることになった。

アビラマ「ごあっ!!な、なんだあ…」

アビラマは翼が異常に重くなったことに困惑している。

イヅル「悪いけど全力を出してない君に能力をペラペラしゃべるほ

ど僕の口は軽くないよ。」

イズルは油断なくその刃を首に掛けようとしたのでアビラマは虚刀に手を掛けた。

アビラマ「くそっ！『超越せよ』!!」

命の危機にアビラマは超越オバーフレイド刃を解放した。

霊圧が爆発的に上昇し侘助の力を打ち消してその姿を変貌させた。

その霊圧を感じ取りイズルは瞬歩で距離を取った。

アビラマ「超越オバーフレイド刃！『翼竜アギラ・ケツアルコアトルスの空戦驚』!!」

解放したアビラマの姿は帰刃レスレクシオンの姿から二回り以上肉体が肥大化

し姿がケツアルコアトルスを思わせる翼竜人のような姿に変化した。

イズル（…来たね、この状態ではどんな能力に変化しているのか？先ほどまで翼を武器にしていたからな、注意しながら間合いを詰めなければ。）

イズルは注意をしながらどう距離を詰めるか考えながら死覇装の追加オプションの手甲に追加された腕力増加の術式に霊圧を込めて起動して強化し油断なく構える。

アビラマ「喰らいな!!」

アビラマは翼を羽ばたかせると翼から羽の弾丸と熱風が同時に発射された。

イズル（熱風!?!くっ!）

イズルは瞬歩で熱風の範囲から逃れたが熱風による熱で建物が融解し羽の弾丸で粉々になった。

アビラマ「さっさとやられやがれっ!」

アビラマは叫びながらも油断なく翼から羽を飛ばしまくる。

フィンドール「ふっ!」

フィンドールは右のハサミから巨大な水流のカッターを左の小さなハサミから小型の水流のカッターを大型のカッターに付随して放ってくる。

檜佐木は風死を回転させて大型のカッターを切り裂いて瞬歩で小型のカッターを回避した。

檜佐木「いい加減に止まりやがれ!『縛道の三十 嘴突三閃』!!」

敵の両腕と腰部部分を壁に固定させる鬼道を放ちフィンドールを拘束しにかかる。

フィンドールも響転ソニードで回避して両者は向かい合いの状態になり無言で相手の出方を見る。

フィンドール（…彼の力で厄介なのはあの鎌の切れ味ではなく拘束の術と彼自身の立ち回り方のようなだね、これはこちらが全力で相手をした方が良いかな？）

フィンドールはこれまでの攻防で檜佐木の戦い方を理解して内心で考え方をまとめる。

檜佐木（くそっ！カッターの威力は問題ないが向こうの手数と速度が厄介だ、身体能力でも負けてるし何とか動きを止めねえとな…）

檜佐木もまた戦況を把握し鎌を回転させながら霊圧を練り上げる。

フィンドール「こうなれば仕方がないね。『超越せよ』」

フィンドールは左に持つ虚刀を解放し超越刃を発動した。

フィンドール「超越刃オーバーブレイド『戦車の塾刀流断』」

フィンドールの身体が棘付きの赤い甲羅で覆われており、右腕が巨大な鋏になっていて左は棘の付いた甲羅で覆われた鋭い五指を備えた指に変化している、蟹の要素がある割には意外とスマートな体格をしていた。

フィンドール「さあ、ここからが本当の勝負ですよ。」

フィンドールは先ほどまでとは比べ物にならない速度の響転ソニードで距離を詰めてくる。

檜佐木「くっ！『縛道の六十二 百歩欄干』『縛道の六十一 六杖光牢』!!」

檜佐木は瞬歩で距離を開けながらフィンドールに棒状の霊圧を飛ばして動きを止める縛道と6つの光の帯で拘束する縛道を放った。

フィンドールは迫ってくる縛道を鋏と鋭い5指で打ち払いながら大バサミを振るってくるが檜佐木は鎌で打ち払いながら距離を取ろうと『破道の三十一 赤火砲』を放つ。

一角「オラオラ！どした!!まさかもう疲れたとか言わねえよな!!」  
一角は神経を研ぎ澄ませポウの巨体との激突や攻撃を受け流しな

がら霊圧を高めて攻撃して目に見えてポウの息が上がってきているのを確認したが相当集中して攻撃を対処しているので一角も相当疲弊している。

ポウ「ふんっ！ほぎけ!!」

ポウも霊圧を高めてはいるが傷は再生しても疲れが消えるわけではないので大ダメージを受け続けるわけにはいかない。

一角「おらあ!!」

一角は斧ハルバードに霊圧を込めてポウの攻撃を瞬歩で回避しながら斬撃と刺突を瞬時に5発ずつ叩き込んだ。

ポウ「ぬうう…！『超越せよ!!』」

一角のちよこまかした動きに痺れを切らして超越刃を解放した。

ポウ「超越刃オバ・ブレイド『超越の巨腕鯨』！」

超越刃を解放したポウの姿は帰レスレクシオン刃の時よりは縮んだがよりガツシリしていて逞しい体格になりクジラのような装甲が追加された。

ポウは先ほどよりも小回りの利いた拳を振り上げて一角に攻撃する。

クールホーン「そらそらっ！どうしたのかしら！このアタシの美しさの前に手も足も出ないのかしら?」

クールホーンは虚刀と体術を組み合わせた変幻自在の攻撃で弓親に雨霰の如き攻撃を加える。

弓親「喧しいよ!!」

弓親は叫びながらもクールホーンの攻撃を藤孔雀で受け流しながら拳と足技で反撃しているがクールホーンの攻撃力が桁違い過ぎて受け流してもそれを上回る衝撃が弓親にダメージを蓄積させている。

ただでさえ真っ向から名前はあるだがクールホーンの強烈な攻撃を受けていたのだから立っている方が不思議なくらいのダメージを蓄積している。

クールホーン「…あなたのその根性は褒めてあげるけどこれ以上はただの弱い者いじめにしかならないからせめてもの情けに苦痛なくされども残酷な技で終わらせてあげるわ。『白薔薇ロサ・ブランカノ刑』」

クールホーンが技の名を言うのと黒い茨で自分と相手を闇で覆い尽

くし黒い茨は弓親を拘束した。

弓親「ぐっ！なんだ…これは?！」

弓親は黒い茨を振り払うべく必死に藻掻くが体から霊圧がどんどん抜けていき力が入らないでいる。

クールホーン「この技は誰にも認識されずに死を迎える美しくも残酷な技よ。」

弓親「そうかい…元よりタイミングよく使うつもりではいたけどこれで心置きなく使えそうだよ。裂き狂え『瑠璃色孔雀』！」

クールホーンの言葉を聞いた弓親は藤孔雀の真名を言い薦がクールホーンに巻き付いて霊圧を吸い取り始める。

クールホーン「ぬうっ！これは私の『白薔薇ノ刑』と同じ!?…なるほど根競べってやつね、いいわ！どちらの美しさが上か勝負といきましょうか!!『超越せよ』!!」

クールホーンは虚刀を抜いて<sup>オーバーブレイド</sup>超越刃を解放した。

クールホーン「<sup>オーバーブレイド</sup>超越刃『超越の宮廷薔薇園ノ美女王』!!」

超越刃を解放したクールホーンだが霊圧が大幅に上昇したただけで見た目の変化は一切なかった。

弓親「どうしたんだい?その力は見た目が大幅に変化するものだと思うっていったんだが?」

弓親は疑問に思ったのでクールホーンに聞いた。

クールホーン「ふっ！そんな当たり前のことを聞くななんてナツシングね!!この私の美しさは既に完成されているの!!これ以上の変化は逆に醜くなるのよ。だからこれがあたしの<sup>オーバーブレイド</sup>超越刃よ!!」

クールホーンは堂々と胸を張りながらそう宣言する。

弓親「そうかい」

弓親はそう一言そう言うのと藤孔雀の状態に戻っているため互いに外部が自身の状況を把握できない状態でお互いに相手の出方を窺っている。

クールホーンは<sup>ソニード</sup>響転で弓親は瞬歩で加速してクールホーンは真正面から弓親はあらゆる角度から攻撃を仕掛けていく。

バラガン「…ふむ、頃合いかのう。そろそろ儂らも暴れるとしよう。」

戦況を見ていたバラガンはスターク、ハリベル、ゾマリに戦闘開始の合図をした。

ハリベル「いいのか？まだ貴様の部下が戦っているぞ？」

ハリベルは部下のことを放置しているバラガンに非難のまなざしを向けながらそう言うのとバラガンは

バラガン「問題ない、むしろ儂の力を最大限発揮できるのでな。このまま戦わせておけばよい。」

ジオ「バ、バラガン様!!?戦うのでしたら我々が行いますのでどうかご再考を!!」

ニルゲ「その通りです!!陛下!!」

バラガン「喧しいぞ!!儂が決めたことに文句を言うでない!!貴様らは下がっている!!」

バラガンはそう言って骨の玉座を破壊してその中にあるバスターアックス型の斬魄刀を手にとった。

ジオ・ニルゲ「…御意」

二人はそう言って響転ソニードで大きく距離を取った。

スターク「…はあ、仕方がねえな。」

スタークはため息をつきながら戦闘態勢に入った。

ハリベル「仕方がない、アパッチ、スンスン、ミラ・ローズ…構えろ。」

3 獣神『了解です(わ)！』  
トレスベステイア

ハリベルと3人の従属官も戦闘態勢に入った。

ゾマリ「了解しました、死神達に我が愛を与えましょう。」

ゾマリは虚刀を抜きながらそう言った。

山本「ふむ、では各自！破面達を一掃せよ!!」  
アランカル

敵の様子を見た総隊長の一言で隊長達は瞬歩で各自の相手の所に移動した。

side 虚 圏  
ウエコムンド

現世の偽・空座町で激戦を繰り広げている中、一護達はと言うと

マユリ「とりあえず、あのザエルアポロ自称・科学者の研究室にあつた資料を基に黒腔ガルガンタを開くことができそうだ、もう少し時間があるが問題ないだろう。」

チャド「すみません、お手数おかけしてしまつて。」

マユリ「礼なんて言われることではない、私は黒腔ガルガンタの解析ができるのだから。」

チャドは礼を言うがマユリにとってはどうでもいいと切り捨てて作成に取り掛かっている。

一護もまた同時進行で黒腔ガルガンタを開く修行をしているが中々進まないでいる。

何故かと言うと

一護「…おい、こいつらどうにかしてくれない？ロア…」

一護がそう言うのとロアは

ロア「え、二人ともつと仲が良くなってほしんだから良いでしょ？」

一護「それは後からでもいいだろ!!」

一護は叫びながらも黒腔ガルガンタの修行に集中しているが抱き着いているロアの従属官、シルスとレストに怪我をさせないようにしているためあまり思いつきり力を込められないでいる。

シルス「…いいでしょ、別に」

シルスはツンツンしながらも抱き着いている。

レスト「えへへ」

レストは好意を隠そうとせずにデレデレオーラ全開で一護に抱き着いている。

一護（…いや、ホントになんでこんなに好かれてるんだ？意味が分からない。）

一護はなぜこんなにモテているかわからずに内心で滅茶苦茶に困惑している。

茜雫「…あなたたちいく！一護から離れなさい!!」

茜雫がシルスとレストを引き離すべく斬魄刀を抜こうとするがロアが拘束の術を使い動きを止めた。

一護（はあ…もう何でもいいから早く習得してこの騒動を終わらせますか。）

一護は修行に集中した。



## 69話：「気色の悪いことを言うな」

side 偽・空座町

空座町の四方の転界結柱を破壊すべく死神達と抗戦していたバラガンの従属官達フランシオンは己が仕える王の霊圧の高まりを感じ取った。

クールホーン「あら？」アビラマ「ツ!？」ポウ「ぬっ！」フィン「何っ!？」

4人はそれぞれ異なる反応を取った物のすぐさまその意図を汲み取り戦線離脱しようとする。

一角「おいつ！てめえいきなり戦いはやめるは！逃げようとするわあ！どうゆうことだあ!!」

一角はポウがいきなり元に戻り逃げようとするので声を荒げる。

ポウ「何、我らが王の御意思だ。あの方が全力を發揮されては私たちなど、塵一つ残らんのでな。」

ポウ達バラガンの従属官達はバラガンの能力を知っているのでバラガンの戦闘が開始するので避難しなければ死以外存在しないのだ。

ポウはそう言つて響ソニーテ転でその場を後にした。

一角「ちっ！どうやら奴らの言葉はハツタリつて訳でもなさそうだな。」

一角はバラガンたちの放つ霊圧を感じ取りながらも己に与えられた柱防衛の役割を全うすべく卍解を解除して柱で待機した。

クールホーン「あらあ？バラガン様自らがお戦いになられるのならこれ以上ここに居たら危険ね・・・あなた！このアタシの美しさに遣られなかったことを不運に思いなさい!!バラガン様のお力の前には万物全ての美しさが破壊されるのだから!!」

クールホーンはそう言つて響転でその場を後にした。

弓親「くっ・・・くそっ！あの野郎・・・好き放題言つて勝ち逃げしやがって・・・!!」

弓親はクールホーンの攻撃でボロボロになった体に鞭を打つて柱に戻つて待機した。

アビラマ「ちっ！バラガン様が戦うとなると俺じゃあどうしようも

ねえな！おいつ！！勝負は預けさせてもらうぜ！！」

アビラマもバラガンの霊圧の高まりを感じ取りイズルとの戦いを中断し響転でその場から退避した。

イズル「・・・何とか、向こうが撤退してくれてありがたいかな・・・だけど」

イズルはバラガンの霊圧を感じ取って冷や汗が流れているが己の任務を全うすべく柱で待機した。

フィン「むっ！これはいけないね。バラガン様がやる気になされている。副隊長君、すまないけど勝負はここで終了だ。」

フィンドールもまた他の3人同様にバラガンの霊圧を感じ取り響転でその場から退避した。

檜佐木「くそっ！あの野郎、暴れるだけ暴れやがって・・・」

檜佐木は悪態をつきながらもバラガンの霊圧を感じ取って柱で状況を静観した。

side バラガン戦

バラガン「ほう？貴様らが儂の相手をしてくれるのかのう？」

バラガンは自身の目の前に立ち向かってきた二人の死神に対して言葉を放つ。

碎蜂「ふん！そちらこそ、部下に任せなくてよかったのか？」

碎蜂は不敵にバラガンを挑発した。

大前田「隊長！あんま、そんなこと言わないでくださいよお！！」

大前田は目の前にいるバラガンの放つ霊圧にビビっているため碎蜂のバラガンに対する挑発にビクビクしている。

バラガン「なあに、あやつらの力がなくとも問題ないのでな。さてそんなことよりも貴様らの力はそのようなものか？簡単に背を取られる程度で隊長とやらになれるものかの？」

バラガンはそう言いながら碎蜂の背後を取りながら左肩に手を置いた。

碎蜂・大前田「っ!？」

碎蜂と大前田はその言葉を聞いた瞬間に驚愕しながらも即座に瞬歩で距離を取ったが碎蜂は左腕に違和感を感じ取った。

碎蜂（…なんだ？左腕が動かないが… なっ!?）

碎蜂は一瞬だけ左腕を見たら腕が骨折しているかのようだとらんと垂れており全く動かさなかった。

碎蜂（馬鹿な… 私は攻撃は受けていないぞ!?… まさかさつき触れられた時に何かされたのか?）

碎蜂はバラガンに触れられた時以外で何かされた形跡が無かったので触れられた時に何かされたのだと予想したがバラガンの得体のしれない能力を見破るまではできてない。

大前田（… 嘘だろ!? 碎蜂隊長は護挺十三隊の中でも最速の死神だつてのに簡単に背後を取られちまった… つうことは誰もあの破面<sup>アランカル</sup>から逃げられないって事かよ!!）

大前田は普段碎蜂から雑な扱いを受けているがそれでも副隊長として碎蜂の実力を知っているがためにバラガンの身体能力の高さを瞬時に把握した。

バラガン「それっ！できる限りこのわしを楽しませてそして死ぬ。」  
バラガンはバスターアックス型の斬魄刀を片腕で異常な速度で振るって攻撃してきた。

碎蜂「ちっ！尽敵罄殺『雀蜂』!!」大前田「くそお!! こうなったらとことんやってやらあ！打つ潰せ！『五形頭』<sup>げげっぶり</sup>!!」

碎蜂と大前田は瞬歩でバラガンの攻撃を回避しながら斬魄刀を解放して油断なく構えた。

特に碎蜂は自身の左腕を使いものにならなくしたバラガンの能力を警戒レベルを最大にしながらアーマーリング型に変化した始解を構える。

大前田（やべえ… すんげえ逃げてえけど隊長ほっぽり出すわけにもいかねえし…）

大前田も大口を叩いてはいたが内心では弱音を吐いており脂汗をだらだら流しながらも鎖で繋がった棘付き<sup>モーニングスター</sup>鉄球型の斬魄刀の鎖をぶんぶん振り回して何時でも攻撃ができるようにしている。

バラガンは二人のその様子をじっくり見ながら手を碎蜂たちに向けちよいちよいと無言でかかつて来いと挑発のハンドサインをした。

碎蜂「…舐めるな!!」

碎蜂はバラガンの挑発に内心でイラつきながらも最速でバラガンの背後を取り雀蜂で刺突を放った。

限りなく完璧に近い背後からの攻撃だったがバラガンに攻撃が当たる寸前に碎蜂は奇妙な違和感を抱きながらその攻撃はバラガンに簡単に回避された。

碎蜂「っ!」

碎蜂は先ほどの違和感を感じ取りつつもバラガンに触れられるわけにはいかないので全力で距離を取った。

バラガン「ほう?先ほどよりも素早いな…ぬんっ!」

バラガンは碎蜂を見ながらも大前田の攻撃を見ずに片手で受け止めた。

大前田「喰らえっ!『破道の十一 綴雷電』!!」

大前田は鉄球に繋がった鎖に雷を伝わせバラガンに電撃を流そうとするがバラガンに接触する直前で何故か雷が急速に消えてしまう。

大前田「ッ!くそっ!!」

大前田は即座に斬魄刀を元の浅打に戻して再度解放した。

バラガン「ほう?中々の反応速度だな…ふむ、これならちと少しばかり本気で相手をした方がよさそうだな。朽ちろ・『髑髏大帝』」

バラガンは二人の反応の速さから刀剣解放した。

バラガンの解号とともに中央に赤い目が存在する、巨大な戦斧から発せられた黒い炎に包まれる事で、王冠と金の装飾と黒いマントを纏った骸骨という西洋の死神を思わせる姿に変化した。

解放とともに凄まじい霊圧が碎蜂、大前田に押し掛かった。

碎蜂「ッ!魂は更なる高みへ『心装 雀蜂雷公鞭・欣幸ノ至り』!!」

バラガンの帰刃を見た碎蜂は感じ取った危険度から即座に心装を展開した。

大前田もまた消耗などを考えずに死覇装のオプションパーツの機能を全開で発動した。

バラガン「さて、少しばかり本気で相手するが簡単に朽ちてくれるなよ?『死の息吹』」

バラガンは漆黒の霊圧を高速で放った。

その速度は距離的に近くに居た碎蜂ですら即座に退避を選択させる速度だった、大前田は既に距離を取っている。

碎蜂「くっ…」

碎蜂は瞬歩と飛行能力を組み合わせて何とかバラガンの攻撃から逃れようとするがバラガンの攻撃速度が想定以上だったがために使い物にならなくなって左手に掠ってしまった。

碎蜂「ぐあああああ!!!」

そしてその左手に触れた箇所から即座に崩壊が始まった。

碎蜂「ぐおおお!!大前田!!ぼさつと見てないで早く私の腕を切り落とせ!!」

大前田「た、隊長!」

碎蜂「早くしろ!!」

大前田は碎蜂の指示に一瞬たじろいってしまったが碎蜂の怒号でぐさま碎蜂の左腕を切断した。

碎蜂「ぐっ!…はあ…はあ…」

碎蜂は汗を誑しながらもぐさま大前田に止血剤を打たせた。

バラガン「ほう、躊躇うことなく自身の腕を切らせたか。見事な胆力と判断の速さだ。」

バラガンは二人の様子を見ながら、次はどのように攻撃するが思案した。

sideハリベル戦

ハリベル達は憂鬱な気分になりながらもそれを表に出さずに戦闘準備を完了させて戦闘準備を完了させていた。

そして目の前にいる死神達を見据えている。

ハリベル「…名を聞こう。」

ハリベルは目の前にいる死神にそう問うた。

日番谷「十番隊隊長、日番谷冬獅郎。十一刃」エスパーダ

日番谷は返答しながら斬魄刀を抜いて油断なく構える。

その構えから日番谷の実力を感じ取り虚刀を抜いて構えた。

ハリベル「アパッチ、ミラ・ローズ、スンスン、この男の相手は私がする。お前たちは後ろのいる者達の相手をしてくれ。」

トレスベステイア

3 獣神 「「分かりました、ハリベル様！」」

3人はそう言ってアヨンと一緒に残りの死神を相手するために移動した。

ハリベル「…さて」日番谷「… ああ」

二人はその僅かな単語を合図に高速の斬撃の応酬を開始した。

アパッチ「ああ、てめえがあたしたちの相手ってことでいいんだよな？」

アパッチは目の前にいる金髪の女死神に対して聞いた。

乱菊「ええ、そうよ十番隊副隊長、松本乱菊よ。よろしくね。」

乱菊は既に斬魄刀を抜いて構えている。

ミラ・ローズ「… おい、まさかお前ひとりであたし達3人とアヨンの相手をするってんじゃねえよな？」

ミラ・ローズは目の前にいる死神が相手の実力を測れないようなこととはないと理解しているので何か策があるのだろうかとうと警戒しながら乱菊に問う。

乱菊「あら？ゴリラみたいな見た目している割にはそっちの雌猿よりは知能は少なからずあるみたいじゃない。」

ミラ・ローズ「あんだとっ！だあれがゴリラじゃ!!」

アパッチ「ちよつと待て！雌猿ってあたしの事かよ!!バカにしてんじゃねえ!!」

乱菊の煽りにアパッチとミラ・ローズはブちぎれて怒号を言う。

スンスン「二人とも、おやめなさい。あなた達がそんなですと私まで低く見られてしまうのでやめてもらえますか？見つともない。」

アパッチ「おいっ！スンスン、てめえ!!どっちの味方だ！」

ミラ・ローズ「そうだぞ!!」

スンスンの見方に対する煽りにこれまた二人は抗議した。

スンスン「それに、ハリベル様もおっしゃっていたじゃない？あの副隊長さん達の相手をして来いって大方私と似たようなかくれんぼが得意なのでしょう。」

スンスンはハリベルの言葉の違和感を理解し探査経路を全開にしていたが隠密が上手いのか知らないが探知に未だ引つかからないでいるので警戒度を最大にまで引き上げている。

ミラ・ローズ「ちっ！そう言うことかよ。熱くなりすぎるとボンッてか？見た目に違わずヤラシイ女だな。」

ミラ・ローズは愚痴りながら斬魄刀を抜いた。

アパッチ「こりゃ、最初からある程度の力で相手した方がいいか？」  
スンスン「まあ、力は温存しつつも3人の利点で攻めた方が疲れにくくていいじゃありませんか？幸いそのゴリラ女を盾にすればいいですし。」

ミラ・ローズ「おいつ！スンスン！お前後でホントに覚悟しろよな！！」

三人は喧嘩しながらも乱菊を取り囲むべく響転で高速移動したが乱菊を取り囲んだ瞬間に体が動かなくなった。

3 獣神 「「っ!？」」

3 人の動きが止まった瞬間に声が聞こえた。

??? 「弾け・・・『飛梅』！」

瞬間、大爆発が起こった。

乱菊 「ナイス！雛森。」

乱菊はいつの間にか居た雛森に賛辞を言った。

雛森「ありがとうございます。乱菊さん、乱菊さんが時間を稼いでくれたおかげでこうして罫を張るのを完了させることが出来ました。」

雛森は縛道の『曲光』で姿を消しつつ乱菊の周囲に『破道の十二伏火』に『破道の三十一 赤火砲』と『破道の三十三 蒼火墜』を混ぜて規模と威力を底上げしてトラップを張った。ちなみにスンスンの探査経路をすり抜けられたのは霊圧探知を阻害する護符を結界術と組み合わせることで探査をすり抜けていた。

爆炎が収まり煙が起こっていた中急激な霊圧の高まりを感じ取った

アパッチ「突き上げろ！『碧鹿鬪女』!!」ミラ・ローズ「喰い散ら

せ！『金獅子将《レオーナ》!!』スンスン「絞め殺せ『白蛇姫』！」  
3人は爆発のダメージを再生ではなく帰刃の際の回復で瞬時に治癒した。

アパッチ「てんめえ… やってくれたじゃねえか！おいっ！アヨン!!」

アヨン「ぐおおおお!!」

アパッチは不意を喰らって頭に血が上りアヨンに指示した。

乱菊・雛森「っ！」

二人は身構えたがその場にさらなる乱入者が現れた。

狛村「松本副隊長、雛森副隊長よ。あの者は私が相手をする。二人はあの3人の破面の相手をお願いする。」

七番隊隊長の狛村左陣は後方で状況に合わせて動く予定ではあったがアヨンの異様な気配に瞬歩で駆け付けた。

乱菊「狛村隊長！分かりましたお願いしますね。」

狛村は乱菊の言葉を聞いて無言で頷くと即座に瞬歩でアヨンとの距離を詰めるとアヨンと剛剣と剛拳の打ち合いを開始した。

ミラ・ローズ「さあくて油断した分はキツチりお返ししないとな！」

ミラ・ローズは響転ソニックで距離を詰めて大剣を振るった。

雛森「っ！『縛道の八 斥』！」

雛森は間一髪で反応して物理攻撃を弾く縛道でミラ・ローズの攻撃を弾いた。

アパッチ「おらあ！」

アパッチも高速で突っ込んで蹴りを放った。

乱菊「唸れ！『灰猫』!!『灰燼壁』!!」

乱菊もまた斬魄刀を解放して刀身が大量の灰に変化してそれらを障壁のようにして防御した。

スンスンは虚刀を構えて不意打ちをするために二人の消耗を待っている。

ハリベル「討て『皇鮫后』」

ハリベルは日番谷との斬り合いながら隙が出来た時即座に距離を取って刀剣解放した。



日番谷「魂は更なる高みへ『心装 大紅蓮氷輪丸・揺籃開花』！」  
日番谷もまた心装を解放し氷の刀を手にとった。

ハリベル「『激流波斬』」

ハリベルは右手に持つ白い大剣から高圧水流でできた長大の水流の刃を纏わせ日番谷を真つ二つにするべく振り抜く。

日番谷「『氷竜破斬』!!」

日番谷もまた刀から巨大な氷刃を刀身に纏わせハリベルの攻撃を迎え撃つ。

ドゴオオオオオオンツツツ!!!

両者の技の激突で大気を揺らし二人は距離を離す。

side スターク戦

一方、第111刃コヨーテ・スタークは正直やる気がまるでないのであるがロアから死なない程度であしらっておけと言われているので嫌々ながらも戦闘を行っていた。

スターク「蹴散らせ『群狼』」

スタークは初手でリリネットを取り込んで刀剣解放した。

京楽「これはこれは、いきなり飛ばして大丈夫かい？」

京楽は初手でいきなり刀剣解放してくるとは思っていなかったの  
で軽口を言いつつも油断せずに始解した。

スターク「あく別の隊長さんにはもうこれ見せてんでね、それに少しは真面目に戦っているフリだけでもしていないと面倒なんですね。」

スタークは炎の檻のほうに視線だけ向けつつ言う。

京楽「そうかい、ならばちばちばちダラダラとやりますかね。」

京楽はお気楽に言いつつも瞬歩で間合いを潰した。

スターク「ッ！」

京楽「『押し鬼』」

京楽が能力を発動させると京楽を中心に半径3mの円が出現した。  
スタークはすぐさま響転で円から出るが

京楽「『重撃白雷』」

京楽は二刀から赤い光線を放ちスタークの肩をかすめた。

スターク「グっ!?!(なんだ!?!かすめただけでこのダメージはおかしい…あの円に能力があるわけじゃなくて俺が円から出たからこのダメージなのか?)」

スタークは肩を掠めただけにしては異常な痛みとダメージを負ったことに対して即座に予測を立てるが情報不足なので今度は自分から京楽に突っ込んだ。

スタークは銃に霊子の刃を付与して虚弾<sup>バラ</sup>を連射しながら斬りかかる。

京楽「ぐっ!」

京楽は円から出ないようにしながらなんとか体捌きで虚弾<sup>バラ</sup>を回避しながらスタークの斬撃を防ごうとしたがスタークは即座に虚閃<sup>セロ</sup>を足に纏わせ蹴りを放ってきたので能力を解除しながら瞬歩で大きく距離を離れた。

スターク「…なるほどな、やっぱあの円から離れるとダメージが増えるともてよさそうだな。」

京楽「あらら、もう僕の『押し鬼』が見破られちゃったかあ…そうだよ、円から離れば離れるほどダメージが増えるって遊びさ。」  
スタークはその言葉を聞いてうんざりしながら銃を構える。

sideゾマリ戦

ゾマリと白哉との戦いだがいきなりクライマックスに突入している。

ゾマリ「鎮まれ『呪眼僧伽』超越せよ『深化呪眼僧伽』」

ゾマリは白哉の霊圧の高さに自身の術の確実性を上げるために超越<sup>オーバーブレイド</sup>刃を解放した。

全身のいたるところに白めの部分が黄色くなった瞳、阿修羅のような多腕、坐禅を組んだ下半身、開いた球体は蓮の花、と僧のイメージする姿に変化した。

周囲には黄色い眼球と黒い紫の瞳の付いた不気味な物体が浮遊している。

ゾマリは術の行使の際の詠唱を多腕のメリットを生かし印を結ぶことで詠唱を肩代わりさせるという方法を取っている。

ゾマリ「さあさあ、我が愛アモールを受けてもらいましょうか。」

ゾマリは気色の悪いことを言いながら術を発動させようとする。

白哉「気色の悪いことを言うな、十一刃エスパーダ。私が愛を誓ったのは後にも先にもただ一人だけだ。魂は更なる高みへ『心装 始景・千本桜景義』」

白夜は内心でキレそうになりつつも冷静なを保ちつつも心装を解放した。

白哉「散れ『千本桜』」

更に白哉は心装を維持したまま始解である『千本桜』を周囲に浮く刀を5本をばらすことで解放した。

残り一振り残りし圧倒的な数の花卉の刃をゾマリに向けて放つ。

ゾマリ「むっ！『虚閃無幕』」

ゾマリは周囲の君の悪いビットから虚閃の弾幕を放つ技を使い千本桜を吹き飛ばした。

白哉「まだだ、『破道の四 白雷』」

白哉は吹き飛ばされた桜の刃を起点に『白雷』を放った。

これは一護が自身の千本桜から鎖を放っていたところから着想を得て修練し体得していた。

全方位からの絶え間ない光線の雨にゾマリは結界を張り光線の雨を耐え凌ぐ。

ゾマリ「むうう…：これはこれはよく抗いますねえ、ですがこれで終わりです!!『呪眼僧伽支配』!!」

ゾマリは首を左真横になるまで倒したのち背後と足元から目の模様グラン・レイ・セロ・オスキュラスの付いた法陣を展開しそこから王虚の黒閃光アモールに自身の愛を上乗せした光線の雨を放つゾマリ最大の技だ。これは直撃した対象に全身支配の効果が付与されているので仮に光線に耐えたところで体を支配するという二段構えのまさに必殺と言える技だが白哉は瞬時に対応して見せた。

白哉「舐められたものだな… 卍解『千本桜景義』」

白哉は残しておいた一本を起点に卍解を解放した。

嘗ての卍解の時とは比較にならないほどの量となった刃の濁流に

よりゾマリの攻撃と法陣を消し飛ばした。

ゾマリ「ば、馬鹿なアア!!」

ゾマリは信じられないものを見たように声を荒げた。

白哉「貴殿の敗因は己の力に己惚れたことだ。『吭景・千本桜景厳』相手の周りに千本桜の花びらで囲み、全方位から一斉攻撃する技を用いてゾマリを切り刻んだ。

切り刻まれたゾマリは空中から地面に叩きつけられ超越刃が解除された。